シバの目ミミの目　～第一章　戦士ライン～

コリドラスぱんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シバの目ミミの目　～第一章　戦士ライン～

【Ｎコード】
Ｎ９６４３Ｌ

【作者名】
コリドラスぱんだ

【あらすじ】
青き都ハルバルートが暗黒王に落とされてより１１年。都から遠く離れた田舎町で、平凡な毎日を過ごす少女メルメル。――ところが突然、何者かに、唯一の肉親だった祖父がさらわれてしまった。そして次々と明かされる驚きの真実。祖父の正体とは？今まで遠い存在だった暗国王にまつわる数々の悲話。更には、双子のトラ猫ミミとシバの不思議な力。様々な謎が絡み合い、それが解けたとき、思いもよらぬ驚きの結末が待っている。

ホームページ開設しました。小説に登場する猫達の写真などのせてます。

http://corydoraspanda.com/index.html

登場人物

☆メルメル

平凡な田舎町に住む少女。お爺さんと二人暮らし。木登りとかけっこは園で一番。でも勉強と魔法はちょっと苦手。

☆ミミとシバ

双子で茶トラのノラ猫。実は、驚きの能力が……。

☆トンフィー

メルメルの幼馴染。園で一番の秀才。お母さんと二人暮らし。

☆アケ

トンフィーのペット。プリティーな三毛猫。

☆プラムじいさん

メルメルのお爺さん。お菓子作りが得意。メルメルの知らない秘密がある。

☆ペッコリーナ先生

メルメルの通っている園の先生。ちょっとぽっちゃり。食いしん坊なおばさん。

☆グッターハイム

レジスタンスのリーダー。

☆ライン

レジスタンスの最強戦士。赤毛の豹をペットにしている。

☆ミラークルクルマン

メルメルの大好きなアニメのヒーロー。一度戦った事のある相手に、まるで鏡に写したかのように変身をする。

ミミとシバ　1

ずっと前からミミは、シバよりも自分の方がお兄さんだと思っている。だってシバよりも牙がちょっとだけ長いし、足もちょっとだけ速い。

それとおんなじくらい前からシバは、ミミよりも自分の方がお兄さんだと思っている。だってミミよりもちょっとだけ大きいし、ちょっとだけ力もある。

それでも二匹はとても仲がよくて、ミミの自慢の大きな耳が汚れていればシバはペ〜ロペロリと舐めてあげるし、シバの目がいつもよりたくさんしばしばしていたら、ミミは心配顔で眺めている。

ある晴れた日曜日、平和な田舎町の片隅。のんびりやのワーチャが続けて欠伸を十回もするのを横目で見ながら、二匹はいつものように仲良く連れ立って歩いていた。

シバは、大好きなプラムじいさんが作ってくれるササミとレバーをくたくたに煮たのをモヤモヤと考えながら歩いていた。と、いつの間にかミミとの距離が開いてしまって、慌ててミミの長くて細い尻尾の影をふみふみっとする。そうして、プラムじいさんの家まで(でも、最近は隣街から流れてきた黒と白の大きなのが三日置きにやってきてオシッコをひっかけるから、ミミは少しイライラっとしてしまうんだ)もやもやふみふみ、もやもやふみふみと繰り返していた。

た〜っぷりとつけた自分達のとっておきのオシッコの匂いを頼りに

あと残り三十五歩で、プラムじいさんが二匹の為に作った、大きなドアの中にある小さなドアをくぐり抜ける所まで来ると、まるで二匹が来たことが分かっているかのように大きなドアの方が開いて、(だから、本当は小さなドアなんかいらないんだ)プラムじいさんがニッコニコ顔で現れた。

そしてやっぱりいつものように、手には二匹の大好きなササミとレバーのくたくたに煮たのを持っていて、今さっき作ったみたいなホカホカ湯気をフーフーしている。

シバは我慢ならなくなって、「ニャーニャー！　ニャーニャ！」と鳴き叫ぶ。

すると突然、プラムじいさんのすぐ後ろ、腰の辺りからにょきっと顔を出して、

「どうして来たのが分かったの？」と、メルメルが現れた。

ミミがスキップしそうなほど軽く楽しそうに動かしていた足を急にピタッと止めたから、すぐ後ろで、もうスキップしていたシバはミミのお尻に鼻を、「ニャフン！」とぶつけてしまった。

メルメルは真っ直ぐに揃えた前髪の下から、クリクリの目でプラムじいさんを見上げた。

「ね、どうして？　魔法みたいね」

「いやぁ、この子達はね、いつだって必ずこの時間にやって来るんじゃよ」

プラムじいさんはホカホカのおいしいのを下に置いて、ミミとシバの二番目に気持ちの良い、耳の下のところを交代にコチョコチョしている。

「だからねメルメル、ワシは魔法なんか使わなくっても、毎日作りたてのご飯をこの子達に食べさせてあげる事が出来るんじゃよ」

メルメルは、目玉を右にやったり左にやったりして考えた。

「じゃあ、魔法を使うのは二匹の方ね。毎日同じ時間に来ることが出来るなんて！　それとも、時計を見る事が出来るのかしら？」

「どうじゃろうな～？　フフフ……」

プラムじいさんは、一生懸命に首を捻って考えているメルメルを、ニッコニコ顔で眺めている。

メルメルがじっと二匹を見つめ続けているからシバはなんとなくソワソワしてしまい、口からポロッとレバーをこぼしてしまった。

ミミは素早くその転がったレバーを食べてしまった。

「あ！　ダメよ！　ちゃんと半分こにしなくっちゃ」
　メルメルは、ミミのお皿からレバーを一つ摘まんでシバのお皿に入れる。そうしているうちに、またシバは口からポロッとささみをぼして、ミミはそれを食べてしまって、またメルメルは慌ててミミのお皿からシバのお皿にささみを移して――と繰り返しているうちに、二匹のお皿はすっかり空になってしまった。
「さて、ワシらも朝ご飯にしようかの。メルメル、お手伝い出来るかな？」
「もっちろん！」ふと気付いて、メルメルは横目で二匹のお皿を見つめた。「もしかして私達のご飯もササミとレバーのくたくた煮なのかしら？」
　実はメルメルはあまりレバーが好きではない。少し不安そうな顔をしていると、プラムじいさんはそれを見て楽しそうに笑った。
「二匹のご飯は、メルメルには少し薄味かもしれんからな。プラムじいさん特製の、キノコとポクポク卵のクリームシチューと、焼きたてのくるみバターパンにしようかと思うけれども、どうじゃな？」

「大、大、大さんせーい！」
　メルメルが余りに大きな声を出したので、シバは小さく飛び上がり、慌てて小さなドアから家の中に入って行ってしまった。
「じゃあメルメル、ミミとシバのお皿を持ってきておくれ」
「はーい」
　プラムじいさんが大きなドアを開けて家の中に入ろうとすると、ミミは右の足にすり寄ったり、足と足の間を器用にすり抜けたりしながら、一緒に中まで付いて来る。おじいさんがミミを踏まないように、下ろしかけた足を引っ込めたり横にずらして下ろしたりするのを見て、メルメルはお腹を抱え笑ってしまった。
「おじいちゃんたら、まるで踊っているみたいよ！」
「こいつはいっつもこうなんじゃ！　こらこら、危ないじゃないかミミ！」

ミミとシバ　1（後書き）

初投稿作品です。誤字脱字、書き方のおかしなところがありましたら、是非ご指摘して下さい。よろしくお願いします。

ミミとシバ　2

家に入ると焼きたてくるみパンのい～香りが漂ってきて、思わずお腹がググーっと鳴ってしまったので、慌ててメルメルは歌を歌って誤魔化す事にした。

「ググーっとモーニングおじいちゃん♪　ググーっとモーニングおばあちゃんっ♪」

メルメルが適当に作った歌を聴いて、プラムじいさんは嬉しそうに手を叩いた。

「お！　良い歌じゃな～。初めて聞いたぞ。園で習ったのかのう？」

「そうよ！」

プラムじいさんはいよいよ嬉しそうにニッコニコ顔になった。

「どれ、ワシにも教えてくれんかのう？」

「いいわよ！　それじゃ、私の後に続いて歌ってね！」メルメルはスーッと息を吸い込んだ。

「ググーっとモーニングおじいちゃん♪」

「ググーっとモーニングおじいちゃん♪」

「ググーっとモーニングおばあちゃん♪」

「ググーっとモーニングおばあちゃん♪」

「朝は爽やか楽しいな～♪」

「朝は♪　よっと、爽やか楽しいな～っと♪」

プラムじいさんがオーブンからパンを取り出しテーブルに並べ、

「晴れたらなおさら楽しいな～♪　えいっと」

メルメルがお皿を取り出してテーブルに並べ、

「晴れたら♪　やっ！　なおさら楽しいな～♪　ほっ」

プラムじいさんはお皿にシチューをよそいながら、

「ネコも楽しげ～に鳴いているよ～♪　よいしょっ」

メルメルはテーブルにスプーンを並べ、

「お、少し曲調が変わったの？　ネコも楽しげ～に鳴いているよぉ～♪」

「はい、おしまい！」

メルメルがパン！　と手を叩いたので、目を瞑って気持ち良さそうに歌っていたプラムじいさんはパッチと目を開いた。

「なんじゃ？　何だか尻切れトンボじゃな」

「最近の流行りの歌はみんなそんな感じなのよ。それよりシチューが冷めちゃうといけないから、早く食べましょう！」

「ま、それもそうじゃな。しかし良い歌じゃな～」

プラムじいさんはまだごにょごにょと小さく歌を口ずさんでいる（だけどそれは、メルメルがお腹の音を誤魔化す為に今さっき作った歌なので、もう一度一緒に歌おうとせがまれたらどうしようかと、内心ヒヤヒヤしてしまったんだ）。

「それじゃ、頂きます！」

「はい、召し上がれ」

美味しそうにシチューをすくって食べているメルメルの、短く刈った形のキレイな頭を眺めながらプラムじいさんはふ～むと唸った。

「少しは伸びてきたのう」

「モグモグ、ゴックン。髪？　いいのよ短い方がスッキリして」とメルメルは強がってみせた。

実はこの前の魔法の授業の最中に、ペンの先に炎を灯す魔法を習っていたら、メルメルは誤って髪に炎をつけてしまって、せっかく腰の辺りまで伸ばしていた髪の毛を短く切る事になってしまったのだ。強がってみせてはいるが大泣きに泣いた話を、プラムじいさんはペッコリーナ先生から聞いて知っているのだった。

その時の事を思い出してしまったらしく、メルメルのクリクリの目が赤くなってきて、大きな黒目がウルウルしてきたので、プラムじいさんは大いに焦ってしまった。

「も、もうすぐ十二才の、ハッピーバースデートゥーユー♪　じゃな、メルメル！」

「グスッ！　もうすぐって言っても、あと十ヶ月あるわ。ズズズズ～」

どうやら鼻水も出てきてしまったらしい。プラムじいさんはいよいよ焦ってしまった。

「た、誕生日には盛大にバースデーパーティーをしよう！　ほら、あれじゃ、あれ。仲良しのトンピー君も連れておいで！　たくさんの美味しい料理や、とびっきりのプラムじいさん特製ケーキを用意するから！」

「本当に？　嬉しい！　トンフィーも喜ぶわ！　だってトンフィーったらこの間来た時、おじいちゃんの焼いてくれたチーズ苺クッキーがとってもおいしかったって言っていたもの！」

これにはプラムじいさんは顔を真っ赤にして喜んでしまった（だってプラムじいさんが一番嬉しい事が自慢の孫を誉められる事で、二番目に嬉しい事が自慢の手作り料理を誉められる事なんだ）。

「トンフィーったら、お母さんにも食べさせてあげたんだって。ほら、おじいちゃんが残ったのを包んであげたじゃない？　そしたらお母さんも美味しい美味しいって食べたんだって言っていたわ」

「そ、そうか～。じゃあ、お、お母さんもパーティーに呼んであげよう～！」

プラムじいさんがいよいよ顔を真っ赤にして、いつもよりもっとニッコニコ顔でいるのを見てメルメルは少し困ってしまった。

「ダメよ……。だってトンフィーのお母さんは病気でほとんどベッドから出られないもの」

プラムじいさんはニッコニコ顔をハッとさせた。

「そ、そうじゃったな～。それじゃあ、たくさん作ってまたトンピー君に持って帰って貰おうかのう……」

プラムじいさんはしょんぼりして、いつの間にかちゃっかり膝に乗っているシバを撫でている。

「そうね。トンフィーとっても喜ぶわ。それにね、パーティーでは料理も一緒に作るといいわ。だってトンフィーもとっても料理が上

手だし、前におじいちゃんに色々な料理の作り方を教えてもらいたいって言ってたもの」

「そうか～！　もちろんＯＫじゃよ～」　またまたプラムじいさんはニッコニコ顔を復活させた。「あの子はとっても良い子じゃの～。この間もワシの書いたレシピ本を熱心に見ておって、おじいちゃん字もとってもキレイだなんて言ってのう、ワシに字を習いに来ていいか？　な～んて言っておったよ」

「そうよ！　――メッ！　テーブルの上はダメよ！　――すごいんだから！　トンフィーはとっても頭が良いんだもの。魔法も歴史も科学も算数も国語も、全部クラスで一番なのよ！」　メルメルはまるで自分の自慢でもするように胸を張った。「この間の歴史の授業でも先生が説明をする前に、七代前までの女王様の名前を全部言い当ててしまったし、算数の授業でもこ～んな長い計算式を十秒もかからないで問いてしまったし、それにそれに、魔法の授業では誰より早く炎をペン先につけたのよ！　私なんて……私なんて……ヒック！」

　喋っている内にその時の事を思い出してしまったらしく、メルメルはまたまた涙目になってしまった。

「で、でも体育の授業ならメルメルの方がすごいじゃろ！」

「それはそうね。だってトンフィーはあんまり運動が得意ではないもの。――ね、お片ししたら少しだけテレビを見て良い？」

　プラムじいさんは、そわそわしながら時計を気にしているメルメルを見てピンときた。

「お！　もうすぐ、メルメルの大好きなミラークルクルマンの時間じゃな。もちろん良いともさ」

　メルメルは慌てて食器をカチャカチャと片し始めた（少し慌てすぎてミミの尻尾のさきっちょを踏んでしまい、「にぎゃーー！」「ごめん、ごめん！」）。

　プラムじいさんもヨッコラショと立ち上がりながら、

「それじゃあ、片しながらもう一回さっきの歌を……」

「はい、片付いた！　あー、始まっちゃうわ！」
聞こえなかった振りでメルメルがテレビのスイッチを入れると、
「鏡に写したかのように～♪　う～り～ふた～つぅ～♪」とミラークルクルマンの主題歌が流れ始めた。メルメルが目をキラキラさせて、「ミラ～クルクル♪　ミラ～クルクル♪」と夢中でテレビを見て一緒に歌い始めてしまったから、プラムじいさんはやれやれとあきらめる事にした。これが始まってしまうと、めったな事ではこちらを振り向いてはくれなくなる。
仕方がないのでプラムじいさんが食器を洗いながら一人小さく、
「ググッとモーニングお母さん♪」と歌っていると、
「あー！　大ピンチだわ！　早く、早く変身しなくちゃダメよ！」
どうやらメルメルはテレビを見て興奮して騒いでいるようなのだ。様子を見に、プラムじいさんがテレビの前に行ってみると、ちょうど悪者達にやられかけ、一人の少年がピンチに陥った所のようだった。少年の年頃はメルメルより三つ四つ上くらいか。何だか気の弱そうな顔をしている。
「仕方ない。こうなったら……」
画面の中で少年が呟き、おもむろに両手を高く掲げた。すると何故か、メルメルも慌てて同じ様に両手を高く掲げた。そうしてテレビの中の少年と一緒に、
「ヤーヤーヤーヤー！」
と、交互に両手を高く掲げ、
「ミラークルクル、ひつじマンにな～れ！」

ピッカー！

テレビの中の少年が光輝き、次の瞬間――頭から角を生やした、もじゃもじゃ頭の別人に変わってしまっていた。
「うへぇ！　なんじゃ？　ひつじマンって……」
「ひつじマンは前々回戦った敵よ。ミラークルクルマンは一度戦っ

た敵には必ず変身出来るのよ！」
　ひつじマンに変身した少年――ミラークルクルマン――は、画面の中を縦横無人に走り回って次々に悪者達を倒していく。プラムじいさんがちょっと席を外して、メルメルの為にポカポカ紅茶を入れて戻ってくると、ミラークルクルマンは元通りの気の弱そうな少年に戻ってしまっていた。
「は～、良かった……。これで町の平和は保たれたわ」
　エンディング曲が流れ始めて、心からホッと一息しているメルメルの横で、シバは呑気顔でお腹を舐めて毛繕いしていた。
　メルメルはチラッとその様子を見て、ふと思いついてニヤッとし、おもむろにシバを抱き上げて両手を掴んだ。
「ヤーヤーヤー！」と、先ほどと同じように両手を交互に掲げ、
「ミラークルクル！　ひつじマンにな～れ！　いたっ！」
　シバはメルメルのお腹をおもいっきり蹴飛ばして逃げ出すと、棚の上に駆け上がった。そうしてそこで知らん顔を決め込んで眺めていたミミに寄り添って座り、上から恨めしげにこちらを見つめるのだった。メルメルは、キラキラのブルーのおめめがとってもキレイだわと思いながら、下から二匹を見上げてあ～あと言って溜め息を吐いた。
「ほれ、ポカポカ紅茶でも飲んで明日の宿題でもやっておしまい」
　プラムじいさんの言葉にメルメルはもう一度あ～あと言って、大きく溜め息を吐いたのだった。

　それからしばらく経ったある夜。メルメルが寝ていると、玄関の辺りでボソボソと人の話し声が聞こえてくる。何だかオシッコに行きたくなってきたし（たぶん寝る直前に飲んだココアのせいなんだ）すっかり目が覚めてしまった。時計を見ると、もう夜中の二時過ぎだ。
　メルメルはここの所しょっちゅうだな、と思う。真夜中に誰か尋

ねて来て、しばらくの間プラムじいさんとボソボソと話し込んでいくのだ。長いときは朝方までそうしている。

オシッコに行きたいけれども、メルメルはなんだか恐くて部屋を出る事が出来ないのだ。だって、その相手の男の声はやけに低いし、プラムじいさんの喋り方もいつもとは少し違う感じがするからだ。でもだんだんオシッコを我慢出来なくなってきたし、変な相手の顔を見てみたいような気もしてきた。勇気を出してドアの前に立ち、深呼吸をス〜、ハ〜としてみる。

「暗黒王は女王を……ボソボソ……占い師……居場所が……レジスタンス……ボソボソ……」

途切れ途切れに聞こえてくる男の低い声。メルメルにはその話す内容は訳が分からなくて、思わず眉をひそめながらガチャッとドアを開けた。

視界に飛び込んできたのは、玄関で驚いたように振り向いたプラムじいさんのビックリ顔。そしてその向かいには、上から下まで真っ黒の服を着て、フードを深くかぶった謎の人物がいた。

なんとも怪しい出で立ちにメルメルが目を丸くしていると、男は、「……ではまた」とやはり低い声で囁くように言って、ドアの向こうの暗闇の中に消え去ってしまった。メルメルがじっと固まって暗闇を見つめていると、バタン！　とプラムじいさんが素早くドアを閉め、カチャカチャっと鍵をかけてしまった。

「あー――どうしたんじゃ？　こんな夜中に」

「おトイレよ」

プラムじいさんはメルメルの顔を見ないで、あっちこっちに視線をさ迷わせている。

「うん。そりゃ〜、あれじゃな、寝る前に飲んだココアのせいじゃな、うん。あー……明日起きられなくなるとあれだから、トイレに行ったら早く寝るんじゃよ。それじゃ、おやすみっ！」

とプラムじいさんは逃げるように自分の部屋に入ってしまった。

メルメルはなんだか、「あの人は誰なの？」と聞くタイミングを

逃してしまった。
　モヤモヤっとしてしまったし、少しだけ恐くなってブルッと身震いをする。トイレに駆け込み、今夜はミミかシバを抱っこして寝たいな～、とメルメルは思ったのだった。

　次の朝メルメルが目を覚ますとキッチンから焼きたてパンの良い匂いが漂ってきて、瞼をこすりながら椅子に座ると、プラムじいさんが目の前にホッカホカミルクセーキの入ったマグカップを差し出してきた。
「ググッとモーニングお嬢さん♪」
「……おはようおじいちゃん」
　昨夜の事など何もなかったかのようにご機嫌な様子のプラムじいさんに、メルメルは少し腹を立てた（だって、メルメルはあの後しばらくモヤモヤとして寝れなかったんだ）。

「おじいちゃん、昨日の夜の人は――」
「あー！　焦げる、焦げる！」とプラムじいさんは慌ててキッチンに走って行ってしまった。
「まったく、もう！」
　メルメルがいよいよプリプリして待っていると、大好きなレーズンパンのバターシュガーサンドをお皿に乗せて、プラムじいさんがニッコニコ顔で戻ってきた。
「今日のお弁当のおかずは、メルメルの大好きなレンコン入りコロッケと、フワッフワ卵のキャベツクリームソース包みじゃよ！」
「へ、へ～」
　見え見えでばればれなご機嫌取りだと分かっていながら、メルメルは頬が緩んできてしまって口の端が少しずつ上がってきてしまった。そして極めつけにプラムじいさんが、
「食後のデザートに、サクサククリームアップルパイを持っておいき！」

「わーい！　やったー！　おじいちゃん、だ～いすきっ！」
　これですっかり昨夜の事など忘れてしまった。プラムじいさんはこっそり、ホッと胸をなで下ろした。メルメルは大好きなレーズンパンのバターシュガーサンドにかぶりつきながら、もう、すっかりご機嫌だ。
「モグモグ、そういえばミミとシバはやっぱり、モグモグ、まだ来ていないの？　ゴクンッ」
「あの子達は毎朝メルメルが出てからしばらくせんと来やせんよ。この間も言ったが、毎日必ず同じ時間に来るんじゃからのう」
　メルメルは不思議そうに首を傾げた。
「最近、夜はどこで寝ているのかしらね？　昨夜もいなかったし」
「もう暖かいからのー。冬の間は家に来て寝ることもあったの。――あ、そうそう。この間、ラウルの店に肉を買いに行ったら、その途中で二匹を見かけてのう」
　メルメルは、お気に入りのウサギのアップリケのついたキルトの鞄に教科書やらノートやらを詰めている手を止めた。
「お肉屋ラウルなら園のすぐそばじゃない！　あの子達、そんなに遠くまでお出かけするの？」
「そうじゃな～。もしかしたら、メルメルより遠くまで遊びに行っているかもしれんよ」
　そう言われると、何だかメルメルは二匹に負けている様な気がして、悔しくなってしまうのだった。
「そんな事ないわ。だって、ミミとシバはツインビーンズパークまでは行けないでしょ？」
　ツインビーンズパークは、遠足で行った事のある大きな豆の木が二本生えた公園で、メルメルの通っている園から車で三十分くらいの場所にある。豆の木の一番高い所まで誰より早く登った話を、メルメルが大興奮して話していたのを思い出しながらプラムじいさんはふ～むと唸った。
「メルメルだって園のバスに乗らなきゃ行けないじゃろうが？」

言われてメルメルは口をへの字にして黙ってしまった。プラムじいさんはこういう、少しデリカシーに欠けた所があるのだ。

メルメルがやけに静かになってしまったので、プラムじいさんは雰囲気を変える事にした。

「それでその時、つまり肉屋ラウルのそばでミミとシバを見かけた時じゃけども、二匹が戦っているのを見たのじゃよ」

メルメルはビックリした。「あの子達、本当は仲が悪いの？」

「いやいや、あの二匹で戦い合っておったんじゃなくてな。ラウルの家の二軒隣に、大きな犬を飼っとる家があるじゃろ？」

メルメルは目の玉を上にして少し考えた。

「きっとアンジェラさんの所の、ボルディーの事だわ。ラウルさんにお肉の残りカスをもらって、トンフィーとあげに行った事があるのよ。茶色に黒い斑の犬でしょ？」

「そうじゃ、それじゃ。そのポルティー君に二匹で立ち向かっていっておったんじゃよ」

メルメルはいよいよビックリして、ただでさえクリクリの大きな目を、更に一杯に見開いた。

「そんなの無茶だわ！　ボルディー相手じゃ、すぐにやられちゃうわよ！　こーんなに大きいんだから！　キバだってこーんなに！　トンフィーなんて恐くてなかなか近寄れなかったんだから」

「それがなかなかどうして、二匹とも頑張っておってのう。何せすばしっこいから、ミミが前から引っ掻く振りをしている間に、シバが後ろから引っ掻いたりしてな。ポルティーニョ君も結構参っておったよ」

メルメルは、小さな二匹が果敢に、十倍近くもある大きな犬に立ち向かう様子を思い浮かべ、すっかり感心してしまった。

「すごい、すごい！　でも、気をつけないと……。ボルディーは優しい子だけれども、勢い余って噛みつかれたら、ミミとシバなんてきっと一コロでぶっ殺されちゃうわ」

「ぶっ、ぶっ殺……。ま、まぁ、大丈夫じゃよ。そのうちに飽きた

みたいで帰りよったからのう。きっと遊び半分なんじゃろう。……おや？　随分荷物が少ないんじゃな？」

　いつもはパンパンに膨れているウサギの鞄がぺったんこになっているのを見て、プラムじいさんは不思議そうな顔でお弁当を差し出した。メルメルはそれを受け取りながら、嬉しそうな顔になった。

「今日は体育の時間に弓の練習をするの！　初めてだから三時限分使って、た～っぷり練習するんですって！　だから、他の授業は歴史と調教術しかないのよ」

「ほ～。弓の練習か。じゃったら、やっぱりペッコリーナ先生が教えてくれるのかのう？」

「え？　分からないけど、どうして？」

　メルメルが不思議そうに首を傾げると、プラムじいさんは何故か一瞬、しまった！　というような顔をした。

「いや……。なんか、あれじゃよ。あれ。女の先生の方が優しくて良いじゃろうな～……と、思ってな」

「そんな事ないわよ。ペッコリーナ先生は結構厳しいもの。ドラッグノーグ先生の方がよっぽど優しいわ。その代わりに、と～ってもやかましいけれどね」

　メルメルが、ドラッグノーグ先生の顔を思い出して心底ウンザリといった顔で両手を小さくあげると、それを見てプラムじいさんは可笑しそうに笑った。

「あの夫婦は相変わらず喧嘩ばっかりしとるのかのう？」

「そうよ。私達にはみんな仲良くなんて言っておいて。先生達の方がよっぽど仲良くするべきだと思うわ。誰も周りにいないから平気だなんて思ってるのかも知れないけれど、ペッコリーナ先生もドラッグノーグ先生も声がとっても大きいんだもの。怒鳴り合う声が三つ隣の教室にいても全部丸聞こえなんだから」

　メルメルの呆れ顔を見ながら、プラムじいさんは心底可笑しそうに笑った。

「うっほっほっほっほっ！　まったく、しょうがないのう。あの夫

婦は昔っから……や！　メルメル、そろそろ行かんと遅刻してしまうぞ」

メルメルは時計を見上げ、慌ててウサギの鞄を肩にかけた。

「本当だわ！　それじゃおじいちゃん、行ってきまーーす！」

「ほいさ！　気をつけてな～」

ドアをバン！　と勢い良く開けて、メルメルは猛スピードで走り出す。

園に向かうには七軒先の家の角を左に曲がるのだけれど、メルメルはそこで急に――自分でも何故だか良く分からないけれど――胸がざわざわっとして思わず立ち止まってしまった。くるりと家を振り返る。すると、プラムじいさんはわざわざ外に出て来てくれていて、遠くからでも良く分かるくらいの、いつもの暖かいニッコニコ笑顔で手を振っていた。メルメルはそれを見てやけに安心して何だか嬉しくなり、プラムじいさんに負けないくらいの満面の笑顔になった。そうして両手を大きく振り返し、再び園に向かって猛スピードで走り出したのだった。

ミミとシバ　3

園に向かって走りながら肉屋ラウルの角まで来ると、
「フギャギャギャー！」「ウ～、ワンワン！」
すぐにメルメルはピンときて、急いで二軒先まで走った。
「ミミ！　シバ！」
柵の向こうで茶色に黒い斑模様の大きな犬――ボルディーが、その唇をめくりあげ牙を剥いていて、それと向かい合って同じような顔の二匹の茶トラの猫が毛を逆立てていた。
「駄目よ！　ミミ！」
今にも飛びかからんばかりのミミ。シバは背を低くして、その後ろに隠れている。
「ヴ～、ヴ～！」
繋がれた鎖をガチャガチャさせて、ボルディーは暴れている。
「あ～！　……どうしようかしら？　このままじゃ遅刻しちゃうし……」
メルメルは困って、あっちへウロウロ、こっちへウロウロしていた。すると、
「メルメール！」
「――トンフィー！」
園の方から、トンフィーがサラサラな栗色の髪をなびかせ、額に汗を一杯浮かべながら走ってきた。
「きょ……ぜーぜー……教室の窓から……ハーハー……見えたんだ。一体、どうしたのさ？　フー」
メルメルが指差した先を見てトンフィーは目を丸くした。
「ミギャー！」
「ウガオー！」
その時遂に、ミミがボルディーの長い鼻づらにパンチした。
ボルディーが千切れんばかりに鎖を引っ張って暴れると、シバは

その後ろに素早く回りこんだ。メルメルは柵を乗り越えようとして、トンフィーはそれを見て、慌ててメルメルのシャツを掴んだ。
「わ、わわわ～！　危ないよメルメル！」
「だって！　止めなくちゃ！」
「いつものボルディーじゃないよ！　興奮しているから、噛まれちゃうよ！」
「でも、ほっとけないわ！」
メルメルがトンフィーの手を振りほどき、いよいよ柵を乗り越えようと足をかけたので、トンフィーは耳を真っ赤にしてすっかり焦ってしまった。
「ど、え、あー！　ファイヤーボール！」
トンフィーの叫び声と同時に、その手の平から火の玉が飛び出した。火の玉は地面に当たって、ボルディーの周りの草に燃え広がっていく。
「ウニャニャニャニャ！」大慌てでミミとシバは逃げ出してしまった。
ボルディーが尻尾を丸めてうずくまっているのを見て、慌ててメルメルは柵を乗り越えて、足で火を踏み消そうとした。
「ウォーターボール！」
トンフィーが再び呪文を唱える。今度は水の玉が飛び出して、燃え広がった炎の上にぶつかって弾けた。火が消えてしまった後も怯えた様子のボルディー。その頭を安心させるようにメルメルはやさしく撫でた。
「ありがとうトンフィー！　すごいじゃない、ウォーターボールなんて、まだ習ってもいないのに！」
「昨日の夜予習しておいたんだ。良かった。まだ上手くいくか自信がなかったから……」
「ううん、バッチリだったじゃない！　やっぱりトンフィーは天才よ！」
メルメルはトンフィーに抱きついた。

「いや～、てへへへ……」
トンフィーは雪のような白いほっぺを赤くして、嬉しくてニコニコウキウキしている。ところがその時、カラ～ン　コィ～ン、と園の方から鐘の音が聞こえてきた。ニコニコ顔の赤い顔が、見る見るうちに青くなる。
「し、しまった！　遅刻だ～！　どうしよ～」
いつもの弱虫トンフィーの顔で悲鳴を上げているのを見て、メルメルは思わずガッカリしてしまったのだった。

トンフィーが肩を落としながら園の門をくぐると、
「ンゴー！　ガゴー！」
どこからか大きないびきが聞こえてきて、二人は思わず顔を見合わせた。「さてはまた……」
いびきの聞こえてくる方に近づいて行くと、見事に咲き誇る桜の木の陰で、マーヴェラ園長が大の字になって眠っているのを見つけた。
メルメルは辺りに漂う匂いと真っ赤に染まったその顔を見て、すぐにピンときた。
「まったくもう。園長先生ったら、また酔っ払ってこんな所で寝ちゃってるわ！」
「本当だ。フフフ……。ね、起こしてあげた方がいいかな？」トンフィーは心配そうな顔をしている。
「そんな必要ないわよ。いい大人なんだから」と、メルメルの方は呆れ顔だ。「もう暖かいし、風邪も引かないだろうから大丈夫よ。女性がこんなところで酔っ払って大の字になって寝ているなんて。ペッコリーナ先生にでも見つかって、少しお小言でも言われた方がいいわよ」
トンフィーが、それは少し可哀想だなぁ、なんて思いながらマーヴェラ園長の幸せそうな寝顔を見ていると、突然足元にサワサワっと何かが触れた。

「わ～……。――あ、アケ！　どこに行っていたのさ、お前！」
「ニャニャニャン」　小さな三毛猫が後ろ足で立って、トンフィーの足に両手を伸ばしている。
　メルメルは大好きなアケの頭を優しく撫でた。「どこかに行ってしまっていたの？」
「さっき、門を出る辺りまではついて来てたんだけど、気がついたらいなくなっちゃってたんだよ」
　トンフィーがアケを抱き上げて、その鼻を指でツンツンすると、アケの首輪に着けた赤色の鈴がチリチリと鳴った。
「さては、ボルディーが恐くて隠れてたな～」
「ニャ～ン」
　アケは何にも分からない、といった顔でトンフィーの顔にグリグリと自分の顔を擦り付けている。そんなアケの様子を見て、思わずトンフィーは溜め息をついた。
「あ～あ。やっぱり、この間ハンティングブリーダーが売りに来てた、ジャッカルみたいなペットが欲しいな～」
「あの大きな犬みたいなやつ？　あんなの言うこと利かせられないわよ。アケの方がよっぽど可愛いわ」
　トンフィーはアケを下に下ろし、ちょこちょこと走り回っている姿を眺めた。
「そりゃあ、アケは可愛いけども……戦いには向かないでしょ？」
「戦う必要なんかないじゃない。トンフィーは兵士になる気なんてないでしょ？　学者とかの方がいいって言っていたじゃない」
「そりゃあそうだけども……」
「それともケンカにでも使いたいわけ？　ドミニクみたいに！」
「そ、そんなんじゃないよ～」
　メルメルがだんだん興奮してプリプリしてきたので（それはたぶん、この前ドミニクのペットのウンピョウに脅かされて、木から降りれなくなった時の事を思い出したからなんだ）トンフィーは慌てて手を振った。

「いや、僕、間違ってしまった！　ペットはアケ以外には考えられないよ！」

アケを抱きしめながら大げさにトンフィーが言うと、メルメルは満足そうに笑顔になった。

「分かればよろしい」

「こら～！　何をしているの二人とも！」

突然、頭の上から大きな声がふってきて、トンフィーは思わず飛び上がってしまった。声の主が誰かは分かっているけれど、恐る恐る上を見上げて確認してみると、二人の教室の窓からペッコリーナ先生が身を乗り出しているのが見えた。

「早く上がって来なさ～い！」

いつもはほがらかなその顔が、目尻をつり上げるととっても恐ろしく見えて、トンフィーは慌てて足をもつれさせながら走り出した。

メルメルもその後ろに続いて走りながら、ちょっとだけ気になって後ろを振り返ると、マーヴェラ園長は相変わらず花弁舞う桜の木の陰で、大の字になって気持ち良さそうに眠っていた。

「何をぐずぐずしているの、メルメル！　一体、何を見て……！　あ～！　園長先生ったら、またなの？　――まったく！」

教室に向かって二人が階段をかけ上がって行くと、少しぽっちゃりした体を揺らしながら、慌てた様子でペッコリーナ先生が降りてきた。

「ちょっと園長先生を起こして来るから、席について待っていなさい。……まったく、マーヴェラは何度言っても……ブツブツ」

ペッコリーナ先生の姿が見えなくなると、トンフィーはホッと胸を撫で下ろした。

「良かった。先生たいして怒ってないみたい」

「ペッコリーナ先生はいつも、そんなには怒らないわよ」

「でもさ、ほら、喧嘩の後だとさ……」

メルメルは、ペッコリーナ先生が夫婦喧嘩の後に、とても機嫌が悪くなる事を思い出した。

「確かにそうね……。園長先生のおかげで私達へのお小言も忘れてもらえそうだし、ラッキーだわ」

メルメルが機嫌よく教室のドアを開けると、先生がいないのをいいことに、生徒はみんなそれぞれに席を離れてお喋りをしていた。メルメルがいつもの顔ぶれを見回すと、一番後ろのはじの席からニヤニヤ顔でこちらを見ているドミニクの顔が目にとまって、いっぺんで嫌な気持ちになってしまった。

トンフィーは、ドミニクの顔を睨みつけて動かないメルメルの袖を軽く引いた。

「メルメル、席に座ろうよ……」

「……」

メルメルは一番前の、ドミニクとは真逆のはじの席に（ケンカばかりするから、ペッコリーナ先生に離れた席にされたんだ）座った。トンフィーがその隣にソワソワと座ると、視界の片隅にドミニクが立ち上がってこちらに歩いて来るのが見えた。トンフィーは心の中

で、ペッコリーナ先生が早く帰って来るように強く祈った。しかし願いも虚しく、ドミニクは目の前で立ち止まり、相変わらずのニヤニヤ笑いを浮かべながら、トンフィーの机をコンコンッと拳で叩いた。

「おいチビ助」

「何よ、このデカ男！」

「オレはチビ助に話しかけてんだよ！　まったく、ママがいないと一人でお喋りもできねぇのか？」

ドミニクにその大きな体を屈めて覗き込まれると、トンフィーは耳を赤くし、泣きそうな顔で俯いてしまった。するとドミニクはトンフィーの首根っこを掴んで持ち上げて、無理やり立ちあがらせた。見上げるようなドミニクの大きさに圧倒され、トンフィーは手の平に汗を一杯掻いてしまった。

「さ～て……。ちゃんと成長しているか、身体検査をしてやろう。――服を脱ぎな！」

「なに言ってるのよ！　放しなさいよ！」

「ママは黙ってろよ！　このブスっ！」

メルメルが立ち上がって拳を握り締め、今にもドミニクに飛びかかってやろうかと思ったその時、

「グゥゥゥ……」

ドミニクの後ろから、耳の先の尖った大きな猫のような生き物が現れた。

「ひゃ！」トンフィーは驚いて、思わず飛び上がってしまった。

「……な、何よ、またペットを変えたの？」

メルメルは恐怖で後ろにさがりそうな自分を何とか抑えたけれど、トンフィーは我慢出来ずにヨロヨロとさがって、後ろの机にお尻をぶつけてしまった。

「もう前のは飽きたからな。新しいのを親父に買ってもらったんだ。――どうだ？　かっこいいだろう。サーベルって言うんだ。名前はビッグさ！」

メルメルは、そのビッグとやらの首にかかっている、ど派手で趣味の悪い柄の入った首輪を見て、これじゃあ台無しだわと思ってしまった。

「教室の中にペットを入れないでよ！」

すると、ドミニクは教室をぐるりと見回した。「他の奴らだって入れてるじゃねえか」

確かにドミニクの言う通り、教室のあちこちにはウサギのような生き物が好き勝手に跳ね回っていたり、リスを肩に乗せた生徒がいたり、トンフィーと同じように猫を抱いている生徒がいたりした。そして、どの動物も必ずアケやドミニクのサーベルと同じように首輪をつけていた。

「みんなはいいのよ。ドミニクはペッコリーナ先生に注意されたでしょ！」

「それはこいつの前のペットの時だ」

メルメルはあまりの屁理屈に唖然としたが、こちらを見ながらゆっくり長い尾を振るサーベルを見て我に返り、背中に冷や汗を掻いてしまった。

「じゃあ、今度のペットは入れて良いのかペッコリーナ先生に聞いて見るから！」

メルメルが言うと、ドミニクは嫌そうな顔をしてサーベルを顎で示した。

「コイツが勝手に入って来るんだよ」

「何言ってるのよ！　ちゃんと言うことも聞かせられないなら、ペットなんて飼う資格ないわ！」

「何だと！　言うことを利かせられないかどうか試してみようか？　お前を噛みつくように言ってな！」

ドミニクが怒鳴ると教室は静まり返り、メルメルもトンフィーもさすがに青くなって黙り込んでしまった。

「さ～て……。どうしようかぁビッグ？」

サーベルの背中を撫でながら、ドミニクは勝ち誇ったようなニヤ

ニヤ笑いを浮かべている。
　トンフィーは、横で顔を真っ赤にして唇を噛んでいるメルメルの姿を見て、この前の帰り道にメルメルが泣いてしまったのを思い出し（ウンピョウに脅されて木から降りれなくなった事が、よっぽど悔しかったんだ）もしかしたらまた泣くんじゃないかと、一人でハラハラドキドキしてしまっていた。
「は～……。みんなおまたせ！　まったく困ったもんだわ本当に……」
　ガラガラッとドアを開けて、ペッコリーナ先生が戻って来た。
　トンフィーは嬉しくて先生に抱きつきたいくらいだったし、メルメルもホッとして、またまた泣きそうになってしまった。ドミニクは口笛を吹きながら何事もなかった様な顔をして、席に戻って行こうとした。――しかし、
「ドミニク」
　ペッコリーナ先生に呼び止められて思わずドミニクは、「何もしてないよ」
「何も聞いてないのに、わざわざ何もしてないなんて言われると、何だか何かをしていたように聞こえるわね～」ペッコリーナ先生はサーベルを横眼でチラリと見た。「ペットは教室に入れないように」
「か、勝手に入って来ちゃうんだよっ」
「じゃあ、檻に入れておきまおきましょうね。――ルルル～ララララ～、――檻よ現れよ！」
　ペッコリーナ先生が呪文を唱えると、サーベルは突然現れた光の檻に囲まれてしまった。
「あ、あ～！　ビ、ビッグ～」ドミニクは悲鳴をあげた。
　メルメルがこっそりと面白い顔で舌を出して見せたので、トンフィーはそれを見て思わず吹き出してしまい、ドミニクに恐ろしい顔で睨まれてしまった。
　ペッコリーナ先生はパンパンと手を叩いた。
「はい、それじゃ授業を始めるからみんなちゃんと席に座りなさい

！　――ほら、ルーク。あなたのペットがオシッコしているわよ。ちゃんと拭いておきなさい」

慌ててルークが後ろから雑巾を持って来る。他の生徒もそれぞれ席に着いて（ドミニクも肩を落としながら自分の席に戻って行ったんだ）ようやく教室内は静かになった。

「――はい。それでは一時間目、歴史の授業を始めます」

ミミとシバ　5

――　一時間目　歴史　――

「では、教科書の三十一ページを開いて」
ペッコリーナ先生が言って、皆一斉にパラパラと教科書をめくった。
メルメルは教科書を適当にめくりながら、早くも、お昼休みにならないかな～、などと考えながら欠伸をしていた。
「そういえば、そろそろ今学期も終わりですね。一年の締めくくりにまとめのテストでもやってみましょうか？」
「えーーー！」生徒達は悲鳴を上げる。
思わずメルメルの眠気も吹き飛んでしまった。チラッと左隣を見ると、想像通りトンフィーは平然としていた。
「まぁまぁ……。テストとは言っても、隣の人と話し合いながら答えを埋めていくっていうだけにするから、そんなに難しくはないでしょう？」
まだ他の生徒からは不満げな声があがっているけど、メルメルは密かにラッキーだなと思っていた。だって隣はトンフィーだ。
「それじゃ問題用紙を配るから後ろに回していって下さいね。一年勉強してきたことのまとめなんだから、真面目にやるように。楽しいお喋りの時間じゃありませんからね！」
メルメルはプリント用紙を後ろに回しながらチラッと問題を覗き見てみた。
『問一　闇（やみ）の王国の暗黒王（あんこくおう）が、トキアの国の女王を人質にして起こした戦争を何というか？』
（これは分かるわ。青暗戦争（せいあんせんそう）ね）
『問二　では、問一が起こったのは星歴（せいれき）何年？』
（……）

「ね、これ何年だっけ？」
　メルメルに声をかけられ、問題用紙に目を通していたトンフィーは顔を上げた。
「ん？　今が二二五五二年でしょ、青暗戦争が起こったのは、メルメルが生まれた年だから……」
「十一年前ね。じゃあ……二二五四一年だわ」
　トンフィーは満足そうに頷いた。「そうだね。机をくっつける？」
「そうしましょう」
　トンフィーが、ガタガタと机を引きずっている間にメルメルは次の問題を見てみた。
『問三　かつてトキアの国には七人の大臣がいた。大臣達はそれぞれ一つずつの異なる色の石を持っており、その色にちなんだ呼び名が付いていた。その名前とは、白の大臣、黒の大臣、赤の大臣、紫の大臣、黄の大臣、橙の大臣で、後り一人の大臣の呼び名は？』
「何だっけ？　紫なんていたかしら？　えーと、白、黒――」
「どれどれ？　……ああ。ほら、これはずっと最後まで抵抗し続けて、行方不明になってしまったと言われている大臣だよ。みー――」
「みー……みどりね！　緑の大臣だわ！」
「正解。じゃあ、次。問四はずいぶん長いね。青暗戦争で、何処からともなく現れた暗黒王は、女性しか王にはなれないという決まりがあるトキアの国を滅ぼし、自らが王なって闇の王国を作った。激しく抵抗したトキアの国を打ち負かした最大の要因と言われた、俗に悪魔の技法と呼ばれているものは一体何か？　……命の石による死者の復活だね」
「悪魔の兵隊じゃなくて？」
「これは技法についての問だもの。それによって作られた兵隊の名前を聞いている訳じゃないから」
「そっか。……でも、本当に死んだ人が生き返るのかしら？」
　メルメルが不思議そうに言うと、トンフィーは何故かとても小さな声になって言った。

「本当さ。僕、母さんの薬を買いに隣町に行った時、見たことあるんだ。数人の悪魔の兵隊が一列になって歩いていたんだ。何だかすごく臭かったし、皮膚もボロボロだった。マンガに出てくるゾンビみたいだったよ」

メルメルは思わず想像してブルブルっと震えた。

「もしもワタシが死んでも、絶対悪魔の技法だけはやめてね！　ゾンビはゴメンだわ！」

「でも、元々魔力の強かった人なんかは、同じ悪魔の兵隊でもほとんど生きていた頃と変わらなかったりするらしいよ？　噂だけども……」

トンフィーの言葉にメルメルはうーんと唸って考えこんでいたが、急にハッと顔をあげた。

「じゃあ、もしかしたら私達の町にも悪魔の兵隊がいたりするんじゃない？　だって生きていた頃と変わらないなら、すぐ隣にいたって気づかないもの……！」メルメルは目を見開いた。「ま、まさかトンフィー……」恐ろしげな顔でトンフィーを見つめながら、精一杯体を後ろに引く。

「ぼ、僕は違うよ！　ほ、ほら、僕の心臓を見てよ！　青い石なんか埋まってないだろ！」

「こら！　そこ、もう少し小さい声で相談しなさい！」

ペッコリーナ先生に注意されてトンフィーは首をすくめている。

メルメルは堪え切れずにクスクスと笑いだしてしまった。

「冗談だったら。トンフィーったらやーね、そんなに慌てて。……ぷぷっ！」

「ひどいや、メルメルったら……」

その後、授業が終わるまでずっと、メルメルは思い出してはクスクス笑いを繰り返して、ペッコリーナ先生に何度か注意されしまった。トンフィーはその様子を見ながら耳を赤くし、珍しく少し怒っている様子だった。

――そしてその頃……。

いつものように、のんびり屋のワーチャが大っきな欠伸をしかけたところで、目の前をピューッ！　と、いつもの三倍のスピードでミミとシバが通り過ぎていった。ワーチャの欠伸の記録は残念ながら八回で止まってしまった。

さーてさて、二匹は何故そんなに急いでいるのか？　実はとっくにプラムじいさんの家にご飯を貰いに行く時間を過ぎてしまっているからなのだ。

今日、二匹がボルディーのところで遊んだ後、いつものようにおやつでも食べようと、肉屋ラウルの裏のゴミ袋をほじりに行ってみると、

『チュー！』

先客は二匹に驚いてラウルの家の縁の下に開いた小さな穴めがけて、大急ぎで逃げて行った。

ミミのヒゲがピクピクッとして、目にも止まらぬ早さで飛びついたけれど、取り残された細いしっぽの先をかすめただけだった。二匹はじっと穴の前で待ち構えたけれども、まったく出てくる気配が無い。そのうちシバが飽きてきて、プラムじいさんのクタクタ煮の事を考えながら後ろ足で耳の裏を掻いていると……、

『チュチュー！』

シバのすぐ横を別のが通り過ぎて、あっという間にさっきまで見張っていた穴から、『チュー！』っと一瞬飛び出して、飛びつく間も無く、またまた同じ穴に引っ込んでしまった。

ミミが慌ててそちらに飛んで行ったら、今度はさっきまで見張っていた穴から、『チュー！』っと一瞬飛び出して、飛びつく間も無く、またまた同じ穴に引っ込んでしまった。

ミミとシバがそれぞれ別の穴の前に立ち、今度こそ石のようになって動かずに我慢したけれども、どんなに待っても、うんともすんともチューとも言わない。そのうち二匹と仲良しの恥ずかしがり屋のミカミカが現れ、こそこそとゴミ袋をあさって去って行き、お母さん猫のハナチョチョが来て、一緒に穴を覗き込んだりした。そう

して、ようやくミミがご飯の事を思い出し（シバはとっくにその事で頭が一杯だったんだ）慌てて走り出した時には、もうすでにいつもの時間はとっくに過ぎてしまっていたのだ。

ミミが慌て過ぎてシバの事を考えないで走るものだから、ミミとシバの距離はどんどん離れてしまう。シバは一生懸命走りながら、頭の中ではササミとレバーのクタクタ煮と大好きなプラムじいさんの顔が交互に、浮かんでは消え、浮かんでは消えしていて、ミミが急に止まってしまったのにも気付かず、「ニャフン！」とミミのお尻に鼻をぶつけてしまった。

ミミは二軒手前の家の塀の影から、じっとプラムじいさんの家の方を見つめている。シバはミミの後ろからひょっこり覗き込んでみた。プラムじいさんの家の大きなドアはちゃんと開いていた。しかし、プラムじいさんの姿は見当たらない。美味しいクタクタ煮の匂いもしない。その代わりに、風に乗ってとても嫌な感じのする、生臭いような、何かが腐ったような匂いが漂ってきた。シバはとてもお腹が空いたけれども、大好きなプラムじいさんにも会いたいけれども、何だか動けずに、じっとミミと二匹して大きなドアを見つめ続けているのだった。

――　一方その頃園では……。

「今日はお弁当のデザートに、クリームアップルパイを持ってきたのよ」

歴史の授業が終わって次の授業までの五分休みに、メルメルはとても楽しみで、思わずトンフィーに自慢してしまった。

「わ、いーなー。おじいさんのデザートは最高だもんね」

「もちろんトンフィーに半分あげるわ！」

「本当に？　わ～、嬉しいなー！」

トンフィーは喜んで、掴んだアケの手を上げたり下げたりしてはしゃいでいる。アケは大人しくされるがままになっていた。先程少しだけからかい過ぎたようで、トンフィーが怒っていたみたいだから、メルメルは半分優しさ、半分ご機嫌取りのつもりで言ったのだ。どうやらそれは成功したようで、トンフィーは口笛まで吹いている。

「お前らの話し声がうるさくて、テストが上手くいかなかったぜ！」

ドミニクがトンフィーを後ろから小突いた。

「やめなさいよドミニク！　テストが出来なかったのはワタシ達のせいじゃなくて、問題を解けるような脳みそが無かったせいでしょ！」

「何だと！　お前だって、頭がスッカラカンで木登りが得意な猿女のくせによ！」

「何ですって～！」

「何だよ！」

トンフィーは、怖い顔でにらみ合っている二人を、どぎまぎしながら交互に見た。

「や、やめなよ二人とも、か、鐘が鳴ったよ～」

ドミニクは、トンフィーをもう一回小突いてやろうと手を振り上

げた。
　そこへ、ガラリとドアを開けて、「おっはよーう！　みんな元気かな～？」
　ドラッグノーグ先生が現れた。
「おやおやー、まだ席に着いてない生徒がいまちゅねー」ドラッグノーグ先生はめいっぱい目尻を下げた。「よーし！　じゃあ今日は、みんなそれぞれ好きな場所で勉強しようか？　じゃあ、私は……ここがい～な～」
　ドラッグノーグ先生は一番前の席に座っている、おさげ髪のリリアンの椅子に無理やり半分座った。リリアンがとても嫌そうな顔をしたが、それにはまったく気付かなかった。
「それじゃあ、調教術の授業を始めますよー」

――　二時間目　調教術　――

　ドラッグノーグ先生は相変わらず、ウンザリ顔のリリアンの隣に座ったままだ。
「さーて、今日は一年の締めくくりにテストでもしよっかなー」
「えーーー！」
　皆が一斉に不満の声を上げると、ドラッグノーグ先生はやけに満足そうに頷いた。
「何てどっかの鬼ばばみたいなこと言わないよーん。だって、みんなを見てれば分かるんだもん。テストなんかしなくたって、ちゃ～んと真面目に私の話しを聞いてくれている。言われなくても、家に帰れば予習復習を欠かさずしてるなって。ねー、クロックス君」
「え！　えーと……」
　ドラッグノーグ先生は、ニッコ、ニッコ、ニッコしながら、可愛らしく（なんてないんだ）首を傾げた。
「だからテストなんてやらなくても平気だよねー？」
　急に言われてふとっちょのクロックスはとっても困ってしまった

けれども、テストは嫌だったからあさっての方を見ながら、「あー、はい、平気です……」

ドラッグノーグ先生は突然真面目な顔付きになって、クロックスの顔をじーっと見つめた。

「調教における二大禁止法は？」

「えっ？」

「禁止法」

「えっと、えっと……。ペ、ペットは一人一匹以上に首輪をしてはいけない！　――と、あと、あとっ」

ドラッグノーグ先生はクロックスのあわあわした様子を満足げに見つめた。

「あれ、どうしたの？　テストなんてやらなくても平気なんだろ？　ほら～、あっとひっとつっ、あっとひっとつっ♪」

「何だっけ……えっと……」

「しょがないなー。他人のペットの首輪を勝手に外してはならない、だろう？　私はすでに園に入る前にこれは知ってたよね。だから、実はこっそり試したこともあるんだよー」

メルメルは驚いて身を乗り出した。園に入って初めてドラッグノーグ先生の話に興味を持った。

「私は勉強なんて大嫌いでねー、友達と悪さばっかりしてたんだけど、何故か意外に物覚えが良くってね。周りにも良く驚かれたりしてたね。一緒に遊んでばかりいるのに、なんでお前だけテストの点が良いんだよとか友達に言われたりしてね。別にテストとか成績なんて私はどうでも良かったんだけど、一度聞いただけで大体の事は覚えちゃうんだよなー。その気がなくても覚えられちゃうんだよ。そういえば二年生の時こういう事があったんだけど――」

ドラッグノーグ先生お得意の『自慢話を織り交ぜた子供の頃の私』の話しが始まってしまったので、メルメルはいつもならほったらかしてうたた寝でもするのだけれど、今日はさっきの話が気になって仕方がなかった。

「先生！　ペットの首輪を外した時の話の続きをして下さい！」
「いや、ちょっと待ってね、順序良く色々話してあげるから。それである時、いつも一緒に悪さばかりしてた、足の速いカラカルって名前のクラスメートと――あ、って言っても私の方が速かったんだけどね。私はクラス一、足と食べるのが早かったからねー。その頃近所で評判の噛みつき犬がいてね。カラカルと一緒にその家の庭にこっそり入って、そいつの餌箱を取ってこようって事になってねー。ほら、いわゆる度胸試しだよ。子供の頃はみんなやるんだよねー。君達もやるだろ？　でも君達があの頃にいたら、さすがにそんな度胸試しは無理だったと思うよ。だって本当に大きくておっかない犬だったんだから～！　今思えば馬鹿だよね。命の危険もあったんだから。でも何か無謀と言うか、人一倍勇気があったもんだからねー、私は。でも、他のクラスメートは、出来るもんか！　な～んて言ったりして――」
　ドラッグノーグ先生の隣では、あまりの機関銃のようなお喋りぶりに（しかも大音声なんだ）リリアンが両耳を塞いでいる。メルメルは段々眠たくなってきたけれど、ペットの首輪を取ると一体どうなるのかが知りたくて、自分の瞼の重さと戦っていた。
「それで噛みつき犬の家に行って、いざ柵を乗り越えて侵入するぞ！　って時になったら、カラカルがやっぱり止めようなんて言い出してね。土壇場になって恐くなったんだよ。そりゃあそうだ、こーんな、こーんな大きくて恐ろしげな犬だったんだから。でも私は――」
　メルメルは右の瞼の重さに負けて右目を閉じたり、左の瞼の重さにも負けて変わりに閉じた右目を無理やりこじ開けたりしながら、右、左、右、左、と頑張っていたけれども、気がついたら机に突っ伏して眠っていた。
　カロ～ン　クォロ～ンと授業終了の鐘の音が響いて、メルメルはようやくハッと目覚めた。
「……と言うわけで、クラスメートみんな驚いて、私の弟子にして

下さい！　なんて言い出す奴までいてねー。しかもね――」
「先生！　もう鐘がなりましたよ！」
　リリアンが顔を真っ赤にして叫んだ。その様子が、いかにもついに爆発したという感じだったので、さすがにドラッグノーグ先生も焦った様子で立ち上がった。
「あ……そうだねー。うんうん。じゃあ授業は終了で～す」
　言いながらすごすごと教室を出ようとしたので、メルメルは慌てて隣を見た。
「首輪を外したらどうなったか聞いた？」
「その話しは結局してないよ。あふぁ～」
　トンフィーも眠そうに欠伸をしている。メルメルは廊下までドラッグノーグ先生を追いかけた。
「先生！」
「んー？」ドラッグノーグ先生は嬉しそうに振り返った。「メルメルは、よっぽど先生の事がしゅきなんでちゅねー。まだ授業やりたりないんでしゅかー？」
　メルメルは思わずピタリと立ち止まってしまった。
「人のペットの首輪を外したらどうなったのか知りたいんです」
　ドラッグノーグ先生は何だかつまらなそうな顔になった。
「あー、その話し？　それは、実はね……外せなかったんだよ」
「へ？」メルメルはつい間抜けな声を出してしまった。
「友達のペットの首輪を外してみようとしたんだけど、どうしても外せなかったんだよなー。不思議だろー？　でも不思議でもないか。そもそも、ペットの首輪には能力が高い二級以上の資格を持った魔法使いが、たーっぷり特別な魔法をかけてるんだからね～。二級以上って言ったら元女王の軍官クラスだもんねー。ま、子供にそんな魔法のかかった首輪を外すなんて、無理ですよーって感じだったのかな。多分今の私なら外して外せない事はないだろうけどもねー」
　メルメルはドラッグノーグ先生が二級どころか十級も合格していなくて、ペッコリーナ先生に、「生徒に示しがつかないわ！　ちゃ

んと勉強して、せめて五級の資格を取りなさい！」と怒鳴られているのを聞いた事があるが、とりあえず黙っている事にした。
メルメルがずっと黙っているのでドラッグノーグ先生は何となく居心地悪そうにそわそわしている。
「ま、わざわざ人のペットの首輪なんて外す必要ないからねー。禁止法でもあるんだから、そんな事しちゃ駄目ですよー。じゃあね～」
メルメルは心の中でちぇっと呟いた。
（つまらないわ！　ドミニクのペットの首輪をこっそり外してやろうと思ったのに！）

ミミとシバ　7

――　そしてその頃、ミミとシバは……。

いつものように、美味しいクタクタ煮のホッカホカ湯気をフーフーしながら、ニッコニコ顔でプラムじいさんが出てきてくれないかと期待していたけど、何だかそれはないような雰囲気を感じ始めていた。二匹して、プラムじいさんの家を見つめながらそっと寄り添っている。するとしばらくして、プラムじいさんの家の中からドタン、ドタン、と大きな物音が聞こえてきた。

「は、はなせ～」プラム爺さんの呻き声。

ミミはその大きな耳をピクピクッとさせると、凄い勢いで飛び出して行った。見る間に大きなドアの向こう側に消える。シバが慌てて後に続いて家に飛び込むと、な、な、な、なんと！　皮膚がドロドロでボロボロな揃いの黒い鎧を着た人間達（？）にプラムじいさんが囲まれ捕らえられていたのだ。

「貴様らなんなんじゃ！　ワシをどこへ連れて行くつもりじゃ！」

ドロドロ人間達は臭い息を吐き、「ヴ～ヴ～」と唸りながら入り口の方にプラムじいさんを引きずって行く。ミミが毛を逆立てて尻尾を膨らませ、「フー！」と威嚇しても見向きもしない。

シバは飛び込むと同時にドロドロ人間達に驚いて、外に逃げ出していた。しかしいつまで経ってもミミが出て来ない。仕方なしに恐る恐る家の中に戻ってみると、何と、勇敢な兄弟がちょうどドロドロ人間達に飛びかかっているところだった。

「フギャギャー！」ミミがドロドロ人間の足を引っ掻く。

「ヴ～ヴ～」ドロドロ人間達は呻きながらミミを蹴っ飛ばそうと足を振り上げる。ミミは素早くそれを避けて、今度は別の足を引っ掻いた。

ドロドロ人間達は足をバタバタさせ、仕返しに蹴っ飛ばそうと何

回も繰り返すけれど、ミミの体をかすめる事も出来ないでいるのだ。
その内、段々イライラしてきたようで、遂にはプラムじいさんを抑えていた手を離してミミを捕まえようと追い駆け始めた。
簡単には捕まらない。ミミはタンスの上からタンスの上に飛び移ったり、飛び降り際にドロドロ人間達の顔を引っ掻いたりして、すっかり相手を翻弄していた。
「猫ごとき相手に何をしているのだ！　爺が逃げるぞ！」
部屋の奥から何者かの怒鳴り声か聞こえた。すると、入り口付近までこっそり移動していたプラムじいさんに、ドロドロ人間達が一斉に気が付いてしまった。近くにいた一人が慌てたように掴みかかる。

「ニャニャニャーーー！」

ドーンとシバが体当たりをして、プラムじいさんを捕まえようとしていたドロドロ人間はよろけて、尻餅をついてしまった。
「役立たず共が！　サンダーニードル！」
部屋の奥から声と同時にバリバリ！　と針のような物がたくさん飛んできた。ミミは危ういところでそれを避ける。ミミの周りにいたドロドロ人間達は巻き添えを食って、魔法の針が体中につき刺さってしまった。皆、パリパリと電気を帯びて呻いている。すると、その中の一人からパリンと妙な音がして、「グオァ～！」と叫びながら倒れ込み、それから全く動かなくなってしまった。

「どけ！　間抜け共め！」

慌てたように人垣が左右に割れた。
ドカドカと床を踏みならし、家が揺れる程の勢いで現れたのは、――巌のような大男だった。少し前屈みになった体（そうしないと、頭が天井に着いちゃうんだ）に、ど派手な甲冑を着け、顔をほとん

ど覆ってしまう程の髭を蓄え、その間から覗く肌を怒りで真っ赤に染めていた。
大男は小さな黒目をギョロリとシバに向けた。
「サンダーニードル！」
「プリズムバリア～！」
プラムじいさんがほぼ同時に叫び、バリバリと恐ろしい音と共にシバに向かって飛んできた無数の針が、突然現れた光の壁に弾かれて消え失せた。
「に、逃げるんじゃ！　ミミ！　シバ～っ！」
「この、クソ爺が！」
大男はプラムじいさんをドアの外に思いっきり突き飛ばした。
シバとミミは一瞬目を合わせると、兵隊達の脇や足と足の間をすり抜け外に飛び出した。急いでプラムじいさんに駆け寄ろうとしたその時、
「ラプート！」
家の中から大男の声が響き渡った。すると空から、
「キェキェー！」

バタッ！　バタッ！　バタバタバタ！

翼をはためかせながら何かが降って来た。
「うへぇ～！」
「それ」はプラムじいさんをムンズと掴むと、瞬く間に空に舞い上がってしまった。その姿はハゲタカのようだが、何故かウロコだらけの足と尻尾が生えている。太陽の光を受けて、首のあたりで何かがキラリと光った。
ミミとシバは飛び去ろうとする、その不気味な後ろ姿を追って走り出した。
ハゲタカもどきはかなり大きいが、さすがにプラムじいさんを抱えて飛ぶのは難儀なようだ。二匹が飛びつけるか飛びつけないか微

妙な高さを低空飛行している。ただその速さは中々のもので、ミミでさえも追うだけで精一杯だった。少しずつシバが離され始めた頃、遥か後方から砂煙を上げて馬にまたがった大男の姿が見えてきた。

「ミミ、シバ、ワシの事はも～いいんじゃ！」

プラムじいさんが言っても、二匹は止まらない。

「奴がきたら殺されてしまうぞ！」

それでも二匹は止まらない。

「ワシの事よりメルメルを頼む！」

メルメル、と聞いてミミは大きな耳をピクピクッとさせる。

「メルメルを！　メルメルを一人にしないでおくれ！　そばにいてやっておくれ～！」

「サンダーニードル！」「プリズムバリアァ～！」

大男の放った魔法は、またまたプラムじいさんの守りに阻まれ、全くミミとシバには届かなかった。大男はまさに鬼そのもののような顔で、背負っていた大きな斧を手にした。ミミは（シバは目を瞑り鼻を広げ、必死で少し後ろを走っているんだ）プラムじいさんの目をじっと見つめた。プラムじいさんが無言で頷くと、気持ちが通じたように目を細め、少しスピードを緩めてシバに並んだ。寄り添って少し走り、「サンダーニードル！」大男の呪文と同時に、急に回れ右をして路地に飛び込んだ。しばらくは後ろの方から蹄の音がしていた。しかし、わざと細い道を通ったり、壁を乗り越えたりしているうちに、音は段々と遠くに消えていった。

ミミとシバはその後、ある家の庭に入っていった。この家は大工の親方をしている男が自分で建てた家で、この街では唯一の三階建てなのだ。二匹はその親方自慢の三階建ての屋根に登る。

「ニャウォ～ン！」

どうやら日向ぼっこをしていたらしい先客が、慌ただしく上がってきたミミとシバに抗議の声を上げた。

二匹がそちらを見ると、のんびり屋のワーチャのお姉さんで、ちょっと神経質なアーチャと、アーチャの事が大好きな（もしかした

らお母さんと思っているのかも知れないんだ）ユトロニャーオが寝転がっていた。それには構わず西の方に目を向けると、遥か彼方にハゲタカもどきに抱えられたプラムじいさんの姿が見えた。その後ろで馬に乗った大男と、さらには必死でそれを徒歩で追い駆けるドロドロ人間達の姿も見える。

「アォ～ン」アーチャが鳴きながら二匹の横に並んだ。

「ニャニャ」ミミもシバもアーチャの方を見つめる。

「ニャ！」「ニャワ～ン」「ニャ～ニャ」「ウニャニャニャ！」「フニャニャニャ～ン」

三匹はしばらく鳴き声を交わした後、急に静かになってしまった。ふとアーチャが、後ろで三匹のやりとりを見守っていたユトロニャーオの方を振り返った。

「ニャワワ～ン！」

アーチャが特大の鳴き声をあげた、次の瞬間。ユトロニャーオは物凄い勢いで屋根から駆け下り、西へ向かって脱兎のごとく駆け出したのだ。ミミとシバはその後ろ姿を見届け、最後にアーチャに顔を向ける。しばし気持ちを交わすように見つめ合い、ミミとシバも猛スピードで駆け出したのだった。

――　はてさて、その頃のメルメルと言えば……。

「弓の授業ってどんなかしらっ？　やっぱりマトに向かって撃つのよねっ？　ねっ、トンフィー！」

もう楽しみで仕方ない、といった様子のメルメル。

一方トンフィーは、

「ハー……。どうして今日は体育が三時間もあるんだろ……」

すっかり肩を落としてのろのろと体操着に着替えていた。

「いーじゃない。とっても楽しみだわ！」

勿論メルメルはとっくに着替え終えて、すっかり準備満タンだ。

「そりゃあメルメルはどんな運動だってお手のもんだからいいけどもさ……ハー」

「何よトンフィー！　あなただって得意な運動がきっとあるわよ。例えば……あ！　もしかしたら弓が凄く得意な可能性だってあるじゃない？　試してみなきゃ分からないわよ。ちょっと構えてみてよ」

じっと見つめられて、トンフィーは仕方なしに弓を構えるポーズをしてみた。

「うん！　とってもいいわ。きっと上手に打てるわよ」

メルメルに背中を叩かれて、トンフィーは頭を掻き掻き、ちょっと嬉しそうな顔をした。

「そ、そ～かな～？」

「そんなわけ無いだろうが？」

またまた二人の後ろからドミニクが現れた。メルメルは怖い顔で振り返る。

「なによ、ドミニク」

ドミニクがニヤっとして、トンフィーは嫌な予感がした。

「お～いみんな！　こいつが弓をかまえたら必死で逃げんだぞ！

でないとマトじゃなくて、自分のケツに矢が刺さっちまうからなぁ！　ハッ、ハッ、ハッ、ハッー！」

「そんな事ないわよ！　失礼ね！」

メルメルが怒鳴ってもドミニクは、「ハーッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ！」と笑い続けている。

その周りで何人かはドミニクに睨まれ仕方なさそうに、「はっ、はっ、はっ、はっ……」と笑っていた。

「もう！　行きましょう！」

メルメルはプリプリしながら、まだ上着の袖を通しきれてないトンフィーを引っ張ってガラガラ！　と、ドアを勢いよく開けて教室を出た。

「ドミニクって本当に頭にきちゃう！　何であんなにねじくれてんのかしら！」

メルメルは怒り冷めやらぬ様子で、廊下をプリプリどんどん歩いていく。

アケが後ろからチリチリと鈴を鳴らして追いかけて来たのを抱き上げて、トンフィーは慌ててメルメルの背中を追いかけた。

「案外寂しがり屋で、僕らと仲良くしたいだけなのかも知れないよ？」

「まさか！　――か～、やめてよ！　仲良くなんて……」

「ナカヨク！　ナカヨクシナキャダメヨ！」

突然のキーキー声にギョッとして二人は立ち止った。廊下に置いてある止まり木にペッコリーナ先生のペットでオームの「ピッピー」、マーヴェラ園長のペットでカナリアの「トリンケトラ」が寄り添っていた。

「ドウシテケンカバカリスルノ！」

「ダッテ、アノヒトッタラ、クチバッカリデ！」

「ソレヨリキイタ？　アノハナシ！」

「キイタ、キイタ！　オドロイチャッタ！」

「アハハハハ！」

「ウフフフ！」

メルメルとトンフィーは耳を塞いで大急ぎでその場を離れた。あの二匹のお喋り（？）が始まったら一時間は（多分飼い主達はそれに輪をかけて喋り続けている筈なんだ）止まらない。二人は廊下を抜け、校庭に飛び出した。

「あ！　ちょっと待って。ちょっとだけあそこに……」

言いながらメルメルの足は既にそちらに向かっている。トンフィーはその後ろを心得顔でついて行く。向かった先は校舎の裏で、そこにはグターっと横になっているオスライオンの後ろ姿があった。

「クスタフ？」

メルメルが話しかけると、ピクッと動いて顔を上げ、振り返る。しかし、またすぐやる気なそうにグターっとなってしまった。

もう一度、「クスタフ？」と呼びかけると、今度は面倒臭そうに尻尾の先を少しだけ上げた。

「よしよし」

メルメルが満足そうにして校庭に戻って行くのを、トンフィーは慌てて追いかける。

「どうしていつもクスタフに会いに行くの？」

「う～ん……会いに行くっていうか、確認してるのよ」

「確認？」

トンフィーが目をパチクリさせて言うと、メルメルは大きく頷いた。

「あんまりヨボヨボのクタクタだからね。ちゃんと今日も生きてるかなって、心配になるのよね」

「なるほど。確かに、ほとんど動かないもんね。ドラッグノーグ先生、ちゃんとかまってあげてるのかな？　ご飯とかさ」

クスタフはドラッグノーグ先生のペットなのだ。

「餌は貰ってるみたいだけど、ほとんど面倒見てるのはペッコリーナ先生みたいね。自分で面倒見られないなら、ペットなんて飼うなー！　って、ドラッグノーグ先生に怒鳴りつけてたもの」

一番最近聞いた喧嘩の内容だ。
「見栄で飼うな、とも言われてたわ」
これには、思わずトンフィーは可笑しそうに口元を押さえた。「見栄？　クスタフが？」
「だって、仮にも百獣の王よ！」
メルメルが人差し指を立てながら、わざとらしく真面目顔で言うと、いよいよトンフィーは堪えられなくなった。
「ぷぷ！　百獣の王！　クスタフが？　アハハハハ！」
「ウフフ！　百獣の眠り王ねきっと！　フフフフ！」
「アハハハハハ～！」
お腹を抱え、二人で大笑いしながら校庭へと向かう。しばらくすると、校庭の真ん中にたくさんの木の板が立てられていて、それに丸いマトが張られているのが見えてきた。メルメルがワクワクしながらウキウキ歩いていると、校舎の中からペッコリーナ先生が両手一杯に矢を抱えて出て来た。その肩には、ちゃっかり先程のお喋りオウム「ピッピー」が止まっている。
「さー！　みなさーん！　始めますよ～！」「ハジメマスヨ！　ハジメマスヨ！」
ペッコリーナ先生が大声で呼びかけると、校舎から出てきたばかりの生徒数人が慌てて走り出した。アケを抱き上げメルメルも駆け出す。後ろから聞こえてくる、「は～……」と言うトンフィーの溜め息を聞きながらメルメルは、「やっぱり、ペッコリーナ先生が教えるんだわ……」と呟いていた。
集まった生徒の数を確認して、ペッコリーナ先生は満足そうに頷いた。
「それでは体育、弓の練習を始めます」

ミミとシバ　9

――　三時間目　体育　弓の練習　――

ブィ～ンィンィン――トスン！

ペッコリーナ先生がみんなのお手本に放った矢は、五重丸になっているマトの、中心から三つ目の丸の中に当たった。

「意外に上手じゃないわね」

メルメルが呟くとトンフィーは不思議そうに首を傾げた。

「どうして意外なの？」

「ん？　……いや、別に何でもないわ」

朝プラムじいさんが、「やっぱりペッコリーナ先生が教えるのか？」と聞いてきた事がメルメルには少し引っかかっていた。もしかしたらペッコリーナ先生は有名な弓使いか何かなのかと思ったが……そんな事は無さそうだ。

「ほら。メルメルの番だよ」

トンフィーに促されてメルメルは前に出た。下を向き、地面に書かれた線を踏まないよう確認する。

「ん～！」と思い切り矢を引き、狙いを定めて手を離す。

ピュ～ッ……バス！

メルメルの放った矢は中心から四番目の丸の中に当たり、周りで期待していたギャラリーを、「は～あ……」とガッカリさせた。みんな、メルメルなら真ん中に当てられるかも知れないと思っていたのだ。それでも、メルメルはまだましな方で、他の者は皆マトの中にすら当たらなかった。想像以上の難しさに、生徒達はつまらなさそうにぼやいている。緩んでしまった空気を引き締めるように、ペッコリーナ先生は、パンパンと手を叩いた。

「ハイハイ！　そんなに簡単じゃないのよ？　マトはたくさん用意したから、みんなそれぞれグループになってどんどん練習しなさい

！」

ペッコリーナ先生が言うと、生徒達は自然と仲の良い者同士が固まって、それぞれのマトの前にうまい具合に分かれて集まった。ところが何故か、メルメルとトンフィーの列にドミニクが入って来て、メルメルはちょっと驚いてしまった。そうして、さっきのトンフィーの言葉を思い出し、チラッとドミニクの様子を窺った。するとそこに、何か企んでいるとしか思えない嫌なニヤニヤ顔を見つけてしまって、メルメルは酸っぱい顔になった。

（仲良くなんて冗談じゃないわ！）

「ヤケニアツイトオモワナイ？　アタシダケ？　ギャギャギャ！　アラアラ、コンナニシチャッテ！」

お喋りオウムが退屈し始めたようで、生徒はなかなか集中出来なくなってきた。

トンフィーの番が来て、メルメルは列の最後尾の方で、心配しながらその姿を見つめた。

（へぇ……なかなか様になっているじゃないの）

「ギニニ！　キューチャン！　アラ、アタシッタラマタ……レジスタンス！」

「――！」メルメルは驚いて、慌てて首を巡らしピッピーの方を見た。ペッコリーナ先生は焦ったように、ピッピーの頭を軽く叩いている。

（今、確かにレジスタンスって……。レジスタンスって、確か、昨日の夜来た男の人が話していた……）

「わー！　危ない！」

誰かの叫び声が聞こえて、メルメルはハッと我に返った。自分以外が全員上を見ているのに気付いて、上を振り仰いだその瞬間――

バキーン！

目の前で何かがはじき飛び、メルメルは目をパチクリとしてしまった。

「え？　え？　な、何？」

皆シーンと静まり返っていて、メルメルの声ばかりがやけに響いている。助けを求めて視線を彷徨わせ、真っ青な顔で、弓を放った姿勢のまま座り込んでいるトンフィーの姿を見つけた。その後ろでは、ドミニクがトンフィーと同じように顔を青くして突っ立っていた。

「ドーミーニークー！」

もの凄く恐ろしい顔で、ペッコリーナ先生がドミニクに駆け寄り（……たぶん駆けているんだ）ゴキン！　と思い切り頭を殴りつけ、その耳を引き千切らんばかりに引っ張った。

「冗談では済まされないわよ！　バカも大概にしなさい！」

メルメルは何となくコソコソとトンフィーに近づいて行った。座ったままのトンフィーに手を差し出し、引き起こしながら尋ねる。

「一体どうしたの？」

「ぼ、僕、わざとじゃないんだ！　だ、だってドミニクが、ドミニクが……」

「落ち着いてよトンフィー。何があったのかワタシはさっぱり分からないのよ……。トンフィーがわざと悪い事なんかするわけないって、ワタシが一番良く知ってるんだから安心してよ」

メルメルが言うとトンフィーは少し落ち着きを取り戻した。

「う、うん。良かったメルメル……何もなくて。凄く危なかった……」

ドミニクの方に目をやれば、まだペッコリーナ先生に絞られていて、どうやらさすがに参っている様子だ。

「危ないって、ドミニクが何かしたの？」

「うん。あのね……僕が矢を放つ瞬間に、ドミニクが後ろから僕の足を蹴ったんだ」

メルメルは大体そんな事だろうと思っていたし、やっぱり呆れてしまった。

「最低ね。それで、どうなったの？」

「ドミニクも、マトからそれさせるだけのつもりだったんだろうけども……。余りに強く蹴られたもんだから、つい膝が曲がっちゃって……僕……僕、思わず空に向けて矢を撃っちゃったんだ！」思い出したのかトンフィーはブルッと震えた。「そうしたらその矢が……」

「――ワタシに向かって落ちて来た？」

トンフィーはまたブルッと震えて、頷いた。「そして、もう駄目だ！　と思ったその次の瞬間……」

メルメルは先を期待してトンフィーを見つめた。ところが、何かを思い出しているような顔で、トンフィーは目を輝かせて黙り込んでいる。メルメルは焦れてきた。

「その次の瞬間、どうしたのよ？」

「ペッコリーナ先生さ！」

「……へ？」

メルメルがつい間抜けな声を出すと、トンフィーは目をキラキラさせたまま、メルメルの方を向いた。

「ペッコリーナ先生が矢を放ったんだ！　その矢がメルメルの顔のすぐ手前で、僕の矢を弾き飛ばしたんだ！」

メルメルは思わずペッコリーナ先生の方を向いた。相変わらずドミニクにお説教を続けている。その横顔をじっと見つめる。特にいつもと変わりないように感じた。しいて言うなら、普段より少し目を吊り上げて怒った顔をしてはいるが……。トンフィーも隣で一緒になってペッコリーナ先生を見つめた。その目はやはりキラキラ輝いている。

「凄く早い動きだったんだよ。瞬きする間も無いくらいに」

ペッコリーナ先生のポッコリしたお腹を見ながら、メルメルはちょっと信じられないような気持ちだった。しばらくはぼんやりと、

ペッコリーナ先生がドミニクにお説教をしている姿を見つめていて、ふと先程のピッピーの言葉や、プラムじいさんの言葉などを思い出した。

（何だか変な感じだわ……ペッコリーナ先生に直接聞いてみようかしら？）

そう思い、メルメルがペッコリーナ先生に歩み寄ろうとした――その時。

「ニャ、ニャ、ニャ、ニャ、ニャ～！」

門の方から、校庭を猛スピードでミミとシバが走って来た。二匹はやたらと必死の形相を（特にシバは鼻水まで垂らしているんだ）している。

「ニャー！」「ニャニャー！」

ミミとシバは交互に鳴き声を上げながら、メルメルの回りをグルグルグルグル回り始めた。メルメルも周りの生徒も、そのただならぬ様子に唖然としてしまった。

「ど、どうしたのよ？　ミミもシバも……」

メルメルが困ってオロオロしながら視線を送ると、グルグルに混ざろうとするアケを抱き上げて、トンフィーも驚いて目を点にしていた。

「な、何かを訴えてるのは確かだよね……」

「訴えるって……何を？」

「それは……残念だけれど僕は猫語がわからないから……」

大真面目な顔でそんな事を言っている。トンフィーも相当混乱しているようだ。

メルメルが、このままだと二匹がどっかの虎のようにスープになって仕舞うんではないかと心配し始めた頃、ペッコリーナ先生が近づいてきて、グルグルを止めない二匹に向かって、「にゃ～ん？」と話しかけた。するとミミが、「ニャーニャー！」と、答えた！

……ように見えた。

「す、凄い先生！　猫と話せるんですか！」トンフィーは再び目を

キラキラさせた。
「いや、そう言うわけじゃ無いんだけれど……」
「えっ？　だって今、にゃ～んて……」
「何となく言ってみたのよ。一体この子達はどうしたのかしら？　メルメルの飼っている猫ちゃんなの？」
「飼ってるっていうか、ノラ猫なんですけど……」
メルメルの横ではトンフィーが溜め息を吐いている。先程の素晴らしい弓使いといい、危うくペッコリーナ先生の信者になりかけていたのでガッカリしたのだ。
「でも、あなたに向かって何か言っているみたいよ？」
メルメルは首を右に捻ったり左に捻ったりしている。
「近所の猫ちゃんか何かなの？」
「おじいちゃんが毎日ご飯をあげているんです。だから、飼っているってわけじゃないけど、家の中にずっといる時もあるし……」
メルメルが言うと、ペッコリーナ先生は眉根を寄せ、急に厳しい顔付きになった。
「おじいちゃんが……」と呟き、指を顎に当てて考えこんでいる。そんなペッコリーナ先生の様子をメルメルはぼやっと見ていた。すると突然、
「ウニャ～！」「ウニャ～！」
「あぁ！　こ、こら～！」
ミミがメルメルの右の靴ヒモを、シバが左の靴ヒモをくわえて引っぱり出した。
「せ、せんせ～！」メルメルはとっても困ってしまって、思わずペッコリーナ先生に助けを求めた。
するとペッコリーナ先生は意を決したように大きく頷いた。
「よし！　メルメルの家に行ってみましょう！」
「え！　い、今からですか？」
まだ授業の最中で鐘も鳴っていないのだ。
「メルメルの家で何かあったのかも知れないわ。　――ドミニク！

ドラッグノーグ先生を呼んで来てちょうだい。　恐らく校舎の裏でコッソリ煙草を吸ってるか、職員室でお煎餅でもかじってボーっとテレビでも見てるわ！」

「へ？　あ、はい！」ドミニクは慌てて校舎に向かって走って行く。

「せ、先生！　何かって……何があったんですか！」トンフィーが青くなって叫ぶ。

「いえ……たぶん何もないでしょうよ……ただ、念の為……」

ペッコリーナ先生は心ここにあらずといった感じで、遠くを見て考えこんでいる。その様子は何にもないと思っているようには、とても見えない。

メルメルは、トンフィーやクラスメート達に手伝ってもらって、何とかミミとシバを押さえながら（それでも二匹はスッポンみたいに靴ヒモを離さないんだ）少しドキドキしていた。

「な、なにがあったと思う？」

「分からない……。ただおじいさんに何も無いといいけど……」

トンフィーは青い顔で心配そうに言うし、ペッコリーナ先生はそんな風だし、メルメルは結構のんきな性格だけれど、何だか不安な気持ちになってきてしまった。

「連れて来たぞ～！　こっそりと煙草の方だったぞ～！」

ドミニクがドラッグノーグ先生を引き連れて戻って来た。

「こ、こらこらドミニク」ドラッグノーグ先生はあわあわしながら、ペッコリーナ先生に向って手を振った。「いや、最後の一本だよ、うん。これで止めようと決めたんだ。――そもそも、この間止めると約束してから吸ってなかったんだよ？　いや本当に。ただ、いざという時にとっておいた最後の一本をだね――」

「そんな事どうでもいいから、ちょっと黙って聞いてちょうだい！」

ペッコリーナ先生が厳しい顔で言うとドラッグノーグ先生は少しムッとした顔になった。

「そんな言い方はないだろ？　大体なんだって――」

「メルメルの家で何かあったみたいなの」ピシャリとペッコリーナ

先生が言う。
「……なんだって？」
「いえ、まだ分からないけど、何かあったのかも知れないわ」
「……」珍しくドラッグノーグ先生は静かになり、真面目な顔になった。
「ノーグ、私は今からメルメルを連れて、この子の家の様子を見てくるから、あなたは生徒達に授業の続きをしてやってくれる？」
「……了解したよ。任せてくれ」
本当に珍しく、ドラッグノーグ先生が口数少なく頷き、ペッコリーナ先生はメルメルの方に顔を向けた。
「さあ！　行きましょう！」
メルメルが頷くと、トンフィーは慌てて叫んだ。「ぼ、僕も行くよ！　僕も行きます先生！」
ペッコリーナ先生は首を横に振った。「駄目よ。あなたは授業の続きをしなさい」
「でも、僕心配で……」
トンフィーは本当に心配そうな顔をしている。メルメルはトンフィーが来てくれたら嬉しいし心強いのになと考えたけれど、ペッコリーナ先生はうんと言ってくれそうにはないなと悟った。
「大丈夫よ、トンフィー。すぐ戻って来るもの。トンフィーはちゃんと弓の練習をして、ワタシが帰って来た時ちゃんと教えてね？」
トンフィーは情けない顔になった。「ぼ、僕がメルメルに？　……分かったよ。気を付けてね……」
「ニャー！」
ミミとシバはまるで早くしろと言わんばかりに、門の前で待ち構えている。メルメルが慌てて門に向かうと、「ちょっと待って」ペッコリーナ先生は地面に置いてある自分の弓と、矢を入れてある筒を背負い込んだ。
「さ、行くわよ！」「イクワヨ！　イクワヨ！」
メルメルは、どうして弓を持つのかと不思議に思いながらもペッ

コリーナ先生に続いてミミとシバのもとに向かった。二匹は先に立って走り出す。それを追いかけながら、門を出る直前で振り返ると、トンフィーは相変わらず心配そうにしてこちらを見ていた。メルメルは安心させようと立ち止り、笑顔で手を振ると、トンフィーも小さく手を振り返してきた。

「メルメル！　早くしなさい！」「ハヤク！　ハヤク！」

メルメルはペッコリーナ先生を追いかけながら、去り際にチラリと見えた、弓を引いたり戻したりしているドラッグノーグ先生の情け無い顔を思い浮かべて、

（弓なんて教えられるのかしら？）と首を捻ってしまった。

レジスタンス　1

早く、と言っていた割には、余りのペッコリーナ先生の足の遅さに、メルメルは何度もおいてけぼりにして先に行って仕舞おうかと思った。困った事に空にはいつの間にか真っ黒な雲が広がり、あっという間に、ポツリ、ポツリと雨が降り出してきていた。

「ひ〜、ひ〜。こ、こんなに急いで走ったのは、ひ〜。娘が転んで、と、トイレで便器の角に頭をぶつけて、びょ、病院まで走った時以来だわ！　ふ〜……あら？」

何故かシバとミミが急に止まってしまったので、仕方なくメルメル達も走るのを止めた。しかし、メルメルの家まではまだもうちょっと距離があるのだ。

「どうしたの？」メルメルは首を傾げた。

「いや、ちょっと気になる事があって」

などと答えてくれるはずもなく、二匹はじっと前方を見ているばかりだ。

視線の先には、いよいよ本降りになってきた雨しぶきが上げる靄の向こうに、メルメルの家のドアがあり、いつもと変わりなく、大きいドアの中にプラムじいさんが二匹の為に作った小さいドアがある。その大きいドアも、今はピッタリと閉まっている。

顎から雨粒を滴らせながら、「……行ってみましょう」ペッコリーナ先生が言って、先に立って歩き始めた。メルメルがそれに続いて歩き出すと、その後ろからは二匹も仕方なさそうに付いて来る。

ペッコリーナ先生はドアの前に立って、コンコンッと強くノックした。

「プラムさ〜ん！　プ〜ラ〜ムさ〜ん！」

全くプラムじいさんの出て来る様子は無い。雨の音がうるさいし、遠くで雷まで鳴り始めたので、家の中から物音がするのかどうかも良く分からない。

「いないのかしら……」
「きっと買い物にでも行っているんだわ！」
何となしに、にこにこしながらドアを開けて、「なんじゃメルメル、こんな早くにどうしたんじゃ？」とか言いながら、何事も無かったかのようにプラムじいさんが出てくると思っていたので、メルメルは急に不安になってきてしまった。
思わず声をひっくり返しながら、「な、中に入ってみましょうよ先生！」メルメルがドアノブをひねると、「あ、あれれ？」カチャカチャ回してもいっこうにドアが開かない。
鍵がかかっているのだ。
普段プラムじいさんはほとんど鍵などかけない。帰る時はプラムじいさんが必ず家にいるので、メルメルはそもそも鍵など持ち歩いていないのだ。
――カタン。と音がして、足元に視線を落とすと、ミミの長い尻尾が小さなドアの向こうに消える所だった。濡れて、いつもより痩せたように見えるシバも、ミミの後から恐る恐る中に入って行った。
二匹が消えてからしばらく、メルメルとペッコリーナ先生がどうしようかと顔を突き合わせていると、家の中から雨音に混ざってかすかに、「フギャー！」と猫の悲鳴が聞こえて来た。
「せ、先生！」「離れてなさい！」
胸を押されてメルメルは三歩後ろに下がった。
「ルルル～ラララ～、――開けドア！」
カチャッと鍵の外れる音がして、少しだけドアが開いた。ペッコリーナ先生は無言で弓を構えると、矢の先でドアを押し、少しずつ、少しずつ中に体を滑り込ませて行く。しばらく家の外でメルメルがドキドキしながら待っていると、家の中からペッコリーナ先生が、
「メルメル！」と呼びかけて来た。
恐る恐る中に入ると、薄暗い部屋に、矢をつがえたまま立っているペッコリーナ先生の、ぽっちゃりした背中が見えた。
「私の後ろにいなさい」

ペッコリーナ先生の緊張した様子に、メルメルの心臓も爆発寸前だ。

「メルメル、あのドアは？」ペッコリーナ先生が弓の先で、左側の壁にあるドアを示す。

「おトイレと、お風呂です」

メルメルの家は、玄関を入ってすぐが二十畳ほどの一番大きな部屋で、右手にキッチンが付いていて、真ん中にテーブル、手前にソファ、奥にはテレビが置いてある。

日が陰ってしまったせいで窓からの光が少なく、暗くて良くは見えないが、どうやら室内には誰もいないようだ。

「あっちは？」今度は前方の壁にある二つのドアの内、左の方のドアを示す。

「あれは、ワタシの部屋です」

ペッコリーナ先生はゆっくり移動して、そのドアの前に立つと、少しの間ドアの向こう側の様子を探るために耳を澄ませた。そうしている間も、外では時折雷鳴が轟き、時折稲光が窓から室内を照らし出している。メルメルはペッコリーナ先生の背中にひっついて、先生の花柄の上着の裾をぎゅっと掴んで息を殺していた。

「大丈夫よ、メルメル……」ペッコリーナ先生は小声で呟きながら、メルメルの部屋のドアをゆっくり開けた。しばらく黙って様子を窺っていたが、「誰もいないわ……」

呟いたペッコリーナ先生の肘のあたりからメルメルは恐々顔を出した。いつもと変わらない部屋の景色にホッとして、ようやくペッコリーナ先生の洋服を離す。メルメルが握っていた部分は、花柄だか何柄だか分からないくらいにシワシワになってしまっている。

メルメルは改めてゆっくりと室内を眺めた。見慣れた自分の部屋だ。誰もいない。ベッドと、勉強用の机（本来の目的で使った事はほとんどないんだ）と、洋服ダンスがあるだけだ。

ペッコリーナ先生は踵を返して部屋を出て行く。それに続いて部

屋を出ようとして、ふと机の上に何かあることに気が付いた。
（何かしら……？）
何か小さな白い物が載っているのが見える。机に近づいて良く見てみると、
それは、煙草だった。
しかも吸った後のもので、机に直接もみ消してある。
「どうしてこんな物が……」
プラムじいさんはこんな事をする筈無いし、そもそも煙草なんて吸わない。
メルメルはぞっとして、ペッコリーナ先生に教えようと慌てて部屋を出た。
「……先生？」
ペッコリーナ先生の姿が無い。
メルメルは、余りにドキドキして心臓が口から飛び出すんではないかと心配した。その時、
――――――カタ、
とソファの向こうで何かが動いた。

ガラガラビッシャーーンン！

窓から注いだ一瞬の光が、ソファの向こう側に花柄の丸い背中を浮き出させた。
「大分近かったわね。今のは……」
花柄の背中が呑気な声を出して、メルメルは泣き出しそうになってしまった。
「せ、先生、な、何してるんですか～？」
「ちょっと……」
ペッコリーナ先生は屈んだままゴソゴソと何かしている。メルメルが歩み寄ろうとしたその時、
「フッ、フッ、フッ……」

何か獣の息づかいのようなものが聞こえた気がして、ふとそちらを見た。そこには、もう一つの開けていないドア。すなわちプラムじいさんの部屋のドアがあり、それが、ほんの少し開いている事に気付いた。

（おかしいわ……。さっき見た時は、たしか開いていなかったのに……）

メルメルはゆっくりと、その開いたドアに近づいた。するとまた隙間から、「フッ、フッ」と獣の息づかいが聞こえてきた。

（……ミミ……シバ？）

ゴクリと唾を飲み込み、メルメルはそっとドアを開いた。

ガラガラガラピッシャーン！

再び稲妻が室内を照らし出す。

「……！」

その一瞬の光が見せたものは、メルメルよりも大きな黒い獣と、その両足に踏みつぶされたミミとシバの姿だった。

室内がまた薄暗くなり、ぼんやりとしかその影が見えなくなっても、メルメルは全く動けずにいた。ペッコリーナ先生を呼びたいが、金縛りのようになってしまっていて声が出ない。

（きっと、殺される……わ……）

ゆっくりと背中を冷たい汗が流れる。と、その時獣が低く、「ウ～」と唸った。すると消え入りそうな声で、

「ヴァ～ン……」とミミだかシバだかが呻き声を上げた。

（生きているんだわ……！）

その瞬間、ようやくメルメルの金縛りが溶けた。だけれどもちゃんと言葉は出てこなくて、

「あ、あ、あ、あ、あ」

「どきなさい！」

メルメルが震える足を動かし、横に動いた次の瞬間、ビュー！

と目の前を矢が通り過ぎたかと思ったら、ガッキーン！　と激しい金属音がして、突然黒い人影が目の前に現れた。

「ライト！」

その人影が大声で叫んだ。すると、まばゆい光が辺りを照らし出し、メルメルは思わず目を閉じてしゃがみ込んでしまった。

「ご挨拶だな。ペッコリーナ」

聞き慣れない男の声がして、メルメルはしゃがみ込んだままそっと目を開けてみた。どうやら薄暗かった部屋には明かりが灯っているようだ。床には真っ二つになった矢が転がっている。

「は～……。あなたが何故ここにいるのよ？　グッターハイム」

ドアの横で座り込んでいるメルメルに手を差し伸べながら、ペッコリーナ先生が落ち着いた声で尋ねた。

「ラブレターをもらったのさ。プラムからな」

「――どういう事なの？」

メルメルは、ペッコリーナ先生の手を握って立ち上がり、二人の訳の分からないやり取りを聞きながら、突然現れた謎の相手の顔を上目使いに覗き見た。背が高く、よく日に焼けて精悍な顔つきをした男だった。メルメルの知らない顔だ。誰だろうかと首を傾げれば、その見知らぬ男は視線に気付き、片頬をあげてニヤリとメルメルを見た。慌ててメルメルは目を逸らし、ペッコリーナ先生の後ろに隠れる。また先ほどの真っ二つになった矢が目に入り、次いで目の前の男がぶら下げている大剣に目を移した。

（この人、飛んで来た矢を剣で切り落としたんだわ……！）

驚いてもう一度顔を上げると、男は今度は両頬を上げ先程よりずっと優しい顔でメルメルを見つめていた。

少し安心しかけたところに、「フーッ！」と激しく猫の威嚇する声が聞こえて、メルメルはハッと部屋の隅に視線を向けた。

「シャーー！」

ミミとシバが、黒い大きな犬に向かって毛を逆立て怒っていた。犬の方はというと――素知らぬ顔で横を向いている。

「まったく、とんだドラ猫共だ。入って来るなり、いきなりルーノに襲いかかって来やがった！」言葉の割には嬉しそうな顔をして男が言う。「このドラ猫どもはお嬢さんの飼い猫かい？　首輪をしていないから、ペットではないようだが……」

「ノラ猫なんです。……それよりおじさんは誰ですか？」

メルメルが逆に質問をすると、男は思い切り顔をしかめた。

「おじさんはないだろう！　そりゃあ、お嬢さんに比べりゃ……。まあ、いい。俺の名前はグッターハイムだ」

苦く笑いながら答えるのを聞いて、
（名前はさっきペッコリーナ先生が言っていたから知っているわ！）
どうやらメルメルは質問を間違えてしまったようだ。
部屋の隅では、二匹の猫にいつまでも威嚇され続け、うんざり顔の黒犬がまたシバを踏みつけて押さえている。よく見ればこちらは首輪をしているので、おそらくこのグッターハイムという男のペットなのだろう。
「グッターハイムさん、何故ワタシの家にいるんですか？」
「それは――」
「おじいちゃんはどこですか？」
本当は、最初からこれが聞きたかったのだ。グッターハイムは眉根を寄せて押し黙ってしまった。
「私も是非とも知りたいわ」
ペッコリーナ先生が言うと、グッターハイムは手でボリボリと頭を掻きながら、リビングを顎で示した。
「あれを見たろう？　ペッコリーナ」
「……ええ。でも、何故悪魔の兵隊が？」
「まずはこれを見てくれ」グッターハイムはおもむろに、懐から封筒を取り出した。
ペッコリーナ先生はそれを受け取り、中身を取り出して目だけ動かし読み始める。
「これを、プラムがあなたに？」
「そうだ」
大人二人のやり取りを黙って見ていたが、メルメルは段々我慢出来なくなってきた。
「ワタシにも見せて！」
ところが、ペッコリーナ先生はすぐに手紙を渡そうとはしない。

顎に指を当てて何か考えこんでいる。
「見せてやるがいいさ、ペッコリーナ」
「――でも」
「こうなっては隠し通す訳にはいかないだろう」
「……そうね」
メルメルには全く理解できないやりとりをして、まだ少し迷いながらもペッコリーナ先生はしぶしぶ手紙を差し出した。
妙な雰囲気にドキドキしながら、一体何が書いてあるのだろうかとメルメルは手紙をゆっくり開いてみる。

無敵の闇の軍隊を
まかす事が出来る
技法を編み出した
たいしょうに直接
に伝えたいので、
是非きてほしい。

確かにプラムじいさんの字ではあるが、メルメルにはその内容がさっぱり理解出来無い。二度読み返して、やっぱり訳が分からないので困り顔でペッコリーナ先生を見上げる。
するとペッコリーナ先生はうんうんと頷き、「メルメルには、訳が分からないでしょう?」
メルメルが無言で頷くと、ペッコリーナ先生はまた、うんうんと頷いた。
「メルメル。今からあなたには、とても難しい話をたくさんするわ。戸惑うこともあるかも知れないけれど、頑張って最後まで聞いてくれる?」
そんな言い方をされると、一体どんな話しをするのかと、メルメ

ルはいよいよ緊張してしまうのだ。
「そんなに堅くなる必要はない。こっちにおいでお嬢さん」
そう言いながらグッターハイムはソファーの脇に立って、手招きをした。
（そういえば、さっきあのあたりでペッコリーナ先生が何か……！）
歩いて行くと、突然、今まで死角になっていたソファーの影から人間の足の様な物が見えた。思わずメルメルは立ち止まって、それを凝視してしまう。
「大丈夫。もう動かないから」
ペッコリーナ先生に言われて、メルメルは恐る恐る近づいて行く。ソファーの影で人間らしきものが、体のあちこちから白い液体を流して仰向けに倒れている。その皮膚がボロボロでドロドロなのと、鼻を摘みたくなるような匂いを感じて、メルメルは、
（こ、これはもしかしてトンフィーが言っていた……）
「悪魔の兵隊だ。お嬢さんは初めて見るのかな？」とグッターハイムは軽い口調で言う。
メルメルが二、三歩後ろに引きながら頷くと、グッターハイムはまたニヤリと片頬を上げた。
「逃げなくたって大丈夫さ。もう死んでいる……と言うか、死んでいると言えばとっくの昔に死んでいるんだがな。これをごらん」
グッターハイムが悪魔の兵隊の脇に屈み込んで、革の胸当てを剥ぎ取った。下からはやはりボロボロでドロドロの素肌が表れ、その心臓のあたりの皮膚に、メルメルの拳くらいの大きさの青色の石が埋め込まれているのが見えた。
「これが『命の石』さ。ひびが入っているだろう？　おそらくどっかの誰かに魔法か何かでやられたんだな。こうなっては、こいつらはもう動けない」
メルメルは言われた言葉を理解するのに、しばらくは目をパチクリとしていたがふと気が付いて、パッと顔を上げた。

「ま、魔法か何かって、一体誰が？　大体、なんで悪魔の兵隊なんかが家にいるの？」
　頭のなかはハテナだらけで、爆発寸前だ。
「……ここからは少しだけ難しい話になる。まずはプラムの――プラムじいさんの秘密から話さなければならないな」
「秘密……」
「フギャーォ！」
　ミミが悲鳴を上げて皆驚いて一斉にそちらを見ると、ミミもシバと同じ様に黒犬の右足に踏み潰されたところだった。何とか逃れようと床に爪を立ててもがいている。左足の下ではすっかり諦めたシバがぐったりしていた。
「ククク……。ルーノ、離してやれ」
　犬は渋々と二匹を解放し、グッターハイムの脇に来て大人しくお座りをした。
「その犬はグッターハイムさんのペットなんですか？」
　メルメルが興味津々で言うと、犬は鼻を、「ハフンッ」と鳴らして、何だか不満そうにしている。
「クク……。確かに俺のペットだ。だが、犬じゃあない。……こいつは狼なのさ。名前はルーノルノーだ」
「ルーノルノー……」
　狼だなんて何だかとっても強そうだな～と思いながらじっくり見ていると、ミミとシバが性懲りもなくまた無謀な戦いを挑もうとするので、メルメルは仕方なく二匹を両脇に抱えた。
「しょうのない子達ね。あなた達の勝てる相手じゃないのよ！」
　二匹を胸に抱き抱えるとそれでやっと大人しくなって、メルメルにしがみつきながらルーノルノーをじっと見ている。
　グッターハイムはそんな二匹の様子を可笑しそうに笑って、
「静かになったじゃないか？　ノラ猫の割にはずいぶん懐いているな」
「おじいちゃんが毎日ご飯をあげてるから……」

――おじいちゃん、と口にすると、メルメルは何だか急に寂しくなって、しゅんとして涙ぐんでしまった。

「おいおい！　泣くなよお嬢さん！　何なんだ急に……」グッターハイムは大いに焦って、頭をバリバリッと掻いている。「何も、プラムじいさんが殺されたと決まった訳じゃないんだぞ！」

「……！　……ひっく」

これで遂に、メルメルは本格的に泣き出してしまった。

そもそもメルメルは、おじいちゃんが行方不明である事が悲しいだけで、殺されたかも知れないなんて思いつきもしなかったのだ。つまり、グッターハイムが慰めるつもりで言った先程の言葉は、まったくの逆効果になってしまっていたのだ。

ペッコリーナ先生はグッターハイムをギロッと睨んだ。

「もう！　あなたは少し黙っていてちょうだい！　私から話すわ」

「――う！」とグッターハイムは言葉に詰まって黙り込んだ。

ペッコリーナ先生は、今度はメルメルの方を向くと、とても優しい顔付きに変わった。

「大丈夫！　……大丈夫よメルメル。おじいちゃんは勿論、殺されてなんていないから大丈夫。とにかくソファにでも座って、少し落ち着いてお話ししましょう」

ペッコリーナ先生はメルメルの手を握り、ソファに座らせ自分もその横に腰掛けた。

グッターハイムは何だか所在なさげに突っ立っている。ソワソワと棚に置いてあるリンゴを持ったり置いたりして、ちらちらとメルメルの様子を窺っている。

「まずは、おじいちゃんの秘密から話さなければね。――秘密のお仕事から」

「グスン……秘密のお仕事？」

少し落ち着いてきてメルメルが問い返すと、ペッコリーナ先生は顎に指を当てて頷いた。

「そう。大切な……ね。えっと、メルメルは青暗戦争を知っているわね？」

急に全く関係なさそうな質問をされて、メルメルは戸惑ってしまった。

「えっ？　……えっと、暗黒王率いる闇の軍隊対、トキアの国の大臣達が中心になった正規軍の戦い……かな？」

今日、歴史の授業で復習したばかりなので、勉強が苦手なメルメルにも何とか答える事が出来た。

「そうね。……メルメルはまだ赤ちゃんだったから知らないでしょうけど、それはそれは恐ろしい戦いだったのよ。たくさんの人が殺されたわ……」

ペッコリーナ先生は悲痛な表情に変わった。

「――突然、どこからともなく現れた暗黒王なる謎の人物が、たくさんの兵隊を引き連れて、トキアの国の首都であるハルバルートを襲って来たの。始めは正規軍の方が優勢だったわ。首都ですもの。守りは強固だし、大臣達は国で一、二を争う魔法や剣の達人ばかりで、それぞれが率いる軍もとても強かったわ。都に住む人々や正規軍の兵士達もどこか安心していたの。どうせ負けるはずがないって……。ところがある時から急に、優勢だった正規軍が闇の軍隊に押され始めたの」

「分かったわ！　女王様を人質に取られたせいね！」

すっかり話に引き込まれていたメルメルは、興奮して思わず叫んでしまった。ペッコリーナ先生は冷静な顔で、ちょっと嬉しそうに頷く。

「大正解。さすがは私の生徒だわ。――暗黒王は女王様を人質に取り、女王様と黒の大臣の間に生まれたばかりの世継ぎ――つまり、お姫様を殺してしまったの」

「ひ、ひどい……」

「そうね……。そして、それからが本当の悲劇の始まりだった。闇の軍隊はその後、女王様を盾にされたせいでほとんど無抵抗になってしまった正規軍に、容赦なく襲いかかって行った――」

「……」

外ではいつの間にか雨がやんでいるのだろうか。家の中はとても静かだ。メルメルの腕の中で、ミミとシバは疲れて眠ってしまっている。

「大臣達も次々に倒れた。まず始めに橙の大臣が殺された。それと紫の大臣は、情け無いことに正規軍が劣勢と見るとすぐさま闇の軍隊に寝返ったの。そして遂に、女王様の右腕左腕とも呼ばれた白黒両大臣が殺された……。残った緑の大臣も、一人抵抗を続けたみたいだけれど、戦いの中で行方知れずになったらしいわ。おそらくはもう……ね。そして赤の大臣は遠征中で、残念ながら戦いには間に合わなかった。何せとても短い戦争だったのよ。たったの六日間で正規軍は負けてしまった。だから別名六日間戦争とも呼ばれているわね……」

「どうしてそんなにすぐ負けてしまったんだと思う？　初めは優勢な戦いだったにもかかわらず」

グッターハイムが突然話に割り込んできた。メルメルは首を傾げ考えてみる。

「女王様が――人質に取られたから？」

グッターハイムは大きく頷いた。

「その通りだ。だが女王を人質に取られたからといって、何故そんなに及び腰になる必要がある？　負けてしまえば大変な事だ！　国を奪われてしまうんだぞ！」

その迫力にメルメルがたじたじになっていると、見かねたペッコ

リーナ先生が助け船を出した。
「そんなに脅かさないでちょうだい」
「お、俺は別に脅してなんか……」
グッターハイムは再び口をへの字にして黙り込んでしまった。
「つまりねメルメル。女王様を殺されるということが、それだけトキアの国にとっては大変な事だったの。少なくとも大臣を含め、ほとんどの国民がそう思っていたわ」
「どうして？　一番えらい人だから？」
メルメルが言うと、ペッコリーナ先生は左右に黒目を動かし、言葉を探すように少し考え込んだ。
「えらい人だからと言うか……ちょっと違うわね。みんな、王族の血を絶やすのが恐ろしかったのよ。――何百年も前からの決まり事だったのだけれど、トキアの国では必ず王になるのは女性でなければならなかった。そして、その女王が死んだ場合は、その者に一番近く、濃い血の流れた者が次の女王にならなければならなかったの。あなたや、トキアの国を知らない子供達には理解出来ないでしょうけれど、王族以外の人間が王になるなんて私達には考えられなかったわ」
何だか難しくなってきたし、混乱し始めたメルメルに、今度はグッターハイムが助け船を出した。
「そんなに難しく考えなくてもいい。つまり国のみんなが、女王様の支配していたトキアは豊かで平和な国だったと思ってた事が分かればいい。それでみんな幸せだったし、いつまでもその幸せは続くと思っていた。要するに何が言いたいかというと、当たり前の事を失うことが、みんな怖かったんだと言うことさ。――女王様がいる当たり前の幸せ。メルメルだって、おじいちゃんがいるのが当たり前で幸せなのに、急にいなくなったら不安だろう？」
メルメルが目をパチクリしながら考えると、頭の中にプラムじいさんの暖かいニッコニコ笑顔が浮かんできて、それで妙に納得した。納得したけれどもそのせいで、再び涙が飛び出て来た。

「あ、あ、泣くな泣くな」グッターハイムはまた困って、額に汗まで浮かべている。

「だから、あなたは一言余計なのよ。とにかくメルメル、トキアの国にとって女王様というのがとても大切で、国の要になっていたのが分かったわね？」

メルメルは涙を堪えながら頷いた。

「ところが結局、暗黒王の手によって女王様は戦いの最後に殺されてしまったの。王族で生き残っていたのは、もう女王様ただ一人だけだった。暗黒王は全ての王の血を根絶やしにしてしまったのよ。国の要を失うということがどれだけ恐ろしい事かをみんなが思い知ったのは、女王様を失ったもっと後だったわ。あなた……大丈夫？メルメル」

メルメルは少し震えていた。雨に濡れて寒いせいもあったし、話の内容が恐ろしいせいもあった。

「ルルル～ラララ～、――炎よ灯せ！」

ペッコリーナ先生の魔法で、暖炉に火がついた。

「少し休憩しましょう。メルメル、濡れた洋服を着替えて来なさい」

メルメルは頷いて、寝ぼけているミミとシバをソファにそっと置いて立ち上がり、自分の部屋へと入って行った。そしてタンスから洋服を取り出し、着替えながら、

（やっぱりトンフィーに一緒に来てもらえばよかった……）

と泣きべそになりながら思っていた。一人ではあまりにも心細い。

メルメルは今までそれ程、暗黒王や滅ぼされたトキアの国について深く考えた事はなかった。何だか現実味が無いし、教科書の中の出来事、といった感じだった。何故なら都から遠く離れたこの田舎町には、暗黒王の支配も無ければ悪魔の兵隊もいない。トンフィーが悪魔の兵隊を見たと言う隣街でさえ遠く、車で一時間もあるという話だし、その街でさえ普段は闇の軍隊などはいないのだ。だから生々しくそんな話をされて、しかもそれが、まだ良く分からないけど、どうやら大好きなおじいちゃんと深く関わっているらしいと知

ってすごく怖くなってきたのだ。
メルメルが着替え終えて戻ってみると、すっかり部屋が暖かくなって、ポカポカココアの入ったマグカップがテーブルに置いてあり、気持ちの悪いあれは部屋から消え失せていた。
「少しは落ち着いた？」
ペッコリーナ先生に問われてメルメルが頷くと、グッターハイムが安心した顔でニヤリと笑った。
「泣きべそはもう勘弁してくれよ、お嬢さん」
「もう……大丈夫だわ」メルメルは全然自信がなかったけれども、とりあえず強がってみせた。そしてまどろんでいるミミとシバの横に座ると、「それじゃ、続きを聞かせて下さい」と精一杯大人ぶって言ってみせた。

レジスタンス　4

ペッコリーナ先生は少し青みがかった瞳でメルメルを見据え頷いた。

「ここからが肝心の話よ。さて、と……。――女王様を殺され、白黒両大臣も倒され、ハルバルートの都は完全に敵の手に落ちたのだけれど、残されたトキアの国の人々にはまだ一縷の望みがあったの」

ミミとシバがのそのそと起き上がって、メルメルの狭い膝の上に無理やり乗ってきた。しょうがないので両手で抱き止めて、二匹の一番大好きな首の下をコチョコチョしてやると、コロコロ言いながらまた寝息をたて始めた。そんな二匹の頭をペッコリーナ先生は撫でながら、

「トキアの国には、裏切り者の紫の大臣の他に、まだ一人だけ大臣が残っていたでしょう？」

「……赤の大臣？」

「そうよ。赤の大臣は隣の国との国境で起こった争いを沈めに遥か遠くまで行ってしまっていたんだけれど、知らせを聞いてすぐ取って返し、七日後にはハルバルートの都に戻って来たの」

「七日後……。間に合わなかったんだ……」

メルメルが溜め息混じりに言うと、今度はグッターハイムが話しを引き継いで語り初めた。

「都は落ちてしまったが、まだまだ諦める必要はなかった。赤の大臣率いる赤軍は、トキアの国で一番大きく強かった。赤の大臣自身も国で一、二を争うほどの剣士で、兵士たちの信頼もとても厚かった。赤の大臣が都に馳せ戻って行く途中には、逃げ延びた兵士や、各地で腕に覚えのあった者、果ては鍬をもった農家の親父まで、様々な人々が何とか赤の大臣の役に立ちたいと集まって来ていて、赤軍はその数が三倍にも膨れ上がっていた。そして赤の大臣は、途中で何度となく襲いかかってくる闇の軍隊をものともせず、勝利に勝

利を重ねていった――」

メルメルは結果が分かっているのに、何だかドキドキと期待してしまった。

「そして、トキアの国の人々の期待を一心に集めて、遂に赤の大臣がハルバルートの都にたどり着いたのだ……！」

ここで一旦グッターハイムは言葉を切った。そして深く溜め息を吐く。

「――ところがここで、戦局を変えるような重要な問題が起きた。実は赤の大臣自身も、その率いる赤軍も、都にたどり着く直前まで女王が殺された事を知らなかったのだ。女王が殺されたのは都にたどり着く前日だったし、都が落ちてしまったので、赤軍は正確な情報を得られなかったんだ。いざ戦に望むぞというところで、女王の死の知らせが届いてしまった……」

メルメルは不思議に思った。「それがそんなに重要なの？」

女王様が死んだのを知ったのは悲しいだろうけれど、戦いには影響が無い気がするのだ。

「そんなに重要だったのだ。その事にほとんどの者が気づかなかったがな……。それまで赤の大臣は皆にこう言って志気を高めてきた……女王を救い出すのだ！」

「……それなのに女王様が死んでしまっていたから、みんなガッカリして志気が落ちて、それで負けてしまったの？」

首を傾げながら聞くと、グッターハイムは目を閉じ黙り込んでしまった。メルメルは辛抱強く次の言葉を待った。すると突然目を開き、

「分からないのだ」

「え……？」

「お嬢さん、俺にも分からないんだよ。女王の死を知るまで破竹の勢いで勝ち進んできた赤軍が、あんなにもあっさりと負けてしまった理由が……」

遠くを見て、いかにもその時の情景を思い浮かべているといった

顔のグッターハイム。そんな、日に焼けた男の横顔を眺めながら、メルメルは話の内容とは関係ない事を考えていた。

――何故、この人はこんなに当時の事に詳しいのか？　教科書には乗っていないような事ばかりで、しかもまるでその目で見てきたように詳細な内容だ。

「私はこう考えたわ。つまりそれが、要を失うことの恐ろしさなのだと」

メルメルは、ペッコリーナ先生もまたしかりだと思う。

「とにかく女王様を失った後の赤軍はとてももろかったわ。そしてあっさり暗黒王率いる闇の軍隊に負けて、都で生き延びた者はほとんどいなかった……。みんな殺されてしまったわ……」

悲痛な声に、メルメルも何だか胸が苦しくなってきてしまった。

「その後はひどかった……。ハルバルートの都は完全に閉鎖されて闇の軍隊の人間以外はすべて追いやられてしまったの。暗黒王に逆らえばもちろん殺されてしまったし、ハルバルート以外の街や村も暗黒王に支配され、中には闇の軍隊に虐殺されたり、逆らって村ごと滅されたなんて事もあったわ……」

ペッコリーナ先生は言葉を区切って、グッターハイムの方を見つめた。

「彼の生まれた村もそうよ……」

グッターハイムは腕を組み、眉根を寄せて目を瞑っている。メルメルは何も言えなかった。ただ、何だかとても悲しくなってきてしまった。

「トキアの国は暗黒王が支配するようになってから、闇の王国と呼ばれるようになった。あれから十一年間、元からいたトキアの国の人々は闇の軍隊に監視されて、皆息を潜めて暮らしているわ」

「で、でもこの町は大丈夫よね？」とメルメルは恐ろしくなって聞いてみた。

「大丈夫……だったわ」

何とも煮え切らないペッコリーナ先生の言い方に、メルメルはと

てつもなく不安になってしまった。
「私達はここまで都から離れれば、きっと敵の監視から逃れられると思ったの。だから十一年前、青暗戦争で生き延びた人々と共に、マーヴェラ園長の故郷であるこの町で新しい生活を始めたのよ」
メルメルは驚いた。ということは……。
「先生達は、トキアの国の兵士だったんですか？」ペッコリーナ先生とグッターハイムを交互に見た。
「兵士だった者もいれば、そうではない者もいるわ。ただ共通しているのは、あの戦争の時にハルバルートにいた者達だという事ね」
「この町の人達みんな？　おじいちゃんも？」
メルメルはプラムじいさんからそんな話を聞かされた事はなかった。
「町の人達みんなではないわ。ほんの一部の人達よ」
「おじいちゃんは？」メルメルは食い入るようにペッコリーナ先生を見つめる。
するとグッターハイムがさらりと言った。
「プラムじいさんもそうさ。戦いに敗れ、我々と共に逃げ延びたんだよ。幼いお前を抱いてな」
メルメルは改めて驚いてしまった。
毎日、メルメルの為においしいパンを焼いてくれるおじいちゃん。頭を悩ませながら一緒に宿題をやってくれるおじいちゃん。
少し音痴だけれど歌が大好きで、いつもメルメルと一緒に歌ってくれるおじいちゃん。
ポカポカニッコニコ笑顔の、優しい、大好きなおじいちゃん。
そんなおじいちゃんに昔そんな出来事があったなんて、
（とても信じられないわ！）
「そんな話はまったく初耳だと言う顔だな。だがプラムじいさんの秘密はそれだけじゃない。――いよいよ本題だ」
メルメルはゴクンと唾を飲み込んだ。今日はどれだけビックリすればいいのだろう？　混乱して、頭が爆発してひつじマンになりそ

うだ。そしていよいよ話の続きをペッコリーナ先生が語り始めた。
「逃げ延びた人々は闇の軍隊に怯え、全てを諦めて暮らしているだけではなかった。その中には、闇の軍隊に友を殺されたり、家族を殺されたり、生まれ育った村を奪われたりして、怒りに魂を震わせる人達がいた。何とかトキアの国を取り戻したい……平和を取り戻したいと願う人達もいた。そんな人達の思いは寄り集まって、一つの共通した大きな目的に変わったわ。それは――闇の軍隊を討ち滅ぼし……そして――」
「暗黒王を殺す」
そう言ったグッターハイムの顔は、さっきまでよりずっと険しくて、メルメルにその真剣さが伝わってきた。この人達は本気なのだ。
「……レジスタンス？」
メルメルが呟くと、ペッコリーナ先生はビックリ顔になった。
「プラムから聞いていたの？」
「――違うわ。昨日の夜変な人が家に来て、おじいちゃんとお話ししていたの。詳しい内容は聞こえなかったけど、その人がボソボソとレジスタンスがどうのこうのって言ってたわ。そうしたら弓の授業の時、ピッピーがレジスタンスって叫んだから、何だか気になってて……」
ペッコリーナ先生は顎に指を当てて考えた。
「昨夜来た変な人も、たぶんレジスタンスの人間ね。近頃、闇の軍隊がこの町の近くまでやってきたりしていたから、潜伏している仲間同士で話し合っていたの」
「仲間同士って……おじいちゃんもレジスタンスなんですか？」
メルメルはついに我慢出来ずに聞いてしまった。本当は聞かなくても答えは分かっているのに、聞かずにはいられないのだ。
（やっぱり信じられないわ！）
そんなメルメルの気持ちを置いてきぼりにして、「そうだ」とまたあっさりグッターハイムは言った。
「暗黒王を倒すために集まった者達はレジスタンスとして各地に潜

伏して散らばり、こしたんたんと機会を窺っているんだよ。プラムじいさんもその一人だ。ペッコリーナも俺も、マーヴェラも」

「ドラッグノーグもね」

ペッコリーナ先生が言って、ちょっとメルメルは驚いてしまった。ペッコリーナ先生がそうなのだから、旦那様のドラッグノーグ先生もレジスタンスに決まってるんだろうけど、何だか凄く似合わない。そんな風に思っていると、

「まぁ、あれはあれで生意気に正義感のようなものを持っているからな」

少しおどけた感じでグッターハイムが失礼な事を言った。ペッコリーナ先生は別段怒るでもなく、同意するようにうんうん頷いている。

「おいおい、納得するなよ。私の旦那を馬鹿にしないで！　とか怒れよ」

「だってその通りなのよ」

メルメルは二人のやり取りが面白くて、つい笑いそうになったけれど、すぐに笑っている場合では無い事を思い出した。

「それで、おじいちゃんやみんながレジスタンスだって事は分かったわ。でも、でもそれとおじいちゃんがいない事と、どんな関係があるの？」

「そこで出てくるのが、この手紙だ」グッターハイムは先程の手紙をもう一度懐から出し読み上げた。

「無敵の闇の軍隊をまかす事が出来る技法を編み出した。たいしょうに直接に伝えたいので、是非きてほしい」

「たいしょうって、どういう意味なの？」

メルメルが首を傾げるとグッターハイムはそんな事も分からないのか、という様な顔をした。

「そりゃあ、たいしょうは大将――リーダーの事だろうから、俺の事だろうさ」

レジスタンス　5

さらりと言われたがメルメルはビックリして、目をパチクリパチクリさせてしまった。
「勿体ぶった妙な書き方だわ。……本当にプラムの寄越したものなの？」
「もしかしたら罠じゃないかって？　ちゃんと魔法で確かめたさ。俺だって不自然な気がしたしな。だが、確かにプラムの書いたものだった」
驚いて会話に集中出来ないメルメルをほったらかしにして、二人は話を進める。
「じゃあ、もしかしたらその秘密とやらを掴んだせいなのかしら」
「プラムは単独で敵に近づいていたんだろうか？　それで、レジスタンスの一員である事がばれたのか……」
メルメルはハッと我に返った。「ば、ばれたら、どうなっちゃうの？」
「……さて」グッターハイムは腕を組んで虚空を見ている。
嫌な感じだ。メルメルは三度泣きそうになる。悪魔の兵隊が来たのだ。死んでいた――もとい、動かなくなっていたけれど、只事ではない何かが起こったのだ。
グッターハイムから返事が期待出来そうもないので、メルメルはペッコリーナ先生に期待の眼差しを向ける。
「メルメル、落ち着いて聞きなさい」
改めて真剣な顔で言われると、メルメルはちっとも落ち着いて聞けそうもなくなってしまうのだ。
「おじいさんはね――」
ペッコリーナ先生が、遂に確信に触れそうになったその瞬間。窓の外から物凄い羽音が聞こえてきた。
「センセ！　センセ！　ヘンナヒト！　ヘンナヒト！　センセ！」

ピッピーが、がなりたてながら窓をくちばしで叩いている。ペッコリーナ先生は慌てて壁に立てかけてある弓に手を伸ばし、素早く――は出来なくて、もたもたと外に出ようとして、グッターハイムに先を越された。二人に続いてメルメルも外に飛び出すと、もう既にグッターハイムは百メートルくらい先を走っていた。その更に先に、背中を向けて逃げている兵隊らしき姿が見える。

「待ちやがれ！　この死にぞこないめ！」

兵隊との差をぐんぐん縮めるグッターハイム。ペッコリーナ先生は逆にどんどん置いて行かれてしまう。息も絶え絶えだ。

「ゼー、ゼー、だ、駄目……」

「ファイヤーボール！」

「駄目よグッターハイム！」

ペッコリーナ先生が叫ぶのと、グッターハイムが魔法を唱えるのは、ほぼ同時だった。逃げる兵隊は炎に包まれ、前のめりに倒れ込んでしまった。グッターハイムに続いてメルメルも兵隊に走り寄り、その姿をまじまじと見てみる。炎は既に消えてプスプスと煙をあげている。良く分かり辛いが、恐らくは今焼けただれてしまった訳ではなく、元からドロドロでボロボロの皮膚だったのだろうとメルメルは推測した。それを裏付けるようにグッターハイムが呟く。

「悪魔の兵隊だ」

「……やっぱり」

「命の石は火に弱いからな。こいつらにはこれが一番さ！」

グッターハイムは子供のように得意気に親指を立てている。

「ハーハー、バ、バカね！　どうして倒してしまったのよ！」

ペッコリーナ先生がようやく追いついて、グッターハイムを睨み付けた。

「何がいけないんだよ。まさかこいつを締め上げて、プラムの居場所でも聞き出そうってのか？　よせよせ。こんな奴らどうせ、あー、とか、うー、くらいしか喋れやしないぜ」

グッターハイムが呆れたように言うと、ペッコリーナ先生は無言

で悪魔の兵隊を指差した。その指の先には焼けただれて煙をあげている悪魔の兵隊の右手が。――いや、その手に握られほとんど燃え尽きかけている、紙切れを指しているようだ。

「――お！　お、お？」慌ててグッターハイムは紙切れを拾い上げる。

「何て書いてあるの？」

メルメルが聞くと、グッターハイムはなにやらばつの悪そうな顔をしている。

「爺は預かった」

「――！　そ、それで！」

メルメルは掴みかからんばかりだ。グッターハイムは頭をバリバリ掻いている。

「返して欲しければ……」

「か、返して欲しければ……？」

「……」

「……」

「ハァ……。燃えてしまったのね？」

ペッコリーナ先生は腰に両手を当てながら、目を細めてグッターハイムを見つめた。グッターハイムは眉をハの字にし、怒られた子供のような顔をしている。

「す、すまん……」

メルメルは、こんなリーダーでレジスタンスは大丈夫なのだろうかと余計な心配をしてしまうのだった。

「――さて、一体どうしましょうか？」ペッコリーナ先生は疲れた顔で呟いた。

すっかり日が傾いて、雨上がりで真っ赤に染まった空をきっといつもだったら美しく感じるのだろうけれど、今日は何だか妙に不気味に感じてしまうのだった。そんな空を見上げているとメルメルの不安は余計に膨らんでしまうのだ。

「いつまでもこうして途方に暮れていても仕方ないだろう。とりあ

えず家に戻ろう」
　自分の失敗もとりあえず置いておいてグッターハイムが言った。
「そうね……。これも片した方がいいわ。見て……」
　ペッコリーナ先生がチラッと目線で二人に合図をした。数軒先の家の窓から、ピンクのカーテンに隠れて人影がこちらを窺っているのが見えた。
「……まずいな」
「あの人はレジスタンスじゃないの？」
　ペッコリーナ先生は首を横に振った。
　確かあの家は、ペッコリーナ先生より縦に一回り小さく、横に二回り大きいルイーズという女性が、メルメルが物心ついた時からずっと一人で暮らしているはずだ。前にプラムじいさんと二人で、メルメルが後ろ向きで追いかけるというハンデ付き鬼ごっこ（近所の人が通りかかるとちょっと不気味でみんなビックリするんだ）をやっていた時も、今と同じようにカーテンの陰から通りを見ていた。
「残念ながら違うわ。この辺りはプラム以外にレジスタンスは暮らしていないの。――グッターハイム、上着を脱いでちょうだい」
「な、何でだよ？」
「いいから早く」
　ペッコリーナ先生に強く言われてグッターハイムは渋々と、まるでマントのように長くて袖も無いへんてこりんな上着を脱いだ。ペッコリーナ先生に渡しながら、
「いっちょうらなんだから大切にな……」
「勿論よ。――長くて丁度良いわね……」とペッコリーナ先生が満足そうに呟く。
　グッターハイムは何だか不安げな顔で、「丁度良いって、何が……」
「ルルル～ラララ～、――担架になれ！」
　ペッコリーナ先生がふわっと上着を広げながら呪文を唱えると、上着は悪魔の兵隊の下にスルッと入り込み、地面から数十センチ浮

き上がった。
「あああ～！」グッターハイムはそれを見て思わず悲鳴を上げた。
メルメルは少し可哀想になったけれど、たぶんペッコリーナ先生は、さっきの手紙を燃やしてしまったミスを、まだ密かに怒っているんだと思って、何も言わずに黙っている事にした。
「俺の大事ないっちょうらが～」グッターハイムは半泣きだ。
「大丈夫よ、洗えばまた着れるわ」とペッコリーナ先生は恐ろしい事を言っている。
ガックリと肩を落としたグッターハイムを引き連れて、メルメル達は家へと戻った。すると、庭に生えている柿の木の根元にメルメルが知らないうちに、いつの間にか大きな穴が開いていた。中にはさっき家の中にあった悪魔の兵隊の死骸（？）が転がっている。
ペッコリーナ先生が指を振ると上着の上の兵隊もコロンと落ちてその隣に並んだ。ペッコリーナ先生は魔法が解けて地面に落ちた上着を指先で摘んで、グッターハイムに差し出した。
「はい。ありがとう、助かりました」とニッコリと微笑む。
「……そりゃあどうも」
グッターハイムは上着を摘んで鼻を近づけ、ふんふん匂っている。しかめっ面をした丁度そこへ、
「メルメル！」
「――トンフィー！」

レジスタンス　6

トンフィーが肩で息をしながら走り寄って来た。その右の肩には自分の革の鞄を下げ、左の肩にはうさぎのアップリケのついたキルトの鞄を下げている。

「どうしたの、トンフィー！」

メルメルは嬉しくてトンフィーに駆け寄り両手を握った。しかしトンフィーは青い顔で固まって、メルメル、ペッコリーナ先生、グッターハイム、そして穴の中の悪魔の兵隊をキョトキョト繰り返し見ている。

「誰かな？　お嬢さんのボーイフレンドかな？」

グッターハイムはニヤリと片頬をあげ、ペッコリーナ先生はふぅと溜め息を吐いた。

「こ、こ、これはどういう事？　な、何で悪魔の兵隊が……」

「トンフィー、落ち着いて聞いて。あのね――」

「待ちなさいメルメル」

メルメルがトンフィーに事情を説明しようとすると、ペッコリーナ先生がきつい声でそれを制した。

「トンフィー……授業はどうしたの？　まだ終わっていないでしょう？」

それ程怒りを含んだ声ではなかったけれども、トンフィーは耳を真っ赤にしてしどろもどろに言い訳を始めた。

「あ、あのっ、僕凄く心配で、お昼休みが終わってもメルメルが帰って来ないから……その、お弁当も置きっぱなしだから……。お、お腹も、空いちゃうだろうしと……」

トンフィーの余りに動揺した様子を（だってトンフィーはメルメルと違って優等生だから、怒られた事なんてほとんどないんだ）グッターハイムは楽しそうにニヤニヤ笑って見ている。

「ククク、とんだ王子様の登場だな」

「だ、大丈夫メルメル？　おじいさんは無事だったかい？」
　トンフィーに心配そうに訪ねられて、メルメルはどこから話そうか迷ってしまう。メルメル自身もまだ頭の中がこんがらがっているのだ。しかもトンフィーが来てくれて、とても安心してまた涙が込み上げてきてしまったので、それを我慢していると余計に考えがまとまらないのだった。
「トンフィー、あのね」
「メルメル」ペッコリーナ先生が再び話を遮った。少し怖い顔をしている。「……トンフィー、メルメルが心配で授業を抜け出したのは大目に見るわ。でも、あなたはこのまま家に帰りなさい」
「せ、先生！」メルメルは不満の声をあげる。
「で、でも僕……」
「あなたに聞かせられる話じゃないのよ。あなたの優しさは十分分かってる。でもね――」
「いいじゃないかペッコリーナ」
　腕を組んで、ドアにもたれながら見守っていたグッターハイムが口を出した。足下にはいつの間にかルーノルノーが寄り添っていて、それに気が付いたトンフィーの肩が少しビクッとした。
「いいって、何がよ？」ペッコリーナ先生はとても不満そうだ。
「王子様にも聞いてもらえばいい。お嬢さんも一人じゃ心細かろうよ」
「私たちがいるじゃない」
「物知り顔の大人だけじゃ不安だろ。見てみろよお嬢さんの顔を。さっきまでよりずっと硬さが取れて、可愛さ百倍じゃないか」
　ペッコリーナ先生はメルメルの様子をチラッと見て、グッターハイムに視線を戻した。
「なるべく子供は巻き込みたくないのよ」
　怒っているというよりは、どちらかと言うと困った顔でペッコリーナ先生が言う。確かにトンフィーには迷惑な事かも知れない。悪魔の兵隊やら、レジスタンスやら、あげくには暗黒王まで出てくる

のだ。ただでさえ怖がりのトンフィーなのだ。メルメルは不安になってしまった。

「僕……巻き込まれてもいいです！」トンフィーがメルメルの不安を吹き飛ばすような大声で言った。

一瞬の沈黙。

「ガハハハハハ！　よく言った！　なかなかどうして見込みある男だ！」

グッターハイムは大爆笑している。ペッコリーナ先生はまだ渋い顔を崩さないでいる。

「諦めろペッコリーナ。どうせ今帰したところで、後でお嬢さんは全部喋っちまうだろうさ、クックックック」

ペッコリーナ先生は、ハフッと特大の溜め息を吐いた。「まったく……仕方ないわね」

トンフィーとメルメルは顔を見合せてニッカ～と笑った。

足元ではアケとシバが鼻面を合わせて挨拶をしている。グッターハイムのペット、ルーノルノーは呑気そうに欠伸をしているし、ペッコリーナ先生の肩に止まっているピッピーはミミにジッと見つめられて落ち着きを無くしていた。

「センセ！　センセ！　ギャギャ！　ヤダワ、ワタシッタラマタ……ギャギャ！」

「……とりあえず中に入ろう。じっくり作戦を練らなくちゃいけないからな」

「作戦？」

まだ詳しい事情を知らないから、トンフィーはきょとんとしている。しかしメルメルが手を引くと、首を傾げながらも大人しくついてきた。人も猫も狼もぞろぞろと家の中に入って行く中、ピッピーだけは見張りをする為か、あるいはミミが嫌なだけなのか、飛び去って行ってしまった。

家の中に入ると、メルメルのお腹がググ～ッと鳴った。しかし今日は誤魔化す気にも、ましてや歌う気にもなれなかった。

（こんな時でもお腹は空くのね）とメルメルは何だか悲しくなってしまった。

「お昼ご飯抜きですものね。何か作りましょうか？」

ペッコリーナ先生が言うとメルメルは寂しげに首を横に振った。

「ワタシは、おじいちゃんの作ってくれたお弁当があるから大丈夫です」

メルメルの代わりにグッターハイムがお腹をさすりながら、

「ペッコリーナ！　俺も朝から何も食べてないんだ」

「はいはい。それじゃ少し待ってね。すぐに作るから」

ペッコリーナ先生はキッチンに立ってさくさくと料理を始めてしまった。メルメルはそのポッチャリとした後ろ姿を眺めながら、見慣れない景色が不思議なような、プラムじいさんの後ろ姿を思い出して寂しいような気持ちでいた。

とりあえず、ペッコリーナ先生の入れてくれたポカポカジャスミンティーをみんなで飲みながら、メルメルは考え考え、分からない事はペッコリーナ先生やグッターハイムに質問しながら、トンフィーに経緯を説明した。そうしているうちに、メルメル自身もようやく状況を飲み込み始めていた。トンフィーは、戦争の話や暗黒王の話にはやっぱり恐ろしげに顔を青くしていて、話が終わった後もしばらくは茫然としていた。しかし少しすると震える手でメルメルの手を強く握り、珍しく固い声で言った。

「じゃあ、おじいさんを助けに行かなきゃ」

思わず、メルメルはハッとした。トンフィーがそう言うまで、その事には思いが至らなかったのだ。

（その通りだわ。助けに行かなくちゃ！）

「そうね。焼いてしまった紙切れには預かったとあったから、プラムは間違いなく生きているし、恐らくはどこかに捕らえている筈だわ」

ペッコリーナ先生が、出来上がったピラフのようなものを自分とグッターハイムの前に並べながら言った。

「そ、それじゃ早く助けに行きましょう！」
グッターハイムは、ピラフを無言でガツガツ食べ始めた。ペッコリーナ先生は全員分のスープをテーブルに並べていく。
「あり合わせで悪いけど、召し上がれ」
あっという間に出来てしまった料理にメルメルは少し驚いた。ペッコリーナ先生はプラムじいさんの半分の時間で料理を作ってしまった。グッターハイムはすぐさまスープをズズーッと飲んだ。
「なかなか美味いな！　さすがベテラン主婦だな」
「そう？　ありがとう」
大人二人の呑気な会話を聞いて、メルメルは逆に焦ってきてしまった。
「先生！　食べ終わったら、すぐ助けに行きましょうよ！」
ペッコリーナ先生は溜め息を吐いた。
「メルメル落ち着きなさい。助けるって言ったってどこに行くの？　まだ手懸かりが無さ過ぎるわ」
手懸かりと聞いて、とっとと食べ終わったグッターハイムがばつの悪そうな顔をしている。
「でも、早くしないと」
「そんなに焦らなくたって大丈夫さ。紙を燃やしちまった事は本当に申し訳ないが、あれにはこう書いてあった。――爺は預かった。返して欲しければ――続くのは、おそらく何らかの要求だろう。それならまた要求を出しにのこのこと向こうからやって来るさ」
グッターハイムが言うと、ペッコリーナ先生もそれに頷いた。
ところがここで、「そうでしょうか？」トンフィーが首を捻って言った。皆が一斉にそちらを見たので、少し耳を赤くしている。
「果たして、また要求を出しに来るでしょうか？　僕は少なくとも、直ぐには来ない様な気がします」
「何故だ？」グッターハイムは目を丸くしている。
「その敵っていうのがこの町にいるとは思えません。おじいさんがレジスタンスだと知ってさらったのなら、この街には、他にもたく

さんのレジスタンスが潜伏しているという事を知っていたでしょう。その可能性が高いと思うんです。それならそんな危険な町に隠れたりはしないでしょう。悪魔の兵隊みたいな目立つ存在が、コソコソ隠れていられるとも思えないし……。だから遠くにいるなら、こちらに要求が伝わって無い事も、直ぐに向こうには分からないじゃないですか」

トンフィーがまるで、授業で問題に答える時みたいにハキハキと発言すると、グッターハイムは何故か愉快そうな顔になった。

「確かにな。だが、いずれは気付くさ。手紙を渡しに行った兵隊がいつまで経っても戻って来ないんだ。そりゃあそうだ。俺が奴を焼いちまったんだからな。おかしいと思って、そのうち様子を見にやって来るさ。そうすりゃあ、そん時こそ、そいつをふん捕まえて……」と指をポキポキと鳴らした。

「それじゃあいくらなんでも呑気過ぎですよ」

トンフィーが突っ込むと、グッターハイムは少々鼻白んでしまった。

「何でだよ？　焦ってもしょうがないだろ。手懸かりもないんだ。いや、そりゃあ俺が悪かったけど……。でも、時には待つことも戦いには必要なんだ。果報は寝て待てと言ってなー」

「善は急げとも言います」

さすがにグッターハイムはムッとした顔になった。トンフィーはその様子に少し怯んだが、珍しくめげなかった。

「あ、あの、ゆっくりしていると、要求に答える気が無いんじゃないかと思われるのが心配なんです。あげくには、悪魔の兵隊を一人倒してしまったし……。こ、交渉が決裂したなんて思われたら、おじいさんの身が危険になってしまうと……」

思わず、その場にいる全員がハッとした。メルメルはドキドキしてきてしまい、じっとして居られなくなって立ち上がった。

「そうよ！　急がなくちゃ！」

興奮して叫ぶと今度はトンフィーが慌てて、メルメルを止める様

に手を広げた。
「急ぐって言っても、手懸かりがないと……」
メルメルはムッとした。「何よ！　それじゃあ、結局急ぎようが無いじゃない！」
八つ当たりだと分かっていながらも、ついメルメルは怒鳴ってしまった。勿論泣き出す寸前だ。
「まぁまぁ、お嬢さん落ち着いて。だが確かに坊やも悪いぜ。それじゃあ、不安をかき立てただけさ。俺たちだって情報集めくらいはする。だが無闇に焦るなと言っているだけだ」
ペッコリーナ先生がメルメルの隣に座って頭を撫でながら慰めている。ついに泣き出してしまったのだ。
「ピンクのカーテンの人です」トンフィーが、メルメルの様子を気遣わしげに見ながら言った。
「何だって？」
「さっきメルメルが説明してくれた、ピンクのカーテンから覗いていた人です。ルイーズさんだっけ？」
後半はメルメルに向かって言った。しかしメルメルは何となくトンフィーに対して拗ねていたし、怒鳴ってしまったせいでちょっぴり気まずくなっていたので返事をしなかった。代わりにペッコリーナ先生が、
「確かそうね。ルイーズさんがどうしたの？」
トンフィーはメルメルに無視されて、かなり動揺してしまった。
「め、メルメルは前にも覗いてたって言っていたけど、僕も見たことがあるんだ。い、いや、見られた事があるのか……。しかも何回も。メルメルの家に遊びに来る度だから、それこそ本当にたくさん」
グッターハイムは思わず呆れ顔になった。「そりゃあ……怖いオバハンだな」
「いつもピンクのカーテンからコッソリだから、メルメルは気付かなかったかも知れない。つまり、ルイーズさんはいつも同じように通りをコッソリ覗いているんだ」

耳を真っ赤にして一生懸命言うのを聞いて、ようやく皆は、トンフィーの言いたい事が分かってきた。ペッコリーナ先生は誇らしげな顔で我が生徒を見ている。

「僕が聞いてきます。先生やグッターハイムさんでは、余計な事まで勘ぐられてしまうかも知れないし、警戒されてしまうかも知れない。子供の僕が聞いた方が、変に疑われないと思うんです」

確かにもっともだ。大人二人はまさに顔負けといった様子でトンフィーを見つめている。

「ワタシも行くわ！」

メルメルが勢い込んで立ち上がった。トンフィーは少しの間メルメルをじっと見つめた。

「……そうだね。メルメルのおじいさんの事だもんね。よし、一緒に行こう」と言うなりトンフィーもすっくと立ち上がった。

「おお！　ちゃんと姫を守って来いよ王子様！　頼りにしてるぜ」

グッターハイムも立ち上がってトンフィーの背中をバン！　と叩くと、トンフィーは思わずヨロヨロとよろけてしまった。

「守るも何も直ぐそこに行くだけよ。でも気を付けてね。もう敵は近くにいないと思うけど、一応用心して……」

ペッコリーナ先生が言うと、やや緊張しながら子供二人は頷いてドアを開け、外に出た。

レジスタンス　7

二人が通りを歩いて行くと、ミミとシバが素早く前に立ち、チリチリと鈴を鳴らしながらアケが後ろから追い越して行った。
トンフィーが、黙ったままアケのピンと立った短い尻尾を見つめていると、
「……さっきはごめんねトンフィー」メルメルが俯きながら小声で言った。
まだ怒っているのかと少し心配していたので、トンフィーはとてもホッとした。
「謝る事無いよ。メルメルはとっても不安なのに、僕、デリカシーが無かったよ」そうしてトンフィーはニッコリ笑って、メルメルの手を握った。「おじいさんを必ず助け出そうねメルメル」
メルメルはようやく顔を上げてこっくり頷いた。普段トンフィーは少し頼り無いけど、時々とってもお兄さんになる時があるのだ。実際、トンフィーはメルメルより一つ年上だった。
手を繋いだまま目的の家の前にたどり着いた。緊張の為に、その手がかなり汗でビチョビチョになってしまったけれど、それでも二人とも手を離さないままでいた。トンフィーが手を繋いでいない方の手で呼び鈴を押す。
チリリ〜ン
「メルメル。質問は僕がするよ？」
相手が出て来るのを待っている間にトンフィーが言うと、メルメルは黙って頷いた。
呼び鈴を押してかなり経っても返事が無いので、トンフィーがもう一度押そうかと手を伸ばした、その時、
「誰？」と不意にドアの向こうでかん高い声がした。
「あの、僕ら近所の者ですが、ちょっとお聞きしたい――」
トンフィーが全部言い終わらない内にドアが勢いよく開いた。中

から現れたのは、上から下までピンク色のものを身にまとって、何やらブクブク……いや、ビクビクしている女性だった。
「な、何よあんた達……あ！　あんたあのじいさんのとこの……」
ピンクおばさんはメルメルを見て目を丸くした。その様子を見てトンフィーは心の中でガッツポーズをした。
「そうです。プラムじいさんのところのメルメルです。僕、その友達なんですけど……おばさん、おじいさんがどこに行ったか知りませんか？」
「……」ピンクおばさんは青ざめて黙り込んでいる。
「家に帰ったらいなくて……。待ってても帰って来る様子が無いんです。おじいさんは、メルメルが帰って来る時間に家を空けるなんて無い事だから、僕らとっても心配で……」
ピンクおばさんは、メルメルの泣きはらした目を見て勝手に納得したようで、少しだけ哀れんだような顔をしたが、すぐに固い表情に戻ってしまった。
「何か知りませんか？」
「し、知らないわよっ」
目はあっちこっちさ迷っているし、体はソワソワとぎこちなく動き続けているし、はっきり言って挙動不審そのものだ。トンフィーは思いきった作戦に出る事にした。
「……実は、妙なんです」
「みょ、妙って何が？」とピンクおばさんはまんまと食いついてきた。
「……どうしよ。いや、でもな……」
トンフィーがいかにも言いづらそうにしていると、ピンクおばさんは興味津々で身を乗り出した。
「だからっ、何よ！　早く言いなさいよ！」
「……実は、家の中がやけにグチャグチャになっていて、しかも……」
ピンクおばさんはトンフィーに掴みかからんばかりに近づいて来

た。「し、しかも何？」
「……」
今やピンクおばさんの顔とトンフィーの顔の距離は数センチの所まで近づいていて、メルメルはトンフィーがピンクおばさんに食べられてしまうんではないかと心配をした。
「実は、そのぉ……」
「も、もしかして、は、羽か何か落ちてた？」
トンフィーは、（……羽？）と内心、不思議に思ったがそれは顔には全く出さずに、
「どうして知ってるんですか？」
と言ったので、メルメルは隣で聞いていてビックリして目が飛び出してしまった。
ありがたい事に、ピンクおばさんはそんなメルメルの様子には全然気づかずに、一人腕を組んで妙に納得していた。
「やっぱり見間違いじゃなかったんだわ！」
「何か見たんですね！」今度はトンフィーがピンクおばさんに食い付かんばかりだ。
「……ハゲタカよ」
メルメルもトンフィーも思わずきょとんとしてしまった。「ハゲタカ？」
「そうよ！　人間より大きいようなハゲタカが――ハゲタカだったのかしら？　何だか少し違ったような……」ピンクおばさんは首を捻っている。
「あの、ハゲタカがどうかしたんですか？」
メルメルが焦れてきて声を掛けると、ピンクおばさんは直ぐに我に返った。
「そう！　そのハゲタカみたいなのが、あんたのとこのじいさんを掴んで飛んでいったのよ！」
「――！」
メルメルもトンフィーも驚いてしばらく声が出なかった。信じら

れないような話しだ。もうすでに信じられないような話しのオンパレードだから、二人とも信じちゃうけれど、それにしてもハゲタカにさらわれたと聞けば驚いてしまう。

「ほ、他には、何か見ませんでしたか？」

トンフィーが更に聞くと、ピンクおばさんは首を捻った。

「小さくて良く見えなかったんだけど、何だかハゲタカの後ろを猫みたいなのが二匹追いかけていたような……。あ、そうそう、こんなような茶色の……」ピンクおばさんはミミとシバを不思議そうに見つめている。「あら、ちょうど二匹ね」

ミミとシバは人間のやり取りにはまったく興味なしで、アケを交えてじゃれあっていた。

「そのハゲタカは、どっちに飛んで行きましたか？」

トンフィーが問い掛けるとピンクおばさんは二匹から視線を戻して、西の方を指差した。

「向こうの方よ」

二人がピンクおばさんが指差した先を見ると、真っ直ぐ伸びた道は三百メートル程で緩くカーブしていて先が見えなかった。

「あの先は分からないわ。見えなくなってしまったから。もっと高く飛んでいれば見えたんだろうけど……」

トンフィーは腕を組んで少し考えてみた。――あのカーブを曲がると、町外れまで大して距離が無い。そこまでは細い路地以外は真っ直ぐ一本道のはずだ。ここから一番近い隣街は東から出た方向にあって、トンフィーもそちらには行った事があるが、西側の道は使った事も無いし最終的にはどこに繋がっているのかも知らない。分かっているのは、町を出てすぐ丘があり、その向こうに西の森と呼ばれている深い森が広がっているという事くらいだ。人より大きいようなハゲタカが翼を広げれば、細い路地は飛べないだろう。ならば行き先は町外れで、更にはその先の西の森に向かったに違いない。

トンフィーは大体の行き先の検討をつけた。

「ね、ところであんた達。さっき、そっちの方で何か見なかった？」

ピンクおばさんは、こことメルメルの家の間の辺りを指差した。
「遠目だったから良く見えなかったし、まさかと思うけど……。人が、燃えたように見えたのよ……。あんた達、見なかった？」
メルメルは思わずハッとした。さっきグッターハイムが悪魔の兵隊を魔法で倒した時の事を言っているのだ。
「えっ、えっと――」
「突然燃え上って倒れて……。その後、人が何人かで囲ってた様に見えたのよ。……あれ？　もしかしてあんたもいなかった？」ピンクおばさんはメルメルを指差した。「ちょ、ちょっと！　何かあったんじゃないの？　なになに、特別な事？　知ってるんなら教えなさいよ！」
メルメルは焦ってしまった。話してはいけない事の様な気もする。でも、ピンクおばさんは興味津々で、上手く誤魔化せる自信が無いのだ。
「分からないな。僕ら今帰って来たから……。それじゃあ、色々ありがとうございました」
トンフィーはメルメルの手を引いて、とっとと帰ろうとする。
「あ、ちょっとあんた何よ！　本当に何も知らないの？　待ちなさいよ！　こら！」
ピンクおばさんはしつこくしてくるが、トンフィーは完全に無視する事に決めたようだ。ところが、
「まだ他にも見た事があるのよ！」
トンフィーとメルメルが慌てて振り向くと、ピンクおばさんはニヤっと笑った。
「……本当ですか？」
二人を引き止める為の作戦かとトンフィーは疑っている様だ。
「あんた何疑ってんのよ！　本当よ」
「何を見たんですか？」とトンフィーはまだ疑惑の眼差しでピンクおばさんを見ている。
「――馬に乗った大男よ……！　ギラギラと派手な鎧を着てさ…

…。しかも背中におっきな斧を背負ってて……。さすがのあたしも恐ろしくなって……。あんた達が来るまで、ずっと布団被って震えてたわよ……！」

ピンクおばさんの話し方のせいもあって、メルメルもトンフィーも恐ろしくなってブルブルっと震えてしまった。

「斧を背負った大男……」

レジスタンス　8

その後、ピンクおばさんのしつこい質問攻撃を振り切ると、家に戻るまでの間にトンフィーはメルメルに言った。
「メルメル。戻っても今の話をペッコリーナ先生達にはしないで」
メルメルはきょとんとした。「どうして？」
トンフィーは何か考えているらしく一点をじっと見つめながら、ぽつりと呟いた。
「メルメルはおじいさんの事を助けに行きたい？」
「もちろんよ！」
唐突な質問にもかかわらずメルメルは大きな声で即答する。トンフィーは、そんなメルメルを見て頷いた。
「だよね。僕も付いて行きたい。おじいさんが心配だし、何よりメルメルが心配だもの」
メルメルは嬉しくて、キラキラとした目でトンフィーを見つめた。
「だからトンフィーって大好きよ！」
トンフィーは耳を赤くしながら頭を掻いている。
「いや～、そんなぁ……。――あ、そうそう。だからねメルメル、僕らがおじいさんを助けに行くには、すぐにあの二人に情報を渡しちゃ駄目なんだ」
またメルメルはきょとんとしている。「どうしてよ？」
「たぶんおじいさんを助けに行くのに、ペッコリーナ先生は僕らを連れて行ってはくれないと思うんだ」
「どうしてよ！」とメルメルは思わず興奮する。
「子供だからさ。予想だけどね。だから、さっきの情報を交換条件にするんだ。連れて行ってくれなきゃ教えない」
この言葉にメルメルは驚いてしまった。
「すごいわ！　トンフィーってビックリするような事考えつくのね！」

「……凄くずるいかも知れないけど。仕方ないよね……」
少し落ち込んだようなトンフィーに、メルメルは励ますように繋いだ手を振った。
「ずるくなんてないわ！　トンフィーはワタシの為に考えてくれたんでしょ？　ありがとうトンフィー。やっぱり天才ね！」
メルメルが言うと、トンフィーは少し元気を取り戻したらしく再び頭を掻いている。
「そ、そ～かな～」
「でも、いいの？　きっと、ペッコリーナ先生怒るわよ？」
メルメルが心配そうに言うと、トンフィーはスッと背筋を伸ばし、眉毛をキリリッと上げて男らしい顔で前を向いた。
「怒られるくらいどうって事ないさ！　メルメルの為だもん！」
その、いつになく頼りがいのあるかっこいい姿に、メルメルは思わず惚れ惚れしてしまったのだった。

ところが……。

「そんな小狡いやり方をどこで覚えて来たの！　絶対、ぜぇ～ったい、連れて行きませんからねっ！」
今までに無いほどのペッコリーナ先生の怒りように、トンフィーはすっかりビビって縮み上がってしまっている。
「あ、あのっ……。――でも」
それでもメルメルの手前、しどろもどろになりつつも一応抵抗を心みるが、まったくペッコリーナ先生は聞く耳を持ってはくれない。
「素直に連れて行って欲しいと言うならともかく、連れて行かなきゃ聞いてきた事を教えないですって……？　バカにするのも大概にしなさい！」
トンフィーは泣き出しそうな顔になっている。「ば、バカにしているわけじゃ……」
「そうよ！　トンフィーはバカにしてなんかいないわ！　だって…

…じゃあ、素直に言ったら連れて行ってくれた？」
　見かねてメルメルが加勢すると、更にペッコリーナ先生は怒りの炎を全開にした。
「連れて行ってくれる筈がないでしょう！」
「ほら！　だからトンフィーは――」
「だから、そんな狡賢い手を思いついたって言うの？」
　トンフィーはいよいよ小さくなってシュンとなった。それを見てペッコリーナ先生は少しだけ声のトーンを抑えた。
「大体そんな危険な事に、子供を参加させられるわけがないでしょう？　それに敵がどこにいるか分からないのよ？　探して回れば、長い旅になる可能性だってあるわ。あなた達には授業があるの。休んじゃ駄目よ」
「先生にだってあるわ」
　とメルメルは負けじと言った。それが余計にペッコリーナ先生の怒りを買ってしまった。
「先生の変わりに勉強を教える大人は他にもいるわ！　でも、あなた達の変わりに勉強不足を補える子供はいないのよ！」
「勉強、勉強って、おじいちゃんを助けなきゃいけないのに、勉強どころじゃないじゃない！」
　ペッコリーナ先生はすぐには反論せず、ひたとメルメルの顔を見つめた。そして静かな声で言った。
「子供に一体何が出来るって言うの？」
「そ、それは……」
　今のメルメルには一番堪える言葉だった。メルメルだって自分が役に立つとは思ってないのだ。ただ、家でじっと待つだけなんて我慢ならないだけなのだ。
「連れて行けばいいじゃないか、ペッコリーナ」
　ここで思わぬ助け舟が出た。それまで成り行きを黙って見守っていたグッターハイムが、突然口を開いたのだ。
「……何言ってるのよ」

ペッコリーナ先生の怒りの矛先は、グッターハイムにも向かった。
「こいつらはただおじいさんを助けたい一心なのさ。連れて行ってやりゃあいい」
グッターハイムが軽い調子で言うから、余計にペッコリーナ先生は怒りのボルテージがどんどん上がってきてしまった。
「無責任な事言わないでちょうだい！」
「だけどメルメルのじいさんの事だ。メルメルには参加する権利があるだろ」
メルメルもトンフィーも調子に乗ってうんうん頷いている。ペッコリーナ先生はそんな二人に恐い目を向けた。
「この子達はまだ子供だから正しい判断が出来ないのよ。私達大人がきちんと導いてあげなければ駄目なの。ましてやこの子達は私の教え子よ？」
「そうは言うが、園だって未来を担うレジスタンスを育成する為に作ったもんだろうが。卓上で学ばせるよりも、実践させた方がよっぽど勉強にだってなるさ」
メルメルとトンフィーは驚いて顔を見合わせた。二人とも幼い頃から通っていたが、園にそんな意味があるなんて知らなかった。
「あなたや他の人がどう考えているか知らないけれど、私はそんなつもりは無いわ。私はあくまでこの子達に色々な事を学んで貰いたいだけ。暗黒王の息のかかって無い場所で真実を学ばせたいだけ。そして大人になった時、選ぶ道が何であっても構わないわ。それがレジスタンスでなくてもね」
「――暗黒王の兵でもか？」
グッターハイムとペッコリーナ先生はしばし見つめ合う。
「……真実を知った上での判断なら、構わないわ」
「暗黒王の兵隊になんてならないわ！　ワタシはレジスタンスに入るもの！」

レジスタンス　9

勢いに乗ってついメルメルが言ってしまうと、グッターハイムは一瞬目をしばしばさせた後、大声で笑い出した。

「いい度胸だお嬢さん！　ペッコリーナ先生のおかげで立派な判断が出来るようになってるじゃないか！　ガハハハハハハ！」

嬉しそうなグッターハイムとは正反対に、ペッコリーナ先生はとても嫌そうな顔をしている。

「子供だから良く分かってないで言っているだけよ。でなきゃ戦争も経験していないのに、レジスタンスに入るなんて考えるわけないわ。遊びじゃないのよ」

ペッコリーナ先生の馬鹿にしたようなセリフを聞いて、メルメルは思わず怒りで震えた。

「ちゃんと分かってるわ！　大好きなおじいちゃんをさらったのは悪魔の兵隊なのよ！　レジスタンスに入る理由なんて、それだけで十分よ！」

余りの怒りに、メラメラと瞳の中の炎を燃え上らせているメルメル。その様子を見て、皆思わず息を飲んで黙ってしまった。沈黙の後、グッターハイムが静かに口を開いた。

「大人だからって正しい判断が出来るわけじゃない。子供にだって選択の自由はあるだろ。学ばせると言うなら、別に園でなきゃいけない理由は無い。戦いの中でだって学ぶ事は出来るさ……」

ペッコリーナ先生は顎に指先を当てて考え込んでいる。メルメルもトンフィーも期待の眼差しでその顔を見つめた。しかし、

「承諾出来ないわ。戦いの中で学ぶ事なんて限られているもの。ちゃんと園に通って、もっとたくさんの事を学ぶべきよ。おじいちゃんは必ず私達が救い出すから、安心して待っていなさい」

メルメルは大いにがっかりしてしまった。昔みたいに、地面に寝転がって両手両足をバタバタ（それにはプラムじいさんはいつも参

って根を上げてたんだ）させたいくらいだった。
さすがにそれはやらないにしても、メルメルは最後の抵抗を心みた。
「お願いよ先生。おじいちゃんを助け出したら、また園に通ってちゃんとお勉強するから！」
ペッコリーナ先生は無言で首を横に振る。メルメルは、さすがにこれは無理そうだと諦めて溜め息を吐いた。横を見るとトンフィーは相変わらずしょげてシュンとしていた。ペッコリーナ先生はそんなトンフィーの様子をちらりと見て、それから何かにふと気づいた様に窓の外に視線を移した。
「すっかり暗くなってしまったわね。あなたはもう帰りなさい。私が送るわ」
トンフィーは慌てて、「え、で、でも僕……」
困った様な顔で見つめられて、メルメルは諦め顔で首を横に振った。トンフィーはがっくりと肩を落とした。
「ごめんねメルメル……。僕、何だか余計な事しちゃって……」
「いいのよトンフィー……。ありがとう」
ペッコリーナ先生がそんな二人の背中を、優しくポンポンと叩いた。
「ほら！　そんなしょげないのよ。おじいちゃんの事は私達に任せて。おじいちゃんが帰って来たとき、素敵な笑顔で迎えてあげなきゃ駄目でしょう？　ほら、二人とも笑って！」
メルメルもトンフィーも、ちょっと無理やりに口の端を上げてみた。
「それにね、こう見えても私達ってとっても強いのよ！」
悪戯っぽくウインクしながら言われて、メルメルは無理やり上げた口の端がヒクヒクしてしまった。
「さ、帰るわよトンフィー」
「あ、僕……一人で帰れます。すぐ近所だから……」
そう言いながらトンフィーは肩を落としたままで玄関に向かった。

「あら大丈夫？　気を使わないでいいのよ？　久しぶりにソフィーの様子も見てみたいし……」
「でも、先生が来たら母さん何事かと思ってしまうから。最近、余り具合も良くないし、心配させたくないんです……」
ペッコリーナ先生は心から心配そうな顔をしている。
「そう……。それじゃあ気を付けて帰ってね。前にも言ったけれど、何か困った事があればすぐに言うのよ？」
トンフィーは一瞬だけ泣きそうな顔になったが、すぐ笑顔になって頷いた。ドアを開ける寸前で振り返り、メルメルの顔をチラッと見る。
メルメルは――何故かキラキラと瞳を輝かせていた。
トンフィーは一瞬驚いてしまったが、何事もなかったかのような顔でドアを開け外に出た。二匹のトラ猫とじゃれ合っていたアケが気付いて、置いて行かれてなるものかと慌てて飛んで来るのを待ってから、「それじゃあ、さようなら……」と少し寂しそうに言ってドアを閉めた。
（ソフィー母さん具合が悪いのね……。それじゃあトンフィー大変だわ。普段だって食事や洗濯や掃除をほとんど一人でやっているのに。やっぱり誘っては駄目ね……）
メルメルはしばらくぼんやりとトンフィーの消えたドアを眺めていた。
「王子様は帰っちまったか……。たくっ、いい加減頑固だな、ペッコリーナ先生は」
「頑固じゃなきゃ、教師なんて務まらないのよ」ペッコリーナ先生は悪びれもせずそう言って、今度はメルメルの方に顔を向けた。「さて、さっき仕入れて来た情報を聞かせて貰えるかしら？」
メルメルはそう言えばそもそもその情報とやらを隠した為に、大目玉を食らったのだという事を思い出した。小さく溜め息を吐いて、仕方なく先程ピンクおばさんから聞いてきた、ハゲタカやら斧を背負った大男やらの話を二人に聞かせた。するとああだこうだと、大

人二人は頭を突き合わせて相談を始めた。
「……少し疲れちゃったから、お部屋で寝ても良いですか？」
しばらくしてメルメルが言うと、ペッコリーナ先生は哀れんだ目をこちら向けた。
「色々あったものね……。あったかくして、ゆっくりお休みなさい」
「お休みお嬢さん。夜泣きするなよ」
二人に頷いて見せて、メルメルはソファーから身を起こし自分の部屋へと向かう。部屋のドアを開けようとした時、ふとドアの横に置いてあるテレビに目がいった。
（しばらくミラークルクルマンも見られないわね……）
などと考えながらドアを開けると、足元をピューっとミミとシバが通り抜けて行った。二匹はメルメルより先に部屋に入ると、すぐさまフカフカベッドの上で、気持ち良さそうにコロコロ転がった。
メルメルも部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。
「まるで飼い猫じゃない！　一緒にお布団で寝る気なの？」
ベッドにボフンっと横たわり、ミミとシバを抱きしめながら目を瞑る。
「……ハー。本当に疲れちゃった。出来ればこのまま、あなた達と眠っちゃいたいくらいだけど……」
しばらくそうして黙った後、メルメルはパッと目を開いた。その大きなクリクリの目はキラキラと光り輝いていた。
「行かなくちゃ！」

レジスタンス　１０

メルメルは生まれてこの方、夜、一人で外を出歩いた事など一度も無かった。

花火をしに行く時も、ホタルを見に行く時も、アケが迷子になってトンフィーが泣きべそでやって来て、一緒になって探してあげた時も、いつもプラムじいさんが一緒だった。

メルメルは生まれて初めての、一人きりの夜の町を走りながら、街灯の灯りが浮かび上がらせる自らの影の不気味さや、ザワザワと、わずかの風に思いの他大きな音を立てる木々の囁きや、そこかしこの、家と家の間から出て来そうな見えない何かに怯えていた。

もしも遥か前方に、メルメルを導くように走る二匹の茶トラの猫がいなければ、窓からコッソリ抜け出してきた部屋に逆戻りしていたかも知れない。

そして遂に、ほとんど行った事すらない町外れまでたどり着いたところで、メルメルは一度足を止めた。――くるりと後ろを振り返る。

（駄目ねメルメル。何を期待しているのよ……）

しかし、遠くからこちらに向かって駆けて来る足音がしないか、つい耳をそばだててしまう。残念ながら自分の息づかいの他には何も聞こえてこなくて、メルメルは少し肩を落としながら再び歩き始めた。重い脚を引きずるようにしながら、ゆっくりと、小さな丘を登って行く。丘の頂きに一本の大きなモミの木が町を見下ろすように生えており、今はその根元で、ミミとシバが行儀良くお座りをして待っている。メルメルはモミの木までたどり着くと、もう一度だけ、と自分の町を振り返った。自らの家が見えて、大好きなプラムじいさんの顔が浮かぶ。

（必ず助け出すからね！　おじいちゃん……）

おそらくまだメルメルが部屋からいなくなっている事に、ペッコ

リーナ先生とグッターハイムは気付いていないだろう。
今度は、少しメルメルの家から遠くの方に視線を伸ばすと、トンフィーの家の黄色い屋根が見えた。灯りが消えているところを見ると、トンフィーも母親のソフィーも、既に眠ってしまっているようだ。
（仕方ないわよ……）
メルメルは溜め息を吐き、町に背を向ける。そうすると今度は、終わりの見えない深い深い森が目の前に広がった。園で噂されているところによると、この西の森には、何だか恐ろしい生き物達が住んでいるとかいないとか。
（……迷信だわ）
そう思いながらも、メルメルは西の森に入ろうなどと考えた事は、一度もありはしないのだ。
夜で一層おどろおどろしい森を見つめているうちに、メルメルはある失敗に気付いた。上から見下ろしてみると、森の中をクネクネしながら一本の道が走っているのが分かる。しかし、木々に遮られて道は途切れ途切れに見えたり隠れたりしている。ここは遮るものが無いから、月明かりのおかげで足元も良く見えるけれど、
（しまった。灯りを持ってこなかったわ……）
しかし、今から部屋に戻ればさすがに見つかってしまう可能性が高いだろう。少しの間メルメルは逡巡していたが、諦めてトボトボと森に向かって丘を下り始めた。
チリリリン……
聞き慣れた鈴の音が聞こえた気がして、メルメルは慌てて後ろを振り返った。月がモミの木の真後ろにあるせいで、木のこちら側がまっ暗闇で見えない。
「……」
メルメルがじっと目を凝らしていると、徐々に小さな人影が現れて、次第にその輪郭がはっきりして来た。そして、
「メルメル！」

「トンフィー！」
木の下からトンフィーが現れて、こちらに向かって駆け寄って来た。
「ニャ～ン」鈴をチリチリさせながらアケも追いかけて来る。
「トンフィー、ど、どうして？」
トンフィーは少し興奮して、耳を赤くしている。「僕も行くよ」
トンフィーはメルメルよりも先に来ていて、ずっと待ってくれていたのだ。その事に気付いてメルメルは涙目になる。
「でも、でも……」
「おじいさんを助けに行くんでしょう？　メルメルだけじゃ心配だもん」
メルメルはとても嬉しくなって、ついトンフィーに抱きついてしまった。しかし、すぐに重要な事を思い出して体を離した。
「でも駄目よ。ソフィー母さんを一人には出来ないもの……」
「大丈夫さ！　母さんにはちゃんと事情を説明したもの」
メルメルは唸った。
「でも、具合、良くないんでしょう？　トンフィーはそばにいなくちゃ駄目よ……」
メルメルがそう言うと、トンフィーはいたずらっぽくニッと笑った。
「具合が悪いなんて嘘さ。逆に、最近はすごく調子が良いんだ。さっきはああでも言わないと、ペッコリーナ先生が付いてきそうだったからね。そんな事になったら、母さんとペッコリーナ先生は久々のお喋りに花が咲いて、僕はいつまでも家を抜け出せなくなると思ったんだ」
トンフィーはいつもメルメルの考えの及ばないような事ばかり考えている。改めてメルメルは感心してしまうのだった。
「じゃあ……、本当に一緒に来てくれるの？」
メルメルが上目使いに聞くと、トンフィーはニコッとして頷いた。
「もっちろんさ！　――大体、メルメル君。君は灯りさえもお持ち

じゃ無いんじゃないかね？」
おどけた調子で、トンフィーは遠足用の大きなリュックからランプを取り出した。
「だからトンフィーって好きよ！」
トンフィーが頭を掻いてひとしきり照れている間に、メルメルは大きなリュックの中身を覗いてみた。雨具、ロープ、ナイフ、小さなお鍋、お米、キャットフード、暖かそうな上着がちゃんと二人分入っている。そして呆れた事に、
「トンフィーったら、教科書まで持って来たの？」
「そりゃそうだよ。毎日少しは勉強しないと。勿論メルメルも一緒にね」
「うへぇ」
メルメルが舌を出すとトンフィーはクスクス笑った。
そうして二人は手をしっかり繋いで、森に向かって歩いて行く。
メルメルの足取りは先程とは打って変わって、とても軽快なものになっていたのだった。

ミラークルクルマン　1

森に入るまではビクビクしていたけれど、いざ入ってしまえば、トンフィーは隣にいるし、小さなアケはちょこちょこチリチリとついて来るし、少し先をミミとシバが可愛いお尻を揺らして歩いているし、メルメルはち～っとも怖くなんてなくなってしまったのだった。だが、

「め、メルメル！　今あの木の影に、な、なにか……」

ありもしない影に、トンフィーはビクビクドキドキ怯えている。

「大丈夫よトンフィー。何もいないわよ」

ランプの灯りを頼りに、メルメルはトンフィーを励ましながら一本道をどんどん進んで行く。丘の上から見ていた時は途切れ途切れでも道は見えていた。ところが、実際に森の中から見上げてみるとほとんど空は見えず、月明かりもまったく届きはしなかった。ランプが無ければ前に進む事も出来なかっただろう。それでも、手元の明かりが不気味に照らし出す木々の影には、トンフィーでなくとも確かに何かが潜んでいそうな気がするのだ。

バサバサバサ！

「わ！　わ～」

「鳥の羽ばたきよ。大丈夫。フクロウか何かでしょ」

メルメルの言葉を裏付けるように、ホー、ホーと聞こえてきた。

「ね、トンフィー、歌でも歌いましょうか？」

「う、歌？　――そ、そうだね。何の歌？」

メルメルは首を捻って少し考える。

（……そうだ。あの歌にしよう）

「よく覚えてないんだけど、おじいちゃんが好きだって言ってくれた歌があるの。一生懸命思い出すから、ワタシに続いて歌ってくれる？」

「オッケー！」

メルメルはおぼろげな記憶を懸命に呼び起こし、スーっと息を吸い込んだ。

（おじいちゃんと二人で楽しく歌ったのが、もう遠い昔のよう……）

メルメルはしんみりしてしまった気持ちを吹き飛ばすように、大きな声で歌い出した。

「ググーッとモーニングおじいちゃん♪」「ググーッとモーニングおじいちゃん♪」

「ググーッとモーニングおばあちゃん♪」「ググーッとモーニングおばあちゃん♪」

「ニャ～」タイミング良くアケが鳴いた。

「朝は健やか楽しいな～♪」「朝は健やか楽しいな～♪」

「ウニャ～」今度はシバがタイミング良く鳴いた。

「晴れたらとにかく嬉しいな♪　ほっ」メルメルはクルッと回った。

「晴れたらとにかく嬉しいな♪　やっ」トンフィーもクルッと回った――が、躓いた。

「猫も楽しげ～に歌っているよ～♪」

「イタタタ。ね、猫も楽しげ～に歌っているよ～♪」

メルメルは大満足で、嬉しそうに手を叩いた。「結構覚えているものね！」

トンフィーも大分緊張がほぐれたらしくニコニコしている。「良い歌だね～」

「でしょ！　よ～し、二番も作っちゃお」

「作る？」

メルメルは不思議顔のトンフィーをよそに、調子に乗って二番を歌い始めた。

「ググーッとモーニングお母さん♪」「ググーッとモーニングお母さん♪」

「ニャ～ン」

「ググーッとモーニングお父さん♪」「ググーッとモーニングお父さん♪」

「朝はご機嫌嬉しいな～♪」「朝はご機嫌嬉しいな～♪」
「雨ならすこーし淋しいな♪」「雨なら――」
「フー！」ミミがタイミング悪く威嚇した。
「すこーし淋しいな♪　……」
メルメルとトンフィーは思わず顔を見合わせた。
「フー？」
二人とも、ハッとして前を見る。
ミミとシバが、体の毛も尻尾の毛もパンパンに膨らませて、前方の暗闇を睨んでいた。トンフィーとメルメルの足の間では、小さなアケが更に小さく縮こまっている。トンフィーはアケを抱き上げた。
「――め、メルメル」
「何かしら……」
メルメルはランプを高く掲げたが、暗闇の向こうに何かいるのかどうかは確認出来ない。しかしミミとシバのただならぬ様子から、何かがいるのは確かなように感じられた。
「グゥゥ……」
暗闇の向こうから、ドミニクのペットのサーベルのような低い唸り声が聞こえた。トンフィーの肩がびくりと震えて、メルメルのこめかみから汗が流れ落ちた。
（み、見えないから余計に怖いだけよ！　案外、アケなんかと大して変わらない大きさかも知れないわ……）
メルメルもトンフィーもお互い肩がぶつかるほど寄り添っていた。トンフィーは足がガクガク震えているようで、その振動が伝わってくると、メルメルは自分も一緒に震えているのかどうかも分からなくなってしまうのだった。
「へ、平気だよ……。いざとなったら、僕の魔法で……」
この言葉にメルメルは淡い期待を抱いた。そしてふと気付く。
（そうだ。いざとなったらワタシも戦わなきゃ。何か武器になるような物……）
メルメルはキョロキョロと目玉だけを動かして辺りを探す。目的

の手頃そうな棒切れが、右手の奥に見えた。
「グルルルル……」

ミラークルクルマン　2

闇の奥にいる何かは、少しずつ近づいて来ている。――声が、大きくなったのだ。

「ニャワワワォ～ン！」

ミミが喉の奥から威嚇するような大きな声で鳴いた。その時遂に、光の届く場所に大きな顔がぬっと現れた。

期待を裏切って闇の奥から登場したのは、アケの十倍以上はありそうな生き物だった。その見覚えのある姿にメルメルは驚いて悲鳴を上げた。

「――ウンピョウ！」

前にドミニクが飼っていた、野生のそれ、だ。

「ガルウウウ～……」

ウンピョウはギラギラした目でこちらを見ている。足元で生意気に、「フガー！」などと威嚇している二匹のトラ猫なんて、まったく眼中には無いようだ。

ペットとして調教されている訳ではないのだから、当然ウンピョウにしてみればメルメル達なんて、ただの『餌』くらいの物だろう。少しずつ――近づいて来る。

ウンピョウがミミの存在を完全に無視して、その脇を通り過ぎようとした、その時。

「ミギャー！」ミミはビヨーンと飛び上がり、その大きな背中に爪を立てた。

「グガオー！」ウンピョウはすぐさま振り返り、ミミめがけて鋭い爪の生えた前足を振り下ろす。それをミミは寸でのところで左に避けた。

「ミミ！」

このままではやられてしまう。小さいから素早いとはいえ、もし爪の先でも引っかかってしまえばイチコロだろう。メルメルの背中

を冷や汗が流れ落ちていく。
　再びウンピョウが前足を振り下ろし、いよいよもって寸でのところでミミは後ろに避けた。しかし避けた場所は木の根がはびこっていて足場が悪く、次の攻撃がきたら上手く逃げられそうにもない。ウンピョウは勿論手を抜くことなく、すぐさま前足を高く振り上げた。
「ウニャオォォ！」
　ウンピョウのお尻にシバが頭から飛び込んだ。はね飛ばされてコロンと転がる。ウンピョウは振り向きざま、シバに向かって前足を振り上げた。シバは僅かに身じろぎして逃げようとしたが、
（――間に合わない！）
「ファイヤーボール！」
　火の玉がウンピョウ目掛けて飛んでいった。しかしウンピョウは俊敏な動きでそれを避けてしまった。
「ファイヤーボール！」
　再びトンフィーが魔法を投げつけている間に、メルメルは素早く棒切れに飛びついた。
　武器を手にして振り向くと、トンフィーの投げた当たり損ねのファイヤーボールがあちこちに燃え移り、辺りはすっかり明るくなってしまっていた。ウンピョウは怒りで、いよいよ牙を剥いていて一層恐ろしく、ミミの攻撃もシバの攻撃もまったく効いている様には見えない。こうなったら頼りはトンフィーの魔法だけ。ところが、
「ファイヤーボール！　……あ、あれ？　ファイヤーボール！　あ、あらら？」
　トンフィーの手の先からは、マッチの火くらいの玉しか出てこない。どうやら魔力切れのようだ。
「わ！　わ～、わ～」パニック状態で足踏みしているトンフィーに、ウンピョウはギラリと目を向けた。
（も、もう駄目よ！　助けて神様――）
　ウンピョウがトンフィーに歩み寄って行く。メルメルは棒切れを

振り上げた。
「やー！」
バコッ！
「グウ！」
見事にヒットしたが、ダメージは期待出来そうにない。
「グワ～！」ウンピョウが大きな口を開けて吠えた。

（助けて――おじいちゃん――先生――グッターハイムさん――助けて――助けて――ミラークルクルマン！）

「ニャーニャーニャーニャー！」

「……？」
それは、とても不思議な光景だった。
ミミとシバが後ろ足で立って、両手を高く掲げていたのだ。メルメルもトンフィーも一瞬恐怖を忘れて、思わず目が点になってしまった。
「ニャーニャーニャーニャー！」
ミミとシバは必死で鳴きながら、両手を交互に繰り返し掲げている。
「な、何？」
「グウ……」
心なしか興を削がれたような顔のウンピョウが、ミミとシバにゆっくり歩み寄って行く。そして前足を大きく振り上げた。
「ニャーニャー――ニャ！」
二匹は慌ててウンピョウの攻撃を逃れる。
「イヤー！」メルメルは棒切れを振り上げ、背後からウンピョウに襲いかかった。
「グガオー！」ウンピョウの爪がメルメルの棒切れを弾き飛ばしてしまった。

（助けて！）

「ニャーニャーニャー！」

ミミとシバは再び二匹並んで後ろ足で立ち、先程と同じように両手を交互に掲げた。

（こ、このポーズは……！　――わ、分かってるけど、でも……そんな……そんな）

再び、ウンピョウが大きく前足を振り上げた。しかし、何故か二匹とも避けようとしない。

「ニャーニャーニャー！」

「ウガー！」

「み、ミラークルクル！　ボルディーにな～れ！」

ピッカー！

ミミとシバが眩い光に包まれて、メルメルも、トンフィーも、アケも、ウンピョウも、余りの眩しさにきつく目を瞑った。――そして、ゆっくりと瞼を開く。

そこには、茶色に黒い斑模様の大きな犬が二匹いた。

ミラークルクルマン　3

メルメルとトンフィーは口をポカンと開けた。思わずウンピョウへの恐怖も吹き飛んでしまう。

突如として現れた同じ姿をした二匹の犬は、お互いを確かめるかのように鼻面を合わせてフンフンしている。

「グゥゥ……」

ウンピョウだってビックリしているに違いないのだ。しかし取りあえずは、新しく現れた先程までより厄介いそうな敵を警戒しているようだった。

（ミミとシバが、へ、変身したの？）

自分で、「ボルディーになれ！」なんて叫んでおいて、メルメルは今一信じられないでいる。二匹の犬の回りに、小さな茶色の影がないか思わず探してしまう。ところがそんなメルメルの隣では、

「す、すごい！　ミラークルクルマンみたいだ！」

トンフィーは何の疑いも持たず、すっかり感動して瞳を輝かせていた。

「ミラークルクルマン……。ミミとシバが……」

メルメルが相変わらず状況を忘れて茫然としている間に、戦いは再開されようとしていた。

「ガウゥゥ……」

自分より体は小さいけれど相手は二匹である。ウンピョウはすぐには攻撃を仕掛けず、耳を伏せて体勢を低くしながら、ミミとシバであろう犬の回りをゆっくりと歩き始めた。

「ワウゥ～！」

鼻面を合わせていた二匹もようやくお互いの確認が出来たようで、戦闘体制に入った。メルメルとトンフィーもその姿を見てようやく我に返り、どちらからともなく手を繋いでゆっくりと後ろへ下がった。

パチパチと火の粉がはぜる中、二匹の犬とウンピョウは瞳の中に炎を宿しながら、牙を剥いて向かい合った。

「頑張れ！　ミミ、シバ……」

そっくりすぎてどっちがどっちか分からないけれど、二匹に向かってトンフィーは祈るように言った。

「大丈夫よ！　ボルディーは強いもの！」と、メルメルはまるで自分に言い聞かせているようだ。

「ワオーン！」

片方のボルディーが遠吠えのように鳴き、ウンピョウはそれに誘われたように飛びついた。

「グワー！」

ウンピョウは鋭い爪を振り下ろす。しかしそれを、犬とは思えぬ素早さでボルディーはひらりと避けた。その隙に、もう一方のボルディーは急いでウンピョウの後ろに回りこむ。

「ガウガウ！」

向かい合った一匹が素早く飛び交って、ウンピョウの前足の付け根辺りに噛みついた。

「グワー！」ウンピョウは大暴れするが、相手はまるでスッポンのように離れない。

「ガウワ～！」

猛り狂ったウンピョウが口を大きく開けて、その恐ろしく鋭い牙を犬の首目掛けて突き立てようとした。

「ワオオオーン」

後ろに回りこんでいたもう片方が、ウンピョウのお尻目掛けて体当たりをかました。ウンピョウは思い切りはね飛ばされ、木にドカンとぶつかって倒れた。

「ガルルルル」

キバを剥きながら、二匹の犬はウンピョウににじり寄って行く。

ウンピョウは慌てた様子で起き上がると、身を翻して脱兎のごとく逃げ出してしまった。

「ガウワウ！」
片方のボルディーが逃げるウンピョウを追いかけようと走り出した。それを見て、慌ててメルメルは叫んだ。
「ダメよ、ミミ！」
するとピタッと停止し、耳だけをこちらに向けてピクピクさせている。
「もう十分よ。無理に追いかける事ないわ」
ミミボルディーは名残惜しそうにウンピョウの消えた闇を見つめている。
「――おいで！　ミミ、シバ！」
メルメルがパンパンと手を叩いて呼びかけると、戦いが終わって少しぽやっとしていたシバボルディーが駆け寄って来た。
「ワウ～ン！」尻尾を振りながら、猫のように体をこすり付けてメルメルに甘えている。
「ワフワフ！」ミミボルディーもウンピョウを追うのは諦めて駆け戻って来た。
「二匹とも、えらかったね！」
メルメルがギュッと抱きしめてやると、二匹は嬉しそうに尻尾をブンブンと振った。
「すごいや！　ウンピョウを追っ払っちゃった」
トンフィーはアケを抱き締めながら、感心した目で二匹を見ている。
「それにしても驚いちゃった！　ね、あなた達どうして変身なんて出来るようになったの？」
メルメルは二匹の目を覗きこんだ。相変わらず嬉しそうに尻尾を振るばかりで、何を言われているのかは全く理解出来ていないようだ。変身した事の他に特別な変化は無いのかも知れない。
「今まで変身した事はないの？」
トンフィーが聞くとメルメルは思わず笑った。
「当たり前じゃない。変身なんてしたら、すぐにトンフィーに知ら

せに行くわよ」
「そっかぁ……。でも、本当に不思議だね～」トンフィーは目をパチクリしながら首を捻っている。
「何がなんだか訳が分からないわ……。でも、おかげでとっても助かった」
不思議顔のメルメルとトンフィーをよそに、二匹はまるで猫のように前足で顔を洗ったり、お腹をなめて毛繕いしたりしている。姿は変わらずボルディーのままだ。
「……やっぱり、ミラークルクルマンのように三十分すると自然に元に戻るのかな？」
丁度メルメルが考えていたのと同じ事を、トンフィーが口にした。変身の法則はミラークルクルマンと一緒なのか？　――だとしたら、三十分後に自然に戻る以外にも、自分で元の姿に戻る方法もある。
「ミラークルクル！　元通りにな～れ！」
「クワ～」ミミボルディーは間抜け顔で大欠伸をした。
「……ダメみたいね」メルメルは首を横に振る。
「やっぱり――ヤーヤーヤー！　がないと駄目なんじゃない？」
トンフィーが両手を交互に掲げながら言うと、メルメルはそれを見て頷いた。
「この子達の場合は――ニャーニャーニャー！　だけどね。きっとそうね。あのポーズとかけ声がポイントなんだわ」
メルメルが人差し指を立てながら言うと、トンフィーはふと思い出して噴き出してしまった。
「ププー！　さっきの、ミミとシバのかっこ！」
メルメルも、後ろ足で立って両手を掲げたミミとシバの姿を思い出し、トンフィーと一緒になって笑い出した。
「アハハハ！　笑っちゃ可哀想じゃないトンフィー！　この子達のおかげで助かったんだから～」
「め、メルメルだって笑っちゃってるくせに～！　クックック」
「アッハッハッハ！」「ハーッハッハッハッ！」二人ともお腹を抱

えて笑っている。
　ミミとシバはその間、知らん顔でアケを交えて追いかけっこをしていた。
「ひ～ひ～！　――で、でも心強いね。ピンチの時は正義の味方が助けてくれるもの」
　メルメルは笑い過ぎて出てきてしまった涙を手で拭った。
「そうね！　ミラークルクルマンならぬ、ミラークルクルにゃんがね！　フフ……」
　思う存分笑って、元気も勇気も百倍になったメルメルとトンフィーは、再び手を繋いでまるでスキップするように歩き出した。後ろからのほほんとミミボルディー、シバボルディーが、そのまた後ろからチリリンと、アケが慌ててついて来る。
「ググーッとモーニングおじいちゃん♪」
「ググーッとモーニング……」

「グッとモーニング♪　……あふぁ」

トンフィーが大きな欠伸をした（だってちっともモーニングな時間じゃないんだ）。ミミボルディーとシバボルディーは前に立ってずんずん一本道を進んで行く。森は相変わらず暗く不気味で、闇の奥からたまにカサコソッと生き物の気配はするし、いつものトンフィーなら呑気に欠伸をするなんてあり得ないんだけれど、今は二匹のボルディーの力強い後ろ姿に勇気づけられとっても余裕しゃくしゃくなのだ。ところが、

ピカー！

「――！」

二匹が光り輝き、余りの眩しさにメルメルも、トンフィーも、アケも目を瞑る。

「戻っちゃった……」

目を開けると、茶トラの猫が二匹、何事もなかったかのように可愛いお尻を揺らして前を歩いていた。

「やっぱり、きっかり三十分だ」胸ポケットから懐中時計を取り出してトンフィーが呟く。

メルメルはすっかり感心して、溜め息交じりに呟いた。

「本当にミラークルクルマンと同じなのね……」

その言葉に、トンフィーはハッという顔になった。そして見る間にその顔が青くなる。

「って事は……。もしかして、あと、十五分は変身出来ないのかな？」

ミラークルクルマンの場合、三十分の変身の後は必ず十五分間休憩しないと、次の変身は出来ないのだ。

「きっとそうでしょ。ここまでミラークルクルマンと同じなんだから。……あ！」

「えっ！　な、な、なにっ？」
メルメルの驚いた声に、更に驚いたトンフィーがメルメルにしがみ付いて悲鳴を上げた。
「……どうしよう」
メルメルは腕を組んで前方を見据えている。びくびくとトンフィーも前に視線を移した。
「あらら……」
困ったことに、なんと道が二つに別れてしまっているのだ。今までずんずんと進んでいたミミとシバも、右に行こうか左に行こうか迷ってウロウロしてしまっている。
「……困ったね」
今まで何とはなしに、ずっと真っ直ぐ進めばいいと単純に考えていたところがある。それに、道案内するかのようにミミとシバが前に立って歩いていたから、勝手に付いていけばプラムじいさんの所にたどり着けるような気がしてしまっていた。
「ね、トンフィー……、どっちに行く？」
そんな事聞かれても、トンフィーにだって決められはしないのだ。二人して腕を組んで、頭を右に左に傾けて悩んでいると、
ガサゴソガサガサガサ！
「ひえ～」トンフィーが情けない声を出した。
また闇の奥から何か現れそうな気配だ。まだ――十五分経っていないのに。
「こ、今度は何よ！」メルメルはランプを高く掲げた。すると、
「にゃ～ん」ミミとシバより少し小ぶりの、薄い茶トラの猫が現れた。
「ニャ！」ミミとシバが駆け寄る。
「な、何だ……。はーっ。猫か……」
トンフィーは心からホッとしている。ところが、森の奥から再び、
ガサガサガサガサ！
「わ、わ、わ～」

またまた情けない声のトンフィー。しかしメルメルはちっとも慌てていないのだ。

今までの感じだとミミやシバ、アケでさえも警戒するべき相手とその必要の無い相手を素早く察知した反応を見せている。今回は完全に呑気顔だ。

「ミャ～！」

メルメルの想像通り、まったく無害そうな、アケより大ぶりで白い所の多い三毛猫が現れた。

「ミャ～、ミャ～ン。ミャミャ～ン」

三毛猫――ユトロニャーオはすぐさま、薄茶――アーチャの隣に寄り添って、まるで何かを伝えるかの様に鳴いている。

「ミミとシバのお友達かしら？」メルメルは首を傾げた。

「――あ！　あの三毛猫、僕らの町の子だよ！　ウチの庭でアケと追いかけっこしてたもん」

それなら、やっぱり友達なのだろうかとメルメルは考えた。猫達は可愛い顔を突き合わせて、まるで相談でもしているようだ。

「ニャ～ン」

話し合いが終わったのか、薄茶のアーチャが分かれ道を右手の方に歩いて行った。その後ろを三毛猫のユトロニャーオが付いていけば、ミミとシバも二匹に続いて歩き始める。

「あらら？　あっちに行くんだわ……」メルメルとトンフィーも慌てて追いかける。

「まるで、道案内をしてるみたいだね……」

アケも混ざって、猫五匹が前に立って尻尾を振り振り歩く姿は、なんとも言えず愛らしい。

「もしかしておじいちゃんの行き先を知っているのかしら？」

トンフィーは大きく頷く。「きっとそうだよ。ミミとシバだって、園までメルメルを呼びに来たくらいだもん」

確かにその通りだ。メルメルは思い出していよいよ不思議に感じてしまった。

「私達を道案内してくれたり、変身して助けてくれたり……。猫って不思議ね」
「猫って言うか、この子達が不思議なだけな気もするけども……。そうだ！　変身と言えば……」
懐中時計を取り出し、トンフィーはホッとしたように溜め息を吐いた。おそらく十五分経ったのだろう。そんな様子をメルメルはちょっとだけ呆れたように横目で見る。
「トンフィーったら……。いざとなったら魔法で助けてくれるんでしょ？」
「とほほほ。メルメルったらそんな意地悪言わないでよ……」
情けない顔のトンフィーを見てメルメルはクスクス笑う。
「冗談よ。ワタシだってウンピョウ相手に何も出来なかったもの。ミミとシバがいなかったらどうなっていたか……」ブルブルっとメルメルは震える。
「そうだね……。ね、次はミミとシバに、ウンピョウに変身してもらわない？　きっとボルディーより強いと思うよ」
トンフィーが人差し指を立てながらグッドアイデアとばかりに言うと、メルメルはニヤッと笑った。
「ウンピョウも良いけど、ワタシもっと良いのを思いついたのよ。多分ウンピョウより強いわ」
「そんな強い相手と戦った事あるっけ？」
ミラークルクルマンは一度戦った事のある相手にしか変身出来ないのだ。首を傾げるトンフィーを見て、メルメルはニヤっとした。
「コテンパンにやられたけどね。グッターハイムさんのペットのルーノルノーよ！」
「あ！　あのすごく大きな狼！」
メルメルは腰に手を当て、どうだという顔をした。トンフィーは目を輝かせた。
「強そう！　確かに絶対負けなさそう！　――あ、また分かれ道だ……」

またまた道が二つに分かれてしまっている。しかし先頭に立ったアーチャは迷わず左手の道を選んだ。

「みんな頼りになるな～」

トンフィーは嬉しそうに手を叩いている。まったくその通りだとメルメルも頷いた。しばらくそうして黙って猫達の後を付いて歩く。幾つかの分かれ道にもまったく立ち止まる事無く、五匹と二人はどんどん西の森を奥深くまで入って行った。

そうして、もうかれこれ二時間近く歩いただろうか？　森はやたらと静かで、チリリン、チリリンとアケの鈴の音ばかりがやたらと響く。

「ふぁ～」先程からやたらとトンフィーの欠伸の数が増えてきた。

「あ、あふぁ～」つられてメルメルも大欠伸をする。

目をこすりながらトンフィーは時計を取り出した。「もう、一時をまわったよ」

メルメルも時間を聞いて余計に眠くなってきてしまった。猫達はさすが夜行性と言うべきか、疲れと眠気で足の鈍くなってきた人間二人を置き去りにしてしまいそうな程スッタカスッタカ歩いて行く。

「ふぁ～」チリリン「あふぁ～」チリリン「ふぁ～」チリリン「ふぁ～」「あふぁ～」

「ふぁ～……？」

アケの鈴の音が止まった。

ガサガサ！

闇の奥に、今度こそ猫ではない大きな生き物の気配がする。

「な、な、何だろ？」

メルメルは再びランプを高く掲げた。「心配ないわよ……。ルーノルノーになれば何が来たって」

トンフィーは頷きながらも不安げな様子だ。猫達は毛を逆立てて、

皆一様に興奮している。
「フギャーオォ！」「ミギャーォ」「カー！」五匹がそれぞれに唸り声をあげて威嚇している。
ガサガサ！
サッっとアーチャとユトロニャーオが森の奥に逃げて行った。ミミとシバだけは戦闘体制を崩さないが、アケは這うようにしてトンフィーの足元まで戻って来てしまった。トンフィーが抱き上げてやると、ブルブルと震えて爪が食い込むほど強くしがみついてくる。先程ウンピョウが出て来た時より、明らかに怯えている様に感じる。そんなアケの様子にメルメルとトンフィーも段々恐ろしくなってきてしまった。
「さ、さっきみたいに、ちゃ、ちゃんと変身してくれるかな？　ぼ、僕もそろそろ一回くらいは、魔法を使えるかもしれないけど……」
トンフィーが舌をもつれさせながら言うと、メルメルもいよいよドキドキしてきてしまった。今度も、一応武器になるものを探してキョロキョロと目を動かしたが残念ながら石ころくらいしか見当たらない。
「いっそ、もう変身してしまえばいいのに……」
メルメルは本当にミミとシバがもう一度変身してくれるのか、とても不安になってきた。
「ミミ……シバ……お願い……」メルメルが思わず呟いた、その時、
バサバサバサ！　ヒュ〜〜ドン！
「――な、な、何？　こ、これは！」メルメルが驚いて叫んだ。

トンフィーは声も出せずに突っ立ったまま固まってしまった。それもそのはず、林の奥から大きく飛び上がって、メルメルとトンフィーの目の前にいきなり着地したのは、見たことの無い異様な姿の生き物だったのだ。

「か、怪物だ～！」

トンフィーは腰が抜けんばかりだし、メルメルだってビックリして仰け反ってしまった。

その、後ろ足で立った様子や太くて長～い尻尾と小さな手。体は――そう。まるでカンガルーの様に見える。しかし全体に黒っぽくヌメリけがあり、何よりその顔が、

「と、トカゲ？　ヤモリ？　……何なのよこれは一体！」

まったくカンガルーとは程遠い爬虫類系の顔をしているのだ。どうやら動物図鑑には載ってなさそうである。

「キェー！」

――鳴き声も不気味だ、と思いながら、こちらに向かって来そうな雰囲気を感じてメルメルとトンフィーは左右に別れ走って逃げ出した。

バン！　――――ドン！

尻尾を地面に叩きつけるようにして、カンガルーもどきは特大ジャンプをした。

「や、やだ……！」

目の前にカンガルーもどきが着地して、メルメルが身を翻して逃げようとした瞬間、大きな体の割には素早い動きで、カンガルーもどきがそのヤモリのような大きな口を開けて襲いかかってきた。メルメルは慌てて後ろに体を引いた拍子に躓いて転んでしまった。

「ファイヤーボール！」「フギャーオ！」

トンフィーの魔法がカンガルーもどきの背中に当たり、それと同

時にミミが後頭部めがけて飛び付いた。
「ギェー！」
ミミは爪を突き刺しカンガルーもどきの頭に張り付いている。横からはシバが思い切り体当たりして跳ね飛ばされていた。メルメルはその隙に素早く起き上がって逃げ出した。
急いで離れて振り返ると、ミミとシバの必死の攻撃も、トンフィーのファイヤーボールもまったく効いた様子が無く、カンガルーもどきは尻尾を振り回して暴れていた。
「ミミ！　シバ！」
メルメルの気持ちが伝わったらしく、ミミとシバはカンガルーもどきから飛び退き、二匹並んで後ろ足で立ち上がった。そして両手を交互に掲げながら、
「ニャーニャーニャーニャー！」
「ミラークルクル！　ルーノルノーにな～れ！」
ピカー！
ミミとシバは眩い光に包まれ、その眩しさにメルメルも、トンフィーも、アケも、そしてカンガルーもどきも目を瞑った。
「……な、何よ、これ？」
唖然としてメルメルは呟いた。
その見つめる先には、二匹のルーノルノー――もどきがいた。
ミミの方は、顔と尻尾はルーノルノーそのもの。長い鼻面に黒い毛並みが光っている。だが、それ以外の部分は元の茶トラの猫のままだった。シバは――その逆。顔と尻尾は猫のままで、体だけ黒っぽい硬そうな毛で覆われている。そして二匹とも共通しているのは、はっきり言ってかなり間抜けな姿だと言う事だ。何より、メルメルとトンフィーがガッカリしてしまう事に、体の大きさがミミとシバ

のままなのだ。
「ど、どうして？」
理由が分からずメルメルはパニックを起こしそうになる。ミミとシバはお互いの姿を見てなんとなく固まってしまっているようにも見える。
「失敗……？」
思わず茫然としてしまう二人だが、敵がそれをぼんやり見ていてくれるはずもない。
カンガルーもどきは、今度はトンフィーに狙いを定めたようで、ビョーンと跳ねて背中を向けて着地すると、体を捻るようにしてその太くて長い尻尾を打ち振るってきた。
「――わ！」
ガツン、とカンガルーもどきの顔に石ツブテが当たり、その動きが一瞬止まった。トンフィーは慌てふためいて逃げ出す。それを追いかけるように足を踏み出したカンガルーもどきの顔に、ガツン、とまた石ツブテがぶつかって、ギロっと恐ろしげな顔を石の飛んできた方に向けた。
メルメルは、先程転んだ拍子に拾っておいた石を更に投げつけた。今度はカンガルーもどきの目に直撃して、
「ギェギェー！」
少しは効いたようだ。ギラッと残った片目をメルメルの方に向けた。
「隠れてトンフィー！」
叫ぶなり自分もサッっと身を翻した。道を外れて真っ暗闇の中、狭い木と木の間を走り抜ける。カンガルーもどきは体が大きいから高く飛び上がってしまうと木に引っかかってしまう。仕方なく小さく跳ねてメルメルを追い駈け始めた。ビョン、ビョン、ビョン、ビョンと音が近づいて来る。しかし、メルメルの予想通り余り素早い動きとは言い難いようだ。メルメルの方は園で並ぶ者のいない俊足。木の間を縫うように走り回って、石ツブテを足音に向かって投げつ

けた。時折命中して、「ギェ！」と聞こえてくる。
「メルメル！　もう一度変身だ！」
暗闇の彼方からトンフィーの叫び声が聞こえた。メルメルは息切れもせず走り続けながら誰にともなく頷く。
「――ミミ！　シバ！」
メルメルは、二匹の姿が先程から見えず、呼びかけに答えてくれるのか不安だったから、少し離れた木の上の方から例の鳴き声が聞こえてきた時は思わず涙ぐみそうになってしまった。
「ニャーニャーニャーニャー！」
「ミラークルクル！　ウンピョウにな～れ！」

ピカー！

木立の隙間から光りが漏れて来て、いつものようには眩しくないが変身したのは確かだと分かった。メルメルは複雑な気持ちになった。先程の失敗がある。果たしてちゃんとウンピョウに変身出来ただろうか？
「ミミ……シバ……？」
恐る恐る少し開けた道に戻る。メルメルが放り出したランプの灯りに照らされ、二十メートル程先にこちらに背中を向けたカンガルーもどきの姿が見えた。トンフィーはまだ隠れているのかどこにも見当らない。
クルリと、カンガルーもどきがこちらを向いた。
バン！　――――ドン！
「きゃ……！」
メルメルの目の前にカンガルーもどきが降り立って、間をおかずに襲いかかって来た。
「グオー！」
カンガルーもどきの立っている木の上から、突然二匹のウンピョウが降ってきた。

「ギェー！」
「ミミーーシバ！」

ミラークルクルマン　6

ウンピョウの鋭い爪で背中をえぐられ、よろめくカンガルーもどき。その喉元目掛けて、先に下へ降り立った方のウンピョウが牙をむいた。

「ギェギェギェ！」

カンガルーもどきは太くて長い尻尾をブンブンと振り回すが、ウンピョウは素早く飛び退いて避けている。喉元に食らいついたままのウンピョウを振り落とそうと、カンガルーもどきは空高くジャンプした。

パッと飛ぶ直前で素早く離れたウンピョウ。二匹は共にカンガルーもどきの着地と同時に飛び交って、再び喉元と背中に噛みついた。

「ギェー！」

メルメルと、木の陰からコッソリ顔を出したトンフィーが、勝利を確信して拳を振り上げる。

そしてまさに後一息と言うところで、

ピカー！

ミミとシバが光り輝いて、思わずメルメルは眩しくて目を瞑った。

「……」再び目を開けて、メルメルはビックリしてがっかりした。

「ミミ……シバ……。どうしてよ……」

メルメルの見つめる先には、何故か元の茶トラの猫に戻ってしまったミミとシバが、相変わらず必死でカンガルーもどきにかぶりついていた。

「あれれれ？」トンフィーは慌てて時計を取り出した。「やっぱりまだ三十分経ってないや……」

カンガルーもどきは勢いよく尻尾を振って、その反動で体をグル

ッと回した。食らいついていたミミとシバがあっさりとすっ飛んで行った。

「み、ミミ！　シバ！」

ミミはクルリと回って華麗に着地し、シバはクルリクルリと回り過ぎて、少し地面をそのまま転がって着地した。メルメルはホッと一息ついた。

――一体何故まともに変身出来ないのか？

（ボルディーの時は上手くいったのに！）

「メルメル！　ボルディーに変身するんだ！」

メルメルの考えを読んだかのようにトンフィーが叫んだ。すると再びミミとシバが後ろ足で立ち上がって、

「ニャーニャーニャーニャー！」

「ミラークルクル！　ボルディーにな～れ！」

ピカー！

またまた眩い光に包まれ、皆一斉に目を瞑る。そして再び目を開けてみると、そこにはちゃあんと二匹のボルディーが立っていた。

「ガウガウ！」

すぐさまボルディーはカンガルーもどきに飛び交る。メルメルはそれを横目で見ながら、急いでトンフィーに駆け寄った。

「メルメル！」

「トンフィー！　どうして上手く変身出来ないのかしら！」

トンフィーの隠れている木の陰に飛び込みながらメルメルは叫んだ。トンフィーはアケを抱きしめながらカンガルーもどきと二匹のボルディーを見つめている。

「多分――力不足なんだ」

「力不足？」

メルメルが言うと、トンフィーは大きく頷いた。

「本当のところは分からないけど、でも、そんな気がするんだ」

メルメルが戦いの様子に目を向けると、二匹はカンガルーもどきに果敢に挑みかかっていた。しかし長い尻尾を打ち振るわれて、なかなか近づけずにいるようだ。

「ほら、ルーノルノーの時はひどかったろ？　まともに変身すら出来なかった。ウンピョウは、変身する事は出来たけど五分程度しか保たなかった。ボルディーにはちゃんと変身出来る。強い順に、変身し損ねてる気がしない？」

メルメルはクリクリの目をあっちこっちにやって考えてみる。言われてみれば、確かにその通りかも知れない。

「まずいな……」トンフィーが時計を見ながら呟いた。「そろそろ三十経ってしまう」

メルメルはドキッとした。そしてカンガルーもどきと、ミミとシバの戦いに目を向けた瞬間、

ピカー！

眩しさに目を瞑る。

二人は、ゆっくりと目を開いた。そこには、今度こそ時間切れになって猫に戻ってしまったミミとシバがいた……。

メルメルもトンフィーも青くなって言葉を失う。

今までのミミとシバの攻撃で、大分ダメージを受けたとはいえ、カンガルーもどきはまだまだ元気だ。子供二人と猫三匹に敵う相手では無い。

「ど、どうしよう……」

トンフィーは不安そうに呟く。すると、メルメルはそんなトンフィーの手をギュッと握ってきた。ハッとしてそちらを見ると、メルメルはちっとも諦めなど知らないようなキラキラとした目をして前を向いていた。

「ワタシが引きつけるから、トンフィーは静かに隠れていて！」

言うなり飛び出してまた石ツブテをカンガルーもどきに投げつけ

る。カンガルーもどきはクルリと振り返り、そのヤモリのような顔をメルメルに向けた。
「来なさい！」
もう一度石ツブテを投げつけ、同時に走り出す。カンガルーもどきはまんまと挑発に乗ってメルメルを追いかけ始めた。
「引きつけるって……。まさか十五分逃げ続けるつもりかな……？」
トンフィーはアケを抱きしめてしゃがみ込んだ。メルメルを追いかけて援護する、などという事は試すまでもなく不可能だろう。トンフィーはきつく目を瞑った。
――祈る以外に自分に出来る事はないのだろうか……。
遠のいていく足音が聞こえる。
（――メルメル！）
トンフィーはキュッと口を引き結んで、パッチと目を開いた。
（何か、何か出来るはずだ。――考えなきゃ）
バサバサバサ！
ハッとして空を見上げる。またフクロウか何かだろう。しかし今度はトンフィーは怯えなかった。
（そうだ。一か八か……）

ミラークルクルマン　7

メルメルは先程と同じように木と木の間をすり抜けながら、時折、暗闇に向かって石ツブテを投げつけていた。大分闇にも目が慣れてきて、うっすらと周りの様子が見えてきた。

メルメルはカンガルーもどきが離れ過ぎないように、わざと走る速度を緩めたりしながら着かず離れずを心掛けていた。ビョンビョンと飛び上がる音が大きいので大体の位置が把握出来るのだ。自分に向かって来る足音が聞こえている限りトンフィーは無事だという事だ。

（こうしてると、とても時間が長く感じるわ）

ようやく十分くらいは経っただろうか？　手元の小石が切れてしまった。

ビョンビョンビョンビョン！

足音が近づいて来るまで小石を拾いあげていると、

（……？）

突然、音が消えた。

（ど、どうして？）

追いかけるのを諦めたのだろうか？　足音がしなくなって異様に静まり返ってしまった森の中、メルメルは心の中で葛藤する。

――様子を見に戻るべきか、ここでじっとしているべきか。

（でも、もしかしたらトンフィーの方に向かってしまったかもしれないわ）

メルメルは足音をさせないように、ゆっくりと戻る事にした。ドキドキドキドキと耳の奥で自分の鼓動の音ばかりが、やけに大きく聞こえている。

足音がしなくなってしまったせいでメルメルには敵の位置がまったく分からなくなってしまった。警戒しながら木の枝を掻き分けて進んで行く。すると、少しだけ開けた場所に出た。立ち止って、ど

ちらに進もうか迷う。暗闇の中、うっすらとしか見えない周りの景色に目を凝らした。右手にある太い木々の隙間の闇を見つめて、

（確か、こっちの方から来た様な……）

ゆっくりと足を踏み出した。

通り抜けようとしたその時。――ギョロリと、闇の中に光る目の玉が浮かび上がった。

「キェー！」

「――！」メルメルは慌てて飛び退く。

闇の奥からカンガルーもどきが飛び交って来た。そのヤモリのような顔が大口を開いて近づいて来るのをスローモーションのように見ながら、（ああ、そうだ。これはヤモリじゃなくて大サンショウウオだわ。図鑑で見た事がある……）メルメルは何故か呑気にそんな事を考えていた。全てを諦めて、目を瞑りそうになった、その時、

ザン！

目の前の大サンショウウオの顔がズルリと体から離れて、足元にコロコロと転がった。声もなく立ち尽くすメルメル。

「まったく――とんだおてんばだな、お嬢さんは」

ドウッと倒れたカンガルーもどきの後ろに、抜き身の剣をぶら下げたグッターハイムが、ニヤリと片方の頬をつり上げて立っていた。

「な、な、な」言葉にならずにグッターハイムを指差して口をパクパクさせるメルメル。

「ん？　何で居場所が分かったのかって？　お利口さんのトンフィー王子に感謝するんだな。もしあいつが――」

「わーーーーん！」

グッターハイムが言い終わらないうちに、メルメルが飛びついてきた。

「お？　お？」

「わーん！　わーん！」

メルメルは大声を出して泣いている。グッターハイムは頭をボリボリかきながら、

「参ったねどうも……」と本当に参ったような顔で呟いた。そして不器用そうな大きな手で、なるべく優しくメルメルの頭を撫でてやった。「トンフィーがな、空に向かってファイヤーボールを打ち上げたんだ。偵察に出してたピッピーがそれを見つけて知らせたんだよ。でなきゃ、もしかしたら間に合わなかったんだぞ？」

頭を撫でてもらって、少し落ち着いてきたメルメルは、（――やっぱりトンフィーって天才だわ）と思ったのだった。

その後腰がふにゃふにゃになって座りこんでしまったメルメル（本当は腰がふにゃふにゃなんじゃなくて、とっても怖い思いをしたからちょっと甘えちゃっただけなんだ）を仕方なさそうにグッターハイムはおんぶして行く事にした。メルメルはグッターハイムの首にギュッと抱きついて大人しくしている。

「ま、あれだな、うん。ペッコリーナセンセは激怒するかもな。ま、気にするな。うん」

グッターハイムはメルメルがまた泣き出さないかドギマギしながら、林を出て開けた道を足早に進んでいく。

「メルメル！」

メルメルがグッターハイムに渡された、異常に明るいランプを高く掲げると、道のずっと向こうから同じように異常に明るいランプを掲げ、肩に弓を引っ掛けたペッコリーナ先生が走り（……たぶん走ってるんだ）寄って来た。

メルメルはグッターハイムの言葉を思い出した。

（大目玉かしら？）

ところが予想外な事に、近づいてみるとペッコリーナ先生は涙目になって顔をクチャクチャにした。

「よ、良かった……。メルメル……」グッターハイムごとメルメルを抱きしめる。「もう大丈夫。大丈夫よメルメル。大丈夫、大丈夫……ズズー！」

鼻を啜りながらギューギューと抱きしめてくるペッコリーナ先生に、メルメルも再び涙が飛び出てきた。そして何だか怒られた時よりも申し訳ない気持ちになって反省してしまった。

「こらこらペッコリーナ！　分かったから、は、離せって」

グッターハイムに言われて、ようやくペッコリーナ先生は二人を解放した。下に降りて、メルメルは改めてペッコリーナ先生に抱きついた。

「ごめんなさい……先生」

「怖かったでしょう。メルメル……」

ようやくペッコリーナ先生もメルメルも落ち着いてきた頃、

「ニャーン」

「ミミ！　シバ！」

メルメルの足に体をこすりつける二匹。この勇敢なる猫達の話を二人に聞かせなくちゃいけないとメルメルは考える。しかしそういう話を上手に大人に話せるのは、

「ね、先生、トンフィーはどこ？」

「トンフィーーーー！」
メルメルの呼び声が聞こえると、ペッコリーナ先生の指示で草むらの中に身を潜めていたトンフィーは、慌ててそこから飛び出した。
「メルメル！」
「トンフィー！」
「良かった……。メルメル！」
メルメルがトンフィーの倍のスピードで見る間に駆け寄ってきて、ガバッと飛び付いて来た。トンフィーは勢いに押されて二、三歩後ろによろめいた。
「トンフィーのおかげよ！　殺される寸前だったの……」
涙声のメルメルに、トンフィーもちょっと泣きそうになってしまった。後ろからはグッターハイムと、更にかなり後ろからペッコリーナ先生が追いかけて来た。ミミとシバとアケが、何だか嬉しそうに二人の回りをグルグルしている。
チリチリ「ニャーン」グルグル「ニャーン」チリチリグルグル「ニャーンニャーン」
「おーおー。良かった、良かった」グッターハイムはニコニコしながら手を叩いている。
「メルメル」
小声で呼びかけられて、メルメルがトンフィーから体を離して顔を上げると、そこにやけに真面目な顔があった。
「ちゃんと、お願いしようメルメル。僕達も連れて行ってもらえるように」
「……」しばらくトンフィーを見つめ、メルメルは小さく頷いた。
「はー、ひー、はー、ひー……」
ようやく追いついたペッコリーナ先生は、しばらく喋れそうにも無い。メルメルとトンフィーはゆっくりとそちらに近づいて行った。
（どうしてもダメだと言われたら、今度こそ地面に寝転がって足を

バタバタして暴れよう）

「先生、あの、ワタシ達――」

不安そうに上目づかいで見つめるメルメル。その言葉の続きを、ペッコリーナ先生は手を上げて制した。

「ひー、はー。も、もう分かったから。……ふ～」

メルメルとトンフィーは驚いて顔を見合わせる。そして、再びペッコリーナ先生をキラキラした目で見つめた。

「じゃ、じゃあ……」

「連れて行くわよ」そう言って溜め息をつくペッコリーナ先生。もうすっかり諦め顔だ。「グッターハイムが言うんだもの。私のせいだって。――いいえ。でもね、今でも間違っているとは思っていないわ。連れて行くのはやっぱり反対。けれど……とてもじゃないけどこんな思いはもうごめんだわ！」

お手上げポーズのペッコリーナ先生を見て、メルメルとトンフィーは顔を見合わせてニッカ～と笑ったのだった。

ミラークルクルマン　9

ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク

馬の背に揺られながら、メルメルは疲れ切ってウトウトしていた。ふと隣を見ると、同じようにグッターハイムの前に座ってウトウトしているトンフィーの姿が目に入った。腕にはアケを抱きしめている。メルメルは自分の腕の中に視線を移した。ミミとシバが、こちらは完全にスヤスヤと寝息を立てて眠っていた。可愛い寝顔をしばらく眺めていると、後ろから覗きこんでいたらしいペッコリーナ先生がフフッと笑った。

「よっぽど疲れたんでしょうね。変身なんて、初めてしたのかも知れないものね」

メルメルは頷く。すると横から、

「しかし変身とは驚きだな……」グッターハイムは、もう何度目かのセリフを口にした。

ミミとシバの変身も猫の道案内も、全てトンフィーが話して聞かせたのだ。最初半信半疑だった二人だが、実際目の前でミミとシバをボルディーに変身させたり、いつの間にか現れた茶トラのアーチャと三毛猫のユトロニャーオが先頭に立って道案内を始めると、完全に信じざるおえなくなってしまった。

「変身……か。まぁ、変身と言うか、変化自体はまったくあり得ないわけじゃないさ。中には変化を得意とする生き物がいるからな」

グッターハイムの言葉にウトウトしていたトンフィーが顔を上げた。「知ってます。竜族でしょう？」

グッターハイムは大きく頷く。

「お前は本当に良く勉強してる。――その通りだ。竜族は強大な魔力故に、様々な生き物に変化する事が出来る。中には人間に変われるなんて言う奴もいるが、これは定かじゃない」

（強大な魔力……）

メルメルは驚いて腕の中の二匹を見た。相変わらず可愛い顔で寝息を立てている。シバの方はよだれまで垂らしていて、とても強大な魔力を持っているようには見えない。

「後はペットとして契約した動物が、飼い主の力の影響を受けて変化する事があるな。例えば――よくあるのが飼い主に合った武器に変化するというものだ。剣や槍、魔法の一部になる事もある」

メルメルは驚いた。武器に変化するペットの話なんかは本で見た事があるが、魔法の一部とはどういう状態だろう？

「いずれにしてもペットが変化して加わった攻撃は威力が何倍にもなるという事だ。ただ、そんな風に変化するのだって稀で、飼い主かペット、あるいはその両方が強大な力の持ち主でなきゃいけない。しかも様々な動物に変化するペットなんて……。俺は聞いた事がないな。あるとすれば、やはり竜族か……。あるいは、それに匹敵するほどの魔力を持った生き物だな」

メルメルは再び、まじまじとミミとシバを見てみる。何か夢でも見ているのか、ミミは目を瞑ったままムニャムニャと口を動かしている。

「とてもそんな風に見えないわ」

メルメルが言うと、グッターハイムはニヤリと笑った。

「実は猫をかぶった竜かも知れないぞ」

メルメルは目を見開いてミミとシバを見つめる。

「ガハハハハハハ！」

「あんまりからかわないのよ、グッターハイム。竜族は高貴だし気位が高い生き物だから、めったに普通の人と接触したりしないのよ。それに竜ともあろうものが、狼ごときに踏みつけられますか！」

「ガウ」横を歩いているルーノルノーが不満そうな声を出した。どうやらごときが気に入らなかったらしい。

「ガッハッハッ！　まぁ、まさか竜な筈も無いだろうから、ただのヘンチクリンで訳分からんどら猫共なんだろうさ」

説明にはなっていないが、竜だなんて言われるよりはヘンチクリ

ンなただの猫と言われる方が、まだ納得出来るメルメルなのだった。
「ウニャーン」
林の中から薄い灰色の猫が現れて、先頭を行くアーチャとユトロニャーオに並んだ。すると、
「ニャーォ」「ミニャー」アーチャとユトロニャ～オが灰色猫に声をかけるように鳴いて、森の奥に去って行ってしまった。
「お？　選手交代か？」
グッターハイムが言うように、今度は灰色猫が先頭に立って歩き始めた。
「本当に不思議な猫達ね。このままプラムのところまで私達を案内してくれるつもりかしら？」ペッコリーナ先生が顎に指を当てて、首を傾げる。
「まぁ、変身に比べりゃ道案内なんてどうってことないが、不思議には違いないな」
「もしかして、ミミちゃんやシバちゃんに従ってやっているのかしら？」
ペッコリーナ先生が言う。メルメルはビックリして、目をクリクリさせた。
「そんな事あるの？」
ペッコリーナ先生は頷く。
「ライオンなんかでは良くある事よ。リーダーの指示で他のライオンが様々な事をするの。だから戦士はみんな群れのリーダーをペットにしたがるわ。そうすれば自分のペット以外も思うように操れるから」
ライオン――と聞いてメルメルはクスタフの顔が思い浮かんだ。あまりにもリーダーとはかけ離れたグターっとした背中を思い出して、メルメルが笑い出しそうになると、「プフッ」トンフィーがとなりで吹き出した。メルメルと目が合って思わず二人でニタニタする。
「逆にペットになったが故にリーダーにのし上がる動物も多いな。

ペットになると、飼い主の能力に応じて特別な力を手に入れたりするからな。……なる程、こっちに行くわけか」

灰色猫は二つに別れた道を左に進んで行く。すると、少し緩やかな下り坂になった。早足の猫を馬はゆったりと追いかけている。

（それにしても疲れた……）

メルメルはまたウトウトとする。ペッコリーナ先生達が馬で来てくれていて良かったと思った。もう眠いしヘトヘトで、とてもじゃないけど自力では歩けそうにない。

（今、何時頃かな……、もうすぐ朝かしら？　先生達はずっと休まず行くのかしら）

プラムじいさん救出に焦る気持ちはあるが、どうにも眠い。

（寝る時はキャンプみたいにするのかしら……）

宿がなければ当然そうだろう。メルメルが半分寝ぼけながら考えていると、

「ペッコリーナ……」「分かっているわ」

なんだかやたらと厳しい声のグッターハイムとペッコリーナ先生。謎のやり取りに、メルメルは、「？　？　？」と、二人の顔を交互に見た。共に、声と同じように厳しい顔をしている。グッターハイムの前に座っているトンフィーは今や完全に眠っていて、全くその事には気付いていない。

突然、灰色猫のスピードが上がった。

ところが、メルメル達の乗っている馬達のスピードも一気に上がったから、灰色猫はあっという間に追い越されてしまった。

「あ、あれれ？」

駆け足をする馬の尋常じゃない揺れ方に、トンフィーが驚いて目を覚ました。スラッっと無言でグッターハイムが腰の剣を抜く。メルメルの後ろではペッコリーナ先生が弓を構えた。

「せ、先生」「伏せていなさい」

堅い声で言われて、メルメルは震えて体を倒す。腕の中でミミとシバはとっくに目を覚まして、毛を逆立てていた。

「もう少し走ろう。恐らく、そろそろ森を抜ける」グッターハイムが誰にともなく言う。

道の両脇には人の丈程もある草がびっしりと生えている。どうやら自分達の乗った馬と平行するように、その草むらの中を何かが走っている様だ。しかも、一匹や二匹ではない。

メルメルもトンフィーも息を飲んで、必死で馬の背にしがみついた。

「抜けるぞ、ペッコリーナ！」

突然開けた場所に出た。背後の森以外は見渡す限りの草原が広がっている。遂に、森を抜けたのだ。回りを覆う物がなくなる。

「ガウガウガウ！」

まだ日は出ていないが、月明かりのおかげで辺りの様子は良く見えている。走り続ける馬の両脇を、ハイエナのような獣が追走していた。

「す、すごい数！」

体を倒し必死で馬のたてがみを掴みながら、メルメルは周りを見渡した。またまた動物図鑑には載っていない様な動物だ（体のほとんどがハイエナで、顔や尻尾がワオキツネザルで出来ているんだ）。

驚いたのはその数で、二十匹近くはいる。

「上を見てメルメル！」

トンフィーの悲鳴が聞こえて、メルメルは頭上を見上げる。空に鳥の群れが飛んでいた。地上の敵と同じくらいの数がいそうだ。遠目で見え辛いが、翼を広げた姿は一メートルくらいありそうだ。

「上は頼むぞ、ペッコリーナ！」

グッターハイムが叫びながら剣を大きく振るう。平行していたハイエナもどきの頭が吹き飛んだ。

「任せて！」

ペッコリーナ先生が空に向かって弓を構えた。メルメルは首を必死で捻り、空を見上げた。

「久しぶり過ぎて腕が鈍ってるんじゃないか？　肩慣らしには丁度良い相手だろう！」

グッターハイムが叫んだ。すると、その馬鹿にしたようなセリフが聞こえたかのように、空で旋回していた鳥が数匹、メルメル達に向かって急降下して来た。

ペッコリーナ先生が目にも止まらぬ早さで続けざまに弓を打つ。ヒューンヒューンヒューンと、大きな鳥が次々に降って来た。やはり見た事のない姿（今度はカラスとマングースが混ざった様な生き物なんだ）に、メルメルは目を丸くした。

落ちて来たカラスもどきの体には皆、ペッコリーナ先生の放った矢が突き刺さっていた。それを見てグッターハイムはピューっと口笛を吹いた。

「こりゃあ大変失礼しました。俺も負けてられんな～」

たくさんの敵に囲まれているとは思えないほど呑気な声を出しながら、グッターハイムは大剣を縦横無尽に振るう。あっという間にハイエナもどきは半分近くに減ってしまった。空からはどんどんカラスもどきが降って来る。

「す、すごい！」

トンフィーが感嘆の声を出す。メルメルも二人の余りの強さに唖然とした。

「ガウワウ！」「キャイーン！」

ハイエナもどきの倍以上ありそうなルーノルノーが一咬みでハイエナもどきを倒してしまった。すぐさま次に飛びかかる。

「もう体を起こしていいわよ、メルメル」

後ろから声をかけられて、メルメルは体を起こして空を見上げる。もう、カラスもどきは一匹もいなくなってしまっていた。

「待てルーノ！」

地上では、最後の一匹のハイエナもどきにルーノルノーが飛びかかろうとしていた。グッターハイムに止められて不満そうに、「グゥ」と鳴いている。

「メルメル！」
グッターハイムに呼ばれて、メルメルはそちらを見た。既にトンフィーも体を起こしてこちらを見つめていた。
「ミミとシバを変身させるんだ！」
トンフィーに言われてメルメルは不思議に思って首を傾げる。ハイエナもどきはもう一匹しか残っていない。何故わざわざミミとシバを変身させるのか。
「次に変身させる為だそうだ！　確かに犬よりはましかも知れない。さぁ、早くしろ！」
グッターハイムが叫ぶ。恐らくトンフィーが考えたのだろう。納得してメルメルは腕の中の二匹を見た。
「出来る？　ミミ、シバ」
手を離すと二匹は馬から飛び降りた。そして後ろ足で立ち上がり両手を交互に掲げながら、
「ニャーニャーニャーニャー！」
「ミラークルクル！　ボルティーにな～れ！」

ピカー！

二匹から放たれる眩い光に皆きつく目を閉じた。そして再び目を開けると、そこには想像通り二匹のボルティーが立っていた。今のところ唯一まともに変身出来る、ミミとシバのレパートリーだ。
「かはー！　何度見てもおっどろきだな！」
グッターハイムが愉快そうに言う。メルメルの後ろでは感心したようなため息が聞こえる。
「ガウガウ！」
ミミとシバは、うずうずしているルーノルノーの脇を抜けてハイエナもどきに飛びかかった。
「ギャイン！」
片方のボルティーがハイエナもどきの足に噛みついた。ハイエナ

もどきは体を捻って噛みつき返そうとする。しかしボルティーは直前で口を離し後ろに避けた。すると横からもう一匹のボルティーがハイエナもどきのお腹の下に頭を突っ込んで勢い良くすくい上げた。

「ギャン！」倒れたハイエナもどきに二匹のボルティーが食らい付く。

「もういいわ！　ミミ、シバ！」

メルメルが叫ぶとミミとシバは攻撃を止めて、まだ息の根が止まっていない敵を名残惜しそうに見ながら戻ってきた。

「何故止める？」

グッターハイムが咎めるような声で言う。メルメルは馬から下りて二匹の頭を撫でようとする手を止めた。「え？」

「トドメを刺させろ」

珍しく怖い顔のグッターハイムにメルメルはたじろぐ。

「でも、もう……」

言いながらハイエナもどきを振り返る。なんとかフラフラと立ち上がったところだった。

「どうせ逃げて行くわよ……」

「そんな事はない。見ろ」

少しずつこちらに歩いて来る。メルメルは逃げてくれれば良いのにと思う。

「あ、あれじゃどうせ戦えないわ」

助けを求めるようにペッコリーナ先生を見る。しかしペッコリーナ先生は、悲しそうな顔で首を横に振っている。

「ルーノ」

静かな声でグッターハイムが言うと、ルーノルノーは素早くハイエナもどきの喉元に食らいついた。動かなくなったハイエナもどきから顔を上げメルメルを振り返る。黒っぽい毛が敵の血を吸い込んで、鼻の周りだけ月明かりを受けてヌラヌラと光っている。ゴクリとトンフィーが唾を飲む音が聞こえた。

「メルメル。必ず敵にはトドメを刺せ。最後の最後で手を抜くな、

命取りになるぞ」
　厳しい声で言われて、メルメルは何も言えずに口をへの字にして押し黙る。殺さなくて済むなら、殺さない方が良いではないかと思う。そんなメルメルの気持ちを察したようにグッターハイムは声を柔らかくした。
「可哀想だと思うか？　だが、こいつらのようなキメラは生かしておく訳にはいかないんだ」
「キメラ？」

ミラークルクルマン　１０

トンフィーが不思議そうに聞くと、グッターハイムは大きく頷いた。

「キメラは闇の王国が作り出したものだ。死者の復活に次ぐ、命の石を使った悪魔の技法なのさ」

トンフィーは驚いて目をパチクリさせた。「キメラなんて初めて聞いた……」

「キメラは最近出来たものなんだ。まだあまり広くは知られていない。命の石を使い、複数の生き物を混ぜて作ったものだと言われている。悪魔の兵隊と違って不死体ではないがな」

じゃあ、カンガルーもどきもきっとそれなんだと、メルメルとトンフィーは考える。

「問題はそんな風に作られたキメラや悪魔の兵隊には、意志が無いと言うことなんだ。自分を作り出した主の言うことを、動かなくなるまで遂行する」

メルメルはハイエナもどきを見る。そしてフラフラとしながら最後までこちらに向かって来た姿を思い出して、何だかとても悲しくなった。

「だから必ずトドメを刺せ。そうじゃなくても戦いとはそういったものだと思うがな。レジスタンスでも無い子供のお前らに言っても仕方ないか……」

グッターハイムは深い溜め息を吐く。メルメルは何だかとてもしょんぼりとしてしまっていた。トンフィーはそれを気にして、話題を変える事にした。

「じゃあ、あのカンガルーもどきも、この鳥やハイエナもどきも、作り手の誰かに命令されて僕らを襲って来たって事ですか？」

「勿論そうだろう。誰かが、俺達が通るであろう場所にキメラ共を待ち構えさせているんだ」

言いながらグッターハイムは剣を鞘に収めた。メルメルとトンフィーは黙ってグッターハイムを見つめた。
「やっぱり罠なのかしら？」ペッコリーナ先生が顎に指を当てながら言う。
メルメル達は今度はそちらに首を振る。
「ここまでバッチリ行く先々に敵が現れるんだ。まぁ、まず間違い無く罠だろう」
「だけど、何の為に？」ペッコリーナ先生は納得いかないように小さく首を横に振る。
「レジスタンスをあぶり出して、一人でも多く殺す為か……。いや、違うな。やはり大将である俺をあぶり出して殺す為だな」
「あぶり出すってどうやって？　プラムをさらったからといって、あなたが現れるとは限らないわ」
「だから、この手紙さ」グッターハイムは再び胸ポケットから手紙を取り出す。
「でも、その手紙は確かにプラムの書いたものなんでしょ？」
メルメルとトンフィーは首を振り振り大人二人を交互に見ていたが、「もう一度見せて！」メルメルはグッターハイムの手から手紙を受け取り、もう一度まじまじと見てみた。その後ろからはトンフィーが覗き込んでいる。

無敵の闇の軍隊を
まかす事が出来る
技法を編み出した
たいしょうに直接
に伝えたいので、
是非きてほしい。

読み返せば読み返すほど、間違いなくプラムじいさんの字に見え

る。メルメルは首を傾げた。
「偽物あばきの呪文も使ったし、書いたのはプラムに間違いないんだ。しかし自分の意志で書いたとは限らない。敵が俺を呼び出す為に、無理やり書かせるか何かしたのさ」
「確かに、少し不自然な感じのする手紙だものね。だけど、あなたを呼び出す為の罠だとすれば、それなりの準備をして待ち構えているわね」
ペッコリーナ先生は指を顎に当てて深刻な表情を浮かべている。それを見てメルメルもトンフィーも不安な気持ちになってきてしまった。
「大物取りになるかな？　まぁいいさ。俺を罠にかけるなんて思い付いた事を後悔させてやるさ」
手紙を受け取り再び胸ポケットにしまいこみながら、ニヤリと片頬を上げるグッターハイム。その強さを先程見せつけられたばかりのメルメルとトンフィーは少しホッとした。
「そうね。いずれにしても、罠だろうと何だろうと行くしかないものね。ありがたい事にこうして敵が出てくるって事は、猫ちゃん達の道案内が間違ってないって事の証明でもあるしね」
これを聞いてメルメルは嬉しくなってしまった。
「ちゃんと正しい方に進んでる？　おじいちゃんに近づいている？」
「ええ」ペッコリーナ先生はメルメルを見つめてニッコリ微笑む。
すると突然グッターハイムが驚く様な事を言った。
「それなんだが、俺は大体行き先の検討がついたぞ」
「えっ！　ほ、本当に？」
グッターハイムは驚いている一同に向かって大きく頷いた。
「ここから北西の方に進むと、ミデルと言う大きな街がある。緑豊かな平和な街だったが、残念ながら最近は、もうほとんど闇の軍隊に支配されてしまっているんだ。最近この辺りでうろつき始めた悪魔の兵隊共は、我々の間ではミデルを拠点にしてるんじゃないかと思われている」

皆グッターハイムの言わんとしている事が分かってきた。
「じゃあ、プラムはミデルにいるんじゃないかって事？」
ペッコリーナ先生がみ皆の気持ちを代表して聞く。グッターハイムは首を縦に振った。
「そうだ。こちらの方に猫共が案内して行くのを見て、やはりと思ったよ。この辺りはまだ闇の軍隊の支配はそんなに進んでないからな。メルメル達の町から一番近い拠点と言えばミデルくらいだろう」
グッターハイムの言葉に、納得顔で頷くペッコリーナ先生を見て、メルメルは頬を高潮させた。
「じゃあ、早く行きましょう！」
行き先が分かると何故か急に気が急いてしまって、メルメルは興奮して、一人でとっとと馬の背に跨ってしまった。
「こらこらそんなに慌てるな。早く行くったってミデルまではまだ二日はかかる」
「そ、そんなに？」メルメルはガッカリしてしまった。「二日もかかってしまって、おじいちゃん大丈夫かしら……」
肩を落としてしょげるメルメルを慰めようと、グッターハイムはまた余計な事を言ってしまう。
「平気さ。プラムじいさんを人質にするつもりなら、二日かかろうが十日かかろうが殺しはしない。どうせ殺すつもりならとっくに殺してしまっているさ。詰まりどちらにせよ大慌てで行こうがゆっくり行こうが結果は同じ事なのさ」
まるで上手いこと言ったみたいな顔で、自分の発言に満足そうにしているグッターハイム。だが、ふとメルメルの泣きそうな顔が目に入って、ハッという顔をした。
「まったくあなたは懲りないわね……」ペッコリーナ先生が横目でねめつける。
「あ、あれ？　いや、だからな……」
グッターハイムはもうまったく上手い言葉が思いつかず、頭をバリバリ掻いて一人焦っている。

「大丈夫だよメルメル！　そもそもおじいさんをさらったって事は、殺す気なんてないんだよ」
　そう言ってトンフィーが慰めると、メルメルは涙目で小さく頷いた。グッターハイムはホッとして手を叩いた。
「そうそう！　俺が言いたいのもそんなような事だ。ま、とにかく慌てても仕方がない。何より強行軍をしてクタクタになったら助けられるもんも助けられん。だから少し休憩がてら寄り道をしないか？」
「寄り道？」メルメルは少し飛び出してしまった涙を拭いながら首を傾げた。
「そうだ。ミデルの情報が手に入るかも知れないし、頼りになる味方を増やせるかも知れない」
　グッターハイムのセリフにペッコリーナ先生がポンと手を打った。
「あそこへ行くのね！　グッターハイム」
「そうだ。あそこにはラインがいるからな。奴にも手伝わせよう」
「それなら百人力じゃない！」
　嬉しそうなペッコリーナ先生。まったく訳分からない大人の会話に、いつ入り込もうかと、体を前のめりにさせてウズウズしているメルメルを見て、ペッコリーナ先生は思わず微笑んだ。
「私達レジスタンスの隠れ家よ」
「隠れ家？」
「そう。レジスタンスは色々な場所に、闇の軍隊に隠れてこっそり住みかを作っているの。今言っているのは隠れ家としては小さな方だけれど、仲間が十数人いるわ」
「本当に？　じゃあその人達に手伝ってもらうのね！」
　メルメルは大興奮して（隠れ家なんて聞いて、マンガみたいで格好良くてワクワクしちゃったんだ）思わず大きな声を出した。ところが、
「いや、それは止めた方がいいよ」
　トンフィーが腕組みをしながら考える様に言った。メルメルはキ

ヨトンとした。
「どうして？」
トンフィーは薄っすらと明けてきた夜空を見上げ、次いでメルメルにゆっくりと目を向けた。
「あんまり大人数で行ったら、敵を怒らせたり焦らせたりするかも知れない。そうしたら、おじいさんに危害を加えられる可能性がある」
「どうして！」
メルメルがおどろいて大声を出したので、メルメルの足にすり寄って来ていたアケがぴょんと飛び上がった。
「敵は、グッターハイムさんを呼び出して、その……こ、殺すのが目的なんだよ。だから、その為の人質としておじいさんをさらったんだ。燃やしてしまった紙に何が書かれていたかは分からないけど、徒党を組んでみなさんでいらして下さい、なんて書かれていた訳がないと思うんだ」
「そりゃそうだ。多分俺一人で来るように書かれてたんじゃないか？」
グッターハイムが口を挟むと、トンフィーはコクンと頷いた。
「だと思います。だから四、五人で行くならともかく、あんまり大人数は……。控えた方がいいんじゃないかと……」
トンフィーのとっても説得力ある説明に、グッターハイムとペッコリーナ先生はなるほどと何度も頷いている。メルメルは今一意味が良く分かっていなかったが、とにかくたくさんで行くのは駄目なんだと思って落ち込んだ。
「メルメル、そうガッカリするな。大人数は駄目だが、あと一人くらいは平気だろ？　安心しろ。そこいらの仲間を百人連れてくより頼りになる戦士が隠れ家にいる。そいつを連れて行こう」
メルメルは目をパチクリさせた。
「大げさじゃないわよ。ラインは本当にそのくらい強いわ」
ペッコリーナ先生がウインクしながら言う。メルメルもトンフィ

ーも何だかワクワクしてきた。
「戦士ライン……」
メルメルはクリクリの黒目を上にして、まだ見ぬラインと言う名の戦士を頭に思い描いて（髭をたっぷり蓄えた巌のような大男が、メルメルの腰よりも太いような手に、長い槍を持ってブンブン振り回しているんだ）ウットリとしてしまった。
「じゃあさっさと行きましょうか」呆けたようなメルメルの後ろにペッコリーナ先生が乗り込んだ。
「おい！　ぼうっとしてないでお前も早く馬に乗れ！」
同じように呆けているトンフィーをグッターハイムが小突いた。
トンフィーは慌ててアケを抱き上げて馬に乗り込む。
「よし！　では我がレジスタンスの隠れ家目指して、いざ出発！」

戦士ライン　1

ポク　ポク　ポク　ポク　ポク
ウト　ウト　ウト　ウト
ポク　ポク　ポク　ポク　ポク
グウ　グウ　グウ　グウ
もうすっかり日が登ってしまって、メルメルとトンフィーは半分寝ながら馬に揺られていた。
「ふわあぁぁぁ……」
さすがにペッコリーナ先生も眠いらしく大きな欠伸をしている。途中、小川で馬に水をやった以外はずっと休みなく進んでいるのだ。
「う……ん？」メルメルは急に大きく揺れだした馬の背に目を覚ました。
（――道が悪くなってきたんだわ）
寝ぼけ眼で辺りを見渡すと、先程まで開けた草原にいたのに、いつの間にかうっそうとした木々に囲まれている。まるで西の森に戻って来てしまったかの様だった。しかし今度の森にはちゃんとした道が無いのだろうか。何とかギリギリ通れるような獣道を、馬は木の根を避けたり大きな段差を斜めに降りたり四苦八苦しながら進んでいる。
「もうすぐよ。メルメル」目を覚ましたメルメルに気がついて、ペッコリーナ先生が声をかけてきた。
ところで、一体何を頼りに前に進んでいるのかとメルメルは不思議になった。同じ様な木々ばかり続いていて目印になりそうなものなど無いのに、前を行くグッターハイムは迷い無く馬を進めて行くのだ。
バサバサバサバサ！
鳥の羽ばたきが聞こえてそちらに目をやると、木の上にニジイロインコが止まったところだった。良く見ると、後ろの木や先の方の

木にも何匹か止まっている。そうしてメルメルが木の上ばかり見上げていると、何故か突然馬が立ち止まってしまった。
「さて、ここからは歩きだ」
目線を下に戻して前方を見て見ると、大きな杉の木が横倒しになっていて確かに馬では先へ進めそうになかった。メルメルはもうヘトヘトで、気軽に歩くと言うが一体どのくらいの距離があるのかと不安になる。だがうんと遠いなんて言われても憂鬱になるだけなので、仕方無しに黙って馬から下りようと重い腰を持ち上げた。
「リーダー！」倒れた大木の向こう側から男が二人走って来た。
「よお！　良く分かったな！」走り寄って来る男達の姿をみとめて、グッターハイムが片手を上げた。
「ピッピーが先に来て知らせてくれましたから！」
ひょろっと背が高くてぼやっとした顔をした方の男が言うと、逆に小さくてネズミみたいに歯が飛び出ている方が目をパチクリさせてメルメル達を見た。
「一体どうしたんですか？　ペッコリーナさんまで。それに、その子供達は？」
二人とも年はグッターハイムより少し若いくらいだろうか。背の高い方は、少し長めの髪を後ろに結んでいて、肩に乗ったニジイロインコがその髪をつついて遊んでいた。
「説明は後だ。もうクタクタでな。先に戻って食事と寝床を用意してくれ」
グッターハイムが大木の上に飛び乗りながら言うと、男達は慌てて踵を返した。
「了解しました！　それじゃ、先に戻っています！」
なかなか木の上に上がれないトンフィーを、グッターハイムは手を伸ばして引き上げながら、走り去ろうとする背中に、
「一人は残って荷物を持ってやってくれ！」
「あ、はい！」背の高い方の男が振り返って戻って来た。
小さな方は馴れた足取りでヒョイヒョイと森の中を走って行った。

メルメルは一人でとっとと木の上に上がり、もたもたとしているペッコリーナ先生を引き上げようとして、逆に引っ張られて二人してコロコロ転がってしまった。

「おいおい何してんだ。ほら、手を貸せペッコリーナ！」グッターハイムはペッコリーナ先生の手を引っ張る。「う！　ぺ、ペッコリーナ、少しダイエットが必要だな……」

顔を赤らめながら引き上げるグッターハイムに、ペッコリーナ先生は素直に頷いた。

「痩せなくちゃとは思うんだけど、なかなか甘い物だけは我慢出来なくて……」

しみじみ言うペッコリーナ先生がおかしくて、メルメルとトンフィーは顔を見合わせて笑ってしまった。

「ニレ、馬はそのままで大丈夫か？」

グッターハイムが聞くと男――ニレ――は、馬の背からトンフィーの大き過ぎるリュックを下ろしながら頷いた。

「大丈夫ですよ。後で人をやりますから」

重い荷物を背負っているにも関わらず、大きな体には似合わない様な軽い身のこなしで、フワッと木を乗り越えて、ニレはメルメルの横に降り立った。なんとなく、そのまま歩き出したニレの横に並んでメルメルは歩き出す。

チチチチ……

ニレの肩にとまったニジイロインコを見上げていると、メルメルの視線に気付いたニレが優しく微笑んだ。

「肩に乗せてみるかい？」

頬を紅潮させて頷くと、指先にニジイロインコを乗せてメルメルの肩へと乗せてくれた。

「名前はウォッチだよ」

ウォッチは頬を優しく噛んでくる。くすぐったさにメルメルがきゃっきゃっ言っていると、

「ニャ～」

下を見れば、足元からキランキランした目でミミがウォッチを見つめている。
「……食べちゃ駄目よ、ミミ」
メルメルが横目で睨むと、ミミはつまらなさそうにして足を早め、前の方を歩いているシバとアケに並んだ。
「可愛いいね。あの二匹はペットじゃないんだね」
首輪をしていないミミとシバを見てニレが言う。メルメルの肩に乗ったウォッチは首輪をしている。
「そうなの。ミミとシバは野良猫なの。アケ――あの三毛猫はトンフィー――えっと、あの子のペットなの。あ、ちなみにワタシはメルメルって言うの」
「初めましてメルメル。メルメルのペットはいないのかい？」
ニレがニコニコしながら首を傾げると、メルメルは少し顔を赤くして頷いた。
「まだ、いないの」
後ろで二人の会話を聞いていたトンフィーが、不思議そうな顔をした。
（そう言えば、どうしてメルメルはペットをつくらないんだろう？）
別にペットは絶対いなくてはいけない訳じゃないけれど、子供は皆欲しがるものだ。ウサギやハムスターや猫。なんだっていいから、とりあえず手頃で可愛いのを飼うのだ。
「何だかあれも可愛い、これも可愛いって悩んじゃって……。それに可愛いだけじゃなく強いのにも少し憧れちゃうし……」
メルメルが腕組みしながら深く思案する様に言うと、何気なく話を聞いていたグッターハイムが思わず笑った。
「クックックックッ！　そんなに悩む程の事じゃないさ。慣れる為にも、何でも良いからとりあえず飼ってみればいい」
「う～ん……」メルメルは颯爽と歩くルーノルノーを見た。
（そりゃあ、あれくらいカッコ良ければ迷いなく飼うけど……）
「そうだ。可愛いだけじゃなく強くて丁度良いのがいるじゃないか。

あの二匹をペットにしたらいい」　グッターハイムが顎をしゃくって二匹の猫を示す。
「ミミとシバ？　確かに強いわね。でも二匹はペットに出来ないし……」
　メルメルの言葉にニレが目を丸くした。「あの二匹はそんなに強いのかい？」
「そうよ～。あなたも敵わないかも知れないわよ～」
　ペッコリーナ先生がちょっと意地悪っぽい顔でニヤニヤ笑った。
　ニレはいよいよ目を丸くして、お尻をふりふり歩くミミとシバを眺めた。
「ほ、本当ですか？　――そんな風には見えないな。しかもペットでもないのに」
　ペットなら、飼い主次第では特別な力を手に入れたりもする。だから猫でも強くて不思議はないという意味だろう。
「まぁ、あのままなら大した事はないがな。――あれ？　どこにやったかな……」
　ポケットをあちこち探りながらグッターハイムが言う。
「あのままなら？」ニレが首を傾げる。
「詳しい事情は後で教えてやる。あったあった。メルメル、これをやろう」
　グッターハイムが懐から何かを取り出しメルメルに向かって投げた。メルメルは慌ててそれを受け取る。「ナイスキャッチ」
　メルメル受け取った物をまじまじと見つめる。トンフィーが横から覗きこんだ。「首輪だ……」
　綺麗な水色の石が飾りつけられたブルーの首輪だった。
「キレイ……」トンフィーとメルメルはウットリと首輪を見ている。
「それはプラムじいさんの部屋から出てきた物なんだ」
「え！」メルメルはビックリして叫んだ。

「何か手掛かりがないかと色々見ていたら、机の上の、木箱の中に大事そうに入っていたのを見つけたんだ」

横でペッコリーナ先生が頷く。「プラムがあなたにと用意した物よ」

メルメルは首を傾げる。どうしてそんな事が分かるのだろうか？

プラムじいさんもペットは飼っていない。自分が使うつもりだったかも知れないのだ。そんなメルメルの心を読んだかのようにグッターハイムが言った。

「手紙が一緒に入ってたんだ」

懐から可愛いピンクの封筒を取り出しメルメルに差し出す。メルメルは中身を取り出し読み上げた。

「メルメルへ。ペットは愛しい子供の様でもあり、頼れる友の様でもあり、また時には自らの一部の様でもある。大切にして、命分かつまで共に生きなさい。おじいちゃんより……」

プラムじいさんの、優しく力強い字を見てメルメルは涙ぐんだ。

（おじいちゃん、きっとワタシがいつでもすぐペットを飼えるように、用意してくれてたんだわ……）

実は、メルメルがなかなかペットを飼うのに踏み切れなかった原因の一つに、プラムじいさんが日頃から、「安易にペットを飼ったら駄目じゃ」と言っていたのがあったのだ。

「なかなか重い手紙ね。プラムのペットは青暗戦争の時に死んでしまったから、ペットに対する思い入れがとても強いのね……」

初めて聞く話にメルメルが驚いていると、同じ様に驚いた声が隣から上がった。

「メルメル！　君のおじいさんはプラムさんなのかい？」

メルメルがコックリ頷くと、ニレは驚いて見開いた目をそのままに、盛大な溜め息を吐いた。

「私は青暗戦争の時に、プラムさん達と共に逃げ出したんだ。その時、プラムさんの抱いていた赤子の君を見ている。こんなに大きくなったのか……」

「おじいちゃんと一緒に……」

ニレとメルメルはそれぞれの思いを抱いて、しみじみと互いに見つめ合った。

「プラムさんは元気かい？」

ニレの何気ない質問に不意をつかれてメルメルはまたしても涙ぐむ。それを見て慌ててグッターハイムが口を挟んだ。

「それについても色々あるが、説明は後だ。――さあ、着いたぞ」

一同の行く手に、人の背丈の三倍程ある木の柵があり、それが左右に長く伸びていた（如何にも要塞といった風情にメルメルとトンフィーはドキドキしたんだ）。どうやら柵の一部が扉のようになっているらしく、それがゆっくりと内側から開き初めた。そうして開いた柵の中から、先程の歯の出た男が現れた。

「すべて用意出来てますよ！　まずは食事ですか？」

グッターハイムが頷きながら中に向かって歩き出したので、皆ぞろぞろそれに続く。

「そうだな。まずは飯だ。みんな腹が減っているだろう？　それと――ラインを呼んで来てくれ」

歯の出た男はキョトンとした。「あれ？　ラインさんならいませんよ」

今度はグッターハイムがキョトンとした。「なに？」

「出掛けてます」

「またどこかに行っちまったのか！」

「ええ。もう一週間になるし、もしかするとそろそろ帰って来るかもしれませんが……。ラインさんに用事でしたか」

グッターハイムは頭をバリバリ掻いた。

「そうさ！　参ったな。あいつめ、どうせまた行き先も告げてないんだろ？」

「そうなんですよ」
歯の出た男が頷くのを見て、メルメルはガッカリした。力強い味方が増えると思っていたのもあるし、単純にラインという戦士を見てみたいというのもあった。
「仕方ないわね。明日の朝まで待って、戻って来なければ諦めましょう」
ペッコリーナ先生が言っても、グッターハイムがそれでは納得いかないという様な顔をした。
「ちょっとあいつの部屋を見てみよう。もしかしたら行き先の手掛かりか何かあるかもしれん」
するとニレが慌てて手を横に振った。
「だ、駄目ですよ！　ラインさんは絶対に部屋には誰も入れるなって――」
グッターハイムがニレに向かってニヤリとした。
「知っているさ。そして、だからこそ入ってみたいと思っていたんだ」
とっても悪そうなグッターハイムの笑顔に、ニレは青くなる。
「ラインさんに知られたら殺されちゃいますよ！」
「ごちゃごちゃ言わないで鍵を寄こせ！　これはリーダー命令だぞ」
「そ、そんな～」むちゃくちゃを言うグッターハイムにニレは泣き出しそうな顔をしている。
「私達は先にご飯を食べて休みましょう。さすがに疲れたわ……」
心底疲れたようにペッコリーナ先生が言った。
「お食事はこちらです」歯の出た男が先に立って案内し始めた。
メルメルは少し迷ったが、「私もラインさんのお部屋を見てみたい！」
グッターハイムがニヤリとした。
「ぼ、僕も行こうかな……」
トンフィーが言うと、グッターハイムは勝ち誇ったようにニレを見た。

「子供が言うんじゃ、しょうがないな。――よし、行こうか」
「とほほほ……」
諦めてすっかり肩を落としたニレ。その背中をつつく様に歩きだしたグッターハイム。それについて行こうとするメルメル達の背中にペッコリーナ先生が声を掛けた。
「しょうがない人達ね。なるべく早く休むのよ！」
「は～い」
振り向きもせず、手をあげて生返事をするメルメル。ペッコリーナ先生は少し呆れた顔をしながら去って行った。
メルメルは、ずんずんと進んで行くグッターハイムに付いて行きながら、改めて隠れ家の内部の様子を眺めた。同じような大きさの小屋がたくさん建てられている。小屋と言っても、おそらくはそれぞれの住居になっているのだろうが、家と呼ぶには殺風景で、木を組み合わせただけの簡単な造りになっていた。それらが円を描くように外側の柵に沿って並べられて、その中心が大きな広場になっているのだ。その広場だけは木も抜かれ草も短く刈られて綺麗に整備されているが、他の部分は柵の外と変わらず、小屋と小屋の隙間にも木や草がぼうぼうと生えていた。上から見ても丸い広場が見えるだけで、高い木々に覆われた建物は全く見えないだろう。
「見てトンフィー！」
メルメルの指差した先には、大柄な女が一人木の上の方に登って洗濯物を枝に干しているところだった。波打つ黒い長髪が印象的だ。女は視線に気が付いてこちらを振り向いた。
「……リーダー！　お久しぶりです！」
「よおマリンサ！　変わりないか？」
マリンサは応えるように笑顔で手を降っている。すると、すぐ傍の小屋から若い女性が二人出てきた。
「あ！　やっぱりリーダーじゃない」
「声が聞こえたから、まさかと思ったけど……。あら？　いつの間にこんなに大きな子供作ったのよ！」

「やだ～！　お前だけだよって言ったのは嘘だったの～」
キャッキャッはしゃぐ若い女性にグッターハイムはニヤリとしながら手を叩いた。
「こらこら。子供がビックリしているだろうが。それに俺の子供じゃあないのさ。忙しいんだから、あっちに行ってろ」
「あ～ん！　つれないわね～」「たまには相手してよ～」
グッターハイムの言う通り、メルメルとトンフィーが驚いて目をパチクリしていると、投げキッスをしたりしながら女達は小屋へと戻って行った。
「相変わらずモテますね、リーダーは」
ニレがニコニコして言う。グッターハイムはフフンと鼻を鳴らした。
「まぁな。どっかの誰かさんにはオジサン何て言われたが……。俺もまだまだ捨てたもんじゃないな」
メルメルは、（まだ根に持っているのね……）と少し呆れたが、心なしか胸を張っているグッターハイムを見上げて、（言われてみれば、まぁ確かにハンサムだわ。オジサンだけれど）などと考えていた。
「メルメル、やけに女の人が多いね」
トンフィーが指差した先を見てみると、広場の向こうに井戸があり、四人の女が文字通り井戸端会議をしているところだった。
「本当だ……」
今のところ男はニレと歯の出た男しか見ていない。すると二人の会話を聞いていたニレが、フフと笑った。
「ここには私とフーバー以外には、男はいないよ」
「えっ！　どうして？」
フーバーとは先程の歯の出た男だろう。ペッコリーナ先生は十数人の仲間がいると言っていた。ニレとフーバー以外、残り全部が女とは……。メルメルとトンフィーの驚いている顔を見て、ニレは更に笑った。

「どうしてって……。ここは第一部隊の隠れ家だからさ。第一部隊はほとんど女性しかいないんだよ」

メルメルとトンフィーは頭にハテナがたくさん浮かんだ。第一部隊というのも知らないし、どうして第一部隊のほとんどが女性なのかも謎だ。

「やっぱり隊長が女性だと、部下には女性が集まるものなのさ。リーダーなんか辞めて、ラインに第一部隊長と交換して貰おうかな～」

「え！」

ニヤニヤと何だかいやらしい顔でグッターハイムが言うと、トンフィーは目をまん丸にして思わず叫んでしまった。メルメルはしばらくグッターハイムの言葉を頭の中で整理して、ようやくハッと気付いた。

「ら、ラインさんって女の人なの？」

戦士ライン　3

「ん？　そうさ。言ってなかったか？」
グッターハイムは変な顔のメルメル達（髭もじゃの大男から、なんとか女性戦士への想像に切り替えようと必死なんだ）をほったらかして先へ進み、とある小屋のドアの前で立ち止まった。
「ほらニレ。とっとと鍵を開けろ」
「とほほほ……」
ニレはガックリ肩を落として、腰に下げている鍵束の中から一つを選び、鍵穴に突っ込んだ。ゆっくり回しながら、
「ら、ラインさんに叱られたら、ちゃんと事情を説明して下さいよ～」
グッターハイムはあさっての方を向いて口笛を吹いている。
メルメルは我に返り、二人を追い駆けて慌ててドアの前に走って行った。
ドアの真ん中に、『ライン』と書かれた木のプレートが掛けられている。書いてある字は太く鋭く乱暴な感じで、ラインのンなど最後がはね過ぎて上に突き刺さってしまっていた。しかしプレートはピンクや白の可愛らしい造花で縁取られていて、如何にも女性らしい雰囲気を醸し出している。そのアンバランスなプレートをメルメルは、（きっと字はグッターハイムあたりが書いたんだわ）と考えたが、
「しかしいつ見てもラインの字は酷いな。ニレ、お前こんな字の回りに花なんか飾るなよ」
「でも、少しは女性らしさが出るかな、と……」
という二人の会話に思わず呆れた。
（……多分、ペッコリーナ先生より縦にも横にも三回りくらいでっかくて、おっきな鎖鎌を振り回すような女戦士ね）
メルメルは、やっと想像が固まったところで部屋に足を踏み入れ

た。
「……ずいぶん片付いているじゃないか。以外だな」
グッターハイムが部屋を見渡して首を傾げながら言う。
「私が毎日片していますから」
ニレが言うと、グッターハイムは納得顔で頷いた。
「しかし何だ？　この匂いは……」
グッターハイムは顔をしかめる。確かに、何だか焦げ臭いような、何かが腐ったような妙な臭いがしている。
「窓を開けましょうか？」
ニレが窓を開けると、外から気持ちの良い風が入ってきて匂いが少し薄れた。
メルメルとトンフィーはぐるりと周りを見回した。殺風景な部屋だ。寝床は綺麗にベッドメイクされていて少しの乱れもなく、確かに主が不在である事を告げていた。他には小さな本棚と、机が置いてあるだけ。机の上には書類らしき紙や手紙の束が積み上げてある。グッターハイムは手紙を持ち上げてひっくり返して裏を見たりしながら、つまらなさそうな顔をしていた。
「何だよ。ラブレターの一つでもありゃあ面白いのにな……」
メルメルは何となしに棚にある本を眺めていた。
『フェンリファルコム箸　究極の氷魔法』
『スベルス箸　古の剣術と進化した技』
『ナンブラカラコッツ著　闇の王国の謎』
（これ、ワタシも持ってるわ。園で配られたもの。――何だか真面目な学問書がほとんどでつまらない……あ！　これ――）
『トルリンペラ箸　スカラの大冒険一』
（ワタシも持ってるわ！　スカラが友達のレリックを殺されて、怒りに燃えて敵の城にたった一人で乗り込んで行くところがとっても泣けるの！　……ラインさんも読んだのかしら？）
子供向けの冒険小説だ。しかし良く見てみると一から八まで全ての巻が揃えられている。

（……完全にファンね）

それにしてもおよそ女性らしいとは言い難い本ばかりだ。すると、同じ様に本棚を眺めていたトンフィーが、「メルメル」と呼びかけてきた。トンフィーは本棚の一番下の端っこを指差している。

『あなたにも出来る美味しいパスタの作り方』

『安心簡単おふくろの味』

『子供でも作れる百のレシピ』

『彼に家庭的だと思わせる方法』

なんだかホッとして、トンフィーとメルメルは思わず顔を見合わせて微笑んだ。

「なんだ？　あの布は」グッターハイムの指差した先。そこには壁一面黒い布が貼り付けられていた。

「あれ？」

良く見てみると、布は天井に釘で打付けられていて、窓から入ってくる風で端の方がはたはた揺れていた。

「さては向こう側にも部屋があるな？　外から見た感じよりやけに部屋が狭いと思ってたんだ」

ニヤリと悪い顔をして、グッターハイムが黒い布に向かって歩き出す。

「だ、ダメですそっちは！　――あ、あ～！」

ニレの制止を無視して、グッターハイムがバサッと布をめくって、向こう側に消えた。

「……なんじゃ、こりゃあ！」

叫び声が聞こえて、メルメル達は慌てて後を追って布をめくり上げる。

「……な、何？　これは」

――そこには六畳程の空間があり、様々な大きさの鍋やらフライパンが雑然と置かれ、床には粉の様なものや、木の実やら葉っぱの

乾いた物やらが散乱していた。一言で言えば、
「ぐちゃぐちゃだ……」である。
部屋には二つ並んだガス台があり、両方とも大きな鍋がかけられていて、さんざん噴きこぼれた様な跡があった。中を覗いてみるといずれもどす黒いおかしな色をしていて、部屋の匂いの原因に違いない腐った様な臭いがするものが入っていた。ガス台の前は壁がすすけて黒っぽくなってしまっているし、見上げると天井も焼け焦げていた。
机の上にはボールが置いてある。中に不思議な色の液体が入っているのを見て、メルメルは突っ込んだままになった棒でグルグルと掻き回してみた。ところが、なんだかネバネバとして糸を引いたので直ぐに止める事にした。
何かの本があちこち開いたままだったり、隅に積み上げてあるのに気が付いて、メルメルは、（きっと呪いの本だわ……）と思った。
「ど、毒薬作りでもしていたのか？　ラインは……」我に返ってグッターハイムが呟いた。
「こ、この部屋は私もめったに入れてもらえないんですから、見た事は絶対秘密にして下さいよ！」
額に汗まで浮かべて泣きつくニレを横目で見ながら、メルメルはこっそり床に落ちている本を拾ってみた。
『初めてでも簡単！　今日からあなたも名パティシエ』
「……」
トンフィーも別の本を覗いている。
『包丁も火も使わないで出来る魔法の一品料理』
「……」
グッターハイムは恐ろしげに後ずさって、黒い布をめくり上げた。
「ま、まぁニレのたっての願いだからな。こ、この部屋に入った事は黙っておこう。うん。……それにしても、誰を呪い殺すつもりなのか……ラインの奴。……ブツブツ」
一人でブツブツ言いながらグッターハイムは逃げるように去って

いった。
　取り残されてボーっとしているメルメルとトンフィーの肩を、ニレがポンっと叩いた。
「さ！　ご飯でも食べに行こうか？」
　二人はコックリ頷いて踵を返した。黒い布を捲り上げて出て行くニレに続いて布を持ち上げながら、メルメルとトンフィーはもう一度部屋を振り返った。とても料理をする部屋には見えないが、残念ながらそこいらに転がったどの本を見ても、『呪いの秘薬の作り方』という様なものは見つかりそうに無かった。

「こら！　待ちなさいミミ！」

ミミは一瞬立ち止まると、チラリとメルメルを振り返った。そして一度大きく尻尾を振って、目の前にある桜の木の一番下の枝に、驚くほどの跳躍力で飛び乗った。

「ムムム～」

見上げるメルメルをあざ笑うかのように、ミミはのんびりと伏せをして、腕の毛を舐めてくつろぎ始めた。ところが――

「やっ！」

メルメルが、これまた驚くほどの跳躍力でミミの乗っている木の枝に飛び付いた。そして、ブゥン、ブゥンと体を前後に大きく揺らし、その反動でクルリと回転して枝の上に飛び乗った。ミミはビックリして舌を出したまま固まってしまった。

「へ～っへっへっ！」メルメルはニヤ～っと笑った。

「メルメル～！」ようやくトンフィーが追い付いて来て、木の上で向かい合った少女と猫を見上げた。その腕に、やる気無さそうにびよ～んと伸びたシバを抱えている。「もう、諦めようよメルメル～！」

「待って！　もう少しだから……」メルメルはミミににじり寄りながら、「つ～か～ま～え……たっ！」

ミミはサッと隣の木に飛び移ってしまって、スカッとメルメルの腕は空を切った。

メルメルはキランとミミを見すえて、素早い動きで隣の木に飛び移った。ミミはまたまたビックリして、慌てて一つ上の枝へと飛び移る。もちろんメルメルはそれを追いかけて行く。

一つ上、二つ上、隣の木、一つ下、二つ下、右の木、左の木、トンフィーは首を振り振りメルメル達を目で追いかけている。そして遂に一人と一匹は、木から隣接している小屋の屋根へと飛び移った。

屋根から木、木から屋根へと隠れ家の中をグルグル回り始める。
屋根の上をドカドカと走り回る足音に、小屋からは、「何だ何だ？」とたくさん人が出て来てしまった。
「一体どうしたんだい？」ニレも小屋から出て来た。
日も落ちてすっかり暗くなった隠れ家の屋根の上を、猫と一緒にぴょんぴょん走り回るメルメルを見上げて唖然とする。
ミミは猫らしくピョンピョンと木の上を飛び回っている。ところが、それに負けじと同じ様に木から木に飛び移るサルも真っ青なメルメルを見て、ギャラリーは段々呆れるを通り越して感心し始めた。
「頑張って！」
「ほら、もうちょっと！」
「行け～！　そこだ～！」
応援する声に励まされて、メルメルは少しずつミミとの距離を縮めて行く。今や、疲れきって眠るグッターハイムとペッコリーナ先生以外は、隠れ家にいる全員が出て来て、メルメルとミミの追いかけっ子を見守っていた。そして遂に、
「いまだーーー！」
柵の際まで追い詰められたミミに、メルメルが飛び付いた。
しかし、
「あ、あ～！」
ミミはヒラリと柵の外へと飛び降りて、悠々と歩きながら森の中へと消えて行った。
「あらららら……」
メルメルは名残惜しそうに、少しの間ミミの消えて行った森を見つめる。まさか追いかける訳にはいかないので、諦めて木をスルスルと降りた。夢中で走り回っていた時は気付かなかったが、余りにもたくさんの人が集まっているのでメルメルはちょっとだけ驚いた。トンフィーを見れば、ペコペコとあちこちに頭を下げてまわっている。
「す、すいませんでした！　お騒がせしました。あの、ゆっくりお

休み下さい……」
　それでやっとみんな散り散りに、「惜しかったわね～」とか、「お嬢ちゃん凄いわね～」とか言いながら去って行った。残ったニレは宇宙人でも見る様な目でメルメルを見つめている。
「どうしてミミを追いかけていたんだい？」
　メルメルはポケットから例の青い首輪を取り出した。
「……首輪をつけようとしたのかい？」
　こっくり頷くメルメル。良く見ると首輪を持ったその手も、可愛い顔もあちこち引っ掻き傷だらけで、ミミとの激しい戦いの模様が伺える。
「ミミったら何であんなに嫌がるのかしら！　いいじゃない？　首輪を着けるくらい」
「だから、諦めてシバにしておこうって言ったのに……」
　プリプリするメルメルに、トンフィーは情けない声を出した。こちらも同様に体中ひっ掻き傷だらけになっている。
「どうしてミミの方が良いんだい？」
　ニレは、既にこれまでの経緯をメルメル達に全て聞いていたので、特にミミじゃなければいけないとは思えなかった。二匹は同様に特別な力を持っているのだ。
「ま、別にシバでもいいんだけれど……。でも、その……。ねぇ、ニレ。ペットにするなら、リーダーの方が良いのでしょう？」
　ニレは、あっちこっちに話が飛ぶメルメルに、思わず目をパチクリさせた。
「あ、ああ。――そりゃあ、群のリーダーなら、その群全部を操れる事もあるし……。あ！　そういうことか！」ニレはようやくピンときた。しかし……。と再び首を傾げる。「でも、別にミミがリーダーって訳でも無いだろう？」
　メルメルはトンフィーに大人しく抱かれているシバをじっと見つめた。
「でも、どちらかと言えばミミじゃないかしら？　だって、いつで

もミミが前を歩いてシバがその後ろを付いて歩いているじゃない？」
　確かにその通りだが、果たしてそれだけでミミがリーダーだと言えるのか？
「別にリーダーとかペットとか関係ないんじゃないかい？　これまでだってミミとシバはメルメルを助けてくれたんだろう？　他の猫達も道案内してくれたりして、二匹に協力してくれているみたいだし」
　そうなのだ。だからメルメルだって最初は一応ミミをペットにしとこうかな、くらいの気持ちだったのだ（だけど、ミミがあんまり嫌がるから何となく意地になっちゃったんだ）。
「じゃあ、シバに決定って事でいいわ。それでは、気を取り直していよいよ緊張の首輪つけの儀式を始めます！」
　何だかメルメルは勝手に仕切り直して、仰々しく首輪を両手で摘みあげた。
「ちゃちゃちゃちゃ～ん♪」
「ちゃちゃちゃちゃ～ん♪」
「ちゃちゃちゃちゃん♪」
「ちゃちゃちゃちゃん♪」
「ちゃちゃちゃちゃん♪」
「ちゃちゃちゃちゃん♪」
「ちゃんちゃちゃ～ん、ちゃ～んちゃちゃ……♪」
　メルメルとトンフィーはノリノリで効果音をつけながら、ぼけっとしているシバに必要以上にゆっくりと首輪をつけた。
（それじゃ結婚式だよ……）とニレは内心思ったが、取りあえず黙って置くことにした。
「……」
「メルメル？」
　トンフィーの呼びかけにも答えず、首輪をつけた瞬間からメルメルはじっと目を瞑ったままだ。
「ね、ねぇメルメル？」

「おかしいわ」「へ？」
メルメルは目を開いて、トンフィーに抱えられたままのシバをじっと見た。そして少しだけ関係ない事を考えた。
（なんだかシバったら少し目が離れているのね。宇宙人みたい……）
「何も感じないわ」
「ど、どうゆうこと？」
何だか妙なメルメルの様子にトンフィーはおどおどしている。
「だって、ペットの契約をしたのよ？　これからはシバと色々影響し合うんでしょ？　何か――、何か感じる筈だと思ったのよ」
「何かってなんだい？」笑いを含んだ声でニレが聞いた。
「例えば……雷に撃たれたみたいに、ビビビビ！　……とか」
今やニレは声を殺し、体をくの字に曲げて笑っている。
「あはは！　別にペットにしたからって、特別何かを感じたりはしないよ。メルメルって面白いな～」　トンフィーにまで笑われて、メルメルは少し膨れた。
（何よ！　それじゃあ今までと、本当に何も変わらないじゃない）
何となく恨みがましくシバを見つめる。相変わらずシバはぼけっとした、ちょっと宇宙人みたいな顔をしていた。

戦士ライン　5

翌朝。まだ、日も登りかけの午前五時。夕べ、強行軍に疲れきって日も落ちる前から眠りこんだグッターハイムにとっとと起こされたメルメルとトンフィー。眠い目をこすりながら（だって、二人は追いかけっこのせいで眠るのが遅かったんだ）朝からゴージャスに、魚の丸焼きやらステーキやらフルーツポンチやらが並んだテーブルに、ちょっとうんざりして立ちつくしてしまった。そのテーブルの脇には、「何か御用があれば何なりと」とばかりに女性が三人立っている。メルメルは、（やっぱりリーダーだから特別待遇なのかしら？）などと考えながら席に着いた。

「俺には果実酒をくれ。メルメル、トンフィー、何か飲み物は？」

グッターハイムは慣れた様子で女達に言いつける。メルメルは何だか焦ってしまった。

「え？　あっと、紅茶がいいわ」

「ぼ、僕は、あの、み、ミルク……を下さい……」トンフィーはもっと焦っている。

「冷たいのですか？　それとも、暖かいものを？」

「暖かいのがいいな」「ぼ、僕も……」

やんわり微笑んで部屋を出て行く女性を見送り、メルメルはふと一つ空いている席に目を移した。

「ペッコリーナ先生は？」

「……ああ。声をかけたんだがな。疲れているから、もう少し寝させて欲しいとさ……モグモグ」

朝から豪快にステーキにかぶりつくグッターハイムに、何だかメルメルは感心してしまった。

「大丈夫かしら？　ペッコリーナ先生……」

「バグ、モグモグ。もう少し休めば大丈夫だろ……モグモグ。あんまりグズグズしてはいられんが、ペッコリーナも年だからな……ゴ

クン。ちと無理させ過ぎたかな？」
　喋りながらも次々と食事を口に運ぶグッターハイムに半ば呆れながら、メルメルはバスケットに山盛りになったパンを一つ取って頬張る。
（まあまあだけれど、おじいちゃんのパンの方が美味しいな……）
「バクバク、ほら。モグモグ、二人とも、もっとたくさん食え……ゴクン。戦いに出たら飯なんて、モグモグ、思う存分はなかなか食えないぞ！」
　トンフィーは運ばれてきたミルクをちびちび飲みながら、「戦士って大変なんだね」と溜め息を吐いていた。
「おはようございます」ニレが、ニジイロインコのウォッチを肩に乗せてニコニコと現れた。
「よ！　……モグモグ」
「おはようニレ……ムシャムシャ」
「おはようございます」
「おはよう。夕べは良く眠れたかい？」
　メルメルもトンフィーもコクコクと首を振る。
「ミミは帰って来たかい？」
「ええ。あの子ったら、朝になって気付いたら、おふとんで一緒に寝ていたのよ」
「よーし！　腹も一杯になったし――ニレ！　一汗流すか！」
　グッターハイムが腹を叩きながら立ち上がり、ニレは思わず後ろに仰け反った。
「え、え～！」
「え～……じゃない！　喜べ。リーダー直々お相手してやるんだ」
「とほほ……お手柔らかに……」
　のっぽのニレが、すっかり肩を落として小さく見える。その肩にグッターハイムは手を回し、半ば引きずるようにしてドアの向こうに消えて行った。メルメルは二人の稽古を見てみたい気持ちで一杯だった。しかし、

「ね、トンフィー。ペッコリーナ先生の様子を見に行きましょうよ」
「そうだね。心配だもんね」
トンフィーは残りのミルクを男らしく一気に飲み干した。

先程飲み物を持ってきてくれた女性に場所を聞いて、外に出て三つ左隣の小屋に向かう。広場の中央には及び腰になって剣をかまえたニレ。そして、ニヤリと片頬をあげて腕組みをしているグッターハイムがいる。あちこちの小屋から続々と観客が集まり始めている。メルメルとトンフィーは、気持ちをそちらに半分持って行かれながら目的のドアの前に立った。
「起こしたら可哀相だから、ノックしないで入ろうか？」
トンフィーの言葉にこくりと頷いてメルメルはドアを開けた。無言のまま、こんもり膨らんだベッドに、そろりそろりと近づいて行く。
「……」二人並んで、じっとペッコリーナ先生の寝顔を見つめてみる。それほど顔色は悪くなさそうだ。
「ムニャムニャ……それよりお団子の方がいいわ……ムニャムニャ」
どうやら夢を見ているようだ。トンフィーは肩を震わして、笑い声を出さない様に堪えている。
「ププププ……。この様子なら、少し寝て甘い物でも食べたら元気になりそうだね……ププププ」
これを聞いてメルメルは良い事を思いついた。
「そうだ！」「しー！」
トンフィーは人差し指を口にあててメルメルをたしなめる。メルメルは首をすくめてペッコリーナ先生を覗きみる。
「ムニャムニャ……もちろんプリンも好きよ……ムニャムニャ」
口を両手で塞ぎ、肩を震わせながらメルメルは忍び足で小屋を出た。自分が先程まで眠っていた小屋に駆けて行く。ドアを開ける前にちらっと視線を送ったが、広場には野次馬が集まり過ぎて、グッターハイムとニレの戦いの様子は良く見えなかった。ベッドの横に

置いてあったピンク色のうさぎのアップリケのついたカバンを開けて、中を覗きみる。

ワー……　と外で歓声が聞こえた。メルメルはうさぎのカバンをひっつかみ、外へと飛び出した。

バガーン！　ゴギン！　バッコーン！

「どうしたニレ！　もう終わりか！」

「うひー！」

少し輪が広がっていて、隙間からチラチラと二人の姿が見える。その様子からも、聞こえてくる声からも、ニレがこてんぱんにやられているのが分かった。メルメルは急いでペッコリーナ先生のもとに戻った。

バン！　「しー！」

焦って、勢いよくドアを開け過ぎてしまって、またトンフィーにたしなめられてしまった。ペッコリーナ先生は相変わらず熟睡だ。メルメルはうさぎの鞄をごそごそと探った。

トンフィーは首を傾げた。「一体何を取りに行っていたの？」

「じゃ～ん」メルメルはリボンのついた小さな袋を取り出した。「これはね、おじいちゃんの焼いたチョコバナナクッキーなの」

言いながら、再び鞄をあさって紙とペンを取り出した。メルメルがサラサラっと書いたものをトンフィーは覗き見て、ニッコリとした。

「これを食べて元気だしてね……か。なるほどね！」

ワー……ワー……。外から大歓声が聞こえて、メルメルはトンフィーの手を取った。

「なんだか凄そうなの！　早く行きましょう！」

「うん！」

慌てて外に飛び出す二人。ペッコリーナ先生の枕元には、クッキーの袋が置いてある。

「ムニャムニャ……クッキーもいいわね……ムニャムニャ」

バッコーン！　手首に激痛が走り、持っていた剣が吹っ飛んだ。
ニレはすっかり丸腰になった自分に気付いて両手を上げた。
「ぎ、ギブアップでござる……」
「ガーハッハッ！　だらしないなニレ！　……よし。次！」
次と言っても、誰もグッターハイムに向かって行こうする者などいないのだ。
「おいおい！　誰かいないのかー？　第一部隊は腰抜けぞろいか！」
「ふ、フーバー！　行け！」
ニレに言われて歯の出た小男、フーバーは慌てて手を振る。
「お、俺は魔法専門だから、剣はちょっと……」
「わ、私だってそうだ！」
ニレが怒鳴ると、グッターハイムはニヤリとした。
「別に魔法を使っても構わんぞ？」
トントンと、手に持った棒切れで肩を叩く。そうなのだ。グッターハイムは棒切れ。ニレは真剣での勝負だったのだ。
「私がお相手します！」鞭を持った大きな女が前に出て来た。
「よーし！　来い、マリンサ！」
「あの人、洗濯物を干してた人だよ」
人混みを掻きわけて一番前で観戦しているメルメルとトンフィー。
横で目をキラキラさせながら、食い入るように戦いを見ているメルメルが、万が一にも、「ワタシが戦うわ！」なんて言い出さないかとトンフィーはドキドキしていた。
「やー！」
マリンサの腕から、怒涛のような勢いで鞭が繰り出される。それを、グッターハイムは大きな体には似つかわしくない程の素早い動きで、右へ左へと逃れ続けている。
一瞬鞭の動きが止まり、グッターハイムは首を傾げる。次の瞬間、マリンサは思い切り腕を横に振った。
ビュー！

グッターハイムは左右に避けるのは無理だと判断して、上へと大きく飛んだ。マリンサはニヤリとして腕を振る。鞭は蛇のようにくねくねと、降りてきたグッターハイムの足に絡みついた。
「ふん！」マリンサが鞭を引っ張る。しかし――。
「どうした？」グッターハイムはびくともしない。
「ぐぬぬ……ふん！」渾身の力を込めて引っ張る。
――やはりびくともしない。グッターハイムはニヤリとした。
「ふん！」今度はグッターハイムが、鞭が絡まっている足を思い切り引っ張った。
「ああ！」マリンサは前倒しに倒れ、鞭から手を離してしまった。
「はっ！」グッターハイムは素早くマリンサに飛びつき、首に棒切れを押し付けた。
「ま、参りました……」
「なかなか健闘したな。――よし！　ニレ！　フーバー！　他の皆もまとめてかかってこい！」
ワッ！　と数人が一斉に飛び交る。グッターハイムは次々と、棒切れで向かって来る人々の剣や槍を叩き落として行く。
「す、凄い……」
メルメルもトンフィーも、あまりのグッターハイムの強さに唖然としてしまった。
「ハッハッハッ！　なんだ、なんだ！　こんな事で闇の軍隊と戦えるのか！」
このままではグッターハイム一人に全員がやられてしまう。とそこへ、

「グッターハイム！」

広場全体に凛と澄んだ声が響きわたり、皆が一斉にそちらを見た。
（……誰？）
隠れ家の入口に誰か立っている。

（遠過ぎてよく見えないわ……）

メルメルは目を凝らした。すると突然、その人影が走り出した。

ザザザザッ！

みるみるうちに近づいて来て、ようやく容姿を確認しかけたその瞬間。バッ！　と前方に大きく跳躍した。

メルメルの目の前を、赤い影が風のように通り過ぎた。

ザン！　ガキーン！　ズザザザー！

構えた棒切れが真っ二つに切られ、グッターハイムは瞬時に腰にぶら下げた剣を引き抜いた。続けて振り下ろされた二撃目をその剣で受けて後ろに大きく下がった。

「私が相手しよう」

戦士ライン　6

メルメルは呆然と、その、突然現れた人物を見つめた。
背は女性としては高い方だ。良く引き締まった体に小麦色の肌。鎧――という程の物ではないが、革の胸当てや肘あてなどを着けていて、それらがみんな赤色をしていた。そして、風に揺れるやや短めの髪も鮮やかな赤だった。
グッターハイムはニヤリとした。「やっと現れやがったか」
「やった！　ラインさんだ！」
ワー……と人々が歓声を上げた。遠巻きに見ていた者も、グッターハイムにやられて倒れた者も、皆嬉しそうにニコニコしている。
「あれが……ラインさん……」
メルメルとトンフィーは吸い込まれるようにその姿を見つめた。
「みんな！　もっと下がるんだ！」
いつの間にか、ニレがメルメル達の横に来ていて叫んだ。
「君たちも少し下がって。巻き添えをくったら大変だ。なにせレジスタンスで一、二を争う二人の戦いなんだから」
ニレがゴクリと唾を飲み込むのを見て、メルメルとトンフィーも同じように唾を飲み込んだ。
「随分私の部下を可愛がってくれたようだな」
ラインは両手で剣を構えながら、ズリズリと左手に円を描くように移動する。
「まあな。へなちょこばかりで驚いたぜ。隊長の顔を見てみたいと思っていたところだ」
剣を右手にぶら下げ、同じように左手に移動しながらグッターハイムはニヤリと笑う。
「挑発しようとしているんだ……」
隣でニレが呟いて、メルメルは思わずラインの顔をじっと見た。
初めと変わらず涼しい目をしている。

「総大将はお前だろう？　鏡ならトイレにあるぞ」
「減らず口をたたきやがって……」
なんだか逆にグッターハイムの方が興奮してきたようだ。
「だいたい仲間をこてんぱんにして気分良くなってどうする？　自信を奪ってしまうだろうが。脳味噌まで筋肉で出来ているのか？」
「ぬわに～！」
ラインの言葉に完全に血がのぼった（確かに、脳味噌まで筋肉かもしれないとメルメルとトンフィーは思ったんだ）グッターハイム。怒りの為、明らかに大振り過ぎた一撃は、スカッとラインに避けられてしまった。ラインがすかさず下から剣を振り上げ、その攻撃を何とかギリギリでグッターハイムは後ろにかわした。しかし体制を崩して片膝をついてしまう。
ガキーン！　今度は上から振り下ろされてきた剣を、グッターハイムは自らの剣で受け止める。ググググと上から思い切り体重をかけてくるライン。
「ぐぬぬ……」顔を赤らめて、徐々に押し返し始めるグッターハイム。
「あ、いかわらずの、馬鹿力め！」
ラインは力を抜いてクルクルと回りながら後ろに飛び退き、空中で腰にもう一本ぶら下げていた剣を抜いた。間を置かず着地と同時に飛びかかる。
ガキーン！　キーン！　ガキーン！　ガキーン！
二本の剣で矢継ぎ早に攻撃してくるラインに、グッターハイムは受けるのが精一杯と言った様子だ。
「踊っているみたい……」
まるでサーカスのショーでも見ているようだ。それ程ラインの動きはしなやかで美しい。
「二人とも凄すぎる……！」
二本の剣を巧みに使いこなすラインも凄いが、その剣を全て受け続けているグッターハイムも凄い。

「一体どっちが勝つんだろう……」
ガキーンガキー！　ガキーン！　キーン！
広場はいつの間にか静まり返っていた。観客は余りの壮絶な二人の戦いに固唾を飲んで見守るばかりだ。剣と剣がぶつかり合う音、二人の激しい息遣いだけが聞こえている。どちらが勝ってもとにかく最高の戦いだったと言えるだろう。メルメルやトンフィー、ここにいる全ての人間が今日この場にいられたことを神に感謝した。
ガキーン！　ガキーン！

「あら！　ライン帰って来たの！」

突然、静まり返っていた広場に場違いな明るい声が響きわたり、皆一斉にそちらを見た。そこにはペッコリーナ先生が、満面の笑みを浮かべて立っていた。
「良かったわよー。もしも帰って来なかったら、諦めて出発しちゃうところだったんだから！」
ペッコリーナ先生はどんどん人並みを掻きわけて、広場の中央に向かう。ラインとグッターハイムは剣を合わせたまま固まっている。
「ね、グッターハイムから大体の話は聞いたかしら？」
そうして、遂に二人の真横まで来てしまった。
「いや、まだ何も聞いていないな……」
ラインが言うと、ペッコリーナ先生は呆れた目でグッターハイムを睨んだ。
「何してるのよ？　遊んでる場合じゃ無いのよ？」
「あ、遊んでって……」
「フッ」ラインは薄く笑って二本の剣を鞘におさめた。「何やら深刻そうだな？　それでは遊びは止めて話を聞こうか？」
ラインに言われて、グッターハイムは目をパチパチさせた。
「――ガッハッハッハ！　まったく、ペッコリーナ先生相手じゃ、リーダーも隊長も形無しだな！」

「アッハッハッハッハッ！」
グッターハイムが笑うと、いよいよ広場の緊張が解けてみんな一斉に笑い出した。
「……？　何よ、みんなどうしたのよ一体？」ペッコリーナ先生は一人首を傾げている。
メルメルとトンフィーも、笑いながらペッコリーナ先生のもとに駆けつけた。
「先生！」「もう具合はいいの？」
「すっかり元気よ！」ペッコリーナ先生は両手でガッツポーズをした。
「……」ラインは、透き通るような青い目でメルメルとトンフィーを見つめる。
「ああ、挨拶もまだだったな。こっちは、プラムの孫のメルメルだ」
「は、はじめまして……」メルメルがもじもじしながらあいさつした。
「プラムの？　……ああ、はじめまして」
ほとんど表情を動かさないライン。メルメルはたくさん話しかけたかったけれども、なんだか気後れしてしまった。
「それからこっちは――ソフィーの子のトンフィーよ」
ペッコリーナ先生が妙な紹介の仕方をした。メルメルもトンフィーも首を傾げる。
「ああ……。確かに面影がある」
「母さんを知っているんですか？」
「勿論知っている。ソフィーは私の大切な戦友だ」
トンフィーは目を見開いて驚いている。メルメルは目の玉を上にして考えた。
（戦友……。二人ともトキアの正規軍の兵士だったのかしら？）
「ソフィーの様子はどうだ？　傷は少しは良くなったか？」
「傷……？」
訳が分からず首を傾げるトンフィー。見かねてペッコリーナ先生

が口を挟んだ。
「ソフィーの病は、戦で受けた傷が原因なのよ……。ソフィーは最近大分調子がいいらしいわ」
最後はラインに向かって微笑みながら言った。ラインの方もいくらか笑ったように見えた。
「そうか。それは良かった」
「か、母さんは兵士だったんですか？」
トンフィーがラインとペッコリーナ先生の両方に向かって問い掛ける。
「そうだ。知らなかったのか？」
ラインが不思議そうに首を傾げると、思わずトンフィーは俯いてしまった。
「僕は……何も……知りません……」
ラインはそんなトンフィーの様子をじっと見つめている。ペッコリーナ先生が気遣うように明るい声で語り掛けた。
「ソフィーは、もう少し大人になってから話そうと思ったのね。きっと」
「父さんも兵士だったんですか？」
パッと顔を上げて、トンフィーはペッコリーナ先生の目を真っ直ぐに見た。ペッコリーナ先生は少し気後れしたような顔をした。
「え、ええ。そうよ」
「もしかして、父さんは……父さんは、戦死したんですか？」
メルメルは驚いてしまった。確かトンフィーのお父さんは、トンフィーが生まれる前に病気で死んでしまったはずだ。
（トンフィーが、ソフィー母さんにそう聞いたって言っていたもの）
「その通りだ。青暗戦争で命を落とした。ソフィーはお前に何も教えていないんだな……」
相変わらず表情に乏しい顔でラインが言った。トンフィーは驚いて言葉を失った。
「おい、話は後だ！　のんびりしている場合じゃ無い。とりあえず

出発だ」
「何処へ？」ラインは首を傾げる。
「詳しい話はおいおいする。とりあえず黙って付いて来い。それと、ニレ。お前も来い」
「へ？　あ、はい」
なんだか分からないけれども、リーダー命令には逆らえないので、取りあえず頷いているといった様子のニレ。メルメルはこの優しいお兄さんが大好きになってきていたので、大いに喜んだ。
「一週間、もしかしたらそれ以上戻って来られないかも知れない。それなりの支度をしておいてくれ。準備が出来たらすぐ出発する」
頷いて皆走り出した。メルメルとトンフィーも部屋に荷物を取りに走り出す。
「トンフィー！　お前の荷物は大き過ぎる。俺の荷物と一緒に入れておいてやるから、無駄な物は置いて行け！」
「は、はい……」
トンフィーは、なんだか弱ったような顔をして頷いた。

戦士ライン　7

初めは暖かく気持ちの良かった日差しも、遮るものが何もない草原を進んで行くうちに、段々厳しい物へと変わってきた。メルメルは、馬の振動でずり落ちてきた最初の頃より大分重くなってしまったうさぎのアップリケのついた鞄を、よいしょと持ち直した。トンフィーがどうしても持って行きたいから、こっそり持っていてくれと頼んできた教科書やら参考書やらがたくさん（グッターハイムに言ったら、間違いなく置いて行けと言われると思ったんだ）入っているのだ。

ライン、グッターハイム、ペッコリーナ先生とメルメル、ニレとトンフィー、それぞれを乗せた馬の前を、森を抜けてから再び現れた灰色猫――この猫はチャーチャンと言う――が一生懸命走っている。メルメルは、馬に追われるように走るチャーチャンが、暑さで倒れはしないかと心配になった。ミミとシバは腕の中でのんびりしている。

「まったく奇っ怪な事だ……」チャーチャンとミミとシバを交互に見ながら、ラインは溜め息混じりに呟いた。「是非とも、変身するところを早く見たいものだ」

自分の方を見て言われて、メルメルはもじもじした。出会ってからずっと、メルメルはなんだかこの美しい戦士に気後れしてしまって、上手に話し掛けられずにいた。一つには、青い透明な目が全てを見透かしているようで少し恐ろしいのもあったし、ラインのしゃべり方が素っ気なく、冷たい感じがするのもあった。

「こいつらの変身を見たら、さすがのラインもおったまげるぞ。余りにも……おかしくてな！　ハッハッハッ！」

グッターハイムは大笑いをしている。おそらくミミとシバのポーズを思い出しているのだろう。ラインは首を傾げてメルメルを見た。

「面白い……とは？」

「え？　えっと、ポーズがあって……」メルメルは顔を赤らめて手を上げた。「こう――ヤーヤーヤー！　って……」

ニコリともしないラインに困ってしまい、ゆっくり両手を下げた。

「それは――面白いな」

ちっとも面白い顔では無かった。

「それにしても本当に美味しかったわ～」

後ろでペッコリーナ先生がウットリと言った。メルメルはなんだかほっとして振り返る。

「おじいちゃんのクッキー？」

「そう……。チョコと――あと――」「バナナよ！」

ペッコリーナ先生はニッコリした。

「そう！　サクサクのクッキーの中に、チョコがやわらかくジュワッと入っていて、バナナの甘い香りが……」

「何だかよだれの出そうな話しだな」言いながら、グッターハイムは本当によだれをすすり上げる。

「とっても美味しいのよ！　プラムはお菓子作りの天才ね！」

「エヘヘ」メルメルは、自分の事を誉められているわけでも無いのに、照れくさそうに笑っている。

「本当におじいさんのお菓子は最高なんだ！　ケーキもシュークリームもプリンも……。勿論、クッキーも！」

トンフィーも、自分の自慢でもするように興奮している。メルメルはいよいよ嬉しくなってきた。

「そうだ！　……メルメル、私、最高のアイデアを思いついたわ！」

「な～に？」メルメルはワクワクしながら後ろを仰ぎ見る。

「プラムが帰って来たら、メルメルと二人でお菓子屋さんをするの！」

メルメルはびっくりしてクリクリの目を更にクリクリに見開いた。

「お菓子屋……さん？」

「そうよ！　だってあんなに美味しいお菓子を、メルメル一人が味わうなんてずるいもの！」

「いいね！　それ、最高だ！　僕、休みの日は手伝いに行くよ！」
勝手に盛り上がっているペッコリーナ先生とトンフィー。
メルメルはほんわかと想像してみた。メルメルの家を少し改造して、お肉屋ラウルのように商品のお菓子をガラスケースに並べるのだ。プラムじいさん自慢のマロンチーズタルト、卵たっぷりプディング、生クリームと丸ごと苺のサクサクパイ。そして、園から帰ったらメルメルもプラムじいさんを手伝って店先に立つのだ。きっと町中の人が買いに来る（だって、プラムじいさんのお菓子は最高に美味しいんだ）。
「ガッツリ美味い爺のお菓子屋ってのはどうだ？」
「か～！　長いわ、くどいわ、ダサいわ、最低なネーミングセンスね！」
「な、なにおっ！」
「シンプルにプラム&メルメルなんてど～お？」
「あ、ちょっと可愛いかもね」
「そ～か～？」
いつの間にか、メルメルをそっちのけで、話は店の名前まで進んでいるようだ。
「じゃあ、お腹がペコペコペッコリーナはどうかしら？」
シーーーーン……。
「こ、こほん。メルメルはどんなのがいいの？」
トンフィーに聞かれて、メルメルは首を捻った。――お店の名前……。
「ペコペコペッコリーナは無いな」
「ガッツリ美味い爺のお菓子屋よりはましよ！」
「なにー！」
まったく選択肢に入りそうに無い名前で争うグッターハイムとペッコリーナ先生を、「まあまあまあ……」とニレとトンフィーがなだめている。メルメルは良い名前が思いつかず、首を捻っていた。
「プラムのお菓子屋メルメルメルヘン」

皆無言で、発言者であるラインを見つめた。
「――なんて、どうかな？」ラインは少し照れくさそうにしている。
「……いいわね」ペッコリーナ先生が呟いて、皆コックリ頷いた。
「いいんじゃないですか？　今のところ――」
「一番いいね！」
「ま、俺のも悪かないが、妥当だわな」
「メルメルはどう思う？」
突然振られて、まだ、ラインが似つかわしくない可愛い名前を付けた事に驚いていたメルメルは、ちょっと焦ってしまった。
「え？　あ、ああ。うん。とっても――」
少し不安げにラインがこちらを見る。メルメルはなんだかおかしくて笑ってしまった。
「とっても素敵！　名前は――プラムのお菓子屋メルメルメルヘン！　で、決定～！」
「お～」パチパチパチ！
ラインが薄く微笑んでいるのを見て、メルメルも嬉しくなってしまった。
「プラムのお菓子屋メルメルメルヘン……」
いよいよプラムじいさんに会いたくなってしまった。
（必ず無事でいてね、おじいちゃん。みんなで、とっても素敵な事思いついたのよ……）
ぎゅっとミミとシバを抱き締めて瞳を閉じた。その様子を、ラインはじっと見つめていた。すると、メルメルが急にパッと目を開き、その目があまりにもキラキラしていたので、ラインは少し驚いてしまった。
「ググッーとモーニングおじいちゃん♪」
突然歌い出したメルメルに、周りの大人は唖然としている。
「ググッーとモーニングおじいちゃん♪」トンフィーが続けて歌う。
「あら、楽しそう」ペッコリーナ先生がニッコリした。
「ググッーとモーニングおばあちゃん♪」

「「「グッターとモーニングおばあちゃん」」」
トンフィー、ペッコリーナ先生、ニレがハモって歌った。ペッコリーナ先生はグッターハイムを睨んだ。さあ、一緒に歌えといった顔だ。グッターハイムは怯んでいる。
「朝は爽やか楽しいな～♪」
「「「「朝は爽やか楽しいな～♪」」」」
今度はグッターハイムも入って来た。グッターハイムがラインを見つめる。ラインはその視線を逃れて、あさっての方を見ている。
「晴れたらなおさら楽しいな～♪」
「「「「「晴れたらなおさら楽しいな～♪」」」」」「ニャー」
グッターハイムはラインの横に馬をつけてその顔を覗き込む様にした。ラインは顔をそむける。すると、逆側にいたメルメルと、バッチと目が合ってしまって、わずかに弱った様な顔になった。メルメルは期待をつのらせてラインをじっと見つめた。
「猫も楽しげ～に歌っているよ～♪」
「猫も楽しげ～に♪　――なんで私だけなんだ！」
ラインが歌って、他は全員黙ってしまった。皆笑いを堪えている。
「ぶっ……くくく……お、お前……お、音痴過ぎだ……くくく」
グッターハイムに言われ、ラインは顔をしかめる。
「……だから、歌いたくなかったんだ――ハッ！」ラインが空を見る。「……来るぞ！」

戦士ライン　8

空の彼方に、黒い点が無数にあり、少しずつ大きくなってきた。そして、地平線の彼方からも同じように点が現れ、見る間に近づいてきた。それが自分達と同じ様に、馬に乗った人だと分かりメルメルは息を飲んだ。

（悪魔の兵隊だわ！）

スラッと、ライン、グッターハイムが剣を抜く。ニレは、ベルトに差し込んでいた短い杖を手にした。メルメルの後ろで、ペッコリーナ先生が空に向かって弓を構える。

「また、随分と頭数を揃えたものだ……」

前方の敵は五十以上いそうだ。メルメルもトンフィーも驚いた。これではまるで戦争だ。

「やっかいね……。さすがに数が多すぎるわ」

ペッコリーナ先生が空を見上げながら言う。鳥の様な物が、空が真っ黒になる程飛んでいる。

「ピッピーはマーヴェラのところに報告にやってしまったし……」

「少しはお役に立てますよ！」

ニレが叫んだ。見ると、メルメルに向かっていたずらっぽくウインクした。

「さあ、行くんだウォッチ！　メルメルにかっこいいところを見せておくれ！」

ニレが叫ぶと、肩に乗っていたニジイロインコのウォッチがピューっと空へ飛び出した。すると、空の彼方から、真っ黒いシミが近づいてきた。

「な、なにあれ？」

シミは海の中のマンタのような形で、畳十畳程もある。その中に向かってウォッチは飛び込んで行った。

「に、ニジイロインコの群れだ！」

トンフィーが叫んだ。近づいてきたのを良く見ると、マンタは小さなニジイロインコが集まって出来たものだった。空を飛んでいる敵をどんどん飲みこんでいく。

「助かるわ！」

ペッコリーナ先生も負けじと矢を次々放つ。空から矢に射抜かれて落ちて来たのは、カワセミとハリネズミを合わせた様なものだった。

「やはり、キメラか……」

グッターハイムが呟いた。前方の悪魔の軍隊は、あと百メートルといったところまで迫って来ている。

「行け、ルーノ！」

メルメル達の馬の横を追走していたルーノルノーが飛び出した。猛スピードで走るルーノルノー。その時、メルメル達の後ろから大きな影が飛び出した。見る間にルーノルノーに並び、更には追い抜いて行く。――それは、赤毛の豹だった。

「ガウガウガウ！」「ガオー！」

争うように、悪魔の兵隊に襲いかかって行く狼と豹。命の石の存在を心得ているのか、しっかり心臓めがけてキバを立てている。

「あ、あの豹は……？」

「ラインのペットよ」

後ろからの答えに振り返る。ペッコリーナ先生は、相変わらず矢を放ち続けていた。

（ラインさんのペット……）

ニヤリとしながら、嬉しそうに敵の中に飛び込んで行くグッターハイム。ラインの方は相変わらずの無表情だ。

「下の敵は僕が食い止めますから、ペッコリーナさんは気にせず戦って下さい！」

ニレが叫び、ペッコリーナ先生はニッコリした。どちらにしても、前方の悪魔の兵隊は皆、二人と二匹が残らず倒してくれそうだ。鮮やかに、次々と二本の剣で敵を倒して行くライン。メルメルは食い

入るようにその姿を見つめていた。
（なんて……なんて……かっこいいのかしら！）
美しい姿に夢中になっていると、戦いの最中にもかかわらず、ラインがチラリとメルメルを見てきた。敵を倒して、またチラリ。
（……そうか！）
「ミミ、シバ……戦ってくれる？」
自分達の出番は無い、とばかりに呑気にしていたミミとシバ。メルメルが下に下ろすと、ようやくのろのろと敵に向かって行こうとする。
「変身よ！　ミミ、シバ！」
ミミとシバは並んで後ろ足で立ち上がった。メルメルはホッとして顔を上げた。ラインは敵を倒しながらも不思議そうにミミとシバを見つめている。
「ニャーニャーニャーニャー！」
「ミラークルクル！　ボルティーにな～れ！」

ピッカー！

眩い光に誰もがきつく目を瞑る。そして、
「……フッ。なる程な。これは驚きだ」
言葉とは裏腹に、あまり動揺したようには見えないが、どうやら驚いているらしいライン。グッターハイムはニヤリと笑った。
「な？　面白いだろう？」「最高だ」
二匹のボルティーは戦いに飛び込んで行く。片方には、水色の石飾りのついた青い首輪が光っており、それで直ぐにそちらがシバだと分かった。ルーノルノーや、ラインのペットの豹にはかなわないが、ミミとシバも悪魔の兵隊を何匹か倒し、メルメルの想像よりもずっと早く戦いは終わりを迎えた。
「凄い……」トンフィーが呟くのも無理は無い。回りに山積みになった敵の数は、百はいそうだ。

「この匂い……たまらんな。とっとと先へ進もう」
「そうだな。出発だ！」
疲れを知らない若い戦士達に、ペッコリーナ先生はこっそり溜め息を吐いた。
「は～。少しはおばばをいたわって欲しいわ……」
メルメルはクスクス笑ってしまった。と、その時、前を行くラインがピタリと動きを止めた。後ろを振り返り、目を凝らすようにして遠くを見ている。
「ラインさん？　――あ！」
首を傾げるメルメルをよそに、突然ラインは猛スピードで走り出した。
「あ、あら！　ライン！」ペッコリーナ先生も驚いている。
ラインはどこまでも駆け抜けて行く。するとその後ろからラインのペットである赤毛の豹が追いかけて行き、「あ、の、乗っかった……！」途中でフワリとその背にまたがったラインを見て、メルメルとトンフィーはその姿がカッコ良すぎて大興奮した。獣は驚きの速さで駆け抜けていく。
「ああ！　――人が！」
ラインが向かった先に大きな岩があって、その後ろから慌てたように人が飛び出した。
「あれに気付いたのか！　――行こう！」グッターハイムが叫んで一同は走りだした。
獣は見る間に人影に追い付き、飛びかかっている。ラインは獣から降りて立ち尽くしていた。一番初めに追い付いたのはメルメルだった。
「ラインさん！　どう――」思わず言葉を飲み込む。
「自決しちまったのか……」
いつの間にか追い付いていたグッターハイムが、メルメルの後ろで呟いた。そうなのだ。その男は、口から血を流して、死んでいたのだ。

「ふ～……。――あら！　だ、駄目よメルメル、こっちに来なさい！」

息を切らしながらようやくたどり着いたペッコリーナ先生が、死んでいる男を見て慌ててメルメルを引き寄せた。トンフィーはペッコリーナ先生の背中に隠れておっかなびっくり覗いている。

「一体何者ですかね？」ニレが首を傾げた。

「さて……」ラインは腕組みして男を見下ろしている。

「おいおい。もしかしてずっとつけられてたんじゃないだろうな」

グッターハイムが言うと、ペッコリーナ先生は呑気に笑った。

「そうだとしても、もう安心ね。さっすがはラインだわ！」

「ふむ……」

ラインは特に照れた様子もなく、少し不思議そうに男を見つめていた。

戦士ライン　9

戦いが始まってからどこかに隠れていた灰色猫のチャーチャンが出てきて、再び道案内を始めた。これなら、簡単にプラムじいさんを助け出せるかも知れない。そう、メルメルは思った。

ニレが横に来て笑いかけてきた。ニジイロインコのウォッチが、いつの間にか肩に戻って来ている。

「ミミとシバ、かっこよかったね。良い物を見せてもらったな。ねぇ、ラインさん？」

「ああ。素晴らしかった」

相変わらず表情は無いが、メルメルは嬉しくなってしまった。だんだんラインという人間が分かってきた。

「ウォッチもとってもかっこよかったわ！」

「それは、ありがとう」

ニレが言う。ウォッチがメルメルの肩に乗ってきた。メルメルのほっぺたを甘がみする。

「ウォッチも、ありがとうだってさ」

「ウォッチは、群れのリーダーなのね？」

ニレは微笑みながら頷いた。「そうだよ」

メルメルは小さなウォッチを、すっかり感心して見てしまった。

「ラインさんのペットも、とってもかっこよかったな。名前は、なんて言うんですか？」

馬と一緒に悠然と歩く豹を見て、トンフィーが問い掛ける。

「スリッフィーナという」

いかにも、ラインのペットといった感じがする。強くて、早くて、しなやかだ。じっとスリッフィーナを見つめていると、ニレもニコニコと優しい顔で自分を見つめている事に気付いた。とても、戦いには向きそうにない優しい笑顔だ。メルメルは少し不思議になった。

「ね、ニレも昔は、トキアの兵士だったの？」

急に言われて、ニレは少しキョトンとした。
「――へ？　……いや、私はレジスタンスに入る前は、羊飼いをしていたんだよ」
「羊飼い？」
それは、兵士よりよっぽどニレには似合っている。
「トキアから少し離れた田舎町でね。のんびりとした、平和な良いところだった……」
ニレは昔を思い出しているらしく、遠い目をしている。
「どうして、レジスタンスに入ったの？」
メルメルが首を傾げると、ニレは一瞬真顔になった。いつもニコニコしているので、メルメルは思わずドキッとした。しかし、ニレはまた直ぐにニコニコ顔に戻った。
「私はずっとね、戦いなんてした事がなかった。口喧嘩すら、ろくすっぽした事がない男だったんだ。戦いは嫌いでね、争いは良くないと思っていたよ。戦争に、正義なんてないと思っていた……」
笑顔で語りながらも、どことなく寂しげなニレに、メルメルは少し困って周りを見渡す。しかし、誰もがやけに真面目な顔で静かに前を見ていた。トンフィーと目が合い、お互い小さく首を傾げる。
「……私には妹がいてね」少し明るい声でニレが言う。
話が急に変わったのでメルメルは少しびっくりした。「妹？」
「そう。妹はハルバルートの都に住む人のところにお嫁に行っていてね。青暗戦争が起こったのを知った私は、妹が心配で直ぐにハルバルートの都に駆けつけたんだ」
なんだか辛い話になりそうな予感がしてきて、メルメルはドキドキとしてきてしまった。
「妹は――無事だったよ」
メルメルはホッとした。
「だけれど、妹を連れて命からがら都を逃げ出してしばらくすると、妹はハルバルートに戻りたいと言い出したんだ」
「な、なんで？」

「妹の旦那様は正規軍の兵士だったんだ。ハルバルートで闇の軍隊と――暗黒王と戦っていた。実は私は、引きずるように、都から妹を連れ出していたんだ……」

メルメルは、またドキドキしてきた。おじいちゃんがさらわれてから幾度となく聞いている、暗黒王にまつわる悲劇。

「やがて青暗戦争が終わり、正規軍が敗れた事を知った。妹は夫の死を悟り、遠征から戻りハルバルートを取り戻さんとする赤軍に入ると言い出した」ニレは少し俯いた。「私は、反対した」

――当然だろうと思う。ニレにとって、妹はとても大切に違いないのだ。わざわざ戦いの最中のハルバルートに、助けに向かった程に。

「だが、妹は赤軍に入り、戦死した」少し怒りをおびた声でニレは言った。「私は、とても後悔した」

「そんな――しょうがないわよ。だって、ニレは一生懸命止めたんでしょう？」

メルメルは慌てて慰めようとした。しかし、ニレは微笑みながらも、首を横に振った。

「そうじゃないんだ、メルメル。私はね、妹を止めた事を後悔したんだ。何故、共に赤軍に入らなかったのか……情けない、臆病者の自分を呪ったよ」

「そんな……。争いは……良くないとワタシも思うわ」

なんとなく、ラインやグッターハイムを気にしながらメルメルが言う。ニレは泣きそうな微笑みのまま続けた。

「妹が戦いに出る、前の晩の事だ。私は必死で妹を説得した。――戦争なんて、どうせ互いの利害があるだけだ。正義も正しさも無い。都から遠く離れて、戦渦の届かない場所でのんびり暮らそう。――そんな風に逃げようと繰り返す私に、妹は言った……」

ニレはきつく目を瞑った。苦しげな表情だ。メルメルは胸を締め付けられるような気がした。

「――私は夫を失った事が悲しい。同じように愛する者を失った人

がいる事が悲しい。家を奪われる事が悲しい。平和な暮らしを奪われるのが悲しい。争わなければそれらは失わずに済むのか？　遠く離れて暮らせば、知らん顔で幸せに暮らせるのか？　私には無理だ。――と、妹は言った……」

「……」

ニレは、静かに目を開いた。涙は、流れていなかった。

「戦争が正しいかどうかは、今でも分からない」

「戦争に正義などないさ」

グッターハイムが呟いた。ニレはその言葉にこくりと頷いた。

「だけれど、私はあの時、妹と共に戦うべきだった……」

メルメルには掛ける言葉が無く、ただじっとニレを見つめていた。ニレはこちらの視線に気付き、また優しく微笑んだ。メルメルは少しホッとした。

「妹の死を知って生きる気力を無くしてハルバルートの都をさ迷っていた私は、ある女性に怒鳴りつけられたんだ」

「ある女性？」

メルメルが首を傾げるとニレは軽くウィンクした。

「赤い髪の女性でね。後悔したいなら生き抜いてからにしろ！　たっぷり後悔するために、まずは必死で逃げろ！　……ってね」

ラインは知らん顔で前を向いている。ニレとメルメルは顔を見合わせて笑った。皆、色々あるのだ。

「父さんは……どうやって死んだんですか？」

トンフィーが思い詰めた様な声で言った。メルメルは慌ててそちらを見た。トンフィーは少し暗い目で、ラインを真っ直ぐ見ていた。

「……何故そんな事を知りたいんだ？」

ラインが青い瞳でトンフィーを見つめ返す。トンフィーは怯まない。

「親の事です。そりゃ、子供は知りたいでしょう？」

「知ってどうする？　興味本位か？」

「そんなんじゃ……」

「では、暗黒王に火炙りにされたと言ったらどうする？」
トンフィーは目を見開いた。耳が、赤い。「……僕は、暗黒王を許さない！」
「何故だ？」
「自分の親を殺されたんだ！　当たり前じゃないか！」
見た事無いほど激するトンフィーに、メルメルは驚いてしまった。
――一体どうしたというのか？
「会った事も無い親の死に怒り、見た事も無い敵に復讐を誓うのか……」
トンフィーは、足の付け根まで真っ赤なんじゃないかと思うほど顔を赤らめている。メルメルはハラハラドキドキした。
「か、母さんだって暗黒王に傷を負わされたんでしょう？　……そ、それが原因で、病にずっと苦しんでいるんだ」
「それで、ソフィーはお前に暗黒王を倒してくれと頼んだか？」
「――か、母さんは」
「それどころか、父親の死の真相さえお前に隠していた。お前を見ていると、私には、何故ソフィーが全てを秘密にしていたのか分かる気がする」
トンフィーは愕然とした顔をしている。「な、何故ですか？」
「お前がまだ恐ろしいほど幼いくせに、知識ばかり豊富だからだ」
トンフィーは赤いを通り越して青い顔をしている。拳が、小刻みに震えている。そんな様子を見ていて、メルメルは泣きそうになってしまった。
「ちっと言い過ぎだぜライン」
見かねてグッターハイムが口を出す。ラインは変わらぬ表情でトンフィーを見つめる。
「お前は、本当にソフィーに行き先を告げて来たのか？」

戦士ライン　10

「……！」トンフィーは、真っ青な顔で固まってしった。
「だ、黙って来てしまったのトンフィー？　だってあなた、ちゃんと言ってきたって――」
　ペッコリーナ先生がオロオロしながら言う。トンフィーは、俯いて黙り込んでしまった。
「別にいいじゃないか。言えば止められると思ったんだろ。男はそれくらいやんちゃな方がいいさ」
　グッターハイムがフォローする。ペッコリーナ先生も珍しく、トンフィーの余りの落ち込みように叱りつけられずに、困った様な顔をしていた。
「苦しい時は苦しいと素直に言えばいい。大人ぶる必要はない。大人になったって悩みや迷いはある。自分一人では解決出来ない事もたくさんある。どうやら――お前には幸いにも、素晴らしい友がいるじゃないか？」
　言いながら、ラインがメルメルを見る。トンフィーもじっとメルメルを見てきた。メルメルには、トンフィーの目が、ゆらゆら揺れているように見えた。じっと見つめ返すと、トンフィーは泣きそうな顔をして俯いてしまった。
「……ペッコリーナの言う通り、ソフィーは大人になったら全て話そうと思っていたんだろう。……私は余計な事をいったな」そこで言葉を一旦区切り、ラインはトンフィーを見た。「変に混乱させてすまなかった。ただ――これだけは言っておこう。お前の親は、父も母も素晴らしく勇敢で優しく、誇り高き戦士であったと……」
　トンフィーはパッと顔を上げてラインを見た。ラインはもう何も言わずに前を向いてしまっていた。
（お父さんと、お母さん……か）
　ラインとトンフィーのやりとりを聞きながら、メルメルの頭の中

をある疑問がフワフワしていた。すなわち、「私の両親も兵士だったのか？　トンフィーの父親と同じように戦いで死んでしまったか？」

実は、メルメルはプラムじいさんに、「どうして私にはお母さんとお父さんがいないの？」と聞いた事が無い。物心ついてからずっと、おじいちゃんしかいないのが当たり前だった。園に入る前からトンフィーとは仲良しで、トンフィーにだってお母さんしかいないし、自分にはおじいちゃんしかいない事が、それ程不思議ではなかった。

寂しい――と感じた事もなかった。

おじいちゃんはたっぷり愛情を注いでくれた。時に優しく、メルメルが間違った事をすれば、あのニッコニコ顔からは想像つかない程の雷が落ちた。トンフィーのオモチャを黙って持って帰って来てしまった時は、お尻を二十回も叩かれて、その日は一日口をきいてもらえなかった。プラムじいさんは料理は大得意で、勿論、メルメルのお弁当は園でも注目の的だったが、残念ながら裁縫は得意ではなかった。でも、メルメルの体操服につける名札や、木登りで破いてしまったスカートも、針を指に刺し刺し、全部プラムじいさんが縫ってくれた。彼女が大切にしている鞄についていたうさぎのアップリケも、実はプラムじいさんお手製の物なのだ。

園に入って、クラスメートから両親の話を聞いたりしているうちに、自分の家が他とは違う事には気付いていた。しかし、朝早く起きてお弁当作ったり、夜は遅くまで針仕事をしたり、そんなプラムじいさんを見ていたら、「私の両親はどうしていないの？」なんて、なんだか聞けなくなってしまったのだ。メルメルは、もしそれを聞いたら、プラムじいさんが悲しい顔をするような気がしていた。だから、ずっと知らんぷりして生きてきた。だけれど……、「やっぱり気になる」のだ。

後ろを振り返ってペッコリーナ先生を見上げる。ペッコリーナ先生は、斜め後ろを振り返って、相変わらずしゅんとしといるトンフ

ィーを心配そうに見ていた。メルメルは想像してみた。もしも、自分の親もトンフィーの父親と同じように青暗戦争で死んでしまったと教えられたら……。

（なんだか、ちょっぴり悲しいけれど……実感はあんまりわかないな）

ましてや、暗黒王に復讐を誓う程の怒りは湧いてこない。メルメルは、トンフィーに聞こえないように、小声でペッコリーナ先生に囁いた。

「ねぇ先生、トンフィーはどうしてあんなに怒ったのかしら？」

ペッコリーナ先生は顔を前に戻し、メルメルの顔を見た。顎に指を当てて考え込んでいる。

「……トンフィーは、お母さんが病気で苦しんでいるのを見てきたでしょう？　それに、小さな時からずっと、家の事をトンフィーが一人でやってきたんだもの。泣き言を言わない子だけれど、本当はとっても辛かったと思うわ……。それが、暗黒王のせいだったんだって知って、許せなくなったのよ……分かるわ」

目に涙を浮かべるペッコリーナ先生。メルメルはトンフィーをもう一度見てみた。相変わらずトンフィーは、しょげて下を向いていた。

川を渡り、丘を超え、林を抜け、街道をひたすら進んで行く。道案内をしてくれている灰色猫のチャーチャンが、心なしかフラフラしてきたような気がして、メルメルは心配になってきた。

「ねぇ先生、少し休ませてあげた方が良いんじゃないかしら？」

「――猫ちゃん？　あら、そうね……。ずいぶん走っているものね」

ペッコリーナ先生が皆に声を掛けようとしたその時。

「ミギャー！」木の陰から、ずんぐりとしたキジトラの猫が現れた。

「ニャ～ン」灰色猫のチャーチャンは、後は任せたとばかりに林の中に去って行った。

「またまた選手交代だな」

グッターハイムが呟いた。ところがキジトラの猫――のんびり屋のワーチャは、道案内を始めないで、キョロキョロこちらを見ている。

「どうした？　早く案内してくれ。それとも道を忘れちまったか？」

ワーチャは、ラインをピタッと見た。ラインは首を傾げる。

「……なんだ？」

すると突然、「ミギャー！」ワーチャがラインの馬に飛び乗ってきた。

「な、なんだ？」

さすがに動揺しているライン。ワーチャは後ろを振り仰いだ。

「ミギャー！　ミギャー！　ミギャー！」顔を前に突き出し、急かすように鳴き続ける。

「……行けって事じゃないかしら？」

メルメルが呟くと、グッターハイムが呆れた声を出した。

「馬に乗って道案内か？　ずいぶん怠け者の猫助だな～」

「だが、これなら早く進める」

ラインが薄っすら笑ってワーチャの背中を撫でる。今までは猫に合わせて、スピードを大分押さえていたのだ。

「よし、行こう！」

「ミギャー！」

ラインが腹を蹴ると、馬は猛スピードで走り出した。慌てて皆それに続く。ラインの手に支えられながらワーチャは、呑気に大欠伸をしていた。

戦士ライン　11

欠伸をしながらもワーチャは、ちゃんと道案内をして（間違った道を進もうとすると、「ミギャー！」と鳴くんだ）日は傾き、辺りはどんどん暗くなってきた。

「そろそろ休むか……。馬も人もくたくただ。なあ、ペッコリーナ」

グッターハイムが言うと、ペッコリーナ先生は、「まったくだわ……」と、カの鳴くような声で呟いた。

街道から少し林の奥に入り、手頃そうな木にそれぞれ馬を繋ぐ。グッターハイムは大きな袋を馬から下ろした。

「これに色々材料が入っている」

メルメルとトンフィーがのぞくと、芋や人参など、色々な食材が入っていた。

「何か適当に作ってくれ。男は薪拾いでも行こう」

「少し戻ったところに川がありましたね。私は水を汲んで来ますよ」

ニレが言って皮袋を持って走って行った。

「……じゃあ、私も薪拾いでもするかな」

ラインが呟くと、グッターハイムは首を横に振った。

「いや、薪拾いは一人で十分だ。お前は子供達を手伝わせて料理を作ってくれ。……ペッコリーナを少し休ませてやれ」

「助かる。そうさせてもらうわ……」

すっかり疲れた様子のペッコリーナ先生は、大きな布を広げて横になってしまった。

「それじゃあよろしくな、ライン」

「あ、ああ……」

グッターハイムが去って、頼りなさそうな顔で突っ立っているライン。トンフィーは袋をあさった。

「玉ねぎ、人参、ジャガイモ……。干し肉でもいれて、シチューかなんかにしますか？　……ラインさん？」

「ん？　あ、ああ。そうだな。そうしよう……」
そう言いながらラインは腕を組んで、トンフィーが袋から材料を取り出すのを眺めている。メルメルは、馬の背から大きな鍋を下ろしながら、不安げな様子のラインを見た。そして、ある事を思い出した。隠れ家で見た、ラインのあの部屋。散乱した料理の本に、不気味な液体の入った鍋……。
メルメルがチラッと見ると、やはり何かを思い出したような顔をしてトンフィーも同じようにこちらを見た。二人で目を合わせ、こっそり頷く。
「と、トンフィーは料理がとっても得意なのよ！」
「そ、そうなんだ！　ぜ、是非、みんなに披露したいから、今日は僕が作ってもいいですか？」
ラインは明らかにホッとして、トンフィーを見た。「そうか。それじゃあ、よろしくお願いしよう」
「は、はい。えっと、メルメルこれを切ってくれる？　僕はこっちを……」
二人でナイフを取り出し、せかせか切り始めた。すると、ラインがじっとその様子を見つめてきた。
「上手いな……。どうしてそんな風に上手に切れるんだ？」
ラインは首を傾げる。心底不思議そうな顔だ。メルメルだっておじいちゃんのお手伝いをするから、皮むきくらいは出来る。横ではトンフィーが芸術的な早さと美しさでジャガイモの皮をむいていた。
「す、すごいな……」
ラインが感心する。メルメルはニッコリした。
「トンフィーは本当に料理が上手なのよ！　家でもご飯の支度はトンフィーがほとんどするんだもの！」
「それは――えらいな。いや、本当に上手い。お見逸れした……」
「いや～それ程でも……」トンフィーは耳を赤くして頭を掻いている。
「実は、私は――」

ラインが呟いて、メルメルとトンフィーは首を傾げる。
「料理が、下手なんだ」
思わずメルメルとトンフィーは、首を傾げたまま固まってしまった。
「そ、そうなの……？」
二人は目を泳がせる。
「だ、誰にでも、苦手なものはあるから……」
トンフィーが言うと、ラインは頷いた。
「そうだな。だが、トンフィーのような旦那様なら良いが、世間一般の男は、料理をあまりしないものだ」
首を傾げる二人。
「だから、その……。つまり、女性は料理くらい、出来た方がいいだろう？」
メルメルとトンフィーは顔を見合わせた。そうかもしれない。「う～ん……」
「だが、どうにも上手くならないんだ……」
何だかしょんぼりしたラインが、メルメルは可哀想になってきた。
「下手って、でも、人から見たら、それ程でもないんじゃないかしら？」
なんとか慰めようとする。しかしラインは首を横に振る。
「――見てくれ」
ラインはそう言うと、腰に差していたナイフを抜いて、クルクルと回して手の平に掴んだ。
（そうよ！　こんな剣の達人は、皮むきなんてお茶の子さいさいね！　……問題は、味付けかしら？）
ラインはメルメルの手の平からジャガイモをむんずと掴んだ。そして、ナイフの柄をしっかりと握り締めたまま、皮を剥き始めた。
「わ～！　危ない危ない！」トンフィーが青くなって止める。
ラインは目をパチクリさせる。「……やっぱり駄目か？」
「だ、駄目って言うか、危ない――手を切っちゃいますよ。こうや

って持つんです」
トンフィーは、ラインの手を取って、刃に親指を添えさせる。
「ほら、こうやって……。力は入れなくていいんです。親指を滑らせながら、そうそう……」
二人が見守る中、ラインはなんとか十分くらいかけて、ジャガイモの皮を一つ剥き終えた。
「やったー！　出来た！」「わ～！　すごいすごい！」メルメルとトンフィーは大喜びする。
「は、始めてだ。こんなに上手に剥けたのは……」
上手に剥けた、と言ったジャガイモは、かなりいびつな形をしていた。
「これからはトンフィーの事を師匠と呼ぼう」
「よっ、トンフィー師匠！」
「いや～そんなぁ～」
「なーにが、そんな、なんだ？」
突然グッターハイムが会話に入ってきて、三人共飛び上がりそうになってしまった。
「薪を集めて来たぞ」
「あ、ああ。ありがとう……」
「水、組んできましたよ！」ニレも戻ってきた。
「あー！　腹へったな！　まだ出来ないのかー？」
トンフィーとメルメルは慌てて残りの食材を切る。
「こんな感じでいいですか？　ラインさん」
トンフィーがニッコリして聞くと、ラインは腕を組んで胸をそらした。
「ふむ。いいだろう」
メルメルとトンフィーは必死で笑いを堪える。二人がこっそり覗き見てみると、ラインはニヤリと笑った。

戦士ライン　12

トンフィーの作った美味しいシチューのおかげですっかり満腹になり、メルメルはウトウトとしてきた。外で眠った事なんてないから、果たして眠れるかと思ったけれども、まったくその心配はいらなかったようだ。

パチパチ、パチパチ。――皆、無言で焚き火の炎を見つめている。

「くわぁぁ～。さて、交代で火の番をして眠るか」グッターハイムが大欠伸をしながら言う。

「では、とりあえず私が番をするから、みんな休んでくれ」

「じゃ、頼むわ……くわぁ～」

ラインの言葉に、グッターハイムは再び大欠伸をしながら目を閉じてしまった。直ぐにいびきが聞こえてくる。

「早～い。もう寝ちゃったわ」

メルメルは呆れた。横を見ると、ペッコリーナ先生はすやすやと寝息を立てている。こちらは、食事を終えると直ぐに眠ってしまったのだ。

「何だか昔を思い出すな、ニレ」

ラインが呟く。メルメルはラインを見た。青い瞳が赤い炎に照らされ、何とも言えずに美しい。

「そうですね……」

ニレが頷き、メルメルとトンフィーは首を傾げる。「昔って？」

ラインは炎に揺れる瞳をメルメルに向けた。「十一年前の事だ」

「十一年前……」

十一年前と言えば青暗戦争の起こった年だ。メルメルはラインの瞳を見つめ、次の言葉を待った。

「十一年前、ハルバルートの都を逃げ出し、闇の軍隊の追撃から逃れ、我々は永遠とも感じる程の長い旅をした」

メルメルもトンフィーも黙って、語り始めたラインを見つめた。

「大人数だと敵に見つかる可能性が高くなる。十人くらいの人数に分かれて、それぞれ、生き残った人々は様々な方角に逃げた。その中には、傷ついた兵士、子供や老人、お腹に子供を抱えた母親までいた……」

ラインは機械的に薪を炎にくべる。心はすっかり当時に飛んでしまっているようだ。

「先が見えない、行き先も定まらないような不安な旅だった……。皆泣き言も言わず、よく頑張ってくれたものだ」

「我々のグループには、ラインさんがいたからまだましでしたよ」

メルメルは首を傾げる。その様子を見て、ニレは微笑む。

「みんなラインさんに励まされて、諦めずに済んだのさ」

成る程と納得して視線を戻すと、ラインは、炎の揺らめきをじっと見つめ、ゆっくりと首を横に振った。

「私は……本当は、誰よりもくじけそうだったのだ」

メルメルとトンフィー、ニレさえも驚いてラインを見た。ラインは自嘲するように笑った。

「炎に包まれたハルバルートの都。失われたたくさんの命。恐ろしい程、私は無力だった」

「……」

「ニレや他の人間を励ましながら、実は私自身、生きる事を迷っていた。逃げ延びる旅の間、眠る度に死者の呪いの歌が聞こえた……。――我々は、命を落とすまで戦ったのに、何故お前が生きているのか！　――と」

「誰もそんな風に思ってませんよ！　誰もがあなたを尊敬して、信じていた……」

「信じて戦って、殺されてしまった」

「そ、そんな――」

ラインまた自嘲するように笑う。

「バカだな私は。そんな事は無い――そう言ってもらいたくて、泣き言を言っているのだな……」

メルメルもトンフィーも驚いたが、どうやらニレはその百倍驚いているようだ。目を見開いてラインを凝視している。ラインは子供二人に視線を移した。

「二人は、青暗戦争の事を詳しく知っているか？」

メルメルとトンフィーは顔を見合わせる。「ある程度は……」

「赤軍の戦いの結末は？」

再び顔を見合わせる。

「う～んと……。ハルバルートを取り戻してくれると、みんなにとっても期待されていたのに、女王様が死んでしまったのを知ったせいで志気が落ちて、案外あっさり負けてしまった……とか？」

メルメルが答えると、ラインは少し笑って頷いた。

「そのあっさりと負けた戦いに挑んだ時、赤軍はハルバルートにいる闇の軍隊の、約二倍の数を要していたのだ」

「そ、そんなに？」

メルメルは驚いてしまった。敵よりも数も多くて、優秀な隊長がいて、トキアで最強の軍隊と言われた赤軍なのに、女王が死んだという理由だけでそんなに簡単に負けてしまうのだろうか？　闇の軍隊とはそんなに強いのか……。

「赤軍を率いる赤の大臣は、ハルバルートを取り戻す事は難しくはないと考えていた」

ラインは遠い目をして語り続ける。その表情は、なんだか寂しげにメルメルには見えた。ニレが悲しげにそちらを見つめている。

「赤の大臣は、女王陛下の死を知った後もそれ程焦りはしなかった。周りにおだてられ――いや。自らの過信から、とりあえずは自分がトキアを統べれば良いと考えていた。勿論ずっとではない。落ち着きを取り戻すまでは、と……。だが、一国を率いる事と、一軍を率いる事は、まったく違う物だったのだ」

メルメルとトンフィーはじっとラインの横顔を見つめた。――誰の話をしているのだろう？　赤の大臣？　それは、もしかして……。

「とりあえず国を統べるどころか、見事にあっさりと戦いに負け、

ハルバルートを取り戻す事さえ出来なかった。女王陛下を失った後の、民の、驚く程輝きを失った瞳を私は忘れない……」

そう言うラインの瞳も輝きを失っていて、その失意が伺える。

「女王は絶対に必要だったのだ。たとえどんな存在であれ、この国には欠かせないものなのだ」

「でも、それじゃあ――」

突然トンフィーが口を開いて全員がそちらを見た。注目を浴びて、耳を赤くしている。

「それじゃあ、どうしてあなたは戦っているんですか？　女王様がいないなら、もう戦ったって――」

「無駄か？」

ラインの青い瞳に見つめられて、トンフィーはいよいよ耳を赤くした。

「む、無駄っていうか……。大群を要した赤軍さえ勝てなかったのに、しっかり基盤を整えてしまった暗黒王に、レジスタンスは勝てるのかな、と……」

へどもどしながら言う少年を、ラインはじっと見つめる。

「勇者だよ」

今度はニレが呟いて、全員そちらを見る。その瞳がキラキラ輝いている。

「君達は、古の大予言を知っているかい？」

「大予言？」

メルメルもトンフィーもそんな話は聞いた事がない。ニレは瞳を輝かせたまま、力強い声で続ける。

「――安らかなる青き国に生れし闇、瞬く間に広がり、青き国は暗黒の国へと変わるだろう――」

初めて聞く古の予言とやらに、メルメルとトンフィーは目をパチクリさせた。

「暗黒の国って……」

思わずメルメルが口を挟むと、ニレは手を上げて制した。

「ちょっと待ってね。とりあえず最後まで聞いておくれ。――民が光を失い、暗澹とした日々が過ぎし時、七色の光をまといし勇者現れ、闇を打ち砕き、青き石を女王の手に取り戻すだろう……」

ラインもニレも黙って、驚く子供二人を見守っている。

「勇者……」「女王って……。もしかして……でも、だって……」

「これは噂だなんだけど――」何故か小声になるニレ。「姫が――いや、女王は死んでしまったから、今では新女王になるのかな。――つまり、殺されてしまったと伝えられていた、女王と黒の大臣の娘が生きていて、暗黒王にいまだに捕らえられているというんだ……」

戦士ライン　13

メルメルもトンフィーも目の玉が飛び出す程驚いてしまった。ニレが二人の顔を見て思わず吹き出した。

「ハハッ！　そんなに驚いたかい？　これは結構、真実味あるんだ。実際、姫の姿を見た人が何人もいるんだ。居場所まで大体分かっているんだよ」

「ほ、本当に？　ど、どこなの？」

「北の国ロスリン。……ハルバルートの次に敵の兵が多くて、守りの固い場所だよ」

「北の国、ロスリン……」

驚く子供二人には目もくれず、ラインは黙って先程から火に薪をくべている。

「レジスタンスは、いずれ現れる筈の勇者を待ち、そして、暗黒王に捕らえられた姫を救い出し、再びトキアの国を取り戻そうとしているんだ」

メルメルは改めてニレ、ライン、眠っているペッコリーナ先生、そして、レジスタンスのリーダーであるグッターハイムを見た。そして首を傾げる。そういえば、先程からいびきが聞こえない。

「なーにが古の大予言だ」

そのグッターハイムが突然口を開いて、メルメルは飛び上がってしまった。

ガバッとグッターハイムは起き上がる。「そんなもん、もうろくババアの戯言だろうが」

「お、起きてたんですか……。も、もうろくババアって、王宮お抱えの立派な占い師ですよ」

「でした。だろ？」

意地悪そうな顔でグッターハイムに見られて、ニレはもぐもぐする。

「いや、そりゃ、今でこそ少しボケてはきましたけど、昔はと～っても素晴らしい――」
「素晴らしい占い師だったと言われているだけさ。大体、ババアの活躍ぶりなんて、ほとんど誰も知らないんだ。そもそも、王宮なんて一部の人間しか入れないし、当時のハルバルートの兵士なんて、ほとんど死んじまったんだからな。……くわぁ～」
「そ、そりゃ、そうですけど……」
言うだけ言ってグッターハイムは眠そうに大欠伸をしている。そして、「何か腹がへったな……」などと言うから、メルメルはすっかり呆れてしまった。シチューを四杯もおかわりしたのだ。
「私は直接知っている」
ラインの言葉に、ニレは目を輝かせる。
「古の大予言も直接聞いたよ。あれはホラッタばあさんがボケる前の、素晴らしい占い師の頃の事だ」「……ふん」グッターハイムは面白くなさそうに鼻をならす。「勇者や女王なぞ、俺はどうでもいい。俺は、赤の大臣様に再び立ち上がってもらいたいだけだ」
グッターハイムはラインを見つめる。ラインは小さく溜め息を吐いた。構わずグッターハイムは続ける。
「女王に変わって国を治める事が出来るのは、赤の大臣だけだ」
「それが無理だったから、今、こうなっている……」
グッターハイムはギラリとラインを見据える。
「それは、お前が自分を卑下しているせいだ。女王が殺されたのも、ハルバルートの都が奪われたのも、何もお前のせいではない。責任を感じるなら、再びお前は立ち上がるべきだ」
「私に女王の代わりは出来ない。女王の代わりは――女王にしか出来ないのだ」
「何故だ！」
だんだんと盛り上がってきてしまったラインとグッターハイムのやり取りを、全員がハラハラドキドキ見守る。
「民の心とは……人の心とは、時に驚く程頑なだからだ」

「……どういう意味だ？」グッターハイムが不思議な顔をする。
「……すまん。上手く言えないな……」
なんだか寂しげなラインに、グッターハイムは肩を落として、諦めたように溜め息を吐いた。
「なんだか分からんが、俺はいつでも喜んでリーダーをお前に譲るからな。その気になったらいつでもすぐ言えよ……」
「……」
二人の訳の分からないやり取りを、メルメルは分からないなりに考えた。要するに、多分グッターハイムは赤の大臣にレジスタンスを率いて、暗黒王からトキアの国を取り戻して欲しいのだ。そして、その赤の大臣とは――そういうことなのだ、きっと。
「そうだ、どうせならホラッタばあさんに占って貰いに行きませんか？」
沈み気味の雰囲気を変えるように、やけに明るい声でニレが言った。
「だから、あのババアはすっかりボケちまってるって――」
「そ、そんな事ないですよ。確かに少しボケてはいますけどね。あの、孫娘のフレンリーが言うには、時に正気を取り戻したようにズバリと占いを的中させるらしいですよ」
フレンリーという名前を言う時に、何故かニレの声がひっくり返った。
「その、たま～に当たる占いで何を占って貰おうってんだ？　お前の、まだ見ぬ未来の嫁さんがどこにいるかでも占って貰うか？」
グッターハイムが言うと、ニレは慌てて手をブンブン振った。
「いやいや、私の嫁探しなぞ……。そうじゃなくて、プラムさんの行方ですよ」
メルメルが顔を輝かせた。「なるほど！」
しかし、グッターハイムは相変わらず気乗りしない様な声を出す。
「プラムの行方なんてミデルの街で大方決まりだろ。そんな当たるか当たらないか分からんような占いを、わざわざ聞きに行く必要な

いだろ」
「で、でも、ほとんど通り道ですし……」
何故かやたらと占い師の所に行きたがるニレ。メルメルは少し「占い」というものに興味を持った。
「その、ちょっとボケてしまった、すごい占い師のおばあちゃんは、この近くに住んでいるの？」
ニレが瞳を輝かせてメルメルを見た。
「そうなんだ！　ミデルの街への、ほぼ通り道の小さな湖のほとりに、孫娘のフレンリーと二人で暮らしているよ。――寄って行こうよメルメル！」
また、フレンリーと言う時に声がひっくり返った。おねだりするようにニレに見つめられ、自分自身の興味も手伝って、メルメルはつい、「寄ってみたいな」と言ってしまった。ラインも同意するように首を縦に振る。
「いいんじゃないか？　あそこなら少しはゆっくり休めるだろう。ミデルに乗り込む前に疲れをとれる」
「じゃあ、決定ですね！」
ニレがニコニコと手を叩く。心底嬉しそうだ。メルメルはぼんやり考えた。
（おじいちゃんの行方を占って貰って、他にも一つくらい占って貰えるかしら？）
だからと言って、特に占って貰いたい事が思いつかず、メルメルは首を捻る。
（何がいいかしら？　……おじいちゃんとお菓子屋さんが出来るかどうか？　……でも、もし無理だなんて言われたら嫌だしな～）
「僕、ちゃんと背が大きくなるか占ってもらおうかな……」
隣から小さな声でトンフィーが呟くのが聞こえて、メルメルは吹き出しそうになってしまった。
「しょうがないな。そんじゃ、たまにはボケ婆さんの様子でも見てやるか～」

グッターハイムが溜め息混じりに言って、明日からの行き先が決定した。メルメルは、ずーっとニコニコと頬を緩ましているニレを眺めながら、何を占って貰うかを考えていた。

戦士ライン　１４

彼女は、水を打ったような静けさの中、地面を踏みしめる自らの足音をやけに大きく感じていた。夕べ以外に冷え込んだせいで、辺り一面、薄っすらと靄が立ち込めている。

チチチ、チチチ……と鳥のさえずりが聞こえてきて、ようやく朝の訪れを感じさせていた。

ヒュ～～～パス！

林の奥から奇妙な音が聞こえてきた。鳥と彼女以外にも、随分と早起きな者がいるものだ。彼女は奇妙な音の聞こえる方へと、あえて足を進めて行った。そこに何者がいるのか、おおよその検討はついている。

少し行くと大きなヒノキの大木があり、その三百メートル程手前に、ずんぐりとした背中が見えた。普段の立ち姿からは想像出来ない。シャンとしていて、背中に板切れでも入っているかの様に背筋が真っ直ぐ伸びている。そうして彼女は、しばらく声を掛けずに、その背中を見守ってみる事にした。するとその者がおもむろに、背中に背負った筒から矢を一本取り出した。手にした弓に矢をつがえ、ヒノキの大木に向かって矢を放つ。

ヒュ～～～パス！

矢はしっかりと大木に刺さったようだ。その間、わずか一秒もかかってはいない。これが、ハルバルートで他を寄せ付けない名射手、ペッコリーナの早打ちだ。

「朝から精が出るな、ペッコリーナ」

「あらライン！　おはよう。随分早起きね」

ラインは微笑む。

「そちらの方がよっぽど早起きだ。汗びっしょりじゃないか、大分前から起きていたんじゃないか？」

ペッコリーナ先生は、首に下げたタオルで額から流れ出る汗を拭

う。そして、照れたように笑った。
「違うのよ。大して長く練習した分けじゃないんだけれど……。もう駄目ね。年には勝てないわ。すぐ息があがるの」
「いや、いまだにアーチャーペッコリーナ健在――と言った感じじゃないか」
「そんな事ないわ。当時なら、あと三十メートル手前からでも正確に打つことが出来たのに……」
当時と言うのは、暗黒王が現れる前の、トキアがまだ平和だった頃の事だろう。
歩き出したペッコリーナ先生の脇に並んで歩きながら、ラインはペッコリーナ先生の横顔を眺めた。――確かに、少しシワが増えたか……。
「教師という仕事はどうだ？　楽しいか？」
自分より、頭一つくらい大きなラインを見上げ、ペッコリーナ先生はニッコリ微笑む。
「楽しいわよ～。そりゃあ、勿論大変な事はたくさんあるけれどね。やんちゃをする生徒はいるし……。メルメルなんてね、毎日同じクラスの男の子とケンカするんだから」
クスクスと笑うペッコリーナ先生。それにつられてラインも笑ってしまう。
「フフフ。それは――勇ましいな」
「相手はクラスのガキ大将でね。恐らくメルメルに好意を持っているのよ。男の子って、好きな子につい意地悪するじゃない？」
「なるほど……。メルメルは可愛いからな」
「そうなの。それで、メルメルはトンフィーと仲良しだから、ドミニク――そのガキ大将はドミニクって言うんだけど――ドミニクはトンフィーをいじめるのよ。メルメルはトンフィーを庇うでしょ？　そうすると、またそれが気にいらなくて、ドミニクはまた二人に意地悪をして……。だから毎日ケンカ。時には取っ組み合いするんだから！」

呆れたように言うペッコリーナ先生。
「男らしくない奴だな。好きなら好きと言って、トンフィーと決闘すればいい。そのガキ大将を殴り飛ばして、根性を叩き直した方がいいんじゃないか？」
ラインは怒ったように拳を振り上げ、鼻息荒く言う。ペッコリーナ先生はケラケラ笑った。
「子供の話なのよライン？　勿論、時には叱りつける事も必要だわ。だけれど、大人が介入し過ぎてもいけない事がたくさんあるの。その辺りが――難しくて、大変なのよ」
「そんなものか……」ラインはゆっくりと拳を下ろす。
目の前にヒノキの大木があり、先程ペッコリーナ先生が放った矢が刺さっている。矢は、小さな枯れ葉を突き刺していた。ペッコリーナ先生は矢を引き抜く。
「そんなものね。でも私は、メルメルも、トンフィーも、いじめっ子のドミニクだって、生徒はみんな可愛いわ。子供達はまだ見ぬ未来に向かって、瞳を輝かせながら、不安や戸惑いを乗り越えて、どんどん成長していくの。私はそんな子供達を見守っている事が、とても楽しいの」
自分自身もキラキラと瞳を輝かせながら語るペッコリーナ先生を、ラインは隣でじっと見つめる。
「……私は、とても驚いた」
「驚いた？　何に？」
ペッコリーナ先生がラインを見上げると、ラインは遠い目をして空の彼方を見ていた。先程まで青白いだけだった空の色が、赤く染まり始めている。
「隠れ家には子供がいないだろう？　だから、久しぶりに小さな子供達――メルメルとトンフィーに会って、その、無限大の可能性に驚いたのだ」
「無限大の――可能性……」
ラインは地平線の彼方にひょっこり現れた太陽の光に顔を赤く染

めながら、キラキラと瞳を輝かせた。
「そうだ。あんな子供達が、未来のこの国を……トキアの国を作り上げて行けば、あるいは暗黒王など、恐るるに足りないのかも知れない……」
「……」
ペッコリーナ先生は、赤く染まるラインの横顔を見つめ、その瞳の先にある太陽を、目を細めて見つめた。
「時代が……変わろうと、動き出したのかもしれない……」ラインが呟いた。その時、
ガサガサガサガサ！　二人とも驚いて振り向く。
「あ！　ペッコリーナ先生とラインさん！」
どうやら林を掻きわけて進んで来たらしく、頭に葉っぱをたくさんつけてメルメルが現れた。朝の光を浴びて、ニコニコと顔を輝かせている。ラインは目を細めて、眩しそうにそれを見つめた。
「――良くここが分かったな」
「声が聞こえたの！　目が覚めたら二人ともいないんだもの。こんなに朝早くに何してるの？」
走り寄ってきて、二人を見上げ首を傾げる。ペッコリーナ先生は、メルメルの頭についている葉っぱを払いながら、「秘密の話し」と、ニッコリ笑った。
「え～、な～に？　秘密って？」
メルメルはワクワクして、ラインに目を向ける。クリクリとした瞳に期待を込めて見つめられ、ラインは少し困ったように笑った。
「えっと、あー……」
「ラインの初恋の話よ」
ペッコリーナ先生が悪戯っぽい顔でウインクした。メルメルは目を輝かせる。
「ラインさんの初恋？　どんなの？　どんなの？」
「実はね～……」
「こら、ペッコリーナ！　――実は、本当は朝の稽古をしていたん

だ」

「朝の稽古？」

ラインの初恋も気になるが、稽古と言うのにもとっても興味を引かれてしまう。メルメルは、またまたワクワクとする。まんまとメルメルの興味が移った事にラインはこっそり胸をなで下ろした。

「私は剣。ペッコリーナは勿論弓の稽古をな。そう言えば――メルメルは将来どんな武器を使いたい？」

へんてこりんな質問だ。普通は、将来使いたい武器など考えたりはしない（ラインは親も兵士で、生粋の武人だから、子供の時からそんな事を考えてるのが普通だと思ってたんだ）。無論メルメルはそんな事考えた事がない。思わず首を捻った。

「う～ん。使いたい武器？」

剣、槍、弓、鞭、斧、色々な武器を頭に浮かべる。メルメルが大真面目な顔で真剣に悩んでいると、ペッコリーナ先生が思わず横で吹き出した。

「うふふ。ラインたら、それを聞くなら将来何になりたいのか、でしょ？　戦士になるかも分からないのに、いきなり将来使う武器なんて……。花屋になりたい子だっているのよ？」

ラインは首を捻って考える。――確かに、花屋に武器は要らない。

「なるほど。では、質問を変えよう。メルメルは、将来何になりたい？」

これもなかなか唐突な質問だ。メルメルは、またまた首を捻って考える。

「それは、大人になってやりたいお仕事と言う事かしら？」

「そうだな。仕事や、夢の様な物でも良い」

仕事……夢……。メルメルははっきりと、「自分のなりたいもの」を決めてはいなかった。腕を組んで、頭を右へ左へ捻って悩む。

（おじいちゃんとお菓子屋さん――は、大人になる前にやりたい事だし、お料理が好きな訳ではないから、コックさんも違うしな……。ワタシはお勉強も好きではないから、トンフィーのように学者には

なりたくないし……）

　う〜ん　う〜んと唸りながら悩み続けるメルメルを、ラインとペッコリーナ先生は微笑みながら見守る。

「フフフ。難しい質問だったかな？」

「メルメル、誰か憧れる人なんかはいないの？　この人のようになりたい――とか」

　ペッコリーナ先生に言われて、メルメルは目の玉を上にして考える。

（ミラークルクルマン――は男の子だし……。ミミとシバのおかげで、半分夢はかなったし（本当はメルメル自身が変身したいから、半分なんだ）憧れる人……）

　メルメルは何気なく、悩む自分を優しく微笑んで見ているラインの顔を見た。

（……ラインさんて、初めは少し冷たい感じがしていたけど、全然そんな事なかったわ。とっても優しくて、あったかくて、強くて、綺麗で……）メルメルは、パッと顔を輝かせた。

「そうだわ！　ワタシ、ラインさんのようになりたいわ！」

戦士ライン　15

ラインは目を丸くして固まった。ペッコリーナ先生がニッコリ笑った。

「憧れの人はラインと言うわけね？」

「そうよ。だってラインさんは優しいし、とっても強いし、綺麗だし……」

メルメルは思っている事を素直に伝える。ペッコリーナ先生はうんうん頷きながら、ニコニコしている。ラインは――相変わらず固まったまま無言でいた。いくらか顔が赤いようだ。

「じゃあ、メルメルもラインの様に戦士になりたいの？」

「う～ん。それも素敵かも」

「ま、メルメルはお勉強より運動の方が好きみたいだから、それもいいかもね？　ねぇ、ライン？」「え？　あ、ああ……」

ペッコリーナ先生はポンと手を打った。「そうだ！　メルメル、ラインに剣術を教えてもらったら？」

「え！」ペッコリーナ先生の提案に目を輝かせる。そして、期待を込めてラインを見つめた。

「ライン、メルメルは教えがいがあるわよ。園で剣の授業をした時、花丸を五つもあげたんだから」「はなまる……」

ラインは呟いてメルメルを見る。メルメルは相変わらず期待に満ちた目をこちらに向けて、ワクワクドキドキしながら返事を待っている様だ。

「その代わり魔法の授業はてんで駄目だったけれどね」

ペッコリーナ先生が余計なひと言を付け加えて、メルメルは口をへの字にした。ラインは思わず吹き出してしまった。

「魔法は苦手か？」

「う……。まぁ、少しだけ……」

爪先で足元の小石をつついているメルメル。その、ちょっといじ

けた様子を見て、ラインは薄っすら微笑んだ。
「苦手なものは誰にでもある。ゆっくりと時間をかけて、少しずつ克服していけばいい。得意なものは――」ラインはスラリと左右の腰にぶら下げている剣を抜いた。短めの方をくるりと回して刃の方を持ち、メルメルに差し出す。「どんどん伸ばすと良い」
メルメルはパッと顔を輝かせる。そして、おっかなびっくり剣を受け取った。
「この辺りを――こう持って。重ければ、両手でもかまわない」
短めの方とはいえ、子供には少し長く重い。園でやった授業の時は、本物ではなく棒切れを使ったのだ。初めて持つ真剣の感触に、メルメルはドキドキした。
「私の真似をしてごらん。剣を持つ手を絶対に緩めないように……」
頷いて、真剣な眼差しでラインを見つめる。ラインはメルメルと同じ様に両手で剣を構え、頭上から足元へ向けて振り下ろした。チラリとこちらに目を向け、促す。メルメルは頷いて、同じ様に頭上から足元へ向けて剣を振り下ろした。
「……ほう」
ラインは感心したように呟いた。ペッコリーナ先生はニコニコとラインを見た。
「ね？　なかなかでしょう？」
「確かに。筋が良い」
何だか二人に誉められているらしい事が分かって、メルメルはトンフィーの様に頭を掻きたくなった。
「では、少し真面目に仕込んでみるとしようか。メルメル、少し下がって……」
「は、はい」
何だかすごい人に剣を教えて貰える事に気付いて、メルメルは頬を紅潮させた。
思わず練習に力が入り過ぎて、日がすっかり高くなってしまった。

三人が慌てて戻ると、トンフィーは心配してソワソワ、グッターハイムは、木にもたれて呑気に大欠伸をしていた。
「すまん。すっかり遅くなってしまった。すぐ出発しよう」
「ごめんねトンフィー」
「くわぁ～……。まぁ慌てるな。ニレが心配して探しに行っちまったから、飯でも食って待つといい。そのうち戻って来るだろ」
どうやらグッターハイム達は食べ終わったらしく、使い終わった皿が重ねてある。メルメルはお腹をさすった。
「たくさん動いたから、おなかペコペコだわ！」
トンフィーは夕べの残りのシチューをよそいながら、首を傾げた。
「たくさん動いたって？」
「実はラインさんに、剣の稽古をしてもらっていたの。――頂きまーす！」
「稽古？」
食べるのに夢中なメルメル。トンフィーはメルメルからの返事を諦めて、シチューをよそいながらラインを見た。
「メルメルはとても筋がいい。鍛えれば、良い剣士になるだろう」
「へ～。すごいな～メルメル！」トンフィーは尊敬してメルメルを見た。
「なんなら、トンフィーにも教えてやろうか？」
ラインに言われて、トンフィーは慌てて手をブンブン振る。
「え！　い、いや、僕は……」
「ガッハッハッ！　女に教えて貰うなんて嫌だよな～？　男は男同士が一番！　俺が教えてやろう」
トンフィーは、今度は手だけじゃなく、首もブンブン振る。「いや、いやいや……」
「何だよ！　レジスタンスのリーダーやら隊長が教えてやろうってんだ、遠慮しないで喜んで受けろ！」
「え、え～！　でも、その……。僕、剣はあんまり得意では……」
体を起こして近づいて来るグッターハイムから逃げるように、ト

ンフィーは首を振りながら後退りする。
「得意じゃないなら尚更だ！　よ～し！　俺がいっちょ鍛えてやる」
「ひえ～」
　ニヤリと不敵に笑うグッターハイム。トンフィーはだんだん泣きそうな顔になってきた。見かねたペッコリーナ先生が助け舟を出す。
「トンフィーは運動があまり得意じゃないのよ。でも、勉強は園で一番なんだから、無理して剣術なんて教えなくても……。魔法だって上手だし」
「ケッ！　ダメダメ！　男なら自分の体を鍛えなきゃ。いざという時、好きな女も守れないぞ！」
　グッターハイムに言われて、トンフィーはチラッとメルメルを見る。メルメルは――シチューにかぶりついていた。
「……い、いや、でも、僕――」
「観念しろ。よし――この棒を構えてみろ」
　グッターハイムは足元の木の棒を拾い上げ、トンフィーの胸をこずく。トンフィーは仕方なく棒を受け取り、構えてみた。
「……」あまりにもへっぴり腰で、思わず全員無言になる。
「――振って見ろ」
　グッターハイムに言われて、トンフィーは棒を振り上げる。「や、や～」
「……」
　無言の大人達を、トンフィーは情けない顔で見上げる。グッターハイムは腕を組み、眉毛を片方上げ、トンフィーを見下ろした。
「……百回」
　トンフィーは首を傾げる。「へ？」
「素振り百回だ」
「ひえ～」
「いや、二百回は必要じゃないか？」とライン。
「ひえ～」
「そうだな……。いや、どうせだから五百回くらいやるか」

「ひえ～」
トンフィーはいよいよ泣きそうな顔になる。助けを求めてペッコリーナ先生を見つめるが、素知らぬ顔で弓の手入れを始めてしまった。弦を引っ張って、張りを確かめている。
「さあ、早くやれ！」
グッターハイムに言われて、トンフィーはぐっと顎を上げる。「じ、実は僕――」
「ん？」
トフィーはペッコリーナ先生を指差した。「ペッコリーナ先生に、弓を教えて貰いたいんだ！」
「あら！」
ペッコリーナ先生は驚いてトンフィーを見た。グッターハイムは面白くなさそうな顔をする。
「ゆみ～？　……いや、やっぱり男だったら剣の方がイケてると思うぞ」
「な～にが剣の方がイケてるよ。弓だって十分イケてるわよ。……そうよ！　そう言えばトンフィーは、とっても弓の筋が良かったわ！」
ペッコリーナ先生がトンフィーの横に来て肩を抱いた。トンフィーは照れて頭を掻いている。
「じゃあ、特訓よトンフィー！」
「はい！」
ペッコリーナ先生とトンフィーは見つめ合った。その目がキラキラ輝いているのを見て、グッターハイムはつまらなそうに、「ケッ！」と言った。
「あ！　みなさん戻ってたんですか！」
ニレが息を弾ませながら戻って来た。グッターハイムは、相変わらずのつまらなそうな顔を一同に向けた。
「悪いが特訓は明日からにしてくれ。ぐずぐずしてる隙はない。とっとと出発するぞ」

取りあえず素振り五百回から逃れられて、トンフィーはこっそり溜め息を吐いたのだった。

古の大占い師　1

「あれが、ホラッタばあさんの家だよ」ニレの指差した先には湖がある。

「……どれ？」メルメルは首を傾げる。

湖の真ん中に草がぼうぼうと生えた小さな島がある。しかし、ホラッタばあさんの家らしきそれは、どこにも無い。

「どこ？　ねぇニレ？」

「ふふん。まあ、ぐだぐだ言わず付いて来い」

グッターハイムは何だか得意気な顔をして、馬の腹を軽く蹴った。馬は早足で歩き出す。――湖に向かって！

「あ、あ、あーーー！」

メルメルとトンフィーはビックリして、飛び出さんばかりに目を見開いて叫んだ。ところが――馬はポクポクと、何事もなかったかのように歩き続けている。――水の上を。

二人のおったまげた顔を見て、ニレは声を出して笑った。「ハハハハ！　二人共驚き過ぎだよ」

「だって、だって馬が――」

「この湖には、様々な魔法がかけてあるんだ。見えない橋もその一つさ」

「見えない……橋？」

メルメルとトンフィーは目を細めて、悠々歩く馬の足元に目を凝らした。しかし、やっぱり水の上を歩いている様にしか見えない。いや、若干馬の足と水面には隙間が開いている。あの隙間に橋があるのかも知れない。

「無理さ。いくら目を凝らしても橋は見えないよ。魔法で見えないように消してあるからね」

ニレはそう言いながら自分の馬を湖に進めた。そして水面に踏み出した瞬間、メルメルには、ニレの前に座るトンフィーが首をすく

めたのが分かった。ペッコリーナ先生がニレに続いて馬を進める。
水面に一歩足を踏み出した瞬間、トンフィーの気持ちが良く分かった。落ちないと分かっていても、なんとも頼りない気持ちになるものだ。
「どうして橋を見えなくしたの？」振り返ってペッコリーナ先生に尋ねる。
「ここには、ホラッタばあさんと孫娘のフレンリーの二人しか暮らしていないの。もし悪魔の兵隊にでも見つかったら大変でしょう？だからみんなで魔法をかけたのよ」
二人しか暮らしていない……と言っても、その二人の暮らしていそうな家はどこにも見当たらないのだ。
「どうしてこんな所で二人きりで暮らしているの？」
前を行くニレが、首を捻ってメルメルを振り返る。
「隠れ家で一緒に暮らすようにと言ったんだけどね。どうしても嫌だって言うもんだから……」
「どうして？」
ニレの、更に前を行くグッターハイムが、馬の横に体を飛び出させてメルメルの方を振り返った。
「年をとると、みんな我が儘になるのさ！」それだけ言って、また前を向いてしまった。
「フフフ。我が儘って訳じゃないのよ。ただ、占い師なんかやっていると、たくさんの人と生活するのがちょっと大変みたいなのよ」
メルメルはペッコリーナ先生を振り仰ぐ。「どうして？」
「見たく無くても、勝手に人の未来や過去が見えて仕舞うんですって。そして、人の未来や過去を見ると、とっても疲れてしまうらしいの」
「そうなんだ……」
（それじゃあ、二つも占ったりしたら、おばあちゃん疲れちゃうわね……）
メルメルは、仕方ないからおじいちゃんの行方だけを占って貰お

うと決めた。本当は、もう一つ占って貰いたい事を思い付いたのだが……。

「ニャー」腕の中で、ミミが懸命に顔を突き出して下を見ている。メルメルはミミと同じように顔を突き出して水面を覗いた。

「……わ！　でっかいお魚！」

メルメルの倍くらいありそうな魚が、うようよと足元を泳いでいる。鋭そうなヒレと歯が見えて思わずゾッとした。

「落ちたら大変だよ。一瞬で骨までかじられてしまうよ～？」

ニレが振り返り、メルメルを脅かそうと少し怖い声で言った。ニレの前に座ったトンフィーがビクッとした。

「このお魚も魔法なの？」メルメルは首を傾げる。

「魔法ではないよ。遥か南にある、ダイール川に住むピラニークと言う魚なんだ。その稚魚を水槽一杯、馬車で運んで来たんだ」

「そこまでする必要はないと言ったんだがな……」

後ろからラインの声が聞こえて、ニレが興奮した声を出した。

「な、何言ってるんですか！　大切なホラッタばあさんと、ふ、フレンリーに何かあったらどうするんですか！」

「何かあったって、そうやすやすとどうにかなる娘でもないがな」

ラインが聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟いた。

確かに頑健な守りだ。島に渡る橋は見えず、泳いで渡ろうとすれば凶悪そうな魚ピラニークに骨までしゃぶられてしまう。しかし、

「二人はどこに住んでるの？」

あと五十メートルの所まで来た。しかし、やっぱり島の上には何も見えてこない。

「ねぇ、一体どこに――」

メルメルがペッコリーナ先生を再び振り仰いだ、その時、

「――わ！」前を行くトンフィーが驚いた声を出した。どうやらトンフィーは前方の小島を指差している様だ。メルメルは島に目を凝らした。変わった物は何も見えない。

（何よ。トンフィーったら、何も無いじゃな――！）

「い、家が……」

さっきまで、いくら目を凝らしても何もなかった島の上に、突如として薄紫色の屋根の可愛らしい家が現れた。

「あ、あれれれ？」

メルメルがビックリして目をパチクリしていると、してやったりと言う顔でニレが体を捻って振り返る。

「フフ、驚いたかい？」

「驚いたわ！　一体どうして――あ！」

その時、家のドアが開いて、中から髪の長い女性が現れた。

「あら、フレンリーね！」

ペッコリーナ先生が手を振る。フレンリーと呼ばれた女性もニコニコと手を振り返してきた。

「ふ、フレ――うわ！」

ニレが慌てて前を向いたせいで馬から半分ずり落ちた。前に座ったトンフィーもニレに捕まれて少しずり落ちる。

「わ～！」トンフィーは青くなって悲鳴をあげた。

メルメルは、二人が湖に落ちてピラニークに食べられてしまうんじゃないかと（だって、さっきよりやけにたくさんピラニーク達が集まって来たんだ）ドキドキした。

「は～。随分大きくなったわね～」

背中から聞こえてきた溜め息まじりにの声に、メルメルは首を傾げる。「久しぶりなの？」

「私達の町からここまでは遠いもの。そもそも私は自分の町の外にはめったに行かないの。フレンリーも恐らくはここを離れはしないわ。ホラッタばあさんを一人には出来ないもの……。久しぶりフレンリー！　美人さんになってて驚いたわよ～」

最後の方は近づいて来たフレンリーに向かって言った。フレンリーは、馬からヨッコラショと降りたペッコリーナ先生を抱き締めた。

「おば様久しぶり～！　とっても～お元気そうで良かったわ～！」

メルメルを見て首を傾げる。「ん～？　この子はどちら様かしら～？」

近くで見ると、確かに綺麗な女性だ。薄茶の髪がサラリと腰まで伸びて、透けるような白い肌に、憂いをおびた瞳――薄幸の美少女、と言った感じか。

「初めまして。メルメルです」

ちょこんと頭を下げて挨拶すると、フレンリーはニッコリ微笑んだ。

「メルメルはプラムの孫娘なのよ」ペッコリーナ先生が付け足す。

「……」

そのまましばらく無言のフレンリーに、メルメルは、（な、何か変な事でも言ったかしら？　それとも顔に何かついているのかしら？）と不安になった。しかし、

「……そう～！　プラムおじい様のお孫さんなの～。初めまして～メルメル～」

どうやらフレンリーは、少しとろい――いや。おっとり、ゆっくりとした性格の様だ。

「フレンリーごきげんよう、久しぶりだね！　こっちはトンフィーだよ！」

ニレが普段より一オクターブ高い声を出した。フレンリーは鈍い

――いや、ゆっくりとした動作で振り返って、先ずはトンフィーに挨拶する。
「初めまして～トンフィ～」
「は、初めまして～」
（うふ！　トンフィーったら、ゆっくり喋りが移っちゃってるわ！）
メルメルは笑ってしまった。
「ニレ～、久しぶりと言っても～、つい～、三日前に来たばかりじゃない～？」
「そうだったかな？　ハハハハ！」
「そうよ～。ところで～、今日は一体どうしたの～？　こんなに大人数で～」
「あ、そうそう。今日はとっても大切な用事があるんだよ！」
「用事～？」
妙にハイテンションなニレと、ゆっくりおっとりなフレンリー。
グッターハイムが、如何にも堪えられなくなったように口を挟んだ。
「フレンリー！　ホラッタばあさんはいるか？」
「……」黙り込むフレンリー。
「……」何かを堪えるかの様に、顔を赤らめて返事を待つグッターハイム。
「あら～、グッターハイムお兄様～！　久しぶり～」
「だー！　挨拶何てどうでもいいから、ばあさんがいるかどうかだ！」
割とせっかちなグッターハイムは、フレンリーのゆっくりおっとりが我慢ならないようだ。
「お婆様なら中に～」
「よし、いるんだな！」
言うなり、グッターハイムは家の中にズンズン入って行ってしまった。
「いるけれど～、今、着替え中よ～」
しばらくすると、「ぎょえ～！」家の中から、グッターハイムの

悲鳴が聞こえてきた。
「……さて、立ち話もなんだから、我々も中に入れて貰おうか」
ラインが、肩を震わせて笑うメルメルとトンフィーの背中を押した。フレンリーはしばらく無言でラインを眺める。そして、
「あら～、ラインお姉さま～久しぶり～」

家の中は、メルメルの想像よりもずっと可愛らしい造りになっていた。白い壁に、白いレースのカーテン。壁にかかった、どこかの草原に少女が佇んでいるパステル画。暖炉の上にたくさんのぬいぐるみが置いてある。クマや猫、ゾウやライオン。――何故か、やけに豚のぬいぐるみが多いのが少し気になる。パチンとフレンリーが指を鳴らすと、天井からぶら下がったペンダントライトに明かりが灯り、暖色の光が室内を照らした。
占い師の家というのは、もっと神秘的なものだと思っていた。黒い繻子のカーテンに、紫色のテーブルクロス、その上には大きな水晶玉が乗っている。壁には大きなタランチュラがクモの巣を張り巡らし、ぼんやりと青白いろうそくに明かりが灯されている。そんな、メルメルの勝手な想像とはかけ離れてた部屋だった（その代わり、ふわふわの白いフレアスカートをはいたフレンリーには、この部屋はとっても合っていたんだ）から、少しがっかりしてしまった。
「適当にその辺りに座ってちょ～だいね～。何か飲み物をお出ししないとね～」
そう言いながらフレンリーは手を上げて、暖炉の上を指差した。
メルメルが、適当にその辺りのソファーに座って見ていると、
「ブーブーカモ～ン！」
すると、暖炉の上に乗った豚のぬいぐるみが三匹、もぞもぞと動き出し立ち上がった。
「あ～！」
メルメルとトンフィーがビックリして目を見張っていると、豚は二本足で立っていそいそと台所に向かった。一匹はカチャカチャと

茶箪笥からティーカップを取り出し、一匹はヤカンに火をかけて、一匹は流しの前の窓の枠に置いてある紅茶が入ったカンカンにぴょんぴょん飛びついている。

「す、凄い！　一体どうやって動いているのかしら？」

「勿論魔法だよ」

うんざりした声が聞こえてそちらを見ると、青い顔をして何だかぐったりとしたグッターハイムが壁にもたれていた。

「ま、魔法なの？」

「当たり前だろう。ぬいぐるみの豚が動く訳がない。……まったく。そんなぬいぐるみに魔法で作らせるより、自分でやっちまった方がよっぽど早いだろうに……ブツブツ」

どうやらご機嫌斜めな様子だ。ペッコリーナ先生が、グッターハイムの癇に障らない様に小声でメルメルに囁いた。

「ところがフレンリーがやるよりは、豚ちゃん達がやってくれた方がよっぽど早いのよ」

「先生もあんな魔法が使えるの？　私にも出来るかしら？」

メルメルが目をキラキラさせて聞くと、ペッコリーナ先生は首を横に振った。

「私も出来るには出来るけれど……。普通は日常生活ではそんなに魔法は使わないのよ」

メルメルが見ると、フレンリーはまた指を振って、新たな豚を二匹出動させているところだった。どうやら、テーブルの上を拭かせたり、棚からケーキを出させたりさせるようだ。

「どうして？　とっても楽しそうよ！」

「魔法はたくさんのエネルギーが必要なのよ。人それぞれ魔力が違うけれど、無限ではないの。使いすぎるととても疲れるし、回復するのには時間がかかるわ。日常生活――紅茶を入れるのにまで魔法を使っていたら、すぐ魔力切れになっちゃうわよ」

「……でも」ツンツンと足元をつっつかれて、見ると、豚のぬいぐるみが紅茶カップを持ってこちらに差し出していた。「あ、ありが

とう……」
　再びペッコリーナ先生を見ると、すでにカップを持って美味しそうに紅茶をすすっていた。
「フレンリーは特別なんだよメルメル。彼女は魔力切れなんて気にする必要ないから」
　座りもせずにウットリとフレンリーを見つめているニレ。
　メルメルは首を傾げた。「……どうして？」
「それは――」

　バーーーン！

　その時突然、部屋の奥の扉が開いて、ビックリして皆一斉にそちらを見た。背の小さな腰の曲がったしわくちゃのおばあさんが、恐ろしげな表情を浮かべて立っていた。
「……もうだめじゃ」何が駄目なのか、肩がわなわなと震えている。
「お婆様～どうしたの～？　お着替えは済んだの～？」
「済んだ。……いや、すんどらんかったかな？　どうだったか……」
　良く見ると、おばあさんの着ている鮮やかな赤色のシャツはどうやら表裏が逆のようだ。
「おい婆さん。とりあえず紹介するが――」
　グッターハイムが溜め息まじりに喋り初めると、おばあさんはグッターハイムをハッとした顔で見て、指差した。
「――お前じゃ！」
「うっ……。なんだよ」
「お前ワシの着替えを覗きおったな！　ワシのお、おっぱいを……！　もう駄目じゃ～！　嫁にいかれん～」
　顔を伏せておいおい泣き出したおばあさんを、全員無言で見つめている。グッターハイムがふらふらと外へのドアに向かった。
「お、俺は少し……風に当たってくる……」
「あー！　逃げるのか！　このどすけべえ！」

バタン、とドアの向こうへ逃げるように去ったグッターハイム。
メルメルが呆気にとられていると、一人、全く動揺した素振りのないフレンリーがニッコリ笑った。
「お婆様も～紅茶を飲まれますか～？」
「飲む」
言うなりドッカとトンフィーの横に座ったので、トンフィーは一瞬メガネザルの様な顔になってしまった。
「……で、どちら様じゃ？」おばあさんは、真っ直ぐにニレを見ている。
「お、おばあさん！　私ですよ！　ニレですよ！」
「……はて？　ニレ様？」おばあさんは首を捻っている。
ニレはやれやれと言うように頭を掻いた。おばあさんは豚のぬいぐるみが持ってきた紅茶をガブリと飲んだ。
「ニレが忘れられたんじゃ、私なんか絶対覚えてるわけないわね。なにせ十年ぶりだし」
ペッコリーナ先生が諦めたように呟いた。しかし、
「なんじゃ、ペッコリーナじゃないか。大きくなったな」
後半部分は謎だが、ペッコリーナ先生も周りも、まともな答えに逆に驚いてしまった。完全にボケた訳では……ないのか？
「これがかつての王宮使いの占い師、大予言者とまで言われたホラッタばあさんだ。まあ、ちょっと記憶やら何やら微妙だが、占いの方は完全に駄目な訳ではない筈だから……そんな顔するな二人共」
疑わしさを顔一杯に浮かべたメルメルとトンフィーを見て、困ったように笑うライン。そんなラインを、またハッとした顔でホラッタばあさんは見た。
「お、お前は……」
「……ん？」
ホラッタばあさんは目に涙を一杯に浮かべている。メルメルは嫌な予感がした。
「ワシの生き別れの双子の姉、ホケッタではないか～！」

「双子……」

思わず、ホラッタばあさんとラインを見比べてしまうトンフィー。

メルメルは深い溜め息を吐き、プラムじいさんの行方は猫達に任せようと決めたのだった。

「まぁ、と、とりあえず占ってもらいましょうよ！」
ニレが、連れてきた責任を感じてか、額に汗を浮かべながら無理やり明るい声を出した。しかし、メルメルはホラッタばあさんの占いを当てにする気は全く無くなってしまっていたので、せかせか花瓶の水などを入れ替える豚のぬいぐるみを眺めていた。
「そうね、せっかくだし……」
ペッコリーナ先生の言葉に、確かにせっかくだから占ってもらうだけは占ってもらおうと思って、メルメルは気を取り直して前を向いた。小指を立てて耳をほじほじしているホラッタばあさんを見る。
「あの、おばあちゃん、ワタシ、メルメルっていいます」
「そうかい。はじめましてメルメル」指に付いた耳くそを、フッと飛ばした。
「はじめまして。実はおばあちゃんに、ワタシのおじいちゃん――プラムって言うんだけど、プラムおじいちゃんの行方を占って貰いたいの」
「ホラッタさん、プラムじいさんよ。覚えてるかしら？」
「……ん？　はて？」
ホラッタばあさんは首を捻っている。ペッコリーナ先生は顎に指を当てて考えた。
「……まあ、プラムの事は忘れてしまっていても、居場所を占ってもらうのに問題はないわよ……ね？」誰にともなく呟く。
「じゃあ、おばあちゃんお願いします。ワタシのおじいちゃんの行方を占って下さい」
改めてそう言うと、ホラッタばあさんはメルメルをじっと見返してきた。当てにしていないとは思いながらも、やっぱりちょっとは期待してしまうものだ。メルメルはドキドキしてきた。
「……嫌じゃ」

「――へ？」
　ホラッタばあさんは子供のように、ぷいっとそっぽを向いた。「わしゃ占いたくない」
　ニレが慌てた。「ど、どうしてですかおばあさん！」
「気分じゃないんじゃ」
「そ、そんな意地悪言わないで……」
「そうよ！　メルメルはおじいちゃんがいなくなって、とっても心配なのよ？　気分じゃないなんて酷いじゃない。占ってあげてちょうだいよ」
　なんだか皆に責められて、ホラッタばあさんは口を尖らした。
「大体、占って貰いたい事を占って貰いたい時に占って貰える程、占いは甘くないんじゃ！」
　唾を飛ばし飛ばし喋るホラッタばあさん。メルメルは別にそんなに夢中で占って貰いたいという程ではなくなっていたので、半ばどうでもよくなってきた。やることが無くなったらしく、もぞもぞと暖炉の上に戻って行く豚のぬいぐるみを見つめる。
「おばあさん～！　そんな事言わないで、試しに占ってあげて下さいよ～」
　ニレが半泣きで懇願した。このままだと、何の為の寄り道か分からなくなる。グッターハイムあたりはニレを間違いなく責めるだろうから、ニレは結構必死だ。しかしホラッタばあさんは首をふりふり、
「嫌じゃ」
「そんな～」
「嫌なもんは嫌なんじゃ」
「そこをなんとか～」
「しつこい」
「まぁそう言わずに占って頂けないだろうか？」
　ラインが口を挟むと、ホラッタばあさんはピタリと動きを止めて、上目遣いでそちらを見る。

「……ねえちゃんが、どうしてもって言うなら占ってあげてもいいけどさっ」

メルメル達は吹き出しそうになり、口を両手で抑えながらラインを見た。ラインは口の端をヒクヒクさせながらなんとか作り笑いをした。

「……どうか頼むよ。ホラッタ」

「しょうがないの～。じゃあ、奥の部屋で占うから――レミー！椅子を持ってきておくれ！」

「はいはい～」

返事をしたところを見ると、どうやらレミーとはフレンリーの事らしい。フレンリーに魔法をかけられた豚のぬいぐるみが、ダイニングテーブルとセットの椅子をガタガタと数匹で運んで行く。

後でこっそりニレが教えてくれたのだが、レミーと言うのは、おばあさんの学生の時の友人らしい。友人は他にもカレンタと言う女性と（好きな男性を奪いあって、最後は口も聞かなくなってしまったんだ）そのカレンタと奪い合った初恋の人、パウルがいるらしい。

「さて、ヨッコラショ。ついておいで」

ホラッタばあさんが椅子から立ち上がると、入り口のドアがガチャリと開いた。

「……どうだ？」

グッターハイムがすぐ逃げられるように、ドアの影から顔だけ覗かせている。

「なんじゃパウル……。そんなところから覗いてないで、お前さんもきんしゃい」

「……パウルってなんだよ」

ぼやきながらもおずおず入ってくるグッターハイム。ホラッタばあさんは心なしか頬を染めていた。

奥の部屋に入っていったホラッタばあさんに、皆でぞろぞろとついて行く。メルメルは部屋に入った瞬間ビックリして、思わず立ち

止まってしまった。
「どうしたの？」後ろからトンフィーがメルメルの肩越しに部屋を覗く。「……わ～」
そこは、いわゆるメルメルの想像通りの「占い師の部屋」になっていた。怪しげにろうそくの明かりが灯され、黒いカーテンに紫色のテーブルクロス。その上には大きな水晶玉が載り、本棚には怪しげな分厚い呪文書が並ぶ。
「ちょっと待っておれ」ホラッタばあさんは、部屋の隅に置いてあった黒い法衣を頭からかぶった。「ムグ……ムグムグ……」どうやら上手く顔が出ないらしく暴れている。
「服なんざどうでもいいから、早く占えよ」
「何を言ってるんじゃ！　どうでもいくないわい！　……ムグググ」
メルメルとトンフィーが手伝って、何とか顔が出たときには、ホラッタばあさんは既に大分ぐったりとしていた。
「ふへ～。……さて、それでは占うかな」椅子に座りじっと水晶玉を見つめるホラッタばあさん。
椅子は向かい合わせで一個づつしか無いので、メルメル以外は二人を取り囲む様に立っている。トンフィーは部屋の雰囲気が恐ろしくて、こっそりペッコリーナ先生の服を掴んでいた。
「……」
ホラッタばあさんはとても真剣な顔で、水晶玉をかなり長いこと見つめている。狭い部屋に人がぎゅうぎゅう詰めで入っているせいで、メルメルは何だか息苦しくなってきていた。しかし、占いの邪魔をしてはいけないと思ってぐっと堪えていた。
「おいばあさん。まだかかんのかよ」
グッターハイムに言われて、ホラッタばあさんは首を捻った。
「……何を占うんじゃったかな？」
メルメルは、また呆れてどうでもよくなってきたが、豚のぬいぐるみもいないし、暗い部屋で良く周りも見えないので仕方無く目の前の水晶玉を見つめていた。すると、水晶玉の中に何だか人の目の

様なものが見えた気がしてギョッとした。
「プーラームーじいさんの行方を占うんだよ！　分かったか！　プーラーム――」
「だー！　分かったから大声だすな！　……ったく……ぶつぶつ」
二人の争いを無視してメルメルは水晶玉を凝視していた。
（……目の錯覚かしら？）
「キ、キキキ！」
突然、テーブルの上に猿が飛び乗って来て、メルメルはビックリした。「猿だわ！」
「ん……？　なんじゃ、猿を見るのは初めてか？」
勿論初めてじゃないが、こんな小さな猿（メルメルの手の平くらいしかないんだ）は初めてだ。
「可愛い！　何ていうお猿さん？」
「ん？　名前か？　名前は……なんじゃったかな？」
ホラッタばあさんの「必殺ど忘れ攻撃」が炸裂したが、フレンリーがおっとりとした声で教えてくれた。
「クロットプリックホリンスリーフロンタープーピーよ～。お婆さまの～ペットなのよ～」
それじゃホラッタばあさんじゃなくとも忘れてしまう。
「猿なんかどうでもいいから、早く占え！」
「さっきからうるさいの～！　もう占ったわ！」
「ほ、ほんとに？」
「本当じゃ」
メルメルは驚いた。だって、ホラッタばあさんは占いらしい占いを何にもしていないのだ。
「……で、何処にいるんだよ」
まるっきり期待していない声を出すグッターハイム。答えは――想像通りだった。

「分からん」
　メルメルは、クロットプリックホリンスリーフロンタープーピーを手の平に乗せて戯れる事にした。　こちらを見上げて首を傾げる仕草がとても可愛い。
「おいババア！　ふざけるのも大概にしろよ！　大体、何の為の水晶玉なんだこら？　ちゃ・ん・と・使・え・よ・なー！」
　ホラッタばあさんの頭の上についている髪の毛を束ねて作ったお団子を、ぐいぐいと引っぱるグッターハイム。
「つ、使ったって使わなくたって、分からんもんは分からんのじゃ！　……こ、こら離せ！」
「まあまあまあまあ！　リーダーも落ち着いて……！」
　ニレに止められて、グッターハイムはようやく手を離した。
「じゃ、じゃあ、こんな質問はどうですかね？　プラムさんがミデルの街にいるかどうか」
「ミデル？」
「そう。ミデルの街に捕らわれていると思うんですが、いかがですか？」
「さあ？　たぶんおらんな」
「たぶんて、そんないい加減な占いがあるか！　ミデル以外に考えられないんだよ！」
「おらんもんはおらんのじゃ」
「大体、瞑想の一つもしないで一瞬で占いやがって！　こんなもん着たり、部屋の雰囲気作りにばっかり力入れてんじゃねぇ！」
　グッターハイムに襟首を引っぱられて、ホラッタばあさんは苦しそうに舌を出した。
「ぐえぇ～！　雰囲気作りじゃないわ！　死者の魂を呼び寄せる為にやってるんじゃ！」

「し、死者？」敏感にトンフィーが反応して、悲鳴の様な声を出した。
「し、死者ってお化けの事？　何の為に呼び寄せてるの？」
メルメルが大きな声を出したので、クロットプリックホリンスリーフロンタープーピーはビックリして手の平の上から逃げてしまった。
「占いの為じゃ」
「占いにお化けが必要なの？」
「そりゃそうじゃ。そもそも、未来を知るなんて事が生きた人間に出来る訳なかろう？　死者の魂に手伝いをさせるんじゃよ。しかも、どうせなら魂はたくさんあった方がいいのじゃ。じゃから死者が好むように部屋を暗くしたり、よりどころとなりやすい水晶玉を置いたりしとるのじゃ」
「じゃ、じゃあ、この部屋にはお化けがうようよ……。ひえ～」
トンフィーが青くなって悲鳴を上げた。メルメルも何だか部屋の温度が急に低くなったような気がして、ブルッと身震いした。――じゃあ、もしかしたらさっき水晶玉の中に見えた気がした目の玉は……。メルメルは、もう一度身震いした。
「……そんで、その死者の魂とやらが、プラムじいさんはミデルにゃいないって言ってやがんのか？」「そうじゃ」
「んじゃ、どこにいるんだよ？」
「それは分からん」
グッターハイムだけでなく、他の者も皆深い溜め息を吐いた。
「じゃから最初から言っとるじゃろうが。占って貰いたい事を占なって貰いたい時に占って貰えるもんじゃないと……。死者の魂は気まぐれなんじゃ」
「そうよね～。お婆さまは～自分の無くしたメガネの場所さえ～満足に占えないものね～」
フレンリーが言って、何故かホラッタばあさんは、「そうじゃ！」と胸を張った。

それなら仕方無いのだろうか？　グッターハイムなどは不満げだが、メルメルは当初の目的である「一応占ってもらうだけ占ってもらう」と言うのは達成したので取り合えず満足した。
「ありがとうございました。おばあちゃん」
「うむ」
メルメルはちょこんと頭を下げて御礼をし、とっとと席を立ってドアを開けた。皆仕方無さそうに後に続いて（トンフィーは最後になりたくなくて慌てて転んだんだ）出て行こうとする。
「こらこらこら、ちょっとまちんしゃい！」ホラッタばあさんが立ち上がって大声を出した。「せっかくじゃから一人一人占ってやろう。今日は特別大サービスデーじゃ！　みんなラッキーじゃな！」
「……」
何だかちっともラッキーだと思えなくて、誰も占って貰いに行こうとはしない。
「なんじゃ貴様ら！　古の大占い師、ホラッタばあさんに占って貰いたいとは思わんのか！」
「……自分で言っちゃった」
トンフィーが小声で呟いた。ホラッタばあさんは口を尖らして膨れている。
「……仕方がないわね。じゃあ、私が占って貰うわ」
ペッコリーナ先生が言って、椅子に座った。まるで駄々っ子でもあやす様だ。ホラッタばあさんは不満げに鼻を鳴らした。
「ふんっ！　仕方がないとは何事じゃ！　まったく……ぶつぶつ……ワシの有り難い占いを一体なんじゃと……ぶつぶつ……ん？　なんじゃお前らは！　占って貰う者以外は外に出ておれ！　集中出来んじゃろうが！」
ペッコリーナ先生の周りを取り囲んだメルメル達を、シッシッとホラッタばあさんは手を振って追い払った。
「はいはい！　じゃあみんな外に出て。さ、それじゃとっとと占って頂戴！」

「なんじゃ！　その、占わせてあげるから早くしろみたいな言い方は！」

ドアの向こうからは、しばらくホラッタばあさんの不満げな声が聞こえていたが、やがて静かになった。メルメルは何気なく窓の外を見て、大分夕闇が深くなってきている事に気が付いた。

「今日はここにお泊まりするの？」

首を傾げると、ニレは、

「あ、そうそう……」と言ってフレンリーの方を向いた。「フレンリーに事情を何も説明していなかったね。実は――」

その時、奥の扉がガチャと開いた。ペッコリーナ先生が疲れたような顔で出てくる。

メルメルは驚いた。「もう終わったの？」

「ろくすっぽ占ってないもの。さ、次はグッターハイムですってよ」

グッターハイムの肩をポンと叩く。

「――は？　俺は結構だ！　……どうせあのクソババアは昔から、お前には悪霊が憑いてるだの、若くして死ぬだの、ろくな占いをしやがらないんだ……ぶつぶつ」

「ま～だ～か～？」

奥からホラッタばあさんの呼び声が聞こえる。しかし、グッターハイムは不機嫌そうな顔をして動きそうにない。

「は～や～く～こ～い～」

「あ、で、では、私が行って来ます」ニレが慌てて奥に向った。「みなさん、フレンリーに事情を説明してあげて下さいね」言いながら暗い部屋に入りドアを閉めた。

「……一人ずつじゃなきゃいけないのかな？」

トンフィーが不安げな声を出す。幽霊の部屋に一人で行きたくないのだろう。

「大丈夫よ。一緒に占ってもらいましょ」

メルメルが言うと、トンフィーはあからさまにホッとした顔にな

った。
「ねぇ～？　一体何があったの～？　プラムお爺さまを探しているの～？」
「そうそう。大変な事がおこったのよフレンリー……」
ペッコリーナ先生は、フレンリーに向き直りこれまでの経緯を説明した。ペッコリーナ先生の長い長い話を聞きながら、メルメルは改めてこの数日間に起こった様々な出来事を振り返った。
（おじいちゃんがいなくなって、ミミとシバが迎えに来たのが、ずっと昔のようだわ……）
「じゃあ～、その～、グッターハイムお兄様を呼び出した手紙が～何だか怪しいわね～。今持っている～？」
「ああ……。これだがな」
グッターハイムが、懐から再び例の手紙を取り出した。フレンリーが受け取り、横からラインが覗き込んだ。

無敵の闇の軍隊を
まかす事が出来る
技法を編み出した
たいしょうに直接
に伝えたいので、
是非きてほしい。

メルメルも手紙を覗き込み、もう一度読んでみる。
「……？」何だかこの文章をどこかで見たような気がして頭を捻る。
（……気のせいかな）たぶん、何度も見ているせいだと納得する。
「何故『たいしょう』が、ひらがななのかしらね～」
急にフレンリーの横から覗いていたラインが、ハッとした顔をして手紙を奪い取るようにした。

「これは……」

「何だか不自然よね？」
ペッコリーナ先生が問いかけるが、ラインは返事もせずに手紙を凝視している。
「どうかした？　ライン」
「……いや」
ラインは手紙をグッターハイムに返し、腕を組んで黙り込んだ。
何か懸命に考え込んでいる様だ。
「それでその後～、敵からの呼び出しの手紙を～、グッターハイムお兄様のドジのせいで～燃やしてしまったのね～？」
「ま、まぁな……」その件になると、途端に声の小さくなるグッターハイム。「だが、猫共の案内のおかげで、行き先はミデルの街だと検討がついた」
「でもお婆さまの占いだと～ミデルにはいないって～」
「あんなボケばあさんの占いがあてになるか」
孫相手に酷い言いようである。
「確かにボケばあさんだけれど～、今日は当たりの日よ～」
「何だよ当たりって」
「当たりの日と～、はずれの日があるのよ～。今日は当たりの日だから～、占いは当てになるわ～」
メルメルは素直なので、それではミデルにはいないのだな、と思った。しかし、ちっとも素直じゃない男がいた。
「けっ！　どうだかな」
「孫が言うんだから確かよ～。毎日お婆さまを見てれば分かるのよ～」
ガチャッとドアが開いて、やたらと肩を落とし、暗い顔をしたニレが出てきた。
「……は～」ドサッと体をソファーに投げ出し、溜め息を吐く。

「どうしたの～？　ニレ～」
「……鏡ないかい？　フレンリー」
「……？　あるけど～」立ち上がり鏡を取りに行くフレンリー。
「一体どうしたんだ～ニレ～？　何かあったのか～？」
グッターハイムがフレンリーの真似をして笑いを誘おうとしたが、ニレはニコリともしなかった。
「……は～」また溜め息を吐いている。
「はいニレ～」
フレンリーが鏡を渡すと、ニレは鼻の下を伸ばして鏡を覗く。
「やっぱり薄いな……生えるかな？　……ぶつぶつ……そうだ、何か薬を……ぶつぶつ」
鏡を見ながら訳の分からない事をぶつぶつ呟いているニレに、さすがのラインも呆れた声を出す。
「ニレ？　一体どうし――」

「ライン」

ハッとして声のした方を見ると、いつの間にかホラッタばあさんがドアの前に立っていた。
「来るんじゃライン……次はお前じゃ……」
「……」
何となく有無を言わせぬ感じがして、ラインは無言で立ち上がる。ホラッタばあさんは、既に奥に消えている。
「……なんだよ。急にまともな声を出しやがって」
二人の消えたドアを見つめながら、グッターハイムが呟く。フレンリーが腕を組んで力強く頷いた。
「やっぱり当たりの日だわ～」
メルメルとトンフィーは少し不安げに顔を見合わせた。グッターハイムは退屈そうに大欠伸をして、ニレは相変わらず鏡を見てぶつぶつ言っている。ペッコリーナ先生はパンパンと手を叩いた。

「さて！　フレンリー、そんな訳だから今夜は泊まらせて貰うわ。布団は足りるかしら？」
「二人で～一つくらいなら何とか～」
「じゃあ、ニレとグッターハイムに指示して用意させて頂戴。メルメルとトンフィーは私のお手伝い。夜ご飯の支度をするわよ！」
「は～い！」
　メルメルは、ピョンと立ち上がりペッコリーナ先生のポッチャリした背中に付いて行きながら、ふと奥のドアを見た。そして後ろを振り返る。フレンリーは、占いの部屋とは別なドアの向こうにニレとグッターハイムを入れて、こちらに背を向けてあれこれ指示していた。
「あの……フレンリーさん」
　メルメルが話しかけると、フレンリーは首を捻って振り返った。
「ん～？　……フレンリーでいいわよ～。どうしたの～メルメル～？」
「……フレンリー。当たりの日でも、占って欲しい事を占ってもらう事は無理かしら？」
「ん？　……う～ん。お婆さまの占いは～、基本的に～アバウトな未来しか見れないからね～。何か～占って欲しいのかしら～？」
「……の事を……」メルメルはもじもじしながら、ボソボソ言っている。
「え～？」声がさっぱり聞こえなくて、フレンリーはメルメルに近づいて顔を覗きこんだ。
「……あの、だから、その……お父さんとお母さんの事を……」
　後ろで様子を見ていたトンフィーとペッコリーナ先生がハッとした。
（そりゃそうだよね……。メルメルだって両親の事、気になってて当然だよ……）
　トンフィーは、今までほとんど両親の事を口にしなかったメルメルをいじらしく思った。

「……メルメル。ご両親の事を知りたいの？」
ペッコリーナ先生が、メルメルの肩を優しく抱いた。メルメルは無言で頷いた。そして顔を上げ、ペッコリーナ先生を見た。
「先生は、ワタシのお父さんとお母さんを知っているの？」
「直接は知らないわ。ただ、お父さまはとても強い戦士だったと聞いているわ」
――だった。それだけで、メルメルはその言葉の裏にある悲しい何かを悟った。
「トキアの兵士だったのかしら？」
「そうよ……」
「あの……お母さん……は？」
「プラムはとても優しい方だったと言ってたわ……。あのね、メルメル。あなたのご両親はもう……青暗戦争で……」
「いいの先生。……ワタシ、分かっているから」メルメルは精一杯の強がりを言って笑ってみせた。「さあ！　ご飯を作りましょう。ワタシお腹ペコペコ！」急いで皆に背を向けてキッチンに向かった。
「……メルメル」
ペッコリーナ先生がゆっくり近づいて来て、メルメルは慌てて、意味もなく、洗って伏せてある食器を洗い始めた。その顔を覗きこんだペッコリーナ先生は、無言でメルメルの頭を優しく何度も、何度も撫でた。
「……うっぐ……えっぐ……」
フレンリーとトンフィーは顔を見合わせ、そっとその場を離れる事にした。

ピッピーはとても疲れていた。翼の羽ばたきも、いつもの力強さが無い。

今朝ペッコリーナ先生に言付けられて、園まで戻りマーヴェラ園長に手紙を届けて来た。突然いなくなったメルメル達を、マーヴェラ園長やドラッグノーグ先生はとても心配していた。事情を知って安心したマーヴェラ園長は、返事の手紙をピッピーの足に結んだ。ピッピーはマーヴェラ園長のペットで、仲良しの九官鳥のトリンケトラと、

「キョウモアツイワネ！　マナツビネ！」

「オヤツモホドホドニシナイト、マイニチマナツビヨ！」

「アナタコソ、オサケハホドホドニネ！」

「ギャッギャ！」

「ピーチャン！」

と仲良くお喋りをして、ろくすっぽ休憩もしないで帰路についたのだ。

飛びっぱなしで疲れているし、日が沈んで暗闇の中、鳥目のピッピーには月明かりだけでは満足に周りが見えない。別に急げと言われた訳でもないし、休んだ方が良い事は分かっている。しかし、ピッピーは立ち止まらず、懸命に翼を動かしていた。焦っていた。とにかく、早く大好きなセンセに会いたい。離れていると何とも不安な気持ちになるのだ。

――早く。早く行かなきゃ……。

好都合な事に、鳥目で周りがほとんど見えなくても、ペットとなった生き物にはその飼い主の居場所がはっきり分かるのだ。光輝くぽかぽかした方向を目指せばいい。

普段のピッピーなら、きっとこんな事はなかった筈なのだ。

しかし疲れと、鳥目と、焦りで、自分の後ろをつかず離れず飛ん

でいる黒い影に全く気付いていなかった。相手は光る目でしっかりとピッピーを見据え、暗闇の中でも余裕を持って飛んでいた。

ピッピーは目的の光の近くまで来たことを悟って急降下した。後ろからつけて来た黒い影は、突然の相手の急降下に、慌てて同じように急降下して後を追った。しかし、いくら周りをキョロキョロ探しても、ピッピーの姿は見当らない。突然として、消え失せてしまっていた……。

近くには湖があり、島がぽつんと浮いている。しかし、白いオウムの姿も、隠れられそうな場所も全くない。湖の周りにある鬱蒼とした林に目を向ける。もしも出来るならば、舌打ちでもしたい気持ちになりながら、黒い影は空に向かって飛び立った。主に報告をする為に――。

メルメルは、ひとしきり泣くとすっきりとして、どんどん元気が出てきた。

（そうよ！　ワタシにはおじいちゃんがいるもの！）

今は行方不明だけれど、とりあえずそれは置いておく事にした。

（ペッコリーナ先生だって、トンフィーだっているし――友達だって一杯いるもの！）

その時、ガチャッとドアが開いて、ラインが占い部屋から出てきた。

「あら、お疲れ様ライン。ずいぶん長かったわね？」

「……」

何だか考え事をしているらしく、ラインはぼーっとしていて、ペッコリーナ先生の問いかけにも気付かない様だ。

（そうよ！　ワタシにはラインさんだっているもの！）

メルメルはラインの横顔を見つめた。その視線に気付いたらしく、ようやくラインは我に返った。

「いったいどうしたのライン？」ペッコリーナ先生が首を傾げる。

「いや……」何故かラインは、じっとメルメルを見つめる。

メルメルは、泣きべそに気付かれたかと思って少し赤くなった。
「あ！　ラインさん占い終わったんですか？」
玄関のドアを開けてトンフィーが入ってきた。後ろからフレンリーも入って来る。トンフィーはメルメルが泣き止んでいるのを見て、ホッとした顔をしている。
「メルメル、外に楽しいものがあるよ！　おいでよ！」
「なになに？」
頬を赤らめて、いささか興奮気味のトンフィーが手招きする。メルメルがワクワクしてそちらに行こうとすると、奥から怒鳴り声が聞こえてきた。
「ま～だ～か～！」
ラインがハッとしてメルメルとトンフィーを見る。
「あ、すまんすまん。次の者を呼ぶように言われてたんだった……。どちらが行く？」
トンフィーが占い部屋の暗がりを見て、メルメルの袖を掴んだ。
「め、メルメル、一緒に行こう」
「うん」

バサバサバサ！

「センセ！　センセ！」
「ピッピー！」
開け放した窓から、ピッピーが飛び込んできた。ソファーで丸くなっていたミミのヒゲがピクピクする。
「センセ！　オカエリオカエリ！」
ピッピーはペッコリーナ先生の肩にとまり、差し出された指を噛んで甘えている。
「あなたはただいまでしょう？　――はいはい。おかえりピーちゃん。あら、お返事貰ってきたのね？」
「園長先生から？」

袖を引くと、ペッコリーナ先生はメルメルにも見れるように、腰を屈めて手紙を広げた。

「ずいぶん心配させたみたいね……。――ほら、メルメル達の事をクラスメートが心配していたって書いてあるわ。……フフ！　ドミニクったら……」

メルメルは手紙を読んでしかめっ面になった。手紙には、ドミニクが毎日、マーヴェラ園長のところにメルメル達がどうしてるのかを聞きにくると書いてあった。

「……いじめる相手がいなくてつまらないのね。きっと」

「そうかな～？　もしかしたら寂しいんじゃないかな……」

隣から手紙を覗いていたトンフィーが言うと、メルメルはいよいよしかめっ面になってしまった。

「……ノーグはどうしてた？」

ペッコリーナ先生が聞くと、ピッピーは首をカクンと下に曲げた。

「オーイオイオイ！　オーイオイオイ！ハヤクカエッテキテオクレ！　オーイオイオイ！」

「プッ！」メルメルとトンフィーは吹き出してしまった。

「こ～ら～！　は～や～く～し～ろ～！」

「いっけない！」

ホラッタばあさんの怒鳴り声が再び聞こえて、メルメルとトンフィーは慌てて奥の部屋に駆け込んだ。部屋は相変わらず薄暗く、不気味にろうそくの明かりが揺れている。バタンと後ろでドアが勝手にしまって、トンフィーは十センチくらい飛び上がった。

古の大占い師　7

「おばあちゃん、お待たせしました」
「座りんしゃい」
メルメルが席に座った。トンフィーは少し後ろを今にも逃げ出しそうな顔をして立っている。
「さて……。それではさっそく占ってしんぜよう……ふむ……なるほど……ふむふむ……」
「……」
ホラッタばあさんは目を瞑り、かなり長いこと瞑想している。メルメルは黙って待ちながら、ゆらゆら揺れるろうそくの明かりに何だか眠くなってきてしまっていた。
「……ぐ～」
「おばあちゃん？」
メルメルが覗きこむと、ホラッタばあさんはハッとして目を開いた。
「……うむ。見えたぞよ！」
（……絶対寝てたわ）
メルメルは再び疑いの眼差しを向けた。しかし、ホラッタばあさんはそれにはまったく気付かず、再び目を瞑った。今度はゆっくりと体が横に揺れている。
「見える……見えるぞ……おぬしの未来が……」
まるで、何かにとり憑かれた様な声だ。その姿がとても不気味で、トンフィーは青くなってドア付近まで後退りしていた。後ろ手でドアノブを探る。
「……七色に輝いておる……これは……そうか……おぬしは……おぬしは……」
突然、カッと目を開いたホラッタばあさんは立ち上がり、天井に向かって両手を掲げた。

「七色の勇者なのじゃーーー！」

メルメルもトンフィーもビックリして、思わずその場で固まってしまった。

「……へ？」

トンフィーが間抜けな声を出す。次の瞬間、ホラッタばあさんはドサッと椅子に座り、テーブルに突っ伏してしまった。

「お、おばあちゃん大丈夫？」

「うーん……少し疲れたわい……」

メルメルが振り返り、トンフィーと目が合う。トンフィーは目をまん丸にしてメルメルを見ている。

「で、七色の勇者……？　メルメルが……」

メルメルは慌ててホラッタばあさんの肩を揺する。

「ね、ねえおばあちゃん、七色の勇者って……。あの古の大予言の？　闇を撃ち滅ぼす？」

「……そうじゃ」

「す、凄い！」トンフィーは耳を真っ赤にして叫んだ。「メルメルが……メルメルが予言の勇者！　凄い凄い！」

トンフィーはすっかり興奮して、「凄い凄い」と連発しているが、メルメルには今一ピンと来なかった。

（予言の勇者？　ワタシが？）

ホラッタばあさんは相変わらずぐったり突っ伏している。

「ね、おばあちゃん大丈夫？」

「……はぁ。ちと力を使い過ぎたわい……フレンリーを呼んでくれ……」

「ぼ、僕呼んでくるよ！」

カの鳴くような声を出すホラッタばあさんに、トンフィーは慌て

て部屋を飛び出した。
「やっと……やっと現れおった……待ち望んだ伝説の勇者が……」
「……」
「お婆さま～大丈夫～？」緊張感のない声を出しながら、フレンリーがやってきた。ホラッタばあさんの肩に手をかける。「あらあら～。お婆さまったら～張り切り過ぎよ～」
フレンリーがドアに向けて指を振ると、「わっ！」と遠くからグッターハイムの悲鳴が聞こえて、ドアの向こうから布団がフワフワ飛んできた。フレンリーが再び指を振ると、布団はホラッタばあさんを包み込んでフワフワと浮かび上がった。
「おい！　布団が逃げたぞ……。――お？　ばあさんどうしたんだ？」
グッターハイムが慌てて部屋に駆け込んで来た。す巻きのホラッタばあさんを見て目を丸くしている。メルメルはフレンリーの袖を引いた。
「ね、フレンリー。おばあちゃん大丈夫？」
「大丈夫よ～。少し休んだら良くなるわ～。一度に～占いをし過ぎただけよ～」
そのまま、フワフワと飛んでいくホラッタばあさんについて部屋を出て行ってしまった。
「……よぼよぼだからな。ま、大丈夫だろ。……くわ～！　いきなり布団が逃げてくからびびったぜ」
グッターハイムは大欠伸をしながら戻って行った。どうやら、寝ていたら掛けていた布団が飛んで行ってしまって驚いたらしい。部屋にはメルメルとトンフィーだけが残った。トンフィーはキラキラした目でメルメルを見つめる。
「メルメル……さっきの占い……」
「……うーん。明日の朝、おばあちゃんが元気になったらもう一度聞いてみましょう。何だか信じられないもの……。ワタシが……」
「予言の勇者なんて？」

トンフィーが言って、メルメルは首を横に振った。
「あのおばあちゃんの言う事だし」
「でも、フレンリーが今日は当たりの日だって……」
「二人ともどうしたの？　ご飯出来たよ」
ニレが部屋を覗きこんで、二人とも小さく飛び上がった。
「あ、はい！　今行くわ！」
ニレが戻って行くのを確認して、メルメルは小声でトンフィーにささやく。
「とにかく、もう一度確認するまでみんなに話しちゃダメよ……。笑われるのが落ちだもの！」
トンフィーは首を傾げて考えていたが、やがて、こっくりと頷いた。

古の大占い師　8

誰かに小さく体を揺すられて、メルメルはゆっくりと目を開いた。薄暗い中、ぼんやりと辺りを見回す。傍らで膝をついている人影に気付き、そちらに目を向ける。

「……誰？」

「すまないが、ちょっといいか？」

「……ラインさん？」

メルメルは体を起こして、隣りで眠っているペッコリーナ先生を見た。次いで、窓に目を向ける。カーテンの隙間から外の暗闇が見える。まだ、夜中なのだ。眠い目を擦りながら欠伸をしていると、ラインが促すように優しく背中を押してきた。

「メルメル……」

メルメルは仕方なく立ち上がる。

（……どうしたのかしら？　一人でおトイレに行けないのかしら？）

ぼんやり考えながら、ラインに続いて部屋を出て行く。リビングではルーノルノーが寝そべっていて、そのお腹の上でミミとシバが気持ち良さそうに眠っていた（すっかり仲良しになっちゃったんだ）。

何故かラインは、そんな二匹を持ち上げて両脇に抱えた。ルーノルノーは首を持ち上げて不思議そうにラインを見る。

「ちょっと借りるぞ」

そのまま玄関のドアを開けて、外に出て行ってしまった。メルメルが慌てて追い駆けると、ラインは湖のほとりに立って待っていた。メルメルが来たことを確認すると、ミミとシバを両脇に抱えたまま、あの、見えない橋を渡り始めた。

メルメルは小走りに追い駆ける。「どこへ行くの？」

「昨日の稽古の続きをしようと思ってな……。家の周りだとみんなを起こしてしまうから」

メルメルはパッと顔を輝かせた。眠気も吹っ飛んでしまった。「剣のお稽古？」

「そうだ。メルメルは筋がいいし、せっかくだから共にいる間に少しでもと思って……」

メルメルは、嬉しくなってスキップするようにラインの後ろをついて行く。足元にピラニークが集まって来ているが、そんな事もまったく気にならない。ラインが首だけ捻って振り返った。ニコニコ顔のメルメルを見て笑っている。両手に抱えたミミとシバが、ラインの笑いに合わせて揺れている。

メルメルはぶらぶら揺れている二匹を不思議そうに眺めた。「どうしてミミとシバを連れて行くの？」

「ちょっとな……。どうしてもやっておきたい事があって……」

「やっておきたい事？」

「ああ。まあ、行けば分かる」

行けばと言うが、一体どこに向かっているのかメルメルには分からない。空を見ると、薄っすらと明るくなり始めている。もうすぐ夜が明けるのだ。

ラインは橋を渡りきっても歩みを止めず、林の中に入って行った。どこまで行くのか少し不安になりながらも、メルメルが黙ってついて行くと、程なくして開けた場所に出て、そこでラインは立ち止まった。ミミとシバを地面に下ろす。二匹は寝ぼけているのか、ぼんやりと座り込んでいる。

「ここでお稽古するの？」

「そうだ。……少し下がって」ラインはメルメルの腕を引いて、後ろに下がらせる。

「……？」メルメルが首を傾げていると、

「ガオー！」

突然、木の上から赤毛の豹が飛び降りてきて、ミミとシバ目掛け

て走って来た。
「あ！　スリッフィーナ……あー！」
スリッフィーナは恐ろしげな顔で、ミミに向かって前足を振り上げた。まさかスリッフィーナに攻撃される筈無いと思っていたのか、ミミはまともに平手打ちを食らって、五メートル程吹っ飛んでしまった。
「あーー！」
メルメルは目を丸くして叫ぶ。それを無視して今度はシバをギロリと見た。先程のミミへの攻撃を見ていたシバは、慌てて背中を向けて逃げ出す。しかし、スリッフィーナは素早く跳躍してヒラリとシバの前に降り立った。
「ニャ！」シバは慌てて方向転換する。
「ど、どうしてなの！」
メルメルは悲鳴上げる。見上げると、ラインは腕組みをして無表情で三匹を見ていた。慌てた様子は全く無い。
「……？」ラインの様子に首を傾げながら、視線を前に戻した。
「ガオー！」幾度も行く手を遮られ、シバはヘロヘロになってきた。そして遂に、
「ウガー！」スリッフィーナはシバを左手でぶっ飛ばした！
「シバ！　ねぇラインさん！　止めて！」
メルメルはラインに掴みかかる。しかし、ラインは相変わらず無表情で、何も言ってはくれない。
「グゥゥ……」スリッフィーナが、立ち上がったシバににじり寄る。
「お願い！　ラインさん！」
ラインは返事をしない。シバはおびえて伏せてしまっている。
「ど、どうしてなの！」
スリッフィーナが、またも手を高く振り上げた。
「カー！」ミミが、スリッフィーナの背中に爪を立てて飛び乗った。バリバリと背中を引っ掻いている。しかし、スリッフィーナはまったく堪えた様子が無く、小バエでも振り払うように体を振って、ミ

ミを振り落としてしまった。
「ミャオーン！」シバがスリッフィーナ目掛けて思い切り突進した。硬そうな体に当たってはね飛ばされている。
「ら、ラインさん！」
メルメルが泣きそうな顔で再び隣を見上げる。すると、驚いた事にラインは薄っすらと笑っていた。「……ラインさん？」
「そろそろいいか。――スリッフィーナ！」
ピクリと顔を上げて、こちらに駆けてきたので、思わずメルメルは二、三歩後退りしてしまった。スリッフィーナは、そんなメルメルには目もくれず、ラインにピタリと寄り添った。
「良くやったな。スリッフィーナ」
叱りつけるならともかく、良くやったとは何事か。メルメルは少しムッとした。ラインは素知らぬ顔で、スリッフィーナの赤い毛並みを撫でている。
「何なの！　一体……」
口をへの字に曲げているメルメルを見て、ラインはクスクスと笑った。
「驚かせてすまなかったな。だが、説明する訳にいかなかったのだ……。大丈夫。スリッフィーナは本気で戦ったわけではないから」
そう言われて、ミミとシバを見てみると、二匹はポカンとした顔でこちらを見ている。どうやら怪我などはなさそうだ。
「スリッフィーナとあの二匹を戦わせておきたくてな」
「ど、どうして？」
「……分かるだろう？」
青い瞳に見つめられて、メルメルはハッとした。「もしかして、変身の為？」
ラインは頷く。
「そうだ。今は力不足で変身出来なくとも、いずれは役に立つだろう。――自慢じゃないが、スリッフィーナはとても強い」
メルメルはスリッフィーナを見る。口元から恐ろしげな牙がはみ

出していた。
（言われなくてもスリッフィーナが強い事は分かっているわ！　……でも）
「どうして教えてれなかったの？」
分かっていたら、こんなにドキドキしないで済んだのだ。少し恨めしげにラインを見る。
「くっくっく。まぁそんな顔をするな。何もメルメルを驚かせたくてやったわけではない。……ミミとシバは、一度戦った相手にしか変身出来ないのだろう？」
「……そうよ」
「その、戦うというレベルが分からなくてな。軽く手合わせしただけでいいのか、ある程度本気でなくてはならないのか……」
腕組みをして考える仕草をするラインを見て、メルメルも首を捻る。
「だから、突然襲われれば少しは本気になるかと思ったのだ。メルメルに教えてしまうと、危機感がないのがバレて、ミミとシバが戦おうとしないかも知れないと思って。――敵を欺くにはまず味方からと言うだろ？」
ニヤリと笑うラインを見て、ほんの少し楽しんでいたのではないかとも思ったが、メルメルは取り合えず納得する事にした。
「いつか……三匹のスリッフィーナを見られるのかしら？　楽しみね！」
「……そうだな」
「ミミ！　シバ！　おいで！」
二匹はスリッフィーナを警戒しながら、そろそろとメルメルの所までやって来た。
「はい。仲直りよ！」
メルメルは二匹を持ち上げてスリッフィーナの鼻面に近づける。
すると突然、スリッフィーナが大きな口を開けた。
「――！」

「クワ～」わざとらしく大きな欠伸をしている。
「こらこら……」ラインは、軽くスリッフィーナの頭を小突いた。
ミミとシバはカチンコチンに固まっている。今度は、スリッフィーナがベロリと二匹を舐めた。二匹はいよいよ固まってしまった。
「――よし。それじゃあ、あまり時間も無い事だし、今度はメルメルの稽古を始めようか？」
「はい！」
「それじゃあ、まずは素振り百回」
「はい！　……え？　ひゃ、百回……」
「冗談だ」
メルメルがホッと胸を撫で下ろすと、ラインは珍しくニコッと笑った。
「五十回だ」
「……は～い」
今度は冗談ではなさそうだ。

古の大占い師　9

ビュッ！
「六八～」「ハーハーハー……」
ビュー！
「六九～」「ゼーゼーゼー……」
ヒュ――バス！
「ゼ～八～……ふぇ～」
メルメルは、地面に突き刺さった剣をそのままに、座り込んでしまった。
「きついだろう？　せいぜい三十回くらいのものだと思ったのに、頑張った方だ」
そんな風に誉められても、喜ぶ元気すらも無い。ゼーゼーと肩で息をするので精一杯だ。
「フッ……。まぁ一日一回ずつ回数を増やしていけばいい。今日六九回だったのだから、明日は七十回だな」
「ゼー……ら、ラインさんも、ハーハー……いまだに素振りを毎日しているの？」
「そうだな。ほぼ毎日している。何事も基本が大切だからな」
そう言いながら、メルメルに貸してくれている物よりも、長く重たそうな方の剣を片手でブンブン振っている。
「……何回くらい？」
「五百」
「うへぇ」メルメルは、思わず目の玉を上にして寝転がった。
「我々のように女だと、どうしても力不足は否めない。体の構造が違うのだ。男のように剣を振るう事は出来ない。だから、人一倍の努力が必要になる。……女だから弱くて仕方がないなんて、思われたくないだろう？」
メルメルはガバッと起き上がり、大きく頷いた。負けん気だけは

もう一人前だ。
「それでも、グッターハイムのようなバカ力には敵わない事もある。しかしそこは――」
ラインは足元に落ちている小枝を拾い上げ、空に投げた。
ヒュ！　ヒュ！　ヒュ！　ヒュ！　目にも止まらぬ早さで剣を振るう。下に落ちる間に、小枝は四つに分かれていた。
「――早さで補えばいい」
メルメルが、ニッコリ笑って頷こうとした、その時、

パチパチパチパチ！

「すごいすごい！」
思わぬ場所から歓声が聞こえて、メルメルが驚いて見ると、トンフィーが耳を赤くして手を叩いていた。
「トンフィー！」
「あ、メルメル、ラインさんおはよう！　早起きして稽古していたの？」
興奮冷めやらぬ顔で走り寄って来た。
「おはようトンフィー！　――そうよ。素振りを六九回もしたんだから！」
「うわ～……。すごいなーメルメル」
「トンフィーもやってみるか？」
ブンとラインが剣を振って、トンフィーは慌てて首を横に振る。
「いやいや。僕は……」
「トンフィーは弓がいいんだものね？　あ、もしかしてトンフィーもペッコリーナ先生と弓の練習？」　そう言ってメルメルが首を傾げると、トンフィーはハッとした顔をした。
「そうだっ！　こうしちゃいられないんだ！　大変なんだよメルメル！」
「どうしたの？」

「ブーちゃんの子供のプー助がいなくなっちゃったんだ！」
「ぶ、ブーちゃん？　プー助？？」メルメルは目をパチクリさせる。
「ブーちゃんはフレンリーのペットの豚だ。プー助はその子供。……プー助の奴、また小屋を抜け出したのか」
ラインが言うと、トンフィーはこくこくと首を縦に振った。
「そうなんです！　でも、小屋を抜け出すのはしょっちゅうだけれど、どうやら橋を渡っちゃったらしくて、そんなの初めてなんだって。フレンリーが血相変えるから、みんなで必死で探してるんだけど……」
「見つからないの？」
「そうなんだ……」
メルメルはラインを見上げる。ラインはこっくり頷いた。
「それでは手分けして探そう。おそらく子豚の足じゃ、そう遠くまでは行っていないだろう」

「プ～助～！」メルメルは大声で、見たこともない子豚の名前を繰り返し呼んだ。
「プ～助～！　……あ！」
朝日を浴びてキラキラと輝くトネリコの陰に、ぷりっとした小さな白いお尻が見えた気がして走り寄る。近づいて見て、ただのまるびをおびた白っぽい石だと分かってガッカリとした。
ぐぅ～……。メルメルのお腹から情けない音が聞こえてきた。朝から素振りを六九回もしたせいで、とてもお腹が空いていた。
「プ～助～！」
呼びかけた後、今度は、「ブヒブヒ……」と鳴き声が聞こえたような気がしてキョロキョロと辺りを見回す。やはり空耳だったらしく、またガックリと肩を落とす。しかし、フレンリーが泣きべそで、子豚を必死に探してるに違いないと思い（アケが迷子になった時、トンフィーがそんなだったんだ）メルメルは諦めずに再び歩きだした。背の高い草を掻きわけて前に進む。

「プ～、すけぇ～」今一力の入らないお腹をさする。「まったく！これからはもっと柵を高くするべきね！」

子豚は、柵を飛び越えて逃げ出したらしい。メルメルが、お腹が空いて少しだけ子豚を恨めしく思い、ぶつくさ言いながら歩いていると、

「あ！」

朝露をきらめかせるアジサイの陰に、小さな丸いおしりを見つけて走り出した。今度こそ石という事はあるまい。石に、あんな風にくるんと巻いた尻尾は生えてないだろう。

「プー助！」

「ブヒ……」子豚はメルメルの姿をみとめて、慌てて逃げ出した。

「こ、こら！　なんで逃げるの！」

「ブヒブ～！」

必死で逃げても所詮は子豚の足。メルメルはすぐに追い付いた。

「つーかまえた！」

「ブヒヒ～」

屈んで子豚を持ち上げようとすると、視界の片隅に誰かの爪先が映った。

「あ、プー助捕まえたわ……よ……」

プー助を抱きかかえて前を見ると、そこには見た事の無い女が立っていた。

古の大占い師　１０

「……誰？」

女はこちらを見て、ニヤ～っと笑った。その笑顔がとても不気味で、思わずメルメルはプー助をギュッと抱き締めた。

――何て赤い唇だろう……。肌の色が白過ぎるせいで、そう見えるのかも知れない。その白さは病的とさえ言える。女は釣り上がった目を細めてこちらを見つめている。

「……誰なの？」

もう一度問い掛ける。女は、肩に乗った赤黒い眼をしたイタチの様な生き物の喉元をなでた。

「さ～て、誰だろうねぇ？」

からかうような声にいっそう恐ろしくなって、メルメルは後退りした。

「おや？　逃げるんじゃないよ……」女が右手をつと上げると、ガサガサガザ！

メルメルの真後ろの木の上から、黒い毛をした巨大なヒヒの様な生き物が振ってきた。

「きゃ……！」

頭に角のような物を生やした、その、まともな生き物ざる姿にメルメルは息を呑んだ。

「き、キメラ……？」

「よく知っているじゃないか？」

女はまたニヤ～っと笑う。後ろにキメラ、前には不気味な女。メルメルはどちらにも近寄りたくなくて、一歩も動けなくなってしまった。――キメラに指示を出した。という事は、

「……敵？」

メルメルが呟くと、女はクスクスと笑った。

「子供とは言え、お前は本当に頭が悪いねぇ……。私が森の妖精に

でも見えるのかい？」
　勿論そんな風には見えない。どっからどう見ても「悪い人」だ。
しかし、とてつもない大ピンチにも関わらず、いきなり襲ってくる雰囲気では無いせいか、メルメルは割合と落ち着いていた。――敵ならば聞きたい事がたくさんある。
「あ、あなたがおじいちゃんをさらって行ったの？」
「……私が直接連れてった訳じゃないけどねぇ。――それより、あんたのところの大将はこの近くにいるのかい？」
　メルメルは首を捻る。恐らくはグッターハイムの事だろう。そういえば皆が言っていた。敵がプラムじいさんをさらったのは、レジスタンスのリーダーであるグッターハイムを誘い出す為だと。
（それなら……）
「大将の居場所を知っているわ。でも、教える代わりにワタシの質問に答えて！」
　女は眉根を寄せて顔を歪めた。あからさまに不機嫌そうな様子だ。
「……バカなクソガキのくせに、生意気に私と交渉しようと言うのかい？」
　女は糸のように目を細めてこちらを見ている。メルメルも負けじと上目遣いに女を睨んだが、足が震えるのを止められなくなってきていた。
「ふん。それで、何を聞きたいのさ？」
　目を逸らし、また、肩に乗ったイタチの喉元を撫で始めたので、メルメルは少しホッとした。
「お、おじいちゃんの居場所を教えて！」
「……お前、本当に馬鹿だね～。そんなの教える訳無いじゃないか」
「じゃあ――ワタシも大将の居場所を教えないわ！」
　女は黙って再び右手を上げた。
「きゃ！」「プギ～！」
　突然、メルメルは後ろから羽交い締めにされてしまった。前に回された腕の黒い毛並みを見て、恐らくはあのヒヒのような生き物だ

と考える。
「プギ～！　プギ～！」「は、離してよ！」
「本当にバカだねぇ……。大人しく居場所を言えばいいものを。交渉何かしなくとも、お前をひねりあげて吐かせれば済むのだから……」
メルメルは一気に青ざめる。何とかヒヒの手を振り解こうとするが、逆にぎゅうぎゅうと締め付けてきて、段々気持ちが悪くなってきた。腕の中のプー助もぐったりしている。
「う、うう……」
女がまたニヤ～っと笑う。「教える気になってきたかい？」
メルメルは無言で首を横に振る。女は眉間にしわを寄せた。
「本当にバカなガキだよ、お前は。そんなだから、裏切られている事にも気付けないんだよ」
「……？」メルメルは苦しくてこめかみから汗を流しながら、女を見上げた。
――裏切られている事？
「ねぇお前。全然ピンときてない顔だねぇ？　お友達の中に、実はお前を裏切って手引きをしている人間がいるってのに」
「な、何よそれ？　……うぐぐ」苦しくて、だんだん頭が朦朧としてきた。
――裏切る？　――手引き？　戸惑うメルメルの顔を見て、女は嬉しそうに笑った。
「ヒーヒッヒ！　お前の仲間の中に、裏切り者がいるのさ！」
「ぐぅ……う、うそよ！　何言ってるのよ！」
「お前、意外に丈夫だねぇ？　ほら、もっと絞めておしまい！」
回された腕に一層力が加わって、メルメルは目の前が白くなってきた。
「うぐぐ……うぅ」
「ヒーヒッヒ……ヒ！」
バサリ！　頭の上で妙な音がして、メルメルが首を捻って見上げ

ると、後ろで抱きついていたヒヒの首から上が無くなっていた。回された腕の力が少し緩む。

ザザザザ！

「ひ～！」

女の悲鳴が聞こえて前を見ると、赤い影が女に走り寄るところだった。

「ラインさん！」

ブン！　ラインが剣を振った瞬間に、パッと女の姿はかき消えてしまった。ラインが目を見開く。

「……何？」

「わ、わ、わ～！」

ドーン！

「プギ～！」

ラインに首を落とされたヒヒはバランスを失って、メルメルを抱えたまま後ろに倒れてしまった。

「……ふぅ」ラインは剣を鞘に収め、メルメルに歩み寄る。「大丈夫か？　怪我はないか？」

「だ、大丈夫……。とても怖かったけど」

ラインにヒヒもどきの腕をはずして貰って立ち上がる。安心してポロリとこぼれた涙を拭き取り、ごまかす為に、メルメルは慌ててラインに話しかけた。

「あ、あの女の人はどこに行ったの？」

「逃げてしまったな。まさか、ワープの魔法を使えるとは……油断した」

ワープの魔法はとても高度な魔法だと、確か教科書に書いてあった。かなり早足で歩き出したラインについて行きながら、メルメルは考えた。

（じゃあ、結構凄い魔法の使い手なんだわ……）

「恐らくそんなに長い距離は飛べないだろうから、まだ近くにいる筈。他の者が心配だ」
「お、襲ってくるのかしら？」
「いや……逃げて行ったとは思うが、うっかり遭遇しないとは限らないからな。グッターハイムあたりとぶつかる分には問題ないが、トンフィーも一人で行動しているから……。少し軽率過ぎたな。すまない」
（別にラインさんが悪いわけないじゃないわ……）メルメルは首を横に振る。
「それにしても、何故この場所が分かったのか……」
「偶然ではないの？」
「偶然通る場所とは思えない……。つけられていたのか……。気を付けていたつもりだがな」
不思議そうに呟く声を聞いて、メルメルは思わず立ち止まった。ラインが振り向いて首を傾げる。「どうした？」
「――誰かが……」
俯いて、爪先をじっと見つめているメルメル。先に続ける言葉を言うかどうか迷っているのだ。ラインは目を細めてその様子を見ている。
「……誰かが、何だ？」
「居場所を、知らせたって事は……ないかしら？」

上目遣いに見つめてくる少女を、ラインはじっと見つめ返した。
見つめ合ったまま、しばらく沈黙が続く。
「ブヒブヒ！」二人の妙な雰囲気なんかお構いなしで、メルメルの腕の中でプー助が暴れだした。
「ど、どうしたのよ、プー助！」
「誰か来る……」
「えっ？」
ラインが林の奥に目を向ける。メルメルはギュッとプー助を抱きしめた。――また、敵だろうか？
「ブヒ～！」
苦しくてプー助がいよいよ暴れ出した時、林の奥からガサゴソと聞こえてきた。そして現れたのは、

「ブー」

大きな大きな豚だった。可愛らしいピンクのフリルがついた首輪をしている。
「あ、あれれ？」
メルメルが安心した様なビックリした様な複雑な気持ちで目をクリクリさせていると、
「ブーちゃ～ん、プー助いた～？」大きな豚の後ろからフレンリーが現れた。
「あ……。フレンリー」
フレンリーはジーッとこちらを見ている。メルメルは首を傾げた。
「どうしたの？　フレン――」
「あ～！　プー助だ～！」
言いながら走り寄って来て、プー助をメルメルの腕から受け取り、

頬ずりする。相変わらずのフレンリーのとろ――ゆっくりさに、メルメルは内心でずっこけてしまった。
「……プ～助～……」
「あ！　トンフィーの声だわ！」メルメルは両手を口に添えた。「トンフィー！　こっちよーー！」
精一杯大声で呼び掛ける。すると、トンフィーの声が少しずつ近づいて来た。そして、
「メルメル！」
林の奥から息を切らしてトンフィーが現れて、メルメルは心底ホッとした。
「あら？　プー助ちゃん見つかったのね」
トンフィーの後ろからペッコリーナ先生も現れた。一番信用出来る二人の顔を見て、メルメルはようやく安心した。自然と顔がほころぶ。そんなメルメルの様子を、ラインはじっと見つめていた。
「皆さん～、お騒がせしてすいませんでした～」
「まぁ、無事でなによりよ。湖に落ちでもしたら大変だもの」「ブー」
「あはは！　ブーちゃん良かったね。……わ！　メルメル、それ、どうしたの？」
トンフィーが、メルメルの肩の辺りを指差して目を丸くしている。首を捻って自分の肩を見てみると、クリーム色のシャツに赤いシミがついていた。
「あ……」
「先ほどのヒヒもどきの血だな……」
ラインの言葉に、皆驚いた顔をする。
「ヒヒもどきって――」「何かあったのライン？」
「敵が出たんだ。しかも、申し訳ない事に逃がしてしまった」
敵と聞いて、トンフィーは顔を青くしている。ペッコリーナ先生もとても驚いた様子だ。唯一、フレンリーだけは穏やかな顔をしているが、恐らくはまだ脳ミソの奥に届いてないだけだろう。

「こんな所に何故敵が……」
「たぶんつけられていたんだろう。なるべく早くここを離れた方が良いのだが――グッターハイムとニレを見なかったか？」
皆首を横に振る。ラインが考える仕草をするのを見て、トンフィーが言った。
「あの、空にファイヤーボールか何かで合図を送ったら、何かあったのかと思って戻って来るんじゃないですか？」
ラインは大きく頷く。
「良い提案だ。では、取り合えず我々は家に戻ろう。ホラッタばあさんが心配だ」
「じゃあ、ファイヤーボールを撃つわよ……。ルルル～ラララ～、――火の玉よ！」
ペッコリーナ先生が空にファイヤーボールを放ち、それを見上げて確認すると、ラインはとっとと歩きだした。みんなぞろぞろとそれに続いて歩き出す。ペッコリーナ先生が早足でラインの横に並んだ。
「ホラッタさんも移動させた方が良いかしら？」
「湖にかけた魔法が解けたわけでは無いだろうが……。やはり隠れ家に行って貰った方が安全だろうな」
「たぶん相当嫌がるわよ……。ちょっと厄介ね……」
大人二人の会話を後ろで聞きながら、メルメルは、先ほどからずっと同じ事を一人考えていた。あの、不気味な女の言葉だ。
――裏切り者がいるのさ！
（……バカバカしいわ）
そう思いながらも、その事を考えずにはいられなくなっていた。
（でも、わざわざワタシにそんな嘘を言う必要あるかしら……？）
心ここにあらずのメルメルの様子を見て、隣でフレンリーが首を傾げた。
「何を～考えているのかしら～？　メルメル～？」
「え！　う、ううん！　何でもないわ……」

「……そ～お～？」
フレンリーは疑わしそうにメルメルを見ている。メルメルは慌てて、少し後ろを歩くトンフィーの横に移動した。
（……トンフィーに相談してみよう）
「ね、トンフィー」
「うん？」
メルメルは、前を歩く大人達の様子をうかがう。ラインとペッコリーナ先生は今後について話し合っているし、フレンリーはブーちゃんと何やら楽しそうにお喋り（？）しているようだ。それを確認して、少し歩くスピードを緩め、小声でトンフィーに話し掛けた。
「さっきラインさんが、敵に会ったと言ったでしょ？」
「うん」
「実は、ワタシ一人でいる時に出くわしちゃったの……。プー助を見つけた時に偶然」
「わ～怖いな～。大丈夫だった？」
メルメルは笑って頷いた。「確かに怖かったけど――大丈夫。ラインさんが来て助けてくれたから」
ちらりとラインを見る。すると、向こうも何やらこちらを見ている事に気付いて、メルメルは慌てて早口になる。
「その時の敵が……あの、何か凄い不気味な女の人だったんだけれど……」
「――女の人？」
「そう。――ううん、それはどうでもいいんだけれど、とにかくその人が妙な事を言ったのよ」
「妙な事？」
「ワタシ達の中に――」
「メルメル！　トンフィー！　もっとこちらへ来るんだ」
「あ、はいっ」
ラインに言われて、トンフィーは慌てて前へ行く。メルメルはわざと少し離れて歩いていたのだが、仕方無くラインの傍まで走って

行った。
「真ん中を歩いていた方が良い。まだ敵がいないとは限らないのだから……」
頷きながらメルメルは内心、（……何だか、わざとワタシ達の話を遮ったみたい）と考えていた。
「あら！　ニレじゃない！」
バサバサバサ！
ニレが驚いた顔でこちらを振り返った。丁度ウォッチが飛び去ったところだった様だ。
「――あ！　皆さんお揃いでどうしたんですか？　さっき空に信号が上がったから、何かあったのかと……」
「何かあったのよ。丁度良かった、歩きながら説明するわ！　行きましょう」
ペッコリーナ先生に言われて、首を傾げながらも大人しくニレはついてくる。
「あ、フレンリー！　プー助見つかったんだね」
「そ～よ～。おかげ様でね～」
「良かった良かった」
ニコニコしているニレに、フレンリーは首を傾げる。
「さっき～、ウォッチが～飛んで行ったみたいだけど～？」
「え？　ああ……。信号が上がったから、様子を見に行かせたところだったんだよ……」
「ふ～ん」
「それより、一体何があったんだい？」
「え～と～、実は～……」
メルメルはニレとフレンリーの話を何とはなしに聞きながら、やはりあの話は内容が内容だけに（だって、裏切り者うんぬんなんてメルメルには怖すぎたんだ）後でこっそりトンフィーにだけしようと考えていた。

古の大占い師　１２

「だから！　敵が来るかもしれないんだってーの！　わがままも大概にしろよ、このクソババア！」
「クソババアとは何事じゃ、このクソガキ！　嫌なもんは嫌なんじゃ！」
　大人とは思えないような二人のやりとりをほったらかしにして、メルメル達は荷造りを進めていた。フレンリーを手伝って、水晶玉などの占いの道具を、広げた風呂敷の上へと置いていく。
「あー！　もういい！　こんな分からず屋は一人でここに残って、悪魔の兵隊にでもなんでも襲われちまえ！」
「ふんっ！　だいたい悪魔の兵隊なんて今まで現れた事ないんじゃ！　それなのにお前等が来た途端に、敵が来るから逃げろなんて……。もしかしてお前等が連れてきたんじゃないのか？」
「つ、連れてきた訳では……」
「じゃが、お前等に責任があるんじゃろ！」
　さすがにグッターハイムもひるんでしまった。連れてきた訳じゃないが、つけられたんだとすれば、やはり自分達の責任と言えるだろう。メルメル達が来なければ、この場所に敵が近づく事はなかったのだ。ボケている割には意外にするどいな、とメルメルは思った。
「さ～、準備が出来たから～出発しましょ～」
　フレンリーが、とてもそのか細い腕では持ち上げられそうにない、どでかい風呂敷包みをヒョイと担ぎ上げた。トンフィーはビックリして目を丸くしている。
「出発すると言っても……」
　メルメルはちらりとホラッタばあさんの方を見る。腕を組んでソファーにどっかり座っている。てこでも動かないような顔だ。グッターハイムは説得を諦めて外に出て行ってしまった。
「おばあさま～行くわよ～」

「嫌じゃ」
「じゃあ～、おばあさまは残ればいいわ～。私は行くわね～」
「な、なぬ？」
フレンリーは、クルリと後ろを向いてドアに向かって歩いて行く。
ホラッタばあさんは、口を尖らしてフレンリーの背中を見つめている。
「あら～？　あららら～？」
フレンリーは、背負っている風呂敷包みがドアに引っかかってしまって、身動きがとれなくなってしまった。メルメルとトンフィーが慌てて後ろから押すと、ズボッと風呂敷包みがドアの向こうに消えて、そのままフレンリーは歩いて行ってしまった。
メルメルとトンフィーは恐る恐る後ろを振り返る。ホラッタばあさんは口を尖らしてムスッと押し黙っている。他の人間は外に出てしまっているので、部屋にはメルメルとトンフィー、そしてホラッタばあさんだけになってしまった。二人は顔を見合わせた。
――どうする？
まさかほったらかしにして行く訳にはいくまい。しかし、この頑固そうなおばあさんを、自分達が説得出来る気は全くしない。二人が何だか身動き出来ずにいると、
「メルメル～、トンフィ～」
外からフレンリーの呼んでいる声がして、正直ホッとしながら、こそこそと外に出て行く。ドアを閉める直前にちらりと振り返ったが、相変わらずホラッタばあさんはムスッと口を尖らして座っていた。
「い、いいのフレンリー？」
「え～？」フレンリーは、クッションをブーちゃんの背中に結び付けている。
（フレンリーったらブーちゃんに乗って行くつもりかしら……）
そういえばフレンリーの分の馬が無い。
「おばあちゃん……ちょっと可哀想だわ……」

フレンリーは、メルメルを見てに～っこり笑った。
「いいのよ～気にしないで～。とっとと行きましょ～」
気にしないでと言われても、ちょっとそれは難しい。いくら少し（大分）わがままで減らず口の多いおばあちゃんでも、敵が襲って来るかも知れない場所に置いて行くなんて。
「お、おいおい。ばあさんを置いてっていいのか？」グッターハイムもそわそわと家の方を見る。
「いいから～早く馬に乗って頂戴～。早く～プラムおじいさまを～助けに行かなければいけないでしょ～？」
確かにその通りだ。皆それぞれ戸惑いながらも馬に乗る。メルメルはペッコリーナ先生の前に飛び乗り、不思議そうにフレンリーを見下ろした。
「フレンリーは馬で行かないの？」
「私は～ブーちゃん達がいるから～歩いて行くわ～」
それでは徒歩で隠れ家まで行くのだ。
（フレンリーって見かけによらず、結構力も体力もあるのね）
メルメルは感心してしまった。
「さ～、再び旅の始まりよ～。レッツゴ～」
ライン、グッターハイム、ニレとトンフィー、ペッコリーナ先生とメルメル、フレンリー、――と豚達の順に、ぞろぞろと橋を渡り始める。そして橋の半ばまで来た所で、
「こりゃ～！　待て～！」
メルメルが体をひねって後ろを見ると、ホラッタばあさんが慌てて追い駆けて来るところだった。「あら～？　おばあさまも行くのかしら～？」
フレンリーが相変わらずのんびり穏やかに聞く。ホラッタばあさんは、ふんっと鼻をならした。
「しょうがなから、ワシも行ってやるわい！」
「あらそ～」
するとフレンリーは、軽々とホラッタばあさんを持ち上げ、ブー

ちゃんの上へと乗せた。ようやくホッとして、皆が和やかに見守っていると、

「ん？　なんじゃ！　早く行け！　後ろが詰まってるんじゃぞ！」

可愛げのない言い方に、やっぱり置いて来ても良かったかなと、思わず皆思ってしまったのだった。

古の大占い師　１３

一行は小さな丘にさしかかっていた。振り返れば遙か遠くに、鬱蒼とした森に囲まれたホラッタばあさんとフレンリーの、あの湖が見える。メルメルが目を凝らしても湖の真ん中に有るはずの島は見えなかった。いや、小さな黒い点があるような気もするから、あれがそうかも知れない。

「は～」

「……」

ニレが大きい溜め息を吐いて、皆無言で一瞥する。メルメルが数えたところによると、もう三五回目になる。最初のうちはあれこれ慰めていたが、正直少しうんざりしてきてしまった。

「島はちゃんとあるわよ。家は魔法がかかっていて見えないけれどね」

ペッコリーナ先生が言うので、メルメルはもう一度目を凝らす。――やはり点すらあるかも怪しい。

「あ、フレンリー達だ！」

トンフィーが指差すのでそちらを見る。――また何も見えない。

「ど、どこどこ？　どこだい？」

トンフィーの後ろでニレが精一杯首を伸ばし目を凝らしている。どうやらニレの目にも見えない様だ。森を抜けてフレンリー達と別れてからかれこれ二十分は経つ。いくら向こうが豚の足でも、こちらは馬なのだから結構離れてしまった筈だ。

「み、見えないな……。どうだいトンフィー、フレンリーに変わりはないかい？　元気に歩いているかい？」

「元気も何もないでしょうに。さっき別れたばっかりよ」

呆れた声でペッコリーナ先生に言われて、ニレはシュンとする。

「――元気そうだよ。何だか楽しそうにブーちゃんとお喋りしてる」

「そ、そんな事まで見えるの？」

メルメルは驚いて、トンフィーの見つめる先をもう一度見た。……やはり何も見えない。
「僕、結構目は良い方だから……」
それは知っている。メルメルも良い方だが、トンフィーはメルメルよりもっともっと目が良いのだ。
「ホラッタさんはもう居眠りし始めているわね……」
ペッコリーナ先生が呟いて、メルメルは驚いて後ろを見上げた。
「せ、先生にも見えるの？」
「ウフフフ、見えるわよ～。目が良くないと、良い弓使いにはなれないのよ」
では、トンフィーはやっぱり弓使いに向いているのだ。ちょっぴり羨ましくてメルメルが見てみると、トンフィーはまだ誰も誉めていないのに、耳を赤くして頭を掻いていた。
「ハ～……」またニレが溜め息を吐いた。三六回目だ。
「おいニレ！　いい加減にしろ！　こっちまで気が滅入ってくるだろうが！」
どうやらグッターハイムの堪忍袋の緒が切れたようだ。可哀想だが、メルメルはちょっぴり賛同してしまった。
「す、すいません……。でも、心配で心配で。ああ……やっぱりついて行けば良かった」
「そうは言っても、あっさりお断りされちまったんだからしょうがねぇだろうが！」
「う、う～ん……」ニレが頭を抱えた。
そう、今から二十分程前――。

「それじゃ～私たちは隠れ家に向かうから～、ここでお別れね～」
森を抜けた先で二股に道が別れており、フレンリー達は右の道、メルメル達は左の道に行く事になった。
「じゃあね！　バイバイプー助！」
メルメルが胸に抱いていたプー助にチュウをして下ろすと、プー

助はフガフガと、ミミとシバと鼻面を合わせてから、ブーちゃんの元へ行ってしまった。
「ふ、フレンリー……やっぱり私がついて行った方が良いよ」
「ど～して～？」
「だ、だって危険じゃないか、もし、敵が出たら――」
「ニレが来ると～敵がでないのかしら～？」
「そうじゃないけれど、私が二人を守ってあげなければと……」
「ニレは～私より弱いのに～？」
「うぐっ！」
「ニレがついてきたら～私はニレまで守らなきゃいけなくなるじゃない～？」
「う、うぐぐっ！」

そんな訳で、それからずっとニレは、肩を落として溜息ばかり吐いているのだ。まぁ要するに足手まとい扱いされたのだから、ニレが肩を落とすのも無理はない。
「でも、そもそも敵が狙っているのはグッターハイムさんだから、あちらが襲われる事はまず無いでしょう。それに、そんなにフレンリーが強いなら、万が一敵が出ても大丈夫じゃないかな？」
トンフィーが慰めるように言う。ニレは力無く微笑んだ。
「そうだね……。ありがとうトンフィー……。は～。女性が強すぎると、男は苦労するよ」
「そうなの？」
トンフィーが首をひねってニレを見上げると、ニレはメルメルにちらりと視線をよこした。
「トンフィーはそんな経験ないかい？　男のくせに、女の子に負けてしまうような事……」
トンフィーはメルメルの方を見つめる。
「うん――確かにあるね。僕の場合はメルメルに負けっぱなしだもの。木登りも、かけっこも、腕相撲も」

「情けなくならないかい？」
「……なる。……かな？」
ニレは、まるで同士を得た気になって嬉しそうにうんうん頷いた。
「そうだろう！　あんまり相手が凄すぎて、ついつい、何で自分はこんなに駄目なのかと落ち込んだりしちゃって……」
「確かに！」
トンフィーが力強く同意すると、男同士しばし見つめ合い、ガッチリと握手した。すると、グッターハイムは呆れた顔でケッと言った。
「情けない事言ってんじゃねぇよ。男なら自らを鍛えて鍛えて鍛えぬいて、女なんかねじ伏せてやれ！　負けてうじうじ悩むなんてもってのほかだ！」
「そ、そりゃあ私だって、なんとかフレンリーに勝ちたいとは思いますけど……。なかなか相手が強過ぎで……。ね？　トンフィー」
「いや……。僕、別に負けていても構わないし」
「あ～！　なんだい裏切り者！」
ビクッ！　とメルメルの体が震えて、ペッコリーナ先生は首を傾げる。
「どうしたの？　メルメル」
メルメルは、無言で首を横に振った。
――裏切り者。
「だって、女の子の方が強くたって良いと思うし……。ラインさんだって、ペッコリーナ先生だってとっても強いし。そりゃあ、僕も頑張らなきゃな～とは思うけど」
「ま、まぁそうだけどさ……」
「よし。お前等俺が鍛えてやろう！」
「ひえ～！　結構です！」
メルメルは、じっくり周りを見回す。グッターハイム、ニレ、ライン――。この中に、裏切り者がいる？　――そんな訳無い……。
でも……。

今一気持ちがすっきりしない。トンフィーに相談しようと思っていたが、残念ながら二人きりになれるタイミングが無かった。仕方なく、移動中にこっそりペッコリーナ先生に話そうと思ったが……。

メルメルはチラッと横をみる。メルメルとペッコリーナ先生の乗った馬の隣に、ラインの乗った馬がピッタリと付いている。

（……何なのよ、もうっ！）

「そういえば、ホラッタばあさんの占い、みんなはどんな感じでした？」

トンフィーが言うと、ニレはがっくりと肩を落とした。「……は～」

「まーた、溜息か！　何なんだお前は！」

グッターハイムに怒鳴りつけられて、ニレはビクビクしながら言い訳するように言った。

「だ、だって、ひ、髭が……」

「あん？　髭がどうした？」

「おばあさんが、その……。私の好きな女性は髭もじゃもじゃ男と結婚するのだと……。だから、彼女のハートを射止めるためには髭を伸ばさなきゃいけないと言ったんです……。でも、私は、――剃る必要も無いくらい髭が少ないんです！　……もじゃもじゃなんて、夢のまた夢……」

一瞬グッターハイムは真顔になり、その後大声で笑った。

「ガーハッハッハッ！　そりゃ、お前、あのホラ吹きババアにからかわれたんだよ！」

「そ、そ～ですかね～？」

「くっくっく！　ま、試しに毛生え薬でも試してみるんだな……ひ～ひ～！」

後ろでどうやら顎をさすっている雰囲気を感じて、トンフィーは笑いを堪えながらペッコリーナ先生を見た。

「ぷふふ……せ、先生は？」

「私のもくだらない占いよ。……本当は九二歳まで生きられるのに、甘いものを控えないと八六歳までしか生きられないんですって。大きなお世話よ！　八六まで生きられりゃ十分よ……ぶつぶつ……」

「そりゃ占いじゃなくて診断だな」

グッターハイムが呆れた声を出し、頬を膨らませるペッコリーナ先生のお腹を見た。
「えっと……ラインさんは？」
「……」
皆が注目するなか、ラインは無言で前を見ている。トンフィーは不思議そうに首を傾げた。
「……ラインさん？」
「私も皆と同じ様なものだ」
相変わらず無表情で前を向いたまま答えるラインの横顔を、トンフィーは更に不思議そうに見る。
「でも……何だか他の人より長い時間占ってましたよね？」
すると、ラインは不愉快そうに目を瞑った。
「……そもそも、ホラッタばあさんの占いなど当てにならないだろう。ほとんどボケてしまっているのだからな。くだらない占いばかりじゃないか」
くだらないと言われて、トンフィーはシュンとして黙ってしまった。本当は、メルメルが勇者だと言われた事を最後に発表しようと思っていたのだ。
「……どうしたのライン？　なんだか、あなたにしては珍しい言い方ね。何かあったの？」
ペッコリーナ先生に顔を覗きこむように聞かれて、ラインはハッとした。
「……いや。すまない――少しイラついていて。……嫌な言い方をしたな。悪かったトンフィー」
トンフィーは無言で首を横に振った。一体何をイラついているのか不思議に思ったが、聞く事は出来なかった。そして、ある事に気付いて首を傾げた。
――そういえば、メルメルが会話に入ってこない。ずっと黙っている。見てみると、何か思いつめた様な顔で下を向いていた。しばらく見ていると、ちらりとグッターハイムの顔を覗き見ている。

「……メルメル？」
トンフィーの呼びかけにも気付かないで、今度はニレの顔を覗き見ている。
「ねぇ、メルメル！」
「え！　な、何？」ハッとした顔でトンフィーの方を向く。
「どうしたの？　何か……変だよ？」
首を傾げるトンフィーに、メルメルは慌てて首を横に振った。
「な、何でもないわ……」
「メルメル」
呼び掛けられてメルメルがそちらを見ると、ラインが青い目で真っ直ぐに自分を見つめていた。
「……な、何？」
何だか後ろめたくて上目遣いに見ると、ラインはフッと笑った。
「こちらに来ないかメルメル？」
「へ？」
意味が分からなくてメルメルが首を傾げていると、ラインは道案内の為に再び乗り込んでいたワーチャを抱き上げた。「ミギャー！」
「ちょっと交換しよう」ラインはペッコリーナ先生にワーチャを押し付けると、
「きゃ！」
メルメルをフワリと持ち上げ前に座らせた。
「少し眠くてボーっとしている様だから、ひとっ走りしてこよう」
言うなり馬の腹をバンと蹴った。猛スピードで馬は走り出す。
「きゃ、きゃー！」
「しっかりつかまっていろ！」
言われなくとも必死で馬にしがみ付くメルメル。
急な事で驚いてしまったが、なれてくると風を切るように走る馬の背は、案外気持ち良い。メルメルはモヤモヤが吹き飛んで、いつものワクワクドキドキの笑顔になってきた。
「と、と、と」

「ん？　怖いか？」
「とっても気持ち良いわ！」
ラインはフッと笑い、更にスピードを上げて、先にある高い丘に駆け上って行った。
頂上に辿り着いた所で馬を止める。先程の丘よりも更に高い場所だ。あの湖すら見えなくなってしまった。トンフィー達でさえ米粒の様に小さい。
「ここなら悲鳴さえ聞こえないな……」
「……ラインさん？」
メルメルは首をひねってラインを仰ぎ見る。やはり表情に乏しく、相変わらず何を考えているのか分からない。ラインはゆっくりと、その透明な青い瞳をこちらに向けた。
「ここなら、お前を殺しても誰も助けに来れないな」

古の大占い師　１５

猛スピードで走り去ったラインを、一同はポカンと見送った。
「どうしちゃったんだろ？」トンフィーが唖然とした様な顔で呟く。
「女は女同士色々あるんでしょうよ。……こら！　じっとしなさい！」
取り残されたミミとシバが、乗り込んで来たワーチャにじゃれついている。
「ミギャー！」ワーチャは少し迷惑そうだ。
トンフィーは、仲間に加わりたくてうずうずしているアケを抑えながら、おずおずと口を開いた。「あの、さっきの続きなのだけれど……」
「ん？　何だい続きって？」
ニレに聞かれて、トンフィーは後ろを振り返る。
「あの、占いの話しなんだけれど……」
「占いがどうかした？　トンフィー」
今度はペッコリーナ先生に問われて、トンフィーはいよいよ緊張してきた。
（……バカにされちゃうかな？）
「メルメルが、占いで、その……実は……」
「何だ何だ！　ぼそぼそ言ってないではっきり言え！」
グッターハイムに怒鳴られて、トンフィーは眉毛をキリリとさせ、息をすーっと吸い込んだ。
「勇者だって言われたんだ！」
シーン……。皆呆けたようにトンフィーを見ている。最初に口を開いたのは、やはりグッターハイムだった。
「勇者……だと？」一応呆れたような声で言って、再び黙り込んでしまった。
周りの様子を見て、全く相手にされない、という事はなさそうな

のでトンフィーは少し安心した。
「……勇者って――あの、勇者？」
後ろからニレが言って、トンフィーはこくりと頷いた。
「七色の勇者だよ。おばあさんはっきりそう言ってたもん」
「ばかばかしい！」遂に大声でグッターハイムが言った。しかし、すぐに賛同を得られそうになく、眉をハの字にしてペッコリーナ先生に助けを求める。「……なぁ？」
ペッコリーナ先生は、顎に指を当てて考えている。トンフィーは、そわそわしながら見守った。ペッコリーナ先生がくだらないと言えばそれまでだろう……。何せ、あのホラッタばあさんの占いなのだ。
「……有り得ないとは言い切れないわね」
トンフィーはパッと顔を輝かせた。グッターハイムは眉根を寄せる。
「しかし……」
「だって、何せ七色の勇者はまだ現れていないんだから」
「い、いやしかし……」
「しかも預言者本人の占いなのよ？　……そりゃ、確かにかなりボケてきてはいるわ。でも、私はあの古の大占い師の頃の、寸分違わず全て現実となる預言を何度も見てきた……。くだらないの一言で切り捨てる事は出来ない」
グッターハイムは、腕を組んで押し黙ってしまった。ニレは驚いて口を出せずにいる。ペッコリーナ先生は、その場にいる全員を見渡した。
「何にせよ、いきなり百パーセント信じる事は出来ないけれど、この事は心にしっかり留めておきましょう……。――メルメルの事を見守りながら」
ニレとトンフィーが頷き、グッターハイムがしぶしぶ頷いたその時、トンフィーの腕の中から遂にアケが飛び出し、ペッコリーナ先生の馬の上に乗って、そこに悠然と座るワーチャの尻尾に噛みついた。

「ミギャギャー！」

メルメルは体を固くしてラインを見つめた。そんなメルメルを見て、ラインはふと頬を緩めた。

「フフッ……。冗談だ。そう怯えるな」

あんな事を言われたら誰だって怯える。

――いや、そんな事はない。

メルメルは周りを疑うように見ていたから、ラインの言葉に思わず怯えてしまったのだ。普段なら、言われなくともすぐ冗談だと気付く筈だ。

メルメルがしょんぼりと黙り込んでしまったので、ラインは小さく溜息を吐いて語り出した。

「……実はあの時、メルメルを助ける寸前にあの女との会話が聞こえたのだ」

メルメルはハッとして後ろを仰ぎ見る。ラインはこくりと頷いた。

「そうだ。裏切り者云々と聞こえた……。――メルメル、人に裏切られる事が怖いか？　裏切られて、傷つく事が恐ろしいか？」

「え、えっと……」

ラインは恐らく疑わしい目で見られた事を怒っているんだろう。あるいは、仲間を不信に満ちた気持ちで見ていた事を怒っているのかも知れない。メルメルは、何だか居心地悪そうにそわそわとトンフィー達の方を見た。まだまだここまで来るには時間がかかりそうだ。

「私は何も怒っている訳じゃない。そりゃ、疑われてしまえば悲しいが、信じるに足る程メルメルとの関係をまだ築けていないのならば仕方ない」

何だか本当に悲しそうな声に、メルメルはいよいよシュンとしてしまった。「……ごめんなさい」

俯いて言うと、ラインは声を上げて笑った。

「ハハッ！　メルメルは素直だな。それでいい。……メルメル、人

を疑うと言うのは良い悪いは抜きにして、悲しい事だ」
「ごめんなさい……」メルメルは、やはり責められている気がして、つい謝ってしまった。
「謝る必要はない。ただ、人を疑って生きるような人間になって欲しくないだけだ。だから、言ってみればこれは私のわがままだな」
「……」
「疑う事をしなければ、裏切られる事も、騙される事も増えるかも知れない。騙される様な人間を馬鹿な奴だと笑う者もいるだろう……。だが、人を信じ、心を委ね通わせる事によって生まれるかも知れない大切な関係もある」
「……友達、とか？」
ラインは頷いた。
「それに、メルメルには早いかもしれないが恋人などもな……。そういう、たくさん生まれるかも知れない、人を愛する気持ちというものを、疑いの心はかき消してしまう。人の性格とは癖の様な物で成り立っている。疑う事を繰り返すうちに、それが癖になって、人を疑わずには生きられなくなる」
メルメルには難しい話しだが、疑わずに生きられなくなるというのは、とても恐ろしい事の様な気がした。
「それに、もし信じて裏切られたり、騙されたりしても、メルメルの何が傷つく訳ではないのだ。裏切った者、騙した者に問題があるだけなのだから……」
そう言って、ラインはメルメルの首に赤い石の付いたネックレスをかけた。
「え！　……これって――」ラインが今まで付けていた物だった。
「……私はメルメルを信じている。その証にプレゼントしよう……。ダサいなんて言うなよ？」
メルメルは顔を赤らめ、慌てて何度も首を横に振った。
「だ、ダサいなんて！　……と、とっても嬉しいわ！　……ありがとう」

ラインはフッと笑い、メルメルの両肩に手を乗せた。
「メルメル、覚えておくといい。人を疑う事は、人に裏切られたり騙されたりする事よりも、失うものが大きいのだと……」
丁度その時、下から上がって来るトンフィー達の姿が見えて、メルメルは大きく手を振ったのだった。

裏切り者　1

ラインと二人で駈けて行ってから、メルメルはいつものように元気なニコニコ笑顔に戻っていた。トンフィーは、本当に眠たくて様子がおかしかっただけなのかな？　だから、ひとっ走りして元気になったのかも知れない、と考えてホッとしていた。ところが、

「う～ん……。どうしようかな……」

急にメルメルは、腕を組んで考えこんでしまった。

「どうしたの？　メルメル」トンフィーが首を傾げる。

「よーし！」メルメルは、まるで何かを決意したかのように、一つ大きく頷いた。そして、キリリッと前を向く。「みんな聞いて！」

突然のメルメルの大声に、皆ビックリしてしまった。

「何だ何だ？」グッターハイムは目を丸くしている。

「突然どうしたのよ？」ペッコリーナ先生も首を傾げている。

「ちょ、ちょっとドッキリしちゃったよ……」ニレは引きつった顔をしている。

「……」ラインだけは無表情のままだ。メルメルがこの後、何を言おうとしているのか分かっているのだ。

「実はワタシ、みんなに誤らなくちゃいけないの……」今度は急に声の小さくなるメルメル。

「謝るって？」

いよいよトンフィーは首を傾げる。皆も、不思議そうにメルメルを見つめた。

「ワタシ、あの、その……みんなを疑っていたの。――いえ、本気で疑っていた訳じゃないのよ！　ただ……少しだけ、もしかしたらって……」

皆、一体何を急に言い出したのか分からずにポカンとしている。

「……疑うってどういう意味なのメルメル？　順を追って説明しなさい」

ペッコリーナ先生が、先生らしく冷静に問いかけると、メルメルは少し気持ちが落ち着いてコクリと頷いた。
「森で――プー助を探していた時に敵に会ったと言ったでしょう？」
「ええ」ペッコリーナ先生はすぐに頷いた。
「その敵が、ラインさんが来て逃げ出す直前に言ったの。裏切り者がいるって……」
上目遣いにペッコリーナ先生を見つめるメルメル。ペッコリーナ先生はさすがに驚いた顔になった。「裏切り者って――私達の中に？」
「あの人は……仲間の中にって、言っていたわ」
この言葉に一同は静まり返った。誰かに、早く何か言って欲しくてメルメルは周りを見回した。眉根を寄せて怖い顔をしたグッターハイムの顔に出会って、思わず首をすくめる。
「俺は――」グッターハイムが呟く。「ずーっと怪しいと思っていたんだ――」そう言って自らの乗った馬を、ニレの乗った馬の横に付けた。
「この野郎ニレ！　さてはお前が裏切り者だな！」ガバッとニレの頭に腕を回して引き寄せた。
「イダダダ！　な、何ですか！　何を根拠に……」
慌ててニレは逃れようとするが、グッターハイムのバカ力の前に歯が立たずにいる。
「根拠は――無い！　ガハハハハ！」
大笑いしているグッターハイムに、ニレはようやく、どうやらただの悪ふざけなのだと気が付いた。
「ば、バレちゃあしょうがない！」
ニレが言うと、グッターハイムはようやく手を放した。
「実は、私が裏切り者なのです！」
えへん、と言う顔で腰に手を当てて、精一杯悪そうに言うニレ。グッターハイムに抱えこまれていたせいで頭がもじゃもじゃだから、ちっとも説得力が無い。

「――ぷっ！」メルメルは遂に吹き出した。「アハハハハハ！」
「ウフフフ！　バカね～！」ペッコリーナ先生も笑っている。
「ガーハッハッハッハッ！」「アッハッハッハッ！」「フフフフフ……」
皆で（一人を除いて）ひとしきり笑った後、ペッコリーナ先生が仕切り直すように言った。
「裏切り者になれそうな頭の良い人は、残念ながらいなさそうね！　さあメルメル、つまらない事考えてないで、さっさとあなたの大切なおじいちゃんを探しに行きましょう！」
「はいっ！」メルメルは元気良く頷いた。
グッターハイムを先頭に、一同は再び出発した。
――人を疑うと言う事は、人に裏切られたり、騙されたりするよりも失うものが大きい……。
馬に揺られながら、頭の中で、先程のラインの言葉が蘇る。
（……そうだ。もう、疑うのはよそう）
目を瞑り、口を引き締めるメルメル。
しかし、きつく瞑った瞼の裏側に、淀んだ暗い目がぼんやり浮かび上がってこちらをじっと見つめていた。先程みんなが大笑いする中、一人ニコリともせず青い顔をしていたトンフィーの、
暗い暗い――闇のように真っ暗な目だった。

裏切り者　2（前書き）

この章は、ちょっと携帯では分かり辛いものがあるかも知れませんっ！

いや……パソコンでも厳しいかも。

ただ今ホームページを作成しておりまして、その中なら少しは分かりやすくお伝え出来る筈なのですが……。（＾―＾；）

雰囲気だけで、少しでも伝わる事を祈っております。

訳分からなかったらすいませんです。ｍ（＿＿）ｍ

馬は、新しいもやもやが生まれてしまったメルメルと、俯いて肩を落としたトンフィーの心も揺らしながら、どんどん前へと進んで行く。

ペッコリーナ先生の馬には四匹も猫が乗り込んでいて、眠ってしまったアケとシバを抱きかかえてあげながら、ペッコリーナ先生は少し疲れた顔になっていた。

「少し休憩しようか」

そんなペッコリーナ先生の様子に一早く気付いたラインがみんなに声をかけた。

「あそこに川がある。馬に水をやりがてら休もう」

指差した先には確かに小さな川が流れている。

（あそこで顔を洗って、頭を冷やそう……）

メルメルは誰より早く馬から飛び降り、川に駈けて行った。

「転ぶわよメルメル！　……コーヒーくらい欲しいわね。少し薪を取りに行きましょうか？　トンフィー、一緒に行きましょう」

メルメルはペッコリーナ先生の呼びかけに早歩きになって、川に辿り着いた途端にジャブジャブと顔を洗い出した。肩に下げたうさぎのアップリケのついた鞄がずり落ちてきて、何度も掛け直していると、

「ずいぶん豪快に顔を洗うんだな～。ほら、持っていてあげるよ」

ニレが隣に来てメルメルの鞄を持ち上げた。

「あ、ありがとう……」

「わ！　なんだいこれ？　ずいぶん重いなー」ニレは驚いて鞄を覗き込んでいる。

「わ～。本がこんなにたくさん入ってる。――あれ？　これ教科書じゃないか！　わざわざ持って歩くなんて、ずいぶん勉強熱心だなー」表紙に『算数』と書かれた本を取り出して眺めている。

「あ、ちがうの。ワタシのじゃなくてトンフィーのなのよ」
ハンカチを探し出そうと、メルメルはニレの持っているうさぎの鞄をゴソゴソあさっている。
「あー、なる程。それは納得……ん？　この本も参考書か何かかい？」
ニレは『算数』の本を鞄に戻して、代わりに別の本を取り出した。ナンブラカラコッツ著『闇の王国の謎』という本だった。
「そうよ。歴史の授業に使うのよ」
ニレは本をパラパラとめくりながら、なるほどと言った。
「闇の王国の謎かぁ。そりゃあ今の子共達は、闇の王国や暗黒王の事もしっかり学ばなきゃいけないもんなぁ。あ――」
その時、めくっていた本から紙が数枚滑り落ちた。
メルメルは慌てて拾い集めようと追い駆けた。トンフィーが勉強している時にメモか何か取ったのだろう。大切な物かも知れない。飛ばされては大変だ。
「――あらら！」
まんまと風に飛ばされて、一枚がグッターハイムの足元に落ちた。
「お？　――よっと……」
「ありがとう！」手を差し出すメルメル。
しかし、拾い上げた紙を渡そうとはせずに、グッターハイムはそれをじっと見つめている。
「……これは――なんだ？」
「え……？」メルメルは自分の手元にあるもう一枚を見てみた。
「……？」

えしよう。それは、王。皆様は、かつて彼がているだろうか？　そ操る軍師となった。

のはフィメロのみだろ
事でも知られている。
触れる事に成功した。
レプリカを作った。実
そのいしょうを身にま
も、おつなものではな
に開催される私の展示
来ればの話だが……。

訳のわからない内容だ。
（何だかこの字……）
――見覚えがある。だが、トンフィーの字ではない。トンフィー
も字がとても綺麗なのだが、それよりもっとずっと綺麗な字だ。

そう――これは、

「おじいちゃんの字だわ！」
メルメルの叫び声に、ハッとした顔でグッターハイムは紙を見直
す。今度はメルメルの手から残りの紙も全部取り上げて、まじまじ
と見始めた。
「こ、これは――」

「返して！」

突然、背後から怒鳴り声がして、メルメルはハッとして振り返っ
た。トンフィーが両手に薪を抱え、真っ青な顔で立っていた。唇が
わなわなと震えている。
「返してよ！」薪を放り投げグッターハイムから紙を奪おうとする
が、高々と掲げられて手が届かない。「返せ！」

グッターハイムの体に掴みかかるトンフィー。尋常ならぬその様子に、メルメルは何だか怖くなってドキドキしてきてしまった。トンフィーに掴みかかられてもびくともせず、グッターハイムは紙を見つめ続けている。

「……そういうことか」

グッターハイムは呟いて、ようやく紙から視線を外した。じろりとトンフィーを見下ろす。トンフィーはよろよろと後ろに下がった。

「一体何事よ！　この騒ぎは――」

トンフィーと同じ様に、薪を抱えてペッコリーナ先生が現れた。驚いた顔で、グッターハイムとトンフィーを見比べている。

「……ペッコリーナ、これを見てくれ」

グッターハイムが、紙をペッコリーナ先生に手渡す。トンフィーはもうそれを奪い取ろうとはしなかった。全てを諦めたかのようにガックリと肩を落としている。メルメルは駆け寄りたかったが、何故か全く足が動かなかった。

ペッコリーナ先生は、首を右に左に傾げながら紙を見ている。「……一体、これが何よ？」

グッターハイムが無言で、懐から新たな紙を取り出した。例の、あの手紙だ。

「これは……だって……」

手紙を広げ、戸惑うように見る。その時、突然、ペッコリーナ先生の顔付きが変わった。プラムじいさんの手紙の上や隣に、トンフィーの本から出てきた紙切れを並べたりし始めた。

何故、そんな事をするのかは分からない。分からないけれども、それは何だかとても恐ろしい行為に思えて、メルメルは小さく震えた。その時、ポンと肩に手が置かれて、メルメルはその手の主を見上げた。ラインが透き通るような透明な青い目で、トンフィーを見つめていた。

「……この紙はどこから出てきた物なの？」

ペッコリーナ先生が、いつもより低い声のトーンでグッターハイ

ムに問いかける。
「トンフィーの物らしい」
グッターハイムの返答に、ペッコリーナ先生は目を見開いた。
「……トンフィー、どういう事なの？」
強い口調で問われたが、トンフィーは俯いて黙り込んでいる。答える気はなさそうだ。
「メルメル……、あなた何か知っているの？」
トンフィーから返事が期待出来なさそうなので、ペッコリーナ先生は矛先を変える事にしたらしい。
メルメルにはまったく訳が分からなかった。しかし、
――その紙切れはトンフィーの物だからワタシは何も知らない――と言ってしまったらトンフィーが傷つくような気がして（だって、既に傷ついたような顔をして、立っているのが精一杯といった感じなんだ）黙ってペッコリーナ先生を見返した。
「メルメル……」
「メルメルは何も知りませんよ！　その紙切れは、さっきトンフィーの物だと言う、この本をめくっていたら突然出てきた物なんですから」
ニレの言葉に、ペッコリーナ先生まで何故か傷ついたような顔になった。ニレの手にした本を凝視している。
「トンフィー……」
「一体どうしたんですか？　その紙切れが何だと言うんですか？」
ニレは、まったく訳が分からないと言う顔で、ペッコリーナ先生が手にしている紙を指差している。　ペッコリーナ先生は自らを落ち着かせるように、深く深呼吸した。
「……これを見れば分かるわ」
手紙をニレに差し出す。メルメルも恐る恐る横から覗き込んだ。

無敵の闇の軍隊を

まかす事が出来る
技法を編み出した
たいしょうに直接
に伝えたいので、
是非きてほしい。

プラムじいさんからグッターハイム宛てに出されたと言う手紙だ。もう何度も見ている。特に前と変わったところも無い。ニレとメルメルは一緒に首を傾げた。

「だから、これが一体――」

「そして、トンフィーの本から出てきたこの紙切れを――」

ニレの言葉を遮って、ペッコリーナ先生はトンフィーの本から出てきた三枚の紙を、手紙の上、下、右、左にと並べた。すると――。

そろ『ある人』が一体何者なのかをお教えしよう。それは、王ィメロの事である。皆様は、かつて彼が国の天才魔術師――フトキアの国の宰相を務めていた事を知っているだろうか？　それが今では闇の王国で無敵の闇の軍隊を操る軍師となった。

暗黒王が軍政の全てをまかす事が出来るのはフィメロのみだろう。更に彼は、悪魔の技法を編み出した事でも知られている。なんと私は彼がきていたいしょうに直接触れる事に成功した。

大きさや形などを明確に伝えたいので、レプリカを作った。実に良い出来栄えなので是非きてほしい。そのいしょうを身にまとったまま記念写真を撮るなどというのも、おつなものではないだろうか？　――もっとも、ゲリラ的に開催される私の展示会、『闇の王国の秘密』に訪れる事が出来ればの話だが……。

メルメルはハッと息を呑んだ。そこに現れたのは、グッターハイム宛てに書かれた手紙などではなく、まったく別の文章だった。

「な、何だこれは……！」

ニレは驚いて、返す返す文章を見ている。メルメルはトンフィーの様子が気になったが、そちらを見る勇気が持てなかった。変わりに、頭の中に再び呼び起こされた言葉を必死で打ち消していた。

――裏切り者。

メルメルは頭を右左にブンブンと降った。するとその目が、ふとラインの澄んだ目と出会った。

（もしかしたら、ラインさんは気付いていたのかも……）

表情が変わらないのはいつもの事だが、それにしても余りにも動揺した様子が無かった。紙を覗きにも来なかったのだ。

「――つまり、プラムは俺宛に手紙など書いていなかったと言う事だ」

ラインの様子に気を取られていたメルメルは、グッターハイムの言葉にハッとした。

「それじゃあ、この文章は一体何なんですか？」ニレが首を傾げる。

「この文章は――その中にあるわ」

ペッコリーナ先生はニレがいまだに手にしたままの本、『闇の王国の謎』を指差した。ニレは驚いた顔で本を見た。

「こ、この中にですか？」

「貸しなさい」

ペッコリーナ先生は、ニレから本を受け止りパラパラめくり始めた。

「どの辺りだったかしら……」目的のページが見つからずに首を傾げていると、

「冒頭の方だ」ラインが言った。

ペッコリーナ先生は始めからページを一枚ずつめくり始める。

「――そうだったかしら？　……あ！　あったわ……これよ」

ついての情報をお教えしよう。
　この、闇のベールに包まれた人物の秘密を探るのに私はいつもにまして危険な思いをした。だが命がけの潜伏の甲斐があって、とっておきの秘密を手に入れる事が出来たのだ。
　さて、前置きはこのくらいにして、そろそろ『ある人』が一体何者なのかをお教えしよう。
　それは、王国の天才魔術師――フィメロの事である。
　皆様は、かつて彼がトキアの国の宰相を務めていた事を知っているだろうか？　それが今では闇の王国で無敵の闇の軍隊を操る軍師となった。暗黒王が軍政の全てをまかす事が出来るのはフィメロのみだろう。更に彼は、悪魔の技法を編み出した事でも知られている。
　なんと私は彼が着ていた衣装に直接触れる事に成功した。
　大きさや形などを明確に伝えたいので、レプリカを作った。実に良い出来栄えなので是非着て欲しい。その衣装を身にまとったまま記念写真を撮るなどというのも、おつなものではないだろうか？
　――もっとも、ゲリラ的に開催される私の展示会、『闇の王国の秘密』に訪れる事が出来ればの話だが……。

　ペッコリーナ先生が見せたページには、確かに先程の文章と細部に違いがあるものの、ほとんど同じような物が書かれていた。
「プラムはこの文章を書いたのね。――理由は分からないけれど」
　ペッコリーナ先生が疲れた顔で言った。
「書かされたんだろうさ。何らかの方法で騙されてな。……俺宛にあんな手紙を書けと言ったら、そうやすやすとは書かないだろうが、あんな文章なら疑わせずに書かせる事も出来るだろう」

ジロリとトンフィーに視線を送るグッターハイム。メルメルはついその視線を追って、意識的に目をそらし続けていたトンフィーの顔を見てしまった。

（トンフィー……！）

余りに青白い顔と、焦点の定まらないような瞳を見て、メルメルは涙が込み上げてきた。

「何者かがこの文章を書かせ、周りを切り取ってグッターハイム宛ての手紙を作り出したのね……」

力無い声で、俯きながら喋るペッコリーナ先生に、グッターハイムが呆れた声を出した。

「何者かだと？　ここまで分かりきっているのに遠回しな言い方はよせ。――おい貴様！」

そう言ってグッターハイムはトンフィーの胸を拳で押した。トンフィーはよろよろと後ろに数歩下がった。

「どうやってプラムにこの文章を書かせたんだ？　……いや。そもそも何故俺達を――メルメルを裏切ってこんな事をしたんだ？」

グッターハイムの言葉にトンフィーの顔が大きく歪んだ。泣きそうな顔でメルメルを見る。

「ちょっと待ってグッターハイム！」ペッコリーナ先生がトンフィーとグッターハイムの間に割って入った。「何か――何か事情があるに決まっているじゃない！　ね？　トンフィー……」

トンフィーは黙っている。

「じゃあ、その事情とやらを聞こうじゃないか。だが、いずれにしても、今の今まで俺達を欺いていた事に変わりはないがな」

険しい顔付きでグッターハイムが言う。

「で、でもこれをトンフィーが書かせたとは限らないじゃないですか！　……裏切るなんて。そんな子には見えないな……」

ニレは、眉をハの字にしている。

「だったら黙っている必要は無い！　自分はやっていないと言えばいい！」

怒鳴るグッターハイム。
「良い子なのよ……。真面目で、優しくて……。悪い事の出来る子じゃないわ」
ペッコリーナ先生は困り顔だ。
「じゃあ、その優しくてお利口な坊やの本に挟んであったこの紙切れを、一体どう説明するんだ？」
グッターハイムは紙を高く掲げた。
「それは――だから、何か事情があるのよ！」
叫ぶようなペッコリーナ先生。
「そもそも子供が、こんな文章を書かせてリーダー宛ての手紙を作り出したり出来ますかね？」
ニレがおどおどと口を挟む。
「誰か知恵をつけたのかも知れない。――おい！　どうなんだトンフィー！」
再びトンフィーの胸を押そうと手を伸ばすグッターハイム。その手をペッコリーナ先生は払いのける。
「やめてちょうだい！　あなたは、乱暴な態度を取れば相手が言う事を聞くと思っているのね！」
ヒステリックな声を上げるペッコリーナ先生。
「何だと！　……大体、教え子が影でこんな事をしても気付かないなんて、教師失格じゃないのか？」
片眉を上げて、挑発するように言うグッターハイム。
ペッコリーナ先生は顔色を無くした。「そ、それは――」

「いい加減にしろ二人とも！」

皆ハッとしてラインの方を向いた。グッターハイムとペッコリーナ先生は我に返り、自分を恥じて俯いた。そんな二人の様子を一瞥して、ラインはメルメルを見つめた。メルメルは先程までの大人の言い争いに、胸がドックンドックンと高鳴っていた。しかし、ライ

ンの青い目を見つめ返すうちに、段々と心が落ち着いてくると、ゆっくりとその視線をトンフィーに移した。

「……トンフィー」

語りかけると、ずっと俯いていたトンフィーはビクッと体を震わし、おずおずと顔を上げた。泣きそうな顔でメルメルを見る。

「トンフィー……。お願い、理由を教えて？」

メルメルは問い掛けた。精一杯――普通の声で。トンフィーは無言でメルメルをしばらく見つめ、ギューッと強く目を閉じた。その様子を静かに皆が見守る。もう、口を開く者はいなかった。

そして、ゆっくりと、トンフィーがその目を開いた。

「……命の石を……手に入れる為、だったんだ……」

遂に言ってしまったというような顔で、トンフィーは天を仰いだ。その様子を眺めながら、メルメルはまったく意味が掴めずにいる。

「命の――石？」

――何故ここで命の石が出てくるのか？

「……ソフィーか」ラインが静かな声で呟いた。

トンフィーはコクリと頷く。メルメルには相変わらず意味が分からない。しかし、周りを見れば、皆それだけで全てを察したのか、何故か一様に驚愕したような表情を浮かべている。

――命の石。――ソフィー母さん。

命の石と言えば、闇の軍隊が編み出したとされる、俗に悪魔の技法と呼ばれている死者の復活が思い浮かぶ。

命の石という青色の石に、力のある術者がある魔法をかけて――その魔法がどんなものかは知られていないが――死者の胸にその石を埋め込む。埋め込まれた者は、新たな命を手に入れ復活をする。残念な事に復活と言っても、体の方は腐ったままでろくに口も聞けないのが常だが、ごく稀に、強い力を持っている者は姿形もそのままに、生前と変わらずにいられる事もあるという。

（その命の石とソフィー母さんが、どう繋がるのよ？　……！）

「ま、まさか……」

メルメルは恐ろしい考えに思い至って言葉を無くした。トンフィーは悲しそうにメルメルを見て頷いた。

「母さんは、三カ月くらい前から、少しずつ体の調子が悪くなってきていたんだ。特に、一月前からはひどかった。以前は僕が園から戻ると、言うことをきかない体に鞭打って、僕の為にご飯を作ってくれたりしてヤキモキしたんだけれど、もう、トイレに行くのにも一人では起き上がれなくなってしまっていた……」

この言葉にメルメルは驚いた。そんな素振りを、トンフィーはいっさい見せていなかったからだ。

「どうして言ってくれなかったのトンフィー？　何か――何か手伝いが出来たかも知れないのに……。あなた、一人で抱え込んでしまったら辛かったでしょうに……」

メルメルと同じ気持ちらしく、ペッコリーナ先生が涙声で言った。トンフィーは俯いた。

「誰かに話してしまったら、母さんがもう長く無い事を認めてしまう気がして……怖かったんだ……」

メルメルは隙あらば飛び出そうとする涙を、唇を噛んで我慢していた。

――ソフィー母さん。

病気とはいえ威勢のいい人で、メルメルが遊びに行くといつだって陽気にカラカラと笑っていた。そして、口癖のようにこう言うのだ。

――ね、メルメル。あんたは本当にいい子だね。一生トンフィーの友達でいておくれね。出来れば嫁さんに来てくれた方が良いけれど、そればっかりは強要出来ないから、言わないでおこう。――ってすでに言ってるか！　アハハハハハ！

「あの頃、母さんは僕に毎日謝っていた……。ごめんね、ごめんね

って……」
「……何故？」
目頭にハンカチを押し当てながら、ペッコリーナ先生は首を傾げた。
「母さんは、自分があとわずかしか生きられない事を悟っていた。――僕を一人残して死んで行く事を……ごめん、と」
――ごめんねぇ……トンフィー。お前を一人ぼっちにさせてしまうわね……。ごめんねぇ……。
「僕は――その言葉が恐ろしかった……。一人ぼっちになるなんて――母さんが、いなくなるなんて！　――だって、ずっと二人で生きてきたんだ。生まれてから、ずっと、母さんと二人きりで……」
トンフィーの頬から顎にかけて透明な液体が一筋流れて、一瞬メルメルはトンフィーが泣き出したのかと思ったが、そうではなかった。いつの間にか、ポツリ、ポツリと雨が降り出していたのだ。自分の頭や肩も薄っすら湿っていたのだが、そんな事にも気付かない程メルメルは動揺していた。
「そりゃあ、母さんは病気で、ほとんどベッドから出られなかったし、一緒に外に出掛ける事も出来なかった。でも、僕にとってはそんなの全然構わなかったんだ……。生きてさえ、いてくれていれば――そばにいてくれさえすれば……」
メルメルにはトンフィーの気持ちが良く分かった。メルメルもずっとプラムじいさんと二人きりで暮らしてきたからだ。
――もし、おじいちゃんがいなくなってしまったら……。
とても、一人では生きて行けないだろう。考えるだけでも恐ろしい。
「だけど、母さんの具合はどんどん悪くなっていった……。食事もろくすっぽとれなくてやせこけてしまった……。僕は、園に行くと毎日――ペッコリーナ先生に話さなければ、メルメルに相談しなけ

ればと思いながら、結局、何も言えず家に帰っていた。だけど、家に帰るのも本当は恐ろしかった……。帰ったら、もしかしたら母さんが死んでしまってるんじゃないかと思うと――とても恐ろしかった……。そんな時――」

皆身動き一つせずトンフィーを見つめている。雨は少しずつ強くなってきていたが、移動しようと言い出す者はいなかった。

「――そんな時、あの女が現れたんだ」

「あの女……？」

グッターハイムが小さく首を傾げる。もう先程の怒りの表情はなく、その目には同情するような色が浮かんでいた。

「目がつり上がって、肌の色が以上に白い……不気味な女だった」

メルメルは目を見開く。「そ、それって――」

トンフィーはコクリと頷いた。そして、再び俯く。

「――その女は言った……。命の石さえあれば、僕は母さんのそばに、一生、いられる……と……」

最後は消え入るような声だった。それが、どういう事なのか分からないトンフィーではあるまい。分かっていて、それでもなお、ということか。

雨はいよいよ強さを増して、その場にいる全員の体も心も急激に冷やしていった。メルメルは続きを聞くのが恐ろしかったが、一度話し始めると、長い間胸につかえていた物を吐き出すかのように、トンフィーは次から次へと語り始めた。

「――そう……。一月程前――」

裏切り者　5

クワ〜ン　コロ〜ン。授業終了の鐘が鳴り、ペッコリーナ先生はガタガタと椅子から立ち上がった。

「それじゃあみなさん、気をつけて帰りなさいね。寄り道してサッカーボールを蹴っているうちに、明日の宿題をするのを忘れる、なんて事のないように」

メルメルはサッカーボールを蹴る前からすでに宿題の事は忘れていたので、ペッコリーナ先生の言葉に、嫌な事を思い出してしまったと憂鬱になった。

（……ま、いっか。明日早めに来てトンフィーのを写そう）

そのトンフィーは何やら大急ぎで机の上の物を鞄に詰めている。

「トンフィー、もう帰っちゃうの？　みんなで帰りにドッジボールするからトンフィーも行きましょうよ」

メルメルが誘ってもトンフィーは心ここにあらずといった様子で、ドアを開けて出て行くペッコリーナ先生の背中をじっと見つめていた。

「今日こそ、ドミニクのチームをこてんぱんにやっつけるのよ！」

メルメルは拳を掲げる。

「でも、僕あんまりドッジボール得意じゃないから……」

「得意じゃなくたっていいのよ！　ドッジボールは一人でも多い方が有利なんだから！」

そうじゃなくともみんなドミニクに脅され、メルメルのチームのメンバーはたった三人しかいなかった。いつもすぐに皆やられてメルメル一人になってしまって、逃げ回るのが精一杯のうちに時間切れになってしまうのだ。

「う〜ん……。いや——今日は止めておくよ。宿題もたくさん出たし。ごめんねメルメル、また誘ってよ……」

「そう？　分かったわ……」

今日は――とトンフィーは言ったが、ここの所ずっとメルメルの誘いを断っているのだ。勉強好きのトンフィーの事だから、おそらくは家に帰って勉強でもしているのだろうと思ったが、今日のようには声をかけないでいると、挨拶もそぞろに大急ぎで帰って行ってしまったりする。

メルメルが首を傾げていると、やはりトンフィーは慌てた様子で、足元でじゃれついていたアケを抱え上げてとっとと教室を出て行こうとする。何だか気になって声をかけようと立ち上がったところに、

「おい！　今日もキャッキャキャッキャと逃げ回るだけのつもりか？　この猿女！」

メルメルはギロリと振り返った。

「うるさいわねドミニク！　今日は秘策があるんだから……。あんたのチームなんかこてんぱんにしてやるわ！」

「なんだと～？　よく言うぜ！　だいたいお前のチームは――」

勿論秘策などない。ごちゃごちゃ言っているドミニクを無視して視線を戻すと、メルメルが強がっているうちにトンフィーはすでに教室からいなくなってしまっていた。

トンフィーは息を切らし走っていた。腕の中でチリチリとアケの鈴が鳴っている。園から家までは十五分くらいあるので、メルメルと違って体力のあまりないトンフィーにはかなりきつかったが、耳も顔も赤くし、心臓をドクドクさせながらも休むことなく家まで走り続けた。

――ソフィーが、家で待っているのだ。

最近本当に具合が悪くて、昨日などは食べた物を全部もどしてしまった。

（もっと消化に良い、食べやすい物にしなくちゃ……）

今日は幸い、園の課外授業で芋掘りをした。サツマイモはソフィーの好物だし、今日の夜は芋粥を作ろうとトンフィーは考えていた。

四二・一九四キロまで来たマラソン選手のように、額に汗を一杯

浮かべてフラフラしながら走っていると、
（――あの、嫌な曲がり角だ）
家まで残り百メートルといった所に大きな曲がり角がある。何故、嫌な曲がり角だとトンフィーが思っているかというと、いつもその手前の辺りで何だかとっても悲しい気持ちになってしまって、涙が込み上げてくるからなのだ。そして込み上げてきた涙を、瞬きを十回も二十回も繰り返してなんとか堪えなくてはならない。
そこまで、せっかく一生懸命に走って来たのに、トンフィーはドアの前まで辿り着くと、五分以上は身じろぎせずに突っ立っている。
――実は、家に入るのが怖いのだ。
もしかしたら、ベッドでソフィーが冷たく、魂の無い抜け殻になっていたらどうしようかと考えてしまうのだ。
トンフィーが肩で息をしながら、勇気が出るまでいつものようにしばらく突っ立っていると、
「どうしたんだい坊や？」
後ろから突然声をかけられて、トンフィーは飛び上がる程に驚いて振り向いた。するとそこに――肌の色の以上に白い、目尻の吊り上がった女が立っていた。
「おやおや？　ずいぶんと悲しそうな顔だねぇ……」
――なんて赤い唇なんだろう……。何だか――何だかとても、
（気持ち悪い……）
トンフィーは、初めて会う人にこんな事思ってはいけないと考えながらも、思わず眉をひそめた。
「ど、どちら様ですか？」
「私はお前の望みを叶えられる、この世で唯一の者さ……」
「……？」訳の分からない答えにトンフィーは首を傾げる。
（頭がおかしいのかな？）
女はドアの向こうを透かし見るように目を細めている。
「もう長く無いねぇ……。お前の母親」
「――！　な、何だって？」

「し～」

トンフィーが驚いた声を上げると、女は自らの唇に指を押し当てた。その仕草さえも薄気味が悪い。

「家の中に聞こえてしまうよ……。あまり心臓が良くないんだろう？　驚かすような事をしない方がいいよ」

猫なで声で女が言う。トンフィーは仕方なく声のトーンを抑えた。

「あ、あなたは何なんです？　大体――どうしてそんな事を――」

すると女は口元を手で抑えて笑った。

「クックックック……。私が何者かなんてどうでもいいじゃないか……。大切なのは、私がお前の母親の命を救える唯一の人間だということさ」

「――母さんの……命を？」トンフィーは呆然と呟く。
「そうさ……。ほおっておけば、お前の母親はあと半月と保たないだろう。それを、私なら助ける事が出来るんだよ」
「い、一体どうやって――」
頭のおかしい女のくだらない話かも知れない。そう思いながらも、藁にもすがるような気持ちでトンフィーはたずねた。女はニヤリと笑う。
「命の石さ」
「命の――石？」
思いもよらなかった答えにトンフィーは唖然とした。
「そう――命の石だ……。お前はその存在を知っているかい？」
勿論知っている。トンフィーの年頃には他の子だってすでに授業で習っているし、トンフィーは他の子より多くの知識を持っているのだ。だから、思わず笑ってしまったし、やっぱりこの女は頭がおかしいのだと結論づけた。
「はは……。命の石だって？　勿論知っているさ。要するに、ゾンビを作る材料さ」
くだらない事だという顔で首を振るトンフィーを、女は目を細めて見つめる。
「ゾンビねぇ。あんまり美しくはない呼び名だねぇ……」
「そうじゃなかったら悪魔の兵隊でしょう？　いずれにしても、そんな物じゃ母さんを救う事は出来ない」
トンフィーはだんだん腹が立ってきて睨むように女を見据えた。
――言って良い冗談と悪い冗談がある。
「そんな事はないさ。命の石があれば、あんたの大好きな母さんが死んでも、生き返らせる事が出来るだろう？」
「だから、それはゾンビとしてでしょう！　体の腐った、ろくすっ

ぽ口もきけないような……。そんなものにしてどうしようって言うんだよ！」

トンフィーは顔を真っ赤にして叫んだ。

「し～……。だから、そう興奮するんじゃないよ」

「トンフィー？」部屋の中からソフィーが呼びかけてきた。どうやら声が聞こえたようだ。「どうしたんだい、トンフィー？　いるんじゃないのかい？」

ソフィーの小さな声を聞きながら、トンフィーは女を睨みつけながら、興奮を冷まそうと肩で息をした。

「帰ってよ」

トンフィーが囁くと、女は無言で、自らの上着を下から捲り上げた。

「な、なにを……」

下着をずらし、胸を露わにしたのでトンフィーは慌てた。しかし、

「そ、それは――」

そこにあらわれた物にトンフィーは目が釘付けになる。女は服を下げ、呆然としているトンフィーのそばにつと近づいた。そして耳元で囁く。

「私がゾンビに見えるかい？」

「トンフィー？」

再び家の中からソフィーが呼びかけてきた。女はトンフィーに背を向け歩き出した。

「よく考えておくんだよ……。お前が望むなら、私はいつでも母親を救う事が出来るのだからね」

――一体あなたは何者なのか、何故自分にそんな話をしたのか。聞きたい事はたくさんあったが、頭の中がぐちゃぐちゃでトンフィーは何も聞けなかった。女はあの角を曲がってもう見えなくなってしまった。

「一体何だったんだよ……」

ようやくそれだけ呟き、トンフィーはその場に座り込んでしまっ

た。そして、あの女が耳元で囁いた時の、何とも言えない、魚の腐ったような匂いを思い出していた。

「……トンフィー？」

ソフィーの声に、慌ててトンフィーは我に返って立ち上がった。家に入ると、奥の部屋のドアが開いていて、ソフィーがベッドの上に体を起こしてこちらを見ているのが見えた。

「トンフィー、誰か来ていたのかい？」首を傾げてソフィーが聞く。

「ああ……。隣の家のブラッドさんが、――参ったよ。あの人お喋りだからなかなか解放してくれなくて」

「アハハ。気の良い男だからね。心配してくれているのさ」

トンフィーはリビングのテーブルの上に鞄を置き、ソフィーのベッドの傍らへと歩いて行った。

「お腹空いてるだろう？　すぐに作るからね……。あ、何だか今日は顔色がいいな～。――熱はどう？」

ソフィーのおでこに手を置きながらトンフィーが言うと、ソフィーはニッコリ笑った。

「今日は大分調子いいよ。焼き芋も、五、六本は食べれるよ！」

「え！　な、なんで焼き芋？」

トンフィーが驚いて目を丸くすると、ソフィーはいたずらっぽく笑ってリビングのテーブルの上を指差した。トンフィーの置いた鞄の中から、サツマイモが転がり出ていた。

「――アハハ！　今日は焼き芋じゃなくて芋粥にしようと思ったんだよ」

「芋掘りでもしたのかい？」

ソフィーはニコニコしながら尋ねる。どうやら本当に調子が良いようで、トンフィーはホッとした。

（あと、半月もたないなんて――嘘だ）

「そうだよ。春先に種芋を植えといたんだ。――メルメルのお芋なんてなかなか抜けなくて、二人で力を合わせてやっと抜いたら、こ～んなに大きなお芋が出てきたんだから！」

楽しそうに話すトンフィーを、ソフィーは嬉しそうに見ている。
「じゃあ、メルメルの本日のおやつは、プラムじいさんお手製のスイートポテトパイってところだね！　いいな～。プラムじいさんのスイーツは本当に美味しいもんねー。こないだトンフィーが持って帰ってきたイチゴクッキーのうまいの何のって」
「アハハハハ！　明日もしかしたらメルメルがスイートポテトパイのおすそ分けをくれるかも知れないから、そうしたら母さんに持って帰ってきてあげるよ」
「イェーイ！　ヤホホーイ！」
子供みたいにはしゃぐソフィーをニコニコ眺めながらも、トンフィーの目の裏には、ずっとあの女の胸に埋め込まれた、青色の石が映し出されていた。

裏切り者　7

翌朝――トンフィーは、いつもより一時間も早く園へと行った。教室の机の上に鞄を投げ捨て、急いで図書室へと向かう。

「オハヨウ！　オハヨウ！」「グッモーニング！　キエー！　キエー！」

途中、廊下でピッピーとトリンケトラが挨拶してきた。

「おはよう。トリンケトラにピッピー！」

足早に通り過ぎると、背中越しに二匹の会話が聞こえる。

「アナタハイツモガミガミガミ！　ソリャア、ダンナダッテイヤニナルワヨ！」

「ガミガミガミ、ワタシダッテイイタクナイノヨ！　ダケドアノヒトッタラ、イクライッテモ！」

両手で耳を塞ぎながら、トンフィーは大急ぎでその場から離れた。朝から賑やかなのは鳥達だけらしく、廊下は静まり返っている。遠く離れても二匹の声がいつまでも小さく聞こえる程だ。通い慣れた図書室のドアを開けると、誰もいない室内はいよいよ静かだった。自らの足音がとてもよく響く。実は、調べたい事があってこんなに早く（だってそもそも、トンフィーはいつもメルメルより三十分も早く来てるんだ）に、園にやって来たのだ。トンフィーは普段からしょっちゅう図書室に来て調べ物をしたり勉強したりしているから、目的の本がどの辺りにあるかおおよその検討は付いていた。

（えっと、確かこの辺に……。――あった！）

少し高い位置にある本を背伸びして取り出す。その場でパラパラとめくり中身を確認する。

（うん……。この本で良さそうだ）

満足そうに一人頷いて、本を持ったまま部屋の奥へと向かう。奥には大きなテーブルと、それを囲むように椅子が数脚置いてあり、トンフィーは、奥の隅の一番お気に入りの席へと座った。先程見つ

け出した本をテーブルの上へと置く。
ナンブラカラコッツ著『命の石と死者の復活』
しばらく表紙を見つめ、ゆっくりめくり始める。

――まず、始めに。「命の石」とは何か。
そもそも命の石とは、トキアの国のカルカッチャ山の麓の洞窟から産出される青い石の事で、大きな魔力を含んでおり、もとは魔力増大の為のアクセサリーや、装備品、あるいは占いの道具などに使用され、トキアの国の（現在は闇の王国）最大の輸出品とされていた。
ちなみに、「命の石」の結晶であり、その「命の石」の数百倍の魔力を持つと言われている物が「女王の石」である。
「女王の石」とはトキアの国の女王の証しとして代々受け継がれてきた、二つの対の石の事である。

――トンフィーは無言で次のページをめくる。今のところトンフィーの知らないような事は載っていない。

女王には、石と共に受け継がれる復活の呪文というものがあり、「女王の石」と復活の呪文を合わせる事によって、失われた命を一度だけ救う事が出来ると言われている。そして、この事に目を付けて編み出されたのが「命の石」による死者の復活である。これは俗に悪魔の技法と呼ばれ、暗黒王の腹心でもある闇の王国の魔法使い、フィメロが編み出したものだ。

――まだトンフィーの求める問いへの答えは出てこない。更に先に進む。

悪魔の技法…。まだまだその詳細は謎に包まれているが、幾つかあきらかになっている点もある。

まず、死者の復活に必要不可欠なのは勿論「命の石」である。その「命の石」に、能力の高い魔法使い（恐らく二級以上の魔法使いと思われる）が、特別な魔法をかけるのだ。

この「特別な魔法」がいかなる魔法かは、残念ながら分かっていない。

特別な魔法をかけられた「命の石」を、死人の心臓に埋め込む。すると、その者は新たな命を得て復活するという。これこそが「悪魔の兵隊」と呼ばれる存在になのである。

――トンフィーは深い溜め息を吐いた。

これまではトンフィーの知らない新しい情報は何も載っていなかった。顔を上げ、壁に掛けられた時計を見る。

――もう、三十分経ってしまった。

慌てて先をめくる。

悪魔の兵隊とは、一体どのような存在なのか？

「命の石」を埋め込まれて復活した者は、決して生前のままとはいかない。肉体は腐り、脳もしっかりとは機能しなくなる。

私の知り合いにクラスラーと言う男がいる。流行り病で父親を亡くしてしまったのだが、彼はごく普通の葬儀をして、その死体を墓に埋めた。ところが十日後、何者かに墓を掘り起こされ、父親の死体を奪われてしまったという。後に分かった事だが、この地域の墓は全て闇の軍隊に暴かれ、死体は悪魔の技法によって悪魔の兵隊にされてしまっていたのだ。

さて。後にクラスラーは、トキアの国の兵士として闇の軍隊と戦う事になり、悪魔の兵隊となった父親と再会する事となる。

しかし、残念ながら彼の父親は、再び出会えた事を喜べる状態ではなかった。

かろうじて父親と分かる面影があるものの、片目は抜け落ち、皮膚は腐り溶けかけ、鼻がもげるような悪臭を放っていたという。そ

れでも彼は父親に必死で呼びかけ、何とか家へ連れ戻そうとした。だが、相手は全く実の息子を認識しておらず、喋る事もままならなかった。頑なに戦い続け、矢が刺さり、片腕を切り落とされようとも逃げ帰ろうとはしない。諦めたクラスラーは、自らの剣で、泣く泣く父親の心臓に埋まった「命の石」を突き壊して、悲しい再会に別れを告げたという……。

トンフィーは思わず本を閉じた。

――やっぱり悪魔の秘法なんて……。

しかし、先日の女の胸に埋め込まれた「命の石」が頭の中に蘇り、閉じた本に目を落とした。

――あの人も悪魔の兵隊なのか？　……そんな風に見えなかった。

頭を振りながら、再び本を開く。

先程のクラスラーの話からも分かるように、悪魔の兵隊とは、ただ「命の石」によって動かされているだけの、魂の抜け殻の様な存在である。「命の石」を使って自らを復活させた者の命令を、死ぬまで遂行する事のみを目的とする存在なのだ。しかし――、

――嫌気がさして、ほとんど流すように読んでいたトンフィーは、この先に書いてある文章を見て目を見開き、顔を本に三十センチほど近づけた。

――しかし、何事にも例外というものがある。大方の悪魔の兵隊は腐った体をしているがこれは全てに当てはまらず、命の石を埋め込まれた時点で腐食は止まるので、真新しい死体であれば姿形は生前とあまり変わらない事もあるのだ。だが、それでも意思の無い、主の操り人形である事に変わりはないが……。

――トンフィーはがっかりして体を起こす。目線を上げ再び時計

を見る。――あと三十分しかない。大した期待もなく先をめくった。

ところが、更に驚くような情報を私は入手した。

今度は、私の知り合いの知り合いに、フィッツィという女性がいる。数年前に、彼女は戦で息子を亡くしていた。そして、先ほどのクラスラーと同じように、息子を墓に埋めたその日に、墓を暴かれ死体を奪われたのだそうだ。

ところが、その一年後に隣の町で全く生前と変わらぬ姿の息子に出会ったという。

私は直接フィッツィに話を聞く事にした。彼女は興奮して目をキラキラと輝かせながら語ってくれた。

フィッツィの息子――名をネムロンと言う――は、母親の姿を認め、「やあ、お袋」と、以前と変わらぬ呼び方で向こうから声をかけてきたと言う。一体全体どういう事なのかとフィッツィが聞くと、胸に埋め込まれた「命の石」を見せて、こう言ったというのだ。

「オレはベラメーチェというお方に、悪魔の技法で復活させて頂いたのだ」

このベラメーチェが何者かは分からないが、フィッツィは私の前で涙を流し、ベラメーチェという人物にとても感謝していると言った。

ネムロンは以前と比べると若干冷たいと言うか、素っ気ないような感じはしたが、昔の記憶もあり、喋る言葉も仕草も前とは変わらなかったという。ただ、フィッツィがいくら家に帰るよう頼んでも、それには応じてはくれなかったらしい。何でもネムロンが言うには、「私を蘇らせてくれたベラメーチェ様に、ご恩を返さなければいけない」のだそうだ。

私はフィッツィの話に驚き、この例を参考に他にも様々な情報をかき集めてみた。するとこの様な例が他にもいくつかあり、それを総合して分析した結果、いくつかの驚きの事実が浮かび上がってきた。

――トンフィーは興奮してページを先へめくる。ようやく求めていた答えを得られそうな予感に、こっそり後ろから覗いている人物がいる事にも全く気付かなかった。

先ほどの例からも分かるように、悪魔の兵隊と呼ばれる者は基本的に二種類の存在に分けられる。

一つは体が腐食し（まれにそうでない者もいる）、喋る事もままならず、主人（自らを復活させた人物）に言われた事を動かなくなるまで続けるだけの人形のような存在。クラスラーの父親もそうだし、ほとんどの悪魔の兵隊がこちらに当てはまる。そしてもう一つが、フィッツィの息子のネムロンのように生前と見た目も中身もほとんど変わらず、やはり主人の命令には絶対逆らわないが、きちんと意思を持った存在。

一体何故、同じように悪魔の技法で復活した者に、なぜそのような違いが出るのか？

どうやらこの事は、その者の生前の能力が大きく関わっているようなのだ。私の調べた限りではネムロンのような状態で復活した悪魔の兵隊は、生前皆一様に、魔法、剣技、柔術などの能力に特に秀でていた。ちなみに、ネムロンはトキアの国の赤軍の副隊長を勤めていたと言うのだから、高い能力を持っていたのは疑いようがない。そのような者ばかりが特別な状態の悪魔の兵隊として復活するのだから、どうやら闇の王国の中でも、皆、かなり上の方の地位についているようなのだ。隊長、武将、文官、将軍など……。

実はトキアの国で紫の大臣を勤めていた、現在は闇の王国の将軍でもあるマローネなども、悪魔の兵隊なのではないかとの噂があるのだ……。

まぁ、その事はともかく、今分かっているのは、高い能力の持ち主は、悪魔の技法によって生前とほとんど変わらない状態で復活するのだという事だ。

「――高い能力……」

トンフィーは思わず口に出して呟いた。手の平にじっとりと汗を掻いている。

「高い能力がどうしたの？」

突然後ろから話しかけられてトンフィーは椅子から数センチ飛び上がってしまった。慌てて後ろを振り向く。

「め、メルメル！」

顔色を無くした相手の様子にも気付かず、メルメルは後ろからトンフィーの読んでいた本を覗いて呆れた顔をしている。

「トンフィーったら朝っぱらからまた勉強なの？」そう言いながらヒョイと本を手にする。

「あ！」

「命の石と死者の復活……」

トンフィーは背中に冷や汗をかいてメルメルを見つめた。

「――さてはトンフィー、ソフィー母さんを……」

「え！」トンフィーは目を見開いた。

「ソフィー母さんを――また喜ばせようと思ってるのね！　今度のテストで百点でも取って。朝からこ～んな難しそうな本を読んで勉強したりして～」

からかうようなメルメルの言い方に、トンフィーは内心で胸をなで下ろした。「ま、まぁね……ハハ」

頭をポリポリかいているトンフィーに、メルメルは本を差し出した。

「はい。……私だって今日は珍しく早めに来たのに、トンフィーったらもう教室にいないんだもの。ずいぶん探したのよ！」

トンフィーは首を傾げる。「何か用があったの？」

「……宿題を写させてもらいたくて。――ほら、昨日ドッジボールを遅くまでやっていて宿題やる暇がなかったから……」

もごもご言い訳するメルメルを、ニコニコとトンフィーは見つめた。

「そう言えば、ドッジボールどうだったの？」

「ま～たいつもと一緒で決着つかないまんま！　……トンフィーが来てくれたら勝てたかも知れないのに」
　拗ねたように横目で見られて、今度はトンフィーがもごもごした。
「で、でも僕がいっても何にも変わらないと思うよ？　……僕、運動からっきし駄目だし。いてもいなくても――」
「そんな事ないわよ！　トンフィーがいれば――トンフィーがいれば、ワタシがトンフィーを守らなきゃって思って、いつもよりいい動きが出来るもの！」
　メルメルはガッツポーズをしている。
「何だか嬉しいような、情けないような気持ちだよ……」
　トンフィーが眉をハの字にして肩を落としていると、メルメルはポンポンとトンフィーの肩を叩いた。
「いいのよ！　トンフィーはドッジボールが下手だって弱虫だって何だって……。そのまんまでとっても素敵なんだから。――だからたまには勉強ばかりじゃなくてドッジボールでもするといいのよ」
　何だか話が急に飛んだ気がして、トンフィーは首を傾げた。「へ？」
　メルはまたポンポンとトンフィーの肩を叩く。
「勉強ばっかりしてると、色々深く考え過ぎてもやもやしてしまったりするものよ。――って事で今日こそはトンフィーもドッジボールいこっ！」
「え？　あ、うん……」何だか訳が分からないうちに、勢いに押されてトンフィーは頷いていた。
「それと――ねぇトンフィー。困ったり、悩み事があったら何でもワタシに言ってね。ワタシはあんまりお利口じゃないけれど、話くらい聞けるのよ？」
「メルメル……」
　トンフィーは正直驚いた。基本的に脳天気であんまり物事を深く考えないメルメルだ。それでも、トンフィーの様子が少しおかしい事に気付いて、メルメルなりに気遣ってくれたのだ。

「……メルメル……僕――」
トンフィーは俯いて、手にした本「命の石と死者の復活」をじっと見つめた。
「……トンフィー？」メルメルはトンフィーの顔を覗きこむ。
「……その……実は……」
その時、ガラガラと勢いよく図書室のドアが開いた。
「メルメル、トンフィー！　こんな所にいたの！」
「チムシー！」
クラスメートのチムシーが息を切らして入ってきた。
「鐘が聞こえなかったの？　もうペッコリーナ先生来ちゃってるよ！」
どうやら話に夢中で、始業ベルにも気付かなかったらしい。二人は慌てて立ち上がってドアに向かった。
「ペッコリーナ先生怒ってた？」
メルメルが聞くとチムシーは片眉を上げてメルメルを見た。
「トンフィーはともかく、メルメルは、こないだのドミニクとの理科室取っ組み合い事件があったから、今度こそ居残りでトイレ掃除だって言ってたよ」
「うへぇ！」
メルメルががっくり肩を落としていると、隣にいたトンフィーが、
「あ！」と小さく叫び、慌ててきびすを返し図書室に戻った。
「どうしたのトンフィー！」
メルメルとチムシーが首を傾げて待っていると、
「ごめんごめん！　忘れ物しちゃって……お待たせ」
息を切らしたトンフィーの手には、しっかりと「命の石と死者の復活」の本が握られていた。

結局、ドッジボールは今日も決着がつかなかった。トンフィーも他の皆も倒され、メルメルはたった一人になっても諦めず、どんどん敵を倒していった。そしてついにドミニクと一対一となったところで、残念ながら時間切れ（前に夜遅くまで遊んで、今度夕方五時を過ぎたらドッジボール禁止令をペッコリーナ先生に出されているんだ）になってしまったのだ。

疲れきってとぼとぼと重い足を引きずるようにトンフィーは歩いていた。手にはやはり「命の石と死者の復活」が握られている。トンフィーは暗い気持ちで本を見つめた。

――メルメルと一緒にいる時はいい。心配事も薄れて楽しい気持ちでいられる。だが、一度そんな時間が終わってこうして一人家路につけば、その楽しかった反動でよりいっそう不安な気持ちでいっぱいになる。

「強い力……」

この本に書いてあった強い力の持ち主とはどんなものか？　能力に秀でたもの、強い力を持っている者、いずれにしても曖昧な表現だ。

「高い能力……」

――ソフィーはどうか？　果たして高い能力を持ち得ているのか……。

魔法に関しては、トンフィーの知る限りかなりの能力を持っていると言えた。トンフィーが園で新しい魔法を習ってくると、ソフィーはいつも実に上手にやり方を教えてくれるのだ。そして、ある時などは――、

「トンフィー、魔法に必要なのは基本的に集中力と、想像力だよ。集中力は言うまでもないが、想像力はね、要するにいかに頭の中に

その魔法をイメージ出来るかということなのさ」
　この頃まだ少し元気だったソフィーはリビングの椅子に腰掛け、魔法を習い始めたばかりのトンフィーにあれこれとアドバイスしていた。
「魔法をイメージ？」トンフィーは首を傾げる。
「例えばファイヤーボールの魔法なら、頭の中で火の玉を思い浮かべる訳だけど、その火の玉をいかにリアルに想像出来るかが重要になってくるのさ……。こんな風に――」
　ソフィーが目を瞑る。すると、パッとソフィーの目の前に火の玉が現れた。
「わ～……」
　トンフィーは目を丸くして火の玉を見つめる。すると、火の玉はどんどんどんどん大きくなってきて、すぐにトンフィーの背丈と変わらない大きさになってしまった。
「す、すごいや……！」
「あ、あちち！」
　ソフィーが叫び、パッと火の玉が消え失せた。小さく床から煙が上がっている。
「あらら～」絨毯に出来た焼け焦げを見て、ソフィーは頭を掻いた。「部屋の中でファイヤーボールはまずかったか……」
「で、でもとってもすごかったよ母さん！　それに――母さんは今、呪文も唱えずファイヤーボールを出したよね？　どうやったの？」
　ソフィーは得意げにニカッと笑った。
「本来――呪文とはイメージ力を高める為や気持ちを集中させる為に唱えるもので、言わば補助的な役割で使う物なんだ。だから、人によっては変わった呪文を唱える者もいるだろ？」
　トンフィーは目の玉を上にして考える。
（変わった呪文？　……そう言えば――）
「確かに……。ペッコリーナ先生もみんなとは違う呪文を唱えてたよ！」

興奮したように叫ぶトンフィーに、ソフィーは笑って頷いた。
「そうだろう？　その人が集中しやすい呪文ならなんだっていいのさ。中には指で印字を書く人なんかもいる……」
言いながらソフィーは両手の指を様々な形に組み替えて見せた。
「へ～……。でも、母さんはさっきまったく呪文を唱えなかったよね？」
トンフィーは首を傾げてソフィーを見上げる。
「えへん！　まぁ、要するに能力の高い者は、呪文を使って集中しなくとも魔法を使えるという事さ！」
人差し指を立てて、ちょっぴりえらそうにしている母親を、息子はキラキラとした目で見上げた。
「すごいな～母さん……」
すっかり感心してしまったトンフィーを見て、ソフィーは段々調子に乗ってきてしまったようだ。「よーし……。もっともっと凄いの見せちゃおっかな～」
「す、凄いの？」
ドキドキしながら見つめると、ソフィーはニッっと笑った。そして次の瞬間、
「――わ！」トンフィーは目を見開いた。「か、母さん……。ど、どこへ――」
突然、目の前にいたソフィーの姿が消えてしまったのだ。トンフィーが青くなってキョロキョロしていると、
「と、トンフィ～」
家の外から情けない声が聞こえてきた。トンフィーが慌てて外に飛び出すと、
「――あ、あれ？」
ソフィーの姿はない。トンフィーは首を捻る。
「ここだよトンフィ～」
「か、母さん！」
何と屋根の上にソフィーが座り込んでいるではないか！　トンフ

ィーは驚いて目を丸くした。

裏切り者　１０

「か、母さん、どうしてそんな所に……」
「お前にワープの魔法を見せて驚かせてやろうかと思ったんだけど、ちょっぴり失敗してこんな所に飛んじゃったんだよ～。どうしよ～トンフィ～」
眉尻を下げて情けない顔をしているソフィーを、トンフィーは呆れて見上げた。
「どうしようって――もう一度魔法で降りられないの？」
トンフィーが大声で問いかけると、ソフィーはいよいよ情けない顔になった。
「昔ならともかく、今じゃワープの魔法なんて何回も使えないよ～。助けておくれ～～～！」
結局、近所の人達に手伝ってもらって何とかソフィーを下ろしたトンフィーは、それまでの感心はすっかり吹き飛んでしまったのだった。
次の日、園でその事をメルメルに笑い話のようにしていると、横で何気なく二人の話を聞いていたペッコリーナ先生が急に怒り出した。
「何ですって！　ソフィーがワープの魔法を使ったですって～？」
そのままトンフィーの家まで飛んで行き、ベッドで寝ていたソフィーを怒鳴りつけたのだ。
「ソフィー！　ワープの魔法を使ったって言うのは本当なの！」
目を吊り上げたペッコリーナ先生を見て、ソフィーは布団を目の下まで引き上げて、弱々しい声で言い訳した。
「いや、あの……。ちょっと、可愛い息子に魔法の素晴らしさを教えてあげようかと……」
もごもご言っているソフィーを、ギラリとペッコリーナ先生はにらんだ。

「魔法はそもそも体に負担がかかるのに、ましてやワープの魔法を使うなんて何考えているの！　もしもがあったらどうするの！　ちゃんと自分の体の事を考えなさい！」

「は、は～い……」

ソフィーは情けない声で、結局布団の中にすっぽり隠れてしまった。ペッコリーナ先生はトンフィーに向かって言った。

「……ワープはとても高度な魔法なの。それだけに体への負担も大きいわ。――今度ソフィーが使おうとしたら絶対止めなくては駄目よ？」

トンフィーは驚いて、こっくりと頷いたのだった。

――あれから、二度とソフィーはワープの魔法を使ってはいない。しかしあの時は知らなかったが、後に調べたところによると、ペッコリーナ先生の言う通りワープの魔法とはかなりレベルの高いもので、一級以上の資格を持つ魔法使いでないと使えない物なのだ。つまり、

（母さんは一級の資格を持つ魔法使い並みの力の持ち主と言える……）

――それなら……あるいは……。

「こんにちは坊や」

トンフィーはハッとして立ち止まった。考え事をしてボーっと歩いているうちに、いつものあの「嫌な曲がり角」まで来ていたようだ。そして、その手前にはあの不気味な女が立っていた。

「いや、もうこんばんはに近いかねぇ……。今日はいつもと違って随分と遅かったねぇ？」

トンフィーはゴクリと唾を飲み込んだ。

（いつも……）

普段はもっと早く帰って来る事を何故知っているのか？　一瞬そう思ったが、特に口には出さなかった。黙って俯いていると、女はトンフィーの手にした本をすっと取り上げた。

「あ！」トンフィーは慌てて奪い返す。
女はそんなトンフィーを見て、ニヤ～っと笑った。「命の石と死者の復活ねぇ……」
「――あ、あなたも悪魔の兵隊なんですか？」
本を鞄にしまいながら女の方を見ないで問いかける。出来るだけさり気なく聞いたつもりだが、手の平にびっちょりと汗を掻いていた。
「そうさ……。悪魔の兵隊と言っても、まるで坊や達と変わりないだろう？」
トンフィーは上から下まで女をじっくりと見る。――確かに。まるで普通の人間の様に見える。
「大丈夫だよ……。坊やの母さんもこんな風に復活出来るから」
「ど、どうしてそんな事が言えるんです？　もしかしたら、ゾンビみたいになっちゃうかも知れないじゃないですか。――ほ、ほとんどの悪魔の兵隊がそうなんだから……。あなたみたいな悪魔の兵隊なんて、ま、まれなんだから」
つっかえ、つっかえトンフィーが言うと、女はまたニヤ～っと笑った。
「坊やは良く勉強しているねぇ……。それなら、どういう者が私みたいな悪魔の兵隊になれるかも知っているんだろう？」
トンフィーは上目遣いに女を見上げた。鞄越しに「命の石と死者の復活」の本に触れる。
「……強い力の持ち主？」
「クックックック……。本当に良く勉強しているねぇ。――そうさ。坊やの母さんは大丈夫。とても強い力の持ち主だからねぇ」
満足そうに満面の笑みを浮かべている女をトンフィーは眉根を寄せて見つめる。
「どうして――」
「どうしてそんな事を知っているかって？　……この町の事は色々調べたからねぇ。そんな事より、まだ覚悟は決まらないのかい？

早くしないと、あんたの母さん――」女はそこで一呼吸置いてトンフィーに顔を近づけ、目をぐりっと見開いた。「死んじまうよ？」

トンフィーは、またまたゴクリと唾を飲み込んだ。背中を、大量の汗が流れ落ちていくのを感じる。

「……あ、あと一か月しか保たないなんてあなたは言ったけど、そんなの嘘だ。昨日だって随分調子良くて――」

トンフィーが俯きながら言うと、女はつまらなさそうな顔をした。

「急がないと手遅れになっちまうかも知れないよ？　あんたが命の石を手に入れるには、ちぃと時間がかかるんだからねぇ……」

女の言葉にトンフィーは顔を上げた。「……どういう事ですか？」

女はフンッと鼻を鳴らした。

「貴重な石なんだよ、命の石は。そんな物をただであげるわけにはいかないじゃないか」

トンフィーはぐっと顎を引いた。――嫌な予感がする。

「お、お金ですか？」

「クックックッ……。お金なんて私にとっちゃあ何の価値もありゃあしないんだよ。――そうじゃなくて、坊やに私の大切な仕事を手伝って貰いたいんだよ」

女が気持ち悪い程の優しい声で言った。

「……仕事？」トンフィーは更に嫌な予感がした。

「実は、我が王に逆らって反乱を起こそうとする悪い連中がいてねぇ……。ちょっと困ってるんだよ」

「反乱？」トンフィーは首を傾げた。

「自分達の事をレジスタンスとかなんとか呼んでねぇ。国の各地に潜んで、何かと悪巧みをしているのさ」

裏切り者　11

トンフィーは眉根を寄せて考えた。

――悪魔の兵隊であるこの女が言うのだから、我が王とは暗黒王の事なのだろう。それに逆らう反乱者達……。果たしてそれは本当に悪巧みと言えるのか？

トンフィーの今まで得た知識によれば、暗黒王の人々に対する行いはあまり素晴らしいとは言い難い。逆らう者がいれば、街ごと滅ぼしてしまったりもするし、意味のない虐殺さえするという。そんな暗黒王に逆らう者達がいても、何ら不思議な事は無い気がする。そしてそんな者達は、

（この人の言うように悪い連中と言えるのかな……）

トンフィーの心の声が聞こえたかのように、女は目を細めて困ったように言った。

「何かと王の事を悪く伝えられているようだけれど、真実はねじ曲げて伝えられる事が多いからねぇ。反乱軍の連中がわざと嘘を広めているなんて話もあるしねぇ」

「……」

疑わしそうに顎を引くトンフィー。女は呆れたようにその顔を見た。

「大体、十一年前の戦争の事だって、坊やはその目で見たわけじゃないだろう？　暗黒王が悪くて女王が正義――まるでそんな風に伝えられているけど、事実は違う。とんでもない悪政を行っていたトキアの女王や、それを止めようともしない大臣連中。国が駄目になって行くのを見るに見かねて、暗黒王が正義のもとに立ち上がったのさ」

そんな話は聞いた事が無い。トンフィーは目を丸くした。

「そ、そうなんですか？　――でも、僕が見た本には――」

「言ったろう？　真実はねじ曲げて伝えられているんだ。自分で見

た事以外信じるんじゃないよ……」
女は、そのうちトンフィーの頭でも撫で出すんじゃないかと思うくらいの優しい声で言った。逆にそれが気持ち悪くてトンフィーは一歩下がってしまった。
「……そ、それで手伝いって？　――そのレジスタンスと関係ある事なんですか？」
女はニヤ～っと笑いながら頷いた。
「坊やはお利口だから助かるねぇ。――そうさ。そのレジスタンスのリーダーをあぶり出すのに坊やの力を貸して欲しいんだ」
「リーダーを、あぶり出す……？」
（あぶり出してどうしようって言うんだよ……）
自分にそんな事が出来る気はしないが、どちらにしてもあまり積極的に手伝いたいものではない。
「あ、勘違いするんじゃないよ。私らは決してあぶり出して殺そうとか、そんな事を考えている訳じゃないからねぇ。ただ、話し合いをしたいのさ」
「……話し合い？」トンフィーは、また疑わしそうな目を女に向ける。
「あの連中も暗黒王に対して誤解があるようだから、それを解いてやりたいのさ。だけどいくら言ってもこちらの呼びかけに応じようとしない。ちゃんと人の話しを聞くように園で習ってないのかねぇ？　――そう。坊やのように」
女は、自分では優しい微笑みのようだと思っているらしい薄気味悪い笑いを浮かべた。
「……それで、どうやってあぶり出すんですか？」
トンフィーは先を促した。いつの間にか日も沈んで辺りとっぷりと暗くなってしまった。これ以上この不気味な女と一緒にいたくはない。
「ちょいとずるい方法だけどねぇ……。向こうが悪いんだから仕方が無い」

「だから――どんな方法なんですか？」遠まわしな言い方に、トンフィーは少し苛立ってきた。
「この町にいる奴の味方に、呼び出しの手紙を書いてもらうのさ。ちょいとだけ騙してね」
――この町にも反乱軍が潜んでいるのか。女の言葉にトンフィーは少し驚いた。こんな田舎の、暗黒王の支配さえ届かないような町に……。いや――
（だからこそかな……）
トンフィーはそこまで考えてハッとした。「……え？　騙すって、どうやって？」
――まさか……僕が？
「そこで、坊やの力が必要になってくるのさ……」女はまたあの笑いを浮かべた。
（……やっぱり）
「もしかして、僕の知り合いにレジスタンスがいる、とか？」
「ヒーッヒッヒ！　坊やは本当に頭がいいねぇ！　その通りだよ！」
トンフィーは眉根を寄せた。やっと話が見えてきた。なんだか嫌な事に加担させられそうだ。トンフィーは溜め息を吐いた。
「それで……その知り合いって、誰なんですか？」
（隣の家のブラッドさん――お肉屋のラウルさん――リリアンのお父さんは自警団もやっているし、もしかすると……）
様々な知り合いの顔が思い浮かぶ。みんな正義感の強そうな屈強な男達だ。しかし、次に女が出した思いもよらない名前に、トンフィーはひどく驚いてしまった。
「坊やの友達にメルメルって子がいるだろう？」
「め、メルメル？　――どうして――メルメルがどうしたんですか？」
女の口からメルメルの名前が出るだけでも嫌悪感を抱くのに、しかも、この会話の流れで出てくるなんて。トンフィーは、とても鼓動が早くなっている自分を感じた。

「そのメルメルの爺さん――確かプラムとか言ったかしら？　あの爺さんもレジスタンスなんだよ」

トンフィーは目が飛び出て落ちるのじゃないかと思った。

頭にプラムじいさんの優しい笑顔が浮かぶ。とっても穏やかであったかいメルメルの大好きなおじいさん。トンフィーだって、優しいプラムじいさんの事は大好きだった。

「う、嘘だ、メルメルはそんな事、一言も――」

「あの子は知らないんだろうさ……。あんな幼い子に話したら町中に知れ渡っちまうだろう？」

確かに――。メルメルは隠し事が上手に出来るタイプじゃない。しかし、まさかプラムじいさんが反乱軍なんて……。トンフィーは頭を振った。

「まぁ、反乱軍なんて言っても、ろくすっぽ戦いを知らない様な連中がたくさんいるらしいからねぇ。見た目じゃピンとこない事もあるだろうさ。それでとにかく坊やは――」

「断ります！」

今までにない強い声に女は驚いた顔をした。トンフィーは睨むように女を上目使いに見た。

「……いいのかい？　命の石が欲しくないのかい？」

女は笑顔を引っ込め、目を細めてトンフィーを見つめた。

トンフィーは無言で女の脇をすり抜けた。

「大好きな母さんを助けたくないのかい？」

女の言葉が追ってくる。振り切るようにトンフィーは足を速める。

「お前――一人ぼっちになっちまうよ！」

女の言葉に、思わず立ち止まりそうになる自分を叱咤して、何とか振り返らずドアを開け家の中に体を滑り込ませた。

裏切り者　12

「……はぁ」

トンフィーは、ズルズルとドアを背にして座り込む。しばらく背中を丸めてじっとしている。そうしているうちに頭の中に女の言葉が蘇る。

――一人ぼっちになっちまうよ。

（母さん……）

トンフィーは顔を上げ、ゆっくり立ち上がった。

（ずいぶん静かだな）

ドアが開いた音に気付かなかったのかと、首を傾げながら家の奥に向かう。開け放されたドアからソフィーの寝ているベッドが見える。大分痩せてしまったせいで、布団はほとんど膨らんでいない。

「……母さん？」

トンフィーはドアの手前から小さく呼びかける。返事が無い。鼓動が早くなる。

「ね、母さ――！」

小さく膨らんだ布団の奥にソフィーの長く波打つ髪が見える。どうやらうつ伏せになっているらしく顔は見えない。そして――伏せている顔の辺りの白いシーツが真っ赤に染まっていた。

「母さん！」

トンフィーは駆け寄り、ソフィーの肩に手をかけた。するとその手が大きく上下に揺れて、激しいソフィーの息づかいを感じた。

「母さん――どうしたの母さん。大丈夫かい……」

半ば泣きそうになりながが呼びかけると、ソフィーがほんの少しだけこちらに顔を向けた。

「大丈夫だよ……トンフィー……」

消え入りそうな小さな声ではあったが、一応返事をした事にトンフィーはわずかにホッとした。顔を覗き込むと、ソフィーの口の周

りが赤く染まっているのが見えた。
「血を吐いてしまったの？　こんなに――」
実は前にも血を吐いた事があった。しかし、その時は手の平にほんの少しだけだったのだ。今回の量は尋常じゃないし、様子もかなりおかしい。トンフィーの鼓動が更に高鳴ってきた。
「母さん……。どうしよう……僕……僕、お医者様を呼んで来るよ」
トンフィーが熱に浮かされたように呟いて、身を翻したその時、細い指がその小さな手をとらえた。
「トンフィー……お医者様は……もう、いいよ……」
「で、でも――」
「上を……向かせて、おくれ」
もう自分の力では体を動かす事も出来ないのだと知り、トンフィーは驚愕して母親を見る。涙がこみ上げてくるのを、唇を強く噛んで耐えた。そうして、ゆっくりとその体を上向きに寝かせ直した。
「トンフィー……」「ちょっと待ってて――」
ソフィーが何か話し出そうとするのを制して、トンフィーは急いで部屋を出て行く。
ソフィーは目だけ動かしてトンフィーの消えたドアを見つめた。しかしその瞳には、もうぼんやりとしか周りの景色は映らなかった。先程覗き込んできた息子の顔も霞んで良くは見えなかった。ソフィーは瞼を閉じた。
――もう、間もなくだな。
とうの昔に自らの死を悟ってはいた。だが、ソフィーは一日でも長く生きたかった。それはひとえに、自分がいなくなれば一人残される事になってしまう息子の事を思ってだ。
――だが、もう限界だろう。
せめて、もう少し大人になるまでと思っていた。今の幼い心では伝えられない事がたくさんあった。
（――もう少し、そばにいてやりたかったのに）
そう考えて、ソフィーの頭の中に一人の女性の姿が思い浮かんだ。

――そうだ。そういえば……。

（昔は、こんな風に考える事は出来なかった）

トキアの赤軍で部隊長をしていたソフィーは、青暗戦争の最中に、自分と同じように兵士をしていた夫を失い、自らも大きな傷を受けてしまった。そうして戦火の中、一人息子を抱えて命からがらハルバルートの都を逃げ出したのだ。長い旅の果て、同じように逃げ延びた人々と共に、ようやく暗黒王の支配の及ばぬこの町に辿り着いた。

だが、やっと手に入れた母子二人の暮らしは、決して楽なものにはならなかった。

結局戦いで受けた傷は完全には癒えず、戦う事はおろか、ソフィーは歩く事さえままならない体になってしまったのだ。

青暗戦争で逃げ延びた人々は、密かに反乱軍となりレジスタンスと名乗って結束していた為、その者達がソフィーとトンフィーの事を気付かって交代に面倒を見てくれた。しかし生活の全てを補って貰える訳も無いし、いつまでも他人に甘えてはいられない。必然的に、家事のほとんどを幼いトンフィーがやらざるをえなくなってしまった。トンフィーは不満など全く言わなかったが、ソフィーはずっと苦しかった。幼い我が子の負担になっている自分が情けなく、死にたいとさえ思っていた。

そんな風に暗い気持ちで生きながら、トンフィーが五才になった頃、共に戦場を駆け抜けた親友がひょっこりソフィーの前に現れたのだ。久々に会えた彼女を前に、ソフィーはついつい今まで溜め込んでいた泣き言をいっぺんにぶちまけてしまった。

「私は、息子のお荷物なんだよ。死んだ方が良いのではないか……」

すると、彼女は昔と変わらぬ、澄んだ青い目でソフィーを見つめ、こう言ったのだ。

「お前のように、優しくて真っ直ぐな母親が産んで育てた息子なら、母親を負担に感じて死んで欲しいなどとは思わないだろう。もし、

そんな風に思うような息子なら、うんと長生きして逆に負担をかけて根性を鍛え直してやればいい。それでも、自らが惨めで――可哀想で死にたいと思いながら、今のように暗い顔で生きるくらいなら――死ね、ソフィー」

言葉は冷たいようだが、その表情は優しく、まるで母のようであった。

「お前が、生きているのが楽しいと思えば、トンフィーも同じように楽しいだろうし、暗い気持ちでいれば、トンフィーもそうなるだろう。思いとは伝染するものだからな」

ソフィーは俯いた。

――トンフィーにそんな暗い気持ちを移すくらいなら、死んでしまえと言うことか……。

確かに、ソフィーはトンフィーの事を思って死にたいなどと言いながら、決して彼の為にはならない事をしていたのかも知れない。恥じいって俯いているソフィーを見つめて、彼女はふと笑った。

「母親になった事もない私が、偉そうな事を言ったな」

「――そんな事ないよ」ソフィーは顔を上げ彼女の柔らかな瞳を見つめた。そしてようやくとニッコリ笑った。「おかげで目が覚めたよ！　……ありがとう」

心からソフィーはそう言えた。そんなソフィーを見て、彼女も珍しくニッコリ笑ったものだ。

（元気でいるかな）

目を瞑ると、鮮やかに甦る。彼女の――風に揺れる赤い髪。いかなる敵と出会おうとも、どんなに厳しい戦局に陥ろうとも、揺ぐことのない凛とした背中。ソフィーも周りの者もその背中に幾度となく励まされたものだ。

（結局、あの日も彼女は私を励ましに来たんだね……）

「母さん……」

愛する我が子の声に物思いから覚め、ソフィーはゆっくりと目を

開いた。

――相変わらず世界はぼやけていた。

しかし、ほんわりと温かな柔らかい布が口元に当たるのを感じて、トンフィーが、血のついてしまった自分の口の回りを拭ってくれているのだという事が分かった。水で濡らした布ではなく、わざわざ温かい湯に浸けてきてくれた息子の優しさに、ソフィーは思わず涙を流した。

裏切り者　13

「母さん……」トンフィーが心配そうに呟く。
「ごめんねぇ……トンフィー……」
布を裏返してソフィーの涙を拭いながら、トンフィーは必死で涙を堪えた。
「謝らないで。謝らないでよ、母さん……」
ソフィーは霞む目をトンフィーに向けた。瞳には映らなくても、息子の姿はしっかりと目の前に浮かび上がっていた。
「トンフィー、よく聞くんだよ」
手を伸ばし、ソフィーは息子の袖の辺りをしっかり掴んだ。その、思いの外強い力にトンフィーは驚いた。
「後の事は――ペッコリーナ先生に頼んであるから……」
「後の事って……」
ソフィーの言葉に、トンフィーは再び胸が高鳴って来るのを感じた。
「大丈夫。ペッコリーナ先生は三人も子供を育てた大ベテランだ。ドラッグノーグ先生のお喋りにはうんざりするかも知れないけれど――一緒に暮らしているうちに慣れるだろうし、賑やかな方が明るくていいじゃ――」
「ちょっと待ってよ母さん！」トンフィーは大声で叫び、ソフィーの話しを遮った。
ドク、ドク、ドク、ドク、と激しい心臓の音が耳元で聞こえている。
「何の話？　一緒に暮らすって、一体――」
トンフィーは先を知りたくなくて思わず逃げ出したいような気持ちになったが、ソフィーの手にしっかりと掴まれていて、それも出来そうにないのだ。
「遂に、お迎えが来たようなんだ」

まるで「おかえり」と言う時と変わらないような口調だった。だからトンフィーは、直ぐにはその意味がピンとこなかった。

「……え？」

「お父さんの所に行って来るよ。これからは、そこからお前を見つめているから寂しがらないでおくれ。――大丈夫さ、お前には、素敵な友達がいるし、ブラッドや、プラムじいさんや、ペッコリーナ先生や、他にもたくさんの人がお前を愛して、助けてくれるから。……泣かないでおくれ、トンフィー……」

ついにトンフィーは泣き出してしまった。母親の胸に顔をうずめる。

「ダメだよ。――大丈夫……。母さんは、まだ、大丈夫だよ……」

トンフィーは肩を震わせ、ソフィーのかけている布団を千切れんばかりに握り締めた。

「いいんだよトンフィー……。私は、お前に十分喜びや幸せを貰ったから。人より少し短めの人生だったかも知れないけれど、お前のおかげで人よりずっと充実した素晴らしい日々だったのだから」

ソフィーは、トンフィーの頭を優しく何度も撫でた。しかし、その手の感触さえ失われつつあった。

「嫌だ……嫌だよ……うぅ」

「トンフィー……。私はこの世から消えてしまうけれど、愛は――愛は残るんだよ……。私のお前に対する愛……父さんのお前に対する愛……。愛は、消え去る事はないんだ……」

気を抜くと手放してしまいそうになる意識と必死で戦いながら、何とか息子に語りかける。

「愛しているよトンフィー……。負けないでおくれ……」

「――僕が……母さんを、救うよ」

先程まで肩を震わせむせび泣いていたトンフィーが、突然、顔を上げた。

その目は虚ろで焦点が定まっていない。

ソフィーの霞んだ目ではその姿を捉えられないが、声の調子から

息子の様子がおかしい事にはすぐに気付いた。
「トンフィー？」
「僕が救うよ。大丈夫――母さんは死なない」
ソフィーは切ない気持ちになった。
――まだ、こんなにも息子は幼いのだ。母親の死を受け入れる事さえ出来ずにいる。
「トンフィー……。いいんだよ、もう……。私は――」
「大丈夫！　いい……良い方法が、あるんだ。僕が、僕が必ず――助けるよ」
フラリ、とトンフィーは立ち上がった。
「トンフィー」ソフィーはトンフィーの袖を掴む手に力を入れた。
「待ってて！　母さん……必ず、僕が助けるから！」
トンフィーはソフィーの手を振りほどき、背を向けて走り出した。
「トンフィー！」ソフィーは振りほどかれた手をそのまま空中に留めて、必死で息子を呼んだ。

「トンフィー！　トンフィーーーー！」

トンフィーは勢い良くドアを開け、外に飛び出した。あまりに勢いが良すぎて転びそうになり、思わずたたらを踏んでしまう。後ろから母親が呼んでいる声がする。それを振り切るように慌てて走り出した。
「……出て来い」暗闇に向かって声を絞り出す。「いないのか。――出て来い！」
肩で息をしながらトンフィーは叫んだ。いつもの「あの曲がり角」に差しかかる。走る勢いを落とさずに角を曲がろうとして、足がもつれてしまった。
ズザザザザーと頭からスライディングしたような形で、トンフィーは転んでしまった。
そうして、そのまましばらく動かずにいる。

手の平や膝がジンジンとしたが、そんな事はどうでも良くなっていた。体の痛みなど心の痛みに比べればどうという事ないように思えたからだ。

――母さん……。

地面に顔をつけたまま、両手で土をぎゅっと掴んだ。大声で泣き出したくなるのをそうして耐える。

「――坊や」耳の奥で凍りつくような、そんな冷たい声が頭の上から降ってきた。

「どうしたんだい、坊や……」

――僕が助けてあげる。

トンフィーは顔を上げて目の前に立つ人物を見上げた。

「おや……。ずいぶん悲しそうな顔だねぇ」女はいつものようにニヤ～と笑った。

「母さんを……救ってよ」不幸な事は全てこの女の責任だと言うように女を睨み付ける。

「お安いご用さ」

女は再び、満足そうに――笑った。

裏切り者　１４

翌日、トンフィーはいつものように園へ行った。
夕べは結局寝ずに過ごした。ソフィーは生きてはいるものの、ずっと眠っていて目を覚まさなかった。今日はずっと傍にいて手を握っていたかったが、園を休む訳にはいかない事情があった。
「トンフィー！　今日もドッジボール行くでしょ？」
放課後、ニコニコとメルメルに聞かれて、トンフィーは困ったように頭を掻いた。
「今日は――ごめんね。母さんと、隣街の病院に行かなくちゃいけないから……」
トンフィーは声が上ずらないか心配だったが、意外にも普段と変わらぬ普通の声が出せた。
「ソフィー母さん、具合悪いの？」
メルメルは心配そうにトンフィーを見た。トンフィーは慌てて手を振る。
「そうじゃないよ。ほら、定期的にいつも行ってるでしょ？　薬を貰いに行くついでに、少し様子を見てもらうだけさ。母さんはいつもの通り元気さ」
「そっか。それじゃあ今日はワタシ、トンフィーの分もモリモリがんばるわ！」
メルメルは何も気付かずに、トンフィーに向かってガッツポーズをした。
「……うん。――頑張って」トンフィーはメルメルの笑顔を眩しそうに見つめた。
「じゃあねトンフィー！　また明日ね！」
メルメルはウサギのアップリケのついた鞄を肩にかけて、勢いよく教室を駆け出して行った。トンフィーはしばらくその場に立ち尽くして動けずにいた。

「ニャ〜ン」チリチリ音をさせてアケが足元にすり寄ってきた。そちらに目を落とすと、上目づかいで甘えるように見上げてくる。トンフィーはそんなアケを抱き抱えて、ゆっくりと歩き出した。

ミミとシバは、いつものようにプラムじいさんお手製のササミとレバーのクタクタ煮を食べて、食後の毛繕いをしていた。シバはお腹が一杯になってほんわりと眠くなってきている。ミミの方は窓から差し込む午後の日差しに、どうも散歩日和だと感じて立ち上がった。シバは、ミミがドアに向かって歩き出したのに気付いて、メルメルが最近用意してくれた二匹のお昼寝用ふかふかクッションを名残惜しそうに見ながら、ミミの後を追い駆けた。

「おや、お散歩かの？」二匹のお皿を片しながらプラムじいさんがニコニコ問いかける。

「ニャ〜」ミミは一声鳴いて小さなドアをくぐり抜けた。

シバがミミの後を追って外に出ると、爽やかな風がフワ〜ンと吹いて、お昼寝の事などすっかり忘れてしまった。シバはスキップするように走りだす。ところが、プラムじいさんの家の垣根を超えた所で突然ミミが立ち止まったから、シバはミミのお尻に鼻を、「ニャフン！」とぶつけてしまった。

ミミは尻尾を一振りして警戒するように通りの向こうを見ている。シバも同じようにしてそちらを見ると、小さな影がこちらに向かって来るのが見えた。チリチリと小さく鈴の音が聞こえて、ミミは先の方が白っぽい自らの耳をピクピクさせた。

「――ミミ、シバ……」

ミミとシバは、少年の呟いた声にようやく見た顔だと気付いた。メルメルがいつも連れてくる少年だ。

ミミは見慣れた顔を不思議そうに見上げた。いつもと雰囲気が違う。普段はメルメルと一緒でやたらと彼のまわりはキラキラと輝いているのに、今日はやけに暗くもやがかかっているようだ。

「おいで、ミミ、シバ」

しゃがみこんで手を伸ばしてきたが、ミミはふと体を捻りってその手を避けた。

「ミミ……」少年はなんだか傷ついたような顔をしている。

「ニャニャ～」シバは何にも気にせず少年の足にすり寄っている。それを見て、ミミも仕方なく体をすり寄らせた。

「久し振りだね、ミミにシバ。――おじいさんはいるかな？」

別に返事を期待する訳でもなく、少年はプラムじいさんの家のドアを見つめた。その瞳は何かを迷うように揺れている。

「ニャンニャン！」

「――あ！」

チリチリと首輪についた鈴を鳴らして、小さな三毛猫が少年の手から飛び出してきた。いつも少年はこの三毛猫を連れてくるので、ミミもシバも特に警戒はしなかった。

「――こら、アケ！」

少年は三毛猫を捕まえようとしたが、三毛猫は、「ニャンニャ～ン！」とピョンピョン跳ね回って捕まりそうにない。ミミはそんな三毛猫の様子をちらりと見て、くるりと向きを変えた。そうして、プラムじいさんの家の方へと戻って、大きなドアの中にある小さなドアをくぐり抜け、家の中へ入ってしまった。跳ね回る三毛猫に気を取られていたシバは、パタンという音を聞いて慌ててミミの後を追いかけた。すると、

「ニャン！」三毛猫もシバの後を追って走り出した。

「あ……アケ！」

パタン、と短い尻尾が小さなドアの向こうに消えて、少年は後戻り出来ない自分に気付いた。

「おや……？　どうしたんじゃミミ？」

プラムじいさんが、小さな物音に気付いてリビングに出て来た。

「おやおや、シバまで戻ってきて。雨でも降ってきたかの？　――ありゃ？　お前さんアケじゃないか……」

プラムじいさんは、シバの後ろから入ってきたアケを見て目を丸くしている。その時、

トン……トン……。

何となく、遠慮がちに小さくドアをノックする音が聞こえた。

「ほいよ！」

おそらくメルメルがトンフィーを連れて帰って来たのだと思いながら、プラムじいさんはドアを開けた。ドアの向こうには想像通り小さな少年が立っていた。

「こ、こんにちはおじいさん……」トンフィーはぺこりと頭を下げる。

「こんにちはトンピー君！」ニッコニコとプラムじいさんはトンフィーに笑いかけた。「随分と久し振りじゃが、元気にしておったかのう？　……おや？」

トンフィーの後ろにメルメルの姿が見えないので不思議そうに首を傾げる。しかし急にハッとした顔になってニヤリとした。「さては――」プラムじいさんは手を前に出し、腰を少し落として身構えた。

「今日は騙されんぞ～！」プラムじいさんはトンフィーにウィンクした。

――実は、以前同じようにトンフィーだけがドアの前に立っていた事があって、不思議に思ったプラムじいさんがキョロキョロと外に出た瞬間――ドアの横に隠れていたメルメルに「メルメルアタック」を食らった事があるのだ。

「出てくるんじゃ～、メルメル！」

「あ、あの！　今日は、僕、一人なんです。――あの、メルメルはまだ、ドッジボールをしてて――」

「――そうなのかい？」プラムじいさんは首を傾げながら、ゆっくり手を戻した。「……ふむ。まぁ、話は後にして、とりあえず中に入ってお座り。暑かったじゃろう。すごい汗じゃ。冷たい麦茶を出してやろうな」

トンフィーは慌ててハンカチを取り出す。プラムじいさんは麦茶を出しにとっとととキッチンに行ってしまった。

外は別に暑いという程ではなかった。逆に、涼しげな風が程よく吹いているくらいだった。トンフィーは額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながら、リビングの椅子に腰掛けた。家の中は何だかほんわりと、甘い匂いに包まれていた。

「ほい、どうぞ」

プラムじいさんが、オレンジジュースの入ったコップをトンフィーの前に置いた。そして、

「どっこいしょ」と言いながら椅子に腰掛け、自分用に持ってきた麦茶をゴクリと飲んだ。

「ありがとう……。頂きます」トンフィーはチビチビとオレンジジュースに口をつけながら頭の中で用意してきた言葉をはんすうした。

「あの、僕今日はおじいさんに勉強を教えてもらいたくて来たんだ」

「勉強？　……そりゃ困ったのう。わしが園に通ってたのなんてかれこれ五十――いや、サバよんじゃいかんな――六十年くらい前じゃからのう。トンピー君に教えてあげられるほど覚えているかどうか」

プラムじいさんは足元でじゃれている三匹の猫を眺めながら言った。アケは二匹と比べてかなり小ぶりで、仕草も幼く子猫のように見えるが、トンフィーが連れてくるようになって二、三年経つからこれでも大人なのだろう。

「いや、あの、勉強と言っても字の書き方を教えてもらいたくて」

「字？」

裏切り者　15

プラムじいさんは首を傾げている。トンフィーはガサゴソと鞄をあさりだした。

「おじいさんは字がとっても上手だから、僕も、上手になりたくて」

「うほほ。嬉しい事を言ってくれるのう」

プラムじいさんはいよいよニッコニコしている。トンフィーは鞄から一冊の本と、紙を数枚取り出した。

「この本の中から、今度国語のテストで文章を書く事になってるんだ。……ほら、このページだよ」

トンフィーの開いたページを、プラムじいさんはふむふむと見ている。トンフィーはそこに、紙を一枚差し出した。

「僕の汚い字で申し訳ないんだけれど、お手本を書いて来たんだ。この本だと難しい漢字がたくさんあるから、先生がひらがなに直すようにと言っていて……。このお手本通りにおじいさんに書いてもらって、今度は、僕がおじいさんの書いた字をお手本に――」

「お手本の、お手本の、お手本かの？」プラムじいさんはニッコニコと、トンフィーを見て首を傾げる。

「あ、あの――少し、ややこしいんだけども」

「お安いご用じゃよ」トンフィーの手からお手本の紙を受け取り、何も書いていない紙を引き寄せた。「これに書けばいいんじゃな？」

「うん……。お願いします」

プラムじいさんはペンを手にし、手本を真似ながら、真剣な顔付きで文章を書き始めた。トンフィーはホッとしたような、逆に胸がざわつくような複雑な気持ちでその様子を見守った。

――お安いご用だ。

プラムじいさんが先ほど口にした言葉に、夕べのあの女の声が蘇った。同じようなセリフなのに、プラムじいさんが口にすると全く違うものに聞こえる。あの女の冷たい声に対して、プラムじいさん

の方は暖かく、人を安心させるような響きを持っていた。
「お！　こりゃあ意外に簡単な字に見えるが、案外バランスをとるのが難しいんじゃよ」
　プラムじいさんは真剣な顔で「い」という字を書いてふ～っと額の汗を拭うと、再びニッコニコと続きを書き始めた。トンフィーはその書き上げられて行く文章をぼんやり眺めていた。
（本当に、綺麗な字だ）
　今度は目線を顔の方へと向けると、いつもと同じようにニッコニコとしていて、遂には鼻歌まで歌い始めた。
「ググッとモーニング♪　えいっ――と、ちと曲がったか……？――いや、大丈夫大丈夫。ググッとモーニングお兄さん♪　……ふむふむ。よっしゃ～！　後一行じゃな。気を抜かずにやらねばな……。何と言っても文章はバランスが大切じゃから――よっ、はっ、ん～……出来たぞよ！　……およ？」
　仕上がった文章から目を離し、笑顔でトンフィーの顔を見たプラムじいさんは、思わず目を丸くしてしまった。なぜなら、
「どうしたんじゃ？」
　――トンフィーが、泣いていたからだ。
　唇を噛み締めて両目を瞑り、そこから涙を溢れ出させている。
「おーおー。よしよし……」
　プラムじいさんはトンフィーの頭を優しく撫でた。その手は意外に大きく、そしてとても暖かかった。
「うんうん。それじゃ、ぽかぽかココアでも持ってきてやろうかの。ちょっと待っておれ」
　プラムじいさんはキッチンに立って、カチャカチャとココアを入れ始めた。トンフィーは待っている間、涙に濡れる瞳で、出来上がったプラムじいさんの文章をぼんやりと眺めていた。
「ほれ。これでも飲んで落ち着いて。それと――これじゃ」
　湯気の上がる暖かそうなココアの入った大きなマグカップ差し出された。そしてそれと――もう一つ。お皿の上に美味しそうなタル

トが乗っていた。
「昨日メルメルがサツマイモを持って帰って来ての。トンピー君と二人で掘り出したと、顔を土で真っ黒にして喜んでおったよ。そのサツマイモでタルトを作ったんじゃ。明日トンピー君にあげるようにと言って、メルメルに持たせようと思っておったが――丁度良かった。試食じゃ試食」
ニッコニコと差し出されたホークを受け取り、トンフィーはゆっくりとタルトをホークで半分にカットした。サクッと小気味よい音がする。大きめの一切れを一気に頬張ると、程良い甘さが口の中に広がった。
「どうじゃな？」
心配そうに覗きこんでくる優しい顔を見て、トンフィーは再び涙が出て来た。
「ありゃりゃ……。まずかったかのう？」
頭を掻くプラムじいさんに、トンフィーは慌てて首をブンブンと横に振った。
「――ほんなころない。へかいいひ、美味ひいよ！」
「うほほ！　世界一は誉めすぎじゃぞい」嬉しそうにプラムじいさんは笑った。
トンフィーが残りを一気に平らげると、プラムじいさんは茶色の紙袋を差し出した。
「これは家に帰ってお母さんとお食べ」
トンフィーはハッとして紙袋を見つめた。
「どうしたんじゃ？　もしかしてお母さんはサツマイモが嫌いかの？　それなら、何か別の物を――」
「大好きなんだ」トンフィーは袋をゆっくり受け取った。両手でしっかりと持つ。「ありがとう……」
「なんのなんの。どう致しましてじゃよ」
メルメルが帰って来るとまずいので、トンフィーは早々においと

まする事にした。結局、プラムじいさんはトンフィーが泣いた理由を聞かなかった。

「それじゃ……お邪魔しました」

トンフィーはぺこりと頭を下げた。チリチリと腕の中でアケの鈴がなる。

「またおいで」

プラムじいさんはドアの前でニッコニコと手を振った。足元にはちゃっかり二匹の茶トラの猫が座っている。

「あの――くれぐれも――」「メルメルには内緒じゃな？」

唇に人差し指を当てながら、いたずらっぽくプラムじいさんがウィンクした。トンフィーこっくりと頷く。勉強ばかりしていると思われると恥ずかしいから、メルメルには今日来たことを秘密にしておいてくれと頼んだのだ。

「じゃあ……ごちそうさまでした、おじいさん。本当に、どうもありがとう……」

「うん、うん。またいつでもおいで」

トンフィーはおじいさんの姿が見えなくなるまで、何度も何度も振り返って、大きく手を振ったのだった。

裏切り者　16

しとしとと雨は降り続いていた。空を見上げれば、真っ黒な雲が凄い速さで流れている事に気付くだろうし、遠くの方では青空が広がっているから、恐らく雨は一時的なものだという事が分かるだろう。だが、誰一人空を見上げる余裕のある者はおらず、人も猫も黙ってビショ濡れになっていた。

ト　ンフィーの長い話が終わると、雨の音の他には、時々ズズーッとペッコリーナ先生が鼻をすする音しか聞こえなくなってしまった。トンフィーは話の途中で、一度だけチラリとメルメルの顔を覗き見たが、呆けたように遠くをみていて何を考えているのか読み取れなかった。一番信頼していた親友に裏切られた事によって湧き上がってくる感情は、怒りか――悲しみか。いずれにしても、トンフィーはもうメルメルの顔を見る勇気が持てなかった。

「それで、その……。――結局どうなったんだ？」

静寂を打ち破り、おずおずとでも初めに口を開いたのは、グッターハイムだった。彼も騙されて呼び出された被害者という事になる訳だが、その瞳にトンフィーを非難するような色は浮かんでいなかった。声には同情するような響きさえある。

「どうっ、て……」トンフィーは俯いたまま、上目使いにグッターハイムを見た。

「だから、いや。――ほら、結局、あれだ。――その後」

「ソフィーは命の石を使ったの？　……ズズーッ！」

煮え切らないグッターハイムにしびれを切らして、ペッコリーナ先生が後の言葉を引き取った。トンフィーは黙って俯いている。

「そ、それは、今はいいじゃないですか！」

萎れたトンフィーの様子が不憫で、庇うようにニレが言った。ペッコリーナ先生とグッターハイムは思わず顔を見合わせる。

「た、確かに。まぁ、事情は分かったしな」

「そ、そうね……。話はこれくらいにして、雨も強くなってきたし――」

「そうはいかない」

凛とした声に、思わず全員がそちらを見た。相変わらずの無表情で、ラインはトンフィーを見つめている。

「ちゃんと続きを聞こうじゃないか。さぁ、話すんだトンフィー」

「ら、ライン。今は――今はまだいいじゃない」冷たい声に、ペッコリーナ先生は困った顔になる。

「良くはない。曖昧にしておいて良い事ではない。――話すんだトンフィー」

「まぁまぁライン。トンフィーにとっても辛い事情があったんだから……。ここまで聞けば十分さ。続きはまたいずれ聞けば良いさ」

グッターハイムはトンフィーの横に立って、その背中を優しく叩いた。トンフィーは深く下を向いている。大人達からはその表情が見えない。

「私は親友の末路が知りたい」

トンフィーはパッと顔を上げてラインを見た。――涙はまったく流れていない。色の薄い茶色の瞳で、睨むように相手を見ている。ラインはそんなトンフィーの目を真っ直ぐに見つめ返した。

先に目を逸らしたのはトンフィーだった。

ペッコリーナ先生はラインに歩み寄った。「ライン……。気持ちは分かるけれど今は――」

「話すよ」

トンフィーが呟き、今度は全員そちらに目を移した。

「どうせここまで話したんだから一緒さ……。みんなが気になって仕方ない部分を話すよ」

半笑いで、まるでヤケになったようなトンフィーの様子に、ペッコリーナ先生は眉根を寄せた。

「そうだな。全て包み隠さず話して貰おう。それから――不思議な事がまだある」

「不思議な事？」ペッコリーナ先生が首を傾げてラインを見る。
「グッターハイム宛ての手紙を、どうやって本人に届けさせたのかという事さ」
ラインの言葉に、グッターハイムが大きく頷いた。
「言われてみれば確かにそうだな。一体どうやって――」
「裏切り者がいたんだ」
再び皆がトンフィーを見た。その目は少し虚ろだ。
「僕だけじゃなくてね。他にも裏切り者がいたんだ」

「裏切り者……」

ハッとして、全員その声の主を見た。ずっと黙ったままだったメルメルが、初めて口を開いたのだ。トンフィーは慌てて下を向いてしまった。
「裏切り者、か。――なるほどな。では、先を聞こうか」
ラインに促され、トンフィーはゆっくりと顔を上げた。メルメルは澄んだ瞳で真っ直ぐにトンフィーの事を見つめていた。

メルメルの家からトンフィーの家は歩いて二十分くらいの場所にある。それを軽やかな足取りで十五分くらいに縮めて歩きながら、トンフィーは最近になく穏やかな気持ちになっていた。アケを抱く手と反対の手に持っている紙袋から、ほんわりと暖かさが伝わってくる。
（母さん喜ぶかな……）
ソフィーは夕べから意識がなかったが、何となく目を覚ましそうな気がしていた。プラムじいさんの優しい暖かさに触れて、トンフィーはここの所の苦しみからわずかに解放され、気持ちも前向きになっていた。ふと鞄の中に入っている手紙の事を思い出す。
（……）
帰り道、何度となく破ってしまおうかと思いながらも、結局踏み

切れずにいた。
（……家に帰ったら捨ててしまおう）
トンフィーが強く決意して誰にともなく一人頷いた時、丁度あの曲がり角にさしかかった。しかし、いつものように悲しい気持ちはそれほど湧き出てこない。穏やかな心のままのんびりと角を曲がる。ところが曲がった次の瞬間――思わず息を飲んで立ち止まってしまった。トンフィーの家の前に何者かが立っていたのだ。
「……おお！　お帰りトンフィー！」
相手は気付いて、声を掛けながら走り寄って来た。一瞬あの女と間違えたが、そうではなかった。
それは隣に住むブラッドだった。人の良い笑顔を浮かべながらトンフィーの目の前までやって来る。
「今帰りか？　遅かったな」
「園に残って少し勉強していたんだ。――何か用？」
いつも、トンフィー達親子を心配して、用事がなくとも様子を見に来てくれたりするのだ。恐らく今日もそんなところだろうと思いながら、トンフィーは笑顔でブラッドを見上げた。
「うん……。今日はお前に用事があってな。ちょっといいか？」ニコニコと問いかけてくる。
「うん。――何？」
トンフィーが頷くと、ブラッドは背を向けて自分の家の方に向かってしまった。
わざわざ家の中で話すのだろうかと考え、トンフィーは首を傾げながら後を追う。一瞬、紙袋に目をやり、出来れば早く帰りたいのにな――と考える。一体何の用事かと少し不満に思いながら、ブラッドの後ろ姿に視線を移してふとある事に気付いた。
（珍しいな……）
普段ブラッドは、ジーンズのズボンに、白や水色などの明るい色のポロシャツから鍛冶仕事で鍛えられた腕をむき出しにしている――といったスタイルがほとんどなのだが、何故か今日は上から下ま

で真っ黒の服を着ていた。さっき一瞬トンフィーがあの女と間違えたのもそのせいだったのだ。あの女も、上から下まで黒ずくめの服をいつも着ている。

の見慣れない服を着たブラッドが、自らの家のドアを開けてにこやかにトンフィーを待ち構えている。

「……お邪魔します」

一瞬躊躇したが、トンフィーはブラッドの前を通り抜け、家の中へと足を踏み入れた。

「どうぞ――」

前を通る瞬間ブラッドがそう言った時、何だか、魚か何かが腐ったような匂いがした気がして、トンフィーは思わず顔をしかめた。ブラッドはドアを閉めて部屋の中央にあるテーブルの前の椅子に腰掛けた。

「座ってくれ」

言われて、仕方なくトンフィーも椅子に座る。

「何か飲み物でも出そうか？」

立ち上がりかけるブラッドをトンフィーは手で制した。「いや、大丈夫。それより用事って何？」

トンフィーは早く家に帰りたかった。プラムじいさんから貰ったサツマイモのタルトを持って、早くソフィーのところに行きたかった。

「ふむ……。お前――例の物は持って帰ってきたか？」

「例の物？」

トンフィーは、突然何の事かと首を傾げる。

「例の――手紙だよ」

裏切り者　17

ドキンと、トンフィーの心臓が大きく跳ね上がる。「――て、がみ？」鞄を持つ手に力を込める。

「プラムじいさんに書かせた手紙だよ……。持って帰って来たんだろ？」

トンフィーは目を見開いてブラッドを凝視する。

――見慣れたいつもの顔だ。ただ、その顔からはもう、笑顔は引っ込んでいた。

「な、何故……」

やはり飲み物をもらうべきだったかも知れない。喉がカラカラに乾いて上手く言葉が出ない。

「何故って、……ああ。何故オレが手紙の事を知っているのかって？　――ベラメーチェ様に聞いたからさ」

「ベラメーチェ……様？」

「お前はベラメーチェ様と約束したんだろ？　レジスタンスのリーダー宛てに書かれた手紙と、命の石を交換すると」

トンフィーは声も出せずにブラッドの顔を見つめた。そして、何だか鈍くなって今一上手く働かない頭の片隅で、（あの女はベラメーチェと言うのか……。何だかどこかで聞いた事があるような名前だ）などと考えていた。

「……トンフィー、早く手紙を出せ」

黙り込んでいる相手にしびれを切らしたのか、低い声でブラッドが言った。

「あ、あの、ブラッドさんはあの人――ベラメーチェ様に使えているの？」

トンフィーは再び心が揺れ始めていたが、先ほどまでは家に帰ったら破ってしまおうと考えていた手紙だ。渡す事に抵抗を感じて誤魔化すように早口で喋った。

「そうだ。オレはベラメーチェ様の配下だ。つまり暗黒王にお仕えしているということだ。お前が今日の帰りにプラムじいさんの所に行ったのは知っているんだ。――手紙を書かせたんだろう？　さあ、出せ」

「あ、暗黒王に使えてるなんて、ぼ、僕知らなかったな……。母さんや近所の人は知ってたのかな？」

トンフィーは、何だかいつもよりずっと感じの悪いブラッドに恐怖を感じ始めていた。

「この町の連中は誰も知らないさ。隠していたからな」

「どうして隠していたの？」トンフィーは首を傾げた。

物心ついた時からブラッドは隣に住んでいたし、その頃からずっとあれやこれや世話を焼いてもらっていた。ソフィーとも随分昔からの知り合いのように親しくしているが、トンフィーはブラッドの口から暗黒王の話など聞いた事が一度も無かった。やはり暗黒王に使えているというのは、心証が良くないのだろうか。

「オレはレジスタンスの一員でもあるからな……。暗黒王の配下だなんてバレたら大事だ」

ブラッドは軽い口調で言った。

「そ、それって――」

「分かるだろう？　……スパイさ」

ブラッドはそう言って笑った。しかしその笑いはいつものように爽やかなものではなく、とても同じ人物とは思えないような嫌らしい笑い方だった。

「スパイ……」

トンフィーはドアにチラリと視線をやった。いよいよ手紙を渡したくなくなっていた。

「レジスタンスの連中は誰一人としてオレをスパイだと疑ってはいない。――まったく、間抜けな連中さ。だからトンフィー、早く例の手紙をだせ。オレなら連中のリーダーに上手く届くように出来る」

「……」トンフィーは無言でテーブルの一点を見つめていた。

――この人達に、手紙を渡して本当にいいんだろうか？　右手で抱えた紙袋を持つ手に、力が入る。

「おい！！　――貴様、何を考えている？　早く手紙を出せ！」

厳めしい顔。ドスの利いた声。乱暴な言葉使い。普段が優し過ぎるくらいだから、よけいに恐ろしい。トンフィーは足元から震えが立ちのぼって来るのを感じた。

「で、でも、まだ、このままじゃ、だ、駄目だから、い、いったん家に帰って――」

トンフィーがしどろもどろに言って、何とか震える足で立ち上がった瞬間、

「――座れ！！」

地を震わすような、低い大きな声で怒鳴られて、トンフィーはへなへなと再び椅子に座った。余りの恐ろしさに体中が震え、カチカチと奥歯を鳴らした。

「手紙を出せ」

トンフィーは慌てて鞄をあさる。意気地は、もう完全に折れてしまっていた。こんなに怖い思いをしたのは初めての事だった。あの女が現れた時も、これほどの恐怖ではなかった。

震えて上手くいう事をきかない手で、何とか手紙を取り出した。

「よしよし……。これがそうか。良くやったな」

今更のようにブラッドは優しい声を出した。しかし、トンフィーの震えは止まらない。

「……？　何だこれは。これのどこがレジスタンスのリーダーに宛てた手紙なんだ？」

ギロリと睨まれて、トンフィーは冷や汗を掻いた。

「あ、あああの、そ、そそのままじゃだ、ダメなんだ。か、カッ

ターか、な、何かを、く、くくれれば――」
「カッター？　……待っていろ」
「あ、あと――」
立ち上がったブラッドに、慌ててトンフィーが言う。
「何だ？」
ギロリとブラッドに見下ろされ、トンフィーは縮み上がった。「じょ、定規も……」
「……わかった。たくっ――一体何故定規なんて――ブツブツ……」
不満げな声を出しながらブラッドは奥の部屋へと消えて行った。
待っている間、トンフィーは入り口のドアを見つめ一瞬逃げ出してしまおうかと思ったが、もしも捕まってしまったら殺されてしまうのじゃないかと考えて、、全く動けずにいた。
（あれは……本当にブラッドさんなのかな）
どう考えても同じ人物には思えない。
――トンフィー、母さんは大丈夫か？　困った事があったらすぐ呼ぶんだぞ。何の為のお隣さんだ、遠慮するなよ！
（……）
トンフィーがしょんぼりと俯いていると、奥からブラッドがナイフと定規を持って出てきた。
「カッターなんぞ無いから、これで我慢しろ」
定規と、刃が剥き出しのナイフをテーブルに投げ出されて、トンフィーの肩が一瞬ビクンと跳ねた。
「で？　それをどうしようってんだ？」
促され、トンフィーは震える手でナイフを握り、プラムじいさんに書いてもらったお手本の紙に定規をあてがった。
「何だ？　切るのか？」ブラッドは不思議そうにトンフィーの手元を覗き込んでいる。
トンフィーは震える手でゆっくりと紙を切った。横にしたり縦にしたりして「いらない部分」を全て切り取ると、トンフィーは残された紙を手にして文章を確認した。するとブラッドが横からバッと

紙を取り上げた。
「見せてみろ――」奪い取った紙を上から下へと目玉を動かして読んでいる。
トンフィーは俯いて、何とはなしにテーブルの上のナイフを見つめていた。
「それで俺を殺すか？」
ハッとしてトンフィーは青白い顔を上げた。ブラッドはニヤリと笑った。
「――フッフッフ。成る程、良く出来ている。……小賢しい程にな」
満足そうな顔をして、紙を人差し指で弾いた。
再び俯くと、ナイフが視界に入ってきて、トンフィーは目のやり場に困ってしまい、膝の上のアケに視線を移した。
（……そんな顔しないでよ）
見上げてくるアケの目が、まるで自分を責めているように感じて思わず目を逸らしてしまう。
「あの……僕、もう帰ってもいいかな？」
トンフィーは、のろのろと切り取った紙を本の間に挟み込んで、それを鞄の中に入れた。
「ん？　――ああ。構わんぞ。俺はさっそくこれをレジスタンスに持って行こう」
ブラッドが大切そうに手紙を懐に入れるのを横目でチラリと見て、トンフィーは立ち上がった。急ぎ足で出口へと向かう。
「おい！」
突然呼び止められて、トンフィーはビクリとして立ち止まった。
「な、なに？」
まだ何か恐ろしい事を言いつけられはしないかと、ビクビクしながら顔だけを僅かに後ろに向ける。
「俺が裏切り者だと誰にも言うなよ。絶対にな」

低く唸るように言われて、トンフィーは何度も頷いた。
「わ、わかったよ……。絶対に言わないよ」
「もしも言ったら――」
ブラッドが一旦言葉を切って黙り込んでしまったから、トンフィーは恐る恐る後ろを振り返った。そして、血走った恐ろしい目を見てギクリとする。

「お前もソフィーもバラバラに切り刻んでやる！　命の石を使っても復活出来ない程に、バラバラにな！　――さあ、行け！！」

トンフィーは転がり出るように外に飛び出し、一度も振り返らずに自らの家の中へと飛び込んだ。

裏切り者　18

家の中は静まり返っていた。ソフィーの声は聞こえて来ない。トンフィーが帰って来たことに気付いていないのか。それともいまだに意識が戻っていないのか。

出来ればトンフィーは、いつものようにソフィーに「おかえり」と言って貰いたかった。そうすればこの恐ろしさと悲しみでカチカチに凍ってしまった心が、少しは溶けるかも知れない。

「ニャ～ン」

トンフィーの腕を飛び出して、チリチリと鈴を鳴らしながらアケがソフィーの部屋へと入って行った。そのちょこちょこ走る可愛い後ろ姿を目で追いながら、トンフィーはドアを背にして茫然としていた。余りに立て続けに色々な事が起こりすぎた。頭の中はぐちゃぐちゃで、だけれどもぐったりと疲れて、整理する気も起きないのだ。

「ニャ～ン！　ニャ～ン！　ニャ～ン！」

アケが激しく鳴いている。トンフィーはハッとしてドアにもたれていた体を起こした。

「ニャ～ン！　ニャ～ン！」

心臓が激しく高鳴り始める。ただならぬアケの鳴き方。ソフィーは夕べから意識がない。トンフィーが帰って来た事にも気が付かない。

――お迎えが来たみたいなんだ……。

ドク、ドク、ドク、ドク。

トンフィーは自分の心臓の音に息苦しくなりながら、フラフラとソフィーの部屋へと向かった。

「ニャ～ン……ニャ～ン……」

ベッドの枕元にアケがいる。ソフィーの顔を覗き込むようにして、悲しい声で鳴いている。トンフィーは、ソフィーの顔が見える一歩

手前で立ち止まった。
そして、ゆっくりと首を伸ばすようにして枕元を覗き込む。
眠るように安らかな顔で瞳を閉じた、愛する母親の顔がそこにあった。
十二年間、欠かすことなく毎日見続けた顔だ。怒ると、時にはその目が般若のように吊り上がる事もあったが、トンフィーは暖かくて優しい自分と同じ色をした薄茶色の瞳が大好きだったのだ。
その瞳は、残念ながら今は瞼が固く閉じられていて見えない。
「かあ……さん？」
小さな声で呼びかけて見た。――全く反応は無い。
胸に、どっと後悔の波が押し寄せてきた。やはり傍を離れるべきじゃなかった。一日手を繋いであげていれば良かった。
（こんな薄暗い部屋で――一人で――たった一人きりで）
「母さん……」
再び呼びかけ、涙に濡れる目を向けたその時、ピクリとソフィーの瞼が動いた。トンフィーは目を見開く。
「か、母さん！」
ソフィーはとてもゆっくりと瞳を開いた。トンフィーは喜びで涙が溢れ出し、止まらなくなった。
「……た……」
小さな、小さな声でソフィーが何か呟いた。
「えっ？　何母さん」トンフィーは慌ててソフィーの口に耳を寄せた。
「良かった……」
「な、何が？　何が良かったの母さん？」
一生懸命呼びかけないと母親が再び目を閉じてしまうのではないかと思って、トンフィーは声を思い切り張り上げた。
「頑張って……良かった。お前に……最後に、会えた。ちゃあんと、神様って、いるんだね」
――最後。

ソフィーの言葉に、トンフィーは唇を噛んだ。
――泣いている場合じゃない。一言も聞き逃しちゃいけない。
「トンフィー……。負けないでおくれ」
「……」
「愛する私の子、負けないで……」
ソフィーはそう言って、ゆっくり瞳を閉じてしまった。安らかな顔だ。薄っすらと微笑んでいるようにさえ見える。
「……母さん？」
トンフィーはまなじりが裂けそうな程目を見開いた。
「母さん、母さん、母さん！」
母親の肩を何度も揺する。
トンフィーは、本当はもう分かっていたのだ。もう、二度とソフィーが目を開く事はないと――。
その魂は、手の届かない遠い場所に行ってしまったのだと。しかし、トンフィーは呼びかけずにはいられなかった。すぐには受け入れる事が出来なかった。
「母さん！　母さん！　母さん……。かぁ、さん……。うぅ――あぁぁ」
母親の亡骸にすがりついて泣きじゃくるトンフィーの頭に、アケは何度も体をすり寄らせていた。
チリチリリ、チリチリリン……。
何時間そうしていたのか。時間の感覚も無くなって、流しても流しても枯れない涙で、ソフィーにかけられている布団をグッショリと濡らしながら、トンフィーはソフィーの最後の言葉を思い出していた。

――負けないで。
（何に……）
生きる事にだろうか？　これから一人きりになってしまうから、負けずに頑張れという事か。
――ちゃあんと、神様っているんだね。
（神様なんて――）
ぎゅっと拳を握る。
（この世から、僕から母さんを奪っていって――）
トンフィーはガバッと起き上がった。

「神様なんかいないじゃないか！」

バーン！

突然、物凄い勢いで入り口のドアが開いた。いつもなら飛び上がるところだが、今のトンフィーは、心も体も反応が鈍くなってしまっている。
ゆっくり首を巡らせ、入り口に立っている人物に目を向けた。
上から下まで漆黒の衣装に身を包み、肩にイタチのような見慣れない生き物を載せた「あの女」が立っていた。
（そういや、ベラメーチェというんだっけ……）
ぼんやりした頭でトンフィーは考えていた。ベラメーチェは音も無く傍まで近づいてきて、真横に来た所で立ち止まった。
「遂に死んじまったのかい？」
片眉を上げて、少しおどけたような顔でソフィーを見つめている。
トンフィーはそんなベラメーチェを無表情で見上げた。
「さて。――どうする坊や？」
ベラメーチェは視線をトンフィーに移し、その右手の拳を差し出しニヤ～っと笑う。ゆっくりと、拳を開いた。
「……」

そこから出てきたのは、トンフィーの握り拳くらいありそうな程に大きな、青い色の石だった。トンフィーの瞳はそれに釘付けになった。

「フッフッフ……。勿論使うだろう？」

トンフィーはゴクリと唾を飲み込んだ。

――トンフィー、負けないでおくれ……。

「大丈夫さ。今までと全く変わらず母さんと楽しく暮らせるよ。坊やの母さんだってそれを望んでいるだろうしねぇ」

トンフィーは母親の顔を見つめた。頬や瞼に赤みがさし、まるでまだ生きているかのようだ。先程と同じように目を開き、再びこちらに語りかけてきそうなくらいだ。

――負けないで。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。すぐに済むからねぇ。――さぁ、おどき」

ベラメーチェは、ソフィーの前に立っているトンフィーを手で追い払おうとした。

「……駄目だ」トンフィーは、逆にその手を振り払う。キッと顔を上げてベラメーチェを睨み付けた。

「なんだい。――どういう事だい？」

「やっぱり止めた。命の石は使わない！　母さんはそんな事望んでない！」

このセリフに、ベラメーチェは一瞬鼻白んだ顔になった。目を細め、トンフィーを見下ろす。

「今更なんだい。いいからおどき！」

「もういいんだ！　命の石なんていらないから、あの手紙を返してよ！」

ベラメーチェの顔が恐ろしく歪み、ダーンと物凄い力でトンフィーの肩を掴んで跳ね飛ばした。

「……うぅ」壁に叩きつけられて、トンフィーは痛みに顔を歪める。

「――ふんっ。そこで大人しく見ているがいい。……マクロトラナ

リデ、ペカレスケラーデ」ベラメーチェはブツブツと呪いの様なものを唱えながら、手の平に載せた命の石を高く掲げた。「タスマルバコダ！　フレキラバコダ！」

命の石がぼおっと光りを放ち始める。

「や、やめろ……」

呟いたトンフィーをベラメーチェはチラリと横目で見て、ニヤ～っと笑った。

「ロリノロリノロリノロリノロリノ――」

ソフィーの胸に、青白く光る命の石を押し付ける。

「やめろーーーーー！」

「ブラキオベラメーチェ！」

一瞬、目を背けたくなる程の眩い光を放ち、ズブリ、とソフィーの胸に命の石が沈み込んだ。

「……」

そして訪れた静寂。ソフィーはピクリともしない。

（もしかしたら、失敗した……とか？）

トンフィーはホッとしたようなガッカリしたような、複雑な気持ちでソフィーを見つめていた。

「……？」

――気のせいだろうか？　ソフィーの顔の表面が何だか動いたような気がして、トンフィーは身を乗り出した。

……ボコ……ボコ……。

「――！」

今度は完全に気のせいではなかった。ソフィーの頬や額の肉が盛り上がったり引っ込んだりしている。

ボコッ……ボコボコッ……ボコボコボコ……ボコボコボコボコボコ！

「――わ、わあぁ！」

裏切り者　19

ソフィーの顔や、布団からでた腕や肩――いや、蒲団の上からでも分かる。体中、まるでお湯が沸騰した時のようにボコボコと膨らんでいるのだ。

「あ……あぁ……」

トンフィーは恐ろしさの余り、言葉にならない様な声を漏らした。

「フッフッフ……。さぁ――感動の再会だよ」

ベラメーチェの言葉に応えるように、急にソフィーの体の異変が止まった。そして、

「――か、母さん……！」

くわっと、ソフィーが目を見開いた。そのまましばらく、天井を見つめて動かない。

トンフィーは喜んで抱き付くなどという気にはなれなかった。不安と期待に胸を高鳴らせ、様子を見守る事しか出来ない。

「さぁ……。起き上がるがいいソフィー」

ベラメーチェに言われて、ソフィーはむくりと体を起こした。ベッドから足を下ろして立ち上がると、トンフィーには目もくれずにベラメーチェに向き直る。

トンフィーは、一度は死んでしまったはずの母親の顔をじっと見つめた。死ぬ前と何ら変わったところは無い様に見える。やはり、ソフィーは普通の悪魔の兵隊としてではなく、特別な状態で復活したのだろうか？　――いや、まだ分からない。まだソフィーは口を開いてはいないのだ。まともに喋っているのを聞くまでは安心出来ないと思った。

「気分はどうだいソフィー？」

ベラメーチェが優しい声音で話し掛けると、ソフィーは軽く頷いた。

「とてもいいです」

「フッフッフ……。どうやら復活の儀式は完全に成功だったようだねぇ。――ソフィー、あんたを復活させたのはこの私――ベラメーチェだからねぇ。忘れるんじゃないよ……」
「はい……。勿論、分かっております」
ベラメーチェが満足そうに頷く。トンフィーは二人のやり取りを複雑な様子で聞きながらも、心の中では、段々不安よりも喜びの感情の方が強くなり始めていた。
（本当に……生き返ったんだ。母さん……）
じわり、と涙が出てくる。
「それじゃ、あとは親子水入らずでおやりよ。邪魔者は消えるからねぇ」
ベラメーチェはいつものようにニヤ～っと笑い、クルリと踵を返した。
「あ、あの、ベラメーチェ様！」
ソフィーが慌てた声を出して、ベラメーチェの足が止まった。
「……なんだいソフィー？」
「私は、一体これからどうすればよろしいのですか？」
ソフィーが如何にも不安そうに訪ねると、ベラメーチェはチラリとトンフィーに視線を寄こした。
「……ここで、坊やと今まで通り暮らしておやりよ」
ベラメーチェに言われて、ソフィーはトンフィーへとようやく顔を向けた。その瞳を見て、トンフィーは背筋がゾクリとしてしまった。
「今まで通り……ですか？　――ベラメーチェ様と一緒に行ってはいけないのですか？」
ソフィーの目は、まだトンフィーの顔を捉え続けている。どちらかというと睨み付けているというのに近い。しかもその瞳には嫌悪感が浮かんでいる様に思える。トンフィーは「命の石と死者の復活」の本の中に、生き返った息子がどことなく素っ気なく冷たいという話が載っていたのを思い出した。

「駄目だよソフィー。あんたはここで息子と暮らすんだ……。わがまま言うんじゃないよ」
「し、しかし――」
まるで子供にでも言い聞かせるようにベラメーチェが言って、ソフィーはいやいやをする様に首を振った。トンフィーは眉をひそめてそんな母親の様子を見ていた。
「ソフィー……これは命令だよ」ベラメーチェが急に冷たい声を出した。
「……分かりました」
ソフィーはがっくりと肩を落とし、俯いた。トンフィーはソフィーの余りな落ち込みように、とても惨めな気持ちになった。
（どうして――そんなに僕と暮らすのが嫌なのかな……）
「それじゃあ私は行くよ……。坊や、またね」
ベラメーチェは、意味深な笑いをトンフィーに残して去って行った。そして――、
残されたのは、ほんの一時間前までは互いに自分の事以上に相手の身を案じるほど愛し合っていた、母と子。だが、その母は今まで向けた事の無い目で息子を見つめ、深い溜め息を吐いた。
「……お前がベラメーチェ様に頼んだの？　一緒に暮らすように、って」
冷たい、感情の無いような声に、トンフィーは思わず首をすくめた。
「べ、別に僕は何も――」
「……ふん」
ソフィーは不機嫌そうにトンフィーから視線を外し、どっかりとベッドに腰を下ろした。むっつりと押し黙ってしまったソフィーの様子を、トンフィーはドギマギしながら見ていた。
「か、母さん、具合はいいの？　ど、どっか痛い所とか――」
「うるさいな……。別に無いよ」
「そ、それってもしかして命の石のおかげかな？　びょ、病気も治

ったのかな？　――どう？　母さん、自分では何か体調の変化とか感じたり――」

「うるさい！」

大声で怒鳴りつけられて、トンフィーはビックリしてソフィーの顔を見た。口を歪め、目を吊り上げて、不愉快そうにこちらを睨み付けている。

「少し黙っていろ……。うるさいガキだ――あっちへ行け！」

トンフィーは目を見開いた。

――この人は本当に母さんなのか？

ソフィーは腕を組んで不機嫌そうな顔のまま目を瞑ってしまった。あっちへ行けと言われたので、トンフィーは仕方なしに立ち上がった。肩を落とし俯きながらトボトボとドアに向かって歩き出す。すると、下に落ちていた「何か」を軽く蹴っ飛ばしてしまって、そちらに視線を向けた。

それは茶色の紙袋だった。

紙袋を拾い上げ、瞑想するように目を瞑ったままのソフィーの前まで行った。

「母さん」

呼びかけられて、ソフィーはゆっくりと目を開いた。トンフィーは手にした紙袋を差し出す。

「これ、メルメルのおじいさんに貰ったんだ。サツマイモのタルト。――母さん、サツマイモ好きでしょう？」

パーン、とソフィーは差し出された紙袋を思い切り払い飛ばした。

「そんな物いらないよ。あっちへ行けと言っただろう？　母親の言う事が聞けないのかい？」

ソフィーは背筋の凍るような目で息子を見上げた。

「……分かったよ」

トンフィーはクルリと後ろを向いて大股で部屋を出て行った。

「ニャ～ン……」

自分の部屋へ入ると、いつの間にかアケがベッドにちょこんと座っていて、こちらを見上げ悲しそうに鳴いた。トンフィーはアケを抱えてベッドに倒れ込んだ。

――あれは母さんじゃない。

「ニャ～……」

――もう母さんは、この世からいなくなってしまったんだ……。

裏切り者　20

雨は相変わらず降り止まずに、逆に勢いを増してきてしまった様だ。しかしトンフィーは、そのおかげで少し助かったと思っていた。この激しい雨なら、自分がどんな顔をしているのか、皆に良く見えないからだ。

「……うっ……うっうっ……」

トンフィーは、雨に濡れてぺったりと顔に張り付いている前髪の隙間から、呻き声の主の方を見た。ペッコリーナ先生が肩を震わし、両手で顔を覆っていた。

「うっうっ……ソフィー。あぁ……何てこと……ううっ」恐らく泣いているのだろう。

（そうだよね……。ペッコリーナ先生は、母さんととても仲が良かった）

最後まで相談もしなかったことを申し訳なく思って、トンフィーは俯いた。

「ソフィーは、悪魔の兵隊になっちまったのか……」

グッターハイムが呟き、トンフィーは顔を上げてそちらを見た。

「それで……お前は……トンフィー。ずっとそれから、悪魔の兵隊になっちまった母親と暮らして来たのか？」

ペッコリーナ先生もハッとした様に顔を上げ、トンフィーを見た。

「……そうさ。二日前家を出るときも、母さんは何時もと変わらずリビングの椅子に座っていた。僕が出かけて来ると言っても、どこに行って来るのかも聞かなかった。――あっそう。そう一言、言っただけ。夜中に子供が出かけて行くのに……。あっそうって、たった一言……」

「トンフィー……ぐすっ」

ペッコリーナ先生は、可哀想な教え子を抱きしめようと、顔をくしゃくしゃにしたトンフィーの方へと両手を広げ歩み寄った。

「お前の望んだ通り、母親はちゃんと生き返った訳だな――悪魔の兵隊として」

相変わらず感情の無い様なラインの声音に、トンフィーは唇を噛んでそちらを見た。

「ぼ、僕は、悪魔の兵隊として母さんが生き返る事を望んでなんかいなかった」

悔しそうな顔で言うと、ペッコリーナ先生も、そんなトンフィーを援護するかのようにラインの方を見た。

「そうよライン……。以前と変わらぬソフィーならともかく――悪魔の兵隊としてなんか――誰が生き返ってほしいものですか」

「だが、悪魔の兵隊としてしか復活しない事は分かっていた事だろう？」

冷たい声にトンフィーは頬をひきつらせた。他の大人達は――ペッコリーナ先生は勿論、トンフィーの事が可哀想で堪らないといった様子だし、口出しせずにはいるがニレもそれと同じような顔をしている。グッターハイムですら憐れむ様な目をしているのだ。しかし――ラインだけは全くそういった様子は無く、同情どころか責める様な目をしている。

「ライン……。トンフィーだって辛かったのよ。大好きなお母さんが死んでしまったのよ？」

ペッコリーナ先生が庇うように言っても、ラインは全く心を動かされた様子がない。

「大好きなお母さんを失わない為に、大切な友人の祖父を騙したのか。――危害が及ばないとも限らないのに」

この言葉に、トンフィーは深く俯いた。メルメルが、自分の事を怒りに満ちた目で見ているんじゃないかと思って、強く握り締めた拳にも、雨でびしょ濡れの背中にも、どっと汗が浮かんできた。

「まさかプラムがさらわれるなんて考えもしなかったんだろうさ。確かにあの手紙にゃあ驚いたが……。必死で考えたんだろう。母親を助ける為に」

「――助ける？」ギロリ、とラインはグッターハイムを睨み付けた。
「助ける……か。それでは聞くぞトンフィー。お前は、ソフィーが悪魔の兵隊として新たに命を得た事を、喜んだと思うか？」
トンフィーは青白い顔で、ラインから遠ざかる様に一歩下がった。
「だからライン……。トンフィーは悪魔の兵隊がどんな存在だか良く分かっていなかったんだよ」
グッターハイムの言葉を後押しするように、ペッコリーナ先生が大きく頷いた。
「そうよ。それに、トンフィーは土壇場で止めようと思ったって言ってたじゃない。無理やり手紙を奪われて――そりゃあ驚いたでしょうね。まさかブラッドが……」
ペッコリーナ先生は顎に指を当てて首を横に振った。
「確かにすっかり騙されたもんだ。まさか奴が裏切り者だとはな……。ブラッドの事は何とかしないとな」
グッターハイムがニレに意味ありげな視線を投げると、ニレはその意思を汲み取って頷いた。
「直ぐに隠れ家に使いを出しておきます」
ニレは馬の方に走って行った。トンフィーはぼんやりとその様子を目で追った。恐らく、手紙か何かをウォッチに持たせるのだろう。
「だから、ねぇライン。そんなに責めないであげて。最後はいけない事だと気付いて止めようとしたのに、あの女性――ベラメーチェだったかしら？　彼女が無理やり命の石を使ったんだもの。トンフィーは止めてくれって言ったのに……。――ね？　トンフィー」
ペッコリーナ先生は首を傾けて、優しい顔でトンフィーに問いかける。トンフィーは無言で更に深く俯いた。
「――そうか。では、メルメルにそう言って謝ったらどうだ？」
「……」
ラインに言われて、トンフィーはギュっと目を瞑った。――顔を上げる事が出来ない。
「メルメルだって分かってあげられるわよね？　トンフィーに悪気

はなかったのよ……」
「そうさ。プラムの事は不幸だったが、トンフィーを責めても仕方無いだろ」
ペッコリーナ先生とグッターハイムに揃って見つめられ、メルメルは困った様な顔になった。
「ワタシは――」
メルメルはトンフィーの方を見た。トンフィーは――メルメルに背を向け俯いたままだ。
「たとえ悪気がなかったにしても、結果としてメルメルに迷惑をかけたんだ。――一言謝った方がいいのじゃないか？」
ラインは、がっくりと肩を落とし俯いた少年を見下ろした。しばらくの沈黙の後、消え入りそうな小さな声が聞こえてきた。
「メルメル……ごめんね。……僕……僕……」
雨が大分小降りになってきていた為に、その小さな声も全員の耳にちゃんと届いた。ペッコリーナ先生とグッターハイムは顔を見合わせ、ホッとしたような顔で、うんうんと頷き合っている。
「トンフィー」
冷たい声が頭の上から振ってきて、トンフィーの心の中に、ソフィーの最後の言葉が蘇った。
――負けないでおくれ、トンフィー。
トンフィーは顔を上げて、ラインの顔を見つめた。
「トンフィー。メルメルの方を向いて、メルメルの目を見て謝るんだ」
全てを見透かす様な青い瞳に見つめられて、トンフィーは唇を震わせ、ゆっくりと後ろを振り返った。
「……トンフィー」
全く曇りない二つの目が、真っ直ぐにトンフィーを見返してきた。そこに非難の色は浮かんでいなかった。
「メルメル――僕は……」
次の瞬間、トンフィーはその瞳から大粒の涙を溢れ出させた。

「トンフィー……」
メルメルは驚いて目を見開いた。トンフィーは弱虫で、ちょっとした事にすぐ泣きそうになるが、実際には一度もメルメルの前で涙を流した事は無かったからだ。
「メルメル……。本当は、僕は――分かっていたんだ……」
トンフィーの言葉を聞いて、ラインはゆっくり瞳を閉じ、まるでひどく安堵したかのように深く息を吐いた。
「本当は……あいつらがレジスタンスのリーダーを、話し合いの為に誘き出すつもりじゃ無い事も……。命の石を使ったって――そんな物使ったって――母さんが元通りに生き返らない事も。そして――」
メルメルは驚いたような顔で、じっとトンフィーを見つめていた。ペッコリーナ先生とグッターハイムも、口出しを出来ずに二人の様子を見守っている。
「うぅ……。そして……おじいさんに……ひっく。もしかしたら、メルメルのおじいさんに、危害が及ぶかもしれない事も……うっうっ……そ、それでも、それでも僕は――」
涙で顔をぐちゃぐちゃにするトンフィー。ペッコリーナ先生が同じように涙で顔をぐちゃぐちゃにして、そちらに歩み寄ろうとした。しかし、ラインが無言でその手を引いた。
「うっく……。母さんを、甦らせたかった……一人になりたくなかった。だ、だから――」
ペッコリーナ先生は眉根を寄せてラインを振り返った。ラインは、黙って首を横に振った。
「だから……。うっうっ……頼んだんだ、あの女に……。ひっく……僕が――」
グッターハイムが顔をしかめる。「……頼んだ？」
トンフィーはメルメルから視線を外さずに、こくりと頷いた。
「……僕が……ひっく。頼んだんだ……。――命の石を使って、母さんを――」トンフィーはギュッと瞳を閉じて、大声で叫んだ。「

復活させてくれって！」

突然、ずっと真っ黒な雲に隠れていた太陽が顔を出して、そのあまりの眩しさに、メルメルは強く瞳を閉じた。

裏切り者　21

「さて。――どうする坊や？」
ベラメーチェは視線をトンフィーに移し、その右手の拳を差し出しニヤ～っと笑う。ゆっくりと、拳を開いた。
「……」
そこから出てきたのは、トンフィーの握り拳くらいありそうな程に大きな、青い色の石だった。トンフィーの瞳はそれに釘付けになった。
「ど、どうするって……」
「使うも使わないも坊やの自由って事さ」
ベラメーチェの言葉に、トンフィーはゴクリと喉を鳴らした。
「クックック……。貴重な石だからねぇ。何も、無理に使う必要はないんだよ？」
トンフィーは相変わらず、ベラメーチェの手の平に載せられた青い石を凝視している。それこそ、石のように固まって動かない相手を見て、ベラメーチェはフンッと鼻をならした。
「どうやら怖じ気づいちまったみたいだねぇ……。それならそれでいい。ちゃんと母親の葬式でもしておやりよ」
そう言ってさっさとドアに向かうベラメーチェを、トンフィーは慌てて呼び止めた。
「待ってよ！」
足を止め、不愉快そうにベラメーチェは振り返る。
「や、約束でしょう？　母さんを生き返らせてくれるって……」
ベラメーチェは目を細め、意地の悪い顔でトンフィーを見下ろした。
「生意気な言い方だねぇ……。やっぱりやめようかねぇ」
「そ、そんなのずるいじゃないか！　僕は約束を守ったのに――」
「お前の手紙が使い物になるかどうかはまだ分からないんだ。本来

ならそれを確かめて初めて契約成立なのさ。――それを待っている間に、あんたの大切な母さんはどんどん腐っちまうだろうけどねぇ？」

トンフィーは、悔しさに唇を噛んでベラメーチェを睨み付けた。

「クックック……。どうする坊や？　――どうかお願いします。お母さんを生き返らせて下さい――そう言うなら、願いを叶えてあげないでもないけどねぇ？　せっかくお友達のおじいさんを騙してまで生き返らせたかった母さんの為だ。――出来るだろう？」

怒りに顔を赤らめる少年を、ベラメーチェは愉快そうに見つめた。トンフィーはゆっくりとソフィーの顔に視線を送った。涙で、その顔が霞んだ。

「……お願いします」

「何だい？　……聞こえないねぇ」

「――お願いします！　どうか母さんを生き返らせて下さい！」

ベラメーチェは満足そうにニヤ～と口の両端を上げた。

「いいだろう――。お前の望みを叶えてやろう！　……マクロトラナリデ、ペカレスケラーデ――」

メルメルは、今にも崩れてしまいそうなトンフィーを見つめていた。メルメルだけでなく、他の者も、掛ける言葉さえ失って立ち尽くしていた。

「リーダー！　ウォッチを隠れ家に使いに出しました！　半日もからず届くと思います、よ……」

駆け戻って来たニレが、皆のただならぬ様子に思わず立ち止まった。キョロキョロと周りを見渡す。

ぐったりとうなだれ、涙で顔をぐちゃぐちゃにしたトンフィー。更に顔をぐちゃぐちゃにしてトンフィーを見つめているペッコリーナ先生。なんだか困ったような顔のグッターハイム。何か考え事をしているかのようにぼんやりとしたメルメル。そして、

「……ら、ラインさん？」

恐ろしい顔で、ザッザと土を踏み鳴らしトンフィーに歩み寄るライン。その顔付きを見て、ペッコリーナ先生が顔をしかめる。

「――ライン？」

ラインは右手を大きく振り上げた。ペッコリーナ先生が慌てて走り寄る。だが時既に遅し。ラインの手の平が、トンフィーの頬目掛けて、勢いよく振り下ろされた。

「――ら、ライン！」

バチーン、と盛大に小気味良いほどの音がして、メルメルは目を丸くした。倒れ込んだトンフィーにペッコリーナ先生が走り寄る。

「トンフィー！　あぁ――ライン、なんて事を……」

頬を真っ赤に染めたトンフィーが、怯えたようにラインを見上げている。気遣わしげな表情を浮かべて、トンフィーを引き起こそうとするペッコリーナ先生。それを押し退けて、ラインは二打目を喰らわせる為に、無言で右手を振り上げた。

「だ、駄目よ――ライン！」

「お、おいライン！　待て――」

バチーン、とラインは周りの制止も聞かず、またしても思い切り良くトンフィーを張り飛ばした。それどころかまだ叩き足りないのか、トンフィーに向かって更に一歩踏み出した。慌ててその体にペッコリーナ先生がしがみ付く。

「ライン！　止めて頂戴！　いくら何でもやりすぎよ！」

「その通りだ！　何も殴らなくても――」

グッターハイムも、ラインの腕を押さえようと掴みかかった。ペッコリーナ先生だけならともかく、グッターハイムにまで押さえ込まれては、さすがのラインも身動きが取れない。

「……お前は、自分のした事が分かっているのか？」

ラインに怒りに燃える瞳を向けられて、トンフィーは思わず縮み上がった。

「お前のせいでプラムはさらわれたんだ」

今にも二人の拘束を振り解いて暴れ出しそうなライン。それを必

死で抑えながら、ペッコリーナ先生はトンフィーを不憫に思って涙を流した。

「ライン……。わざわざそんな事を言わなくても――」

「いいやペッコリーナ。私はわざわざ言わしてもらう。――そしてトンフィー……。お前は、悪魔の兵隊などにしてしまう事によって、母を汚したのだ。誇り高く美しかった母の――ソフィーの魂を、汚したのだ」

ラインの言葉にトンフィーの顔が歪んだ。頭を抱え込み、肩を震わせる。

「ライン……。もう、そのくらいで……」

グッターハイムはトンフィーを憐れむ様に見た。ただでさえ小さな体が、すっかり打ちひしがれてしまって余計に小さく見える。ところがラインは、追い込みをかけるように言葉を続けた。

「――しかもお前は、嘘をついて自らの罪を隠そうとした。私は――それが一番許せない」

遂にトンフィーは、嗚咽を漏らし始めた。「うっうっ……。あぁ……。ご、ごめん、なさい……うぅ」

頭を抱え、うずくまるように泣いているトンフィーを見て、ラインは怒りに釣り上げた目尻をようやく下げた。その表情を見て、ラインを抑えていた二人もおずおずと拘束を解いた。

「謝るなら、メルメルやプラム――それから、お前を産み、命燃え尽きるその瞬間まで、あらんばかりの愛情を注いでくれたソフィーに謝るんだな……」

「ごめんなさい！　ごめんなさい！　……うぅ……ひっく……ごめんなさい……ごめんなさい……」

その時、顔を伏せたトンフィーの背中に、優しく手を置いた者がいた。いたわるようにその背を撫でている。

「うぅ……うっうっ……！」

顔を上げたトンフィーは、驚いて目を見開いた。てっきりペッコリーナ先生だと思いこんでいたのに、実は背中を優しくさすってく

れていたのは――――メルメルだったのだ。
「め、メルメル……」
メルメルは泣いていた。悲しくて悲しくて仕方がないといった顔をしていた。
きっと、友人に裏切られた事を――そのせいで大切なおじいちゃんを失った事を悲しく思って泣いているのだろう。そう考え、トンフィーは申し訳ない気持ちで一杯になった。

裏切り者　22

「メルメル……。ごめんねメルメル……。僕のせいで、ひっく……僕は最低だ。大切な友達を傷つけてしまった。泣かないでメルメル……」

トンフィーは頭を下げて必死で言ったが、メルメルはゆっくりと首を横に振った。

「ワタシこそごめんねトンフィー」

「……え？」

何故、逆に相手の方が謝るのか意味が分からずに首を傾げる。メルメルはそんなトンフィーの手を取り、ギュッと握り締めた。

「ぐすっ……。可哀相だわトンフィー。ずっと一人で苦しかったでしょう？　――ズズッ。きっと、とても辛かったはずだわ」

そう言って、更に強くトンフィーの手を握り締めた。そんなメルメルをトンフィーはいよいよ驚いた様に見つめる。

「メルメル……」

「ワタシずっと考えていたの。トンフィーがワタシに打ち明けてくれなかったのは、何故かって……。それはたぶん、ワタシが――まだまだ頼り無いせいなんだって分かったの。……だからごめんね、トンフィー」

「め、メルメル……。そんな事ないよ。そんな理由じゃ――」

予想外な展開に、トンフィーは焦って首を横に振った。それには構わずメルメルは続けた。

「おじいちゃんが言っていたの」

メルメルの口から「おじいちゃん」という言葉が出てきて、トンフィーは思わずピタリと動きを止めた。

「――楽しい事や嬉しい事は他の人と分かち合いなさい。そうすると、その楽しい事や嬉しい事は、二番にも三倍にもなって、もしかすると世界中の人がメルメルと同じように幸せな気持ちになるかも

知れないよ――って」
　トンフィーは、自分に一生懸命語りかけてくるメルメルの、その瞳のとても美しくキラキラと輝いている様を、吸い込まれるようにして見つめていた。
「そして、自分ではどうしようもないような悲しい事や辛いことは、誰か大切な人と分かち合いなさい。そうすると、その悲しい事や辛いことは、小さくなったり消えてしまったりするから――って」
　トンフィーも周りの大人達も、皆無言でメルメルの事をじっと見つめていた。
「でもね、おじいちゃんはこうも言っていたの。――一つだけ注意しなければいけない事があるっんだよ――って」
「注意しなければいけない事？」
　すっかり話に引き込まれてしまっていたペッコリーナ先生は、無意識のうちに問い返していた。メルメルはそんなペッコリーナ先生の方を向いて、小さく頷いた。
「おじいちゃんは、楽しい事や嬉しい事は誰とでも分かち合って構わないんだって言っていたわ。例えば――良く知らない人や、嫌いな人――どんな人達とでも良いから、出来ればたくさんの人と分かち合った方がいいんだよって。だけど、苦しい事や辛いことは――」
　メルメルはちょっと寂しそうな顔でトンフィーに視線を戻した。「信頼出来る、頼りになる相手とだけ分かち合いなさい――って……」
　トンフィーは、メルメルの言いたい事が分かってきて困った顔になった。「い、いや、あのねメルメル」
「でも、安心してねトンフィー！　ワタシ、もっともっと頼れる人間になるから！」メルメルはドンと自分の胸を叩いた。「トンフィーが一人で辛い思いしないで済むように、何かあったらすぐ、――あ！　そうだメルメルに相談しよう」黒目をクルリと上に向けて、ポンと手を打つ。「――って思うくらいに、頼りになる人間になるから！」
　メルメルに再びガッチリ両手を握り締められて、トンフィーは目

をパチクリさせた。
「メルメル……」
「だってワタシ、おじいちゃんを助ける為にこっそり夜中に抜け出した時、とってもとっても不安で仕方なかったの。だから、トンフィーが来てくれてすっごく嬉しかった。トンフィーって、何て頼りになるんだろうって思ったの」
メルメルは何のわだかまりも無い顔で言葉を続けた。
「そ、それは……。だって僕のせいでおじいさんは……」
眉をハの字にして情けない顔でもごもごと喋るトンフィーに、メルメルはニッコリ笑いかけた。
「そんなの関係ないわ！　トンフィーは一緒に来る必要なんてなかったんだもの。そうよ――あの怖い女の人が関わっているし、暗黒王まで関係してるって知っていたんだから、ワタシなんかよりずっと怖かったはずだわ」メルメルはベラメーチェの顔を思い出してブルッと身震いした。「それでも、トンフィーは来てくれたわ！　何て――何て優しいのかしら、トンフィーったら――ぐすっ……」
どうやらメルメルは、話しているうちに何だか感動してきてしまったようで、再び涙ぐんできた。
「……ぷっ！」ニレがそんなメルメルを見て吹き出した。
気がつけば、先程のピリピリとした空気は消え失せていて、誰もが穏やかな顔付きに変わっていた。
ペッコリーナ先生は、メルメルの作り出す何とも言えない暖かい雰囲気、冷え切ってしまった心や体を温めてくれる「何か」を感じて、思わずぼんやりとその顔を見つめた。
（不思議な子だわ……）
「優しくなんかないよ……。僕……とってもひどい事をしたんだから……」
責められるどころか逆に誉められてしまって、トンフィーはすっかり戸惑っていた。
「そんなの、トンフィーの優しさで帳消しよ！　だからトンフィー、

ワタシもトンフィーに負けないくらい優しくなるから、これからはうんと頼ってね。そうしたら辛いことも悲しい事も二人で分け合って、そんなもの、そのうちに無くなってしまうわよ。そうよ――辛いことなん――て……」

その時、メルメルの顔が大きく歪んで、みるみるうちに大粒の涙がくりくりの両目から溢れ出してきた。

「ぐすっ……悲しい事、だって……。ひっく……。うえーんえーん！　ソフィー母さ～ん！」

メルメルはトンフィーに抱き付いて泣き出してしまった。

「ぐすっ……母さん……。うぇぇーん！」

つられる様に泣き出してしまったトンフィー。結局抱き合ってわんわんと泣き出してしまった二人の子供達を、ペッコリーナ先生は両手でギュッと抱き締めた。

「大丈夫……。大丈夫よ……大丈夫、大丈夫……」

「うえーんえーん！　うえーんえーんえーん！」

トンフィーの告白した内容があまりに衝撃的で、一時はどうなる事かとハラハラしながら見守っていたニレだったが、こうして抱き合って泣いている子供二人を見ていると、この先も変わらず旅を続けて行けそうだと感じてホッと胸を撫で下ろした。

「何だか色々あったけれど、とりあえず一段落着きましたかね？――ラインさ、ん」

振り返ると、後ろにいたはずのラインの姿が消えていた。良く見ればグッターハイムの姿もない。――一体どこへ行ってしまったのか。

ふと視線を前に戻すと、少し離れた所に、猫が四匹並んで空を眺めている事に気が付いた。ニレも釣られて上を見る。いつの間にか雨はすっかり上がって、綺麗な真っ青の空が広がっていた。そして、

「あ……。何て――綺麗な……」

その感心したような声音を聞いて、泣きべその三人が顔を上げてそちらに目をやれば、ニレは瞳を輝かせて遠くの空を見上げていた。

その視線を辿るとそこには、

――美しい七色の虹が、大きな橋を架けていた。

裏切り者　２３

ドドドドドドドドドドドーーーー！

ラインは、四間程もありそうな大きな一枚岩の、そのゴツゴツと尖った先端部に立ち、眼下に流れる川を眺めていた。普段はゆったりと流れ、鳥や獣達の静かな水飲み場となっているそれは、今は地を震わせる程に激しく、大きな音を上げながら、ラインのすぐ足元を上流から下流に向けて勢いよく流れている。もうすっかり上がってしまってはいるが、先程までの土砂降りの雨のせいで、川の水は濁り透明度は限りなくゼロに近い。しかし、その濁った水の中で、何かがキラリと光り輝いたような気がして、ラインは目を細めた。

「少しやりすぎたんじゃないか？」

突然後ろから声を掛けられたが、ラインはそちらへ顔も向けずにじっと川の中の光りを見つめ続けていた。別にわざわざ振り向かなくとも、声の主が誰かは分かっているのだ。

「そうかな？　私はそうは思わないがな、――グッターハイム」

（水大蛇か――）

水の中で光り輝いていたのは、水大蛇（みずだいじゃ）という、川に住む大きな蛇のウロコだと気付いて、ラインは一人心の中で得心した。

「あまりにも――酷じゃないか。トンフィーは、ただ母親に対する深い愛情でやっただけだろう？」「……」

ラインは答えずに、水大蛇の時折水面にわずかに覗かせるキラキラとしたウロコを眺めていた。

（珍しい物を見た……）

水大蛇は普段は川の深い所に穴を掘りじっとそこで生活をしているので、めったに人の目にはふれないのだ。しかし、今日のように大雨が降ったりして水がとても濁っている時などは、ごくまれに穴から出てきたりする。

めったに見られない水大蛇を見た事で、何だか得をした気になっ

てラインは小さく片頬を上げた。それを見て、グッターハイムは眉を潜める。

「――トンフィーの父親は、トンフィーが物心付く前にあの戦争で死んじまった。勿論、お前も良く知っているだろう？　お前の部下だったんだからな」

「だからなんだ？」

やはり目線は川に向けたままに、ラインは不機嫌そうに問い返した。それは、余り良い思い出とは言えないのだ。

「だから――トンフィーは幼い頃からからずっと母親と二人で生きてきたんだ。……母親に対する愛情が人一倍なのも当然だろう？」

「だからといって許されない物は許されないのだ」ラインは川から視線を外し、ようやく後ろを振り返った。「可哀想だと甘やかす事が、彼の為になるとは思えない」

ラインの青い瞳に真っ直ぐに見つめられて、グッターハイムは少し困ったような顔をした。

「そんなに悪い事か？　――確かに、プラムを騙して書かせたあの手紙には驚いたが……。あれだって普通の子供ならおよそ考えつかないぞ。あいつは少し頭が良すぎるんだ。だから、色々考え過ぎちまう」

グッターハイムは呆れたような、それでいて少し感心したような顔で首を横に振っている。

「だからこそ余計にだ」

ラインは視線を川に戻した。しかし残念ながら、水大蛇の美しいウロコの輝きは消え失せてしまっていた。

「どういう事だ？」

グッターハイムの不思議そうな声を背中に受けながら、ラインは少し残念に思って濁った川を見つめた。

「普通の子供はあんな事を思い付かない。あの子は人より抜群に頭が良い。――ならばこそ余計に厳しくしなくてはいけない。彼が人よりも能力が高ければ高いほど、人よりも余計に学ばせ、間違いを

犯さない人間に育てなければならない」
　それは何だかとても非情な言葉に感じてしまい、グッターハイムは顔をしかめた。
「酷だな……。好きで優れた人間に生まれてきた訳ではあるまいに」
「人とはそういうものだグッターハイム。――いや。生命とはそういうものだろう。誰もが生まれたい環境、生まれたい姿、生まれたい存在として生まれてくる事は出来ないのだ。不満や不安を抱えながら、出来る限り成りたい存在に近づくべく努力して生きて行くより仕方無いのだ。そして、その成りたい存在というのがおかしなものになら無い様に、我々大人――つまり、少しでも長く生きて学んだ者達が子供達を導いてやらねば――」
「それはエゴではないのか？」グッターハイムがするどい声でラインの言葉を遮った。珍しく顔付きも厳しいものになっている。「成りたい存在など……。そもそも、人間がどうあるべきかなど決まりがあるのか？　成るべき存在に導いてやるなど傲慢ではないのか？
　それは、メルメルやトンフィーが目指すべき大人の姿などでは無く、お前が成って欲しい――そう。それぞれの大人が自分の都合に合わせて成って欲しい理想を押し付けているだけだろう。だから子供達は迷い、苦しむのだ」
「……」
　会話が途切れ、二人は厳しい顔のまま、しばし見つめ合った。
（エゴか……）
　ラインはふと口元を緩めた。
「確かに――お前の言う通りだ。私の言っているのはエゴであり、自分の理想を押し付けているのに他ならないのだろう。ただ……グッターハイム。私は、あの子がそもそも持っている――いや、ソフィーがそのように育てたのか――トンフィーの、とても優しく暖かい心が、大好きなのだ」
　ピチャリと背後で水音がして、ラインはゆっくりと後ろを振り返った。そこには、体の上半分を水面から出して優雅に泳ぐ、小さな

竜の姿があった。
（……水竜だったか）
水大蛇より、もっとずっと珍しい生き物だ。ラインは自分の勘違いと、希少な水竜を見られた幸運にふと笑った。
「だから――その、優しく暖かい心を無くして欲しくないだけなのだ。そして、人よりも優れた能力、素晴らしい才能が彼からそれを奪って仕舞うかも知れないのが、怖いのだ」
「――考え過ぎではないのか？」
「勿論、危惧かも知れないが……。でもグッターハイム、人は力を持ちすぎるとそれに溺れがちになってしまうと私は思うんだ」
「……そうかも知れないな」
良く見てみると水竜は泳ぎに力強さがなく、ウロコの輝きもあせていた。ラインが水大蛇と間違えたのもそのせいかも知れないし、そもそも水大蛇と違って、水竜は水の澄んだ大きな湖などに住んでいるものだから、こんな濁った川にいる事自体がおかしいのだ。
（迷いこんだのかも知れないな……）
良く見れば、まだ子供の様だ。
（仲間とはぐれたか）
寂しそうに彼方を見ている水竜の横顔に、小さな男の子の横顔が重なって見えた。

カルバトの塔　1

「一体どういう事なんだ！　この猫助！」
「ミギャ～！」
再び旅立ったメルメル達一行の前に立ち塞がった、大きな樫の木。
その木を挟むように二本の道が斜めに伸びている。
「……ちょっと間違っちまっただけだろ？　よしよし……」
グッターハイムはワーチャを持ち上げて、優しくあやすように右の道へ行こうとした。しかし、
「ミギャ～！」ワーチャは抗議するように鳴いて暴れる。
「いだっ！　こ、こら！」
グッターハイムを蹴っ飛ばして、ワーチャはその手を逃れ猛スピードで走り出した。そうして左手の道へと進み、少し行った所で振り返り、再び、「ミギャ～」と鳴いた。まるで、こっちへ来いと言っているようだ。
「まったく……どういう事なんだ」グッターハイムは頭を抱えた。
「さて、どうしたものかしら……。ねぇ？」ペッコリーナ先生が顎に指を当ててラインを振り仰いだ。
「ふむ……」ラインは腕を組んでワーチャを見つめている。
メルメルとトンフィーは分かれ道の真ん中、つまり樫の木の前にささされた立て札を見つめた。右を向いた板には『ミデル』左を向いた板には『カルバトの塔』と書かれている。
「――ふんっ。所詮は猫助だからな。行き先を間違えちまってるんだろう……。よし！　ミデルはこっちだ。みんな行くぞ！」
グッターハイムはひらりと馬に跨り拳を掲げ、ずんずんと右手の道を進んで行った。その背中がどんどん小さくなって行く。それを見送って、メルメルとトンフィーは顔を見合わせた。
「でも……。――ねぇ？」メルメルが呟く。
「今まで迷いなく進んできたのに、急に行き先を間違えたりするか

な？」

　トンフィーは首を捻りながらワーチャを見た。ワ～チャはメルメル達が動き出すのを根気良く――と言うよりは、のんびりと寝そべってくつろいぎ、大欠伸をしながら待つつもりの様だ。

「この、『カルバトの塔』ってどんな所なのかしら？」メルメルは木に書かれた文字を指差した。

「昔――今から五百年くらい前、この辺りはまだカルバト族の領土だったんだ。その頃、カルバト族が建てたから『カルバトの塔』と呼ばれているんだよ」

「カルバト族？」ニレの説明にメルメルは首を傾げた。

「あらメルメル……。まるで初めて聞いたような顔ね？　この間の歴史の授業で出てきたはずだけれど？」

　少し意地悪な顔でペッコリーナ先生が言って、メルメルは思わずおでこに汗を掻いてしまった。

「あ、あー……。カルバト族……あー……」メルメルは助けを求めるようにトンフィーを見る。

「えっと――カルバト族は手先の器用な部族で、主に武器や防具を作るのを得意としていて、昔はトキアの国とも仲良くやっていたんだよね。ほら、トキアにはあの――例の石が、あったから……」

　トンフィーの言葉は最後の方がやけに小さくなってしまった。そんなトンフィーにちらりと視線を投げてから、ラインが続きを語り始めた。

「トキアの国で取れる命の石は、たくさんの魔力を含んでいる。それを使ってカルバト族が作る武器や防具は、とても性能が高いと各地で評判だった。しかし、ある時仲良くやっていたカルバト族とトキアの国の間で争いが起こった。何故争いが起こったのか――トンフィーなら知っているんじゃないかな？」

　突然ラインに問いかけられて、トンフィーは驚いてしまった。

「え……？　――あ、はい！　か、カルバト族が、と、トキアの国の領土を侵したと言って、トキアの国の、じょ、女王が怒ったから

です！」

トンフィーは顔を赤らめてつっかえつっかえ喋った。ラインは少し苦笑いのようなものを浮かべて頷いた。

「その通りだ。カルバト族とトキアの国は争い、結局トキアの国が勝利を収めカルバト族はこの地を追いやられ、姿を消した。その時の争いで、カルバト族が建てた見張りの為の塔が、『カルバトの塔』と呼ばれるものだ」

ラインの言葉にメルメルは首を傾げた。

「じゃあ……カルバトの塔って言うよりは元カルバトの塔って感じね。五百年も前に作ったのじゃあ、もう崩れて無くなってしまっているのでしょう？」

「いや……。カルバト族の作る武器や防具があまりに素晴らし過ぎて、そちらの印象ばかりが残ってしまうが、要は、カルバト族とは手先が器用で、何か物を作らせると大概優れた作品が出来るという事なんだ。武器や防具の他にも衣類や食器、装飾品や家具。――そして、建造物を作る技術にも、とても秀でていた」

「凄いのね……。カルバト族って」メルメルは感心したように溜め息を吐いた。

「そうそう。だから、五百年も前に作ったカルバトの塔もいまだに朽ち果てずに残っているんだ。大分傷んではいるけどね」

「すご～い」

ニレの言葉にメルメルはまたも溜め息を吐いた。どうやらカルバト族にすっかり感心してしまったようだ。

「そうか……」

何か思い付いた様にトンフィーが呟いた。皆が気になってそちらを見れば、トンフィーは考え込む様に一点を見つめている。

「――トンフィー？」メルメルが首を傾げて覗きこむ。

「うん……。カルバトの塔は、五百年前の争いでカルバト族が敗れこの地を去ってから使われなくなって、勿論人も住んでいないはずなんだ」

トンフィーの言葉に、ニレが笑った。
「そりゃあそうさ。こんな偏狭の地に、しかもあちこち傷んでボロボロの塔なんかに誰が好き好んで住むもんか。もしも住んでるとすれば――コウモリくらいかな？」
冗談ぽく言ったニレに、トンフィーは真面目な顔で頷いた。
「生活するには確かに快適ではなさそうだけれど……。悪者の根城としてはどうかな？」
「悪者の根城？」メルメルは首を傾げる。
トンフィーはメルメルの目をじっと見つめた。
「例えば――さらってきた誰かを閉じ込めて、敵を迎え討つには最適の場所かも知れない」

カルバトの塔　2

ハッとして皆トンフィーを見た。注目を浴びて、耳を赤くしながらもトンフィーは続ける。

「確かカルバトの塔は、五百年前の争いでカルバト族が最後まで立てこもってトキアの軍隊をとても苦しめた場所なんだ。中には敵を迎え撃つ為の様々な仕掛けがあるとか」

メルメルは、今度はトンフィーの物知りさに感心して溜め息を吐いた。

「つまり、プラムはカルバトの塔に閉じ込められているんじゃないかということか……」

ラインが腕を組んで考えこむ。

「トンフィーの言う通りね！　これで、猫ちゃんがあちらに行こうとしているのも納得出来るわ。よ～し、そうと分かればカルバトの塔に向けて、出発進行！」

「ちょっ、ちょっと待って下さいよ！」

自分の教え子の利発さに嬉しくなって、スキップするように歩き出したペッコリーナ先生を、慌ててニレが引き止めた。

「何よ？」ペッコリーナ先生は少し不満そうに足を止める。

「カルバトの塔は、ひと月前に見回りに行った者がいるんですよ！　特に変わった所があるとは言っていなかった」

「そうなの？」

ニレの言葉に、メルメルとペッコリーナ先生はがっかりしたように肩を落とした。と、そこへ、

「こらー！」

右手の道から砂煙をあげて、グッターハイムの馬が猛スピードで戻ってきた。

「なんで、誰も付いて来ていやがらねえんだよ！　一体何をぐずぐずしてんだ！」

自分の後ろに誰も付いてきていない事にようやく気付いたらしく、怒りの為か、恥ずかしさからか顔を赤くしている。
「だって、おじさんの言うように、おじいちゃんが本当にミデルにいるとは思えないんだもの」
メルメルの言葉に、グッターハイムは更に顔を赤らめた。
「め、メルメル――おじさんはやめろ。――いや、そんな事より、プラムがミデルにいないとはどういう事だ？　何か根拠が――」
「根拠は――あれよ！」
メルメルは寝そべって、あくびを繰り返しているワーチャを指さした。グッターハイムはそちらを見て、呆れたような顔になる。
「だ～か～ら～！　所詮は猫助だ。あてになどならんだろうが！」
「でも、猫助だなんてバカに出来ないような事がたくさんあったわ！　それに、他にもおじいちゃんがいそうな怪しい所があるんだから！」
メルメルは口を尖らせて顎を持ち上げグッターハイムを見上げた。
「……どういうこった？」
グッターハイムは頑なメルメルから視線を外し、ペッコリーナ先生を見た。
「ええと……。トンフィーがカルバトの塔が怪しいんじゃないかって。――でも」
ペッコリーナ先生がちらりとニレに視線を送る。
「ラインさんのお達しで、近頃悪魔の兵隊がこの地方でもウロウロしているから、根城になりそうな場所は定期的に見回りしてたんです。一月前にカルバトの塔も様子を見に行った者がいます。いつもと変わった所はなかった筈ですよ」
ニレが言うと、グッターハイムは大きく頷き、ほら見たことかという顔をメルメルとトンフィーに向けた。
「だろう？　逆に、ミデルは悪魔の兵隊の数も増えて、すっかりこの辺りの基盤になり始めている。あそこならプラムを閉じ込め、俺を呼び出して迎え撃つのに最適と言えるだろう。――なぁ、ライン

？」「……」

グッターハイムは鶴の一声を期待したが、残念ながらラインから賛同の言葉は出てこなかった。考えこむように腕組みをしてワーチャを見ている。

「でも、見回りに行ったのはひと月も前でしょう？　今はどうなってるか分からないわ！」

どうやら納得出来ないらしく、めげずにメルメルが言うと、こちらも折れる気の全くないグッターハイムが、フンッと鼻を鳴らした。

「ひと月しか前じゃないんだ。急に兵隊を集めて準備したとでも言うのか？　何の為にそんな労力を使うんだ？」

「何の為って、それは……えっと……」

グッターハイムの勢いにメルメルは押され気味になってきた。目の玉を上にして必死で考える。

「カルバトの塔の方が、敵を迎え撃つのに有利だからかも知れない」

トンフィーの援護射撃に、メルメルは瞳を輝かせた。

「……有利？」グッターハイムは片眉を上げてトンフィーを見る。

「ミデルは、いくら今は闇の軍隊が支配しているとは言っても、元はただの普通の街です。要塞のようなものもないだろうし、敵を迎え撃つのに最適とは言えない。何よりも、敵はおじいさんを捕らえておくのに万全な場所が必要な筈です。それが一番重要なんですから」

「何故、一番重要なんだ？」

首を捻るグッターハイムを、トンフィーは少し呆れたように見た。

「何故って……。万が一おじいさんをこっそり取り返されたりしたら、グッターハイムさんをおびき出す事が出来なくなるからですよ。敵は、グッターハイムさんを――つまり、レジスタンスのリーダーを、こ、殺して、おそらくレジスタンスの志気をそいで、一気にレジスタンスを壊滅させるとか、そういう事を目論んでる筈です。おじいさんは、そのリーダーを呼び出すためには絶対奪い返されちゃいけない。だから大切なのは――安全に捕らえておける場所――ミ

デルにそんな所あるでしょうか？　そもそもミデルには、元から街に住んでいた一般の民も少しは残っているでしょう？　そんな所じゃ、いつ敵が潜入してくるか分からない。カルバトの塔のように、外からの攻撃に強い場所で、しかも味方だけしかいない場所の方が安全だと言えます」

「……う～む」

今度は、グッターハイムがトンフィーの勢いに完全に押されてしまった。反論する言葉を探し、腕組みをして考えこんでいる。

「ここでこうして悩んでいても仕方ない」

ラインが言って、皆が一斉にそちらを見た。

「ミデルとカルバトの塔――二手に別れよう」

「戦力を二分するの？　……大丈夫かしら？」ペッコリーナ先生が心配そうに呟く。

「まずは、敵に気づかれないように様子だけこっそり窺う。そして、もしもプラムの存在が確認出来たら、お互い直ぐに連絡をする」

「だったらまずは、先に全員でミデルから行ったらどうだ？　ミデルはカルバトの塔よりずっと近くにあるし」

グッターハイムの提案に、ラインは首を横に振った。

「あまり時間をかけるのは得策ではないだろう。使いを出して待っている間に敵の様子を探る事も出来る。使いにはピッピーとウォッチを使えば早いだろう」

「そうですね。隠れ家に使いに出したウォッチもそろそろ戻ってくると思います」

ニレが頷き、ペッコリーナ先生も賛同するように頷いた。グッターハイムもラインの言葉に納得したようにパンッと手を叩いた。

「よし！　じゃあ、どう分かれようか？　ペッコリーナとニレは使いの事があるから別れてもらわなきゃな。あとは――」

「ワタシはカルバトの塔に行くわ！　おじいちゃんは絶対カルバトの塔にいるもの！」

メルメルが鼻息荒く言うと、グッターハイムも負けじと鼻を鳴ら

した。
「ふんっ！　じゃあ俺はミデルだな！　プラムは絶対ミデルにいるからな！」
　バチバチと火花をちらしてにらみ合っている二人の間に、ペッコリーナ先生が割って入った。
「私はメルメルと行くわ。心配ですもの……。トンフィーも勿論こちらよ」
　ペッコリーナ先生は、メルメルとトンフィーの肩に腕を回して引き寄せた。
「それじゃあ、私はリーダーと行きますね」
　ニレがグッターハイムの横に並ぶ。そして、皆がラインを見つめた。
「……私はメルメル達と共に行こう」そう言ってラインは素早く馬に飛び乗った。
　メルメルはとても嬉しかった（もしもあっちへ行くと言ったら、少し駄々をこねようと思ってたんだ）。ラインがいれば百人力だ。
「――では、汗臭い男二人で面白くもないが、仕方ない。いざ参ろう！」
　グッターハイムはクルリと背を向け、マントのように長い上着の裾を揺らして歩き出した。
「じゃあ後ほど！」ニレも慌ててグッターハイムの後を追う。
「ね、ねえ！」
　とっとと去ろうとする二人の背中に、メルメルは焦ったように大声で呼びかけた。グッターハイムとニレは少し驚いた顔で振り返る。
「……なんだ？」グッターハイムは片眉を上げて不振げにメルメルを見ている。
「二人とも気をつけてね……」
　メルメルは、離れて行く二人の背中を見て何だか寂しくなってしまったのだ。急にしおらしくなった少女の様子に、男二人は思わず声を合わせて笑った。

「ありがとうメルメル」
　ニレが言うと、グッターハイムはニヤリと片頬を上げて、メルメルに歩み寄った。
「心配いらないさ。俺達二人だけでとっととプラムを救い出して来るさ！」
　自らの頭を包み込んでしまう程に大きな手が、頭の上に載せられて、その温かな手でぐしゃぐしゃと撫でられると、それでメルメルはようやく少し安心した。
「……ふふん！　残念だけどおじいちゃんはワタシ達が助け出しちゃうわ！」
「ガーハッハッハ！　それじゃあ勝負だな。――よし行くか！」
　再びグッターハイムは身を翻し馬に飛び乗ると、ニレと共に走り去ってしまった。
「さぁ……私達も行こう。グッターハイムに負けるわけに行かないからな」
　ラインに言われて、二人の去っていくのをじっと見つめていたメルメルはニッコリ振り向いた。
「はい！」元気いっぱいに応えてラインの馬に乗り込む。「――ミミ！　シバ！」
　メルメルの呼びかけに、どこかにお散歩に行っていたミミとシバが、慌てて戻って来て馬に飛び乗った。すると、のんびり屋のワーチャものんびりと立ち上がり、満員御礼のメルメルの前に無理やり乗り込んできた。
「あ、こら！　じっとしなさい！」メルメルは慌てて三匹が落ちない様に両手一杯に抱え込む。
「フ……。それでは行こう」ラインが言って、ゆるりと馬が動き出すと、
「ミギャ～！」
　ワーチャは満足そうに一声鳴いたのだった。

カルバトの塔　3

森と呼ぶ程には深くなく、それでいて草原という程には開けてはいない。そんな様な、いかにも開拓されていない人外の地といった場所を、かれこれ二時間以上進んでいる。

聞き慣れない鳥の鳴き声を聞いた気がしてそちらに目をやると、赤く長い尾が、遠く西の彼方にある大きな杉の木の陰に隠れるところだった。ちょうどそちらに浮かんでいた太陽の眩しさに目を細めて、メルメルは、――だいぶん日が傾いてきてしまったな、と思った。

「カルバトの塔って……まだまだ遠いのかしら？」誰にともなく呟く。

「あと、半時程だな」

背中から聞こえてきた声にメルメルは首を傾げる。

「じゃあ、結構近くまで来てるのね。――わざわざ見張りの塔を作ったのだから、カルバト族の首都がその周りにあったのかと思ったけど、そうではないのね」

「……？　首都を作る程カルバト族は大きくはなかった。この辺りに住んでいるカルバト族で全てだったのだ。およそ――三百人程だな」

「やっぱりこの辺りに住んでたんだ。じゃあ、崩れてしまったのかしら……」

そう言ってメルメルは周りを見回した。

「何が？」ラインが不思議そうに首を傾げている。

メルメルは後ろを振り仰いだ。「カルバト族の住んでいた家が！」

両手を広げて不思議そうに言うと、ラインは一瞬、キョトンという顔をした。

「……クックック」

何故か肩を揺らしてラインは笑っている。

「な、何で笑うの？」今度はメルメルがキョトンとしてしまった。
「クックッ……。いや、すまん。メルメルが余りに真剣な顔で言うもんだから、つい、な」
「だって、不思議じゃない？　カルバト族は建築の技術がとっても高かったんでしょ？　だから、カルバトの塔はちゃんと崩れずに残っているのに、住んでいた家がまったくないなんて――」
　メルメルはもう一度辺りを見渡す。やはり、カルバト族が住んでいた建物は、その残骸すら残ってはいないようだ。
「それとも、もう少し進むとあるのかしら？」
「いや。もうこの付近一帯は、カルバト族の町になっていた辺りだ。だが――カルバト族の建物は、この土地の上には無い」
　この言葉に、メルメルは首を横に振った。「じゃあ、自分達の家は手抜きして作ったのかしら」
「フ……。そんな事は無い。ちゃんと住居というか――町そのものが残っている」
　ラインの笑い含みの言葉に、もう一度メルメルはキョロキョロとする。
「クックック……」
　メルメルの様子を見て、ラインは再び肩を揺らして笑っている。
　メルメルは不振げな顔で首を傾げた。
「フフ……。メルメル、ラインさんが言っているのは、カルバト族の住んでいた建物はこの土地の、『上』には無いという意味さ。――よいしょ！」
　後ろから声が聞こえてメルメルが振り返ると、うたた寝をしているペッコリーナ先生に寄りかかられて潰されそうになっているトンフィーが、一生懸命体を起こそうともがいていた。
「土地の上には無い……。――じゃあ、どこにあるのよ？」
　さっぱり分からないといった顔のメルメル。トンフィーはそんなメルメルの顔を笑顔で見ながら、無言で地面を指差した。
　メルメルはじっとトンフィーの指差した地面を見つめた。

「フフフ……。つまりね、土地の『上』ではなくて『下』にあるって事――わわわ……」

何とか起こした体を、再びペッコリーナ先生の重圧で潰されて、トンフィーの顔がすっかり見えなくなってしまった。

もしも今、トンフィーがメルメルの顔を見ていたら、思わず大笑いしてしまっていただろう。クリクリの目を一杯に見開いて、あんぐりと口を開けている。

「『下』……。それって、まさか――」

「そうだ。カルバト族はその高い建築技術を駆使して、地下に町を築いて生活していたのだ」

ラインの言葉に衝撃を受けて、メルメルは地面を凝視した。しばらく言葉も無く下を向いていたが、勿論そこにカルバト族の町が見えるはずも無い。

（あ……。かわいい）

道の隅から隅へと、メルメル達の馬の前をシマリスが二匹慌てたように駆け抜けて、メルメルはようやく我に返った。

「じゃあ、この下にはカルバト族の町があるんだ……」

「そうだな。分かりにくくなっているが、所々に入り口もある筈だ」

ラインの言葉を聞いて、メルメルは目を輝かせた。

「すごい……！　地下の町なんて――入ってみたい！」

「確かにそうだよね。僕も入ってみたいな」トンフィーもメルメル同様目を輝かせている。

「いつか入ってみるといい。中は所々崩れて通れなくなってはいるが、ちゃんと町の形のまま残っている」

「ラインさんは入った事があるの？」

メルメルは羨ましそうな顔でラインを振り仰いだ。

「ああ。何度か。だが気を付けなくちゃいけない。中には時々、不届き者がうろうろしている事があるから」

「不届き者？」

首を傾げて見上げてくるメルメルに、ラインはコクリと頷いた。

「盗賊だ。地下の町には、大分奪い去られたとはいえ、まだまだカルバト族の財宝が眠っている。それを狙っていまだに盗賊がうろついているんだ」

「財宝って、宝石とかお金とか？」

「それも多少はあるが――奴らの狙いはカルバト族の作った武器や防具だ。かつて、トキアの国を追いやられたカルバト族は、海の向こうのバルディア共和国に逃げ込み、そこで新しく町を作る事を許された。しかし、トキアとの戦いでカルバト族はその数を減らし、わずか百人にも満たなくなってしまった。元々希少だったカルバト製の武器や防具は、今や宝石や金などよりもずっと価値のある物になっている。それから――これはあくまで噂だが、ある国の王が自らの財の半分を費やして、ようやくカルバトの槍を手に入れたなんて逸話もある程なんだ」

「カルバト族の武器や防具ってそんなに凄いんだ……。一回見てみたいな～」

メルメルは頭の中に、きらびやかな装飾を付けた光り輝く剣を思い浮かべた。すると、ラインが自らの腰に差している二本の剣の、長い物の方をスラリと抜いてメルメルの前にかざした。

「――好きなだけ見るといい」

メルメルはラインの言葉の意味を考えながら、目の前にかざされた剣をじっと見つめた。

「ら、ラインさんの剣て、も、もしかしてカルバト製なんですか？」
興奮し過ぎてすっかりひっくり返ってしまったトンフィーの声を背中で聞きながら、メルメルは瞳を輝かせた。
「そう。この剣は、紛れもなくカルバト族の作った物だ」
――なるほど。良く見ればとても美しい剣だ。柄の部分には精巧な細工が施されている。そして、全体的に青いキラメキを放っているその細工が、ある物をメルメルに連想させた。
「水……」
思わず呟いたメルメルに、ラインが微笑んだ。
「そうだ。この剣ははるか昔、まだトキアの国とカルバト族が仲良くやっていた頃、水の都とも呼ばれているハルバルートをイメージして、カルバト族からトキアの国の女王に親愛の証しとして送られた物なんだ」
「それを何故ラインさんが……」驚いたようにトンフィーが呟く。
「私はかつて、トキアの国、バルディア共和国、イルデ・ミルド公国の――三大国武道大会で優勝した事がある。その時、女王から褒美にこの剣を頂いたのだ」
ラインは何でも無い事のようにサラリと言ったが、メルメルもトンフィーも驚いて言葉を失った。
（思ってたよりもラインさんて凄い人だわ）
メルメルは半ば呆れながら、いまだかざされたままの剣を眺めていた。
（……命の石だわ）
柄には、恐ろしい程に青の濃い大きな石がはめ込まれていた。
「……ラインさんは、どうしてレジスタンスのリーダーにならないの？」
突然の、思いもよらぬ問いかけに、ラインは少し驚いてメルメル

を見つめた。濁りの無い二つの瞳が、真っ直ぐに見つめ返してきた。
「め、メルメル……」
後から、トンフィーが慌てたような声を出したが、メルメルは気にせずに続けた。
「おじさんが――グッターハイムおじさんは、リーダーをラインさんに代わってもらいたがっていたわ。ラインさんは昔、赤の大臣だったのでしょう？　それなら、確かにおじさんよりもラインさんの方がリーダーになった方が良さそうだわ。きっと、レジスタンスのみんなも喜んで、――何て言うか……その……」メルメルは言葉を探すように、大きな黒目をさまよわせた。「――そう！　活気づくと思うの！」
余りにストレートな発言に、トンフィーは青くなってラインの背中を見つめた。ラインは驚いた顔でしばらくメルメルを見つめていたが、やがて、ふと笑ってゆっくりと剣を鞘に収めた。
「……私はかつて、信念の為に戦っていた」
何の前触れもなく唐突に語り始めたラインに、メルメルは首を傾げた。
「戦いの中では、時に人の命を奪う事もあった。その者達は私の中で亡霊となり、私の足に絡みつき、その重みを引きずるように私は生きてきた。だが――その苦しみも、信念があればこそ耐える事が出来ていたのだ」
ラインは険しい顔で、まるでそこに亡者でもいるかのごとく前方を睨みつけている。
「信念？」
首を傾げて見上げてくるメルメルに、ラインはゆっくりとその青い瞳を向けた。
「私はそれ程の善人ではないが、多くの人と同じように平和というものを愛している。――人が争う事なく、笑顔の絶えぬ世の中。そんなふうになればいいと――そう思わないか？」
問うように言われて、メルメルは考えるまでもなく頷いた。

「……だが、それはあくまで理想だ。完全なる平穏な世の中を作る事など、私ごときの力では出来はしない。この世には様々な人間がいる。同じ人間など二人といないのだから、意見が食い違ったり、分かり合えない事があって当然なのだ。分かり合えなければ――争い事が起こるのも、また、当然だ」

少し難しい話しになってきたが、ラインの真剣な声を聞いて、何とか理解しようとメルメルは頭を捻った。

（……ワタシとドミニクみたいなものかしら？）

気の合わない二人はいつも喧嘩ばかりしているし、時には取っ組み合いになる事もある。

「――しかし、私ごときには何も出来ないと諦めた訳ではない。私なりに出来る精一杯がある筈だと考えていた」

ラインの話に耳を傾けながらも、いつの間にか背中の重みが消えている事にトンフィーは気付いた。

「人が争えば、時に殺し合いになる。その末に殺された者を愛していた人々は悲しみ、笑顔で生きる事も出来なくなる」

ラインの言葉にメルメルは、ニレが妹の話をした時に見せた辛い表情や、トンフィーの悲しい涙を思い出していた。

「私は、苦しむ者を少しでもなくす為に、時には剣を振り下ろす事も必要なのだと考えた。――それが、私に出来る精一杯だと決めた。そして、それこそが私の信念だったのだ」そこでラインは眉根を寄せた。「だが……」

何かを考え込むように黙り込んでしまったライン。再び口を開くのを、メルメルは辛抱強く待った。そうしてふと空を見れば、日はいよいよ傾いて、辺りがオレンジ色に染まっている事に気付いた。

「……昔、ある人が私に言った事がある。戦を収める為に戦をしていたのでは、一生争いは無くならず、平和な世の中など訪れはしないと。言われた時は、意見の一つとして受け止めていた。だが、それで自らの信念を疑いはしなかった。――しかし……。赤軍を率いて暗黒王に戦いを挑み、その果てに大敗を喫した時、私はその人の

言葉を思い出していた。つまり――私は迷い始めていた。今まで私がやってきた事は正しかったのかどうか……。もしかしたら、間違いがあったのではないか、と」

その迷いを映し出しているかのように、ラインの瞳がオレンジの夕日を浴びて揺れている。

メルメルは「ラインさんは正しかったはずよ！　間違ってなんかいないわ！」と言ってあげたかったが、根拠がなかったし、喉に言葉がつかえてしまったようで声にならなかった。

「人は誰しも生きていれば迷いもあるし、後悔だってするものよ……。もしも間違いがあっても、それを教訓にして過ちを繰り返さないようにすればいいの」

すっかり眠っていると思っていたペッコリーナ先生が口を開いて、メルメルは驚いてしまった。体を捻って後ろを振り返る。どうやらラインも少し驚いたようで、首を捻って後ろを見ている。

「……確かに普通の人間ならそうだろう。だが、私には迷いも間違いも許されなかった。何故なら、私はある時から人の命を預かる立場になっていたからだ。部下達は、自分の本意では無くとも私の命令には従わなくてはいけない。時には私の選択によって命を落とす者もいたのだ。それなのに私が迷ったり後悔したりしてはいけないだろう？　私が部下ならそんな指揮官はごめんだ」

メルメルは一生懸命体を捻って後ろを振り返り、ペッコリーナ先生の顔を見つめた。何か言ってくれるのではないかと期待したが、残念ながら悲しそうな顔をするばかりで、ラインを慰めるような言葉は出てこないようだった。

「――だから、レジスタンスのリーダーにならないんですか……」

溜め息でも吐く様に呟いたトンフィーに、ラインは無言で頷いた。それで話は終わりだと言うように前を向いてしまったラインの背中に、――でも、とトンフィーは言った。。

「誰かが――人間がたくさん集まったら、必ずまとめる誰かが必要だって、思うんだ。園に園長先生がいるように。クラスにクラス委

員長がいるように。ラインさんは嫌かもしれないけど。――でも、みんなが望んだら、他にふさわしい人がいないなら、ラインさんはリーダーになるべきなんじゃないかって、思うんだ。僕も――レジスタンスに入ったら、ラインさんの下で働きたいって思うし……」

ラインは驚いた顔でトンフィーを見つめた。そして、メルメルも同じように驚いた顔でトンフィーを見つめた。

――僕も、レジスタンスに入ったら。
（トンフィーったら、もしかしてレジスタンスに入るつもりなんだわ！）
父親が青暗戦争で命を落とした事や、母親のむごい仕打ちを考えれば当然の事かも知れない。
「なりたい人がリーダーにふさわしいんじゃなくて、みんながなって欲しい人がリーダーにふさわしいんじゃないかって……。命をかけるなら尚更、自分達が望んだリーダーの指示で動きたいって、思うんだ……」
「まぁ、確かにグッターハイムの下じゃ、命はかけられないわよねぇ」
「い、いやいや……。そんな事はないんだけれども」
ペッコリーナ先生に冗談混じりに言われて、トンフィーは慌てて首を横にぶんぶんと振った。
「気を使わなくていいのよトンフィー。どうせ本人はいないんだし。とてもじゃないけど、あんなだらしないリーダーは嫌だって思ってるんでしょ？」
「いやいやいや……」
「あんまり品格もないし」
「い、いやいや……」
「おつむも――あんまりねぇ？」
「い――まぁ、それは……」
本人がいないのを良い事にあまりな言いようだが、勿論二人ともこれは冗談なのだ。ラインの少し固くなっている心をほぐそうとしているだけ。いつもならそんなペッコリーナ先生とトンフィーのやりとりに必ず参加して盛り上がるメルメルなのだが、今はやけに生真面目な顔で一点を見つめていた。

（トンフィー……。いつ、レジスタンスに入るつもりなのかしら）

もしかしたら、すぐにかも知れないと考えて、メルメルは心臓がドキドキしてきた。

――レジスタンスに入る。それは、悪くない事に思えた。レジスタンスには大好きな人がたくさんいる。ペッコリーナ先生やニレ、グッターハイムの事だって、実は大好きだし、ラインの事は大大大好きだし、それに何より世界一大好きなおじいちゃんがレジスタンスの一員なのだ。だから、レジスタンスに入るのも良いと思う。しかしメルメルは、レジスタンスの一員になって暗黒王を倒す。――そう考えると、今一ピンとはこないのだ。おじいちゃんをさらわれた事には確かに腹が立つが、それほど暗黒王への深い憎しみは沸いてはこない。トンフィーと同じように青暗戦争で両親をなくしたらしいが、記憶にない事だから、それを理由にレジスタンスに入る程の情熱は抱けない。だけれど色々な人の話しを聞いて、暗黒王の支配するこの国は余り平和ではなさそうだから、いずれ誰かが倒すべきなのかも知れないとは考えるし、自分自身、大人になればレジスタンスに入るかも知れないとも思う。でも、それはあくまで大人になってからの話しで、メルメルには今すぐにどうこうとまでは考えられないのだ。

だから――トンフィーがもしかしたらすぐにもレジスタンスに入るかも知れないと考えると、置いてけぼりを食ってしまいそうでドキドキしてしまうのだ。

「……ハハッ！」

メルメルと同じように、黙って二人のやりとりを見つめていたラインが急に笑って、皆驚いてそちらを見た。

「――同じような事を言っていた」

「え？」

メルメルは首を傾げてラインを見上げる。青い瞳がキラキラと輝いていて、何かを吹っ切ったような晴れやかな顔をしていた。

「昔――当時はとても若かったし、私は大臣になるべきかどうかを

迷った事があるんだ。フフッ……。その時、さっきトンフィーが言っていた事と同じような事を言っていた。――皆がお前を選んだのだから仕方ない。我慢して嫌がらずに大臣になるべきだ。――と言われた」

やけに楽しそうなラインを、トンフィーは不思議そうに見つめた。

「一体、誰に？」

「お前の母に」

「！　か、母さんに……」

トンフィーは目を見開いた。

「お前の母――ソフィーにはいつも助けられてばかりいた。私が悩みや苦しみを打ち明けられる相手は、いつもソフィーだけだった……」

――私達兵士は、指揮官に自分の命を預けて戦うんだよ？　せめてその命を預ける相手位選ばせてもらいたいね！　だからライン……。あんたは大臣にならなくちゃ駄目なのさ。

ラインはトンフィーの方を向いていたが、瞳はその姿を映してはいなかった。トンフィーの顔と重なって見えている別人の、それでいてよく似た面差しの女性を見ていた。

「母さんは、どんな戦士だったんですか？」

「――とても強い魔法戦士だった。赤軍の中でも、魔法では右に出る者がいない程だった」

「弓の腕も一流だったわ」

ペッコリーナ先生の言葉に、ラインはこくりと頷いた。

「そうだったな。ソフィーはペッコリーナの一番弟子だった」

「そうなんですか？」

「そうよ……。師匠の腕をしのぐ程の名アーチャーだったわ。困った事に、練習を抜け出す腕も超一流だったけれどね。フフフ……」

ペッコリーナ先生の笑顔は少し寂しげで、メルメルはなんだか切

なくなってしまった。
「僕は母さんに――よく、ラインさんの話を聞かされていたんです」
「そうなのか？」珍しくラインは少し驚いたようだった。
「その時は誰の話か分からなかったんだけど、今思えばきっとラインさんの事だったんだなって思うんだ……。母さん、心を許した友がいるって。今は遠く離れているけど、心はしっかり繋がっているんだって言っていた。若いときは、その女性とライバルのように競いあったりもしたんだって。だけれど、その人はとても優秀で、母さんはほとんど勝てた事がなかったって。――あ、でも、料理の腕だけは母さんの方が上だったって言ってたな」
「フッ……。そんな事はない。彼女はとても優れた女性だった。料理だけでなく、何をやっても勝てなかったのは私の方だ。明るくて、優しくて、真っ直ぐで、誰もが彼女を――愛していた」
トンフィーは俯いて、アケを抱きしめている手に力を込めたので、アケが少し苦しそうに「ミニャー！」と鳴いた。
メルメルはいよいよ切ない気持ちになって後ろを見上げた。ラインは目を閉じて、遠い日に思いを馳せているようだった。
「トンフィー……。お前が、――お前が生まれた日のソフィーの喜び様を、私は今でも覚えている……」
「僕が、生まれた日？」トンフィーは驚いて顔を上げた。
――すごいよライン！　今日は何て素晴らしい日なんだ！
――こらこらソフィー……。余り興奮するなと医者からも言われて――
――だってこんな凄い事は他にないよ。私の中から、新しい命が生まれてきたんだよ！
――ハハッ！　良かった……。良かったなソフィー。
――そうだライン、あんたもすぐに子供を生みな！
――えっ？
――あんたの中から新しい命が生まれてくるなんて、それこそ素

晴らしいじゃないか！　さあさあ、早く生んでおくれ！
――そ、そんな事言っても――私はまだ相手もいないんだぞ。
――何を呑気な事言ってんだい！　相手なんて――なんなら私の旦那を貸してあげるから、とにかく早く生みな！
――そ、そんなむちゃくちゃな……。
――あ～、早くラインの子供をみたいな～。……そうだ！　女の子なら私の息子の嫁にしよう！　――いっ、いててて……。
――ほら！　だから言っただろうが……。

「フフフ……」
「ラインさん？」
やけに嬉しそうに笑っているラインを、メルメルは首を傾げて見上げた。すると、その顔がふと、急に真面目なものに変わった。
「私はいずれ、ソフィーを打たねばならないと思う」

「――！」

「ら、ライン！」ペッコリーナ先生が悲鳴のような声を上げた。

「ソフィーは――ソフィーだけではなく、私もそうだが、戦士とは常に死を覚悟しているものだ。死ぬ事が恐ろしくない訳ではない。だが、志の為なら死をも厭わずに戦うものなのだ。むしろ死よりも恐いのは、自らの志を貫けない事だ。……だから、私は友としてソフィーを――打ってやらねばならないと思っている」

いつも表情の乏しいラインの顔が激しく歪んで、その心の苦しみがメルメルに伝わってきた。ペッコリーナ先生も、それ以上ラインを止めるような事は言わなかった。彼女もまた、かつては戦いの中に身を置いていた事がある。ラインの言うことはもっともだと感じていたのだ。

何とも言えない静寂がしばらく続いて、メルメルはお尻をもぞもぞさせた。トンフィーの様子も気になるし（だけどメルメルには上手に慰められる言葉が思いつかないんだ）親友を打つと心に誓ったラインの様子も気になる。何か言わなくちゃと思うけれど良い言葉が出てこなくて、メルメルは更にお尻をもぞもぞさせた。

（……そうだ！　こんな時は――）

「ググッと♪――」

ヒュ～、ヒュロロロ～♪

皆を励まそうといつもの歌を歌い始めようとした――その時。後ろから、何とも言えない美しい音色が聞こえてきて、メルメルは思わず後ろを振り仰いだ。

ヒュロロロ～♪　ヒュ～ヒュロヒュ～ヒュロロ～♪

「きれい……」

ラインが吹いているのは細長く変わった形の笛で、メルメルが初めて見る物だった。奏でているのは聞いた事のあるようなメロディーだが、メルメルには何の曲だか思い出せなかった。しかし、そのとても澄んだ音色の美しさに思わずウットリと目を閉じる。トンフィーの後ろで、ペッコリーナ先生がほうっと溜め息を吐いた。

「『リリーの涙』ね……」

「――ああ。まだ習ってはいないけれど、音楽の教科書にたしか載ってましたよね」

「さすがトンフィーね。その通りよ。とても美しいメロディーでしょう？　だけど、この曲にはとても悲しい歌詞がついているの……。ある国のお姫様が、隣の国の兵士と恋をするのだけれど――」

そこで一旦言葉を区切り、ペッコリーナ先生はラインの笛の音に耳を傾けた。

「ああ～愛しいあなた～♪」

突然、ラインの笛に合わせるようにペッコリーナ先生が歌い始めて、メルメルとトンフィーは目を丸くした。そんな二人にはお構いなしでペッコリーナ先生は歌い続ける。

「思い通わせようとも～♪　結ばれぬさだめ～えぇ～、遠い空の下～私に許されるのは～あなたを思い涙流す事だ～～けぇえ～♪」

声自体は透明感があり、なかなかどうして美しいとは思うのだが、いかんせん音程がひどかった。完全に笛の音を無視して、独自の曲を作りだしてしまっていた。それでも満足そうな顔のペッコリーナ先生を見て、メルメルとトンフィーは仕方なくパチパチと小さく手を叩いた。ペッコリーナ先生は嬉しそうにお辞儀をする。

「フフフ。ご静聴ありがとうございました」

「う、うん。ペッコリーナ先生の歌も素敵だったわ……。それにしても――ラインさんとっても素晴らしい音色だったわ！　何て言う楽器なの？　初めて見たわ！」

「ヌカーという楽器だ。私の生まれ育った辺りではこの笛に合わせて、歌い手がミュージカルのように歌いながら踊るんだ」

音楽が大好きなメルメルは目を輝かせた。「素敵……。他の曲も聞きたいわ！」

期待満々で見つめられて、ラインは困ったように頭を掻いた。

「いや……。すまないが、私はこの曲以外に吹けるものがないんだ。そもそも、私は音楽のセンスが全くなくて、この曲も必死で練習してようやく吹けるようになったんだ」

「そうなの？　でも、とっても上手だったわ！」

「――そうか？」ラインは少し照れくさそうに笑った。

「そういえばそうね。ラインは昔からこの曲以外吹かないわね」

「吹かないんじゃなくて、吹けないんだ。この曲だって、今でこそまともに吹けるようになったが、最初はあまりにも上手くいかなくて、思わず笛を真っ二つに切ってやろうかと思った程だ。大体、音楽というのは私のようながさつな人間には合わないんだ……。剣を振るう方がよっぽど気楽だ」

眉間にシワを作って、いかにも嫌そうに首を横に振るラインを見て、メルメルは首を傾げた。

（それ程苦手なら、何故そんなに一生懸命練習したのかしら？　……ラインさんはよっぽど――）

「ラインさんはよっぽど『リリーの涙』が好きなんですね」

メルメルの心を代弁するように、トンフィーがニコニコと言った。

「私が――と言うより、私の弟が好きなんだ。弟は音楽がとても好きで――この曲も、弟に教えてもらったんだ」

「そうなんですか。でも、良い曲ですよね！　――少し寂しい感じがするけども」

「そうだな……。これは――とても悲しい恋の歌なんだ」

「悲しい恋の歌？」

どことなく顔も寂しげにラインが呟き、メルメルは首を傾げた。

「――とある国の兵士『レスクール』が、隣の国の姫『リリー』と

出会い、恋に落ちてしまう。しかし、お互いの国は実は対立していて、密かに逢瀬を重ねていた二人の中はやがて周囲の人間に知られ、愛し合う二人は引き裂かれてしまうんだ。自国の城に閉じ込められる様にされた『リリー』は、毎日愛する隣の国の兵士『レスクール』を思って涙を流す。そして――ある日、周りの目を盗み密かに会いにやってきた『レスクール』と幸せな再開を果たすのだが……」

ラインはそこで一旦言葉を切ってしまったので、すっかり話に引き込まれていたメルメルは、つい体をグッと乗り出した。

「……果たすのだが？」

「姫の側の臣下に見つかって、レスクールは殺されてしまうんだ」

「そんな……」メルメルはがっくりと肩を落とし、瞳を潤ませた。

「かわいそう……」

「め、メルメル、これはただの歌だから……」

今にも泣き出しそうなメルメルを慰めようと、トンフィーが慌てて言った。それでもメルメルが鼻をぐしゅぐしゅとすすっていると、再び後ろから素晴らしい笛の音が聞こえてきた。振り仰ぐと、フワリと風に髪をなびかせ、夕焼け色に染まったラインが、目を瞑りながら笛を吹いていた。

（……とってもきれい）

メルメルは思わずウットリして、出来ればペッコリーナ先生が歌い出さないといいな、と思ってしまったのだった。

カルバトの塔　7

すっかり日が沈んで、辺りは闇に包まれ、ワーチャの大欠伸はいつの間にか寝息に変わってしまっていた。あまりにも幸せそうな顔で寝ているから、道案内の事が少しだけ気になったが（でも、どうせメルメルはカルバトの塔を見なきゃ、気が済まなくなってるに違いないんだ）結局そのまま寝かせてあげる事にした。

闇に包まれると言っても、雲一つなく、澄んだ夜空にはぽっかりと月が浮かんでいて、幾千万の星も輝いていた。メルメル達が進んでいるのは道も無い様な森の中だが、それ程木が密集しているわけではないので、月明かりだけでも十分足元は照らし出されていた。そうして、かれこれラインの言っていた半時程経ったな、とメルメルが思っていると、おもむろに馬の足が止まった。

「見えたな……。カルバトの塔だ」

「……え？」

前方を見たが、それらしい建物などどこにも無い。たずねるように後ろを振り仰いだが、ラインはメルメルと同じように前を向いているだけだ。

「どこ……？」

もう一度前を向いて目を凝らす。なだらかな上り坂が続いており、それが途切れた先には木々の隙間から星空が覗いている。

「……あ」

しかし、良く見ると坂の終わりの地平線と輝く星空の間に、四角く切り取ったような暗い空間がある事にメルメルは気付いた。

「やっぱり……。僕らの選択は間違ってなさそうだ」

「何か見えるのか？」

「明かりがいくつか見えます。おそらく松明か何か――わずかに動いている。見張りかな……」

横に並んだ馬上から、トンフィーが目を凝らすように前方を見て

言った。メルメルはトンフィーの真似をして目を凝らして四角く切り取られた暗闇を睨んだが、明かりなど全く見えなかった。あの暗闇がカルバトの塔なら、まだまだ距離がある。大体、メルメルには塔かどうかの判断もつかないのだ。

「確かに……。松明の灯りね。ここから見えるのは一、二……三っつね。行ったり来たりを繰り返しているから、冒険者やら盗賊やらっていう事はなさそうよ。トンフィーの言う通り見張りだと思うわ。どうやら――私達の勝ちね」

つまり、プラムじいさんはミデルではなく、カルバトの塔にいる勝算が高くなったということだ。今まで空だったはずのカルバトの塔に、まだ何者かははっきりしていないとはいえ、見張りを立てる程しっかりと腰を据えて住み着いている連中がいるのだ。トンフィーが言っていたように、カルバトの塔がプラムじいさんを閉じ込め、敵を迎え撃つのに最適だとすれば、その住み着いている連中とはやはり闇の軍隊なのだろうと容易に想像がついた。

（――あそこにおじいちゃんがいる）

その確信が強くなって、メルメルが興奮してきて拳をぎゅっと握り締めた、その時、

バサバサバサ！

突然の羽音に、メルメルの心臓が一気に跳ね上がった。

「――ウォッチ！」

空から猛スピードでウォッチが降りてきて、ラインの肩にピタッととまった。

「使いか……？」

ラインは、ウォッチの細い足につけられた小さなロケットをカチリと外し、その中から紙を取り出した。全員が、ある確信を持ってそれを見守る。数秒だけ紙に目を向け、ラインはすぐ顔を上げた。

「ミデルは――もぬけの空だそうだ」

しばらく無言で、それぞれが物思いに耽る。
（ついに――ついに来たわ！　おじいちゃん……）
メルメルは顎を上げ前方の暗闇を見据える。思わず走り寄りたいような気持ちに駆られたが、残念ながら馬の手綱を持っているのはラインだし、まだ乗り込むには早い事くらい興奮したメルメルにも判断がついた。
「二人が追い付くまで、もう少しだけ近付いて様子を見てみましょうか？」
顎に指を当てながらペッコリーナ先生が言うと、ラインは同意するようにコクリと頷いた。
「そうだな。中の様子までは分からないにしろ、入り口の守りがどうなっているかくらいは見えるかも知れない」
言いながらラインはゆっくりと馬を進める。
「二人が追い付くのに、どのくらいかかるかしら？」
はやる気持ちで尋ねると、そんなメルメルの気持ちを察して、ラインはふと微笑んだ。
「大丈夫だ。そんなに長くはかからないだろう。あの分かれ道からミデルまではこちらの半分の時間もかからない筈だ。手紙には、直ぐに引き返してこちらに向かうと書いてあったから、そうだな……一時間もかからずに合流出来るだろう」
「グッターハイムなんて遅れを取り戻す為に必死で駆けて来るだろうから、もっとうんと早いかも知れないわよ」
ペッコリーナ先生がいたずら顔でウィンクした。確かに、グッターハイムの悔しそうな顔が目に浮かぶようだ。
「ニレとグッターハイムが来れば――大丈夫かしら？」
段々と近づくにしたがって、カルバトの塔らしき暗闇は少しずつその様相を明らかにし始めていた。距離感が掴めない為にはっきりとは分からないが、どうやらメルメルの想像よりもずっと大きく感じる。闇夜に不気味に佇む姿は、何とも言えずに不安を煽った。
「敵の全容が分からないから、大丈夫だと言い切る事は出来ないが

……。まぁ、敵を全滅させるわけではないからな。要はプラムを取り戻す事が出来さえすれば良い。それなら少人数でも何とかなる」

「六人でも平気？」

ちゃっかり自分とトンフィーを頭数に入れながら、メルメルが不安げに聞くと、ラインは安心させるように少し笑った。

「戦争するには頼りないが、こっそり忍び込むには丁度いい」

「そっか。――なるほど！」

「――でも、ミデルがもぬけの空ということは、全ての兵がこちらに移動したと考えられます。……ミデルは僕らの町よりもずっと大きな街だ。それを制圧していたとなると、かなりの数が予想される」

「確かに」ラインはトンフィーの顔を見ながら頷いた。

「本当にこっそり忍び込むくらいじゃないと……。全ては相手に出来ませんよ」

ラインは深刻な表情で頷いた。メルメルとトンフィーがちょっと不安な気持ちになって、頼りなげな顔をして黙り込んだのを見て、ペッコリーナ先生が雰囲気を変えようと明るい声を出した。

「忍び込むにしても――いえ、忍び込むなら尚更、敵の様子を良く探らないとね！　ほら……。大分近付いて来たわよ」

ペッコリーナ先生が前方を指差す。それにつられて前を向くと、いつの間にかカルバトの塔は、もう見上げる程近い場所まで来ていて、メルメルは一瞬ドキリとした。建物には窓のような物が見えないが、外廊下の様な物がいくつか付いている様で、そこをぼんやりとした赤い光が生き来している。しかしそれが、トンフィーの言うように見張りが手にしている松明の明かりなのかどうかまでは分からない。塔までは、まだその程度には距離があるし、向こうからは、何の明かりも手にしていないメルメル達の事は全く見えていないだろう。

「ここからだと、あまり良く見えないですね」

「そうね……。木が邪魔だわ。だからといって、さすがにこれ以上近付いては危険だわね」

二人の言う通りだった。先程より大分木々が濃くなってきているし、逆に近付いたせいで、今の場所からは塔の一部、しかも上の方しか見えず、入口がどうなっているかも見えない。

「ライン、少し左か右に移動して見る？」

ペッコリーナ先生に問われて、皆と同じように塔を見上げていたラインは少し考えるように首を傾げる。

「……ふむ」すると、何故かラインはおもむろに馬を下りた。

「ラインさん？」

残りの三人が首を傾げていると、ラインは何かを探すように木の上を見上げて、周囲をウロウロと歩き始めた。

「どうしたのよライン？」ペッコリーナ先生が声をかけた、次の瞬間、「あら！」

ラインはえいやっとジャンプして、太い樫の木の一番下の枝に手を掛けると、フワッと自らの体を持ち上げ枝の上に立った。

「――上から少し見てみよう」

三人がぽかんとしているなか、待っていてくれと言い残し、どんどん上へ登って行って、あっという間にその姿が見えなくなってしまった。

「うわ～……」

トンフィーが、その身体能力に呆れて、ラインが消えた木をぽかんと見上げていると、メルメルが、よ～しと気合いを入れるように言って馬から飛び降りた。

「め、メルメル、まさか――」「登る気なの？　届かないわよ……」

メルメルはラインの登って行った木を見上げている。しかし、例えジャンプしたとしても一番下の枝には手が届きそうにない。ペッコリーナ先生が、さすがに諦めるのかと思いきや、メルメルはおもむろに少し離れた隣の木に飛びついた。そして――先程のラインと同じようにどんどん上へと登って行く。しかしその木はラインの登って行った木よりも全然背が低く、おそらく上へ登っても、あまり見晴らしが良いようには見えなかった。

二人が首を傾げて見守っていると、メルメルは突然、途中に生えている太い枝の上を歩き始めた。端まで行き前方を見つめる。

「ま、まさか……！」メルメルの見つめる先を見て、トンフィーは顔を青くした。

メルメルの立っている枝に向かって、ラインが登って行った木からも太い枝が伸びてきていた。しかしその枝と枝の間は、ゆうに二メートルはあるのだ。

「め、メルメル！　駄目よ！」

ペッコリーナ先生が真っ青になって叫んだ。メルメルの場所から地面までは十メートル以上あった。トンフィーはゴクリと唾を飲んだ。

「駄目よメルメル！　降りて――」

ペッコリーナ先生の制止が効いたのか、メルメルは枝の付け根に戻るように歩き出した。二人がホッと胸をなで下ろした、次の瞬間。メルメルはクルリと向きを変え、枝の先へと走り出した。

「あぁ！　わわわ～～！」

慌てふためいている二人の目の前で、メルメルはぴょ～んと飛び上がり、隣の木の枝へと降り立った。下で、ハ～っと息をはいている二人に向かって誇らしげにブイサインをする。その姿を見て、トンフィーはホッとして、思わず笑った。

「――何がピースよ、まったく！　降りてきたらお仕置きよ！」

安心して怒りが湧いてきたペッコリーナ先生にも気付かないで、メルメルはもう二人から見えなくなる高さまで登ってしまっていた。

ラインはこんもりと茂った葉の隙間から上半身を出して、前方にそびえ立つ――おそらくはこの地方最大の建築物であろう――その塔を見上げていた。訪れた事が三度あり、塔の内部に入った事が二度ほどある。しかし、最上階まで上がった事は無く、いずれも二階にある外廊下から塔の周りを見渡しただけで去ってしまっていた。

「こんな事なら、もっと中を見ておくんだったな……」

一人呟くが、勿論こんな木の上では誰の返事もなく、風で葉と葉がこすれ合う音がサワサワと聞こえてくるばかりだ。そうして、軽くでも風が吹くと、こんな木の上は少し肌寒く、むき出しになった腕が徐々に冷え始めているのを感じた。

さて、そろそろ降りようかとラインが思った、その時、

「ぷはっ！」

「メルメル！」

葉の茂みの中からメルメルが顔を出して、ラインは目を丸くした。

「来ちゃった」

ニッコリと笑ったメルメルを、ラインは半ば呆れながら眺めた。

「――とんだおてんばだな、メルメルは……。これはペッコリーナの苦労が伺える」

「ラインさんだって。――ねぇ、何か見える？　うわ～！　おっきい……」

言いながら、メルメルは前方の塔を見上げて、興奮した声を出している。

「メルメルは、こんなに大きな建物を見るのは初めてか？」

「もちろん！　だって、ワタシの町で一番大きな建物は、大工の親方が作った三階建のお家なのよ？　この塔は親方の家の――そうね……。五倍くらいありそうだわ！」

「なるほど。フフフ……。それじゃあ驚くのも無理は無い」

「ラインさんは、他にもこんなに大きな建物を見た事があるの？」

「ん？　ああ……」ラインはカルバトの塔を見上げた。「ハルバルートの城はこれよりも大きかったな。それに、他にもこれより高い建物をいくつか見た事がある」

「ほ、ほんとに？　うへぇ～……」メルメルは改めてカルバトの塔を見上げた。

他にもたくさんこれより大きな建物が存在する。しかも、こんな大きな塔よりも、更に大きなお城があると言うのだ。メルメルは急に自分がとても小さな生き物になった気がして、少しだけ心細くなった。

「世の中って広いのね……」

「クックック」

メルメルの妙に大人ぶったような言い方がおかしくて、ラインは肩を揺らして笑っている。そんなラインを横目でちらりと見てから、メルメルはもう一度カルバトの塔を見上げた。

「そうだ。こんな大きな建物なら、敵に見つからずに、こっそりおじいちゃんを助け出す事も、案外簡単にいくんじゃないかしら？」

「……中に入ってしまえば、あるいはな。だが――見てごらん」

ラインが塔の下の方を指差して、メルメルは目を丸くした。カルバトの塔のあまりの大きさに驚いて、上ばかり見上げていたから気が付かなかったが、塔の周りはぐるりと大きな広場になっており、

そこに豆粒のように人がひしめきあっていたのだ。
「あ、あれって悪魔の兵隊？」
「そうだ。およそ――三百はいるな」
「うへぇ～」メルメルは思わず情けない声を出した。
良く目をこらすと、やけに豆粒がたくさん集まって黒くなっている場所がある。あの辺りに入口があるのかも知れない。
「あんなんじゃ忍び込むどころか、中に入る事も出来そうにないわ……。まさか、あんなに数がいるとは思わなかった」
メルメルはがっくりと肩を落とした。
「まぁ、そう落ち込む事はない。下に降りて、じっくりペッコリーナやトンフィーと作戦を練ろう」
励ますように言って、ラインはメルメルの肩を叩いた。しかしメルメルは、相変わらず不安な面持ちで塔の下を見下ろしている。
「いざとなったらグッターハイムあたりを囮に敵を惹きつけて、その間に我々が中に入るって手もある」
ラインは軽い口調で、何気なくひどい事を言いながらとっとと木を降り始めた。メルメルは目の玉を上にすると、ラインの言葉を反すうして、ぽんっと手を打った。
「な～るほど！　……ちょっと可哀想だけれど、いいアイデアだわ！」
「メルメルー！　行くぞー！」
ラインの声は既に大分下から聞こえる。
「は～い！」
メルメルが下に向かって生返事をして、最後にもう一度と塔を見上げた、その時、

バサバサバサバサ！

「キェ～！」「キャー！」
羽音と共に突風が吹き、メルメルは体が傾くのを踏ん張ってなん

とか堪える。しかし――次の瞬間、背中に激痛が走り、体がフワリと浮くのを感じた。

「――メルメル！」

「ラインさーーーん！」

ラインがものすごい早さで元の位置まで木を登って来たが、メルメルはすでに手の届かない場所まで連れ去られてしまっていた。

「それ」は、鋭い鍵爪でメルメルをしっかりと掴んではいるが、どうやらその重さに耐えられる力が無い様で、カルバトの塔に向かって半ば落ちるように飛んで行った。

一見、巨大なハゲタカのようにも見えるが、ウロコのような長い尾が生えていて、直ぐに尋常ならざる生き物である事が分かる。月明かりに一瞬、その首輪がキラリと光った。

不気味な後ろ姿を睨み付けて、ラインはギリリと歯噛みした。

「メルメルーーー！　――くそっ！」

木の下では、手綱を握る者のいなくなってしまった馬が、自由に歩き回って辺りの草をついばんでいた。その馬上では茶トラの猫が二匹、ぼんやりと主の消えていった木を見上げている。

特にやる事も無くて退屈なトンフィーは、そんな二匹を、更にぼんやりと眺めていた。後ろでスヤスヤ寝息をたてているペッコリーナ先生の、背中に寄りかかってくる重みがだんだんと増してきているし、腕の中では、こちらも気持ち良さそうにアケが寝息をたてている。そんなアケの頭を撫でながら、トンフィー自身も少しずつ瞼が重くなってしまってきていた。そうして——いよいよ瞼が落ちかかった、その時。

突然、見つめていたミミの耳がピクピクンと激しく動いた。

トンフィーが驚いて目をパッチと開くと、ミミは勢いよく立ち上がり、カルバトの塔に向かって脱兎のごとく走り出した。その後をシバが慌てたように追い駆けて、あっという間に二匹は走り去ってしまったのだ。トンフィーは目だけでなく、口もぽっかりと開けてそれを見送った。

「い、一体どうしたんだろ……。二匹ともなんだって急に——」

バザザザザザザザザーーー！

「うわ〜！」

突然、今度は木の上から何かが目の前に降ってきて、トンフィーは思わず両手で頭を抱え込んだ。

「な、何？　——ら、ライン！」

トンフィーの悲鳴に目を覚ましたペッコリーナ先生が、落ちるような勢いで木の上から駆け降りてきたラインにたまげて、目を見開いた。

「メルメルがさらわれた！　例のハゲタカもどきだ――先に行くぞペッコリーナ！」
　ラインは叫びながら、既にカルバトの塔に向けて走り出している。残された二人は一瞬ぽかんとした。
「さらわれ……た？」
　その言葉をはんすうして、ようやく二人の眠気は完全に吹っ飛んでしまった。
「メルメルが……ハゲタカもどきにさらわれた！　――た、大変だ！」
　トンフィーが叫ぶと、ペッコリーナ先生は年に見合わない素早さで馬の手綱を握り、勢いよくその腹を蹴った。
「行くわよトンフィー！」
　思わずトンフィーは空の彼方を見上げたが、メルメルを抱えて飛翔するハゲタカもどきの姿は全く見えなかった。代わりに見えているのは、不安を余計に煽るように不気味に佇み、少しずつ近づいてくるカルバトの塔だけだった。

――まったく！　なんという失態だ、大馬鹿者め！
　ラインは、胸の中で自分自身に向かって毒づいた。飛び去るハゲタカもどきに抱えられたメルメルの姿が目の裏に浮かぶ。
「――スリッフィーナ！」
　人の足とは思えないような猛スピードで走りながら、ラインは声を張り上げた。
「スリッフィーナ！」
　二度目に声を張り上げた、その時。後ろから獣の走り寄る足音が聞こえて、ラインは前方に大きく飛び上がった。体が落下し始めると同時に、固く温かみのある背中を両足の間に感じた。
「頼む……。急いでくれ」
　赤い毛並みを一撫ですると、ぐんっとスピードが上がったのが分かった。ラインはそれを確かめて、スラリと左右の腰にぶら下げた

剣を抜く。

その者は、かつてハルバルートの城の門番をしていた。

彼は十一年前のある日、押し寄せる闇の軍隊に飲まれるように、一瞬にしてその命を落としてしまった。その後彼は、ある者によって胸に命の石を埋め込まれ、再びこの世に舞い戻ってきたのだ。

喜び、悲しみ、痛み、温かさ、冷たさ。

それらの物が彼に残っているのかは、彼自身にも分からない。ただ、今の彼にある明確な感情は、依存心だけだ。自らに命の石を埋め込んだ主の命令にだけは、絶対に従わなければいけない。――というよりも、従いたいという強い気持ちがあるのだ。

そうして、その主が命じるままに、このカルバトの塔へとやって来て、毎日他の兵隊と共に不審な者が来ないか入口辺りをウロウロしている。ここに来てからこれまでの間は何事もなく過ごしてきた。

――いや。

一度だけ、彼はキジ虎の猫を見つけて報告した事がある。

言葉を喋る事の出来ない彼は、隊長の袖を引き猫の見える場所まで連れて行ったのだ。塔の入口で欠伸をしている猫を見た途端に、隊長は真っ赤になって怒鳴り（隊長は普通の人なので、怒鳴る事も怒ることも出来たんだ）彼を殴り飛ばした。彼は口の中を切ってしまい、血の代わりに白い液体を飛び散らせたが、特に痛みはなかった。

それからは何事もなく――彼には退屈だと感じる心もなかったので――どうという事もなく過ごしていたが、つい先ほど、空の彼方からハゲタカもどきに抱えられた小さな子供がやって来て塔の中へと飛び込んで以来、何だか周りがやけにざわついていた。小隊長達が集まって、何事か話し合っているようだ。そんな様子にも勿論無関心な彼は、何とはなしに塔をぐるりと囲んだ森の方を見つめていた。そして――、

最初それに気付いたのは、やはり彼だった。

森の奥から現れた時、遠目だったせいもあるが、彼はそれを一頭の赤い獣だと思った。ただ、恐ろしい程のスピードでその姿が大きくなり、あっという間に目の前まで来た時は、それが獣にまたがった人間なのだという事が分かった。しかし、分かった同時に、彼の胸は深々と剣で刺し抜かれ、青く光る石ごと、彼のかりそめの命は壊れて——終わってしまった。

カルバトの塔　１０

パカラッ、パカラッ、パカラッ！

疾走する馬の背中は激しく揺れて、とてもじゃないが心地良いとは言えず、乗馬も得意では無い（と、言うよりは大の苦手なんだ）トンフィーは、何とか振り落とされないように必死でそのたてがみを掴んでいた。

（――メルメル！）

風圧の為か、感情の高ぶりの為か、トンフィーの目尻には涙が浮かんできていた。霞む目を無理やり開いて前方を見ると、まるで闇の中にぼんやりと浮かぶようにように、カルバトの塔は目の前に迫ってきていた。それと同時に、むせかえるような生臭い風が前方から吹きつけてくる。手綱を握っているペッコリーナ先生の手に、ぐっと力が入った。

「もうすぐ着くわよ……。伏せていなさい、トンフィー！」

言われるがままにトンフィーは体を伏せる。それで仕方なく下を見ていると、びっしりと生えていた草が急に消え失せて、地面が赤色の乾いた土に変わった。感覚的に開けた場所に出た事に気付いて、トンフィーは懸命に体を横にずらし、顔だけ上げて前を向いた。

「――！」

遠目だが、たくさんの悪魔の兵隊が見える。――しかし、何故だか皆、こちらに背中を向けて塔の方に向かって行っているようだ。そちらに、何かあるのだろうか？

ペッコリーナ先生は背中から矢を取り出し、素早く弓を構えた。塔には入口とおぼしき重厚な扉があり、悪魔の兵隊はそちらを目指すように集まっている。扉の左右には、大きな銅像が立っていて、銅像は上から下まで見事な甲冑をつけた兵士の姿を模っており、空に向かって高々と剣を掲げていた。

「ら、ライン！　もうあんな所に……」

銅像の足元を見ると、周りの悪魔の兵隊を跳ね飛ばすように動き回る赤い影があって、ペッコリーナ先生は目を丸くした。こちらからそこまでは、まだ百メートル近くある。これだけの数の敵を薙払いながら、あそこまで辿り着くのは容易な事じゃなさそうだ。

「く、来る……！」

背を向けていた兵隊の一人がクルリと振り返って、どうやらトンフィー達存在に気付いてしまったようだ。――慌てたように近づいて来る。周りにいた兵隊もそれに習うように立ち向かってきて、トンフィーは顔色を無くした。ところが、横並びにこちらに向かって来ていた兵隊達の胸に、突如矢が突き刺さり、皆その場に倒れて動かなくなってしまった。体を伏せたまま顔だけで後ろを振り返ると、ペッコリーナ先生が猛スピードで矢を放っていて、トンフィーは目を輝かせた。

「まったく……。切りがないわね！」

どんなに倒しても、次から次へと立ち向かってくる悪魔の兵隊に、ペッコリーナ先生はイライラとした声を出した。休みなく矢を放ち続けながら、ルルル～ラララ～と呪文を唱える。

「――火の針よ！」

叫び声と共に、悪魔の兵隊めがけて無数の針が飛んでいき、五、六人がいっぺんに倒れた。兵隊達は、針の刺さった場所から火を吹き出させて、辺りをのた打ち回っている。ペッコリーナ先生は呪文と矢を放ち続けながら、徐々に入口へと馬を進めて行った。

その姿をチラリと横目で見つつ、ラインは入口の扉に手をかけた。

ヒュ～～……パス！

余裕を持ってかわしたものの、先ほどまで自分の立っていた場所に深々と突き刺さった矢を見て、ラインはギロリと上を見上げた。

パス！　パスパスパスパス！　ヒュ～～パス！

次々と放たれる矢を、身軽な体で踊るように避けながら、ラインは頭の中で、――厄介だな、と呟いた。

先ほど、二階の外廊下に、弓を構えた兵隊達が並んでいるのが見えた。まさかペッコリーナ先生のようなすごい矢を打ってくる事はないだろうが、切りが無く沸き出てくる兵隊を薙払いながら矢を避けるのは、ラインには多少厄介な事に思えた。ところが、少し扉から離れると矢を打つ手が止まってしまった。――なるほど。中に入るのを阻止するように指示されているのだろう。

ラインは立ち向かって来る悪魔の兵隊に斬りかかりながら、チラリと二階の兵隊を見て、次いで、扉の横に置かれた大きな銅像、それからラインから少し離れた所で敵を蹴散らしているスリッフィーナに視線を移した。

「スリッフィーナ！」

呼びかけると、長年連れ添った赤毛の豹は耳を立ててラインを見た。「行けないか？」大声で問い掛けながら二階の兵隊を見る。

ラインの視線を追って、スリッフィーナも弓を構えた兵隊をじっと見つめた。そして襲いかかって来た兵隊の心臓を鋭い爪で深くえぐると身を翻し、ラインの真横をスルリと抜けて、伸び上がるようにジャンプした。

まずは銅像の台座部分に足をかけ、二度目のジャンプで銅像の腕を蹴り上げ、最後に頭の上を器用に使って飛び上がった。二階の兵隊達は唖然としていたが、このままだとこちらに来ると気付いて、慌てて弓を構えた。しかし、スリッフィーナは二階に飛び込むと同時に数人の兵隊をなぎ倒し、残りもほとんど一瞬で倒してしまったようだった。

一階から見守っていたラインは、弓を構えた兵隊がいなくなった事を確認し、再び扉に手をかけた。思いの外あっさり開いてしまって、少し警戒しつつも中に体を滑り込ませる。

ラインが塔の中に入るのを見て、ペッコリーナ先生はいささか安

心した。
――彼女なら、メルメルを助け出してくれるだろう。
勿論、自分も直ぐに後を追うつもりだ。しかし余りの敵の数に前へと進むのが容易では無い。
「ルルル～ラララ～、――火の息よ！」
ペッコリーナ先生がふうっと息を吐くと、その口から炎が勢いよく吹き出して、目の前に群がっていた悪魔の兵隊達が燃え上がり、一気に道が開けた。燃え盛る悪魔の兵隊を跨ぎ越しながらじりじりと馬を進める。
ところが、扉までわずか十メートルの所でアクシデントが起きた。燃えてプスプスと音を上げている悪魔の兵隊を跨ぎ越そうとした、その時、
「ぐわお～！」
突然、飛び上がるように悪魔の兵隊が起き上がった。
「うわぁぁ！」
ドサッと、トンフィーは地面に叩きつけられて、したたかにお尻を打ってしまった。
「トンフィー！」ペッコリーナ先生が真っ青になって叫ぶ。
トンフィーは一瞬何が起きたのか分からなくて、目をパチクリさせた。
「と、トンフィー……！　早く手を――」
ペッコリーナ先生が体を傾け、手を差し伸べる。それを見てトンフィーは我に帰り、慌てて起き上がった。足元を見ると、先ほど馬の上からトンフィーを引きずり落とした悪魔の兵隊は、再びプスプスと煙をあげ今にも燃え尽きようとしていた。
「さあ。早く、トンフィー……」
トンフィーはペッコリーナ先生の手を掴もうと手を伸ばす。しかし、
「お～……お～……」
兵隊達がわずか数メートルの場所まで迫ってきて、ペッコリーナ

先生は仕方なく手を引っ込めて弓を構える。
ヒュッ！　ヒュッ！　ヒュッ！　ヒュッ！
「ルルル～ラララ～、――火の針よ！」
トンフィーは、忙しく攻撃を繰り返すペッコリーナ先生を見上げ、次いで、迫り来る悪魔の兵隊を見回し、自分の力で登るしかないと気付いてぴょんぴょんと飛び上がった。しかし、何度挑戦してもトンフィーには自力で馬の上に乗る事は出来そうになかった。困ったなと、トンフィーが手の甲で汗を拭った、その瞬間、
「サンダーボール！」
「――！　水の壁よ！」
どこからか雷の玉が飛んできて、ペッコリーナ先生は慌てて魔法の壁を作り出した。

ヒヒヒヒーン！

雷の玉はトンフィー達の前に立ち塞がった水が吸い取ったが、魔法に驚いた馬が後ろ足で立ち上がり、トンフィーは思い切り跳ね飛ばされてしまった。
ペッコリーナ先生はその事に全く気付いていない。その見つめる先には、先程魔法を放ってきた張本人が倒れている。既に、こちらの放った矢によって物言わぬ姿になってしまっていた。その者はまわりにいる悪魔の兵隊と違ってまともな人間の姿をしていた。おそらくは小隊長か何かだろう。闇の軍隊の中には、勿論普通の人間もいて、それらが言葉も喋れないような悪魔の兵隊達をまとめているのだ。――それを少し悲しい瞳で見つめて、ペッコリーナ先生はようやく周囲に目を向けた。
「いててて……」「――トンフィー！」
馬に跳ね飛ばされたトンフィーは、運良く足を擦りむく程度の軽症で済んでいた。しかし、直ぐに自分が今いる場所に気付いて蒼白になった。肩がぶつかるほどの場所に、悪魔の兵隊がひしめいてい

るのだ。
「ぐわ～！」「わぁ！」
一番近くにいた悪魔の兵隊が襲いかかって来て、トンフィーは転がる様にして避ける。
「トンフィー！」
叫びながら、ペッコリーナ先生はトンフィーの周りの兵隊に矢を放つ。
「うわっ！　……わわわ！」
「トンフィー！　駄目よ！　戻りなさい！」
トンフィーは兵隊の足元を転がりながら逃げて、いつの間にかペッコリーナ先生からどんどん離れてしまっていた。ようやく少し落ち着いて周りを見れば、もう塔は目の前で入り口のすぐ手前まで来ている。
「トンフィー！　――早くこちらへ！」
ペッコリーナ先生が呼びかけるが、トンフィーは扉を見つめたまま身動きしない。
「トンフィー！」
次の瞬間、トンフィーは扉に向かって走り出した。
「トンフィー！　――まったく！　火の玉よ！」
仕方なく、ペッコリーナ先生はトンフィーを援護するように矢と魔法を放つ。
トンフィーは扉に辿り着くと、大声で叫んだ。
「先に行きます！　先生……僕、大丈夫だから！」
ペッコリーナ先生が頷くのを確認して、トンフィーは塔の中へと飛び込んだ。

カルバトの塔　11

意外にも、塔の中にはほとんど敵がいなかった。ラインは首を傾げながらも、一階の一番奥にある階段を駆けあがる。二階に辿り着くととすぐに赤い影が視界に入り、声を張り上げる。

「スリッフィーナ！」

「――ラインさん！」

「メルメル！」

良く見れば、スリッフィーナの首っ玉にメルメルが張り付いていて、ラインの姿を見つけて元気に走り寄って来た。

「メルメル！　――良かった……」

「ラインさん……グスッ……」

ラインにがっしりと抱き締められて、メルメルは堪えていた涙が少し飛び出してしまった。

「よく、無事で……」

「ミミとシバが助けてくれたの……。それに、スリッフィーナが……」

周りに目をやると、倒れて動かなくなった悪魔の兵隊が山積みになっていた。一階に敵がいなかったのはこの為かと、ラインは理解した。おそらく、ハゲタカもどきがメルメルを連れて来たのを知って、兵隊が皆ここに集まって来たのだろう。そう考えて、ラインはある事に気付いた。

「ハゲタカもどきはどうした？」

「さっきまでミミとシバが必死で戦ってくれていたんだけれど、スリッフィーナが来たらとっとと逃げてっちゃったの」

「そうか……。まぁ、とにかくメルメルが無事で何よりだ」

「ミミとシバが一生懸命守ってくれたの！　二匹とも、とっても頑張ったわ！　それに、残りの兵隊はスリッフィーナがみんなやっつけちゃったの！　スリッフィーナってビックリするくらい強いのね

！」

少し興奮ぎみに嬉しそうな顔で話すメルメル。大した怪我もなさそうな様子に、ラインは安心して微笑んだ。

「スリッフィーナもお役に立てて何よりだ。――二匹はまた変身したんだな？」

呑気に欠伸したり、後ろ足で首の辺りを掻いたりしている二匹の犬を見ながらラインが言うと、メルメルは勢いよく首を縦に振った。

「残念だな……。大事なところを見逃してしまった」

「フフフ……」

ラインがいたずらっぽく言って、メルメルが笑っていると、

「ラインさん！　――メルメル！」

「トンフィー！」

階段の下からトンフィーが現れて、メルメルの姿を認めて駆け寄って来た。

「ひぃ……ハァ……。よ、良かった……メルメル……」

顔を真っ赤にし息を切らしながらも心底安心した様子のトンフィーの首っ玉に、メルメルは両手を回し抱き付いた。

「グスッ。心配かけてごめんねトンフィー……」

再び涙目になってしまったメルメルに、トンフィーは良かった良かったと繰り返した。

ラインはそんな二人の様子を微笑ましく見ながら、さて、と呟いた。その声に、子供二人がそろって顔を向ける。

「こうなってしまったらこっそり忍び込むも何もない。私達が乗り込んで来たのは、すっかり敵に知られてしまった」

「ごめんなさい……」

しょんぼりとメルメルが言って、ラインが首を横に振った。

「別にメルメルが悪い訳じゃない。どちらかと言えば私の責任だ。軽率だったな……」

「ラインさんは悪くないわ！　ワタシが調子に乗ってついて行ったりしたから――」

「いや、それは――。……まぁ、誰が悪いなどというのは後にして、今すぐ決めなければいけない事がある」
メルメルは首を傾げる。トンフィーはすぐぴんときて、思わずゴクリと唾を飲み込んだ。
「こ、このまま――乗り込むんですね？」
「その通りだ。戻って、改めてグッターハイム達を待って作戦を練る――などという事をしている隙はない。急がなければ――」
「――おじいさんの身が、危ない」
そう言ったトンフィーを見て、ラインは頷いた。メルメルはおろおろと二人を交互に見る。
「ど、どうして？　どうしておじいちゃんが危ないの？」
「敵はもう、僕達が乗り込んで来たのを知っている。そしてそのうちに、僕らの中にレジスタンスのリーダー――つまり、グッターハイムさんがいない事は気付かれてしまう筈だ。作戦通りリーダーを呼び出せなかったと分かったら……」
「おじいちゃんを――こ、殺してしまう？」
今にも泣き出してしまいそうなメルメルに、まさかその通りだとも言えず、トンフィーは困って眉をハの字にした。
「とにかく急ごう。ぐずぐずしている場合じゃないのは確かだ」
ラインの言葉に、メルメルは涙を堪えてコクリと頷いた。
「ところで――トンフィー。ペッコリーナはどうした？」
「あ、そ、そうだ！　まだ一人下で――」
言いながらトンフィーは外廊下へと飛び出した。慌ててメルメルが後を追い、ラインもそれに続く。
下を覗き込んでトンフィーは目を見開いた。「――ペ、ペッコリーナ先生！」
入口の扉を背にして、まだペッコリーナ先生は戦い続けていた。しかし、もしかしたら先ほどより増えたんではないかと思われる程の敵に囲まれてしまっていて、トンフィーは青くなった。
「ペッコリーナ先生！」

メルメルの叫び声を聞いて、ペッコリーナ先生がそちらに顔を向ける。
「メルメル！　――無事だったのね、良かった……。ズズーッ！」
メルメルの無事な様子を見て、ペッコリーナ先生は涙声になってしまった。
「ペッコリーナ！　大丈夫か！」
「大丈夫よ！　私がここで敵を食い止めるから、あなた達は先へ進みなさい！」
ラインが頷こうとした、その時、
「キェー！」
突然、ビュー！　と空の上からまるで落ちてくる様な勢いで、巨大な影が現れた。
「ハゲタカもどきだわ！　――先生！」メルメルが悲鳴を上げた。
それは一匹ではなかった。空の彼方から次々と現れて、ペッコリーナ先生に襲いかかっていった。
「ペッコリーナ先生！」
「だ、大丈夫よ……。プラムのもとへ――早く行きなさい！」
ペッコリーナ先生はハゲタカもどきに向けて矢を放っている。しかし、じわりじわりと周りの悪魔の兵隊が距離を縮めて来ていて、メルメルは思わずギュッと拳を握り締めた。
「む、無理よ一人じゃ。先生……！」
「ルルル～ラララ～、――火の針よ！」
魔法で周りの兵隊を蹴散らしながら、空に向かって矢を放つ。休みなく攻撃を繰り返すが、空を飛ぶハゲタカもどきの数は逆に増え続け、兵隊も少しずつ距離を縮めて来ていた。
「ら、ラインさん！」「戻りましょう！」
すっかり動転したメルメルとトンフィーは大声で呼びかけるが、ラインはじっとペッコリーナ先生を見つめていて、助けに戻ろうとはしない。
「大丈夫よ！　――行きなさい！」

「行けないわ先生！　ら、ラインさん……。――ああ！」
その時、ペッコリーナ先生にハゲタカもどきが猛スピードで突っ込んでいって、メルメルもトンフィーも息を飲んだ。結局、寸前のところで射落とされはしたものの、二人はいてもたってもいられなくなってきた。
「まったく……。いくらなんでも数が多すぎるわね……」
ペッコリーナ先生がうんざりしたように呟き、改めて弓を構えた。ところが、
「……え？」「せ、先生……？」
メルメルとトンフィーはペッコリーナ先生を見て、目をパチクリさせた。何故なら、
「せ、先生ったら、矢が尽きちゃったんだわ！」
ペッコリーナ先生は弓をしっかり構えてはいる。――が、何とそれには、肝心の矢がかかっていなかったのだ。
「ああ！」その時、数匹のハゲタカもどきがいっぺんにペッコリーナ先生目掛けて突っ込んでいった。「先生！　逃げてー！」
「ピッピーーー！」
大声でペッコリーナ先生が空に向かって叫んだ。すると、

ビューーーー！

「――！」
空の彼方から白い光が猛スピードで現れ、ひゅんとメルメル達の目の前を通り過ぎ、ペッコリーナ先生の弓に、まるで矢のようにかかった。そして――ペッコリーナ先生が「それ」を打ち放った、次の瞬間、

バビュゥーーーー！

白い光が長い緒を引きながら、縦横無尽に敵の中を駆け巡った。

「あ、あれってまさか――」
「す、すごい……！」
メルメルは驚いて口をあんぐり開けたし、トンフィーは目をキラキラと輝かせ、その光景をうっとりと見つめた。
驚くほど長い間飛び回った白い光は、ようやくその勢いが衰えて来て、最後はひょろひょろと飛びながらペッコリーナ先生の元に戻って来た。
「ピーチャン！　ギニニニ……。オツカレサマ！　オツカレサマ！　イツモタスカルワ！」
「はいはい。お疲れ様ピーちゃん」
「ピッピー！」
ペッコリーナ先生の肩にとまって甘えるように頬をつついているピッピーを見て、メルメルとトンフィーは大声で叫んだ。薄々気付いてはいたが、やはりあの白い光の矢の正体はピッピーだったのだ。
「相変わらず素晴らしい必殺技だな……。――二人とも見てみろ」
ラインに言われて、周りをぐるりと見てみれば、敵の数は半分近くに減ってしまっていた。
「すご～い……」
メルメルが肝心して呟いていると、ペッコリーナ先生がこちらに向かってウィンクしてきた。
「――さあ！　ここは私に任せて、先へ進みなさい！」
三人はコクリと頷いて、踵を返した。走り去るメルメルの耳に、いつもの陽気な声が聞こえてくる。
「アーツカレタ！　マーツカレタ！　……アナタハイツモソウヤッテイイワケバッカリ！　ダカラワタシハ――グニニ！」

三階へと続く階段を駆け上がりながら、メルメルは一人悲しくなってきていた。

――おじいさんの身が危ない。トンフィーの先ほどの言葉が蘇る。考えてしまうとどんどん泣きそうになってしまうから、何とかその事を振り払って、気合いを入れるように、「よし！」と呟いた。

「どうしたのメルメル？」トンフィーが不思議そうな顔をする。

「うんうん。ワタシ……ラインさんの足を引っ張らないように、頑張って戦うわ！」

「そうだね。ぼ、僕も頑張ろ」

「フッ……。どちらかと言うと、頑張って戦うんじゃなくて、いざという時は頑張って逃げてもらいたいがな。しかし、せっかくの二人の気持ちだ――これを渡しておこう」

ラインは言いながら、手にしていた弓と矢筒をトンフィーに差し出した。

「これって、さっき――」

「一応持っておくといい。いざという時は――メルメルを守ってやるんだぞ？」

「え？　……あ、はい！」

実は先程三階へと上がる前に、ラインは倒れた兵士から弓と矢筒を拾っていたのだ。自分に渡す為だったのかと考え、そして、まったく当てにされてない訳では無いのかも知れないと思って、トンフィーは嬉しくなった。肩にやたらと力を入れながら隣を見ると、メルメルは何故かこちらを見て口を尖らしていた。

「い～な～……トンフィー」「……へ？」

羨ましそうにトンフィーが手にした弓を見つめるメルメルに、ついトンフィーは後ろ手に弓を隠してしまった。ラインは堪えられずにプッと吹き出した。

「クックックック……。どうやらおてんばメルメルは、人に守られるだけじゃご不満らしい。それじゃあ――」腰に差した短い方の剣を外し、メルメルに差し出す。「これを持っていろ」
「え！　で、でも、それじゃラインさんが――」
「私には、このカルバトの剣があるから大丈夫だ。――さあ」
差し出された剣を、メルメルはおずおずと受け取った。短い方といっても、子供にはずっしりと重く感じられる。これを振るって敵を倒す事など出来るだろうか？
「教えた事を覚えているだろう？」
ラインに言われて、メルメルの頭の中にラインと稽古した記憶が蘇った。
「……はい！」
元気いっぱいに頷いた少女を満足そうに薄っすらと微笑みながら見つめ、ラインは厳しい顔に戻り、前方に視線を移した。再び階段をゆっくりと登って行く。それに続きながら、トンフィーはこっそり弓を構えて弦を伸ばしたり戻したりしていた。
「……三階にも敵の気配はしないな。上の敵も二階に駆けつけたのかも知れない」
三階へと出る少し手前でラインは立ち止まり、子供二人にも止まるようにと手の平をかざした。耳を澄ませるような素振りをした後、一歩ずつ階段を上がって行く。片手を、一本になってしまった剣の柄に添えている。
ラインのすぐ後ろを行くスリッフィーナの長い尾を見つめながら、メルメルとトンフィーは息を殺していた。ラインはゆっくり三階へと上がって、ぐるりと周りを見回す。すると、警戒するように柄に添えていた手をはなし、メルメルとトンフィーを呼び寄せるように手招きをした。ホッとして二人がラインの元へ駆けつける。
「あれれれれ？」「――何にもない……ね」
三階は広々としたフロアで、床には一面に白いタイルが張られていた。そして、トンフィーが呟いた通り、その部屋には一切何にも

なかった。敵もいない。
「やっぱり、二階にみんな集まっていたのね。――あ！　ほら、あそこに階段があるわ！」
メルメルが指差す先に、確かに上へと上がる階段が見える。今いる場所から、ちょうど反対端辺りになる。
メルメルは嬉々として駆け出した。
ラインは何かを思案するように床をじっと見つめている。メルメルの後を追いかけ、更には追い越して行ったミミとシバが、急にピタリと立ち止まった。そんな事にはお構いなしで、メルメルはスキップするように走り続ける。トンフィーが、動き出さないラインに首を傾げながらも、メルメルを追いかけようと駆け出すと、
「――待て！」
突然ラインが大声を出して、メルメルとトンフィーは驚いて（トンフィーは思わず転んじゃったんだ）立ち止まった。
「ど、どうしたのラインさん？」
「……」
ラインは無言で歩き出し、トンフィーの横を通り越し、メルメルの横まで来て立ち止まった。そうして、じっと床を見つめている。すると何故か、ポケットの中をゴソゴソと探ってコインを一枚取り出した。
「？　？　？」
不思議そうに首を傾げているメルメルの隣で、ラインは前方にコインをポーンと投げた。そのコインが床に落ちた、その瞬間、

ガゴーン！

「あーー！」メルメルは思わず悲鳴をあげ、トンフィーはガックンと顎を落とした。
二人が見つめる先には、白く敷き詰めたタイルの床に、ぽっかり

と開いた巨大な落とし穴があった。
「な、な、な、な……」
「やはりな……」
その穴は、ミミとシバが立ち止まったすぐ目の前に出来ている。
メルメルはあのまま走りつづけていたらと思って、冷や汗を掻いてしまった。しかも、穴をそろりと覗けば、
「うへぇ～……」
呟いたメルメルの横に来て、トンフィーも穴を覗き込む。「……ひえ～！」
「また……ご丁寧な事だな」
ラインは呑気そうな声を出したが、メルメルとトンフィーは青くなってしまった。穴の底は巨大な針が隙間無く敷き詰められていて、鎧を着た骸骨が幾つもその針に突き刺さっていた。
「さて、いつまでも穴を覗いていても仕方ない。行くぞ」
「い、行くって、……どうやって？」
トンフィーは情けない顔でラインを見上げた。嫌な予感がする。
「跳べばいい」
「……やっぱり」
ガックリとトンフィーは肩を落とした。穴の幅は大体三メートルくらいあり、どう考えても「跳べばいい」などと軽く言える距離ではなかった。
「……跳べるかしら？」
メルメルが軽く首を傾げて、トンフィーは目を丸くした。
「む、む、無理だよ！　跳べるわけない――」
泣きべそで叫んだ瞬間、隣でラインが勢いよくジャンプした。トンフィーは再びガックンと顎を落とした。ラインはフワリと着地し、メルメルとトンフィーを振り返った。
トンフィーは無理だと言わんばっかりに、首を振り振り後ろに下がった。すると、隣のメルメルも同じように後退りして、トンフィーはメルメルも同じ気持ちなのだと思って少し安心した。

でもそれは、まったくの勘違いだった。
メルメルは一人、どんどん後退りしていく。どんどんどんどん。どんどんどんどん――。
「め、メルメル？」何故そんなに後ろに下がるのか、トンフィーはまたまた嫌な予感がした。
メルメルはふと立ち止まって大きく深呼吸した。嫌な予感はやっぱり的中して、メルメルは落とし穴に向かって猛スピードで走り出した。
「わ！　わわわわわ……」
跳んだ瞬間、トンフィーは思わずぎゅっと目を瞑ってしまった。そうして、そろ～りと片目ずつ開いて見てみると……落とし穴の向こう側でニコニコと満面の笑みを浮かべてメルメルが手を振っていた。
「トンフィーも早くっ！」
トンフィーは思わず泣きそうになった。「ぼ、僕は無理だよ～」情けない声を出して、首を横にブンブン振っているトンフィーをラインは腕組みをしながら眺めている。その横に立ち、メルメルは、少し困ったなと思っていた。
まさかラインとはいえども、人をおぶってこの距離を跳び越えるのは無理ではないだろうか？　だからといって、まさかここにトンフィーを置いて行くわけにはいかない。
どうしようかと、メルメルがラインと同じように腕を組んで首を捻っていると、ふとラインが、既にこちら側に渡って仲良く並んでいた二匹の犬と豹の方に視線を移した。
「スリッフィーナ！」
顎をしゃくって、あちら側に渡るように示す。スリッフィーナは主人の意志をすぐにくみ取って、ヒラリと落とし穴を跳び越えた。
メルメルはこれから起こることに気付いてワクワクとして、トンフィーは少しドキドキした。
「トンフィー、スリッフィーナに乗れ」「あ、はい……」

既に伏せをして待っているお利口なスリッフィーナに、トンフィーはおっかなビックリ乗っかった。「わっ！」

すっくとスリッフィーナは立ち上がり、トンフィーという重石など一切感じさせない軽やかさでジャンプした。フワリと降り立ったスリッフィーナの背の上で、トンフィーは高揚して顔を赤らめていた。そんな様子を羨ましそうにメルメルが見つめていると、

ブルブルン！

「――いて！」

突然スリッフィーナが思い切り体をふるわせて、トンフィーは振り落とされてしまった。

「いたたた……何でさ？　スリッフィーナ……」

お尻をさすりながら情けない顔で見上げるが、スリッフィーナはしれっとした顔をしている。

「トンフィーったら、強く毛を掴み過ぎたんじゃないの？」

「そ～かな～？　……あいたた」

「フフフ……。そうじゃない。スリッフィーナはとても気位が高くて、本来は私以外の人間など絶対に乗せたりしないんだ」

つまり、今はラインに指示されて仕方なしにトンフィーを乗せただけだという事だ。メルメルは一つ納得したように頷いた。

「しょうがなく乗せたのに、トンフィーがいつまでも乗っているから腹を立てて振り落としたのね」

「とほほほほ……」

トンフィーは情けない顔で、しばらくお尻をさすっていた。

「スリッフィーナも――やっぱり武器に変化するの？」
「ん？」
四階への階段を上がりながら、メルメルは唐突にラインに尋ねた。
「ほら……ピッピーみたいに」
実をいうとメルメルは、先程矢のように変化したピッピーの素晴らしい必殺技を見て、いつだったかグッターハイムが言っていた言葉を思い出したのだ。
――ペットや飼い主が強力な力を持っていると、そのペットは武器や魔法の一部に変化したりする――というものだ。
――最強の戦士ラインと、気高く力強いスリッフィーナ。これはもう、どう考えてもスリッフィーナが変化しない筈がないではないか。メルメルの期待に満ちた眼差しを見て、ラインは軽く吹き出した。
「そんな顔をするな。ペットを変化させておこなう攻撃は、実は少々体力を消耗するものなのだ。――確かにスリッフィーナは変化をするが（この瞬間、メルメルとトンフィーの目がキラッキラと輝いたんだ）試しに見せてやれる種類のものじゃない」
「そうなの……」
いかにも残念そうだが、しかしそれならば仕方ないといった様子のメルメル。ふとラインがメルメルの隣を見れば、トンフィーも全く同じような顔をしていて、ラインはもう一度吹き出しそうになった。
「……だが、まあ」言いながらラインは腰に下げた剣をスラリと抜いた。そして、四階へと続く階段の終わりを見上げ、不敵な笑みを浮かべた。「たくさんのお客様もお待ちだし――スリッフィーナも腕が鈍るといけないからな……」
これを聞いてトンフィーは少しビクリとしたが、メルメルは逆に

瞳を輝かせた。
「二人は私の前に、絶対に出ないように……」
メルメルとトンフィーはコクリと頷く。それを見て、ラインはつと剣を持っていない方の手を天にかざした。
「スリッフィーナ！」
その瞬間、メルメルには、スリッフィーナの瞳がキラリと光り輝いたように見えた。ラインに向かって、まるで襲い掛かるかの様に飛び上がる。
――グニャリ。
「――！」
それはあっという間の出来事だった。目を凝らすメルメルの目の前で、スリッフィーナは一瞬体が溶けてしまったかのように見えた。溶けながら長い尾がラインの腕に絡みつき、その筋肉質な体は細く短く硬くなって、淡い光を放つ真っ赤な剣に変わってしまった。
「すご――過ぎるわ！」
メルメルは感動し、今がどういう時かも忘れて、手を叩きながらラインと元スリッフィーナであるその剣を見つめた。その剣は、ラインが持っていると言うよりも、まるで腕の一部になってしまったかの様に見えて、どこからが剣で、どこからが腕なのか分からない程だ。
「すごいな～。……あ！」トンフィーはハッと上を見た。
「――行くぞ、スリッフィーナ！」
階段の上から、騒ぎを聞きつけて悪魔の兵隊達が駆け下りてきたのだ。ラインは走り寄り、敵に辿り着くずっと手前で大きく剣を一振りした。――赤い方の剣を。
ゴウッ！

剣先から炎のような光がほとばしり、階段を駆け下りていた数体の悪魔の兵隊の体が、いっぺんに真っ二つに分かれてしまった。
「ふわ～！」トンフィーが思わず感心したような驚いたような変な声を出して、メルメルはつい笑いそうになってしまった。しかし、一振りで触れもしないで次々と敵を倒すラインに、
「うふぁ～！」いつの間にかトンフィーの事を笑えないような声を出していた。
結局、メルメルとトンフィーがラインに貰った剣や弓を使う間もなく、まさにあっという間に戦いは終わってしまった。地面に転がった敵の数は二十体近い。想像以上のラインとスリッフィーナの必殺技に、メルメルは大興奮してしまっていた。
「かっこいいわ！　ほんとに、ほんとに、ほんろひ、たっ！　……かっこひいは！」
舌を咬むほど興奮しているメルメルに、ラインは困ったように微笑んでいる。
「まあ、そう褒めるな。スリッフィーナが照れて、元に戻れないじゃないか」
「そうなの？　スリッフィーナったら、かわいいのね！」
ラインの冗談にも気付かず、メルメルが大喜びしていると、

ピカ―！

突然、眩い光を放ち、ヴォルティーに変身したままだったミミとシバが本来の茶トラの猫に戻った。　メルメルはそんな二匹をじっと見つめ、もしかして、と呟いた。
「ミミとシバの必殺技は、これなのかしら？　スリッフィーナのように――」クルリと振り返って、ラインの腕の一部のようになっている赤い剣を見る。「――武器には変化しないのかしら？」
なんだかとても残念そうな顔のメルメル。その頭の中で考えている事が手に取るように分かってしまって、ラインは小さく溜め息を

ついた。
「変身などするくらいだから、ミミとシバ――まあ、ペットはシバだからシバの方になるか。――シバは、変身出来るほど力の強いペットだと言える。メルメルの武器の一部に変化しても不思議はないが……これればっかりは分からない。何せ様々な生き物に変身するペットなんて、そもそも聞いた事がないからな」
目に見えてがっかりした様子のメルメルに、ラインは励ますように、しかしと続ける。
「変身するペットというだけでも十分凄いじゃないか。しかもあんなふうに――ユニークに。……クックッ」
恐らく二匹の変身する姿を思い出しているのだろう。ラインの嬉しそうな顔を見て、メルメルはまあそれもそうだから仕方ないかと、無理やり納得した。
「メルメルはまだいいよ……」隣でトンフィーがポツリと呟いた。
メルメルがそちらを見れば、トンフィーは俯いて自らのお腹の辺りを見つめていた。下に視線を移すと、着ているシャツのボタンとボタンの間から、アケが顔を出していた。メルメルと目が合うと嬉しそうに、「にゃ～ん」と鳴いた。
「……これだもん」トンフィーはがっくりと肩を落とした。
いつもならば、「アケは強くもないし変化もしないかも知れないけれども、とっても可愛いから、それだけで十分じゃない」などと言うメルメルなのだが、ラインやペッコリーナ先生の素敵な技を見てしまった後では、トンフィーの気持ちも分からなくはないなと思ってしまうのだった。困った顔で、助けを求めるように見上げると、ラインは目を細めてアケを見つめていた。
「……アケだって、この先変化する可能性が全くない訳ではない」
「ほ、本当に？」
トンフィーはパッと顔を上げて、目を輝かせた。
「ペットは飼い主の影響を大いに受けるからな。飼い主の力が成長すればペットの力もおのずと上がる」

「それは……つまり」
「トンフィーが頑張って強くなればアケの能力も上がって、いつかは変化する可能性もあるという事だ」
「僕が、成長すれば……」
「すなわちアケがいつまでも変化しないとすれば、それはアケだけのせいではなくて――」
「……僕のせい」トンフィーは再びガックリと肩を落とした。
まるで慰めるようにアケが「にゃ～ん」と鳴いて、メルメルは思わず吹き出しそうになってしまった。慌てて口元に手を当てて笑いを堪える。隣で黙り込んだラインが、自分と同じように笑い出しそうになっているのかと思って見上げると、そこに思いの外険しい顔があってメルメルは目を丸くした。
「ど、どうしたのラインさん？」
「……来る」
「――え？」
眉根を寄せ、睨みつけるようにしているラインの視線の先には、部屋の隅――上へと上がる階段がある。今、そこには何者もいない。
「来るって……何が？」
メルメルが首を捻って再びラインを見上げた、その時。

カシャン……カシャン……カシャン……

微かに、階段の方から聞き慣れない妙な音が聞こえてきて、メルメルは思わず顔をしかめた。

カルバトの塔　１４（前書き）

遂に５０００アクセス（ユニーク）を達成いたしました……感無量です（ＴｌＴ）皆様本当にありがとうございますｍ（＿）ｍ今後とも、少しでもおもしろい小説にするべく努力していきますので、この先もお付き合いのほど、よろしくお願いします。

カルバトの塔　１４

「何の音かしら？」
「下がっていろ」
声も顔付きも厳しくラインが言って、メルメルとトンフィーは寄り添うようにラインの後ろに下がった。
カシャン……カシャン……カシャン……カシャン……
音は、だんだん大きくなってきていた。静寂した広間に鳴り響く不気味な音に、メルメルとトンフィーはドキドキとしてきて、お互いの手をギュッと握った。
カシャン……カシャン……
「――！」階段の上から黒い足の先が現れて、トンフィーは一瞬ビクリとする。
ラインが右手のスリッフィーナの剣を構えなおし、「まさか……」何がまさかなのか、そう呟いた。
カシャン……カシャン……カシャン……カシャン……
一歩階段を降りる毎に不気味な音を響かせ、徐々に明らかになってきた姿にメルメルとトンフィーはゴクリと息を飲み込んだ。
その男は――上から下まで真っ黒な甲冑をつけて、右手に大きな抜き身の剣をぶら下げていた。
二人が男だと思ったのは、単純に女性にしては背が大き過ぎるという理由だけで、全身にまとった鎧は体のラインを隠すどころか、顔までも完全に覆ってしまっているから、実際には男だという確信があるわけではなかった。その鎧の人物は、今やメルメル達の近くまで寄って来て無言のまま立ち尽くしている。
「まさか……こんな所で貴様に会うとはな。……随分久しぶりじゃないか」
やけに気さくなラインの言い方に、メルメルは驚いてその背中を見上げた。

（お友達なのかしら？）

「……」

特にラインの言葉に答えようともしないで黙ったままの鎧の人物に、メルメルは眉をひそめる。

「相変わらず無口な奴だな――黒騎士よ」ラインはわずかにからかうような調子で言った。

「……」

――黒騎士。それがこの鎧の人物の呼び名なのだろうか？　だとすれば、ちょっと親しい友達とは言いがたいかもしれない。メルメルは首を捻って、もう一度鎧の人物――黒騎士なる者をじっくり見つめた。とても重厚感のある鎧だ。先程までの音は、この鎧が歩く度に擦れて出ていたのだろうが、こんな重そうな物を着ていては上手く動く事が出来ないのではないのかと思えた。それから、右手にだらりと下げた大きな剣。その刃はギラリと黒光りし、そこからもやもやと湯気のようなものが出ている。一体どんな素材を使っているのだろうか？

不思議に思って見つめていると、黒騎士がその剣をゆらりと持ち上げた。

「……？」

ガキーン！

「――！」

突然目の前で起こった出来事に、メルメルとトンフィーは目が点になってしまった。

全身に重そうな鎧を着ているとは思えないような素早さで、大きな間合いを一気に詰め、黒騎士がこちらに襲いかかって来たのだ。

ラインが軽やかにその剣を受け止めていた。そして、ちらりと後ろを振り返る。

「あわわわ……」

不意の出来事に驚いて、トンフィーが転びそうになっているのを支えながらメルメルは壁際まで後ろに下がった。ラインと黒騎士は剣を合わせたまま睨み合っている。するとラインがまた一瞬、後ろを振り返ってメルメル達の方を見た。その瞬間を逃さず、黒騎士が合わせた剣に力を込める。

「くっ……！」

「ら、ラインさん……！」

一気にラインの体が後ろに押されるのを見て、メルメルは拳を胸の上で握りしめた。そして、今や完全に「お友達」の可能性が無くなった黒騎士をムッと睨み付ける。

「お前と……力勝負をする気は……無い！」「――！」

キン！　――ガキーン！

ラインは一度相手を突き放すように後ろに引くと、すぐさま左手にカルバトの剣をスラリと抜き、立て続けに黒騎士に襲いかかった。

キン！　ガキン！　キン！　ガキン！

息もつかせず切りかかるライン。しかし黒騎士も呆れる程の俊敏さでその剣を全て受けている。

「な、なんて早いんだ！」「あんな重そうな鎧をつけているのに……」

メルメルは握り締めた拳に汗を掻いてしまった。まさかラインが負ける事はないとは思うが、明らかに今までの敵とはレベルが違う。メルメルは、トンフィーの手を握り締めた方の手にぐっと力を込めた。

「いててて……」

痛みに、思わずトンフィーが体を曲げる。その時、またラインがちらりと二人の方を見た。

ガキーン！

ズザーーーー！

その瞬間を見逃さず、ずっと受け身だった黒騎士がラインの攻撃を受けた剣に渾身の力を込め、跳ね返してきた。ラインは不意をつかれたように後ろに飛ばされる。

「ラインさん！　――！」

ガキーン！

ラインは、すぐさま起き上がると同時に地を這うように駆け出し、黒騎士の足元に切りかかった。それを、剣を地面に突き刺すように黒騎士は受け止める。くるりとラインは滑らかに体をひねり、黒騎士が体制を立て直すよりも先に、カルバトの剣を相手の頭目掛けて振り下ろした。

ガキーン！

「――ああ！」「う、腕で……！」

剣で受けるのは間に合わない。決着はついた。そう――メルメルとトンフィーは一瞬思った。ところが、黒騎士は左手を顔の前に掲げ、ラインの剣を受け止めてしまったのだ。

「そんな！」メルメルが悲鳴をあげる。

鎧をつけているとはいえ、あのカルバトの剣を腕で受けるなんて――。

「メルメル……ちょっと……」もぞもぞと、トンフィーが握り合っていた手をほどいた。

「……トンフィー？」メルメルはどうしたのかと首を捻る。

トンフィーは自らの体に引っ掛けていた弓を取り外し、矢をかけた。

ギリギリギリ……。

「うぐぐぐ……」「――トンフィー！」

「も、もう少し……離れて、くれれば……」

トンフィーは黒騎士を狙って打ちたいのだが、ラインに当たってしまいそうで恐くて矢を放てずにいる。それでも、慣れない弓を使って懸命にラインを援護しようというのだ。そんな姿を見てメルメルは自らも何かしなくてはと焦り、戦いに興奮して毛を逆立てているミミとシバの方をチラリと見た。

（――駄目よ。まだ十五分経ってないわ……！）

二匹が次に変身するのには、まだまだ時間が必要だ。メルメルは視線を二匹から外し、ラインと剣をぶつけ合っている黒騎士を睨み据えた。そして、メルメルが意を決し、ラインにもらった剣を抜こうとした、その時――。

黒騎士とラインの間にわずかな間合いがうまれた。

「――今だ！」

ビュー！

トンフィーの放った矢は、思いの外勢い良く、真っ直ぐに黒騎士目掛けて飛んでいった。

ボウ！

「あ！」「や、矢が……燃えた！」

黒騎士にぶつかる直前で、矢は燃え上がってチリになってしまった。

「――！」

その目は兜に覆われて見えないが、確かに黒騎士がこちらを見た気がしてメルメルとトンフィーは背筋をゾクリとさせた。そして、二人に向かって一歩踏み出してくる。

「――どこを見ている！」

ガキーン！　ガキーン！　ガキーン！

ラインが立て続けに攻撃を繰り出す。そうして少しずつ、黒騎士

がメルメル達から離れて行く。――いや、離されているのだ。ラインは明らかにそれを狙って攻撃している。

「二人とも、行くんだ！」攻撃の手は緩めないまま、ラインが叫ぶ。

「先へ進め！」

メルメルはぐっと唇を引き結んで、ラインの背中を見た。

とてもそんなに力があるとは思えない程に、女性らしく滑らかな背中だ。しかし、それでいて無駄な肉のなど一切なく、引き締まったしなやかな背中。あの美しい背中は、見た目よりもずっと大きくて、必死で敵との間に立ちふさがるように、温かく、優しく、メルメル達を守ってくれているのだ。

メルメルは泣きそうな自分に活を入れるように、よし――と声に出した。

「行こうトンフィー！」

「え……で、でも」

「――いいから！」

ラインを置いて逃げ出す事に戸惑うトンフィー。それを半ば引きずるようにしてメルメルは上への階段へと走った。

――ラインさん！　絶対負けないで！

メルメルは階段を上がる直前でもう一度ラインを振り返った。黒騎士の剣を両手で受けて歯を食いしばっている横顔が、ちらりと見えた。

その、おそろしく澄んだ青い目が、一瞬だけこちらに向けられる。

「行け！」

ラインの叫び声と同時に、メルメルとトンフィーは共に駆け出したのだった。

カルバトの塔　15

モヤモヤとした気持ちを抱えたまま、メルメルは五階へと続く階段をのろのろと上がっていた。下で戦うラインの事が気になって、前へと進む足が鈍ってしまうのだ。

トンフィーもメルメルと同じような気持ちなのだろう。やけに静かに後ろを付いて来ている。

「……あの鎧を見た？」「え……？」

トンフィーが唐突に口を開いて、メルメルは思わず立ち止まった。振り返ると、不安げにこちらを見上げてくる瞳とぶつかった。

「……鎧って、黒騎士が着ていた鎧の事？」

「そう。あの、真っ黒の鎧」

メルメルの頭に先ほどの黒騎士の鎧姿が思い出される。どちらかというと、鎧よりも、あの不気味な湯気をだした剣の方の印象が強い。

「ほら、ラインさんの剣を腕で受け止めたでしょう？」

「――そう！　あれ、すごく驚いたわ！　あのラインさんの剣を……。いくら鎧を着ていたからって……」

納得いかないといった顔で、メルメルは首を横に振っている。するとトンフィーが軽い口調で、しょうがないよと言った。しょうがないとは何事かと、メルメルは口を尖らした。

「しょうがなくないわよ！　ラインさんの剣がどんな物なのか分かってるの？　あの、カルバト製の物なのよ！」

なんだか子供に言い聞かせるようにメルメルは言う。まるで今日初めてカルバトの剣という物を知ったとは思えない口振りだ。

「だけど……相手の鎧もカルバト製だったんだからしょうがないんだ」

「え！」メルメルは驚いて目を丸くした。「カルバト製？　黒騎士の鎧が？」

「そうなんだ。あの時僕もメルメルと同じように、黒騎士がラインさんの剣を腕で受けたのに驚いて、良く目を凝らしてあの鎧を見てみたんだ。そうしたら、あの鎧の所々に青い石が埋め込んであるのに気が付いたんだ」

メルメルはまったくそんな物には気付かなかった。改めてトンフィーの目の良さには驚いてしまう。「青い、石……。命の石？」

トンフィーはこくりと頷く。

「……恐らく。それならば、カルバトの剣であるラインさんの剣を受け止める事が出来た説明がつくでしょう？」

そう言われて、メルメルは目の玉を上にして考えてみた。――カルバトの鎧だから、カルバトの剣でも切ることが出来なかった。確かに納得は出来る。納得は出来るが、だがしかし、

「それだと、黒騎士を倒すことは出来ないって事に、ならない？」

「……」

「だって、あの人、全身に鎧をつけていたのよ？」

「……」

黙ったまま返事をしないトンフィーに、メルメルはいよいよ不安になってきて、思わず声が上擦ってくる。

「ねぇ！　トンフィー――」

「――スリッフィーナの剣なら、あるいは……」

トンフィーの言葉に、メルメルは単純に瞳を輝かせた。

「そうよ！　ラインさんにはもう一本、素晴らしい剣があるじゃない！」

「そうだね……。だけども、厳しい戦いである事に変わりはないよね。だって、カルバトの剣では切れないって事は、ラインさんの得意の二刀流が通用しないって事だもの！」

「確かに、そうね……」

「だ、大丈夫かな？　ラインさん……」

トンフィーは情けない顔で俯いてしまった。（自分で不安を煽るような事を言っておいて、自分自身がとっても不安になっちゃった

んだ）

「きっと大丈夫よ……。それに、私達が戻っても、きっと役に立たないもの……」

「そ、そうだけど、でも――」

「うんうん。役に立たないどころか、あのままだと、ラインさんの足を引っ張ってしまうわ……。だって、ラインさん戦いの最中ずっと私達の事を気にして、集中出来ないみたいだったもの」

「……」

トンフィーもその事には薄々気付いていたらしく、またしょんぼりと黙り込んでしまった。そんなトンフィーを勇気付けるように、あるいは自分自身を励ますようにか、メルメルはわざと陽気な声を出す。

「大丈夫よ！　私達を庇うために力を存分に振るえなかっただけで、今頃はあんな黒騎士なんか、スリッフィーナの剣でケチョンケチョンにしちゃってるわよ！」

「そ、そうかな？」

「そうよ！　きっとすぐにラインさんは追いついて来るから、私達は少しでも先へと進んでおきましょうよ！」

「そ、そうだね！　よし、行こうメルメル！」

いつまでもぐじぐじ思い悩んでも仕方がない。結局は精一杯やれる事をやるしかないのだ。二人はようやく少し元気を取り戻して階段を上り始める。ところが、数段上がったところで、再びトンフィーが不安げな声をだした。

「ねぇ、メルメル……」

「何よトンフィー？　もう心配するのは駄目よ！」メルメルは手をバッテンにして、くるりと後ろを振り返った。「とにかく前に進むって決めたでしょう？」

「そ、そうじゃなくてさ……何か、聞こえない？」

「え……？」メルメルは慌てて口を閉じ、耳を澄ませてみる。

脳裏に、先ほどの黒騎士の足音が甦り、ゾクリとした。しかし、

今は特に何の物音も聞こえず、辺りは静寂に包まれている。
「……何よトンフィー。何も聞こえないじゃな――」
「待って！　ほら……」トンフィーが慌てて口に人差し指を押し当てる。すると、
ゴゴゴ……ゴゴゴゴゴ……
確かにトンフィーの言う通り、微かに、地の震える様な音が聞こえてきた。
「本当だわ……！　何の音かしら？」
メルメルは目を閉じて更に耳を澄ませる。すると、少しずつ音が大きくなってきたのだ。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……
「あれ？　……聞こえなくなっちゃったわ」
「何の音かな？」
「分からないわ……。考えてもしょうがないわよ。とにかく上に行きましょう」
メルメルは言いながらもどんどん階段を上る。
「でも……何だか上の方から聞こえてきたような……」
トンフィーは情けない顔になりつつも、仕方なくメルメルの後を追い駆けた。

「ちょっと待ってトンフィー……」
五階のフロアに出る少し手前でメルメルは立ち止まり、ラインに渡された剣を両手に構えた。敵がいないかどうか、目を瞑り耳を澄ます。
「……」
そんなメルメルの姿を見て、トンフィーは思わず無言になった。
運動神経抜群のメルメルと言えども、所詮はまだ十一歳になったばかりの子供だ。短く刈った髪は男の子みたいだが、キュロットスカートに水玉のシャツでは、どう頑張ってもラインのような迫力は出ない。トンフィーはなんとも頼りない気持ちになり、こっそりポ

ケットから懐中時計を探り出した。
（……あと一分だ！）
トンフィーのほっとした表情を見て、メルメルはいささかムッとした顔になる。
「何を呑気に見てるのよ！　早くトンフィーも弓を構えて！　上で敵が待ち構えているかも知れないのよ！」
叱られるように言われて、トンフィーは大慌てで弓を体から外そうとした。しかし、慌てすぎてシャツのボタンに弓の弦が引っかかってしまった。「あ、あれ？　あれれれ……」
「とつげーき！」「ちょっ、ちょっと待って――」
結局、トンフィーが弓を構えるのも待たずに、メルメルはとっとと走り出してしまった。
ようやく弓を外したトンフィーが転びそうになりながら後を追い駆ける。
「……ふぅ」
勢いよく突撃はしたものの、トンフィーにとっては喜ばしい事に、その階はまたしても無人だった。だだっ広い空間は薄暗く、部屋の隅でろうそくの明かりが不気味に揺れている。
「メルメル見て、あそこに梯子が……」
指差した先には確かに、天井から縄梯子がぶら下がっているのが見える。
「何で急に梯子になったのかしら？」
もっともな疑問だ。今までずっと普通の階段で上がってきたのに、何で急に梯子に変わってしまったのか。しかし、ざっと見たところ、どうやら梯子以外に上がる手段はなさそうだ。
「……」
何もない空間にぽつりとある梯子。それはもう、あからさまに怪しくて、メルメルとトンフィーは疑わしそうに顔を見合わせた。

カルバトの塔　16

「……とにかく、あそこまで行ってみましょう」
「ま、待ってメルメル！」
梯子目指して歩き出そうとしたメルメルに、トンフィーが慌てた声を出す。
「……何よ？」
「ちょっと……うーん、無いなぁ……」
トンフィーはゴソゴソとズボンのポケットを探っている。メルメルが首を傾げて見つめていると、トンフィーもメルメルを見て、同じように首を傾げた。
「メルメル、コイン持ってない？」
「コイン？　……あ！　成る程」
ようやくメルメルはピンときて、肩から下げたうさぎの鞄をゴソゴソと探った。
ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……
「音が……」天井を見上げてトンフィーが呟く。
実はここへ来てからずっと、あの地鳴りが小さく聞こえ続けていたのだが、それが段々大きな音になってきたのだ。
ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……
大きくなった音が再び小さくなっていく。何かが近づいて、遠ざかって行ったような感じだ。
「あったわ！」
トンフィーが恐ろしげに上を見上げていると、メルメルが鞄から小さなピンクの巾着を取り出した。中からコインを一枚つまみ出し、トンフィーの前に掲げる。
「投げるわよ？」
相手が頷いたのを確認して、メルメルは前方にコインを投げた。
コインは地面に落下し数回跳ねて、コロコロと床の上を転がった。

倒れて動かなくなったコインを、二人はしばし無言で見つめる。
「……大丈夫そうだね？」
「よし！　行きましょう」
落とし穴が無いと分かって、メルメルは嬉々として、トンフィーは恐る恐る歩き出す。
はしごの下にたどり着くまでの間もずっと、ゴロゴロと妙な音は絶えず聞こえていて、さすがにトンフィーだけではなくメルメルも少しだけ不安な気持ちになってきて、ろうそくの明かりに揺れている自分の影を、眉をひそめて見つめていた。
「……よく見えないね」
梯子の下までたどり着くと、二人は揃って上を見上げた。
天井に暗い穴がぽっかりと開いていて、縄梯子はそこから降ろされている。穴の奥がどうなっているのか、深さはどのくらいなのか、暗すぎて下から見ただけでは分からない。
「登ってみるわ」
「え？　あ、危ないよ！　罠かも知れないし……」
「でも、ここでこうして見上げていても仕方ないわ」
「そ、それはそうだけども……」
もっともと言えばもっともだが、もしも何かあったらと思うと恐ろしくて、トンフィーは戸惑うようにもう一度穴を見上げた。
（せめて中がどうなっているのか見えれば……。――あ、そうだ！）
良いアイデアが思い浮かんで、トンフィーは顔を輝かせた。
（はしごが燃えないように、なるべく小さく。イメージ力、イメージ力……）
「ファイヤーボール！」
トンフィーの唱えた呪文と共に、小さな火の玉が天井目掛けて飛んで行った。
「あ……！」
穴に吸い込まれた火の玉は、少しの間周囲を照らしながら奥へ進んでいたが、突然ぱっと火花を散らして消えてしまった。どうやら

穴の奥は壁で塞がれてしまっているようで、それにぶつかってしまったようなのだ。
「行き止まりみたいだね」
「う～ん……」
メルメルは腕組みをして考える。わざわざ何もない穴から梯子を垂らす訳がない。勿論何かあるのだろうし、それは罠かも知れないが、上へと行く手段が見つからない以上は、
（行くしかないわ）メルメルは縄梯子をはっしと手で掴み、足をかけて登り始めた。
「め、メルメル、ちょっと待って！」
「何よトンフィー……」メルメルはうんざり顔で振り返った。「いつまでも考えてたって仕方ないでしょう？　とりあえず確かめに行くしか――」
「そ、そうじゃなくて。ぼ、僕が行くよ！」
「……え？」
「メルメルには行かせられないよ！　ぼ、僕が行く！」
トンフィーは耳を赤らめ、胸を拳でボンと叩いた。残念ながら、お腹の辺りで顔を出したアケの鈴がチリリとなって、トンフィーが思っている程の頼もしさは今一出なかった。
「トンフィー……」メルメルはじっとトンフィーを見つめた。
トンフィーがどぎまぎしながら拳を握りしめ、やる気満々でメルメルが降りてくるのを待っていると、メルメルは突然ニッコリと天使のように微笑んだ。
「でも、もしも罠だったら危ないから、やっぱりワタシが行った方がいいわ！」
「へ？　――あ、あれ？　いや、だから……」
メルメルはもごもご言っているトンフィーには構わず、どんどん縄梯子を登って、あっという間に暗い穴に消えていってしまった。
トンフィーは情けなく眉をハの字にしながらそれを見送る。
トンフィーとしては、女の子にそんな危険な事はさせられないと、

珍しくも勇気を出して男らしく言った訳だが、それをあっさりと、「あなたじゃ頼りないから駄目よ」と言われた様なものなのだ。

しょんぼりとトンフィーが上を見上げていると、穴からカンカンと壁を叩く音が聞こえてきた。

「メルメル～？」

「やっぱり――行き止まりだわー！」

壁には隙間もなく、取っての様なものもついていない。メルメルは剣の先で、天井の隅を掘るようにつついてみた。すると、

「動いた！」

わずかだが天井が動いた気がして、メルメルは顔を輝かせる。今度は両足を開き、穴の壁に突っ張り棒のように固定して、片手で天井を押し上げてみる。またわずかに動き、次は両手でやってみる。じりじりと少しずつだけ上にずれていくのにしびれを切らして、メルメルは遂に背中を天井に押し当てて、暗闇の中顔を真っ赤にし、力一杯上へと押し上げた。

「うぐぐぐ……！」

ズズ……ズズズズ……ズズズズズズ――

「……あ、あれ？」

急に背中の重みがなくなって、眩い光が背中から降り注いできた。

――遂に天井が抜けて六階への道が開かれたのだ！　メルメルは顔をほころばしてくるりと上を見上げた。

「キシャーー！」「――！」

その瞬間メルメルは、キュロットスカートのベルトに挟んだ剣を使うなどという事は、全く思い浮かばなかった。突然目の前に現れた怪物（グリーンイグアナとジャングルキャットのキメラなんだ）の大きな口がパッカリと開かれるのを、スローモーションのように感じながら呆然と見つめていた。ただ、その口の中の異様に赤い様や、猫の牙を思わせる鋭く尖った歯が近づいて来た時はハッと我に

帰り、思わず大きく体を仰け反らせた。そうしなければ、メルメルの可愛い顔には四つの大きな穴が開いてしまっただろうから、こうしたとっさの行動を責められはしないだろう。だが、不運な事に今は地上から十メーター以上離れた暗い穴の中、しかも足を壁に突っ張ってバランスを取っているだけの極めて不安定な状態。

案の定メルメルの体はぐらっと傾いて、ずりりと足が滑った。

「きゃーー！」

「あーーー！」

真っ逆様に穴から飛び出してきたメルメルを見て、トンフィーは目が飛び出してしまいそうになる程驚いた。「――あ！」

いっかんの終わりかと思われた――その時。落ちてきたメルメルの右足が縄梯子に引っかかり、

「きゃっ！　――い、いたた……」

ぐるぐると靴ごと足の先が絡まって、空中で体が宙ぶらりんになって止まった。穴からは一メートル程、地面まではまだ七メートルくらいはありそうな場所だ。決して笑えるような事態ではないが、トンフィーはとりあえず一安心して、ほっと胸をなで下ろした。

「は～。……メルメルったら、一体全体どうしたのさ？」

「トンフィー！　弓を構えて！」「へ……？」

「キシャーー！」

逆さまになったメルメルの足の先、暗い穴の中から、凶悪そうな猫科の生き物が顔を覗かせて、トンフィーは二度ビックリした。

「――き、キメラ！」

短い毛の中の一部に鱗のような固そうな皮膚が覗いていたり、片手を伸ばしても器用に壁を掴んでいられるその手の形が如何にも爬虫類のそれだったりして、トンフィーはすぐに正体を悟り、弓を構えた。

「キシャー！」

イグアナもどきはメルメルに向かって鋭い爪の生えた前足を伸ばす。

「トンフィー、は、早く――」
「む、むむむむ……！」
早くと言われても、ゆらゆらと縄ばしごに繋がれたメルメルは揺れてどうにも気になるし、上に向けて矢を放つ事は何だかとても難しいし、そもそもまだ弓を使う事さえ慣れてないし、と、トンフィーが思いっきり躊躇していると、
「キシャシャー！」
イグアナもどきは縄梯子を掴み、メルメルに近づいて来た。
「きゃっ！　きゃ――きゃー！」
自分に向かって伸ばされた爪を見て、メルメルは青くなり体を振って大暴れする。激しく揺れる縄梯子に併せて、トンフィーも弓の先を右へ左へと揺らした。
「め、メルメル！　動かないで……」
そんな事言われたって、じっとしてしまえばトンフィーがイグアナもどきを矢で射落とす前に、メルメルの足は鋭い猫のような爪で八つ裂きにされてしまう。
万事休すの事態に好転の兆しは見えず、更に悪い事が起こった。
「あーーー！」
メルメルが暴れに暴れぬいたせいで、縄梯子に絡まっていた靴から足がずりっと抜け落ちてしまったのだ。
相手が逃げて行くのだと勘違いしたのか、イグアナもどきは一気に体を伸ばして爪の先をメルメルの足に引っかけようとした。が、しかし――寸でのところで間に合わなかった。だが、メルメルにとってはそれで助かったとは勿論言えず、近づいてくる地面に幼いながらに死を悟り、しかもとっさに両手を広げてメルメルと地面の間に割り込んできたトンフィーの死をもついでに悟ってしまったのだった。
そうしてまさに、メルメルとトンフィーとアケのサンドイッチが出来るかと思われたその瞬間、メルメルはふわり――とまではいかないまでも、どさりと何か柔らかいものの上に落ちた。

トンフィーとは感触がどうも違っている。案外筋肉質で弾力があるし、何よりも頬をくすぐるような柔らかい絨毯の様な、その感触。

――いや、それよりも。そんな事をあれこれ考えられる自分。

つまり――生きている自分に気付いたメルメルは、思わずガバッと体を起こした。起こした体の下には、高級絨毯のような赤い毛並み――。

「――スリッフィーナ！」

カルバトの塔　17

「グゥゥ……」

メルメルを背に受け止めたスリッフィーナは、首を巡らせ後ろを見上げる。

「す、スリッフィーナ……。一体どうして……」

驚きつつも太い首筋を撫でてやると、スリッフィーナはうっとりと瞳を閉じた。周囲を見れば、どうやら先ほどメルメルを受け止める祭に、スリッフィーナが吹っ飛ばしてしまったらしく、トンフィーは座り込んでお尻をさすっていた。メルメルはトンフィー以外の人影を探すが、残念ながら赤髪の美しい女性の姿は見当たらなかった。ガッカリしながらその背を降りて、自分の倍くらいありそうな精悍な豹の顔を覗き込む。

「ありがとうスリッフィーナ。でも、あなた一人で来てしまったのかしら？　ラインさんはどうしたの？」

「……グゥ？」スリッフィーナは首を傾げる。

「――メルメル！　上！」「キシャー！」

ハッとして見上げれば、イグアナもどきがその間抜けな姿からは想像出来ないような俊敏な動きで、縄梯子からこちら目掛けて飛びかかってきたところだった。

「ガウガウ！」「ギシェ！」

スリッフィーナがイグアナもどきにサッと飛びかかり、空中でその首を捉え、そのまま半分食いちぎってしまった。

あっさりと敵を倒してしまったスリッフィーナに感心しつつも、首の千切れたイグアナもどきをくわえたまま振り返った顔がちょっと恐ろしくて、トンフィーはゴクリと唾を飲んで固まってしまった。

「ねぇ、スリッフィーナ……ラインさんはどうしたの？」

そんな事にはお構いなしでメルメルが近づくと、スリッフィーナはボトリとイグアナもどきを落として、再び首を傾げる。「グゥ？」

「まさか……まだ一人で、戦っているんじゃないの？」
「キシャー！」「――！」
奇声に驚いてメルメルが見上げると、あの穴からまたしても新たなイグアナもどきが登場したところだった。そのままドサッと地面に落ちて、警戒するようにこちらを見ている。
「ちぇっ！　そりゃあ、一匹だけの筈ないか」
言いながらも、トンフィーにはさほど緊張した様子は見られなかった。先ほどまでとは訳が違う。今は何と言っても、スリッフィーナがいるのだから。
「グゥゥゥゥ……」
スリッフィーナはトンフィーの期待通り、背を低くしイグアナもどきに対峙した。
「駄目よスリッフィーナ！」
メルメルが大声を張り上げ、スリッフィーナの長い尾を掴んだ。
「め、メルメルどうしたの？」「グゥ……？」トンフィーもスリッフィーナも戸惑った様な声を出す。
「スリッフィーナ……ラインさんの所に戻らなきゃ駄目よ！」
「め、メルメル？　どうしたのさ……」
「だってトンフィー！　ラインさんが――」
「キシャー！」
飛び交ってきたイグアナもどき目掛けて、スリッフィーナは素早く前足を振り上げた。
「ギシェー！」
強烈な一撃を食らったイグアナもどきは、数メートルも吹っ飛び壁に激突してしまった。スリッフィーナは尻尾を掴んだメルメルを振り払って、ピクピクしているイグアナもどきに歩み寄ると、トドメを刺す為牙をむいた。
「ダメよスリッフィーナ！　早く――早くラインさんの所に戻って」
「一体どうしたのメルメル？」
やたらと焦ってスリッフィーナに駆け寄ろうとするメルメルに、

トンフィーは訳が分からずその手を引いた。
「だって……。トンフィー、きっとまだラインさんは戦ってるのよ！」
「そ、それはそうかも知れないけれども、でも、多分ラインさんは僕らが心配で、僕らだけじゃ頼りないからスリッフィーナを寄こしたんじゃないかな？」
「そうね……。うん、たぶんそうだわ」メルメルは少し考えるような仕草をしてから頷いた。
「でしょ？　実際、スリッフィーナがいてくれればとっても心強いもんね」
「でも、それじゃあダメなのよトンフィー……！」
「どうして――」
「今、ラインさんはまだ戦ってるのよ！　あの黒騎士と――カルバトの剣一本で！」
「――！」
その必死の目を見て、トンフィーもようやくメルメルが何を言いたいのかを悟った。
「そう……か。そうだった……」
トンフィーは顔を上げ、首を巡らせた。スリッフィーナは、ちょうどイグアナもどきにトドメの一撃を加え、その息の根を止めたところだった。トンフィーは思わず顔を歪める。スリッフィーナの顔が血まみれで黒々しているのが恐しくてではなく、メルメルの言っている意味が中々分からなかった自分の間抜けさに呆れたからだ。
――つまりこういう事だ。
恐らくラインはメルメル達が心配だからスリッフィーナに後を追わせたのだ。だが、ライン自体が一緒に来ないという事は、おそらくまだ黒騎士との決着はついていないという事だろう。そして、先ほどトンフィー自身が言った通り、黒騎士の着ているのがカルバトの鎧ならば、ラインは今、相手には通用しない剣のみで戦いを続けている事になる。唯一通用すると思われた、スリッフィーナの剣は

なくなってしまったのだから……。
「トンフィー……！」
切羽詰まったようなメルメルの声に、トンフィーはようやく物思いから覚めた。それと同時に、再び例の穴から奇声が轟く。見上げれば、今度は二匹ものイグアナもどきが出てきて、地面へと落ちるところだった。
――一体何匹いるのだろうか？
スリッフィーナはゆらりと尾を振りながら、余裕の表情でそちらに向かう。
「ダメだったら……スリッフィーナ！」
今度はメルメルが叫んでもスリッフィーナは見向きもしなかった。
――では、お前達だけでどうしようと言うのか？　もしかしたら、そう言いたいのかも知れない。確かにスリッフィーナに去られてしまったら、自分達だけでは困った事になるだろう。トンフィーはどうしたら良いのか分からず、つい無言で立ち尽くしてしまった。
そうしている間にも、スリッフィーナは簡単にイグアナもどきを一匹仕留めている。身動き出来ずにいるトンフィーの横で、メルメルがカチャリと剣を構えた。
トンフィーは首を捻る。「……メルメル？」
「――やぁーーー！」「メルメル！」
メルメルは全力で走り出し、イグアナもどき目掛けて思いきり剣を振り上げた。
「ギシェー！」
振り下ろした剣は、残念ながらイグアナもどきの肩先をかすめただけだった。初めて敵に向かって剣を振ったから失敗をしたのか、それとも生き物を殺す事に寸前で迷いが生じたのか……。いずれにしても中途半端に傷を負ったイグアナもどきは、怒り狂ったようにメルメルに襲いかかって来た。
「きゃ……！」「――ファイヤーボール！」
ゴウ！

「ギシェー！」

イグアナもどきの頭にトンフィーの放った火の玉が命中して、嫌な匂いを漂わせながら燃え始めた。狂ったように暴れているイグアナもどきにスリッフィーナが歩み寄る。

「スリッフィーナ！　あなたはラインさんのもとに戻りなさい！」

メルメルは叫び、イグアナもどき目掛けて剣を突き刺した。今度こそ、かする事無く体の奥深くまで刺さり、一瞬ビクリとしたイグアナもどきはそれきり全く動かなくなってしまった。手には何とも言えない不快な感触が残っていて、それを振り払うようにメルメルは勢い良く剣を引き抜いた。

「――！」

その瞬間、傷口から思いきり血が吹き出して、メルメルの顔や服にふりかかってしまった。思わず呆然としたメルメルの頭上で、再び奇声が発せられる。

「ギシェ！」

見上げると、穴から出てきたイグアナもどきの胸には深々と矢が突き刺さっていて、ズルッと壁を掴んでいた手が外れて、ドサリと仰向けに地面に落ちてきた。

「あ、当たった……」

「トンフィー！」

呆然と呟くトンフィーの方を振り返って、メルメルは瞳を輝かせた。二人は目と目を合わせ（トンフィーは血が吹きかかったメルメルの顔が恐ろしくて、平静を装うのに苦労したんだ）どちらともなく頷いた。

「キシャー！」複数の奇声に驚いて二人が見上げると、押し合いへし合いしながら、たくさんのイグアナもどきが穴の中からいっぺんに出てきていた。

ビュ～～パス！

「ギシェー！」

ビュ～……

ビュ〜〜パス！
「ギシェ！」
トンフィーの放つ矢は、何本か外れながらも確実にイグアナもどきを撃ち落としていた。その矢を逃れて地面に着地したイグアナもどきに対峙して、メルメルは剣を構えた。
「さあ、行って――スリッフィーナ！」
いまだに立ち去ろうとはしないスリッフィーナを、メルメルは背中越しに怒鳴りつけた。しかし獣の走り去る足音は聞こえてこない。するとまたイグアナもどきが数匹穴から降ってきて、威嚇するように奇声をあげた。後ろから逆に獣の歩み寄る気配を感じて、メルメルはクルリと振り返った。
「行きなさい！　スリッフィーナ！！」
力のこもった強い声に、スリッフィーナは思わずピタリと動きを止めた。少し目を見開いてメルメルを見つめる。その燃えるような瞳を更にじっと見つめて、突然――赤い獣はサッと踵を返した。階段を下りて行くたくましい後ろ姿を見送って、メルメルはようやく肩の力を抜いた。
「良かった……」「ちゃんと前を見て、メルメル！　――ファイヤーボール！」
ボウ！　と火の玉が横を通り過ぎて慌てて前を向くと、目の前に火だるまになったイグアナもどきがいて、メルメルは慌てて飛び退いた。魔法で助けてくれた事に感謝をして振り返れば、額に汗を浮かべながら、絶え間なく天井の穴に矢を放っているトンフィーの姿があった。しかし大分疲れてきているようで、矢は最初の頃ほど勢いがなく、半分以上が外れて天井に突き刺さってしまっていた。イグアナもどきの方は休みなく穴から現れていて、今や十匹近くが地面に降り立っている。メルメルは剣を構えながらも、思わず後退りしてしまった。
スリッフィーナを返した事を後悔する気持ちは全くないが、正直、これだけの敵を倒せるとは思えなかった。――どうすればいいのだ

ろう？　どうすれば……。

「ニャーニャーニャー！」

「――！」

メルメルの視界の片隅に、立ち上がって両手を掲げた二匹の茶トラの猫の姿が映った。

「ニャーニャーニャー！」

「ミラークルクル！　ヴォルティーにな～れ！」

ピッカー！

辺りは眩い光に包まれ、メルメル、トンフィー、アケ、そしてイグアナもどき達も一斉に目を瞑った。そして――ゆっくりと目を開ける。

「ガウワウバウ！」

そこには、二匹の茶色に黒いまだら模様の大きな犬がいて、早速イグアナもどきに食らいついていた。

（そうよ！　ワタシ達にはとっても強い正義の味方がいるんじゃない！）

次々と敵を倒す、ミミヴォルティーとシバヴォルティーに負けじと、メルメルもえいやっと剣を振り回し、トンフィーも気合いを入れ直して矢を放ちまくったのだった。

カルバトの塔　１８

結局、二十匹近くも出てきたイグアナもどきは、ミミとシバの大活躍であっという間――とまではいかないまでも、メルメルが考えていたよりもずっとあっさりと倒す事が出来た。

「ふ～……」

顔や手や剣についてしまった血をハンカチで丁寧に拭き取ると、メルメルはようやく一息ついたような気持ちになり、ゆっくりと天井を見上げた。例の穴からは、もう何者も現れてはこない。ただ静かに、垂れ下がった縄ばしごが揺れているのみである。メルメルは視線を下に戻し、自分の周りをぐるりと見渡した。

「ぜー　ぜー　ぜー　ぜー」

まず目に入ってきたのは、床に大の字になってほとんど白目を剥いているような状態のトンフィーの姿だ。確かにいまだかつてない様な働きぶりだったし、それに――と、メルメルはペッコリーナ先生が言っていた事を思い出していた。――魔法というものはたくさんのエネルギーを消費する――というものだ。先ほどトンフィーは何回か魔法を使っていたからそれもあって相当疲れたのだろう。メルメルはお母さんのような顔で満足そうに微笑み、他へと視線を移した。

地面に転がっているイグアナもどきの中には、矢で射抜かれたもの、半分燃えて煤になったもの、剣で貫かれたもの、そしてこれがほとんどだが、鋭い牙でえぐられた様なものがいる。そうして、たくさんのイグアナもどきを倒したミミヴォルティーとシバヴォルティーは、敵がいなくなったのを良い事にトンフィーのお腹から飛び出してきたアケのお尻をつついたりかじるふりをしたりして、からかって遊んでいる。そんな光景を見て、ほんわかした気持ちになりそうな自分に気付いたメルメルは、慌てて気合いを入れ直すべく、パチンと勢い良く顔を両手で挟んだ。その音にビックリしたらしく、

目を丸くして犬二匹と猫一匹がメルメルを見た。
「さあ、ミミ、シバ！　猫の姿に戻りなさい！」
「どうしたの～？　どうして～ミミとシバを～猫に戻すの～？」
疲れきって倒れたまま、トンフィーは思わずフレンリーのような喋り方になりながら首を捻った。するとメルメルは、だってと言いながら大きな二匹の犬を指差した。
「このままの姿じゃ鞄に入らないでしょう？　ミミとシバは自力では梯子を登れないもの」
確かに、縄梯子を犬や猫が登るのは難しそうだ。メルメルはウサギの鞄に二匹を詰めて梯子を登る事を思い付いたらしい。なるほど、ナイスアイデアだ。しかし、
「……すぐ行くの～？」トンフィーはげっそりと力のない声で呟いた。
「当たり前じゃない！　ぐずぐずしてられないわ！」
「で、でも僕、ちょっと疲れちゃって……」
「今頃ラインさんもペッコリーナ先生も必死で戦ってるはずよ。ワタシ達だけのんびり休んではいられないわ！」
「そ、そうだね……とほほほ」
そう言われてしまっては、情けない声を出しながらもトンフィーは起き上がるしかなくなってしまった。チリチリとアケが甘えるように近づいてきたのを、再びお腹に仕舞い込んで、「よーし！」と勢い良く立ち上がったが思いの外足にきているらしく、ついよろよろとしてしまった。
「大丈夫？　トンフィー……」
心配そうに首を傾げるメルメルに、トンフィーはぶんぶんと手を振ってみせた。
「大丈夫大丈夫。それに――大丈夫じゃなくたって、まさか僕までメルメルの鞄に入れてもらう訳にはいかないでしょう？」
クスクスと笑いながら、そんな冗談を言えるくらいならば、まあ大丈夫なのだろうとメルメルは少し安心した。

ひーひー言いながらも、トンフィーはようやくと縄梯子をのぼりきった。――そこはやたらと狭苦しい空間で、どれほど疲れきっていても、大の字に寝転がるような事はちょっと難しそうだった。

仕方なく、膝に手をつき息を整えながら周りの様子を伺ってみる。

ここは本当に狭い場所で、四方の壁までメルメルと手を繋げば届いてしまいそうな程だ。

そういえば、そのメルメルの姿がない。

とっくに先に上がってしまった筈だが、おそらく一方の壁にあるドアから隣の部屋へと行ってしまったのだろう。何せじっとはしていられない性格なのだから。

そう考えながらも、トンフィーは少しだけ不安な気持ちになってきていた。原因は下にいる時からずっと聞こえていた、この音だ。ゴロゴロと今では、はっきり何かが転がるような音だと分かる。その音は、この階に来てから明らかに大きく聞こえるようになっていた。

「一体――何の音だろう？」

思わず声に出して呟いて、じっと耳を澄ませてみる。少しずつ、音が近づいてきた気がする。トンフィーはいよいよ不安が膨らみメルメルが心配になってきた。取りあえずドアを開けて、首だけ外に出して周りを覗いて見る事にする。

そこは隣の部屋という訳ではなく細長い廊下になっていた。左右に道が長く伸びており、道の幅はおよそ三メートル程ある。左右どちらの道の先も、およそ五十メートルくらいで緩やかにカーブして先が見えなくなっている。他の部屋へと通じるようなドアもなく、ただ茶色い壁が続いているだけだ。そして、メルメルの姿は――どこにもない。

「メルメルー？」

トンフィーが首を傾げていると、

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

「トンフィーーー！」

「メルメル！」

いよいよ近づいてきた大きな音と共に、左手のカーブの先からメルメルが現れた。両脇にミミとシバを従え猛スピードで走り寄って来る。何故か人も猫も必死の形相だ。

トンフィーが更に首を傾げたその時――メルメルの後ろからカーブを曲がって、突然、「音の正体」が現れた。

「な、な、な、なーーー！」

それは、鉄で出来た丸い玉のようだった。

ゴロゴロと大きな音を立てて、メルメルに追いつかんばかりの勢いで転がって来る。驚きなのはその大きさで、三メートルもの道をいっぱいに塞ぐ程あるのだ。つまり――直径三メートルの巨大鉄球だ。

「わーーーぁぁぁ！　……いたたた」

結局、身動き出来ずに固まっていたトンフィーをまきこみながら、メルメルと猫二匹はダイビングするようにドアに飛び込んできた。

メルメルはすぐさま起き上がり、再び廊下に飛び出した。

「うへぇ～……。あぶなかったわ……」

相変わらず勢い良く転がりながら廊下の先を曲がって行った巨大鉄球を見送って、メルメルは溜め息混じりに呟いた。

「あぶなかったわじゃないよ……。一体どうしたのさ？　――いてて」

トンフィーがお尻をさすりながら立ち上がるのを見て、メルメルは小部屋へと戻ってきた。

「どうしたって――そりゃあ、偵察に行ってただけよ。敵がいる気配もないし、こんなふうに――」メルメルは目を瞑り、耳に手を当ててみせる。そんな事しなくともゴロゴロと相変わらず音は激しく聞こえている。「――変な音は聞こえてるし。やっぱり、ほら。―

―気になるじゃない？」
「そりゃあそうだけども……」
「それで廊下を歩いて進んでたら音がいよいよ大きくなって……。あの玉がカーブの先から現れた時は、心臓が一瞬止まっちゃったわ！」
「僕だって、メルメルの後ろからあの玉が現れた時は、心臓がのどまで飛び出してきたよ」
興奮の余り、互いの冗談にも笑う気になれずに、しばし二人は見つめ合う。
「……」メルメルもトンフィーも考えている事は同じなのだ。
すなわち、
――どうしようか？　で、ある。
「道の先に何かあった？」
トンフィーがたずねると、メルメルはぶんぶんと首を横に振った。
「見えなかったわ。ただ細長く道が続いていた――」
ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ
再び音が大きくなってきた。
「わ！」開け放したドアの向こう側を巨大鉄球が通り過ぎて、トンフィーは思わず飛び上がってしまった。
少しの間ドアの外を見つめ、メルメルはトンフィーに向き直った。
「ず～っとグルグル回ってるのかしら？」
「……たぶん、そうだと思うよ」
「どうやって？　どうして止まらずに回っていられるのかしら？」
「う～ん……」
トンフィーは腕組みをして少し考え、廊下に体半分を出すと手招きした。メルメルも廊下に体半分出すのを待って、トンフィーは廊下の先を指差した。
「緩やかだけど上り坂になってる。つまりこのフロアは全体的に斜めに出来ているんだよ。こんなふうに……」右手の平をピンと張り、指の先を下にして斜めにする。「鉄球はフロアの端に作られた廊下

をこうして転がっている」手首から指の先へと、左手の人差し指の先を滑らせた。

「分かったわ！　下り坂で勢いをつけて転がったまま、その勢いで今度は上り坂を転がるのね！　それでずーっと止まらずに回り続けるんだわ！」

　メルメルは嬉々として言ったが、トンフィーはゆっくりかぶりを振った。

「それは無理だよ」

「どうしてよ？」メルメルは口を尖らせる。

「摩擦があるからね。玉はしばらく転がるうちに、自然と止まってしまう筈だよ」

「……摩擦？」

「うん。でも、下にいる時からずっと音は聞こえていたから、何かの方法を使って鉄球を止めずに転がしているはずなんだけども……」

　メルメルに摩擦について難しい説明をしても仕方ないので、トンフィーはあえてはぶいてしまった。メルメルも特には気にせず、要するに鉄球が回り続けるのは無理なんだと理解する。二人の子供は、良くお互いを理解しているのだ。

「そうだな……。たぶん単純な方法だよ。どこか廊下の先に発射装置みたいなのがあるのさ。ええっと――パチンコみたいに！　さっきから音のテンポが違うのはそういう事だと思う。ほら――だんだん勢いがなくなってきた。ゴロン、ゴロン、ゴロン。ゆっくり転がってる」

　トンフィーは聞こえてくる音に合わせて呟く。

「あ！　止まったわ！」

　目を瞑り耳を澄ませていたメルメルが、驚いたように目を見開く。止まったのは一瞬で、すぐに再び音が聞こえてきた。

「ほら、勢いがいいだろう？　きっと発射されたばかりなんだよ。……ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！　――わ！」再び鉄球が通り過ぎて、分かりきっているのにもかかわらず、トンフィーはまた少し飛

び上がってしまった。「……わ、わかった？」

ドアの向こうを見つめていたメルメルは、しばらく目をパチクリさせていたが、ふと我に帰ってトンフィーに向き直った。

「わかったけど――それで、どうすればいいの？」

「どうすればって……。つまり上へ行く方法はないのかって事かな？」

「そうよ。いつまでもここにはいられないわ。先へ進まなくっちゃ！」

「う～ん。勿論どこかに上へ行く階段があるはずだけれども……。う～ん」

トンフィーは腕組みしながら思案した。しかし――メルメルが返事を待ちながらもドアの方を時折ちらちらと気にするような素振りを見せて、まさか今にも廊下へ飛び出して行く気じゃないだろうかと不安にさせられて、今一考えに集中出来なかった。

「お、恐らく、廊下の先のどこかにここと同じように部屋があって、そこに階段もあるんだと思う。でも、この場所からは結構離れてると思うんだ」

「どうして？」

「だって、このぐるぐる回る鉄球の仕掛けは、たぶん敵を退ける為にカルバト族が作ったものなんだろうけれども、もしも、次の階に簡単に上がられてしまったら仕掛けは大して意味がなくなってしまうでしょ？」

「そりゃあそうね。じゃあ、この部屋の真裏くらいにあるのかしら？　――取り合えず少し様子を見てくるわ」

「ま、待ってよメルメル！」

気の早いメルメルはとっととドアを出て、今度は先ほどとは逆の右方向に向かって歩き始めた。慌ててトンフィーが袖を引いて連れ戻す。

「ちょっ――何よトンフィーったら！」

「とりあえず様子を見になんて行ったら、鉄球にぺっしゃんこにされちゃうよ！　ちゃんと考えないと……」

あんまり考える事が得意ではないメルメルは不満そうに口を尖らせた。
「考えるって何をよ？　トンフィーは少し慎重過ぎるところがあると思うの。取り合えず行動する事も必要だわ！」
「でもさ、一歩間違えたら死んじゃうんだから少し慎重にならないと。――それに、メルメルは今右に進もうとしたけども、それは一体どうして？」
「どうしてって……。さっきは左に行って何もなかったから今度は右に行ってみただけよ」
「でも、多分上への階段は左に近い方にあると思うんだ」
「どうしてよ？」
相手が大分話に集中し始めたので、トンフィーは油断なく掴んでいたメルメルの袖をようやく離した。
「人間心理だよ。だって、どちらかに進んでどこにあるか分からない階段を探し出してたどり着こうと考えたら、鉄球が通り過ぎたと同時に走り出して、鉄球を追いかけるように進むのが普通だと思うんだ。鉄球が向かって来る方に行くなんて何だか怖いでしょ？　それに、当然同方向に進んだ方が遠くまで行く事が出来る。だから、逆に仕掛けを作ったカルバト族の方は、左手に近い方に階段部屋を作ったと思うんだ」
メルメルはトンフィーの言った事を考えてみた。そして、結局本当は分かったような分からないような感じだったが、とりあえず分かったと答えておいた。
「じゃ、左手の方に進むわ！　あ……。大分近づいてきたわね。今度通り過ぎたら、左に向かって思い切り走って階段までたどり着いてみせるわね！」
メルメルはスタート前のリレーの選手のようにドアの前で構えた。
「だ、だめだよメルメル！　もう少しじっくり考えないと――」
「え～……。まだ考えるの？」メルメルはとことんうんざりした様な顔になる。

「だって、本当に走ればたどり着ける場所に階段部屋があるとは限らないよ？　ある程度行ったら、戻って来ないと鉄球に踏み潰されてしまう」

「分かってるわよ。鉄球が見えたら急いで逃げるわ」

「それじゃあ間に合わないよ。さっきだってギリギリだったんだから、もっと先へ進んでしまったら逃げきれない――わ！」

その時、またしても巨大鉄球がドアの向こう側を通過して行った。トンフィーは少しは慣れてきたようで、今度は驚いた声を出しただけで飛び上がりはしなかった。そして、

「一、二、三、四、五――」

すぐさま懐中時計を取り出して時間を測り始めた。さすがのメルメルにもその意図する事が分かって、邪魔をせずにじっと見守る事にした。

「二三、二四、二五――」

退屈になってきたので、メルメルは足元のミミとシバに目をやる。するとシバがやけに丁寧に顔を洗っているのを見て、得心顔で一人頷いた。

（明日は雨なんだわ）

昔プラムじいさんに、「猫が顔を洗う時、耳の手前しか洗わない時は晴れ。耳の後ろからしっかり洗う時は雨なんじゃよ」と教えられ、「じゃあ、曇りの時は？」と言って、少し困らせた事があるのを思い出したのだ。

「二九、三十、三一――止まった」

パチンコの仕掛けに鉄球がさしかかったのだろうか？　一瞬転がる音が止まった。

「動きだしたわ！」「三四、三五、三六――」

トンフィーは再び時間を測り始める。

今度は、トンフィーのお腹から顔を出しくうくうと気持ち良さそうに眠っているアケを、メルメルは眺めてみた。時折ヒゲがピクピクとして、なんだか可愛い。疲れているのだろうかと考え、すぐに、

それも当然の事だと思った。悪魔の兵隊だのハゲタカもどきだの恐ろしい化け物に遭遇しながら、長大な距離を旅し、こんな見知らぬ土地まで連れてこられたのだ。

メルメルは少し目線を上げて、一心に数を数えているトンフィーを見る。

服も顔も土埃だらけで、手や足には擦りむけたような跡がたくさんある。ふと自分自身の体に目をやれば、トンフィーと同じ様に土埃にまみれ、キュロットスカートから出た膝小僧はかさぶたが出来ているし、服など返り血がついてピンクの水玉模様の中に不気味な赤黒い水玉が混じってしまっている。そんなボロボロでみすぼらしい自分達を見て、メルメルは、何故だか――にっこりと笑った。

（よく頑張ってるわ、ワタシ達。こんなに一生懸命頑張ってるんだから、きっとおじいちゃんを助け出す事ができるわ！）

「七一、七二、七三、――わっ！」

再び鉄球が通り過ぎた。トンフィーの悲鳴を聞いてメルメルは物思いから覚めた。

「七三秒ね」

「うん……。よし。ねぇメルメル、この廊下の先のどこかに上へ行く階段部屋があると思うんだ」

「分かってるわよ。それを探してくればいいんでしょ？」

メルメルは腰に手を当てて、ちょっぴりえらそうな顔をした。

「そうなんだけど、その部屋には階段だけじゃなくて、ぐるぐる回る鉄球の仕掛けを止める装置があると思うんだ」

「仕掛けを止める装置？」メルメルは腰に当てた手を思わず離した。

「だってほら、ずっとぐるぐる回り続けていたら、仕掛けを作ったカルバト族だって行き来出来ないでしょう？」

メルメルは目の玉を上にして考える。そして思う。――そりゃあそうね。

「だからメルメルには、もしも階段部屋にたどり着いたら、その装置、――多分ボタンとかレバーかだと思う。――それを止めてほし

いんだけど……」
「分かったわ！　まかせておいて！」
ドンと胸を叩いて、メルメルは再びドアに向かってスタートの構えをした。トンフィーは慌ててメルメルとドアの間に割り込んだ。
「め、メルメル、分かってる？　様子を見に行くだけでいいんだ。そうだな……二十秒だ。――二十秒経ったら、すぐに引き返して来て」
「二十秒？　……三三秒も余裕があるじゃない」
つまり――鉄球が一周するのに七三秒。メルメルが二〇秒進んで――引き返して来るのに更に二十秒かかるから、合計四十秒。七三―四十は三三だから、三三秒の余裕というわけだ。メルメルにしては実に素早い計算だった。
――帰ってくる時間を考慮しても、後十秒は先に進める。不満そうに頬を膨らませたメルメルに、トンフィーは厳しい顔で首を横に振った。
「帰りは疲れているから少し時間がかかるだろうし、それに――無理をしちゃダメだよ。本当に危険な事だから」
「だけど、上への階段を探し出さなきゃ先へは進めないのよ？　多少無理してでも、ギリギリまで行かなくちゃ――」
トンフィーはメルメルの言葉を聞いて青くなり、両手を広げてドアを塞いだ。
「だ、ダメだよ！　そんな事言うなら、僕ここを退かないよ！」
「トンフィー……」
興奮して耳まで赤くしているトンフィーに、メルメルは困ったように眉をハの字にした。
「む、無理しなくともいい理由もあるんだ。僕、多分この部屋にも装置を止める仕掛けがあると思う」「この部屋にも？」
メルメルはキョロキョロと周りを見回す。何の変哲も無い茶色の壁が天井まで続いている。唯一、壁以外にある物と言えば、部屋を照らす為のランプが壁に掛けられているだけだ。床を見ればメルメ

ル達が上がってきた穴が開いているだけで、やはり他には何も無い。仕掛けを止める装置などどこにも見当たら無いではないか。

「無いじゃない。そんな装置」

「勿論隠されているんだよ。そんな物、簡単な場所にあったら敵にすぐ止められちゃうでしょ？　だけど、こちら側にも止める装置が無いと外から味方が入る事も出来ない。きっと、どこかに隠して作ってると思うんだ」

「隠すって……どこに？」

トンフィーは壁にバッと張り付き、拳でコンコンと叩いてみせた。

「壁の中に空洞があるとか……」

そうしてコンコン、コンコンと叩きながら少しずつ横に移動して行く。

「……そうやって探していくの？」

トンフィーは頷いて作業を続けているが、メルメルには何だか日が暮れそうな（とっくに暮れているんだ）話だと感じた。

「じゃあ、トンフィーがそうやってる間に、ワタシはちょっぴり様子を見てくるわね」

「……」コンコンを止めて、トンフィーがじっとりと疑わしそうな目でメルメルを見つめた。

「わ、分かってるわよ！　……二十秒で戻ればいいんでしょ？　ちゃーんと帰ります！」

「本当だよ？　約束だからね、メルメル……」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

再び音が近づいてくる。メルメルはドアの前に三度構え、トンフィーに向かって親指を立ててみせた。トンフィーは相変わらず不安げにそれを見つめている。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「――！」

目の前を巨大な鉄球が通り過ぎた。トンフィーは遂に悲鳴をも堪える事に成功した。飛び出して行ったメルメルと二匹のトラ猫を見

送って、慌てて懐中時計を取り出した。

カルバトの塔　２０

「い～ち、に～い、さ～ん、よ～ん」

メルメルは廊下を猛スピードで駆け抜けながら、あえて声に出して数を数えていた。こうすると少し疲れてしまうのだが、頭の中で数えただけでは正確に時間を測る事が出来ない気がするのだ。

「し～ち、は～ち、きゅ～う、じゅ～う」

もう五十メートル以上は進んでいると思うが、周りの景色に何ら変わった所は無かった。遥か先、突き当たりのように見えるカーブまで部屋らしき物はありそうにない。

「じゅ～ういち、じゅ～うに、じゅ～うさん、じゅ～うし」

余りに代わり映えしない景色に、いささか疲れを感じて足元に目を落とすと、ミミとシバが必死で横を走っているのに気付く。

「じゅ～うご、じゅ～うろく、じゅ～うしち、じゅ～うはち」

シバがあまりに必死の形相をしていて、もしかして倒れはしないかと少し心配になりながらそちらばかり見ていた。

「じゅ～うく、にぃ～～～！」

往生際悪く長めに語尾を伸ばして前を見たその時、廊下の先に何か今までとは違う物が見えた気がして慌てて目を凝らしてみる。

「……じゅう」

頭の中にトンフィーの声が響く。

――本当に危険なんだからね、メルメル。

しかし――廊下の先に見えてきたのが部屋の入口らしき物なのだと、メルメルは気付いてしまった。

「……に～じゅういち、に～じゅうに、に～じゅうさん」

数を数える事も前に進む事も止められずに前方を睨み据える。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

部屋の入口が近づくと共に、あの音もどんどん大きくなってきていた。

「に～じゅうし、に～じゅうご、に～じゅう――！」

その時遂に、カーブの向こうから、再び巨大な鉄球がその姿を現した。

――おじいちゃん！

「今、十八分四九秒だから、十九分九秒までだな……」

トンフィーは時計を確認し、メルメルの出て行ったドアをチラリと見た。

――ちゃんと引き返して来るかな？　一瞬疑うような気持ちになったが、すぐに頭を振って、その考えを否定する。もしも引き返さなければ大変な事になるのだ。トンフィーは急かされるような気持ちで部屋を見回した。

この部屋にも仕掛けを止める装置がある筈だ。それを見つけ出せればもう無茶な事などしなくとも良い。しかし、壁の空洞を叩いて探して回るのは、いかにも効率が悪い気がしていた。それに、少し不安に思うのは、子供の背丈では届かないような場所に仕掛けが隠されている可能性がある事だった。

（でも、それにしてもカルバト族だって、そんなに分かりにくい場所には作らない筈だ。何か目印になる様な物が……）

だが、部屋にはそんな物は無い。あるものと言えば部屋を照らしている壁掛けランプくらいのもの。そう思ってランプを見上げて、トンフィーはふとある事に気付いた。

（……？）

ランプと壁をつないでいる掛け金の部分が少し浮いているような感じで、全体的に僅かに斜めっているのだ。

（……！　――そうか）

もしかしてあれがと思ったが、あいにくランプは高い場所に据えてあり、トンフィーには届きそうになかった。台か、引っ掛ける物か、何か丁度良いものがないかと慌てて周りを見渡す。部屋の中に役に立ちそうな物は無く、今度は自分の持ち物を考える――。メルメルが置いていった鞄は役には立たないだろうし、今日はあいにくズボンにベルトもしていない。どうしようかと思って、ふと気付いて慌てて時計に目をやる。

――十九分十一秒。

「ま、まずい！」トンフィーは急いでドアを飛び出して叫んだ。「メルメル！　メルメール！　時間だよ！　戻って来てーー！」

廊下の向こうからの返事は無かった。遠すぎて相手の返事する声が聞こえないのか、そもそもこちらの声が向こうに届いていないのか……。

仕方無くトンフィーは今度は慌てて部屋に戻って、何故か自分の着ている長袖シャツを脱ぎだした。潜り込んでいたアケがビックリして飛び出す。トンフィーはボタンを引き千切りそうな勢いで、超特急でシャツを脱ぎ、片方の袖口を掴むとランプ目掛けて放り投げた。

一度目は上手くかからず、焦りながらももう一度投げると、今度は上手い具合にランプに服がかかり、もう片方の袖口が垂れ下がってきた。トンフィーは全体重をかけて両方の袖口を引っ張った。一瞬、ギシリと音がして、

ガチャーン！

「……いっ、てて」

勢い余って転んでしまったトンフィーは、自らの洋服を掴みながら体を起こした。足元に転がったランプを見つめ、次いで、そのランプが取り付けてあった筈の壁を見上げ愕然とした。そこには――

何かを無理やりもぎ取ったような、ささくれ立った跡があるだけだった……。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

ハッとしてドアを見ると、巨大な鉄球が目の前を通過した所だった。トンフィーは更に愕然とする。

――鉄球が通り過ぎた。メルメルが、――メルメルが戻って来ていないのに。メルメルが……。

あまりの事に何も考えられずに、トンフィーはふらりと立ち上がった。音は、いまだに遠く聞こえている。足元から震えが立ち上ってくる。

――もしも、階段と仕掛けのある部屋にたどり着いたなら、鉄球が止まる筈だ。つまり――部屋にはたどり着いていない。それなのに、メルメルは戻って来なかった。

トンフィーは目の前が真っ暗になり、思わず壁に手をついた。

「そんな……そんなぁ……」

涙が込み上げてくる。

「にゃ～ん」

チリチリ……チリチリ……。

アケが鈴を鳴らしながら部屋を出て行った。

「あ、アケ……！」

トンフィーは慌てて追いかけようとして――気付いた。廊下の奥から、チリチリと遠ざかっていく鈴の音が聞こえてくる。ごく小さい音だが、とても静かだからいつまでも聞こえている。

――そう、とても、静かだから。

トンフィーは熱に浮かされたようにふらふらと廊下に出た。やはり――

あの音が止まっている。

「仕掛けが……止まった」

顔を上げ、大急ぎで廊下を駆け出す。途中で、呑気にお尻をふりふり歩いていたアケを追い抜くと、慌てたように後ろからチリチリ

と鈴の音がについてきた。異常なほどに長く感じるその距離を走り抜けると、廊下の先に部屋の入口らしき扉が見えてきた。息を切らし駆け込む――と、腰に手を当てて背中を向けて壁の方を見ている少女の姿が目に飛び込んできた。

気配に気付いて、その後ろ姿がこちらを振り返った。

「ねぇトンフィー、もう一度このレバーを上げると動き出すのかしら？　ちょっと試していい？」

そして息が上がり過ぎたのと、興奮し過ぎたので喋れずにいるトンフィーの姿を見て、目を丸くした。

「どうして服を脱いだの？　――そんなに暑いかしら？」

憎らしいほど呑気な声に、トンフィーは思わずがっくりと膝をついてしまった。

カルバトの塔　２１

「――そもそも、メルメルは初めから僕の言う事を聞く気なんかなかったんだ！　一体どれだけ危険な事だったのか分かってたの？　いくらおじいさんを救い出す為だからって、もしも大怪我したり、万が一、し、――死んでしまったりしたら、救い出すも何もなくなってしまう。まさに本末転倒だよ。それなのにメルメルは――」

永遠と続くのではないかと思われるようなトンフィーのお説教をうんざりと聞きながら、メルメルは心の中で、（しまったな……）と呟いた。何が「しまった」なのかと言うと……。

実は先ほど、無事なメルメルの姿を見たトンフィーが、

「いや～……。鉄球が通り過ぎてもメルメルが戻らないから、まさか鉄球に踏み潰されたんじゃないかとドキドキしたよ……。でも、やっぱりメルメルはさすがの俊足だなぁ。ちゃんと階段部屋までたどり着いちゃうんだもんなぁ」

と、ホッとしたようにニコニコとしているのを見て、つい調子に乗ってメルメルは言ってしまったのだ。

「いや～……。さすがのワタシも今度はもうダメかと思ったわ。ようやく階段部屋が見えた時にはとっくに約束の二十秒を超えちゃってるし、遂には鉄球が現れて、ワタシが部屋に飛び込むのが先か、それとも鉄球がワタシを踏み潰すのが先か……。――ふぅ。今考えれば本当に危なかったわね……」

これを聞いた途端に、トンフィーの顔色が変わってしまったのだ。

「メルメルは僕が慎重すぎると言ったけれども、僕にはメルメルが余りにも無謀すぎると思う！　今日の事だけじゃないよ。これまでだって、こういう事はたくさんあった。――覚えてるかな？　僕らがまだ園に入りたての頃、クラスのみんなで川に遊びに行った事があっただろう？　あの時だって――」

まだまだ続きそうなトンフィーのぐちぐちガミガミを早く終わらせたくて、メルメルは七階への階段を急ぎ足で登っていく。そして内心で小さく舌を出して、（そんな事言ったってワタシのおかげで上へ上がれるんじゃない）などと思っていた。しかし、

「メルメルは自分のおかげで上へ行けるなんて、得意げな気持ちでいるかも知れないけれども――」

見透かされたように言われて、思わず、（うへぇ）と、心の中で舌を巻いてしまった。

「僕、もうすっかり呆れてしまった。メルメルはいくら僕が心配して警告したって、結局好き勝手にやるんだもの。だったら、これからはメルメルが無謀な事をしようとしても注意しないし止めない！　その代わり何かあっても助けもしないし心配もしないからね！　それにこれからは――」

鼻息荒く言うトンフィーに、メルメルは困ったような情け無いような顔をした。どうにもいつもと立場が逆である。

実は、トンフィーとしても今回はさすがにものすごく心配したのに、メルメルが余りにものほほんとしていたから、ちょっぴり腹を立ててしまっただけなのだ。それにしても本当はそろそろお小言も終わりにしたいのだが、珍しく強気で喋り続けたせいでなんだか勢いがついてしまい、口が止まらなくなってしまっているのだった。

（……ちょっと言い過ぎかな？）

ぐちぐちを続けながらも、心配になってメルメルの横顔をちらりと覗き見ると、意外にも神妙な様子で俯いていたので、トンフィーはドキリとしてしまった。

（や、やっぱり言い過ぎだったんだ！）

しまったと反省しかけたその時、メルメルがふと顔を上げにっこり笑った。

「あ！　見てトンフィー。七階の明かりだわ！」

言われて上を見れば、確かに暗い階段に光が降り注いで、次の階にたどり着いたのだという事が分かった。ようやくトンフィーの「

お説教」から解放されると喜んだメルメルは、立ち止まる素振りも見せずにウキウキと足早に階段を上がって行く。

「メルメ――ムグ」

敵がいるかも知れないのに様子を窺う事もしないで、またしても無謀な行動を取ろうとするメルメル。トンフィーは危うく注意を促そうとしてしまい、それを寸でのところで自らの手で口を押さえて止めた。

（まったくもう……。全然反省してないじゃないか！）

しぼみかけた怒りが再び膨らんできて、トンフィーはムカムカしながら階段を上がった。

「まーた何にも無い部屋ね……。――あ、でもドアがあるわ。あっちの部屋に階段があるのかしら？」

だだっ広い部屋には確かに何にもなく、部屋の一番奥にドアがついているだけだった。

「メ――うぐぐ」ドアに駆け寄るメルメルを制そうとして、トンフィーはまたしても手で口を塞いだ。

（やっぱり反省してないや。どうしてこう脳天気なんだろ？　そりゃあ、それがメルメルの良いところなのは分かるけど、もう少し慎重にしないと――あれ？）

姿を見ているとあれこれと言いたくなるので、メルメルから目をそらして何気なく見つめていた近くの壁に、妙な物を見つけてトンフィーは歩み寄った。

（……何のしるしだろう？）

ゴルフボールくらいの小さな丸が壁に書かれている。そして、その周り直径三十センチくらいが切り取られたように二ミリくらいへこんでいるのだ。

トンフィーは首を傾げ、他にも変わったところがないか周りの壁を見回してみた。すると、しるしから二メートル程離れた壁が、逆に二ミリ程出っ張っている事に気が付いた。それは縦長の四角くで、大人の背丈より少し大きいくらいのサイズだった。――そう、ちょ

うど人が出入りするのに手頃な大きさだ。
（ひょっとしたら……）
トンフィーは首を傾げたまま、眉根を寄せて、少しだけ丸いしるしのついた壁を押してみた。すると、
ズズズ……。大きな四角くの方が、少し飛び出してきたのだ。
「……！　メルメル――」振り返ると、丁度メルメルはドアに辿り着き、その取っ手に手を掛けたところだった。
「だ、駄目だメルメル！」
――ガチャリ。
「きゃあぁぁぁ！」
一瞬、トンフィーは頭が真っ白になった。ドアを開けた途端に、悲鳴と共にメルメルが忽然と消えてしまったのだ。
「め、メルメル？　――メルメル！」トンフィーはようやく我に帰って慌ててドアに走り寄った。
ドアの向こうの部屋はとても暗くて、まるで壁にぽっかりと穴が開いたように見える。もしかしたら暗闇の中に紛れてしまって、メルメルの姿が見えなくなっているだけかも知れない。と、トンフィーは少し楽観的に考えてみた。
オォォォォ……
何者かの唸り声が聞こえてきて、トンフィーはドキリとして思わず立ち止まってしまった。楽観的な気持ちも一瞬にして吹き飛んでしまう。
――唸り声……。先程のメルメルの悲鳴……。
ゴクリと唾を飲みこんで、震える手で体にかけた弓を掴む。その時、開いたドアの方から冷たい風がビュゥゥと吹き付けてきて、トンフィーの柔らかな薄茶色の前髪をフワリと持ち上げた。

（……？　どうして建物の中なのに風が……）

トンフィーはドアに向けてゆっくりと足を運び始めた。すると、不思議な事に前へ進むごとに吹き付けてくる風の勢いがどんどん強くなってくるのだ。

オォォォォ……

――唸り声？　……違う。これは――そう。風の音だ。

目を見開き、残りの距離を一気に駆け抜けた。ドアの縁に手をかけて体を支え、ぽっかりと開いた暗闇の中へ半身をぐっとせり出させる。

ビュオォォォ……

猛烈な風が吹き付けて、トンフィーの髪や服がバタバタとはためく。

もしかしたらとは思ったが、目の前に広がる光景にトンフィーは口をパクパクさせた。

「こ、ここは……」

先程ドアの外から見えていた時は真っ暗闇に思えたが、こうしてその中に身を乗り出してしまえば、真の闇という訳ではないのだという事が分かる。

雲一つない空には幾千万の星が瞬き、弓のように細長い月が闇夜を照らしている。

――空に浮かぶ月と星。それは紛れもなく外の景色だった。――そうなのだ、これは塔の外へとつながるドアだったのだ。風がやたらと強く吹くのも当たり前。ここは地上から遠く離れた塔の上なのだから……。

どれ程の高さに立っているのかと、トンフィーは恐る恐る下の方を向いた。星の明かりも届かない遥か地上の景色はさすがにトンフィーの目にも見えはしなかったが、濃く深くなっていく闇がその高さを物語っていた。

「め、メルメル……」
トンフィーは吹き付ける風に目を細めながらも、呆然とその深い闇を見つめた。
あの時――何の躊躇もなくドアを開けた瞬間に、メルメルはきっとこの闇の中に落ちて……。トンフィーは強く唇を噛みしめた。
「ぼ、僕が止めていれば……。せめて――せめて注意を促していれば……。うぅ……」
意地を張って声をかけなかった自分に腹を立てても、もう遅いのだ。頬を大粒の涙がつたう。
「メルメル……うぁぁ」「――トンフィ～」
その時、ビュービューと風の唸る音に紛れてカの鳴くような小さな声が聞こえたような気がして、トンフィーはハッと顔を上げた。
「トンフィ～……」
今度こそはっきりと足元から声が聞こえてきて、慌ててそちらに目を向ける。「――メルメル！」
「トンフィ～！　早く手伝って～」
なんと、落っこちてしまったものだと思い込んでいたメルメルが、トンフィーの足元でドアの縁をしっかりと掴み上へ上がろうともがいているではないか！
「早く早く～」「め、メルメル！　良かった……」
「良くないわよ～！　風が強くてどうにも……。早く持ち上げて～」
どうやらメルメルは落ちる寸前でドアの縁に手を引っ掛けて難を逃れたようなのだが、いかんせん風があまりにも強くて体を引き上げる事が出来ずにいる様なのだ。トンフィーはメルメルの腕を両手で掴み、踏ん張りを利かせるために片足を壁にかけた。
「よっ……いしょ！」「ううーん！」
何とか顔がドアの縁から覗いてきた、その時、
バサバサバサ！
「きゃあぁぁ！」
「メルメル！　うぐぐ……」

何かがメルメルの足にぶつかってきて、ガクンと体が元の位置まで落ちてしまった。トンフィーはメルメルに引っ張られ、腕がもげるかと思うような痛みを感じてギュッと目を瞑った。それでも何とか掴んでいた腕を離さずに耐えると、一体何があったのだろうかと、ゆっくりと瞼を開いた。

バサッ、バサッ、バサッ、バサッ！

「……は、ハゲタカもどき！」

カルバトの塔　22

何とメルメルの足元をすくったのは、あのハゲタカもどきだったのだ。月明かりをうけてきらりと輝く首輪、それに他のハゲタカもどきより二回りくらい体が大きいから、すぐにそれだと分かる。

「キェー！　キェー！」

「め、メルメル、早く上がって……！」

空の上をくるくる旋回しながら、まるで威嚇するように鳴き声をあげる恐ろしげな顔を見て、トンフィーは慌てふためいた。メルメルを引き上げる腕に力を込める。

「キェーー！」

「く、来る！　避けてメルメル！」

旋回するのを止めてこちらに滑空して来たハゲタカもどきに気付き、トンフィーは悲鳴をあげる。

「よ、避けるったって……」

ぶら下がった状態でそれ程の事が出来る訳もなく、メルメルは仕方なく膝を曲げてぴょんと足を上に持ち上げた。

「キェー！」

これが意外と良かった。メルメルの足を攻撃しようとしていたのか、ハゲタカもどきのくちばしは空を切ってしまったのだ。仕方なく、もう一度体制を整えるように、再び空を旋回し始めたハゲタカもどきを見て、トンフィーは急いでメルメルを引き上げるべく力を込めた。

「キェー！」

「――ファイヤーボール！」

今度は鋭い鍵爪を持ち上げて突っ込んできたハゲタカもどきに、トンフィーはとっさに魔法を投げつけた。

「だ、駄目だ！　もっと集中しないと……」

火の玉はハゲタカもどきから外れて、彼方に飛んでいってしまっ

た。
「キェキェキェー！」
ハゲタカもどきは魔法に少し驚いた様子で、再び離れた所を警戒するように旋回している。
「よ、よし！　今のうちに……」
攻撃を中断しているハゲタカもどきを見て、トンフィーはメルメルを力一杯引き上げた。ところが、
「キェー！」
「き、きた～！　ファイヤーボール！」
残念ながらトンフィーの放った魔法は、またもやハゲタカもどきには当たらなかった。
それにしても――ハゲタカもどきはまるでメルメルが登るのを邪魔するように攻撃を繰り返してくる。――このままでは切りが無い。
「メルメル……。少しの間だけ手を離してもいい？　我慢出来るかい？」
「え……」メルメルは一瞬不思議な顔をしたが、トンフィーの考えに気付いてコクリと頷いた。
トンフィーはメルメルの手を離すと、脇に置いていた弓を拾い上げ、ドアの外に向けて弦をしぼった。狙うのは当然――ハゲタカもどき。
「うむむむ……」
しっかりと狙いを定めて打ちたいのだが、子供の軽い体は風に煽られ、なかなか矢を放つ事が出来ないでいる。
「ううう……」
トンフィーの耳にメルメルの苦しそうな呻き声が聞こえてきた。
ビューーーー……
「だ、駄目か……」
放った矢は、ハゲタカもどきをわずかにそれて、夜の闇の中へと消えていった。

「キェーー！」
当たらなかったとはいえ、攻撃された事に腹を立てたのか、ハゲタカもどきが再び襲いかかってきた。トンフィーは慌ててもう一度弓を構える。
「――も、もう少し……。もう少し……」
真っ直ぐ、どんどん近付いてくる不気味な姿に、思わず矢を放ちたくなるのを額に汗を浮かべながらもグッと堪える。そうして、ぎりぎりまで相手を引きつけておいて、
「今だ！」

ビューーバス！

「ギェ、ギェ、ギェ～！」
矢は、ハゲタカもどきの羽の付け根に深く突き刺さった。奇声をあげながらハゲタカもどきはぐるぐると空を飛び回り、少しずつ下に落ちていった――。
「や、やった……！　メルメル――」
トンフィーが再びメルメルを引き上げようと手を伸ばした、その時、
「まだよ！」
「え……」
メルメルの悲鳴に驚いてトンフィーが前方に目を移すと、体に深々と矢を突き刺したままのハゲタカもどきが、こちら目掛けて飛んで来るではないか！　その目は正気を失い、メルメルとトンフィーに対する怒りの炎を燃え上がらせていた。
――間に合わない！
ペッコリーナ先生ならいざ知らず、自分の腕ではハゲタカもどきがメルメルに突っ込む前に撃ち落とす事は出来ない。それでも何とかと、トンフィーが弓に手を伸ばしかけた、次の瞬間、
「フギャギャギャー！」「ギェギェ～！」

「あ……」「ミミ！　シバ！」
なんと驚いた事に、こちらに猛進してきたハゲタカもどきに、ミミとシバが飛び付いたのだ。
「ギシェー！」突然の事に、ハゲタカもどきの大きな体が一瞬ぐらりと傾いた。
もしかしてそのまま落ちてしまうのではないかと、メルメルとトンフィーはヒヤリとしたが（だってそれだと、ミミとシバも一緒に落っこっちゃうんだ）ハゲタカもどきはバサバサと激しく羽をはためかせ、辺りをグルグル飛び回り始めた。おそらくミミとシバを振り落としたいのだろうが、二匹はハゲタカもどきの首っ玉や背中にスッポンのようにしっかり噛みついて、離れそうにない。
「ミミ！　シバ！　戻ってきなさい！」
メルメルは、万が一にも二匹が振り落とされはしないかとヒヤヒヤしていた。それに、なんだかハゲタカもどきは羽の動きに力が無くなってきたような気がするのだ。

バサッバサッ……バサッ……バサッバサッバサッ……

「ま、まずい……！　ミミ！　シバ！　戻っておいで！」
少し落ちては慌てて羽をばたつかせるその様子に、トンフィーは自らの放った矢がハゲタカもどきから命の炎を奪おうとしているのだという事に気が付いた。――その事を後悔している訳ではない。メルメルを救うため、自分達の命を守る為には仕方がなかったのだから……。しかし――今すぐ死なれては困る。ミミとシバを乗せたまま落ちるのはいけない。
「だ、駄目だ……！　この距離じゃ……」
「もっと――もっとこっちに来なさいよ！　ほら！　ワタシを落としに来なさいよ！」
メルメルの捨て身の誘いも、ハゲタカもどきの耳にはもう届かないようだ。ミミとシバもスッポン攻撃を止めて、その背の上で緊張

したように固まっている。事態のまずさが分かっているのかも知れない。

「どうしよう……！　どうしよう、どうしよう、トンフィー！」

メルメルはよじ登るのもすっかり忘れ、今にも力を失いそうなハゲタカもどきを見てパニックを起こしてわめいた。

「どうしようって……ううーん」

トンフィーは、ハゲタカもどきを引き寄せるのは難しいと考えた。何とか、ミミとシバを――

「そうだ！　メルメル、変身だ！」

「へ、変身？　な、何によ！　空を飛べる生き物なんて戦った事な――」

「ハゲタカもどきに変身するんだ！」

メルメルはハッとして、視線をミミとシバに移した。トンフィーの最高のアイデアに顔が自然とほころんだ。

「ミミ！　シバ！　変身よ！」

二匹は一瞬きょとんとしたが、メルメル達の意図する事が分かっているのか分かっていないのか。取り合えず、スチャリとハゲタカもどきの背の上で立ち上がった。

そして――いつものあのポーズ。

「ニャーニャーニャーニャー！」

「ミラークルクル、ハゲタカもどきにな～れ！」

ピッカー！

暗い夜空が、まばゆい光に包まれ、メルメルもトンフィーも、きつく瞳を閉じた。

メルメルはゆっくりと――そしてにこやかに瞼を開いた。ところが次の瞬間、その笑顔が凍りついてしまった。何故なら、ハゲタカ

もどきの背の上には二匹の……、

ハゲタカもどきもどきがいたからだ。

「あ、あ、ああ～！」「しまった！　ま、また力不足だ！」

ミミもシバも大きさは猫の時と変わらず、ミミは顔だけがハゲタカもどきに、シバの方は顔は猫のままだが、爬虫類のような不気味な尾が生えている。

「――つ、翼が一枚しか……あ、あれじゃあ飛べないよ……」

そうなのだ。ミミには右の肩から翼が一枚。シバには左側に一枚だけ。

「ニャ～……」

何だか力なくシバが鳴いた、その時。

「――ああ！」

ぐら～っとハゲタカもどきの体が傾いた。まったく羽を動かそうともしていない。どうやらもう完全にこと切れてしまったようなのだ。

「ミミ！　シバ！」

パサパサパサパサ！

傾いていくハゲタカもどきの背中の上で、二匹は必死で羽を動かした。しかし、翼が一枚だけでは飛ぶ事など出来るはずもなく、遂には完全に力を失ったハゲタカもどきと共に、地上に向けてまっしぐらに落ちていってしまった。

「ミミー！　シバーーー！」

カルバトの塔　２３

メルメルの悲壮な叫び声が夜の闇に響く。トンフィーは呆然と下を向き、奈落のような暗闇を見つめた。やがて辺りには吹きすさぶ風の音と、悲痛なすすり泣きだけが聞こえるようになった。

トンフィーは肩を震わすメルメルの腕をぐっと掴み、上へと引っ張った。

「メルメル……。さぁ、上がって……」

しかしメルメルの腕に力が込められる事はなく、逆に徐々に体の力が抜けつつあるようだ。

「メルメル……」

「うっうっ……ミミ……シバ……」

「メルメル」

「ひっく……うっく……」

「――メルメル！　ミミとシバが必死で守ってくれた命を無駄にする気かい！」

ハッとしてメルメルが上を向くと、そこには顔を真っ赤にしたトンフィーの、怒ってるような泣いているような顔があった。

メルメルはそこから視線を逸らし、再び俯いた。

「メルメル……」

トンフィーが悲しそうに呟いたその時、握りしめたメルメルの腕が力強く動いた。

「うむむむ……」

ようやく登ろうとし始めたメルメルの体を、トンフィーは全身全霊を込めて引き上げた。

「よ、い――しょっと！　……はぁ、はぁ、はぁ、……や、やった……」

やっとこさメルメルをひっぱり終えると、トンフィーはその場にコロンと寝転んだ。体中にびっしょりと汗をかいているし、息も上

がっていて、しばらくは動けそうもない。
「は～、は～……」「うっ……うっく……ぐすっ」
メルメルもトンフィーと同じように仰向けに寝転んでいた。動く事が出来ない訳ではないが、両手の甲を目に押し当ててじっとしている。
「……ミミ～。……シバ～！　――わ～んわんわん！　わ～んわんわん！」
遂に堪えられなくなって、メルメルは声をあげて泣き始めた。隣からは鼻をすする音が聞こえる。
――メルメルは今までこんなに悲しい思いをした事がなかった。魔法の授業で失敗して髪を燃やした時も、調子に乗って橋の手すりの上を歩いていて、大切にしていたイチゴ模様の財布を川に落とした時も、運動会でリレーのアンカーだったのに、前日の夜興奮し過ぎて熱を出し、結局運動会すら参加出来なかった時も、今程は悲しくなかった。
――そう、おじいちゃんがさらわれた時でさえ。
それを知った時は、それはそれは悲しかった。それでもあの時は、――おじいちゃんは生きている、ワタシが助け出さねばという気持ちがあったから良かった。しかし、今回は……。
二匹はメルメルの目の前でこの高さから落ちたのだ。助かる事はまずあるまい。
「ふえ～ん！　……ひっぐ、えっぐ。……わあ～ん！」
「ちょっと待ってメルメル！」
隣でトンフィーががばりと起き上がった。メルメルはびっくりしてトンフィーを見た。
「――ひっぐ！」
「……やっぱり聞こえる。――ほら」トンフィーは険しい顔で唇に人差し指を当てている。
「うっく……ふっぐ……」メルメルは胸をひきつらせ、何とか涙を堪えた。すると、

バサッ……バサッ……バサッ……

「は、――ひっく！　羽音だわ！」

トンフィーは慌ててドアの外に体を乗り出し視線を下に向けた。

メルメルも隣から覗き込む。

「いる……！　少しずつ上がってくる……」トンフィーは険しい顔のまま弓を構えた。

ミミとシバの筈はない。彼らには翼が一枚しか生えていなかったのだから、飛べる筈が無いのだ。それではあれは、きっとハゲタカもどきなのだ。

トンフィーには良く見えているようだが、メルメルの目には、まだ薄っすらとしかその影が映っていない。ただ、不規則な羽音だけが夜空に響く。

バサッ……バサバサッ……バサッ……バサバサバサッ

薄っすら見えている影も右へ左へとふらふらしているようだ。――そんなにまでしてメルメル達を倒したいのか……。

「トンフィー……」

「……」

あれが上がってきたら、トンフィーはまたしても撃ち落としてしまうのだろうか。一生懸命に飛んでくる姿を見て、メルメルは何だか可哀想になってきてしまった。すると――トンフィーが隣でゆっくりと構えをといたのが分かって、メルメルはホッとしてそちらに目を向けた。

「トンフィー……」

「違う」

「――え？」

トンフィーは目を細め、ふらふらと上がってくる影をじっと見つめた。

「……ハゲタカもどきじゃない」

「えっ？」メルメルは慌てて下を覗き込む。
確かに、言われて見ればハゲタカもどきじゃないようにも見えてくる。
（そうね……。ハゲタカもどきにしては少し小さいような――）
バサッ　バサッ……バサッバサッ……バサバサバサ……
それはゆっくりと、しかし確実にメルメル達のところへ上がって来ようとしている。メルメルもトンフィーと同じように目を細めてその様子を見守った。
（――そうよ。ハゲタカもどきにしては……形が少し妙な……あれは――あれはもしかして……！）
メルメルはくりくりの目玉をいっぱいに見開いた。「あれは……、あれは……！」
「ミミとシバだ！」

バサバサバサ……バサッ……バサッバサッ！

夜の空ををフ～ラフラと上がって来る不格好な影。実は、あれは二匹の猫が寄り添って懸命にお互いの動きに合わせ翼をはためかせる姿だったのだ。
「ミミー！　シバー！」
「頑張れ……！　二匹とも頑張れー！」
声を枯らさんばかりの二人の熱い声援を受け、あっちへふらふら、こっちへふらふらしながら、二匹は懸命に飛び続けた。そうして遂には、メルメルとトンフィーのいる場所に大分近いところまでたどり着く事に成功したのだ。
「ほらっ……こっちよ……頑張って……！」
「もうちょっと……大丈夫だよ……おいでおいで！」
「ニャ～！」「キェ～！」
ミミの方は少し可愛らしくない声だったが、二匹はメルメル達の声援に応えるように大きな声で鳴いた。

バサッ……バサッ　バサッ　バサッ

「そ、そっちじゃないわ……！　こっちよ！　こっちだったら……」

もう高さは十分のところまで来ているのに、中々ドアの方へと近づく事が出来ずにいる二匹に、メルメルはやきもきした。猫二匹はぴったりと寄り添いお互いの手足を絡ませて、何とか一枚ずつしかない翼を合わせて飛んでいるのだ。その様な状態で自由自在に空を飛び回れる筈もなく、右へふらりと流れては、ミミが慌てふためいて羽を動かし、左にふらりと流れては、シバが慌てふためいて羽を動かし、ようやく少し前に進んだと思ったら、今度はくるりと後ろを向いたりしていた。

「早く、早くっ……」何故かトンフィーはとても焦っていた。

メルメルは気付いていないかも知れないが、トンフィーは、ミミとシバの変身がいつ解けてしまうか分からないと考えていたのだ。二匹が変身してからは十分くらいしか経っていない。ミラークルクルマンの変身時間は三十分。だが――ルーノルノーの時もウンピョウの時もそうだったように、まだまだ力の足りない二匹はおそらく時間一杯変身している事が出来ないだろう。もしも今すぐ変身がとけてしまったら、再び奈落の底へまっしぐらだ。

「頑張れ～！　頑張れ、頑張れ～！」

「そうよ！　こっちこっち……良い子だから……よしよし……そうそう……」

バッサ……バサバサバサバサバサバサ！

「やった～！」

ピッカー！

ようやく中へ飛び込んで来た――ちょうどその時。二匹の変身はすっかり解けてしまった。

「ニャ～……」
「良くやったわ！　……良くやったわね二匹とも……ぐすん」
疲れ果てて少しぐったりしている二匹を、メルメルは力一杯抱き締めた。
「うんうん……。良かった良かった！」
トンフィーもにじみ出てきた涙を拭いながら、嬉しそうに笑った。
ひとしきり二匹の生還を喜んで、少し気持ちが落ち着いてくると、メルメルはミミとシバの体を持ち上げ、その宝石のような青い瞳を覗き込んだ。
「ミミ……シバ……ありがとう。ワタシの為に――おじいちゃんの為に一生懸命戦ってくれて……。とっても感謝してるわ」
メルメルは二匹を下に下ろし、今度はトンフィーの方を見てぺこりと頭を下げた。
「メルメル？」
「トンフィーも――ありがとう。危険な思いをたくさんしたのに、ずっと傍にいて助けてくれて、本当に、本当に、ありがとうございます……」
改めて深々と頭を下げ、そのまま顔を上げないでいるメルメルに、トンフィーはすっかり焦ってしまった。
「ど、ど、どうしたのさメルメル？　急にそんな……顔を上げてよ！　だ、だって、ぼ、僕が勝手に付いて来たんだし……。そ、それにもとはと言えば、全部僕のせい――」
トンフィーがみなまで言う前に、メルメルはパッと顔を上げトンフィーを真っ直ぐに見つめてきた。　その瞳は、見るもの全てを惹きつけるかのようにキラキラと輝いている。
トンフィーは、メルメルが時折見せるこの瞳の輝きがとても好きだった。このキラキラした瞳を見ていると、何か大変な事が起こっても、メルメルといれば何とかなるんではないかと、期待の様な、安心の様な物を得る事が出来るのだ。
思わず口をつぐんでその瞳を見つめていると、メルメルがニッコ

リと微笑んだ。
「本当に感謝してるのよトンフィー。トンフィーがいなかったら、こんな所まで絶対たどり着けなかったわ。だからちゃんとお礼を言いたかったの」
「そんなの……当然だろ？　だって僕達――」トンフィーは、ペッコリーナ先生よりもちょっとだけ上手にウィンクをした。「友達なんだから」
　メルメルは一瞬目をパチクリさせてから、ニッコリと満面の笑みを浮かべた。
「そうね……。そうよ！　ワタシ達、友達だものね！」
「そうさ！　だから、ありがとうもごめんねも言いっこなしだよ。メルメルが困った時は僕が助けるし、僕が困った時は……」
「ワタシが助けるわ！」
　しばらく二人はニコニコと見つめあっていたが、突然、何故かメルメルが真面目な顔に戻ってしまって、トンフィーは少し驚いた。
「メルメル？」
「……トンフィー。おじいちゃんはきっと、この階のどこかにいるわ」
「え？　ど、どうしてそう思うの？」随分と確信を持ったような声音に、トンフィーは首を傾げた。
「さっき、外にぶら下がっている時に塔の上の方が見えたの。そうしたら、もうこの階より上は無いんだって事が分かったのよ。ここが――このカルバトの塔の最上階なんだわ。だから――おじいちゃんはきっと、この階のどこかにいる」
「……」
　あのキラキラ輝く瞳で一点を見つめているメルメルの顔を、トンフィーはじっと見つめた。
　――遂に……遂にたどり着いたのだ。プラムじいさんを助け出すのは容易な事では無いだろう。最後の関門――おそらく、最強の敵の妨害が自分達を待っているに違いない。だが、ここにたどり着く

までだって容易じゃない事は山ほどあった。それでも何とかかんとか乗り越える事が出来たじゃないか。そう――だから、きっと、

「大丈夫！　きっとおじいさんを助け出せるよ！」

力強いトンフィーの言葉に、メルメルはこっくりと頷いた。

「よし！　行こうメルメル！」「ええ！」

勢いに乗ってトンフィーはさっと手を差し出した。

「……」

「……」

「ど、どうしたのメルメル？　早くおじいさんを探しに行こうよ」

差し出された手をじぃーっと見つめて動かずにいるメルメルに、トンフィーは首を傾げた。せっかくの威勢が台無しだ。

「うーん……。早く行きたいのは山々なんだけれど、そういえばそもそも他の部屋へ行く方法も分からないのよね～。――どこかに隠された扉か何かあるのかしら？　――ほらっ、ミミ、シバ！　あなた達の鼻で秘密の扉を探し出しなさい！」

そう言って二匹のお尻を押して、ミミとシバに迷惑そうな顔をされているメルメルを、トンフィーは呆れ顔で眺めた。

「まったく……。メルメルったら……。犬じゃないんだから鼻で探し出すなんてむちゃだよ。――ほらメルメル、こっちこっち！」

トンフィーは先ほど見つけた小さな丸いしるし目指して歩きながら、メルメルを手招きした。メルメルは嬉々としてそれを追いかける。

「もしかして、トンフィーったら扉を見つけたの？」

「たぶんね。本当はここへ来て直ぐに見つけたんだけれども、それを教える間も無く、メルメルったらあの外へのドアをとっとと開けちゃうんだもん。だから言ったろう？　メルメルは少し慎重に――」

「あ～！　こんな所に変なしるしがあるわ！」

危うくトンフィーのガミガミお小言がぶり返しそうになって、慌ててメルメルは丸いしるしに駆け寄った。後ろでぶつぶつ言っているトンフィーには構わず、しるしに顔を近づける。

「あら……何だか壁が引っ込んでる……」
「そうなんだ」トンフィーが隣に立って、少しだけ得意げな顔でニッコリ笑った。「――それにしても、本当にカルバト族は良くこれだけたくさんの仕掛けを作ったものだよね？　何だか関心しちゃうな～、僕。ほら……。押してごらんよメルメル」
「……これを？」
丸いしるしを指差すとトンフィーがこくりと頷くので、メルメルはそこに手を当てて強く押してみる事にした。

ゴゴゴゴゴ……

押した壁が引っ込んでいくのに合わせ、少し離れた壁の一部が動いて人が通れるくらいの隙間が生まれた。メルメルはあんぐり口を開け、トンフィーに視線を移した。
「……やっぱりトンフィーったら天才だわ」
そうして、照れて頭を掻いているトンフィーをほったらかしにして、メルメルはとっとと隙間に入っていってしまった。トンフィーは我に返ると慌てて後を追った。
「まったくもう。メルメルはいくら言っても僕の言うことを――！」
「……」
「こ、これは一体……！」
そこは、先程までいた部屋よりもずっと広々とした空間になっていた。だが部屋の広さの割には明かりが少なく、薄暗く妙に不気味な雰囲気が漂っていた。心配していた敵の待ち伏せはなかったが、意外な物が二人を待ち受けていた。それは、
上へと向かう『階段』だった。
「どうして……。なぜ、階段が……」
トンフィーは呆然と呟き、薄暗い部屋に白く浮かび上がって見える大きな階段を見上げた。階段は天井にぽっかり四角く開いた穴に向かって長く伸びている。余りに部屋が暗すぎて穴の奥がどうなっ

ているのかは見えない。メルメルは無言で階段の下へと足を進めた。
（確かに、ここより上の階はなかったはずなのに）
――その時、階段の上を見上げていたメルメルの頬を、フワリと冷たい風が撫でていった。不思議に思って首を傾げていると、今度は別の風がいやに生臭いような香りを運んできて、メルメルは思い切り顔をしかめた。
「――そうか。そういう事か……」
いつの間にか隣に並んで、同じように階段を見上げていたトンフィーが呟いた。メルメルはその横顔を見つめた。薄茶色の髪が風に揺れている。
「あのドアと同じだ。この階段は外へと続いてるんだ」トンフィーはメルメルへと視線を移す。「――つまり、屋上だ」
「屋上……」メルメルはもう一度大きな階段を見上げた。「……おじいちゃん」
――この先におじいちゃんがいる。絶対に、いる。
階段の上を睨み付けるようにしているメルメルの横顔を見て、トンフィーはつい口に出しそうになっていた言葉を飲み込んだ。
――ラインさんや、ペッコリーナ先生達を待った方が良いんじゃないだろうか？
吹き付ける風が、待ち受ける敵の存在を予感させている。ミミとシバがいるとはいえ子供二人で乗り込むのはいかにも不安だ。トンフィーの中に、今更ながらの迷いが生じても仕方のない事と言えるかも知れない。
「メルメル……」
いつもの情けない顔でトンフィーが呟いた。すると、メルメルはラインに貰った剣を両手にしっかりと構えて上を見据えた。
「行きましょう――トンフィー」
その、固い決意を感じさせる横顔。
「……」
トンフィーは体に引っかけてある弓を外し、その手にしっかり握

った。

「うん……行こう！」

最終決戦　1

「……ってるんだ、お前の……そもそもレジスタンスの……ボソボソ……」

メルメルとトンフィーが階段を登り始めてしばらくすると、上の方からボソボソと男の話し声が聞こえてきた。二人は一瞬びくりとして立ち止まったが、息を殺しながら徐々に上へと進む。それにしたがって声も少しずつ大きくなってきた。おそらく上で待ち構えている何者かの声なのだろうが、不思議な事に話しているのは一人だけで、他の人間の声は一切聞こえてこない。

「……のだ。どうせ、こそこそと嗅ぎ回るくらいしか出来んのだろう？　女なんぞを担ぎ上げて戦おうとするから……うん？　……ああ。そうだったな……今の貴様等の大将は何たらとかいう、どこぞの馬の骨ともしれぬ輩だったか？　しかし――そもそも何故そんな聞いたことも無いくだらない輩を大将に据えたりしたのだ？　……確かにあの女なぞに指揮を取らせても、かつての赤軍と同じようにレジスタンスなぞという負け犬どもの集まりは、我が軍隊の前にボロ雑巾のように踏み敷かれるのが落ちだがな」

話の雰囲気から察するに、やはり一人言というよりは、誰か話し相手がいるように感じられる。しかし聞こえてくるのは低いイガイガした声一種類だけだ。もしかすると、この人物がやたらと大きな声の持ち主か、それでなければもう一人の人物がとても小さな声の持ち主か――。メルメルはなんとなく前者のような気がしていた。

「ところでお前のところのバカ大将は、まんまとこちらの思惑通りに誘き出され、のこのことここへ向かって来ているしいぞ……。そう――あのクソ女と共にな……。しかも、何でもガキを二人も連れて来たという報告が入っているのだ！」

メルメルとトンフィーは思わず顔を見合わせた。

「グワッハハハ～！　本当に救いようの無いアホ共だ！　我が軍隊

を恐れる余りに狂いでもしたか、戦場にガキを連れてくるとはな！
――グワッハハハ！　グワッハハハハハハ！」
耳をつんざく様な大きな笑い声に、メルメルとトンフィーは慌てて両耳を塞いだ。
「グワッハハハハハ！　グワーッハハハハハハ！」
何がそんなに可笑しいのか、声の主はいつまでも笑い続けている。先程から聞こえている話し声も少し呂律の怪しいところがあるし、もしかすると酒にでも酔っているのかも知れない。メルメルとトンフィーは屋上に出るすぐ手前で立ち止まって話を聞いていたが、ゆっくりこっそり、顔だけを上に覗かせてみた。――冷たい風に二人の髪がなびく。
「……」
そこは、メルメルの知っている「屋上」というものとは少し雰囲気が違っていた。メルメルが知っているのは園にあった物なのだが、ちゃんと人が落ちないように柵がしてあったし、ペッコリーナ先生がプランターに大好きなお花をたくさん育てていて、そのおかげでとても華やかだった。
だからメルメルにとって「屋上」というものは、お日さまがぽかぽかあったかくて、お花の良い香りが漂っていて、いつまでもいつまでも寝そべっていたい（実際、メルメルはお昼休みにいつまでも寝そべり過ぎて授業に遅れてしまい、しょっちゅうペッコリーナ先生に怒られてたんだ）そんな様な空間だった。しかし――
ここにはお花もないし、柵もないから園の屋上でやっていたように追い駆けっこなどしようものなら、勢いあまって下に落ちてしまいそうだ。それに、高さのせいと夜のせいか（勿論メルメルは夜なんかに園にいた事はないんだ）やけに風が強いし寒いし、あまり長くいたいと思えるような場所ではなかった。ただ一つ、良いところがあるとすれば、それは無数に散らばる星がキラキラと輝く美しい夜空くらいのものだ。だがそれも、ガラガラと汚らしく響き渡る大きな笑い声が台無しにしてしまっている。

「メルメル……」
メルメルが空ばかり見上げていると、隣からトンフィーが小さな声で呼びかけてきた。メルメルが見ていた方とは正反対の方向を指差している。その顔が何故かやけに青白い。決して月明かりばかりのせいでは無いだろう。メルメルはトンフィーの指差した先に視線を移した。
「……！」
すぐには、メルメルはそれが人間の後ろ姿だとは分からなかった。ここには電飾のような物がなくて、光源は月明かりのみだから薄暗くて良く見えなかったという理由もある。しかし何よりも、その人物が余りに大きく、メルメルは、まさかこの巨大な影が人だとは思わなかったのだ。良く見れば、それは鎧を着た人物が椅子に（この椅子もバカでっかいんだ）腰かけた後ろ姿なのだと分かる。煙草でも吸っているらしく、顔の辺りに白い煙を漂わせていて、それがまるで噴火前の火山の様で、より一層の不気味さを演出していた。
その活火山、もし立ち上がったら三メートルはあるんじゃないかと思われる程の大きさがあるのだ。その巨体に隠れてしまって、おそらく向こう側にいるであろう、話し相手の姿はまったく見えない。
「ロロ族だ……」
聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声でトンフィーが呟いた。
――ロロ族とは何か？　それを聞いてみようかと思ったその時、メルメルの目にもっとずっと気になる物が映った。それは、大男の傍らで膝に立てかけるように置いてある巨大な――
斧だった。
改めて大きな後ろ姿を見つめる。
（――斧を持った大男……）
「それにしても、一体ベラメーチェの奴は何を考えているのか……。こんなせこい罠を仕掛けなくとも、お前を締め上げてレジスタンスのアジトを吐かせればそれで済むものを……ほぅ……グッフッフ。俺様の拷問を受けた後でも、そんな強がりをほざく事が出来

るかどうか試してみるか？　……まぁいい。お前の事は傷つけるな、ましてや殺すなどという事の無いようにと言われているからな……。お前のようなじじいを生かしておく事が、それ程重要だとは思えんがな」

「――！」

大男の言葉にメルメルは目を見開いて隣を見た。同じように驚いてこちらを向いたトンフィーと顔を見合わせる。二人は無言で頷き合うと、それぞれの武器を構え直し、階段の残り数段を慎重に上り始めた。

「そもそも俺は、レジスタンスなどほおっておけばいいと思ってるのだ。どうせそんなゴミ共に大した事は出来はしないのだ。他の連中はやたらと気にしているが……」

メルメルとトンフィーは姿勢を低くし、じわりじわりと大男に近づいた。幸い大男の他に敵はいない。暗闇と風の音に紛れて、もう少し近づいてみたいとトンフィーは考えていた。奇襲を仕掛けるにもその方がいいし、大男の向こう側にいるであろう人物が、今どういう状態にあるかも知りたかった。

――どの様に捕らわれているのか？

果たして自力で逃げる事が出来る状態なのか？　年寄りとはいえ、まさかメルメルやトンフィーが背負える程軽くはないのだ。

「どうせ奴らが恐れているのは、赤の大臣だったあの女なんだろうがな……。なぁに、今の奴など、もう、ただの腑抜けに違いない……ほぉ。……そうは言うが、あの時から十年も経つというのに、その間あの女に何が出来た？　と、言うよりも、表立ってあの女が動いた形跡すらない。恐らく、我が軍に恐れをなしてどこかで尻尾を丸めて隠れていたんだろうよ。――そうだ！　知っているか？　かの戦いでの、赤の大臣であったあの女の無様な有り様を……」

大男の話している内容に、メルメルの顔付きが段々険しくなってきていて、それを見ながらトンフィーは隣でドギマギとしていた。

「女王が既に死んでいる事も気付かず、あの女がハルバルートに乗り込んで来た時の事だ。情けない事に、奴は広場で待ち構えていた黒騎士に足止めを食らって、城の中に入る事さえ出来なかったらしいぞ？　みんなの憧れ、赤の大臣様が聞いて呆れるわ！　――挙げ句には子分どもが皆殺される中で、一人おめおめと逃げおおせるとはな。……まぁ、ラインとかいうあの女、まるで――ゴキブリのような奴よ！　グワッハハハハハハ！」

メルメルが怒りに顔を赤くして前にずずいと出たので、トンフィーは慌ててメルメルの前に立ち塞がった。唇に指を当て厳しい顔をする少年に、メルメルは口を尖らせ渋々と後ろに下がった。

「お前さん、よほどラインに恨みでもあるようじゃの～」

その時、初めて大男の話し相手の声が聞こえて、メルメルとトンフィーの肩がビクリと動いた。

「恨み～？　ふんっ。……恨みなどではないわ。ただ、俺様はあのバカ女の――あのバカ女のアホさ加減に腹が立つだけだ……」

「ふむふむ……。それでは一体どういったところがバカ――、ん？　バカではなくアホだったかな？　――もとい、アホなのかのう？」

場違いな程穏やかな声に、メルメルは涙がこみ上げてきた。

――無事でいてくれて良かった。

最終決戦　2

「あのバカ女のアホなところなど挙げ連ねてしまったら、夜が明けてしまうわ！　それに、余りのアホさ加減に話す気も失せる！　……そもそも、あの赤軍が敗北したのだってあのバカ女のせいではないか」

　メルメルは段々呆れてきていた。――話す気も失せるとか言いながら、全然話す気満々ではないか。

「ふむ……。何故赤軍が負けたのがラインのせいなのかな？　そりゃまぁ、確かにあの子は指揮官だったんじゃから責任は勿論あるんじゃろうが……」

「あのバカ女の力不足で負けたのは明確だ。勝てるはずの無い戦いを挑んだのだから、やはりアホとしか言いようが無い。だがそれよりも、もっともっとあのバカ女がアホだといえる出来事が、あの戦いの前にあったのだ。――その出来事のせいで、勝てるはずの赤軍は大敗を喫する事になったのだ」

「ほうほう……。そりゃあ初耳じゃ。――して、それはどんな出来事だったのかの？」

「それは……。あの戦いの少し前に、ある最高の戦士――その先、大いなる戦力をもたらす素晴らしい力を持った男が、実は赤軍に入りかけた事があったのだ。ところが！　あのバカ女は、その男が軍に入るのを阻んだのだ。その男さえ受け入れていれば、あの戦いとて勝つ事が出来た筈なのに！　全くもって、アホで、バカで、マヌケな事だ！」

「……ふむ。――して、その男とは何者だったのかな？」

　メルメルとトンフィーは、嫌な予感がした。

「その男とは……その男とは、この俺様！　――ガスバルド様だ！」

（……）

「ほお～。お前さん赤軍に入りたかったのか？」

「入りたかったんじゃない！　入ってやろうかと考えただけだ！　それを――それをあのバカ女めが～」

「断られたのか？　珍しいのう……。あの子が受け入れを拒否するとは」

よほど腹を立てているのか、大男――ガスバルドは、煙草の煙だけではなく、体全体から薄っすらと白い湯気を立ちのぼらせている。

その様子を恐ろしげに見ながら、トンフィーはメルメルの袖を軽く引き、少しずつ横に移動し始めた。今の位置からだと「あの人」の姿が捉えられないのだ。

「俺様はあの時、既に八十もの人間を殺していた。その強さはトキア全土に響き渡っていたし、赤軍だって俺様を必要としていた筈なのだ。しかし、あのバカ女は自分だけの勝手な判断で俺様を入軍させなかった……。――いや。おそらくさせられなかったのだろう……。――そうだ。そうだ、そうだ！　あのバカ女は俺様を、このガスバルド様を怖れていたに違いない！　俺様を入れてしまえば、その内大臣の椅子を俺様に取られてしまうと考えたのだ！　そうだ、そうだ！　きっとそうだ！　グワッハハハハハ！」

ガスバルドの笑い声が夜空に響き渡る。それはもう本当に大きな笑い声で、カルバト地方全体に響き渡っているんじゃないかと思われるほどだ。大口を開けて顎をそらし、下品で汚らしい笑い声をあげ続けている大男の向かい側で、「その人」は目を丸くしていた。ガスバルドの大きな笑い声に驚いた訳では無い。その巨体の後ろから、二人の子供がひょっこり顔を覗かせたので驚いてしまったのだ。そして、片方の子供の口が、声を出さずにこう動いたのをその目で捉えた。

――おじいちゃん（・・・・・）。

「グワッハハハ……ハハ……ハ……。さて……。お喋りもそろそろおしまいだ。部下共の報告では、なんだか広場で騒いでいる連中がいるらしいからな。少しはここへと近づいているかも知れん」

目に涙を一杯に浮かべてかじり付くように「その人」――プラム

じいさんを見つめているメルメルの耳元で、トンフィーはそっと囁いた。

「……魔封じの紐で縛られてる。あれじゃあ、おじいさんは魔法が使えない」

確かに、プラムじいさんの体は、ただの紐ではなく不思議な編み目模様の入った紐で縛られている。しかし、取りあえず大きな怪我などなさそうな様子に、メルメルはひと安心をした。

「……そう言えばラプートの奴、随分と長い事帰って来ないな。――ラプート！　……おかしいな――」

その時、のっそりと大男が立ち上がった。立ち上がるとそれまでよりずっと巨大に見えて、余りの威圧感にメルメルとトンフィーは体を仰け反らせてしまった。

大男は煙草を足で踏み消して、大声で怒鳴った。「――ラプート！」

「あ、あれじゃな、あれ！　あー、そろそろ――、そうじゃ！　そろそろラインが来るかも知れんな！」

「ん～？　なんだと～？」

トンフィーは一度戻って作戦を練り直すべきだと考えた。たとえ奇襲を仕掛けてもこの巨大なガスバルドを倒す事は出来ないだろう。

――ロロ族。

先程トンフィーが呟いたロロ族というのは、巨大な体を持つ戦闘に長けた部族の事で、その中には背丈が四メートルを越すような者もいるという話だ。恐らくこのガスバルドもロロ族なのだろうが、トンフィーも教科書の中で読んだだけの事で、勿論本物を目にするのは初めてだった。そして想像以上の威圧感に正直足が震えていた。

このままではいずれ、ガスバルドは後ろを振り返ってしまうだろう。だから、プラムじいさんはガスバルドの注意を逸らそうとしてくれているのだ。トンフィーはその場から動き出しそうに無いメルメルの袖を強く引いた。

「何故、あのバカ女がここへとやってくるのだ……」

「お前さん、さっき言っておったじゃろうが。レジスタンスのリーダーと一緒にラインもここへ向かっていると」
「それにガキ二人だ」
「――と、という事は、下の広場で騒いでいたのはライン達だという可能性が高いんじゃなかろうかの？」
「……だったらなんだと言うのだ？」
「チャンスではないか～！　お前さん、そりゃあ大チャンスじゃぞお！」
「……チャンス？　何をほざくかじじい……。一体何がチャンスなのだ？」
「ラインに、どうして軍に入れてくれなかったのか聞いてみるチャンスじゃよ！」
「……」
「……チャンスじゃぞ」
「――ラプート！　聞こえないのかラプート！」
大声で叫びながらガスバルドが右へ左へと顔を振って、その横顔がメルメルとトンフィーにちらりと見えた。赤鬼のように顔を赤らめ、こめかみには青筋が浮かび上がっている。トンフィーは思わずぶるりと震え上がった。メルメルの袖を更に強く引く。
「――そ、それに、そのアホバカ女を倒す事も出来るかも知れんな！　素晴らしい戦士であるお前さんを軍に入れなかった事、後悔させてやるんじゃよ！」
「……ほう」
「ど、どうじゃ？　名案じゃろう？」
「――――確かにな！　それではこちらから出向いて、一捻りにしてやるか！」
ガスバルドはぐるりと身を翻した。メルメルとトンフィーは体をいよいよ仰け反らせ、遂にこちらの方を向いてしまったガスバルドを恐ろしげに見上げた。
月明かりに浮かびあがった顔は厳めかしく、顔を半分覆う程の黒

々とした髭を蓄えていて、その中に半分埋もれたような口からは、汚らしくよだれがたれてギラギラと光っている。そしてその目は以上なほど血走り、なんだか焦点が定まっていない様に揺れ動いていた。――妙に気になるのは、何故か黒い布で肩口から手首までぐるぐる巻きにされている右腕だ。もしかして怪我でもしているのだろうか？

「しかし――お前さんではラインに勝てはせんじゃろうな！」

「……なんだと～？」ガスバルドの小さな黒目がギョロリと横に動いた。怒りに顔が歪む。

――だが、なんと驚いた事に、どうやらメルメルとトンフィーの存在に全く気付いていない様なのだ。余りに高い場所に目の玉が付いているから、小さなメルメル達が視界に入ってこないのかも知れない。

結局、ガスバルドは二人に気付かないまま再びプラムじいさんに向き直ってしまった。

「じじいよ……。貴様は何故、俺様があのバカ女に勝てないなどと言うのだ……」

「う～ん……」プラムじいさんは目の玉を上にして考えた。「だってなぁ、お前さん。ラインはと～っても強いんじゃぞ？　ワシは、あれより強い戦士は見た事が無い。いや～……。本当に、まったく、驚く程……」再び大男に目を向ける。「ラインは――強い！」

「……」

ガスバルトの巨大な背中が震えている。勿論怯えているのでも泣いているのでも無いだろう。余りの怒りに震えているのに違いない。

それを見ているトンフィーの小さな背中も同じ様に震えていた。こちらは完全に恐怖の為だ。プラムじいさんが必死で相手を惹き付けてくれている間に逃げなくてはと思うのだが、足が固まってしまって上手く動かない。メルメルの方は最初からプラムじいさんを置いて逃げるつもりが無いから、トンフィーと同じ様にじっとしている。

「くっ……くくく……」
「……？　お前さん、一体どうした――」
「グワッハハハハハハー！」
突然笑い出した大男に、トンフィーは驚いて三十センチも飛び上がってしまった。さすがにプラムじいさんも目が点になってしまっている。
「グワッハハハハ！　――じじい！　お前は何も分かっていない！　俺様は――もう、あの時の俺様では無いのだ！」
「……」
ガスバルドは目を血走らせ口の隅から泡を吹いている。
――あの時とは一体どの時の事なのか？　とは、プラムじいさんは聞かなかった。今までの会話から察するに、二人は恐らく以前からの知り合いでは無いだろう。しかし、プラムじいさんは何も言わずに、ただ憐れむような目で大男を見上げている。
「素晴らしい力を手に入れたのだ……！　俺様は進化したのだ！　もう――もう、赤の大臣など恐るるに足らんわ！　さあ！　これを見よ！」
ガスバルドは布でぐるぐる巻きにされた右腕を高く掲げた。
「これが俺様の進化の証しだ！」叫び声と共に右腕に巻かれた布を剥ぎ取った。
「……ふぐ！」
（な、何なのあれは！）
思わず、メルメルは悲鳴を上げそうになってしまった。その隣では、トンフィーが目も口もまん丸に開いて食い入るようにガスバルドの右腕を見つめていた。
プラムじいさんだけはそれ程表情も変えずに、瞳の中の憐れむような色を一層濃くしただけだった。「グッフッフッフッ。……驚いただろう？」
プラムじいさんの表情を完全に読み違えて、ガスバルドはしてやったりといった顔で笑っている。

――まぁ驚いた。メルメルとトンフィーは、それはもう驚いた。布を剥ぎ取ったガスバルドの、その、右腕。まず――一番驚くのはその太さだ。ちなみに左側についているのはどうやら何の変哲もない腕のようで、恐らくガスバルドの成長に従って少しずつ大きくなっただけの普通の腕なのだろう。ところが――。その普通の左の腕に比べて、右の腕の太さが五倍くらいあるのだ。まるで、肩口から別の腕を無理やりくっつけたようにさえ見える。

異常なのは太さだけではない。色も不気味で全体的に青黒く血管がブクブクと浮き出ている。そして、

「……命の石か」プラムじいさんは眉をひそめて呟いた。

そうなのだ。気持ちの悪い右腕の、肩から肘のちょうど中間辺りに、最近ではメルメルとトンフィーもすっかり見慣れてしまった青い石が埋め込まれていたのだ。

「そうだ……。この石が俺様の望みを全て叶えてくれた……。もう俺様は……、何者にも負けはしない……！」

「……ふぅ」プラムじいさんは呆れたような顔で溜め息をついた。

「言葉も無いほど驚いたかじじい？　まさか、こんな命の石の使い方があるとは知らなかっただろう。しかし誰にでもこの様な事が出来る分けではない……。力の強い者だけが得られる進化なのだ！」

プラムじいさんガスバルドの焦点の定まらない目を見つめた。そして小さく首を横に振った。

「それが進化かのう……」

「勿論進化よ……！　弱き者ならば力を得るどころか逆に命の石に飲み込まれる。化け物のようになって死んでしまう事もあるらしいのだぞ？」

「お前さんとて、化け物のようになりかけているではないか」

プラムじいさんがサラッと言ったこの一言に、ガスバルドのこめかみや肩がビクビクとひくついた。

「なんだと～？　このクソじじい……。俺様のどこが化け物なのだ

！　俺様は……命の石に飲み込まれた連中とは違う……。ベラメーチェの奴は、俺様に二つ以上の石は無理だ――などとほざきやがったが……。見よ……。石の力をしっかり抑え込み、新しく手に入れた素晴らしい力を！　――――うおぉぉぉぉ！」

　獣の咆哮の様な叫び声をあげながら、ガスバルドはその右腕を思い切り地面に叩きつけた！

最終決戦　3

ドゴーーーーーーン！

その瞬間、地面がぐらりぐらりと揺れて、びっくりしたトンフィーはその場にしゃがみ込んでしまった。メルメルの方は老朽化したカルバトの塔が崩れて仕舞うんではないかと、いらぬ心配をした。

「……グフッ。……フッフッフッ……グーッフッフッ。……グワッハハハハハハハハハー！　――どうだ！　どうだ、どうだ、どうだーーーー！　見たかくそじじい！」

ガスバルドが叩いた所は床がへこんでいて、まるで月のクレーターの様になってしまっている。もしもあの腕で殴られれば、メルメル達など、初めてお手伝いをしてプラムじいさんと二人で焼き上げ、余りの喜びにはしゃぎ過ぎてメルメルが地面に落としたミートパイと同じ様な事になるだろう。

（そう言えば、あの時は頭が割れそうに痛くなる程泣いたわ）

メルメルが遠い日の（そうは言ってもまだ一年前の話なんだ）思い出に浸っていると、クレーターをじっと見つめていたプラムじいさんが、ふと顔をあげてガスバルドを見た。

「ワシには、やはり化け物のように見えるのう……」

「……」

プラムじいさんは真っ直ぐに目の前の大男を見つめている。まるで狂犬病にかかった野良犬のようによだれを垂らし、怒りに顔を真っ赤に染めている大男を。

プラムじいさんは怯える様子もなく、キラキラと輝く瞳でただ真っ直ぐに見つめている。

「お前さんも気付いているのじゃろう……。じゃからそんなに興奮しておるのじゃろうが？」

ガスバルドは無言だ。

「お前さんは石の力を抑えられてなどおらんよ……。お前さんは――」

ガスバルドは動かない。

「石の力に負けてしまったんじゃ」

やはりガスバルドは動かない。

「お前さんはラインに、――きっと他にも様々なもの達に負けてきた。じゃが、どうしてもそれが嫌じゃった。負けを認められんかった。……違うかな？」

ガスバルドがピクリともしないので、メルメルは逆に不安になってきてしまった。

「じゃからそんな安易な方法で強くなろうとしたんじゃろ。……じゃが、安易な方法では、所詮、安易な力しか得られん。ラインのように、こつこつと日々の鍛錬で得た様な力とは違う……」

ガスバルドの大きな背中が、ようやくピクリと動いた。

「お前さんは、ラインには勝てん――」

バチーン！

「――――！」

ガスバルドに殴られ、プラムじいさんの頬が盛大な音をたてた。

次の瞬間、メルメルは怒りに身を任せてガスバルドに飛び交ってやろうかと思ったが、トンフィーが素早く目の前に立ち塞がったので、唇を噛んで何とかその衝動を堪えた。

殴った張本人は以上な程肩を上下させている。「ハー……ハー……じじい……」

メルメルのいる場所からでも、俯いたプラムじいさんの痩せた頬がどんどん赤く腫れ上がっていくのが分かる。

（おじいちゃん……！）

まだ、殴ったのが左手だから良かった。もしも右手だったらミートパイになってしまう。だからといって、勿論それを喜べる気にも

なれず、メルメルが目に涙を一杯にして見つめていると、プラムじいさんがゆっくりと顔を起こした。一瞬チラッとこちらに視線をよこし、そして、まるで安心させるようにニッコリと微笑んだので、メルメルはまんまとホッとしてしまった。

「ハーハー……じじい。……ハーハー、な、何が可笑しい？　……俺か？　ハーハー……俺を笑っているのか？」

ガスバルドは息を荒くして、肩を震わせている。

（……まずい）トンフィーは嫌な予感がした。

「俺を……ハーハー！　……俺を、わ、――笑うなーーー！　じじい！」

ガスバルドが思い切り、その右手を振り上げた。

「――――！」

「う――グオオォォォ！　何だ――こいつらはぁぁ！」

剣を振り上げ、ガスバルドに襲いかからんとしていたメルメルは、思わずその動きを止めた。見上げると、右手の拳を振り上げた巨人の顔に二匹のトラ猫が張り付いていた。

プラムじいさんは目を丸くする。「お、お前達～！」

「フギャー！」

「グオオ！　また貴様らかー！　離れろこのクソバカ猫め～！」

ガスバルドはいやいやをするように顔を振った。だが、二匹はがっちりと爪を立ててしがみついている。ミミは頬に、シバは顎に噛みついて全く離れそうにもない。いつもの、必殺「すっぽん攻撃」だ。

「や、矢が……」

暴れているガスバルドの右腕の付け根辺りに深々と矢が刺さっているのが見えてメルメルが後ろを振り返ると、トンフィーが、矢を放った態勢そのままで固まっていた。

「や、やっちゃった……」

「グオオォォ！」
　ようやくガスバルドはミミとシバを払いのける事に成功した。二匹はかなり遠くに吹っ飛ばされたが、軽やかに地面に着地して怪我などはなさそうだ。その様子を見てメルメルはホッとしていたが、実はホッとなんてしている場合ではなかった。
「……お～や～？」
　ハッとしてメルメルが前に視線を戻すと、おでこに青筋をいっぱいに浮かべたガスバルドが、ニヤ～っと笑いながらこちらを見ていた。
「こんな所に子供が二人も迷い込んでいるではないか～？　ところでこいつは……」ガスバルドは右腕の付け根に刺さっている矢をズブリと抜いた。痛がる素振りは微塵もない。「お前らの仕業か？　それならば……」ギロリとその目がトンフィーを捉えた。「お仕置きが必要だな～。……ん～？」
　トンフィーは蛇に睨まれた蛙状態だ。
「……ところでお前らのボスは一体どこにいる？　それに……あのバカ女はどこだ……」
　キョロキョロとガスバルドが辺りを見回す。すぐには襲いかかってこなさそうな様子に、トンフィーは少しだけ肩の力を抜いた。ガスバルドはグッターハイムとラインがどこかに隠れていると思って警戒しているのだ。
「……メルメル、変身だ……」「――え？」
　トンフィーが小声で囁いて、メルメルは慌てて振り返った。
「どこだ？　……おかしいな。……まさかガキ二人だけの筈は無い……。隠れてないで出て来い！」ガスバルドは苛立ったように声を張り上げている。
「逃げるんじゃ……。二人共……」プラムじいさんは祈るように二人を見つめている。

「メルメル……一か八かだ……。ウンピョウに変身させよう……」
トンフィーはおでこに汗を一杯浮かべながらメルメルを見た。
ウンピョウはこの前変身した時、変身している時間がボルティーより大分、短かった。だが、このガスバルド相手にボルティーでは歯が立たないだろうとトンフィーは考えたのだ。時間が短くても、一か八か勝負を賭けるしかない。必死の目を見て、メルメルはこくりと頷いた。
「相変わらず、ゴキブリのようにコソコソ隠れていやがるのか！出て来ないなら、ガキをひねり殺すぞ！」
いくらガスバルドが吠え立ててもグッターハイムもラインも現れはしない。当たり前だ。二人はここにはいないのだから。
「……そうか。では――一人ずつ血祭りにしてやろう！」
ガスバルドはメルメル達の方へと足を一歩踏み出した。
「二人共、逃げるんじゃー！」プラムじいさんが必死で叫ぶ。
「ミミ！　シバ！」
メルメルに呼びかけられ、こっそり後ろからガスバルドに忍び寄っていた二匹は髭をピクリとさせた。
「思わず猫にまで助けを求めるとは哀れな奴だ……。小賢しいとは言え、所詮、猫は猫……」
メルメルの視線を追って、ガスバルドは嘲笑うようにミミとシバを見た。

「変身よ！」

「――何……？」
ミミとシバは直ぐにピンときたようで、スチャリと立ち上がった。
勿論いつものように後ろ足二本で。
ガスバルドもプラムじいさんも口をぽかんと開けた。
「な……なん――」

「ニャーニャーニャー！」

「ミラークルクル！　ウンピョウにな～れ！」

ピッカー！

眩い光に辺りは包まれ、

「ぐうぅぅ……。ウオォォォ！　――このくそガキ共がぁ！」

目潰しの魔法で奇襲でも仕掛けてくると思ったのか、ガスバルドは目を瞑ったまま両手を振り回して暴れている。

「……ん～？」

何も仕掛けてきそうに無い様子に首を捻り、ガスバルドはゆっくりと瞼を持ち上げた。

「ガゥガゥー！」

「――！　な、何だこいつらはー！　い、一体どこから――うぉぉ！」

突然目の前に現れた二匹のウンピョウに目を丸くする。しかし――驚く間も無く二匹は牙を剥き出し、襲いかかってきた。

「ぐおぉぉ！　離せー！」

腕や足にがっちり噛みついているミミウンピョウとシバウンピョウ。ガスバルドは狂ったように暴れまわっている。

「ぐおぉ……こいつめー！」

いくら暴れても離れない二匹にしびれを切らして、ガスバルドは巨大な右手をミミウンピョウに向かって振り下ろした。しかしミミは素早く察知して後ろに飛び退いてしまう。

「うぅ……。くそう……。こいつめー！」

ガスバルドは、今度はシバウンピョウに向かって拳を振り下ろす。しかし、やはり直前で逃げられてしまった。そうしてる間に素早くミミウンピョウが尻を引っ掻いてくる。それを払おうと振り返った途端にシバウンピョウに背中に飛びかかられる。

「ぐおぉ！　ぐぅおぉ！」

目を血走らせ、よだれを垂れ流し、拳を振り上げ暴れまわっているガスバルドは今や化け物そのものだ。

「くそぅ……貴様等……見ていろよ……」

ミミウンピョウとシバウンピョウが、がっちり両足に噛みついてきたのを振り払いもせずにぶら下げたまま、ガスバルドはドカドカと走り出した。

「あ、あれれれ？」「……どうしたのかしら？」メルメルとトンフィーは首を傾げる。

二人は、ミミウンピョウとシバウンピョウの攻撃に完全に翻弄されているガスバルドを見て、もしかしたら倒せるんではないかと期待を膨らませて見守っていたのだ。しかし、

「あ、ま、まずい！」

トンフィーは、何故ガスバルドが突然攻撃を止めて走り出したのか分かって青くなった。ガスバルドは先程まで座っていた場所に「ある物」を取りに行ったのだ。

「グゥーフッフッフ！　これで叩き潰してくれるわ！」

――ガスバルドは椅子に立てかけてあった巨大な斧を手にした。

最終決戦　4

バッガーーーーン！

ミミウンピョウが寸前で逃げてしまったから、振り下ろした斧は空を切って地面に突き刺さってしまった。しかし――拳で叩きつけた時の比では無いくらいに地面に大きなクレーターが出来ていて、メルメルとトンフィーはゴクリと唾を飲み込んだ。

「す、凄すぎる……」

「ぐおぉぉぉ！」

ガスバルドは、とても重そうな斧を縦横無尽にブンブン振り回している。ミミウンピョウとシバウンピョウは避けるのに精一杯で、中々懐に飛び込む事が出来ずにいた。二匹がガスバルドから少し距離を置き、隙を伺っていると、何故だかガスバルドが急にニヤリと笑った。

「グッフッフッフ……。遊びは終わりだ――食らえー！」

バガガガガガ！

ガスバルドが地面に斧を振り下ろすと、そこから、離れた二匹の所まで激しく亀裂が走っていった。

「ガウガウ！」

まさか攻撃が届く筈もないと気を抜いていた二匹は、大慌てでその場所から飛び退いた。

「グワッハッハッ！　いつまで逃げまどっていられるかな？　さぁ――食らえーーー！」

バガガガガ！

二匹は慌てて右に飛び退く。

バガガガガ！

今度は転がりながら左に逃げる。
バガガガガガガガ！
ミミもシバも大きく後ろに飛び退いた。
「く……。このままじゃ駄目だ……」
ガスバルドの放った攻撃によって周囲は地割れだらけになってしまった。トンフィーは恐ろしげに地面に出来た亀裂を見つめながら、かなり気持ちが焦っていた。
ミミとシバが変身していられる時間は普段よりも短い。一体どれくらい保つのかは分からないけれども、このままではろくな攻撃も与える事が出来ないまま変身が解けてしまう。
――二匹をサポートする為に、自分も覚悟を決めて攻撃に参加するべきだ。
トンフィーは、それが分かっていながら中々それを実行する事が出来ない自分が情けなかった。ガスバルドの注意がこちらに向くのが、恐いのだ。
トンフィーが密かに、心の中で気弱な自分と一生懸命戦っていると、目の前で同じ様にミミウンピョウとシバウンピョウを見つめていたメルメルが、くるりとこちらを振り返った。
「まだ、ファイヤーボールを放つ事が出来る？」
「え……？　――あ、ああ。多分一度くらいなら……」
「じゃあ、ワタシが合図をしたらガスバルドに向けて魔法を放ってくれる？」
「え……」
トンフィーはゴクリと唾を飲み込み、巨大なガスバルドを見つめた。相変わらず斧を振り回して暴れ回っている。二匹のウンピョウは必死でその攻撃をかわし続けていた。
トンフィーは視線をメルメルに戻し、こくりと頷いた。
メルメルはそんなトンフィーにニコリと笑いかけ、再びガスバルドに向き直った。その瞳はいつものようにキラキラと光輝いている。
「これでトドメだー！　死ねーーーー！！」

渾身の力を込めて、ガスバルドが大きく右手の斧を振り上げた。
「今よトンフィー！」
「――ファイヤーボール！」トンフィーの手の平から真っ赤な炎が飛び出していった。
「ぐわー！」
魔法は見事にガスバルドの顔に命中した。一瞬、巨人の動きが止まる。魔法と同時にメルメルは駆け出して、その足元に飛び込んでいた。
「やー！」ラインにもらった剣を振り上げて、力一杯その巨大な足に斬りかかる。
「ぐわー！」
ガスバルドは悲鳴をあげた。トンフィーのファイヤーボールをまともに食らった顔は焼けただれ、痛みと怒りで大きく歪んでいる。
「くぉの……クソガキがー！」
ガスバルドは足元のメルメルを踏み潰そうと右足を持ち上げ、思い切り真下へ振り下ろした。しかしメルメルは素早く攻撃をかわし、逆に、振り下ろされた右足を斬りつけた。
「ギャ！　――くぉの……クソがー！」
今度は蹴り飛ばそうと考えたのか、ガスバルドは左足を激しく振り上げてきた。メルメルはまたもさっと避けて、振り上げた足が戻ってきたところを斬りつける。
「がーーー！　この――くぉの！　くぉの！　くぉの！」
ガスバルドはタップダンスでもするように攻撃を繰り返す。メルメルはクルクルと、足と足の間をくぐり抜けて避けながら、ガスバルドの足を何度も斬りつけた。
「クソ、クソ、クソ、クソ、クソー！」
完全に頭に血が上って、狂ったように足を踏み鳴らすガスバルド。
プラムじいさんはヒヤヒヤしながら、巨人の足をくぐり抜け懸命に攻撃を繰り返すメルメルを、じっと見つめた。素早い動きの中に時折チラリと垣間見える、その――真剣な表情。それは今までプラ

ムじいさんが見た事の無いものだった。目の中に炎を宿らせ、口元をキリリと引き結び、一心に剣を振るっている。

「メルメル……」

そこに、――サンタが来るまで寝ない。などと、駄々をこねて自分を困らせていた孫娘の姿はなかった。プラムじいさんが、ほんの少し妙な気持ちで見つめていた――その時。

ガスバルドが作った地面のクレーターに、メルメルが足を躓かせた。

「あ！　ととと……」

たたらを踏んだメルメルに、ガスバルドはニヤリと足を振り上げた。

「メルメル！」

「ガオオー！」

「ぐおぉ！　――こ、この……。またしても……」

思わず尻餅をついてしまったメルメルの目に、キラキラと輝く水色の首輪が飛び込んできた。

「シバ！」

シバウンピョウはガスバルドの振り上げた足に、がっしりと噛みついている。

「くぉの……叩き切ってくれるわー！」ガスバルドが右手の斧を振り上げた。

「ガウガウガウ！」

「ぐおぉ！」

ガスバルドの丸太のように太い右手首に、別のウンピョウが噛みついた。

「ミミ！」

ミミウンピョウは鋭い牙を深々と突き刺して、そのままガスバルドの右手首にぶら下がった。

「グオォォ！　――このクソめ！　離れろー！」

ガスバルドは激しく腕を振るが、ミミはいっそう強く手首に食ら

いついて離れない。
「グゥゥ……。うおぉぉ……」
ミミが鬼神のような顔で渾身の力を込めて噛みつくと、ギリギリと、骨の軋むような奇妙な音が聞こえてきた。
「うおぉぉ……ううう……」
ガスバルドは口の両隅から泡を吹き出して、顔を赤黒く染めて呻いている。その表情からも、小刻みに震える右手からも、かなりの苦痛が伺えた。そして遂に――

ガヂャーン！

何としても離すまいと頑張って持ち続けていた斧を、その右手から落としてしまったのだ。
ミミウンピョウは更に力を振り絞って噛み付き続ける。
「ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ――」
喉の奥から変な声を出して、ガスバルドがゆっくりと、左手をミミに近づけた。
――ミミを引き剥がすつもりなのだろうか？
（無理だわ……）
今のミミは決死の覚悟で噛みついている。いくら引っ張っても、ガスバルドの手首を離しはしないだろう。
メルメルがその確信を持ってガスバルドの巨体を見上げ、苦しみに歪んでいるであろうその横顔を見てみると、
「――――！」
何故かガスバルドは、ニヤ～っと薄気味悪く笑っていた。心底嬉しそうな笑顔に、メルメルはゾクリとしながら、
（完全に頭がおかしくなったのね……）と考えていた。
ガスバルドの左手がミミの頭に触れる。その仕草は、まるで飼い猫の頭を撫でるように優しげだった。それを見て、プラムじいさんはハッとした。

「い、いかん。――逃げるんじゃミミー！」
「サンダーボルト！」

バリバリバリバリ！

その、瞬間――ミミの全身の毛が逆立った。メルメルは目を見開いた。

「ミ……ミ？」

ミミの目がクルリとひっくり返って、牙がズルリとガスバルドの手首から抜けた。メルメルの目にはミミが落ちていくのがスローモーションのように感じられた。そして、ドサリと地面に落ちた――その時。

ピッカー！

ミミは眩い光を放ち、元の小さな茶トラの猫に戻ってしまった。その体が、ピクリともしない。
「ミミーー！」すぐさまメルメルは起き上がってミミに駆け寄った。
「そ、そんな……」トンフィーは呆然と、倒れたミミの姿を見つめる。
「ミミ……ミミ……。やだ……そんなぁ……」
メルメルがその体に触れて揺さぶっても、ミミは動きだそうとはしない。それどころかその小さな体は、呼吸すらしていないように感じられる。
「ミミぃ……」メルメルはボタボタと涙をこぼした。
「……？　何故――猫が……？」
皆が悲しみに打ちひしがれる中、ガスバルドだけが、一人訳が分

からず首を捻っていた。まさか先程まで戦っていたウンピョウが、猫が変身していたものだとは気付かなかったからだ。

今一状況を飲み込めないまま、ガスバルドは自らの左足に目を向けた。そこには、いまだに必死で噛みついているシバがいた。こちらも変身が溶けて猫の姿に戻ってしまっている。

「……まさか……な。……まぁ、いい。取りあえずは――殺しておくか」

ガスバルドはゆっくりと、左手をシバに近づけた。

「逃げるんじゃー！　シバー！」

プラムじいさんの声にハッとして、メルメルはガスバルドを振り仰いだ。

ビューーーーバス！

ガスバルドはピタリと動きを止めた。

「ああ……」

思わず呟いたメルメルが見つめる先。ガスバルドの右手には、一本の矢が深々と突き刺さっていた。

ガスバルドは、つと腕に刺さった矢を見て、ギロリと黒目を動かした。その目が映し出したのは、先程決死の覚悟で矢を放った少年が、再び矢を構えている姿だった。

ビューーバス！
ビューーバス！
ビューーバス！
ビューーバス！

トンフィーは休みなく矢を放ち続ける。自らの矢が尽きるまで――。そう、覚悟を決めていた。必死で戦ってくれたミミとシバの為にも、自分のせいで捕らえられてしまったプラムじいさんを助け出

す為にも、大好きなメルメルを守る為にも。強い思いが届いたのか、トンフィーが放った矢は全てガスバルドに突き刺さり、今やその巨体はハリネズミのようになっていた。

ビューーバス！
ビューーー――、

「命の石じゃ！　ガスバルドの心臓を打ち抜くんじゃ！」

トンフィーの耳の奥で、プラムじいさんの叫び声が響いた。それまで余りの集中に音も感じず、真空のような世界で一心に矢を放ち続けていた。そんなトンフィーの目に、突然それが飛び込んできたのだ。

ミミとシバとの死闘で破けた鎧の隙間。ガスバルドの左胸に輝く――青色の石。

ビュゥゥゥゥ……バス！

訪れた、恐ろしい程の静寂。トンフィーの耳に、徐々に、吹き荒ぶ風の音が戻ってきた。

ヒュゥゥゥ……

最終決戦　5

メルメルは唇を噛んでそれを見つめた。
ハリネズミのようになったガスバルドの、巨大で不気味なその左手。手の平を前にして、自らの心臓を庇うように突き出されている。その手の平には、一本の矢が突き刺さっていた。
「くぅ……」トンフィーは眉根を寄せた。
狙いは外れていなかった。矢は、真っ直ぐに正確に、ガスバルドの左胸に埋められた命の石目掛けて飛んでいったのだ。しかし――。
寸での所で、それまで身じろぎもしなかった巨人は左手をかざし、矢は、その手の平に突き刺さってしまったのだ。
そしてそれが、トンフィーに残された――最後の矢だった。
（倒れろ……）
トンフィーは矢を放った体制のまま、念力でも送るように一心にそれを願った。
（お願い……倒れて……）
メルメルも祈るように巨人を見上げる。
ガスバルドは瞬き一つせず、ピタリと動きを止めていた。
（倒れろ、倒れろ、倒れろっ！）
（倒れて、倒れて、倒れてっ！）
たとえ、命の石を打ち砕く事は出来なかったにしても、その体は無数の矢で貫かれているのだ。普通の人間なら間違いなく倒れている。
（これなら……。そう……この、巨人だってきっと……）
トンフィーは、考えるというよりも、まるで願うようにそう思った。そして遂に、身じろぎ一つしなかった巨人の体が、ぐらりと揺れた。
ぐーっと前のめりに――傾いていく。

メルメルとトンフィーは拳を振り上げた。「やっ――」
「グワーッハッハッハッハッ！」
「――――！」
二人は思わずヒュッと息を吸い込んで固まってしまった。目を見開いて、突然大声で笑い出した巨人を、ゆっくり見上げる。
「グワッハハハ！　グワーッハハハハ！　グワッ、グワッ、グワッハハハハハーーー！」
ガスバルドは空を仰ぎ、大口を開けて、目尻に涙まで浮かべて笑い続けている。その体には勿論、無数の矢が相変わらず突き刺さったままだ。しかし、心から愉快そうなその姿に、痛みや苦しみを感じた様子など微塵も感じられなかった。逆にトンフィーやメルメルの方が、まるで体に矢が刺さってでもいるかのように苦悶の表情を浮かべている。
「グワッハハハ！　ひーひー……」
ガスバルドは顔を前向きに戻し、自らの左手を目の前にかざした。手の平に突き刺さっている矢を、右手であっさりと引き抜く。そして、その傷口からとろりと出てきてしまった血を、ベロリと舌で舐め上げた。ネバネバとよだれが糸を引く。トンフィーは絶望的な気持ちで目を閉じた。
「グッフフフ……。こんな事で、俺様を倒す事が出来ると思ったか？　馬鹿め……俺様は、悪魔の兵隊だぞぉ？」
――命の石がもたらした、不死身の肉体……。
トンフィーはがくりと膝をついた。
――分かってはいた。分かってはいたが、倒れろと願わずにはいられなかった。
「さ～て……。先ずはこのバカ猫から始末するかな？」
ガスバルドはニヤリと笑い、足に噛み付いたままのシバへと手を伸ばした。トンフィーはなす術もなく、その様子を愕然と見つめていた。

ザクリ！

「――！」

突然、ガスバルドのふくらはぎから、にょっきりと刃が飛び出してきて、トンフィーは目を見開く。「――め、メルメル……」

トンフィーの位置からは、ガスバルドの太い足に隠れて全くその姿は見えないが、おそらくメルメルが後ろからガスバルドのふくらはぎを突き刺したのだろう。それを裏付けるように、震えるか細い声がガスバルドの足元から聞こえてきた。

「シバ……逃げて……」

ガスバルドは再び不愉快そうな顔に戻って、自らの足元へと手を伸ばす。

突然、目の前に自分の顔よりも大きな手がぬっと現れて、メルメルは思わずギョッとなった。

「きゃ……！」

ガスバルドの巨大な手は、握り締めたメルメルの手ごと剣をズブリと引き抜いた。そのままメルメルは上へと持ち上げられる。カランと、剣だけが下に落ちた。

「あぁぁぁ……！」

メルメルは、手首が引きちぎられるような痛みに、悲鳴にならないような声を出した。

「メルメルー！　やめてくれー！　ガスバルドー！」

プラムじいさんが縄で縛られた体を暴れさせ、必死になって叫んでいる。ガスバルドはギロリとそちらを睨みつける。

「頼む！　頼むからやめてくれ～！　離してやってくれ～！」

「な～にが頼むだ……。今更笑わせるなクソじじい！　……まぁ、安心しろ。貴様も直ぐ、同じようにあの世に送ってやる。そこでみんな仲良く花摘みでもするがいい……」

ガスバルドはひくひくと奇妙に口元をひくつかせ、メルメルをぐいっと目の高さへと引き上げた。

「い――うぅぅ……離して……」
苦痛に顔を歪めるメルメルを、ガスバルドはニヤニヤと見つめた。
「グッフフ……さっきまでの威勢はどうした小娘。ん～？」
ガスバルドの顔をギロリと睨みつけ、煽られるがままに、メルメルは最後の威勢を出す事にした。
「はっ……なしてよ！　こ……の、ひげもじゃ！　口が……口がとっても臭いのよ！」
「くっ……このクソガキめ！」
ガスバルドは右手でメルメルの首を掴み、手首を掴んでいた左手を離してしまった。
「うぐっ……ううぅ……」
「やめろー！　ガスバルドー！　メルメルー！」
プラムじいさんの悲痛な声が夜空に響き渡る。ガスバルドはそれに心を動かされる様子など欠片もなくて、何故かやけに嬉しそうな顔でメルメルの顔を覗き込んだ。
「苦しいか？　ん～どうだ～？」
メルメルには、ガスバルドの口から発せられる生臭い匂いも、よだれを垂らした汚い顔が近づいてくる不快感も、幸か不幸か、余りの苦しさに感じられなくなってきていた。
「ううぅ……うぅ……」
――意識が遠のいていく……。
「離せー！　この、この、この、このー！」
「ん～？　なんだぁ～？」ガスバルドがギョロリと目玉をそちらに向ける。
「離せ、離せ！　メルメルを離せ、この化け物！」
メルメルには、それはまるで、隣の教室から壁を通して聞こえてくる怒鳴り声のように感じられた。しかし、実際はメルメルの直ぐ真下、ガスバルドの丸太のような足に拳を叩きつけながら、トンフィーが涙を浮かべて発している声だったのだ。
「離せ、離せ、離せ、離せ、離せ、離せー！」

トンフィーはポコポコと拳をガスバルドの足にぶつけた。無論、相手には何のダメージにもなりはしないだろう。ガスバルドにとってはカ（・）にとまられたようなものだ。しかしトンフィーにはもう他に出来る事もなく（だって、矢も魔法も完全に尽きちゃったんだ）そうして素手で殴りかかるくらいしかすべがないのだ。

（――誰か！　誰かメルメルを助けて！）

トンフィーは心の中で叫ぶ。自分にはどうする事も出来ない絶望感。目の前で、大好きなメルメルが殺されてゆく。「この、この、この……」

ガスバルドの顔を睨みつけようと、トンフィーは視線をあげた。そうしてふと、自分が取り付いているよりも少し高い場所に、ずっと、ずーっと長い事そうしてガスバルドの足に噛み付いていたらしい一匹の獣の存在に気付いた。きっと、トンフィーと同じように大好きな人を助けたくて、必死でそうして噛み付き続けているのだろう。顎だって痛いだろう。良く見れば、歯茎から血が滲み出している。

トンフィーはギュッと拳を握り締め、目の前のガスバルドの野太い足を、この世で一番憎いのはこの足だと言わんばかりの顔で睨み付けた。

「……こ、の……ぐわわぅー！」

トンフィーはシバと同じように、そのにっくき足に思い切りかぶりついた。

「……うるさいハエ共め」ガスバルドは顔をメルメルの方へ向けたまま、目だけを足元の一人と一匹に向ける。「そんなにこの小娘が好きなら、貴様らは先に行って待っていてやればいい……」

ニヤリと笑い、トンフィーとシバが張り付いた右の足を後ろに目一杯引いた。それでもトンフィーとシバはガスバルドの足に噛み付いたまま離れない。

「地獄へ飛んで行けー！」「――！」

ガスバルドが力一杯右足を蹴り上げると、ビューっと一人と一匹

は吹っ飛んだ。
「……と、トンフィー君！」プラムじいさんが大きな声で叫ぶ。
シバは着地するさい、コロコロと地面を転がりながらも何とか体制を立て直して立ち上がった。どうやら大した怪我もなさそうだ。
――しかし、
「トンフィー君！　大丈夫か！　返事をするんじゃ、トンフィー君！」
トンフィーは受け身もとれず、地面叩きつけられるように一度小さく跳ねた。そしてそのまま動かなくなってしまった
（……トンフィー！）
今のメルメルは、首を捻って後ろを振り向く事など出来ない。だから、何が起こったのか正確には分からない。万が一振り向けたとしても、首を掴まれ呼吸の出来ない苦しみに溢れ出てきた涙のせいで視界がぼやけ、倒れたトンフィーの姿はどうせ見えなかったかも知れない。だが、自分を掴み上げているガスバルドの体が大きく揺れた事や、耳の奥底の遠い所でプラムじいさんが、「トンフィー君！　トンフィー君！」と繰り返し呼んでいるのが聞こえるから、トンフィーに良からぬ事が起こったのは分かっていた。
（トンフィー！　トンフィー……トン……フィー……）
メルメルの意識は徐々に遠のき、プラムじいさんの声も、ガスバルドがいやらしい声で、「小僧は死んでしまったぞ～。ん～？　お前も、もう駄目か小娘～？」と言う声も聞こえなくなってしまった。
そして遂にメルメルの中で、トンフィーを心配する気持ちさえも消え失せ、思考さえも完全に止まってしまったのだ……。

深い深い海の底にいた。何故こんな所にいるのか分からない。とりあえず両手で水をかき、上へ泳いで行こうとしたがちっとも前に進まない。
何だか、とてもだるいし疲れている。
それに、周りが真っ白で眩し過ぎるから目が焼けるように痛い。

そう、丁度雪山で太陽の照り返しにあった時の様な……。
真っ白なのだから海の底というよりは雲の中にいるのかも知れないが、雲の中ではなく海の中だという確信があった。何故なら、全く息が出来なくてとても苦しいからだ。
――そう。たまらなく、苦しい。
だけど、実際は雲の中など一度も入った事がない。もしかしたら雲の中では息が出来ず、これほどに苦しいのかも知れない。それならここは、雲の中なのかも知れない。
――まぁ、いずれにしても今はそんな事はどうでもよくて、ただひたすら、苦しいのだ。
苦しくて、苦しくて、死んでしまいそうだ。だからさっきから疲れた体に鞭打って、頑張って泳いでいる。
遥か頭上に、ポツリとシミの様な黒い点がある。真っ白な空間に唯一ついた、黒いシミ。あそこに行けば呼吸が出来る。何故だかそう、知っている。だから頑張って泳いでいるのだけど、本当に全く前に進まない。とても苛立つし、苦しいし、眩しいし、もう何だか、嫌になってきた。それに、ちょっと分かってきてしまった。無理をしてあのシミにたどり着かなくても楽になれる方法が、実は、あるのだ。それは、
諦めてしまう事だ。
そうすれば、苛立ちも、苦しみも、眩しさも、何も感じない場所へ行ける。
――そうだ。楽になれる。
そう思うから、水をかく手にも力が入らない。
――そうだ。何も無理に泳がなくとも。
小さな黒いシミがどんどん離れて、いよいよ小さくなっていく。

――そうだ。何もかも諦めてしまえばいい。

息苦しささえも、なくなってきた。

――……。

「メルメル！」

ハッとして目を見開く。相変わらず真っ白な空間。一瞬目を見開いた気になったが、そもそも目を瞑っていたのかどうかも怪しい気持ちになってくる。再び呼び起こされる息苦しさ。

――苦しい。ほおっておいてくれればいいのに……。

「メルメル！」

――おじいちゃん……。

今度はメルメルの心に、どっと悲しみの波が押し寄せる。何故だか分からないが、とても悲しい。

――許して……おじいちゃん……もう、ワタシはもう諦めてしまった……。

「諦めるな……メルメル」

今度はまた、別の声。

――誰？

「さあ、おいで……」

抱き締められる。強く、暖かい腕に。そしてゆっくりと体が上昇していく。

メルメルは頭上を見上げた。黒いシミが大きくなってゆく――。

「メルメル……」

優しい声。聞いた事のある、暖かい声。

「……おかあ……さん」

ものすごい早さで、黒いシミが大きくなってゆく……。どんどん大きく。大きく、大きく、大きく。

――――――――――視界一面に黒いシミが広がった。

「汚い手を離せ――この大阿呆」

辺り一面、真っ暗な世界。

最終決戦　6

「――げほっ！　うっ……ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ、ゲホッゲホッ！　――ゼー……ゼー……げ、ゲホッゲホッ！」

メルメルの体に失いかけた様々な感覚が戻ってきた。

まず初めに感じたものは――痛み。

久しぶりに自分の中に飛び込んで来た空気に体が驚いて、激しくむせてしまった。そのせいで喉に焼き付くような痛みがある。その次に感じたのは暖かい肌のぬくもり。誰かが自分を抱き上げている様なのだ。メルメルは呼吸を整えながら、ぼんやりとした頭で今の状況を思い出していた。

（そうだ……ワタシ、ガスバルドに首を絞められて――）

「遅くなってすまなかった。……大丈夫か？」

「……」

「……メルメル？」

首を捻り、メルメルの顔を覗き込んできた、その驚く程に澄んだ、綺麗な青い二つの目。

メルメルはその人の首に両手を巻きつけ、ギュッと力を込めた。

「う……う……うわあ～～ん！　ラインさあ～～ん！」

大声を上げて泣き出したメルメルを、ラインは無言で強く抱き締めた。

「うわあ～～んあんあん！　うわあ～～んあんあん！」

メルメルは中々泣き止みそうにない。恐らく、相当怖い思いをしたのだろう。そう思うから地面に下ろす事も出来ず、ラインはメルメルを抱き上げたままで、足元でうずくまっている大男に視線を移した。ブルブルと小さく体を震わせながら、右の手で自らの左腕の

付け根を押さえている。――いや。正確には元々は左腕が生えていた場所を。そこからは血が溢れ出していて、地面に大きな血溜まりを作っている。ガスバルドの傍らに、ラインが先程切り落とした左腕が物も言わず落ちていた。それに一瞬目をやり、今度は、まだガスバルドにちゃんと生えたままの右の腕に目を移す。そうして思わず眉をひそめた。

そんなラインの様子をプラムじいさんは、ほうっと溜め息を吐きながら見つめていた。自分の中からいっぺんに不安がかき消えていくのを感じる。

――彼女が来れば大丈夫だ。もう、メルメルが命の危険にさらされる事は無いだろう。

「ライン……」

赤の大臣――ライン。かつて、赤軍を率いて数々の軍功を立てたその英明果敢さは、軍人のみならず多くの民からも愛されていた。戦場で見せる真っ直ぐな心。また、戦場から離れた時に見せる純真な心。

プラムじいさんはずっと、ラインのような優しさと強さを持って欲しいと願いながらメルメルを育ててきた。もしも体を縛られていなければ思わず膝をついてしまう程に、それまで緊張しきっていた体から力が抜けて行く。

「良かった……メルメル……」

メルメルはようやく落ち着いてきてグシグシと鼻をならしながら、ある事を急に思い出してガバリと体を持ち上げた。

「そ、そうだ！　トンフィー！　――ラインさん、トンフィーが！」

メルメルは慌てて周りを見回す。うずくまって動かない大男の姿が目に入り、一瞬ビクリとする。しかし直ぐ、その体の十数メートル先に倒れた少年と、その顔を覗き込むようにしている三毛猫の姿が見えて意識が全てそちらに向かった。

「トンフィー！」
　メルメルは、ラインの体から飛び降りて倒れたトンフィーに駆け寄った。トンフィーの顔を一生懸命アケが舐めている。チリチリと鈴の音が聞こえる。「ニャ～ン……」
「トンフィー、トンフィー……」
　メルメルは傍らにしゃがみこんで、その、いつもより細く華奢に感じる肩に手を置いた。体を揺さぶろうとしたその手を、後ろから伸びてきた手が優しく掴んだ。
「動かしてはいけない」
「ラインさん……」メルメルは後ろを振り仰いだ。
　ラインはすぐさまメルメルと反対の傍らに回り、膝をついてトンフィーの顔に自らの手の甲を近づけた。
「ラインさん、トンフィーは……トンフィーは大丈夫？」
　メルメルが不安げに問いかけてくるのにはまだ答えられず、今度はトンフィーの細い手首を握った。　――うん。大丈夫だ。脈がある。
　ラインはトンフィーの耳元に口を近づけた。「トンフィー……トンフィー！」
　大きな声で呼びかけると……、
「ん……うぅーん……」少年は小さく身じろぎ、思い切り顔をしかめた。
「トンフィー！」メルメルの顔がパッと輝く。
「どうやら無事な様だな。良かった……」
「う……ん？」トンフィーはゆっくりと目を開く。「うん？　あ……れれれ？　――あ、アケ？」
　どアップになったアケの顔を見て、不思議そうに何度もパチクリとまばたきを繰り返している。メルメルは、再びこみ上げてきた涙を堪えながらその様子を見守っていた。すると突然、トンフィーがこちらを見てガバッと起き上がった。
「メルメル！　――いっててて……」

「急に動いてはいけない。頭を打っているんだ。恐らく軽い脳震とうだろうが……安静にしていろ」「え……ら、ラインさん？」

トンフィーは頭を抱え込みながら、首を少し捻ってラインを見上げた。驚いたように目を丸くする。

「トンフィー……」

「め、メルメル！　い、――いてて……」

反対側から聞こえてきた声に、慌てて勢い良く首を捻ってしまい、トンフィーは再び頭を抱え込んだ。

「だ、大丈夫トンフィー？」

「う、う～ん……。よ、良かった……メルメル……」

どうやら大丈夫そうな様子に安心して、メルメルは満足そうに頷いた。そしてサッと立ち上がった。実は、他にも心配事があるのだ。

「メルメル？」ラインが不思議そうに見上げた。

メルメルは心配事を拾いに行こうと身を翻し、いまだにうずくまって動かない大男に向けて足を踏み出しかけて目を丸くした。

「――ミミ！」

なんと、心配事の方からこちらにやって来たのだ。隣に寄り添うシバに支えられるように、ふらふらと不安げな足取りでミミは歩いてくる。「ニャ～ン……」

「ミミ！　……ミミ！」

メルメルは駆け寄り、ミミを抱き上げた。何だかやたらと静電気みたいに張り付いてくる毛並みに何度も頬ずりする。

「良かった……ミミ……」

後ろからトンフィーのホッとした様な声が聞こえて、メルメルは二人の元へ駈け戻った。

二人がやたらと喜んでいる理由を知らず首を傾げているラインに、トンフィーが説明する。

「まともにガスバルドにサンダーボルトを食らって倒れていたんです。……無事で良かった」

「サンダーボルトを？　それは――すごいな……」

ラインは驚いてミミの頭を撫でた。しばらくそうして不思議そうな顔でミミを見つめている。

「ライン！　後ろじゃ！」

ハッとしてラインは立ち上がった。

ヒュオオォォ……。

耳鳴りのように風の音が響く。風の冷たさに、肌が突き刺すように痛い。

――そうか。きっと、もうすぐ夜が明けるのだ。

日が昇り初める頃が一番冷える。

（確か、昔おじいちゃんがそう言っていた……）

メルメルはぼんやり考える。そのおじいちゃんは、のっそりと立ち上がった大男の陰に隠れて姿が見えなくなってしまっていた。

「久しぶりじゃないか……赤の大臣よ」

ラインが片手にぶら下げたままだったスリッフィーナの剣を構え直した。左手のカルバトの剣は鞘に収めたままだ。

メルメルはラインの肩越しに、今や完全に人間とは違う生き物に変わってしまった大男を仰視していた。ラインに左腕を切り落とされた傷口からは、もう血は溢れ出ていなかった。顔を火傷でただれさせ、体中に矢を突き刺し、全身切り傷や咬み傷だらけになりながらも、ガスバルドは――――――笑っていた。

「お前に……会いたかったぞぉ……赤の大臣」

「二人共、下がっていろ」

ラインに命じられ、メルメルはミミを胸に抱き締めたまま、トンフィーを支えて立ち上がった。ラインの背中を見つめながらゆっくりと後ろに下がる。

「お前は……お前はまさか、俺様を忘れたのではあるまいな？」
ガスバルドは、ひくひくと顔を痙攣させている。ラインは無言のまま、ガスバルドの左の胸に光る青い石を見つめていた。
「わ、忘れたのなら、なら、思い出させてやろう……お、俺様は――」
「覚えている」
静かな声でラインが言うと、ガスバルドは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑った。
「そうか！　そうだろう！　――が、ガハハハ！　ハハハ……忘れているはずが、な、ないな！」
「……」
メルメルは、少しずつ、少しずつ後ろに下がりながら、向かい合った二人の戦士見比べて唖然としていた。
ラインの方は女性としては大きな方なのだろうが、向こう側に見えるガスバルドは遠近感を無視した巨大さで、まるで狸と熊の様に見える。――いや。狸じゃさすがにラインも怒るし、熊じゃガスバルドには可愛過ぎるか。まぁ、とにかくそのくらいに二人の体格は違い過ぎるのだ。
「で、ではあの日の事を……後悔しているだろうぅ！　お、俺様を軍に、いれ、入れなかった事を！」
「……後悔？」
ラインはピクリと眉を持ち上げた。
「そうだ！　おま、お前は……何故俺様を軍に入れなかったのだぁーーーー！」
大声で空に向かってガスバルドは吠えた。その様子をラインはじっと見つめている。表情の変化は一切ない。
「……つまり、私がお前を軍に入れなかった理由を知りたいのだな？」
「そ、そうだ。その、バカな理由をだ」
ガスバルドの口から流れ出た唾液は、髭を伝わって胸に大きな染

みを作っていた。様々な要素が合わさって、どこからどう見ても不気味としか言いようのないその姿。しかし、ラインの顔には嫌悪感も不愉快さも表れてはいなかった。その目も、澄んだ水のように静かだ。

「……そう。――あの時、赤軍にお前がやって来た時……」ラインは遠い記憶を探るために、僅かに目を細めた。「……あの時のお前は――お前は既に、私如きでは救いようの無い様な状態だった。私は……どうするべきか少し迷った。だが、結局はお前を追い返す事にしたのだ」

ガスバルドが目を剥く。

「な、何が救えないだ！　俺様がどれだけ強いか！　お、お前は見抜けなかった！　見抜けなかっただけのくせに～！」

メルメルは、まるで駄々っ子のように足をバタバタ踏み鳴らして暴れているガスバルドを、呆れ顔で見つめていた。それ程の恐怖を感じないのは、もうかなり離れた所までやって来たからだ。あまりに離れ過ぎたから、大声のガスバルドはともかくラインの声はかなり聞こえ辛くなっている。メルメルとしては逆に少し近付いてしっかり会話を聞きたいのだが、トンフィーがどんどん後ろへと引っ張って行くのだ。

「ね、トンフィー……。もう良いんじゃない？　この辺りで――」

「だ、駄目だよ！　まだまだ危ないよ……」

ガスバルドは鼻息荒く言葉を続けた。

「お、俺様は、今では、将軍をやっている……将軍をやっているんだぞ！　おまえぇは見抜けなかったのだ……。俺さまぁの……力をなぁ！」

「……確かに。私は大変な誤りをしてしまったようだ」

「な、なんだとぅ？」

「本当に――申し訳ない……」

ガスバルドは驚いたような顔をして固まってしまった。ラインはぼんやりとした目で遠い所を見ている。

「……そうだ。お前は私に後悔しているのだろうと言ったな。確かに……。確かに私は後悔している」

「ぐふっ……ぐふふふ……」

ガスバルドは大声で笑い出したいのを何とか堪えているといった様子だ。

「お前を追い返してはいけなかった。……あの時私は――」

ガスバルドは空を仰ぎ、いつもの爆発大笑いを炸裂させようと準備した。ラインの言葉の続きを待つ――。

「その場で、お前を殺しておくべきだったのだ」

抑揚のない声。ガスバルドの顔からサァッと笑顔が引いていった。トンフィーからは空を仰いだガスバルドの顔は見えないが、先程まで嬉しそうにウキウキ揺れていた肩が急に動きを止めたので、何だか尋常じゃない心の動きがあった事は伝わってきた。息を飲むトンフィーの横で、メルメルは、ほとんど声も聞こえなくなってしまった事が不満で頬を膨らませていた。

（こんな所まで下がる必要無いのに！）すぐ後ろはもう塔の縁だ。トンフィーとしては、今のところ言葉を交わしているだけだが、一度（ひとたび）あの二人が戦いを始めれば、どれだけ離れても安心とは言えないと考えていた。それはそれは激しい戦いでになるだろう。戦いの火の粉はどこまで飛んでくるか分からない。ところが、そんな考えが間違っていた事をトンフィーはすぐに思い知らされる事となる。

ガスバルドはしばらくの間、日が昇り始めたせいで薄くなってしまった星の光を睨み付けていた。やがてゆっくりと顔を正面に向ける。歯をむき出し、黄色く濁った目でラインを睨み付けた。

「殺しておくべき……だった、だ、と？」

「そうするべきだった。その後お前に殺された者達には、本当に申

し訳ない事をした」

ラインは辛そうに目を伏せる。その様子を見れば、先程の言葉が本当に心からそう思って発したものなのだと分かる。だからこそ余計に、ガスバルドの怒りの炎は燃え上がった。

「こ、の……バカ女めぇ……。貴様に俺様を殺す事など出来るものかぁ……！」怒りで、ガスバルドの体中から湯気が吹き出ている。

「みぜてやろう……進化じた俺様をぅ……ぎざまには倒せない……だおせないのだぁ！」

――あの攻撃が来る。

メルメルもトンフィーも体を固くした。ところが斧を振り上げたガスバルドを前にして、ラインは身じろぎ一つしなかった。両者の間は結構開いている。きっと、ラインはガスバルドの攻撃が自分には届かないと考えたのだ。

「ら、ラインさん逃げてーーーー！」

最終決戦　7

バガガ……。

「……」

メルメルとトンフィーは無言で立ち尽くした。恐らく隣を見れば、お互いに全く同じ顔をしている事が分かるのだが、二人は今や立ち位置がすっかり入れ替わってしまった大男と女戦士を食い入るように見つめ続けていた。その目も口も間抜けな程パッカリと開いている。

「なに、が……」

ようやくトンフィーが言葉を発して、メルメルはつられたように目をパチクリさせた。

――一体何が起こったのか？　トンフィーは、本当はそう言いたかったのだろう。

ガスバルドの斧は地面に突き刺さったまま動かない。次の攻撃を繰り出す様子も無い。それに、先程の攻撃も中途半端なものだった。ほんの少し地面に亀裂が走っただけで大した威力は感じられなかった。だが、メルメル達が驚いているのはその事ではない。何故ガスバルドが中途半端な攻撃しか出来なかったのかは分かっているのだ。それは、

斧を地面に振り下ろす途中で、腕が自分の体から離れてしまったからなのだ。

「グワアァァァ！」

ガスバルドは膝をつき、獣のように吠えた。腕を切り離された痛みからか、両腕を失った事によって勝負が一瞬でついてしまった事への嘆きで叫んでいるのかは分からない。その後はうなだれて下を

向き、「……うっ……ううっ……」と、まるで泣いてでもいるかのように（実際、よだれかも知れないけど、うなだれた顔からはポタポタと何かがたれていたんだ）呻き声を上げていた。
「は、速すぎて、僕、良く見えなかった……」トンフィーが思わず呟いた。
メルメルも同じ気持ちだった。――ガスバルドが斧を振り下ろし、その横を一瞬にしてラインは通り過ぎた。ただ、通り過ぎただけ。そう、見えた。メルメルとトンフィーには、どのようにガスバルドの腕を切り落としたかまでは見えなかった。余りに動きが速すぎたのだ。
膝をつき、うずくまったガスバルドのすぐ向こう側にラインは立っている。僅かに顔をガスバルドの方に向け、ゆっくりとスリッフィーナの剣を振り上げる。
――トドメを刺す気だ。
トンフィーもメルメルもぎゅっと目を瞑った。

「イーッヒッヒ！　――赤の大臣よ！」

突然、耳障りな笑い声が明け方の空に響き渡った。
「――――！」
ラインは剣を振り上げたまま、慌てて後ろを振り返った。
（あ、あれは……！）
トンフィーは驚いて目を見開く。うずくまったガスバルド、その後ろで剣を振り上げたライン。更には、そこから離れた向こう端に、地面から突き出た棒に縛られているプラムじいさん。そして、そのプラムじいさんの後ろに、
「べ、ベラメーチェ……」「え……？」
驚愕の表情を浮かべたトンフィーの横で、メルメルは目を凝らした。目の良いトンフィーには良く見えているかも知れないが、メルメルには容姿までは分からないのだ。しかし、何者かがプラムじい

さんの後ろに急に表れたのは分かった。ラインは既に、猛スピードで走り出している。

「――頑張ったのに残念だったねぇ？　お前達……」

赤い唇をつり上げ、ベラメーチェはニヤ～っといつものように笑った。プラムじいさんが慌てたように叫ぶ。

「ライン！　メルメルを――」

パッとその姿が、後ろにいたベラメーチェごと消えてしまった。

「――くっ！」

――そんなに遠くには飛べない筈だ。

ラインは二人の消えた場所に全力で駆け寄り、塔の縁に立って下を覗き込んだ。

――いた！

ラインのいる場所から遥か斜め前方。飛び去る巨鳥の上に、二つの人影。その片方が振り返り、勝ち誇ったようにニヤ～っと笑った。その顔を睨み付けながら、ラインは右手の剣先をつと地面に付けた。グニャリと剣が歪み、瞬く間に赤毛の豹が現れた。

「――スリッフィーナ。……頼む！　追ってくれ！」

スリッフィーナはラインの隣に並び、飛び去って行く巨鳥の姿を確認した。さっと身を翻し、階段へと走り出す。その背中を追うように視線を巡らし、視界の片隅に映った巨大な人影に、ラインはハッと息を飲んだ。

――しまった！

大きな体を揺らしながら走って行くガスバルドの後ろ姿を見つけて、ラインは再び全力で走り出した。

――間に合うか！

巨体は想像通り俊足とは言えないが、ここからでは余りにも距離がある。

「あわわわわ……」

完全に正気を無くしたガスバルドがみるみるうちに近付いてきて、トンフィーは腰が抜けそうになってしまった。両腕を無くした体で、

一心不乱に向かって来る様は、余りに恐ろし過ぎた。足がガクガクと震える。

「トンフィー、ギリギリまで我慢して避けるわよ。……トンフィー？」

返事をしない相手に内心で首を傾げながら隣を見れば、トンフィーは恐怖の表情を浮かべ固まっていた。とても動けそうにない。だが、大男はもう目前だ。メルメルは青くなった。

「トン――」

ドッ　ドドドッ　ドドドドドドドドドーン！　とメルメルはトンフィーを突き飛ばしながら横に飛び退いた。

――ゴン！　「いてっ！　……いててて」

「……」トンフィーに覆い被さったまま、メルメルは少し考える。

（こんなに頭をぶつけてしまって、トンフィーったらお馬鹿にならないかしら？　せっかくお利口なのに）

「う～ん……」

トンフィーは頭を抱えて呻いている。メルメルは体を起こし、ぐるりと周りを見回した。

「……」

やはり、大男の姿はどこにもなかった。あの勢いで来たのだ。恐らくそうなるであろうとは思ったが……。それでも、

（まさか本当に落ちるなんて……）

心臓がドキドキする。思わず胸を押さえてふと横を向くと、塔の縁に立ち下を覗き込んでいたラインと目が合った。涼しい青色の目。しかし何故か暖かく感じるその目を見て、少し心が落ち着いた。

「わわ～……。す、すご……」

いつの間にか起き上がって、後ろでトンフィーが下を覗き込んでいた。顔が真っ青になっている。

「……どうなってるの？」

メルメルが恐る恐る聞くと、トンフィーはゴクリと喉を鳴らした。
「と、塔の入口の横に、ど、銅像があったでしょ？」
メルメルは目玉を上にして考える。
（うん……。確か鎧を着て、剣を掲げていた……！　ま、まさか……）
青くなって隣を見れば、トンフィーも同じ顔色で頷いた。
「く、串刺しだ」
「うへぇ……」メルメルは酸っぱい顔をした。
ズズズーン
「――な、なに？」「わわわわ……」
突然、地響がして、地面がぐらぐらと揺れた。トンフィーとメルメルは顔を見合わせる。
「急ぐぞ二人共。さぁ、立て」「あ、はい！」
厳しいラインの声に、メルメルとトンフィーは慌てて立ち上がった。立ち上がりながら、メルメルは先程までプラムじいさんが立っていた場所にチラリと視線を送った。
「スリッフィーナに追わせはしたが、追いつくのは難しいだろう……」
まるで心を読み取ったようにラインに言われて、メルメルは少しだけ俯いてしまった。
「ワープの魔法ですか？　……あれなら、そんなに遠くには飛べませんよね？　まだこの塔の中にいるんじゃ――」
「いや、ガルーダを用意していたんだ。それに乗って、もう飛び去ってしまった」
「が、ガルーダってすごく貴重な鳥ですよね？　そんなものまで用意していたんだ……」
トンフィーは気遣わしげに、しょんぼりと俯いたメルメルを見た。
（おじいちゃん……せっかく会えたのに、また連れ去られてしまった……）

ズズズーン……ドドドドド……

「ま、また……」

再び地面が激しく揺れた。しかも今度は、小さな揺れが中々収まらない。トンフィーは不安げに目をきょときょとさせた。

「とにかくここから出よう。もしかすると、敵が塔を崩れさせるような仕掛けでも用意していたのかも知れない」

「し、仕掛け……」

ラインの言葉を聞いて、トンフィーは慌てて階段へと走り出した。メルメルもとぼとぼとその後を追う。そんなメルメルの丸まった背中を、ラインは優しく叩いた。

「生きている事が分かった。それが分かっただけでもいい。生きてさえいれば、きっとまた会える」

メルメルは、ラインの澄んだ瞳を見上げ、その言葉の意味をしばし考えた。

「……はい！」

にっこり笑ったメルメルに、ラインも薄っすら微笑んだ。

「早く早くー！」

我先にと走って行ったトンフィーが、階段の前で手を振っている。ところが、足を早めたラインの横で、メルメルは何故か急に立ち止まってしまった。踵を返し階段とは別の方へと走って行く。

「メルメル？」ラインが首を傾げる。

「ごめんなさい！　ちょっと忘れ物……」

メルメルはキョロキョロと辺りを見回す。

（確か、この辺にあるはずなんだけど……）

「何してんのさ、メルメル……」

心なしか地面の揺れが激しくなってきて、トンフィーはヤキモキしながらメルメルを見ていた。何かを探すようにキョロキョロしているメルメルの周りには、無数の亀裂があった。先程ガスバルドの攻撃によって出来たものだ。

（まさか、あの攻撃のせいで塔が崩れてきたんじゃ……）

有り得ない事でもない。何せ五百年間、手入れ一つしなかった塔なのだ。ちょっとした事で崩壊しても不思議では無い。トンフィーはそわそわとメルメルを見た。

「あ！　あったわ！」

目的の物を見つけてメルメルは駆け寄る。亀裂の隙間に半分隠れてしまったそれを掴み取り、高く掲げて振り返る。

「あったわ！　ラインさん！」

それは、ラインに貰った剣だった。先程ガスバルドとの戦いのどさくさで落としてしまったのだ。ラインはそんなメルメルを見て微笑んだ。

「――ライン！」

聞き覚えのある声。驚いたようにラインが振り返る。

――――ドスン！

最終決戦　8

ラインは、呆然とその姿を眺めていた。
いや、実際には一瞬で相手はいなくなってしまっていたから、眺めていたというのは正確では無いかも知れない。ただ、彼女の残存が目の裏に焼き付いていて、それを見ていたに過ぎないのだ。
彼女は生前と変わらない姿で、生前と変わらない素晴らしく正確な矢を放ってきていた。しかし、ラインの心臓目掛けて飛んできた矢は、直前でマト自体がほんの少し左に動いたせいで狙い通りの場所を射抜く事は出来なかった。消え去る直前に見せた、彼女の口惜しそうな顔。自分を一撃で殺せなかった事でそんな顔をする彼女を見る日が、まさか来るなんて……。
「ラインさん！」
自分を呼ぶ声が聞こえて、ラインはハッと我に返った。後ろから走り寄って来る少女を振り返る。
「ラインさん！　――ラインさん！　矢が……」
ラインの右胸に深々と刺さった矢を見て、少女は涙を浮かべる。ラインはゆっくりとした動作で自らに刺さった矢に触れた。――急所は外した。だが……。
「……大丈夫だ。……行こう」
頭に優しく触れて歩き出すと、少女はラインの右手を掴んで泣きながらついて来た。ラインは階段の前に呆然と立ち尽くす少年の頭にも優しく触れた。
「――母さん……」
「強くなれ……。トンフィー……」
少年は両目一杯に涙を浮かべ頷き、ラインの左手を掴んだ。子供を両脇に従え、ラインは階段を降りて行く。
ゴゴゴゴゴ……
再び地面が大きく揺れた。

フラリ――と、手を掴んだラインの体が揺れて、メルメルは一瞬ドキリとした。しかし直ぐに、ラインは何事もなかったかのように足早に歩き出す。地面は揺れ、壁のあちこちが剥がれ落ち、天井からはパラパラとホコリが降って来る。

ズズズーン……ズズズーンと低い振動を繰り返すカルバトの塔。しかしメルメルにとっては、そんな今にも崩れそうな塔の中にいる事よりも、握り締めたラインの手が、徐々に冷たくなってきている事の方がもっとずっと恐ろしかった。チラリチラリと胸に刺さったままの矢に目をやる。

――それ程血が出ているようには見えない。

今度はもう少し視線を上げて、ラインの顔を覗き見る。そして、メルメルは思わずハッとした。手がこんなに冷たいのにもかかわらず、こめかみから流れ落ちる程に大量の汗をかいているのだ。

「――大丈夫だ。メルメル……」

メルメルの視線を感じたのか、前を向いたままでラインが呟く。しかし、メルメルがそれでも不安げに見つめ続けていると、ラインは再び、ゆっくりと口を開いた。

「……あの男は、かつて私が赤の大臣だった頃、赤軍に入りたいと言ってハルバルートにやって来た事があるのだ」

あの男とは、恐らくガスバルドの事だろう。メルメルは大きく頷いた。

「うん。聞いたわ。だって自分でたくさん喋っていたもの。でも、ラインさんは追い返したのでしょう？」

メルメルは、ラインが喋っていられる程に元気なのが嬉しくてウキウキと問いかけた。

「そうだ……。あの男は、赤軍に入る代わりに自分を隊長にしろと言ってきた。……私は、あの男を足腰が立たなくなるまで叩きのめし、ハルバルートから追い払った」

「正解だわ！　あんなのが隊長じゃ、部下が可哀想よ！」

「フッ……あんなの、か。……しかし、あの男はロロ族の王の血を

引く者なのだそうだぞ？」

「王？　ガスバルドが？」メルメルは目を丸くした。

そんな驚いた顔をした少女のラインを挟んで反対側では、少年が元気を無くしてしょんぼりとしていた。それはそうだ。親友にあんな酷い事をする母親を目の前で見てしまえば、誰でも落ち込むというものだ。だからこそ余計に、メルメルは元気に喋べり続けた。

「王様の血なんて信じられない！　それって本当なの？」

「さあな。確かめた訳では無いから分からないが……。だが、何故メルメルは、ガスバルドが王族だという事が信じられないのだ？」

「え？　……だって、そんな風には見えないし……」

「そんな風とは、どんな風だ？」

「え、えーと……」

まさかそんな事を追求されるとは思わなかったので、メルメルはすっかり弱ってしまった。目の玉を上にして真剣に考えてみる。

（王族……王……。マンガで見た王様は口髭を蓄えて、変な冠を頭にのせて……それで……それで何だかすごく偉そうで……そうか！）

「威厳よ！　王様ってもっと威厳があると思う……あ！　――ら、ラインさん！」

ラインが足元の瓦礫に躓いてよろめいた。メルメルとトンフィーは慌ててラインを支える。

「おっと……大丈夫だ……。フッ……威厳か。ガスバルドには威厳が無かったか。……それでは私はどうだ？　威厳など、やはり無いかな？」

「ラインさん？　ラインさんは威厳たっぷりだわ！　ね、トンフィー！」

「えっ！」

突然、元気いっぱいに話しかけられて、トンフィーは目を丸くした。どんどん冷たくなってきているラインの左手が気になって、話を余り良く聞いていなかったのだ。メルメルの泣きそうな必死の目

を見て慌てて頷いた。
「……あ、うん。たっぷりだ！」
「ね！」見上げるとラインは薄っすら微笑んだ。その笑顔の力無さに、メルメルはとても悲しくなる。
「だが……私は王族では無い。母は嫁ぐ前は農家の娘だったらしいし、父は大尉を勤めてはいたが、元々は田舎の道場で剣術師範をしていたような男だ。二人ともハルバルートの都からは遠く離れた田舎町の出身で、いくら遡って調べても、王族との関わりなどありはしないだろう……」
　階段の崩れてしまった場所を迂回して避けながら、ラインは語り続ける。いつもならこんな距離ひらりと飛び越えてしまう筈なのに……。
「王の血を引いていればガスバルドのようにはならないのか？　田舎育ちの母親を持つ娘が大臣ではおかしいか？　――ロロ族とは誇り高く、強靭な肉体と精神を持ち、体は大きいが心優しい部族だと聞いた事がある。ガスバルドがその王族であるというのなら……血などというのは、実にくだらない物だという事だ……」
　ラインは休みなく話し続ける。メルメルは、ラインが話している間は、その内容に集中しさえすれば泣きそうな自分を何とか抑える事が出来た。しかし、ラインの喋りには時折呂律の怪しいところなどがあり、メルメルの中で不安の風船はどんどん膨らんでいってしまうのだった。
「メルメル……トンフィー……。その人がその人であるのに、血や生まれた場所など関係無い。王族だろうが、貴族だろうが、平民だろうが、他の国の生まれだろうが……。そんなくだらない価値観で、人を判断してはならない……」
「はい……」メルメルもトンフィーもこっくりと頷いた。
「……ハーハー。……例え、お前達が、ガスバルドの子であったとしても……ハーハー。私は、お前達を、愛しく思うだろう……」
「ワタシだってそうよ！　例えば――ラインさんがガスバルドの妹

だったとしても、関係なく大好きよ！」
「僕もだ！」
「……ハーハー……フフ……」
ラインは呼吸を荒く激しく繰り返す。メルメルは顎を上げ、ラインの顔ばかり見て歩いていた。だから突然トンフィーが、「ああ！」と大きな声を出した時、思わず肩がビクッとなってしまったのだ。
「な、なによトンフィー……。びっくりするじゃな――」
「は、梯子が……」
「え……？　――えぇ！」
前を向いたメルメルは、その光景に驚いて思わず声をひっくり返してしまった。壁に、以前通った時は無かった巨大な穴が空いている。
「な、何よ……これ……」「……ハーハー……」
メルメルの記憶が確かならば、ここには小さな部屋があった筈だ。床には丸い穴が空いていて、そこから下へ降りる縄梯子がぶら下がっていた。ところが……。
床には、今も確かに穴は空いている。しかし、何故かそれは、元の大きさの五倍くらいに広がってしまっていた。それに、縄梯子は穴の中の壁に打たれた二本の杭に繋がれていたのだが、一本は杭が完全に抜けてしまっていたし、もう片方の杭も抜けかけていた。縄梯子は、かろうじて落ちずにぶら下がっているような状態だ。
トンフィーは慌てて穴に駆け寄り、万が一にも落ちないようにと縄梯子をしっかり掴んだ。
「き、きっと、あの鉄球が落ちたんだ……」壁に開いた穴と、床に開いた穴とを見比べて呟く。
「鉄球……。あの、巨大鉄球が……？」
「……ほら、見てごらんよ」
トンフィーは言いながら床に開いた穴を示す。メルメルは穴を覗き込んで目を丸くした。
穴から見える下の階の景色は酷い有り様だった。恐らくトンフィ

ーの言うように鉄球が落ちて転がったせいなのだろうが、床の一部が大きくへこんでいて、そこから床がバキバキに壊れた道が一直線に伸びていた。ここからでは見えないが、恐らくあの壊れた床の先に鉄球があるのだろうと予感させる。

「ど、どうしよう……」トンフィーは眉をハの字にして情けない顔をした。

「どうしようったって……」メルメルもとことん弱った顔になる。

この、トンフィーの掴んでいる外れかけた縄梯子で下に降りるのは危険過ぎるだろう。だが、まさか飛び降りられる高さではない。下の階までは優に十メートルくらいはありそうなのだ。二人が困った顔を突き合わせていると、後ろからラインがスッと手を伸ばしてきて、トンフィーの握り締めていた縄梯子を取り上げた。

「ラインさん？」

「ハーハー……一人づつ降りて行け……」

「で、でも……」トンフィーは、縄梯子とラインを見比べて呟く。

「大丈夫だ……私が掴んでいるから……」

「ラインさん！」メルメルは思わず悲鳴を上げる。

その時、再び激しく地面が揺れた。ガラガラと穴の周りの壁が崩れ落ちる。

「早くしろ……ハーハー……。この塔は、そうは保たないぞ……」

「駄目よ！　だって……ラインさんはどうするのよ！　それじゃあ、ラインさんが降りられないじゃない！」

最終決戦　9

ラインが縄梯子を落ちないように掴んで、メルメルとトンフィーがその縄梯子を使って下に降りる。

今のラインに（顔も青白いし、話す声にも力が無いんだ）子供が掴まった縄梯子を支えられるのか多少の不安はあるが、まぁ、そこまでは取りあえず良しとしよう。だが、ラインが残ってしまったら誰も支える者のいない縄梯子を、一番体の重いラインが降りる事になってしまう。それは無理だ。まず間違いなく杭は外れて、縄梯子ごとラインは下に落ちるだろう。

「ワタシが残るわ！　ワタシが梯子を支える！」

「め、メルメル……」

トンフィーは困った顔でメルメルとラインを見比べた。メルメルの気持ちは分かる。けれど、この華奢な少女がラインの重さを支えるのは絶対に無理だろう。

「ハーハー……私は後からちゃんと降りるから。……早く……早く行け……」

「うそよ！　そんなのうそだわ！　酷いわラインさん！　こんな所でうそをつくなんて……うぅ……ず、ずるいわ……うっうっ」

メルメルは、ラインの胸にすがりついて泣き出してしまった。

「ハーハー……。メルメル……」

メルメルには分かっているのだ。ラインは、下に降りるつもりなど無い。子供達を下に降ろした後、自分は諦めてここに残るつもりなのだと。

「うっうっ……ワタシ、ワタシ絶対行かないわ……。ラインさんを置いてなんて……ひっく……絶対行かない……」

「……ハーハー……」

ラインは、不安げにこちらを見つめている少年に目を向けた。次いで、自分の腕の中で、行かない、行かないと繰り返す少女に目を

移し、自らの瞳を固く閉じた。強く決意をして瞼を開き、少女の肩を掴んで顔を上げさせる。

「メルメル……必ず私も下に降りる……私を信じろ」

メルメルは涙に濡れる瞳でラインを見上げた。その青い瞳の奥に、真実が隠されているかのようにじっと見つめる。

「その代わりに、これを……ハーハー……少しだけ借りるぞ……」

ラインはメルメルの首に手を回し、そこにかけられている赤い石の付いたネックレスを外した。メルメルは少し不思議そうな顔をする。それは以前ラインがプレゼントしてくれた物だ。首を傾げる少女には構わず、ラインはネックレスを自らの首に付けかえた。

「……ハーハー……これを返す為にも、私は必ず降りる……分かるなメルメル？」

メルメルは答えられないままラインをじっと見つめる。

「トンフィー……。ハーハー……先ずはお前からだ」

「えっ！　で、でも……」

「早くしろ……」

トンフィーは困った顔をメルメルの方に向けた。メルメルは石のように固まってラインを見つめ続けている。

「……トンフィー」

ラインの厳しい声に、トンフィーは仕方なく立ち上がった。

「じゃ、じゃあ、あの……。先に行くよ、メルメル……」

返事をしない相手に、不安げな視線を送りつつ、トンフィーはメルメルのうさぎの鞄に、ミミとシバとアケを詰め込んで自らの肩にさげた。鞄はかなりギューギューで、重たくて足元がふらついたが、その程度の事でめげていられるかと、トンフィーはきゅっと口を引き結んだ。ラインは少し笑ったような顔で、そんな少年を見守っていた。

よろよろしながら、縄梯子に足をかける。縄梯子を掴んだラインの体は、トンフィーが乗ってもピクリともしなかった。トンフィーは、ラインに負担をかけたくなくて急いで降りてあげたいと思うの

だが、肩にさげた鞄の重さと、早くしなくちゃという気持ちの焦りと、ラインが死んで仕舞うんではないかという恐怖のせいで足が震えて、素早くなどは降りられないのだった。

「……ハーハー。焦るなトンフィー……ゆっくりでいい……」

苦しそうなラインの声。優しい優しいラインの声。トンフィーは堪えていた涙をついに溢れ出させてしまった。

「うっうっ……ラインさん……し、死なないで……うぅ」

「大丈夫だトンフィー……ゆっくり……ゆっくりだ……」

ラインは、しゃくり上げながら降りて行く少年を励まし続ける。ようやく下にたどり着き、不安そうに見上げてくる顔に何とか微笑みかける事ができた。そして、ラインはいまだにこちらを見つめ続けている少女に目を向ける。

「メルメル……お前の番だ……」

メルメルは口をへの字にし、しかめっ面をして動かない。ラインは顔を近づけ、その目を覗き込んだ。

「メルメル……。ハーハー……私を……信じてくれないのか？」

「うぅ！　……し、信じるわっ」メルメルはひきちぎれんばかりの勢いで首を横に振り、バッと勢い良く立ち上がった。「約束よ……ラインさん……」

ぎゅっとラインを抱き締め、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら梯子に足をかける。

「ラインさん……ひっく……ラインさん……ひっく」

「大丈夫だメルメル……必ず私も行く」

嘘ではなかった。恐らく、その場しのぎの嘘ではこの少女をごまかす事は出来ないと悟り、何とか自分も下へ降りようと決めていた。

「……まったく。……そんなに、上ばかり見ていたら……足を踏み外してしまうぞ……。ハーハー……」

自分の名前を懸命に呼び続けながら梯子を降りていく少女を見ている内に、ラインの中で、抑えていたある気持ちがどんどん膨れ上がってきた。

――死にたくない。

思わず叫びたいような胸苦しさをおぼえて、奥歯を強く噛んでそれをやり過ごす。

――死にたくない。もっと生きていたい。

久しく流していなかった涙が溢れ出しそうになり、先ほどと同じようにして、それも、何とか堪える事に成功した。

たとえどんなに往生際悪く泣き叫んだとしても、運命を変える事など出来はしないのだ。

自らの右胸に刺さっているこの矢。これが普通の矢では無い事に、ラインは始めから気付いていた。そこからは、瞬時に仕留められなかったとしても、確実にラインを殺してやろうという相手の強い執念が感じられた。そしてそれを感じ取った時、ラインは二つの事を同時に悟った。一つは、あの愛しい友が、本当にこの世界から消え去ってしまったのだという事実。

その昔、ソフィーが赤軍の部隊長を勤めていた頃の事だ。紫の大臣(むらさきのだいじん)率いる紫軍(しぐん)が、ある村の反乱を抑える為に村の飲み水に毒を流し入れて鎮圧するという出来事があった。ソフィーは、正々堂々としない汚いやり方だ恥を知れ、と紫の大臣を罵った。怒り狂い、上官を愚弄したソフィーを死刑にするとまで言った紫の大臣を抑えるのに、ラインは随分苦労したものだ。

紫軍は毒を飲み水に流し入れる際、村人が一人も逃げ出さないように村全体を包囲していた。もしも村から出てくる者がいれば、丸腰の者であっても全ての人間を殺した。

村人は全滅した。

そしてその中にはわずかだが、女子供もいたのだ。その後、ソフィーはラインに言った。

――戦に正々堂々も何も無いかも知れないけれど、私は毒を使うなんてやり方は大嫌いだ。毒なんて物は、生理的に受けつけないんだ――と。

そう語った彼女の放ったこの矢には、その、毒が塗られていた。

もう彼女はいないのだ。肉体は蘇ろうとも、そこから、あのおおらかで優しい心は抜け落ちてしまった。たとえ昔のままの記憶と能力を持ち得ようとも、あれは全くの別人に他ならないのだ。それが分かったと同時に、ラインは自分の命もまた、ソフィーと同じように尽きようとしているのだと悟った。

やるせない気持ちで見つめる先に、二人の子供が不安と悲しみをないまぜにしたような顔で立っていた。

「ラインさん……」

涙を流しながら呟いた少女を見つめる内に、何故かラインの頭の中に、ずっと昔の遠い記憶が蘇ってきた。まだ、ラインがメルメルと同じくらいに幼い頃で、母と二人、ある本を読んでいた時の記憶だ。

そこには鮭の一生というものが物語調で描かれていて、それを読み終えたラインは母に思わず言ったものだ。

――鮭って随分可哀想だね。一生懸命に長い長い旅をして、最後には子供を産んで死んじゃうんだから。きっと、こんなことなら子供を産むんじゃ無かったって後悔するだろうね。

すると、母はラインにこう言った。

――でも、鮭は知っていたと思うわ。子供を産めば、自分が死んでしまう事を。それでも子供を産みたかったのよ。

ラインは驚いた。

――すごい。鮭って随分優しいんだね。

――そうね……。

――私には無理だ。だって、死ぬのは辛いもの。私は鮭にはなれない。

そう言って首を振るラインに、母は優しく微笑んだ。

――私なら……鮭になれるわよ……。

「ラインさ～ん……」

少年の方が情けない声で呼びかけて来る。ラインは我に返って、思わず苦笑いした。

――何故こんな昔の事を思い出したのか……。

強く握り締めていた縄梯子をようやく離し、ラインはゆっくり立ち上がった。足元がふらついて、思いの他いう事を効かない自分の体に、少しだけ苛立ちを感じる。だが、それでもやらねばならない。何故ならそれは、

（約束……だからな）

ラインは目を瞑り、呼吸を整え、腰にさげたカルバトの剣をスラリと抜いた。目の高さにそれを掲げる。明かりの無い暗い部屋の中。漏れてくる光を受け鈍く輝くその刃は、半ばほどで折れてしまっていた。先程、黒騎士との戦いの末にそうなってしまったのだ。相手にも相当の深手を負わせたが、こちらは大切な剣を失い、最後には結局仕留められずに逃げられてしまっていた。

（この折れた剣で、はたして……）

自信は全く無かった。毒は今や全身に回り、本当のところ立っているのもやっとといった状態だ。わざわざ無理をして降りる意味があるのか。ここで横になって死を待つ方が、ましではないのか。そんな気持ちがラインの中に無いわけではない。しかし……。

ラインは少しずつ足を動かし、穴の縁に立った。目線を下げる。大した高さでは無い。普段のラインなら、普通に飛び降りる事すら出来る高さだ。だが、歩く事すらままならない今、何とも言えない恐怖をこの高さには感じる。

（人とは、おかしな生き物だな……）

ラインはゆっくり瞳を閉じた。

トンフィーは顎を上げ、目を閉じたラインを不安げに見つめた。

――どうやって降りるのだろうか？

まさか飛び降りるのは無理だろう。そして、あの縄梯子を使って降りるのも無理だ。では、一体どうするのか？　大体、何故あんな

壊れた剣を握り締めているのか。カルバトの剣が折れてしまっていた事にも驚いたが、それを掲げるラインはまるで戦いに敗れた戦士のようで、トンフィーは悲しくなった。

（無理だよ……）

トンフィーはつい、そう思ってしまった。しかし、そんな気持ちは口に出せない。隣で、ラインが降りてくるのを一心に信じ続けているメルメルの前で、無理だなんて言葉が言える筈がない。

ゴゴゴ……ゴゴゴゴゴ……

地面が揺れて、ガラガラと天井や壁が剥がれ落ちる。もしかしたら、カルバトの塔は本当に崩壊してしまうかも知れない。トンフィーはゴクリと唾を飲み込んで、少しだけラインから別の場所に視線を移した。そこには巨大な穴が開いていて、明るい外の光が煌々と差し込んでいた。

――ガスバルドの攻撃が与えた衝撃に巨大鉄球が影響を受けて、劣化した壁を破壊しながら下まで転がり、挙げ句には外壁に穴まで空けてしまった――。そんな様々な衝撃で、カルバトの塔全体が崩れ始めているのかも知れない。トンフィーは、そう考えていた。

ゴゴゴゴゴゴ……

揺れ続ける地面に焦りを感じて再び上を見れば、ラインは手を振って二人に離れるようにと指示をしていた。戸惑いながらも、メルメルとトンフィーは後ろに下がる。二人はラインを見ながら、その手が止まるまで下がり続け、ふと気付くと元の場所より二十メートルも離れた場所にいた。

「ラインさん……」メルメルが、祈るように呟いた、その時――。

ゆっくりと、スローモーションのようにゆっくりと、ラインの体が前方に倒れていった。

――落ちる！

トンフィーは息を飲む。それは確かにトンフィーの感じた通り、降りるというよりは落ちるという方が正しいような動きだった。剣を握り締め、重力に任せて頭から下に落ちて行く。

メルメルは飛び出してしまいそうな自分を抑えて、体をぐっと前のめりにさせた。
（――ワタシはラインさんを信じる！）
まなじりが裂けそうな程に目を見開いているメルメルの横で、トンフィーは遂に目を閉じてしまった。
（――もう駄目だ！　ぶつかる！）
「うおぉぉ――クリムゾンファング！」
ドゴーン！
「――！」
強烈な爆風が起こり、遠く離れた二人の所まで、パチパチと小石が飛んできた。目を瞑ってしまったトンフィーには見る事が出来なかったが、メルメルはその瞬間を見逃さなかった。
地面に激突する直前に、ラインが、折れたカルバトの剣を思い切り振ったのだ。その瞬間、床が爆発したように吹っ飛び、今もまだ収まらないほどの砂煙が上がっているのだ。
「一体……な、何が？」
トンフィーは、爆音に驚いて頭を抱えしゃがみ込んでいた。その震える声を聞いて我に返り、メルメルは飛び出すように駆けだした。
「ラインさん！」
徐々に収まっていく砂煙の中に、うつ伏せに倒れたラインがいる。
「ラインさん！　ラインさん！」

最終決戦　１０

呼びかけてくる少女の声を聞きながら、もし叶うならいつものように薄く苦笑いでもしてみせたい気分だとラインは思っていた。

（石の力を借りてもこの程度だったか……）

だが、それでも一応生きて降りる事には成功した。わずかに顔を傾け、おいおいと泣きながら自分の名前を叫ぶ少女を見つめる。何とか自らの首から石の付いたネックレスを外し、その手に渡した。

少女は目を見開いて、力一杯こちらの手を握り返してきた。

（温かい……）

この手に触れられただけでも無理やり降りた意味があった。ラインは、今度は本当に薄っすらと笑った。

「……い……け……」

潰されたヒキガエルのような声が出た。それでも意味は伝わった筈だ。今や、少女も少年も狂ったように泣き叫んでいる。

「……いっ……てく、れ……」

「わーんわんわん！　……いやだよ～！　わーんわんわん！　ラインさ～ん、いやだ～！」

ラインは立ち上がり二人の背中を押してやりたかった。しかし、それはもう出来なかった。

「わーんわんわん！」

「ニャ～ン……ニャ～ン……」チリチリ、チリチリ。

「うえ～んえんえん！」

「ニャ～……」

人も猫も、みんなで赤毛の女戦士を取り囲んで泣き声と鳴き声の大合唱。ぐらぐらと地面は揺れて、ガラガラと壁は崩れ落ちる。それでも誰も、そこから離れようとはしなかった。

本当はそんな彼らをラインは怒鳴りつけたかったのだ。

――泣きわめきたいなら必死で生き延びてからにしろ！　……と。

だが、もう口を開く事すら出来ない。
――助けてやってくれ。愛しい子供達を……誰か……。

「メルメル！　トンフィー！　……一体どうし――」
メルメルとトンフィーは驚いて振り返る。
階段の下から顔をひょっこり出した彼女は、その光景に驚いて口をあんぐりと開けた。ぐちゃぐちゃで酷い顔の子供達の隙間に見える倒れた人影。その、鮮やかな赤色の髪。
「――ライン！」

薄く開いた瞳にぼんやりと映り込んできた人物を確認して、ラインは心から安心した。いつものように、走っているつもりとは思えないような速度にも関わらず必死の顔になりながら、こちらに向かって来る。
「ライン！　……ああ！　い、一体どうして……」涙もろい彼女は既に涙を浮かべている。
「ふえっ……ペ、ペッコリーナ先生～！　うわああーん！」
メルメルもトンフィーも、そのぽっちゃりとした体に抱きついて泣き出した。
「ああ、ライン！　……！　ら、ライン……こ、この矢は一体……何故なの……」
ペッコリーナ先生は悲しそうに首を振りながら、ラインの背中から突き出ている矢を見つめ、優しくその赤い髪を撫でる。
「か、母さんが……うぅ。母さんがぁ～！」
ペッコリーナ先生はハッとした顔をトンフィーに向けた。そしてその顔を見た瞬間全てを悟った。ひどく心が傷ついてしまったであろう子供の事を考え、両目から涙を溢れ出させる。
ゴゴゴゴゴゴ……
「――！　い、いけない……」今までに無いほどの地響きがしてペッコリーナ先生は厳しい顔付きになった。ラインの肩に手を置き、

埃まみれの美しい顔を覗き込む。「ライン……動けないかしら？」
　ラインはわずかに瞳を動かしただけで返事をしない。口元も少し動いたようだが、声は聞こえ無かった。
「無理だよ！　しゃ、喋るのも辛そうなんだ」
「ペッコリーナ先生！　この前みたいに、魔法で持ち上げる事は出来ない？　あれ、……ほら！　悪魔の兵隊を運んだ時みたいに！」
　良いアイデアだと思ったのだろう。興奮して頬が紅潮しているメルメル。しかし、ペッコリーナ先生は悲しそうな顔で首を横に振った。
「無理だわ……。魔力を使い果たしてしまったの。しばらく休まなければ、何の魔法も使えないわ」「そ、そんな……」
　メルメルはとてもがっかりした。しかしペッコリーナ先生の、暗い室内でもはっきり分かる程の疲れ切った顔に気付いて、何も言えなくなってしまった。それに、魔力が無くなるのも当然かも知れない。一人きりであの大量の敵と渡り合っていたのだから。ピッピーがいたから何とかなったのかも知れないが、ラインはペットを使った攻撃はとても魔力を消費すると言っていた。
「ねぇライン、何とか起き上がれないかしら？」
　ペッコリーナ先生はもう一度ラインの顔を覗き込んで尋ねるが、やはり返事は聞こえ無かった。少し開いた瞳にもほとんど生気が感じられない。
（これでは……もう……）ペッコリーナ先生の頬を涙がつたった。
「――分かったわ！　……よい、しょ！」
　ペッコリーナ先生はラインの首の下に腕を差し入れ、何とか起こそうと試みた。しかし、わずかに体が地を離れただけで起き上がらせる事は出来ない。メルメルとトンフィーは直ぐにラインに飛び付き、ペッコリーナ先生を助けて持ち上げようと力を込めた。それで何とか上半身が起きて、ペッコリーナ先生はラインを背負った。立ち上がろうと力を入れる。
「う、うう～ん！　ふ、ふう～ん！」

顔を赤らめ必死で踏ん張るが、どんなに頑張っても立ち上がれそうにはない。そうしている間にも絶え間なく地響きがして、時折外からドーン、ドゴーンと激しい音が聞こえてくる。もしかしたら建物の外壁が崩れて下に落ちている音かも知れない。ペッコリーナ先生は焦り、いよいよ顔を赤くして力を込めた。

「ふん！　……ふぬねぬぅ……！」

「ペッ……コ……リーナ……」

「ら、ライン？」

ペッコリーナ先生は驚いて目を丸くした。ラインの顔を覗き込もうと懸命に首を捻る。体が起きた事で呼吸が楽になり、ようやく少しだけ声が出せるようになったようだ。

ラインは絞り出すように言葉を続けた。「……おいて……行け……」

消え入りそうなその言葉を耳元で聞いた瞬間、ペッコリーナ先生は驚愕の表情を浮かべ、ぴたりと動きを止めた。

「……たの……む……」

わなわなと唇を震わせて、ペッコリーナ先生はきつく瞳を閉じた。ほんの少しそのままでじっとしている。そして閉じた瞳を再び開いた時、その顔は普段の優しい教師ものでは無く、戦を知る者の厳しいものに変わっていた。その表情の変化を見てメルメルはハッと息を飲んだ。――まさか……。

「……せ、先生？」

尋ねるように呼びかける。そんなメルメルには構わず、ペッコリーナ先生はゆっくりと優しくラインを元の位置に戻した。一度愛しそうに頭を撫でてから、すっくと立ち上がる。

「ペッコリーナ先生！」メルメルはペッコリーナ先生の袖を掴む。

「――行くわよ」

「先生！　い、嫌よ！」

ペッコリーナ先生はメルメルとトンフィーの手をむんずと掴む。

「行くわよ！」

それは、悪戯に怒っている時に見せる顔よりも、もっとずっと恐い顔だった。だけれど恐い顔なのに、まるでそれは泣いているような顔でもあった。

「う……うわあーんあんあん！　うわあああーんあんあん！」

ペッコリーナ先生は、泣きじゃくる子供を半ば引きずるようにして歩き出す。

「……生きるのよ……あなた達は絶対に、生きなくてはいけない……絶対に……絶対に……」

ペッコリーナ先生の危機迫るような迫力に押され、ずるずると階段を降りながらメルメルは後ろを振り返った。涙で滲んで歪んだ世界に、大好きなあの人が寂しそうに横たわっていた。

「嫌よ～！　うえ～んえんえん！　嫌よラインざ～ん！」

必死で抵抗してようやくペッコリーナ先生の腕を振りほどいた瞬間、バチーン！　と思い切り頬を叩かれ、メルメルは叩いた相手をギロリと睨み付けた。酷く興奮して震えるその姿も、ゆらゆらと滲んで見えた。

「あなたが一緒に死ぬ事を、ラインが望んでいると思うの！」「うぅ……」

その時――ガツンとペッコリーナ先生の頭に、天井から降ってきた石が当たってしまった。メルメルは驚いて息を飲んだが、当たった本人はびくともしなかった。

「……ラインは死ぬほど嫌でしょうけど、あなたはラインと一緒に無理やり死ぬの？」

頭から血を流しながら、瞳からは涙を流しながらペッコリーナ先生はメルメルを見つめた。

メルメルは天を仰いで口を開け、声も出さずに泣き出した。自分からペッコリーナ先生の手を握り、歩き出す。

「――ぅぁあああああん！　あああああん！」

三人は出口へと進む。体中に何か得体の知れないものがまとわり

ついたように重い。
——生きる事はこんなにも辛いのだろうか……。
メルメルは喉をひきつらせ泣いた。頭も胸も喉も顎も心も、全てが痛い。こんなにも体のどこから水が出てくるのか不思議に思える程に泣いた。泣いて泣いて、どのように歩いたか分からない。分からないが、気が付けばメルメルは塔の入り口から遠く離れた場所に座り込んで、ペッコリーナ先生に強く抱き締められていた。
「うっ……うっ……ひっく……」
目の前に、同じようにペッコリーナ先生に抱き締められているトンフィーの顔があった。ぐったりと相手に身を委ねて泣いている。ぼんやりとした頭でそれを眺めゆっくりと後ろを振り返れば、ガラガラと激しく音を立ててカルバトの塔はまだまだ崩れている最中だった。メルメルはふらりと立ち上がった。
「ズズズー……。メルメル？」
ペッコリーナ先生は鼻をすすり不思議そうに首を傾げ、メルメルの腕を掴んだ。
「駄目よ……まだ、ラインさんが中にいるのに……」
呟いて一歩足を踏み出す少女を、ペッコリーナ先生は強く引き寄せた。心配そうにその目を覗き込む。
——まさか、余りのショックに気がどうかしてしまったのでは……。
「メルメル……？」
「だって……だって、可哀想よ先生！　あんな、あんな寂しい所に一人で……。ラインさん、可哀想じゃない……。あんな所で一人で——」
——死んでいってしまうなんて。
頬を、また新しい涙がつたった。ペッコリーナ先生は苦しそうな顔で、そんなメルメルを見つめた。その目は正気を無くしたようには見えなかった。
メルメルにだって分かってはいたのだ。どんなに嫌だと泣き喚い

ても、ラインが死んでしまうのかも知れないという事を。ペッコリーナ先生の言う通り、ラインはメルメルに残ってなんて欲しく無かっただろう。だから、勿論戻るなんて絶対駄目だと分かってもいる。ただ、崩れ去ってゆく塔を見つめる内に、どうにも堪らない気持ちになってしまったのだ。たとえ死んでしまうのだとしても、誰に看取られる事もなくこんな場所で、滅び行く塔と共に消えて行くなんて。

「こんなの、あんまりじゃない。酷すぎるわ……」

「メルメル……」ペッコリーナ先生は再び強く子供達を抱き締めた。

（酷すぎるわ。……誰か助けて。……誰かラインさんを救ってよ……。誰か……神様……）

「おーい！　お前達、どーしたんだー！」

最終決戦　11

ちょっと場違いな、呑気過ぎる声だった。メルメルはペッコリーナ先生に抱き締められていたから顔を確認したわけではないが、誰が発した声なのかは直ぐに分かった。

（遅い……遅すぎるわよ！）

この声を聞くのがもっと早ければ、状況は随分違っていた筈だ。

メルメルは、駆け寄って来たその人物を怒鳴りつけようと、伏せていた顔をぐいっと持ち上げた。

「お、おいおい……。どうしたんだお前ら？　何をそんなに泣いて――」

男は不思議そうに、三人の泣きはらした顔をかわるがわる見ている。

その姿を認めた途端、メルメルは、来るのが遅いなどと文句を言う気はすっかり失せてしまった。

「グッターハイム……。あなた、酷い怪我だわ」ペッコリーナ先生が思わず呟いた。

グッターハイムが着ている服はあちこちボロボロに焼け焦げ、そこから露出した肌には酷い火傷の跡があった。そして、右腕はだらりと下がり先程から全く動いていない。その指先からは血が滴り落ちている。寄り添ったルーノルノーが気遣わしげにその手を舐めていた。

「あなた程の人が、一体誰に……」

「――ん？　あ、ああ……。こいつはその……まぁ……実はさっき、ソフィーの奴にちょいとな……」

トンフィーはハッとした顔になった。申し訳なさそうに俯き、いたたまれなくて後ろを向く。

「まぁ、安心しろ。――ってのも変な話しだが、こてんぱんにやられた上にまんまと逃げられちまったからな」

（母さん……）

恐らくソフィーは、ラインに矢を放った後ここから逃げる最中にグッターハイムとかち合ったのだろう。

（全部僕のせいだ……）

トンフィーは涙をこらえて、カルバトの塔を睨み付けるように見た。

（……あれ？）

塔に目を向けたトンフィーは、ある事に気付いて僅かに首を傾けた。

そんなトンフィーの方を気遣わしげにちらりと見て、ペッコリーナ先生はグッターハイムに向き直った。

「あなたも大変だったわね……。ニレはどうしたの？」

「おお。あいつはミデルを出た後隠れ家に向かったんだ」

「何故隠れ家に？　何かあったの？」

「ミデルからは、敵の軍が完全にいなくなっていた。あれだけ大量の軍を、一体何故一人残らず移動させたのか不思議に思ってな。それで少し、残った街の人間に話を聞いてみたんだ。すると街の奴ら不思議な事を言うじゃないか。ミデルから出て行く時、軍が二手に別れてたってんだ」

「二手に？　どういう事？」

「半分は十日程前に出て行って、残り半分は、たったさっき出たなんて言いやがるんだよ」

「たったさっき？　ど、どういう事かしら……」

「分からん。――だが、どうにも不気味だ。一体、連中はどこに向かったのか……情報収集が必要だ。だからニレは隠れ家に向かった。ウォッチはこちらに送ってしまったしな」

「確かにそうね……」ペッコリーナ先生は腕組みをして顎に指を当てた。

「そっちはどうしたんだ？　随分と派手にやったじゃないか」

グッターハイムはカルバトの塔を顎で示す。

「……ええ」

ペッコリーナ先生はカルバトの塔をじっと見つめた。メルメルも涙ぐみながらそれにならった。塔は激しい音を立てながらボロボロと外壁が崩れ落ちている。落ちた外壁が地面の砂を巻き上げて、カルバトの塔の周りはもくもくと白く煙っている。その砂煙の向こうに見えている入り口の扉も、開いたままで斜めに歪んでしまっていた。

（おかしい……どうしてあれが無いんだ？）

その異変に気付いたのはトンフィーだけだった。そこにあった筈の「あるもの」が無くなっているのだ。一人顔色を無くし、キョロキョロと目を動かして入り口付近を探す。

「ところで、ラインはどうした？」

びくりとメルメルの肩が震えた。ペッコリーナ先生はずるずると鼻をすすり上げる。

「どこに行ったんだ？　おい……ペッコリーナ」

三人の奇妙な雰囲気を感じとったのだろう。グッターハイムはいつものちゃらけた感じでは無く、やけに真面目な声を出した。メルメルはその声を聞いて、押さえていたものが込み上げてきた。

「うぅ……あ、あのながに～」メルメルの指差した先には、今にも全壊しそうなカルバトの塔がある。　グッターハイムは目を丸くした。頬をひきつらせ、後ろからペッコリーナ先生の肩を掴んだ。

「ど、どういう事だ……。おい！　どういう事なんだ！」

「ラインは、あの中で致命傷を負ってしまって……。立ち上がる事さえ出来なくて、それで……それで……」

「ぅぁあん！　ら、ラインざ～ん！　ぅぁあああああん！」

「そ、そんなばかな……。まさかラインが……」グッターハイムは愕然とカルバトの塔を見つめる。

「大変だ！　ガスバルドがどこにもいない！」

突然、トンフィーが勢いよく立ち上がった。
「な、なんだ？　ガスバルドってのは……」
トンフィーの見つめる先には塔の入り口がある。グッターハイムとペッコリーナ先生は不思議そうにそのひん曲がった扉を見つめた。
メルメルだけはトンフィーの言いたい事がすぐに分かった。トンフィーが見ているのは扉ではないのだ。扉の横に据えられている戦士の銅像の方を見ているのだ。ここに来た時、ハゲタカもどきに掴まれて空を飛びながらも、メルメルは入り口の銅像を確認していた。カルバト族の戦士を模写したのだろうか。それはとても大きな銅像で、空に向かって掲げた剣が二階まで届いてしまう程だった。ところが、その掲げていた筈の剣が無くなってしまっているのだ。今、戦士の銅像は腕を振り上げただけの、ちょっぴり間の抜けた状態になっている。
「け、剣がないわ……。だ、だってあれにはガスバルドが……」
――一体、どこに消えたんだ？
その時、急に日が陰った。トンフィーとメルメルはハッと空を見上げた。晴れ渡り雲一つ無い青空が広がっている。メルメル達はカルバトの塔の周りにぐるりと作られた大きな広場にいて、そこは視界を遮る物は全て取り除かれ、木など一切生えていなかった。それなのに、
（何故……影が……）
何か大きなものがメルメル達の後ろに現れたのだ。良く見れば、落ちた影は人の形にも見える。
メルメルとトンフィーはゴクリと唾を飲み込み、ゆっくりと後ろを振り返った。
「グガオオォォォォー！」
澄み渡った青空に響き渡ったのは、獣の咆哮そのものだった。
その目は完全に正気を失って血走っていて、体中に突き刺さった

ままの矢も、まともな人間なら致命傷といえる無数の傷痕も、そしてその背中から胸へ突き抜けた巨大な銅の剣も、この大男が既に化け物以外の何者でも無くなってしまっている事を証明していた。

「わあああああ！」

トンフィーは叫び声を上げて、思わず体を伏せてしまった。何故ならその巨体がこちらに向かって倒れて来たからだ。両腕を無くした大男に残された最高の攻撃だったのだろう。その体の下敷きになれば間違いなく無事では済まされない。トンフィーはぎゅっと全身を強ばらせた。

「……？」

何もおきないし、やけに静かだ。トンフィーはゆっくりと顔を上げた。「――！」

「ぐぐぐぐぐ……」

「グッターハイムさん！」

何と大男の巨大な体を、グッターハイムが一人で支えていたのだ。

「が、頑張って……」その光景に圧倒されながらも、メルメルは震える声で呟いた。

ペッコリーナ先生は驚きの余りに口を開けたまま、声も出せずに固まって（もしかしたら気絶しているかも知れないんだ）しまっている。

ズズズ……。とガスバルドを支えているグッターハイムの足が後ろに下がった。縦にだけでは無く横にも十分大きなガスバルドの体。それが一体何キロあるのか正確には分からないが、支えるのには相当な力がいるだろう。グッターハイムは背も大きくがっしりした体をしてはいるが、それはあくまでも一般人と比べての話だ。相手は巨大な化け物。しかも、なんとグッターハイムはそれを片手で支えているのだ。恐らく怪我をした左手を使う事が出来ないのだろう。

「ぐぬぬぬ……」少しずつ押され始めている。

「頑張って――――グッターハイムおじさん！」

メルメルが叫んだその瞬間、ぐいーっと大男の体が起き上がった。

グッターハイムは、その右腕に渾身の力を込める。「ぬ……おおおおお！」

ズドーン！

「やった……！」

ガスバルドの巨大な体は仰向けになって、沈み込むように倒れた。

メルメルとトンフィーは両手でガッツポーズを決めた。

「はぁ、はぁ、はぁ……め、メルメル」グッターハイムはメルメルの顔を見ながら、腰に下げた剣をスラリと抜いた。「おじさんはやめろと言っただろうが……」

呟きながら倒れたガスバルドに歩み寄る。巨人は虚ろな目をして、あらぬ方を見つめていた。そして、

「フィメロ様……」ぼんやりと、呟く。

その左の胸に光る青い石目掛けて、グッターハイムは躊躇無く剣を振り下ろした。

パキーン！

まるでガラスが割れたような、そんな音だった。大男はびくりと体を強ばらせ、それきり動かなくなってしまった。メルメルは立ち上がってグッターハイムの隣に走り寄り、大男の顔を覗き込んだ。意外にも安らいだような表情を浮かべていて、少しだけホッとした。

「……おじさんじゃなかったら、何と呼べば良いのよ？」

メルメルはグッターハイムを見上げる。グッターハイムはニヤリと片頬を上げた。

「――名前で呼べば良いだろが」

「……グッターハイム？」

「呼び捨てかよ……。まぁ良しとするか。おじさんよりはましだ」

言いながら視線をカルバトの塔に向ける。「ラインは塔の中にいるんだな？」

「そ、そうよ……」

メルメルは再び涙ぐんで答えた。グッターハイムと同じように視線を向ければ、まだ塔の崩れは収まりそうにも無く、今や上の方などは外壁がほとんど剥がれ落ちて、中が剥き出しになってしまっていた。

「わ、ワタシ達、ラインさんを置いてきてしまったの……ひっく。し、仕方なかったの……ひっく。だって、も、持ち上げる事も出来なくて……」

グッターハイムはぐっとメルメルの肩を掴んだ。「それでは、俺が助け出して来よう」

「え……」

「待っていろ。すぐ戻る」グッターハイムはひらりと身を翻して、塔へ向かって走り出した。

「ルーノお前は待っていろ。連中を守ってやってくれ」

グッターハイムの後ろを追走していたルーノルノーは不満そうに、「グウ」と鳴いて立ち止まった。

「グッターハイム！」ペッコリーナ先生が悲鳴を上げる。「無茶よ！　貴方まで死んでしまうわ！」

グッターハイムは振り返りもせずにひらひらと手を振った。

砂煙を超えて歪んだ扉の向こう側へと消えて行く。

メルメルとトンフィーは祈りを込めて、その大きな背中を見送った。

最終決戦　12

徐々に薄れてゆく意識の中、ラインは身動き一つせず、瞳に映り込む景色をぼんやりと眺めていた。

――なかなかどうして、我ながらしぶといものだ。

働きの鈍くなった頭で、そんな事を考えていた。長く続いていた振動は収まっていたが、時折思い出したように、まるで天井が抜けたような激しい破壊音が聞こえてくる。実際いずれかの階で天井が抜けたのかも知れないが、その後は再び激しく地面が揺れて、上から降ってくる砂埃が目の前に降り積もってゆくのだ。もしかしたら、そろそろここの天井も抜けて仕舞うかも知れない。

――いずれにしても同じ事か。

落ちてきた天井の下敷きになるのも、体の中に入り込んだ毒が心臓に達してしまうのも、死ぬ事には変わりがない。

それにしても唯一の救いは、この矢に塗られていた毒がそれ程苦しみを伴って死ぬ種類の物ではなさそうだという事だ。毒によっては、それこそ悶え苦しむ程の痛みを感じる物もある。ソフィーがそれと知っていてわざわざこの毒を選んだとは思わないが、それでもそのおかげで見苦しい様をあの子達に見せずには済んだ。

――最後の最後にみっともない姿を曝したくはないからな……。

肉体は朽ち果て、心も消え去り逝くものに許されるのは、人の記憶の中に思いを残す事くらいのものだ。ラインは生まれ変わりなる物を全く信じないわけでは無かったが、それに希望を見いだせる程には信じていなかった。だからあの子供達の記憶の中で、消したいような嫌な思い出として残りたくは無かったのだ。

――少しは役に立っただろうか？　あの子達の未来の役に……。

ラインは、やはりぼんやりと目の前の景色を眺めていた。そこには、幾度となく振り返り泣きながらあの子達が消えて行った階段がある。

――無事に外に出られただろうか？

一瞬不安を覚えて、直ぐにその心配が無い事を思い出した。あの子達をもっとも愛している者に任せたのだ。彼女が今一番信頼出来る友でもある。間違いなく、メルメルとトンフィーは無事に塔を出た筈だ。

（何故……）とラインは思う。

どうしてこれほどまでに、あの子供達の事を思うのか。特にメルメルの方への思いは強かった。あの子の顔を思い出すと、今も何とも言えず胸が苦しかった。もしかしたら、それはあの子に母親がいない事に原因があるのかも知れない。メルメルがラインの中に少し母親のようなものを感じて接して来たから、ラインの中にある母性が刺激されて……。そこまで考えて、

（勝手な思いだ……）ラインは何だかおかしいような気分になった。

――だが、もしもそうなら嬉しいものだ。

子供を産んだ事の無い自分にも、その様な素晴らしい本能が芽生えたなら嬉しい。ラインは目の前の景色を見つめながらも、そこに子供の顔を思い浮かべようとした。しかし残念ながら浮かんできたのは、顔をぐちゃぐちゃにして泣き叫ぶあの子の顔だった。最後に見たのがそれなのだから仕方ないが。

――何だ……泣くな。笑え……。

強く念じて、ようやく二コリと可愛く笑ったその時、階段の下からよく日に焼けたまぁハンサムと言えない事もないような男の顔が現れて、ラインは心の中で、

（邪魔なやつめ）

と、笑った。

「ライン！」グッターハイムは倒れたラインの元へと駆け寄った。

「おいっ……！　生きてやがんのか？　馬鹿やろう……」

覗き込んだ顔は青白い。それでもわずかに瞼が動いて、グッターハイムはホッと胸をなで下ろした。背中の矢以外に、それ程大きな

外傷は見当たらない。
「どうしちまったんだよライン……。こんな……こんな傷ぐらいで」
大の男がみっともなくも涙ぐみながら言う。自由になる右手でぐいっと顔を拭い、改めてラインの顔を覗き込んだ。
「安心しろ。すぐ助けてやる」言うなり、相手の反応も待たずにその肩に手をかける。「むむ……。まったく。不便なものだな」
片腕のみで体を起こさせるのは、思いの外困難であった。ただ持ち上げるだけなら力の有り余ったグッターハイムには容易い事だ。しかし負傷したラインの体を気遣いながらとなると、話は別だ。
「よっ……と」
少し肩が浮いたところで、グッターハイムは顔が地に着くほど体制を低くし、ラインの肩に自らの肩を合わせた。そうして体全体で相手を支えながら上半身を起こすと、自然と抱き合うような形になった。小さいが、確かな息遣いを右の耳に感じて、グッターハイムはたまらない気持ちになった。
「お……？　な、なんだ？」
弱々しい力ではあるが、ラインがグッターハイムの左手を掴んでいた。既に左手の感覚は無く、実際には掴まれた感触があったわけでは無いが、服が袖口から引かれた事でそれと気付いた。
「どうした？　ラインよ……」
「……れた？」
「え……？」
耳元で聞いていても、かすれていて何と言っているのかはっきりとは分からない。グッターハイムは右耳に全ての神経を集中した。
「だ……れに、やら……れた？」
「……」
怪我の事を言っているのだろう。グッターハイムは思わず目を閉じた。
――分かっているんだろう？
グッターハイムはゆっくり瞼を開き、無事な右腕をラインの背中

に回し、軽々とその体を肩に担ぎ上げ立ち上がった。
「……ソフィーのやつに。……ちょいとな」
なるべく大きな振動を与えないよう気を使いながら歩き出す。
「フッ……そう、か……」
わずかに笑いを含んだ、こちらをからかうような声音だった。
「まったく……。あいつの強さには恐れいったぜ。悪魔の兵隊になってパワー倍増だぞ、ありゃあ」
わざとらしく陽気な声を出すと、ラインはそれに合わせるように笑った。
「フフ……知れた、事、よ……」
「――もう無理に喋るな……。すぐに外に連れ出してやるから」
相手からの反応は無い。グッターハイムは足を早めた。
「死ぬな……死ぬなよライン」
かなりのスピードを出しながらも、天井から時折崩れて落ちてくる石を全て避ける。ラインの元に辿り着くまでは多少の石など気にせず全力で走って来た。しかし、今はなんとしても彼女に当てるものかとグッターハイムは躍起になって、小さな小石さえも全て器用に避けている。ばっくりと開いてしまっている地面の亀裂を軽く飛び越えながら、心の中で叫び続ける。
――どうして彼女なんだ！　連れて行くな……連れて行かないでくれ！
自らの命と引き換えでも構わないとさえ思う。彼女を失うという事は、この国に残された唯一の希望を失うという事。――いや。何よりも、自分自身が希望を失ってしまう。
「生きてくれ……生きてくれよライン……」
譫言のように繰り返していると、再び右の耳がかすかな囁きを感じとった。グッターハイムは慌てて立ち止まると、出来る限り顔を後ろへ捻った。
「ど、どうしたライン。……なんだ？」
「――――――」

「それは……どういう事だ？」
「……」
問い返したが、もう相手からの反応はない。グッターハイムは不思議そうに首を捻りながらも、再び先へと進んだ。崩れかけた階段を猛スピードで下って行く。ところが、下っている途中で何故かピタリと立ち止まってしまった。
「こりゃ……参ったぜ……」かなう事なら、バリバリと頭を掻きむしりたい様な気持ちだった。「どうするか……。なぁ、ラインよ……」
おそらく、先程の大きな振動はこのせいだったのだろう。グッターハイムの立っている階段の下は、
床が丸ごと、全て――抜け落ちてしまっていた……。

最終決戦　13

グッターハイムが塔の中に消え去ってから、かなり長い時間が過ぎてしまっていた。ペッコリーナ先生が時折、「遅いわね……」とか、「大丈夫かしら……」とか呟く以外は、皆黙りこくって入り口の扉を見つめ続けていた。

大分前に、まるで何階かの床が抜け落ちてしまったんではないかというくらいの凄まじい爆音がして、ぐらりぐらりと塔の外にいるメルメル達の足元までが激しく揺れた。しばらくすると揺れも収まって、今では何事も無かったかのような静けさを取り戻している。

「……」

トンフィーは扉から目を離し、改めてもう一度巨大なカルバトの塔を見上げてみた。もう崩れは完全に収まっているが、外壁はあちこちで剥がれ落ち、度重なる振動で中の支柱が折れたのか塔全体が僅かに傾いてしまっていた。そんな風に外から見ただけでも酷い有り様で、中はもっと大変な事になっているのではないかと余計な想像が働いて心配になる。何か話しかけてみようかと横を向くと、メルメルは何かを堪える様に顔を赤らめて扉をじっと見つめていた。もう待つのは限界だといった様子で、これはいつ飛び出しても不思議は無いと、トンフィーは焦って口を開いた。

「め、メルメル！グッターハイムさんて、とっても強いよね？」

「……」

「……ね？　メルメ――」

「ラインさんの次にね」

「……」

「……」

「ほ、ほら、やっぱりさすがにリーダーだし、頼りになるよね～」

「……」

「……ね？　メルメ――」

「ラインさんの次にね」
「……」
「……」
「そ、それにさ――」
その時突然、メルメルがかっと目を見開いたからトンフィーはちょっと驚いてしまった。
「来た」
「え……？」
戸惑うトンフィーをよそに、もう既にメルメルは走り出している。ようやく意味が分かったトンフィーは、先程までメルメルが食い入る様に見つめていた入り口の扉に目をやった。するとそこから、傷だらけでボロボロになった男がよろよろと出て来ているところだった。
「良かった！　ちゃんと無事でいてくれたのね……！」
後ろからペッコリーナ先生の嬉しそうな叫び声が聞こえてくる。転びそうになりながらも必死で走り寄って行くメルメルとは逆に、グッターハイムは何だかぐったりと疲れた様子で、とぼとぼと歩いて来る。しかしその肩にはしっかりと、メルメルの待ちわびた赤毛の女性が担ぎ上げられていた。
「ラインさん！　おじさ――グッターハイム！」
メルメルはグッターハイムの元に辿り着くと、ぴょんぴょんと跳ねながら満面の笑みで横に並んで歩き始めた。
「ね、ラインさんは大丈夫？　……ラインさん？」
背の高いグッターハイムに担がれてしまっているから、メルメルはラインに触れる事が出来ない。
「やっぱり……怪我の具合は良くないのかしら？」
グッターハイムの背中に回り込んで下から顔を覗き込んだが、ラインは顔を完全に伏せてしまって様子を見る事が出来ない。
「ね、そんな体制じゃラインさん苦しいんじゃないかしら？　一度降ろしてあげたらどうかしら？」

今度は前に回ってグッターハイムの顔を覗き込みながら言ったが、全くこちらに視線を寄越さず、しかめっ面で前を見据えている。

（……また、おじさんって言いそうになったから怒っているのかしら？　それとも呼び捨てが気に入らないのかな）

「グッターハイムさん！　よ、良かった……。本当に助け出して来てくれたんだ……」

息を切らしながらも、ようやくトンフィーが追いついて来てメルメルと並んで歩き始めた。

「実はさっきトンフィーと二人で、グッターハイム――さんより、ラインさんの方が強くて頼りになるなんて言っていたのよ？」

「……」

トンフィーは、グッターハイムがしかめっ面のまま返事もしないので、慌ててメルメルの袖を引いた。

「め、メルメルったら……」

「でもね、ちょっと訂正するわ。グッターハイム――さんは、ラインさんと同じくらい強くて頼りになるわ！」

「そ、そうだね！　やっぱりさすがはリーダーだよね！」

「……俺などラインの足元にも及ばんさ」

ようやくグッターハイムが口を開いて、メルメルとトンフィーはちょっとホッとした。

「そんな風に謙遜する事ないわ！　ちゃんとラインさんを救い出してくれたじゃない！」

「そうだよ！　他の人だったら、あんな崩れかけた塔になんて入って行けないよ！　かっこい～なぁ」

「……」

ラインが助かった事で、すっかりはしゃいでいる子供二人をよそに、グッターハイムは再びむっつりと押し黙ってしまった。

「グッターハイム！　ご苦労様……。随分遅かったから心配したわよ」

両手を広げ、笑顔でペッコリーナ先生が歩み寄ってくる。

「……途中で……フロア全体の床が抜け落ちてしまっていて……足場を探すのに手間取ってしまった。……すまない」
「そう……。それは大変だったわね。――ラインの様子はどう？」
「……」
グッターハイムはピタリと立ち止まった。ペッコリーナ先生は不思議そうに首を傾げる。
「直ぐに隠れ家に連れて行った方がいいわね……。あなたも酷い怪我だもの。馬はどこにやったの？　私達のは向こうに繋いであるわ」
ペッコリーナ先生が森の方を指差すのを見て、メルメルはすぐさま駆け出した。
「ワタシ、取ってくるわ！」

「待て！」

突然、グッターハイムが大声を出した。その、今まで聞いた事の無い様な怒気を含んだ声音にメルメルはビクリとして立ち止まった。
「ど、どうしたのよグッターハイム……」
ペッコリーナ先生は驚いた顔でグッターハイムに歩み寄ると、その手に軽く触れた。
「……すまない」大声で怒鳴っておいて、今度は逆にしゅんとして消え入りそうな声を出している。「すまない……本当にすまない……」
驚いた事に、グッターハイムはボロボロと涙をこぼし泣き出してしまった。その様子を見てメルメルは、どっと自分の体中に汗が吹き出てきたのを感じた。心臓がドクドクと高鳴っている。
「わ、ワタシが馬を取って来るから、その間ラインさんを降ろしてあげた方がいいと思うわ！　ずっとその体制じゃ辛そうだもの！」
心の動揺を誤魔化すように、メルメルは早口にまくし立てた。
「……」
グッターハイムは目を瞑り、口をへの字にして涙を流し続けてい

る。ペッコリーナ先生が優しくその手を掴んだ。
「降ろしてあげましょう……。グッターハイム……」
「うぅ……」
グッターハイムはがっくりと両膝をついた。その拍子に涙がボタボタと地面に落ちる。うなだれて顔を上げられずにいるグッターハイムの頭を、ペッコリーナ先生はぐしゃぐしゃと撫でた。撫でた方も涙で頬を濡らしていた。
メルメルは身動き出来ずにそれを見つめていた。指先一つ動かせず、瞬き一つせずに。
嗚咽を漏らしつつ、大人二人はラインの体を地面に横たえさせようと四苦八苦している。片方は片腕しか使えないし、片方は力無い女性で、しかも二人共悲しみのあまりに力が抜けきってしまっているのだ。見かねたトンフィーが手を貸すべく慌てて駆け寄った。手を伸ばし、ラインの体に触れた瞬間、一度ビクッとその動きを止めた。両目から、徐々に涙が溢れ出ていく。しかし、直ぐに溢れ出した涙を肩口でぐいっとぬぐい取り、改めてしっかりとラインの体に手を回し必死でその重さを支えた。
ようやく三人掛かりでラインをグッターハイムの肩から降ろし、地面に横たえさせようとした、その時。頭の辺りを支えていたトンフィーがよろめいて、ラインの体がガクリと傾いた。
メルメルはハッと息を飲み、とっさに皆の元に駆けつけていた。トンフィーと逆側に回り込み、手を体の下に差し入れると、
――目の前に、その人の顔があった。
メルメルは目を見開いて、それをじっと見つめた。
「め、メルメル……」トンフィーが心配そうに声をかける。
メルメルの、大きな愛らしいその目にまだ涙は浮かんでいない。
何故なら、まだ信じられないからだ。まだ、信じたくないからだ。ラインの瞼が薄っすらと開いて、いつも透明で美しい青い目が何だか白く淀んでいても、差し入れた腕が冷たい背中の感触しか伝えてこなくたって、まだメルメルは信じたくないのだ。

周りの人間がゆっくりとラインの体を地面に降ろして、メルメルも無表情でそれにならった。相変わらず、視線をラインの顔から外せずにいる。ふいにペッコリーナ先生が手を伸ばして、薄く開いたままだったラインの瞼を優しく閉じさせた。まるで、それが合図になったかの様だった。メルメルはラインの体に覆い被さって大声で泣き出したのだ。

最終決戦　１４

よくもまぁこれほどに涙が出るものだと、周りも当人も呆れるくらいにメルメルが泣いて、泣き疲れた頃。さすがにこちらは泣き止んで、ぼんやりと座り込んでいたグッターハイムがぽつりと口を開いた。

「……焼かなきゃいかんな」

「え……？」トンフィーがその言葉に驚いて顔を上げた。こちらも泣き止んではいるが、瞼がすっかり腫れ上がってしまっている。「焼くって……もしかして――」

「そうね……ズズッ。グッターハイム、あなた魔力が残っている？　私も僅かに回復したけれど、一人では……ズズッー！　……厳しいわ」

「俺も一人では余り自信が無い。力を合わせよう」

グッターハイムは膝に片手をつき、けだるそうに立ち上がった。

「ちょ、ちょっと待って……。や、焼くって、そ、その――」

トンフィーは顔色を無くしてあわあわしている。横たわったラインに目が行き、ブルブルと頭を振った。

「……ふぅ。あなたは離れて後ろを向いてなさい。メルメルを連れて行ってあげてね」

メルメルはペッコリーナ先生に抱き付いていまだにすすり泣いている。トンフーはゴクリと唾を飲み込んだ。

「さぁ……メルメル……」

ペッコリーナ先生はメルメルの体を起こさせようと、その小さな肩を掴んだ。すると、突然パッとメルメルは自分から立ち上がった。

「あ……！　メルメル！」

「だめよ！」メルメルはラインの体に覆い被さって叫んだ。

「メルメル……」

トンフィーとペッコリーナ先生は困ったように顔を見合わせた。

ひっく、ひっくと肩を震わせている子供の背中を不憫に思いながら見つめる。

「お前たちが、将来レジスタンスに入る可能性があるなら、覚えておいた方がいい」

トンフィーが、何だかいつもより冷たい様な声に感じながらそちらを見上げると、グッターハイムが感情のつかみ取りづらい顔付きでメルメルを見下ろしていた。

「俺達レジスタンスには幾つかの決まり事がある。その中でも、とても重要なものの一つに、死んでしまった仲間の体は必ず焼かなければならないというのがある。この国では死体は焼いたりせず土葬するのが一般的だが、俺達はそんな事はしない。如何なる場合でも、例え戦場においてでも、仲間が命を落とす様な事になれば必ず近くにいる者が責任を持ってその体を焼いて帰るんだ。何故、そこまで焼く事にこだわるのか？　理由は――」そこで一旦言葉を切り、トンフィーの顔を見た。「――分かるだろう？」

「……命の石による、死者の復活を防ぐため？」

トンフィーが上目使いに答えるのを見て、グッターハイムは満足げに頷いた。

「その通りだ」

トンフィーは思わず目を伏せた。

（母さんのような事にならない為に……）

身につまされる様な思いだった。

「メルメル……」

ペッコリーナ先生が優しく諭すように声をかける。メルメルはゆっくり体を起こし、ラインの顔をじっと見つめた。

――死んでしまった者を焼いてしまうか、それともそのまま土に埋めるか。

大人とは違って、子供にとってそれはとても重要な問題だった。

何故なら、大好きな人の死体が焼かれ灰になってしまった時点で夢や希望が全て消え去ってしまうからだ。

どうせ死んでしまったのだから焼こうが焼くまいが同じ事。夢も希望も元から無いだろう――と、大人なら考えるかも知れない。

だけど、子供は違う。

もしかして、死んだというのは何かの間違いで、実は生きていて再び動き出すかも知れない。いつまでもそんな風に考えているのだ。今だって、メルメルはこう考えている。

ピクッとこの細く長い指先が動いて、あれって思ったら頬がだんだんピンク色になってきて、長いまつ毛が震え、あの美しい青い瞳が徐々に現れる……。

そんな、夢を見ているのだ。

もしも肉体を焼かれてしまったら、そんな夢も見られなくなってしまう。

――だけれど、グッターハイムの言っている事はもっともだ。

ラインが悪魔の兵隊になるなんて辛すぎる。メルメルの中で、物分かりの良い大人の気持ちと、まだ死んだと思いたくない子供の気持ちが戦っていた。だから身動き出来ずに、ラインの顔を見つめ続けている。そのなんとも言えず悲しげな横顔を見て、トンフィーはグッターハイムに向き直った。

「や、焼かなければならないのは仕方ないにしても、な、何もこんな所じゃなくっても……」トンフィーは周りを見回した。「ほ、ほら、あの丘の上とか。もっと空気が綺麗で、見晴らしの良い場所を探して――」

「くだらない感傷はよせ。どこで焼こうが同じ事だ。それと――忘れるな。俺達の中の決まり事は、死んだ仲間の体を焼くという事。そして、その上にはこの言葉が付いている。『なるべく早く』」

「なるべく……早く……？」

「理由か？　では、考えてみろ。これからのこのこ、お前の言う空気の澄んだ丘の上とやらにラインを運んで行くとする。だがもしもその途中で敵に襲われ、ラインの死体を奪われるなどという事になってみろ。それこそ取り返しがつかないぞ。その後俺達が相手にす

るのは赤の大臣様率いる闇の軍隊って事になるな。俺はごめんだ。そんなものに勝てる訳がない。だからそんな事にならない為に、直ぐに焼かなければいけない。――大体、俺が塔にラインを助けに行ったのだって、何も命がけで奴を救いたかったからじゃない。敵に奪われてはたまらないから、確実に死体を回収するために――」

「グッターハイム！」ペッコリーナ先生が鋭い声でグッターハイムの言葉を遮った。「……はぁ。――感情の高ぶりに任せて、心にも無い事を言わないのよ。後で絶対に後悔するわ……。あなたはそういう人だもの。死体を回収しに、命懸けで崩れかけた塔に飛び込んだですって？　……そんなの嘘だわ」

グッターハイムはむっつりとした顔で、ぷいっとそっぽを向いてしまった。ペッコリーナ先生はもう一度溜め息を吐いて、メルメルとトンフィーの顔を交互に見た。

「言い方に問題があるけれど、中身は間違ってないわ。ラインの体は直ぐに焼きます。……分かってくれるわね？」

トンフィーは直ぐにコクリと頷いた。メルメルは――。

「メルメル……」

ペッコリーナ先生が呼びかけると、メルメルは顔をくしゃっと歪めて立ち上がった。そして、

「……！」

そっぽを向いたグッターハイムの隣に行き、その手をぎゅっと握った。驚いてグッターハイムが見下ろすと、涙を一杯に溜めた瞳で子供は見上げてきた。

「ワタシも魔力がちょっとくらいならあるかしら？　少しは――役に立てるかしら？」

「……」

グッターハイムは思わず目を瞑り、強く唇を咬んだ。そうしないと、再び涙が溢れてきそうだったからだ。

――何故、ラインが命を落とすような事になってしまったのか分かる気がする。彼女はきっと、命をかけても守りたかったのだ。こ

のぬくもりを……。
心を落ち着かせゆっくり瞼を開くと、少女は純粋過ぎる瞳で相変わらずこちらをじっと見つめ続けていた。
「……勿論だ」
ようやくそれだけを言うと、少女は涙で引きつった頬を無理やり動かしてわずかに笑った。グッターハイムはその手を引いてペッコリーナ先生のもとへ行き、そのふくよかな手を握った。
「ぼ、僕も一緒に……」
トンフィーが慌ててグッターハイムの逆側に回り、ペッコリーナ先生の手を握った。
「さてお前ら……。覚悟はいいか？」
グッターハイムはなるべく感情を抑えて言うつもりだったが、語尾が僅かに震えてしまうのを抑えられなかった。メルメルの頬を、新しい涙が伝う。もう一度強く焼き付けておこうと、ラインの顔に目を向けた。優しい声が頭の中に響いた。

――泣くな……メルメル。

「い、いいわ……ひっく」
グッターハイムは、深く深く息を吸い込んだ。
「――ファイヤーボール！」

それは勢いがよすぎるほどに、とても強い炎だった。
徐々に燃え尽きる姿を見るのが耐えられなかったからじゃないかと、後々になってからメルメルは考えた。それを証拠に、グッターハイムの手はじっとりと濡れていて顔付きも険しく、必死で炎の勢いを強めているように感じられたのだ。
メルメルは白く天高く登って行く煙を見上げて、あの中にはラインの魂があって、いつかたくさんの雲の一つになって、その中から自分達を見守ってくれるのかも知れない。などと、ぼんやり考えて

いた。

「さて……」

ずっと握ったままでいたメルメルの手をゆっくりと離して、グッターハイムは上着のポケットを探った。何を出すのかと思いきや、取り出したのは何の変哲もない一枚の布切れだった。足を進め、ラインの横たわっていた辺りで立ち止まる。何をするのかとメルメルが首を傾げていると、グッターハイムはしゃがみ込んで手にした布を地面にふわりと広げた。普通のハンカチの倍くらいの大きさがある。

「ちっと……頑張り過ぎちまったかな」

火のくすぶりも完全に消えた地面には、黒い土の上にうっすらと白い粉のような物が積もっている。そしてその中に、崩れかけた骨がいくつか転がっていた。

「火の力が強すぎたな。大分崩れちまった」

グッターハイムはぶつぶつ言いながら骨を拾って布の上に載せ始めた。メルメルはその隣に駆け寄ってしゃがみ込むと、グッターハイムの真似をして骨を集め始めた。

「トンフィー……私達も拾ってあげましょう」

ペッコリーナ先生がトンフィーの肩をそっと押した。自らもメルメルの横まで行き腰を下ろす。そうして四人で拾い集めた骨を、グッターハイムは布切れを巾着状の袋にして紐で縛ると、それを手の平に載せてしばらく見つめていた。すると突然、横で同じ様に袋を見つめていたメルメルの目の前にすっと差し出した。

「え……？」

「俺よりお前が持っていた方が、ラインは喜ぶだろう」

メルメルはグッターハイムと袋を見比べて、少し戸惑った顔をしたが、結局、両手で大切そうにそれを受け取った。

「お前が気に入った所に埋めてやるといい。山でも、そう……空気の澄んだ丘の上でもいい。何なら、海に撒いたって構わない。メル

メル、お前の好きに葬ってやればいい」
「……はい」
メルメルはぎゅっと袋を胸に抱き締めた。それを横目で見て、グッターハイムはすらりと剣を抜いた。それを顔の前にかざし、きつく目を瞑る。
「――黙祷！」
メルメルもトンフィーもペッコリーナ先生も、猫や狼だって同じ様に、赤毛の女戦士の冥福を強く祈ったのだった。

「さて……。行くか」
「どこへ？」
メルメルは思わず口にしてしまったが、答えは決まりきっていると直ぐに気付いた。グッターハイムは既に背を向け歩き始めている。
「勿論帰るのさ」
「……そっか」
メルメルはグッターハイムの後を追い駆けながら、一度だけ後ろを振り返った。
遥か昔、この地にて比類無き技術力で素晴らしい作品を次々に生み出したカルバト族。彼らが最後に残していった至大至剛なるカルバトの塔は瓦解し、ここで命を落とした多くの戦士たちと共に崩れ去ろうとしていた。
「そう言えば――」
「え……？」
前を向けば、いつの間にかグッターハイムは大分先へと進んでいる。メルメルは、足元でまだ少し頼り無げな足取りで歩いていたミミを抱き上げ、急ぎ足でグッターハイムの横に並んだ。
「そう言えば、なに？」
「うん……。最後に、ラインが妙な事を言っていたのを思い出したんだ」
この言葉を聞いて、メルメルは思わず目を見開いた。

「さ、最後って。見つけ出した時、ラインさんまだ生きていたの？」
「ああ……。まだなんとか……な」
「そう……」
メルメルは自分の心の中に、ほんの少し暖かいものが注ぎ込まれた様な気がした。
（最後……。ラインさん、一人ぼっちじゃ無かったんだ……）
その事はとても、メルメルの心を慰めた。
「本当は生きたままお前らに会わせてやりたかったがなぁ……。すまなかったな……」
メルメルは無言で首を横に振った。
「それで、あの……。ラインさんは最後になんて？」
隣に並んだトンフィーが、おずおずと口を出した。グッターハイムは、おおと思い出した様な顔になった。
「小さい声だったから、良くは聞こえ無かったんだ……。だが、ラインは確か、『私も、鮭になれたようだ』と……」
「鮭？」
メルメルとトンフィーは首を傾げる。ペッコリーナ先生は呆れた声を出した。
「良く聞こえ無かったなら、聞き間違えたのでしょう。最後の言葉が鮭になれたなんて……。訳が分からな過ぎよ」
「そうか？　案外鮭に成りたい程の焼き鮭好きだったとか。ペッコリーナ、聞いた事はないか？」
「バカね。そんな事ある訳無いでしょ」
「フフ……」
おどけた調子の二人に、トンフィーは無理やり少しだけ笑った。場を和ませようと頑張っている大人二人の気持ちが分かるからだ。
メルメルもそれは気付いていたが、まだ、頬を少し緩ませただけで、トンフィーの様に声までは出せなかった。トンフィーはそんなメルメルの手を取り、強く握り締めた。顔を上げたメルメルに精一杯笑いかける。メルメルも、もう一度頬を緩ませた。

今度は先ほどより少しだけ、ましに笑えた様な気がした。

七色の勇者　1

ポクポクポクポク……

出発してから一時間以上経っているが、皆黙り込んでしまって、一言も言葉を交わす事は無かった。恐らく、それぞれあの人の事で深い思考に耽っているのだろう。

馬の背に揺られながら、メルメルは手の中の布袋をじっと見つめた。ずっしりと重いようでもあるが、これがこの世に残されたラインの全てだと思えば、余りに軽過ぎるという気もした。

「……これからどうするんだ？」

唐突にグッターハイムが口を開いて、メルメルはふと顔を上げた。隣を見れば、誰に顔を向けるでも無く、グッターハイムは前を向いたままこちらと同じ速度で馬を進めていた。

「どうするって？　――あなたの怪我の治療もあるし、先ずは隠れ家に戻るべきよ。あ、そうだ。ミデルから消えた残りの軍隊も気になるわね」

ペッコリーナ先生が答えると、グッターハイムは先ほどと変わらず前を向いたまま、再び口を開いた。「その後は？」

「その後？　……まぁ、消えた軍隊の動向次第でしょうけれど、ニレや他のみんなと相談して――」

「メルメルやトンフィーはどうするんだ？」

突然話を振られて、メルメルは少し戸惑った様な顔になる。グッターハイムの前に座ったトンフィーに目を向けると、やはり自分と同じ様な顔をしてこちらを見てきた。そんな二人の代わりにペッコリーナ先生が質問に答えた。

「そりゃあ二人だって私達と隠れ家に行くわよ。まさか子供だけで先に町に戻る訳にいかないもの。少し体を休めた方がいいし……」

「その後は？」

「その後は、町に戻るわよ。マーヴェラに報告したり、色々――」

「その後は？　――その後はどうするんだ、二人共」
「……」
ペッコリーナ先生は眉根を寄せてグッターハイムの顔を見た。メルメルとトンフィーは困った様に顔を見合わせている。
――その後は？
もしかしたらこれは、ただの軽い質問では無いのかも知れない。メルメルがそう考えてグッターハイムの顔を見てみれば、向こうはいつの間にかじっとこちらを見ていたらしく、目がバッチと合って思わずドキリとしてしまった。
「……それはどういう意味なの？　グッターハイム」
やはりペッコリーナ先生が答えて、メルメルは後ろを振り仰いだ。ペッコリーナ先生は探る様な目でグッターハイムを見つめていた。
「……プラムじいさんは再びさらわれた。ソフィーは――悪魔の兵隊になっちまった。二人共、もう一人ぼっちだ。この先、一体どうするつもりなんだ？」
「そんな事、直ぐには考えられないわよ。でも、いずれにしても私は二人を一人ぼっちにするつもりは無いわ。私のところに来るのでも良いし――」
「俺はメルメルとトンフィーに聞いてるんだ。――二人共どうするんだ？　大好きな爺さんがさらわれて、母親が悪魔の兵隊になっちまって――」
「どうもこうも無いでしょう？　悲しくても生きていかなくては。プラムやソフィーの事は私達レジスタンスで出来るだけの事はするわ」
「それでいいのか？　――人に任せていられるのか？」
「仕方ないでしょう？　まだ二人は子供なのよ？」
「何度も言わせるな。俺は二人に聞いてるんだ。おい、メルメル、トンフィー！」
後ろからぐっと肩を掴まれて、トンフィーはビクリとした。
「ちょっと、脅かさないで頂戴！」ペッコリーナ先生は慌てて馬を

寄せ、グッターハイムの手を掴んだ。「あなた、何を考えてるの？
二人はただの子供よ」
「ただの子供？　――メルメルは七色の勇者だぞ！」
「――！」
興奮して真っ赤に染まったグッターハイムの顔を、ペッコリーナ先生は驚いた顔で見つめた。メルメルとトンフィーは口を挟めず、大人二人の顔を交互に見ていた。しばらく睨み合うようにしてから、ようやくペッコリーナ先生が口を開いた。
「メルメルに、ラインの代わりは出来ないわよ。グッターハイム……」
「――――しかし」
「少なくとも、まだ、今は無理よ。この子がいくつか分かっているの？」
「……」グッターハイムは、じっとメルメルの顔を見つめた。その表情が、段々情け無いものに変わっていく。「では――レジスタンスは、この先どうするんだ。ラインは……ラインはもう、いないんだぞ……」
「あなたがそんな事言ってどうするの。あなたはリーダーなのよ？
しっかりして頂戴」
「……」
グッターハイムは俯いてしまった。その横顔はまるで子供のようで、メルメルはもしかしたら泣き出して仕舞うんではないかと心配になった。
「ラインがいなくなったからこそ、あなたがしっかりしなくちゃ。レジスタンスをまとめられるのはあなただけなのよ？　他の誰かに何とかして貰おうなんて無理よ」
ペッコリーナ先生はグッターハイムの顔を覗き込んで言った。メルメルはその様子を見て、本当に子供に言い聞かせている様だと感じていた。
――ラインを失った悲しみが、彼から自信を奪ってしまったのか。

「俺には……無理だ……」
グッターハイムが消え入りそうな声で呟き、ペッコリーナ先生は、もうかける言葉も無いとばかりに盛大な溜め息を吐いたのだった。

闇の中に、メルメルは一人ポツンと座っていた。遠くの方から、自分を呼ぶ声が聞こえる。
――メルメル……メルメル……。
「おじいちゃん……」
自らが発した声は、以上な程闇の中で反響した。まるで、お風呂の中で話した時のようだとメルメルは感じる。
――メルメル……お逃げ……。
耳の奥に響くプラムじいさんの声に、慌てて立ち上がった。
「おじいちゃん……どこ？」
――逃げるんじゃ……奴が来る……。
必死で首を巡らした。手の平にじっとりと汗を掻いている。誰もいない。――何も見えない。
――早く逃げるんじゃ……奴が……もう、直ぐそこに……。
「どこ？　おじいちゃん。見えないわ。何も見えないの……」
――ほら……あそこに……。
指を指された訳でも無いのに、メルメルにはプラムじいさんが「あそこ」と示した場所が直ぐに分かった。
闇の中で、ウネウネと何かが蠢いている。
逃げ出す前にそれが一体何なのかを確認しようと目を凝らした。少しずつ闇の中に輪郭が現れて、それがもしかすると人かも知れないと分かって、同時に人だとすれば以上に大きな体をしている事に気付いて、メルメルは思わず数歩後退りした。顔とおぼしき場所に目をやれば、やけに黒々とした髭面が浮かび上がってきて、だんだんとその髭が涎でぬらりと光っている事さえも分かってきた。その頃になれば、その巨人の両腕が切り取られていて、体中に矢が突き刺さっている事も分かっている。

メルメルは血相を変えて逃げ出した。
（これは……夢だ……）
それを証拠に、まるで水の中を走っているかの様に足が重く、上手くいつもの様には走れない。耳の奥に心臓があるかの様にドクンドクンと、自らの激しい鼓動の音が聞こえる。
（怖い……恐ろしい！）
夢だと分かっているのに、現実でガスバルトに対峙した時よりも強い恐怖を感じた。
（助けて！　おじいちゃん……！）
かなり長い間走り続けたが、後ろからは追い駆けてくる足音も気配も感じ無い。メルメルは少し安心して、ゆっくりと後ろを振り返った。

直ぐそこに、大口を開けた巨人の顔があった。

（助けて――ラインさん！）

「メルメル！」
体を揺すられて、メルメルはハッと目を覚ました。何だか、やけに焦げ臭い。
「メルメル、早く起きて……」
「トンフィー……」
少しずつ周りがぼんやりと見えてきた。メルメルはゆっくり立ち上がる。まだ、先ほどの夢のせいでやたらと鼓動が早い。
「大変なんだ。早く……！」
言い終わらない内にトンフィーは駆け出した。訳が分からないが、取りあえずついて行こうかと足を踏み出しかけて、メルメルは周りの景色に唖然とした。
メルメル達は夕べ、小さな湖に近い静かな林の中で野営をした。しかし、今や木のあちこちから炎が上がっていて、まだ日が昇って

いないのというのに眩しいくらい周囲が明るくなっている。
「……？」
その時、林の奥から剣と剣がぶつかり合うような激しい金属音聞こえて、メルメルはそちらに目を向けた。
「……ああ！」何と木立の向こうで、グッターハイムとあの黒騎士が戦っているではないか。「ど、どうしてここに黒騎士が……」
すると今度は、別の方角からヒュッ、ヒュッ、ヒュッ、という変わった音が聞こえて、そちらに目を向けた。
「――ああ！ペッコリーナ先生！」数十メートル先で、ペッコリーナ先生が林に向かって猛スピードで矢を放っていた。木の影に、黒い人影が消えたり現れたりしている。「べ、ベラメーチェ……」
それは、ベラメーチェがワープの魔法を使ってペッコリーナ先生を翻弄している姿だと気付いて、メルメルは手助けをしなくてはと、そちらに足を踏み出した。
「わー！　か、母さん！」
今度は、またまた別の方角からトンフィーの叫び声が聞こえて、一瞬躊躇したが先ずはあちらに行くべきだと判断して悲鳴の聞こえた方へと駆け出した。
「トンフィー！」
「か、母さん……や、やめて……」
声の聞こえる方へ走って行くと、林の向こうに湖が見えてくる。そして、木立の隙間に呆然と立ち尽くしている少年の姿がチラリと見えた。
「トンフィー！」
駆け寄ろうと林を飛び出しかけて、メルメルはピタリと足を止めた。トンフィーが見つめる先には、弓を構えた彼の母親が立っていて、その矢の先端を実の息子にピタリと向けている。
「ソフィー母さん……」
メルメルが呟くと、ソフィーはつと矢の方向を変えた。
「か、母さん……！　お願い、止めて……」トンフィーは泣きべそ

で母親の顔を見つめた。
メルメルは拳を握り締め、自らの方を向いた矢の先端を睨み据えた。直ぐ横に生えた太い木の陰に隠れようかと一瞬考え、きっとその前に打たれてしまうと思い至り、結局身動き一つ出来ないまま時間だけが過ぎる。ソフィーがいつもの優しい笑顔では無く、ベラメーチェのように嫌らしくニヤ～っと笑ったその瞬間、
バサバサバサ！　と木の上から何かが降ってきて、メルメルの目の前に降り立った。突然瞳の中に飛び込んでくる、鮮やかな――赤い色。
「ラ……イン……さん……」
メルメルの背後から風が吹き、柔らかそうな赤い髪がフワリと揺れた。
「ライン！」
キーンと耳に響く様なソフィーの叫び声。メルメルはハッと我に返り、目を見開いた。
「ラインさん！　よけてーーーー！」
メルメルはあらん限りの大声を出した。しかし、何故かラインは優しく笑って、メルメルをギュっと抱き締めてきた。
「だ、駄目よ……。駄目よラインさん……逃げて！」
ドスンと背中に矢が突き刺さって、ラインの体がブルッと揺れた。
「あ……ああ、あ……うあぁぁー！」

「メルメル！」

メルメルはハッと目を覚ました。目の前に、心配そうなペッコリーナ先生の顔があった。
「大丈夫？　何か怖い夢でも見たのね……。酷い汗だわ……」
「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」
「……メルメル？」
夢と現実の区別がつかず、メルメルは怯えた様子で首を巡らし辺

りを見回した。ペッコリーナ先生はそんなメルメルのおでこの汗を手の平で拭った。

まだ、辺りは暗い。メルメルの直ぐ斜め上に、上半身を起こしやはり心配そうな表情を浮かべてこちらを見つめているトンフィーがいた。その顔を見て、メルメルはようやくこれは夢では無く現実だと感じ始める。頭を撫でてくれているペッコリーナ先生の暖かい手のぬくもりを感じながら、少し離れた場所でパチパチと火の粉をはぜさせている焚き火をじっと見つめた。その燃え盛る炎の赤い色が、夢の中に出て来たあの人とダブって見えて、メルメルは心臓を鷲掴みにされたような痛みを感じ、思わずギュっと胸を押さえてうずくまった。

「メルメル……」

肩を震わせて泣き出してしまったメルメルの背中を、ペッコリーナ先生は優しくさすった。

「おい。どうしたんだ……？」

炎の向こう側から覗き込んでいたグッターハイムが慌てて（もしかして、自分の顔を見たせいで泣き出したのかと思ったんだ）声を掛けてきた。

「ラインさん……ワタシのせいよ……ワタシのせいで……」

「大丈夫。大丈夫よ……」

ペッコリーナ先生に背中をさすられながら、――ワタシのせいだ、と何度も繰り返しているメルメル。それを見て、トンフィーは、――もしかしたら、と考えた。

（もしかしたら、メルメルもあの事に気付いているのかも知れない……）

あの事とは、あの時起こった事だ。あの時とは、ソフィーの放った矢がラインの体を打ち抜いたあの瞬間の事だ。

あの悪夢のような瞬間、トンフィーは皆から少し離れた場所に立っていた。だから、全体の位置関係をしっかり掴めたし、ラインの動きが少しおかしかった事にも気付いた。――あの時……。

凍てつく朝の空気。地上より遙か遠く離れし塔の上。

――ライン！　彼の母親は声と同時に忽然とそこへ現れた。驚いて声も出せずにいるトンフィーの目の前で素早く矢を放ち、再び忽然と消えてしまった。その時は余りに動揺していて直ぐには深く考えられなかったが、今思えばあの時……と、その後落ち着いてからトンフィーは考えたのだ。

メルメルがラインに貰った剣を拾って嬉しそうに空に掲げた。それを見て微笑んでいたラインは、名前を呼ばれた瞬間――つまり、矢が放たれた瞬間、既に後ろを振り返っていた様な気がするのだ。恐らくソフィーが現れた気配を察知したんじゃないかと思う。ラインほどの戦士なら十分考えられる事だ。そしてラインは何故かもう一度前を――つまりメルメルの方に向き直り、ほんの少しだけ左に動いたのだ。

――あの時、ラインさんは矢を避ける事が出来たのではないか？

これが、トンフィーの考えていた「あの事」だ。いや、もっとはっきり言って仕舞えば、こうだ。

――あの時、ラインさんは、本当は矢を避ける事が出来た。しかし、あえて避けなかったのではないか？

何故、そんな事をしたのかという理由も、既に見当が付いている。ソフィー、ライン、メルメルはあの時一直線に並んでいた。もしもラインが矢を避けて仕舞っていたら、その矢はラインの後ろに立っていたメルメルに当たっていたかも知れなかったのだ……。

トンフィーはこの考えを、まだ誰にも話していなかったし、この先も話す気は無かった。出来れば、メルメルがその事に気付いていなければ良いと思っていた。――しかし、

「ワタシのせいなの……ワタシの……」

「いいえ。あなたのせいじゃないわ……。大丈夫……大丈夫よメルメル……」

結局、夕べメルメルはあの後一睡も出来なかった。体は限界を感じる程に疲れきっているのに、眠れば再びあの様な恐ろしい夢を見るかも知れないと考えると、もう一度眠る気にはなれなかった。そんなメルメルを気遣って、ペッコリーナ先生はずっと頭を撫でてくれていた。

――だから、メルメルはそんなペッコリーナ先生を気遣って、目を瞑って眠った振りをした。

そうして日が昇れば目覚めた振りをして起き上がり、なかなか喉を通らない朝食を無理やり少しだけ詰め込んだ。こんな風にご飯の味もしなくて、何だか心の中が空っぽでカサカサしたような毎日が続いて行くのかと思うと、メルメルは生まれて初めて生きる事が嫌になってしまったのだった。

誰一人として口も開かず、まるで戦いに敗れた戦士の様に肩を落としながら馬に揺られていると、小高い丘にさしかかった所で、トンフィーがあっと驚いた様な声を出した。

「おかしいな……」

「どうしたんだ？」

背中からグッターハイムに問い掛けられて、トンフィーは遥か彼方に見えている湖の方を指差した。

「フレンリー達の家が見えてしまってる。以前は確かに見えなかった筈なのに……。確か魔法をかけてあるって言っていましたよね？」

グッターハイムは目を細めて湖の方を見た。メルメルも同じように目を凝らしてみたが、やはり今度も、湖の上に浮かぶ島さえ見えはしなかった。

「……あそこにかけてある幻影の魔法は、かなり高度なものでな。幾人かが力を併せて魔法をかけたんだ。その中には――ラインも入っていた」

「それじゃあ……」
「術者が死ねば……魔法はとけるものだ」
メルメルは視線を落とし、いまだに手の中に握り締めたままの布袋を見つめた。
――術者が……死ねば……。
その時、突然大きく馬の背が揺れた。メルメルは危うく布袋を落としそうになってしまった。
「ほらメルメル。落としてしまうわよ。しまっておきなさい」
ペッコリーナ先生に言われて、メルメルは素直にそれに従う事にした。肩から下げたウサギの鞄の口を広げる。すると、布袋をしまおうと差し入れた手に、カサリと何かが触れた。大して気になった訳では無いが、何となく鞄の中を覗き込んでみる。
「……？」
見慣れない、白い封筒の様な物が入っている。メルメルはそれを取り出してみた。やはり封筒のようだ。中に何枚か紙が入っているらしく割と厚みがある。口は特に糊付けもしていなくてフワフワと浮いていた。裏側には何も書いていない。メルメルは手紙をひっくり返してみた。
「――――！」
そこには、「メルメルへ」と書かれていた。大きく、少し乱暴な感じのする字だ。メルメルの「ル」の部分など、最後がやたらと跳ねすぎて尖っていた。
「ラインさん……」
「え……？」ペッコリーナ先生が後ろから覗き込んできた。
「ラインさんの字……」
「手紙？　一体いつ貰った物なの？」
「分からないの。今気付いたの。袋をしまおうとしたら……」
「あら……。じゃあ、あなた手紙が入っていたって知らなかったのメルメル？」
メルメルは無言で頷いた。胸がドキドキしていた。

「いつの間にかラインがこっそり入れたのかしら……。何が書いてあるの？」
「なんだ。どうしたんだ？」隣からグッターハイムが声を掛けてきた。
「メルメルの鞄の中に、ラインからの手紙が入っていたんですって！」
グッターハイム、そしてその前に座ったトンフィーも驚いて目を丸くした。
「何と書いてあるんだ？」
「まだ読んでないの」メルメルは首を横に振った。
「読んで見てくれ」
勿論そのつもりだ。メルメルは頷いて、手の中の封筒から紙を取り出した。声に出して読み上げようと思っていたが、広げた瞬間にドキリと心臓が高鳴って、直ぐには言葉が出てこなかった。
「どうしたのメルメル？　……代わりに読みましょうか？」
ペッコリーナ先生が気を使って言う。メルメルは首を横に振って大丈夫だと答えた。
「読むわ……」
一度目を瞑り、軽く息を吐いて呼吸を整える。

――メルメルへ
さて、一体何から書こうか？　余り手紙など書き慣れていないから、どうにも考え過ぎてしまうようだ。このままだと朝になって仕舞うから、取りあえず思った事をどんどん書き始める事にする。
そうだ。まずは謝っておこう。私の字が余りに下手くそで読み辛い事は、長く私の補佐役をしてくれたニレのぼやきで良く理解しているつもりだから。だが、どうにか堪えて最後まで読み続けて頂ければ有り難い。
そもそも、そのように余り得意でも無い下手くそな手紙を何故書く気になってしまったのか。それは、あなたに感謝の気持ちを伝え

たかったからなのだ。言葉で伝えれば容易いのだが、そのような隙やタイミングが残されているのかが分からない。だから念の為、この様に手紙を残しておこうと思う。

さて、今私はこの世にまだ生きているのだろうか？　生きていれば嬉しいが、恐らくは死んでしまっているのだろうな。この手紙を、あなたが読んでいるのが何よりの証拠と言える。私の死を、あなたが悲しんでくれているなら少し嬉しくもあるが、余り悲しまないで欲しいと思うし、万が一にも自分を責める事の無いようにと願う。

何故なら――

「――な、何故なら、私は自分の死を前もって知っていたし、それを避ける術も……持っていたから……だ……」

――知って、いた……。

メルメルは驚いて、幾度も同じ文章を目で追った。

「おい！　一体どういう事だ！」

「ら、ラインは自分が死んでしまう事を知っていたの？」

「待って。まずは最後まで聞きましょうよ」

騒ぎ出す大人二人を制して、トンフィーはメルメルへ先を読むようにと目で促した。メルメルは喉がやたらと乾いて張り付くようだったが、唾を飲み込んで無理やり先を読み始めた。

「……詰まり――」

詰まり、私は自ら進んで命を落としたようなものだし、誰か他の人間が責めを負う必要は一つも無いという事なのだ。

あなたは不思議に思うだろう。私が何故自分の死を前もって知っていたのか――と。その理由を知って、あなたは思わずバカバカしいと笑うかも知れないし、私も一緒になってそこで笑っているかも知れない。

だが――私は知っている。バカバカしいと斬り捨てられない程、私の記憶に強く刷り込まれている。

「彼女」の占いが、驚く程に正確に未来を言い当てて仕舞うのだという事を。私は王宮で、何度も、何度も、繰り返しそれを見て来たのだから。そして――ある時は父の死さえも、「彼女」の予言によって前もって知る事が出来たのだ。その時私は、運命とは変えられないし、また、変える必要が無いという事も知ったのだ。

私はあの日、あの「古の大占い師様」に有り難い予言を授けられた。彼女は私にこう言ったのだ。

――もしもこの先、あの少女と共に旅を続けるならば、いずれお前は必ず命を落とす事になるであろう――と。

私は思わず彼女に尋ねた。それなら、直ぐに旅を止めてあの子と別れれば、私は命を落とさずに済むのかと。彼女はその通りだと答えた。だが、その言葉には続きがあった。

――少女の元を去ればお前の命は助かる。だが、代わりに、少女の方が命を失う事になる――

「なる……だ……ろう……」

メルメルは愕然として手紙を見つめた。

――それじゃあ、ラインさんワタシの代わりに……。

ペッコリーナ先生がそっとメルメルの肩へ手を置き、手紙を受け取った。俯いて黙り込んでしまった少女の代わりに、続きを読み上げる。

「少女の元を去れば――」

――少女の元を去ればお前の命は助かる。だが、代わりに、少女の方が命を失う事になるだろう。

私はそれほどの善人では無い。正直に言おう。少しだけ、迷った。

この手紙を書く前に、様々な思いを巡らしてみた。死について、そして、生きるという事について。　無限に広がる星空を見上げながら考えてみた。想像してみた。この生を失う事について。そして思ったのだ。――死にたくはない、と。

まだまだあなた達と共に生き続けて、剣の稽古をつけたり、料理を教えてもらったり、歌を歌ったり、生まれた町の話をしたり、未来についての話をしたりしたい。そう考えた時、分かったのだ。

こうまで私が生き続けたいと願うのは、あなたと出会ったからなのだと。

あなたと出会う前、私は生と死の境目を見失いかけていた。こんな事は生まれて初めての事だった。

人は、命あるものは皆、いつかはその命を大地に返さなければならない。例えどれほど不平等な世の中だとしても、死だけは全てのものに平等に与えられる。だからこそ命は輝くし、生きる事は美しい。だが――死ぬ事も生きる事も同じだと考えては、命は輝かない。必死で生きようと思ってこそ、命は輝くと思うのだ。

どのような姿で生まれたか、どのような場所で生まれたか、どれほどの長さを生きられるのかさえも関係無い。百年生きようが、次の日に死んでしまおうが、その瞬間を生きている事実には全く変わりが無いのだから。平等に与えられた命だからこそ、それぞれの思うままに精一杯輝かせ、より良い明日を目指して必死で生きるべきだ。――私はそう考えていたし、それが信念でもあるから、周りの人間にもそうするように勧めてきたし、自分自身もそのように生きてきたつもりだった。

だが――あの日。自ら望んで挑んだ戦いに大敗し、大勢の愛する者を失ったあの日から、私は自分を失いかけていた。苦しみを背負って生きるよりも、死んでしまった方が楽になれるのではないかと考え、そしてどうせ死んでしまうなら、一生懸命努力する事に何の意味があるのかと思うようになっていた。いつの間にか、一番嫌っていた死を言い訳に生きるような人間に、私自身がなっていたのだ。

それではいけないと思ってはいた。他人をそんな風に生きるなと叱りつける事さえもあった。それなのに私自身は生きる事は空しい事だと感じ始めていた。理屈では無かった。どんなに自分を奮い立たせ、前向きに生きて行かなくてはと言い聞かせても、心はついて

こなかった。情けなく、惨めで、これほどに自分とは弱い人間なのだと知って、とても自分が嫌いになった。馬鹿な話だ。自分で自分を嫌うなど、これ程バカバカしい話は無い。

だが、人とはそういうものだ。結局、私はそういうものだという事さえもまだ分かっていなかっただけなのかも知れない。きっと、苦しみから抜け出せそうな今だからこそ、その事が分かるのだろう。

私は今苦しみから抜け出し、生きる喜びを感じる事が出来る。明日も生きていたいと願う事が出来る。

それはきっと、あなたと出会ったからなのだ。

あなたやトンフィーが見せてくれた希望――夢――未来。そこには、空しさを掻き消す命の輝きが溢れていた。それに触れた時私は、もっと生きていたいと感じる事が出来たのだ。だから、あなたに言いたい。

ありがとう、と。

私はもうすぐ死んで仕舞うのかも知れない。あなたと出会わなければ、もっと長く生きる事が出来たのかも知れない。だが、それでも私は心からあなたに感謝しているのだ。何故なら、死んでしまった方がましかも知れないなどと思いながら生き続けるよりも、生きていたいと願いながら死んでいく方が、ずっとずっと幸せな事だと思うからだ。

私が死んであなたは悲しんでいるのだろうか？　苦しんで泣いてしまっているのだろうか。もしそうなら、そんな必要は無いと今のあなたに言っても心はなかなか解放されないだろう。私は経験上それを知っている。だけど忘れないで欲しい。私はあなたに出会えて幸せだった。死ぬ瞬間まで、あなたが今も生きているのだろうと考えられる事が、とても嬉しかったのだ。

さあ――生きてくれメルメル。命を輝かせ、明日を輝かせてくれ。

野原を駆け回り、大声で歌い、友と笑い、喜び、もがき、泣き、苦しみ、怒れ。それで、いいのだ。

それでも生きていて良かったと、あなたには感じていて欲しい。

私の、勝手な願いだ。
長くなって済まなかった。これ程に読み辛い字を良く我慢して最後まで読んでくれたものだ。ありがとう。
――そうだそうだ。終わりにしようと思ったが大事な事を思い出してしまった。最後に一つお願いがあるのだった。
スリッフィーナの首輪を外してやって欲しいのだ。あの子を自由にしてやって欲しい。今の内に外そうかとも考えたが、恐らくギリギリまであの子の力が必要になってしまうだろう。きっと私には外してやる事が出来ないと思うから、よろしく頼む。それでは、今度こそ終わりにしよう。さようなら。
願わくば、あなたの未来が平和であるように。

「……ライン」
メルメルは馬の背に体を突っ伏してむせび泣いた。やはりペッコリーナ先生はそんなメルメルの背中を撫で続けていた。グッターハイムは呆けたような顔で、トンフィーは心配そうな顔でその様子を眺めていた。

笑った顔。怒った顔。少し恥ずかしそうにした顔。綺麗な赤い髪。透明な青い瞳。握り締めてきた手の感触。抱き締めてくれた暖かい温もり。

ラインの一つ一つを思い出しながら、馬の背が揺れる度に涙がポツリ、ポツリ、とこぼれて落ちる。だから栗色の毛並みは、メルメルがこぼした涙の部分だけ焦げ茶色になってしまっていた。

あれから半日近く、皆ずっと黙り込んだままだった。メルメルに気を遣っているのもあるし、グッターハイムなどは、ぼんやりと何かを考え込んでいるようだった。

さて、そろそろ一休みしましょうかとペッコリーナ先生が皆に声を掛けようとしたその時、トンフィーが再び、あっと驚いた声を出した。

「ニレさんだ！」

指差した先、遥かに広がる草原の彼方には、メルメルとグッターハイムの目には何者も見えはしなかった。

「本当だわ！」

ペッコリーナ先生の目はちゃんとその姿を捉えたらしい。手綱を強く握って、馬の腹を軽く蹴った。馬は猛スピードで走り出し、その内メルメルにもその姿がポツリと点のように見え始めた。見る見るうちに鹿毛の馬と、その上に跨った背の高い青年の姿が大きくなってくる。

「皆さん無事でしたか！」

はっきり言ってちっとも無事では無い。いきなり全て話したら、ニレは卒倒しかねないだろう。ペッコリーナ先生は顎に指を当てて、どう切り出そうかと考えた。

「どうした？　わざわざ出迎えか？」グッターハイムがペッコリーナ先生の隣に馬を並べて言った。

「いえ、それが大変な事が起こって……あれ？」ニレは何かを探すように、二頭並んだ馬の向こう側を覗きこんで首を伸ばした。「ラインさんは？」不思議そうに首を傾げる。
「……まぁ、こちらの話は後だ。大変な事が起こったって、一体何があったんだ？」
グッターハイムの言葉に、ニレはハッとした顔になった。
「そ、それが大変なんです！　実は――ホラッタばあさんがさらわれてしまって！」
「なんだと？」
「さらわれたって、一体いつ？」
「僕らと別れて間もなくだそうです。――突然妙な女が現れて、一瞬にしてお婆さんを連れてかき消えたと……。フレンリーは恐らくワープの魔法じゃないかと言っていました」
「妙な女……」トンフィーは眉根を寄せた。
「フレンリーは無事なの？」ペッコリーナ先生が言った。
「無事です。フレンリーもワープの魔法で女を追いかけたらしいんです。だけど、相手は空を飛んでいた大きな鳥の上にワープしてしまったらしくて。慌ててフレンリーは捕縛の魔法を投げつけたらしいんですけど、鳥の上にいたもう一人の女が魔法で阻んできて……。かなりの使い手だと言っていました」
「もう一人の……女」トンフィーは眉根を寄せたまま俯いてしまった。
「慌ててフレンリーはブーちゃんに乗って追ったらしいんですけど、結局間に合わずにお婆さんは連れ去られてしまったのだそうです」
それはそうだろうな。と、メルメルとトンフィーは思った。
「しかし、一体何で婆さんをさらったりしたんだ？」
「たまたま通りかかったからとかじゃないですかね？」ニレが余り説得力の無い事を言った。
「だけどそれだと、わざわざさらっていった理由にはならないし、フレンリーをほったらかしにした説明もつきませんよね？」

トンフィーにもっともな事を言われて、一同は首を捻って考え込む。しばらくして、もしかしたらとトンフィーが呟いた。
「敵は、以前からホラッタばあさんを狙っていたのかも知れない」
「どういう事だ？」
「ほら、お婆さんの家の直ぐそばにベラメーチェが現れたでしょう？　何らかの方法で、敵はホラッタばあさんの居場所を突き止めたのかも知れない。僕らがつけられていた可能性もあるし」
「そうね。あんな場所に敵が現れたのも不自然だったものね」
ペッコリーナ先生が言って、ニレも確かにその通りだと頷いている。しかし、グッターハイムだけは納得出来ない顔をして、それはおかしいと言った。
「あれは俺を狙っていたんだろう。奴らは初めからレジスタンスのリーダーを消したかったんだ。わざわざ、ボケた婆さんを狙ったりするもんか！」
「ボケた婆さんは狙わないかもしれないけど……。敵が狙っていたのはきっと、古の大占い師ですよ」
「あん？　どういう意味だ？　――大体、古の大占い師だろうが何だろうが、どうして連中が狙ったりするんだよ」
「確かに理由が無いわよね？　それに、どうして私達がホラッタさんをかくまっていると知っていたのかしら？」
「ブラッドさんですよ」
当たり前の事だとばかりにトンフィーが言って、グッターハイムは顔をしかめた。「あの裏切り者か」
「あの、ちょっと確認したいんですが、ブラッドさんはホラッタばあさんの居場所を知っていましたか？」
トンフィーの言葉に、グッターハイムとペッコリーナ先生はふと顔を見合わせた。
「知らなかった筈よね？」
「知らなかっただろうな。レジスタンスでも、あの居場所を知っているのは一部の人間だけだった。一部の人間とは、婆さん達の家に

幻影の魔法をかけたメンバーだな。俺とラインとペッコリーナとニレの四人。他の人間には教えないようにしていた。特に――男にはな」

「どうして男の人には教えなかったんです？」

妙な話しだとトンフィーは首を傾げる。すると、何故かグッターハイムは横目でちらりとニレを見た。

「さぁてな。嫉妬深いどっかの誰かさんに聞いてみてくれ」

「い、いや、あれですよ！　どこから情報が漏れるか分からないからですよ！　実際スパイがいたくらいだし……」

ニレは真っ赤になって言い訳した。すると、一人考え込むように俯いていたメルメルが、急にパッと顔を上げた。

「ねぇ、おじいちゃんは、おばあちゃんの居場所を知っていたのかしら？」

「え……？　どうしてだいメルメル？」ニレが不思議そうな顔をする。

「前に、夜遅くに妙な男の人が家に訪ねて来たの。ペッコリーナ先生はレジスタンスの人間だったんじゃないかって言っていたけど。……もしかしたらブラッドさんだったのかもって気がしてきたの」

「あら、そうなの？」

「その時はフードを深く被っていて、顔が見えなかったからよく分からなかったの。でも今考えると背の高さとか声の感じとか……」

メルメルは記憶を探るように目を細める。「そんな気がする……」

ペッコリーナ先生はそれを見ながら、納得顔で頷いた。

「ブラッドもレジスタンスの一員だったものね。夜中に訪ねて来ても、プラムは疑惑も抱かず受け入れたでしょうね」

「その時、ブラッドさん――かも知れない妙な男の人が言っていたの。途切れ途切れにしか聞こえ無かったんだけど、占いがどうとか、どこにいるのかとか……」

「――そうか！」トンフィーはポンと手を打った。「ペッコリーナ先生、ブラッドさんに訪ねられた事はありませんか？　ホラッタば

あさんの居場所を」
「え……？」突然そんな事言われてもとか言いながら、ペッコリーナ先生は顎に指を当てて少し考え込んだ。「そう……ね。そうだわ！　確かに聞かれたわ！　結構しつこかったわよ、彼。でも、男には絶対話すなとニレに言われていたし、何も知らないと答えたわ」
「やっぱり……！　それなら、おじいさんには話しませんでしたか？」
「プラム？　……そういえば話したわね。そんなような話題になった事があるわ。まぁ男とは言ってもプラムはねぇ。ホラッタさんとプラムは昔からの知り合いだし、元気かどうかとか、そんな軽い話題を少しね。でも、大体の居場所は言ったかも知れないけれど、正確な場所までは話してないわ。そもそも、そんなに詳しく聞いてはこなかったもの」
「やっぱりそうか……」
「やっぱり、やっぱりって何だよ一体。俺にはさっぱりだ！」
頭を掻きむしりながらグッターハイムが言った。
「つまりこういう事です。――ブラッドさんは以前からホラッタばあさんの居所を探っていた。でも、思わぬニレさんのヤキモチが妨害になって、なかなか情報を掴む事が出来なかった」
「や、ヤキモチって、そんなんでは――ぐえっ！」
ニレが赤くなって言い訳しようとしたが、グッターハイムに鞘で腹を突かれてしまった。
「ところがブラッドさんは最近になってようやく、おじいさんから大体の居場所を聞き出す事に成功したんだ。でも、正確な場所は分からないし、ましてや幻影の魔法がかかっていて家を見つけ出す事は出来なかった。だから敵はあの付近をウロウロと探り歩いていたんだ」
「何の為に婆さん達の家を探してたんだよ」
「勿論、ホラッタばあさんをさらうためですよ」
「だーかーらー！　何の為にボケた婆さんをさらうんだよ！」

「だーかーらー！　ボケた婆さんじゃなくて、古の大占い師をさらう為ですよ！」
「……さっぱり分からん！」
グッターハイムは、再び髪をぐちゃぐちゃと掻きむしって天を仰いだ。他の三人もトンフィーの言いたい事が今一分からず、困惑したように顔を見合わせている。
「そもそも、僕らは勘違いしていたのかも知れない……」
まるでそこに答えでも書かれているかの様に、トンフィーはじっと一点を見つめて呟いた。グッターハイムは眉をひそめる。「勘違い？」
「敵の目的は――本当はグッターハイムさんを、こ、殺す事じゃ無かったのかも知れない」
「それじゃあ一体……」
「いや、それもきっと目的の一つではあるんだ。だけど、それだけが目的な訳じゃなかった」
「どういう事？　分かるように説明してちょうだい」ペッコリーナ先生が言った。
「これは……あくまでも僕の推測に過ぎません。それでも話して構いませんか？」
トンフィーが不安げに大人達を見上げると、グッターハイムはフンと鼻を鳴らした。
「この中に、もうお前の考えを子供の浅知恵などと馬鹿にする人間などいないさ。是非ともその推測とやらを聞かせてくれ」
皆はグッターハイムの意見に同意する様に頷いている。トンフィーはすっかり照れてしまって、顔だけじゃなく耳まで赤くなった。
「そ、それじゃあ、話しますね。まずはそうだな……。今回敵が仕掛けた行動は、一体何が目的だったのかについての説明から」
「敵が仕掛けた行動？」メルメルは首を傾げた。
「そう。具体的に言えば、おじいさんをさらった事。グッターハイムさんを手紙で呼び出した事。おじいさんを騙して手紙を書かせる

手伝いを、僕にさせた事」
「それにも理由があるの？」
メルメルは驚いた。他の皆も目を丸くしている。
「たぶんね……。す、推測だけれども。それと、母さんを悪魔の兵隊にした事もたぶん意味があったんだ」
「そ、そうなの？」メルメルは更に驚いた。トンフィーはこくりと頷いた。
「敵は――つまり、闇の王国の目的はレジスタンスを壊滅させる事だった。その存在に脅威を抱いていたのかも知れないし、ただ単に目障りだと感じていただけかも知れない。理由は分からないけれど、壊滅させようと考え、その方法を思いついた」
「どんな方法だ？」
「その方法を説明する前に、まずはレジスタンスという組織ついて少し考えてみましょう。そもそも、レジスタンスとは何の為に作られたんでしょうか？」
「何の為？　――暗黒王を倒す為だろう」グッターハイムが、分かり切った事だという様に言った。
「そうですよね。暗黒王を倒し、闇の王国を討ち滅ぼして、平和なトキアの国を取り戻すのが目的です。ところで、そんなレジスタンスの皆さんは、具体的には一体どんな活動をしているんですか？」
「あん？　……活動か。まぁ、各地に散らばって闇の王国の情報集めなどしているな。その為に様々な場所に隠れ家を作っているし、そこで訓練をしたり人集めをしたりしている。それに、余りに惨い仕打ちを受けている町や村などがあれば、それを救うために戦ったりする事もある。そうして救い出した人間達が新たなレジスタンスのメンバーに加われば、戦力も強化されるしな」
「その時、戦いをまとめるのはどなたですか？　指揮官は？」
「隊長が指揮を取る。各地に散らばっているレジスタンスのメンバーは、一から十までである各部隊にそれぞれ所属している。第一部隊を例に言えば――ペッコリーナやマーヴェラなど、メルメル達の町

に潜んでいる者達。それにニレのいた隠れ家の者達。後、他にも北と東に二つの隠れ家があって、そこにいる者達を合わせた総勢八十人が所属している。隊長は……ラインが務めていた。――各地で起こった争いなどは、その地域を統べる隊長が指揮を取るようにと決めてあるんだ」

「じゃあ、グッターハイムさんやラインさん以外の指揮で敵に打ち勝ったり、村を救ったりした事もあるんですか？」

トンフィーが言うと、グッターハイムはポリポリとこめかみの辺りを掻いた。

「……実際には無いな。今のところ必ず俺かラインが駆けつけて指揮を取っていた。それに正直に言えば、まだレジスタンスはそれ程積極的に活動していないんだ」

「何故ですか？」

「まぁ……ラインが余り積極的では無かったし……それになぁ……」

「まだ七色の勇者が現れていなかったからだよ！」

ニレがついに抑え切れなくなったという様に声を張り上げた。

「古の予言の勇者？　レジスタンスは心からその存在を信じてるの？」

トンフィーが問いかけると、ニレはにっこり笑った。

「当たり前だよ！　誰もがみんな、勇者が現れるのを待ち望んでいるのさ！」

そして、ニレはキラキラした目でメルメルを見たから、思わず他の者もそれにつられる様にその顔を見た。全員の注目を浴びてメルメルは困ったように俯いた。

「レジスタンスの活動をするのは結構大変なんだ。自分達で農作業をしたり猟をしたり、普段は他の仕事をしていたり――そう、ペッコリーナさんのようにね。だって、別にレジスタンスはお金持ちではないし、自分の食い扶持は自分で稼がなきゃならないんだ。更には、情報収集をしたり、武器を集めたり、戦いをしたりするのにも資金がかかるから本当に大変だ。しかも闇の王国に変わってから国

に収める税は以上な程跳ね上がったしね。だから、皆一生懸命働きながら、その合間をぬってレジスタンスの活動をしているんだ。それでも何とか頑張っていられるのは、いつかは必ず平和を取り戻せると信じているから。いつか――いつか七色の勇者が現れ、闇を討ち滅ぼしてくれると信じているからだ」

ニレの瞳を見れば、いつか訪れる筈の平和な日々を本気で思い描いている事が分かる。そしてその視線はずっとメルメルへと注がれていた。

「どうして、そんなに七色の勇者が現れると信じてるの？　あのおばあちゃんの占いなのに……」

何だかいたたまれなくなって、メルメルは思わず言った。

「古の大予言をしたのは、ホラッタばあさんがボケるずっと前だよ。それに占いの前半部分は既に当たっているんだ。――安らかなる青き国に闇生れし時、青き国は暗黒の国へと変わるだろう……。ここまで完璧に当たっていたら、その先だって当たっていて当然だと思わないかい？」

「う～ん」

確かにそうかも知れないが、だからってそんな熱い視線を送られてもメルメルだって弱ってしまうのだ。

「七色の勇者か……」

グッターハイムの呟きに後押しされるように、ニレの語り口は熱を帯びてくる。

「メルメル、私は――フレンリーに聞いてみたんだ。君が七色の勇者だと予言された事をどう思うかと。フレンリーは、お婆様がそう予言したのなら、確かに、間違いなくメルメルは予言の勇者なのだろうと言っていた。あの時のお婆さんの予言は外れない筈だって。私も……その、何だか不思議なんだけど、君が七色の勇者である事を不自然だと感じないんだ。君は――君自身はどうだい？　この先――」

「待ちなさいニレ。話が随分それてるわ。それは今議論する事では無いでしょう」

ペッコリーナ先生が厳しい声で言った。明らかに、この話題を嫌っている風だった。

「で、ですが……」

「確かに脱線し過ぎてますね。メルメルの話は今度にして、話を元

に戻しましょう」
　ニレはまだ何か言いたそうな様子だったが、トンフィーにまで制されてはと、渋々納得したようだ。
「皆さんの話を参考にして僕なりに分析してみた結果、レジスタンスという組織は、グッターハイムさんとラインさんを中心に、いずれ現れる七色の勇者を心の支えにして、それぞれが苦しい日々の中で何とか頑張って活動を続けているといった状態だと思います」
「まぁ……そうだな」グッターハイムが頷いた。
「そこで、こう考えてみて下さい。レジスタンスという組織を一軒の家に例えます。余り丈夫な造りとは言えませんが、三本の大きな支柱によって何とか崩れずに建っています」
「支柱？」
　首を傾げたメルメルに軽く頷いて、トンフィーはグッターハイムの方に顔を向けた。
「まず一本目の支柱は、レジスタンスのリーダーであるグッターハイムさん――あなたです」
「お？　お、おお……。ま、そうだろうな」グッターハイムは心なしか胸を張った。
「それから、かつて最強の軍隊であった赤軍を率いて、闇の軍隊と最後まで戦い続けた赤の大臣――つまり――ラインさんです」
「当然ですね！」
　ニレがにっこりと笑って、他の者は思わず目を伏せた。
「最後の一本は……もう分かりますよね？　レジスタンスの心の支え。いずれ現れると予言された七色の勇者その人です」
「……」メルメルは俯く。ニレの立っている辺りから熱い視線を感じた。
「敵はこの三本の支柱さえ壊せば、レジスタンスという組織は瓦解すると考えた。全部壊さなくても良いかも知れない。それ程しっかりとした作りとは言えません。一つでも多くの支柱を壊そう。闇の王国はそう考えたのです。ところが、ここで一つ問題があります。

グッターハイムさんやラインさんを何らかの方法で倒す事は出来るかも知れない。どんなに強くても、所詮は生きた人間ですからね。でも、七色の勇者はどうでしょうか？　あくまでも予言の中に現れただけで、まだ現実には誰だかも分かっていなかったのです」

――いなかった。その言い方で、トンフィーが自分を七色の勇者だと思っているという本音が伺えて、メルメルはこっそり驚いていた。

「今のままでは倒すどころか、手を出す事も出来ない。そこで敵は考えました。それなら、七色の勇者が現れるという予言をした本人に、その居場所を聞き出せば良いと」

「それで婆さんをさらったのか！」

グッターハイムはようやくその理由が分かって、思わず驚きの声を上げた。

「だから、ブラッドさんは執拗にホラッタばあさんの居所を探っていたんです。そして敵は今回の、そうですね……。作戦――とでも言っておきましょうか。それを思いついたのです」

「作戦って、グッターハイムを呼び出した事？」

ペッコリーナ先生が言って、トンフィーはそちらに顔を向けた。

「それも作戦の内ではあります。でも、それだけじゃない。今回敵は、三本の支柱の内一つでも多くの支柱を壊せれば良いと考えた。だから仕掛けは二重にも三重にも用意されていたし、中にはあわよくば成功すればラッキーというレベルのものもあった。……わ、分かりづらいですかね。一つ一つ説明しますね」

皆は頭の中がチンプンカンプンといった様子で（メルメルなんて、頭が爆発寸前になってるんだ）トンフィーはちょっと焦った。

「ま、まず敵は、母さんを悪魔の兵隊にする事を思い付きます。それは勿論、母さんとラインさんの仲を考えての事です。ただ、出来ればこっそり誰にも気付かれる事無くそれをやりたかった。そうすれば、自然とラインさんの方から友人に会いに来る可能性もあるし、騙し討ちするチャンスも生まれ易いからです。だけど、敵にとって

すごく邪魔な存在がいた。それは――僕です」
「トンフィー？」メルメルは驚いた。
「ずっと一緒に生活していたら、悪魔の兵隊だと気付かれてしまうかも知れない。一番簡単なのは僕を殺す事だけど、園に通っている僕が突然来なくなったら、ペッコリーナ先生達は直ぐに不審を抱いてしまうでしょう。そこで敵はこう考えたのです。母さんが悪魔の兵隊になっても、僕が誰にもその事を話せないようにしてしまおうと。その為に、母さんを命の石で蘇らせる代わりに、友達のおじいさんを騙す手伝いを僕にする様に仕向けた」
「それがそもそも罠だったのね……」ペッコリーナ先生が成る程という感じで呟いた。
「……愚かな僕は、まんまと敵の作戦通り動いたんだ」
「トンフィーは愚かなんかじゃ無いわよ！」
思わずメルメルが叫んで、皆ビックリして目を丸くした。トンフィーは困った様に少し笑った。
「ありがとうメルメル。でも、ラインさんのおかげでその事はちゃんとみんなに話せて、反省する事が出来たから良いんだ……。――そして……罪悪感と、ブラッドさんへの恐怖を感じた僕は、誰にも母さんが悪魔の兵隊になった事を言えなかった。しかもおじいさんから上手くグッターハイムさん宛ての手紙を書かせてしまって、敵に更に作戦を進めるチャンスを与えてしまった。手紙を使ってグッターハイムさんを呼び出した後、悪魔の兵隊がメルメルの家に手紙を届けに来たでしょう？」
「ああ。俺のドジで燃やしちまったやつだな」グッターハイムはバツが悪そうに頭を掻いた。
「あれには恐らく……これは本当に推測ですが、こんな風に書かれていたと思います。『爺は預かった。返して欲しければ、レジスタンスのリーダーと赤の大臣の二人で、西へと向かえ』……まぁ、要するに曖昧に行き先を書かれていたと思うんですよ。西には隠れ家があり、その先にホラッタばあさんの家があり、最後にカルバトの

塔があります。これは、もしかするとグッターハイムさんが敵の居場所を知るために、ホラッタばあさんの占いを頼りに行くかも知れないという狙いがあるからです。だから敵は僕らの後ろを付けていた。ラインさんに見つかってしまいましたけどね」

やっぱりトンフィーは頭の中で、いっつも想像のつかない事ばかり考えているんだと思って、メルメルは改めて驚いてしまった。

「な、何か驚いたな。色々な出来事にそんな意味があったなんて……」

どうやら、ニレもメルメルと同じ様な気持ちでいるらしい。

「でも、敵にも誤算はあったんだ。まずは手紙をグッターハイムさんに焼かれてしまった事。僕らが、猫達の手助けで迷い無くカルバトの塔を目指した事。途中でラインさんに尾行者を見破られた事。僕らが旅について行って、挙げ句には僕が秘密を全部ばらしてしまった事。ペッコリーナ先生も加わって、思いの外こちらが強かった事」

「――そうね。だけど、結果的に我々は大きな痛手をこうむったわね……」

ペッコリーナ先生が寂しそうに呟いた。他の者もしょんぼりと俯く。メルメルは鞄越しにラインの欠片が入っている袋に触れた。

「結局敵は、目的を二つも果たす事に成功した訳だ」

グッターハイムが唇を噛み締め、悔しそうな顔をした。

「そ、そんなに落ち込んでは駄目ですよ！　そりゃあ、おばあさんの安否は気になりますが……。向こうはまだ、実は七色の勇者が既に現れている事を知らないんだ。実際には、支柱は一本も失われていないじゃないですか！」

ニレはにこやかに両手を広げて熱弁するが、誰もそれに同調する事は出来なかった。

「ニレ……実はな……」

仕方ないという感じで、グッターハイムはニレに歩み寄った。これから「あの話」を語り出すのだろうと思うと、メルメルは思わず

耳を塞ぎたくなった。
「何ですか？　そんな深刻な顔をして……。あー！　そうだった！　深刻と言って思い出した！　た、大変なんですリーダー！」
「お、な、何だよ……。余り脅かすな」虚を突かれてグッターハイムは思わず怯んだ。
「ミデルから出発した、残りの闇の軍隊です！　どうやら奴ら、メルメル達の町の方へ向かった様なんです！」
「な、なんですって！」ペッコリーナ先生が悲鳴を上げた。
「どういう事だニレ！」
「私は結局奴らに追いつけなかったんですが、たまたま連中を発見した仲間がいて、奴らが西の森に入るところまで確認したらしいんですよ。それで、慌てて隠れ家に知らせに戻って来てたんです。既に、フレンリーを含む隠れ家のメンバーは、全てメルメル達の町に向かいました！　私はそれを知らせに来たんだった！」
「アホ！　それなら最初にそれを言え！　――行くぞ！」

パッカラッ！　パッカラッ！　パッカラッ！　パッカラッ！

メルメル達を乗せた馬は駆足で走って行く。日は既に傾き始めていて、遠く地平線がオレンジ色に染まっていた。隣を見れば、グッターハイムの前に座ったトンフィーが慣れない馬の駆足に疲れたのか何だかぐったりとしてしまっていて、メルメルは少し心配になった。後ろを振り仰げば、ペッコリーナ先生も相当疲れている様子で顔色も余り良くなかった。今度は体を捻って、後ろを振り返ってみた。そこには、涙で頬を濡らし全てに絶望したかのようにガックリと肩を落としているニレの姿があった。

出発して直ぐに、グッターハイムは馬を走らせながらも、カルバトの塔で起こった事を全てニレに話して聞かせたのだ。ニレは、「嘘だ……」とか、「そんな馬鹿な……」とか呟いていたが、周りの人間の表情から真実だと悟ったのか、それ以来一言も口をきかずに、しくしくと泣いてばかりいた。

「どう！　どう、どう、どう！」

グッターハイムが急に馬を止めた。

「――どう、どう！　……どうしたのよ、グッターハイム？」

ペッコリーナ先生も慌てて停止した。

グッターハイムは素早く馬を下り、トンフィーの手を掴んだ。

「降りるんだトンフィー。――ニレ！　トンフィーを乗せてやってくれ」

トンフィーは戸惑いながらも馬を降りた。グッターハイムは馬にくくりつけてある荷物を解いて皮袋の中の水を馬に与えた。ペッコリーナ先生も馬から降りて、それにならった。

「ペッコリーナ、俺はここから少し飛ばして行くぞ。お前達は後からゆっくりと来い」

「あら！　だ、大丈夫よ……私だってもう少し――」

「余り無理をするな。顔色も良くないぞ。町の皆が心配なのは分かるが……。トンフィーも、ニレも――あいつは精神的な事だろうが……ともかく、もう限界だろう」

ペッコリーナ先生は二人に顔を向け、グッターハイムに向き直ると、軽く頷いた。

「ごめんなさいね……。少しペースを落とさせて貰うわ」

「気にせずゆっくり来い。いざという時、疲れ切って使い物にならんようじゃ困るからな」

グッターハイムは軽くペッコリーナ先生の肩を叩き、サッと馬に跨った。それを見て、メルメルは慌ててトンフィーにミミとシバの入っているうさぎの鞄を押し付けた。

「トンフィー。ミミとシバをお願い……。――待ってグッターハイム！」

「ん？」メルメルは走り寄っていって、グッターハイムの足を掴んだ。

「ワタシも行くわ！　まだまだワタシは元気だもの！」

必死の目をして見上げてくる少女を、グッターハイムは片眉を上げて見つめた。

「駄目よメルメル……あなたは私達と一緒に――」

ペッコリーナ先生が言い終わらないうちに、グッターハイムはグッと体を傾け、メルメルの腕を掴んだ。

「グッターハイム！」

ペッコリーナ先生が悲鳴を上げる。それには構わずグッターハイムはメルメルを引き上げ自分の前に乗せた。

「行くぞメルメル！」

馬は猛スピードで走り出した。

「まったく……！　しょうがない子ね……。――頼むわよ！　グッターハイム！」

ペッコリーナ先生の叫び声は、あっという間に走り去って行った二人の耳に届いたかどうかは定かでは無い。

初めに、「日が暮れるまでに森に入りたい。飛ばすからしっかり掴まっていろ」と言ったきり、グッターハイムはすっかり口を閉ざしてしまった。彼にしてみれば、ラインの事やメルメルの町に向かった闇の軍隊の事など、考える事が山積みで黙り込んでいるだけなのかも知れない。メルメルの方から話しかける事もなかったが、こちらは皆で走らせていた時よりも各段に馬の速度が上がったから、その背に掴まっているのが精一杯で、口も聞けなくなっているだけなのだった。

グッターハイムの思惑通り日が暮れる前に森には辿り着けたが、間も無く夕暮れが訪れ、今では完全に辺りは闇に包まれている。一応道が通っているとはいえ、時には木が横たわっていたりする森の中で、ましてやランプの明かりだけではそれ程馬の速度を上げる事は出来ない。グッターハイムはやむを得ず少しだけペースを落とした。それでようやく余裕が生まれたので、メルメルはグッターハイムに話しかける事にした。

「ね、グッターハイム。闇の軍隊は、ワタシ達の町に向かったのかしら？」

「うん？　……ニレは、仲間が西の森に入るところまで確認したと言っていただろう。町に入るのを確認した訳じゃないからな……」

グッターハイムはそう答えながらも頭の中では、間違いなく敵はメルメル達の町に向かったと考えていた。

西の森はそれ程大きい訳ではない。少人数ならともかく大部隊で、余りちゃんと道も整備されていないような足場の悪い森の中を通過するのは得策ではないだろう。他の場所に用があるなら迂回した方が賢明だ。ただ、西の森は、少し町を覆う様に横に広がっているから、メルメル達の町へ行くならばやはり森を抜けて行くのが自然と言える。

さすがに、そのくらいの事は分かっているのか、メルメルは不安げに呟いた。

「闇の軍隊は一体どこに向かったのかしら……」
「もしかしたら、メルメル達の町を越えて、更に東にある隣街に向かったのかもな。あそこなら割と大きいし、ミデルからあの街に拠点を移すつもりかも知れない」
「でも、どっちにしてもワタシ達の町を通過するんでしょう？　みんな大丈夫かしら……」
「な～に。町に入っても、何もしないで通り抜けるだけかも知れん」
この言葉も本音ではなかった。
グッターハイムの今までの経験から、闇の軍隊が何も手出しをせずに町を通り越すとは考えられなかった。制圧しようとするか、略奪の限りを尽くすか……。余り良い結果は想像し難い。そもそも、今まで手を出して来なかったのだって、この辺りが余りにも田舎でそれ程目立った特産品なども無く、闇の王国にとって余り価値が無かったからなのだ。それでも勿論、税などはきっちり納めていたから文句も言われず捨ておかれたのだろう。だが、これからは事情が違う。敵はブラッドからの報告で、あの町にたくさんのレジスタンスが潜伏している事を知っている筈だ。トンフィーの言うところの「作戦」が終わってしまった今、もうメルメル達の町をほったらかしにしておく理由が無い。
「とにかく……急ごう。町まではもう少しだ」
グッターハイムはわずかにスピードを上げた。メルメルが不安げに後ろを振り仰いだ、その――次の瞬間。
ヒヒヒ～ン！
「――ああ！」
突然、馬が竿立ちになって、メルメル達は地面に投げ出されてしまった。グッターハイムはすぐさま起き上がって腰から剣を引き抜いた。
「――くそ！　この野郎！」
「ギャン！」
近くにいた一頭を薙払い、残りの数を確認する。一、二……

七匹。
「は、ハイエナもどき……」メルメルが呟いた。既に起き上がって、生意気にも剣を構えている。
「ふん……。それはラインから貰ったものか？」
「――そうよ。助太刀するわ！」
グッターハイムはニヤリと笑った。グッターハイムがかなり腕の立つ戦士だという事くらいメルメルだって良く分かっている。しかし、今は怪我で片腕しか使えない状態だ。だからあえて自分も戦おうと考えたのだ。
「まぁ、そう気張らんでも、そろそろ追いついて来るだろう……」
「え……」メルメルが首を傾げたその時、
「ガウガウガウ！」
「ああ！　る、ルーノルノー！」
大きな狼がメルメルの後ろから飛び出して来て、ハイエナもどきに躍り掛かった。
「よし……。ここは頼むぞルーノ！　――行くぞメルメル！」
「え――あ、はい！」
走り出したグッターハイムを追い掛けて、メルメルも慌てて走り出した。後ろから犬の悲鳴が聞こえてくる。
「馬が逃げちまった。探し出すより走った方が早い。町まではあと少しだ」
メルメルは頷きながら後ろを振り返った。
「大丈夫だ。ルーノがやられるなんてあり得ん」
もう一度頷き、前を向いた。今度は走る事に集中する。しかし、本気を出したらグッターハイムを置いて行ってしまいそうだったので、少しメルメルは速度を抑える事にした。
「キメラを放っているってのは良くない傾向だぜ……。何だか奴らの腐った匂いまで漂ってる気がしないか？」
メルメルは鼻をヒクヒクさせたが、悪魔の兵隊の匂いを嗅ぎ分ける事は出来なかった。その代わり、何だか焦げ臭いような匂いを僅

かに感じた気がして顔をしかめた。その時、
目の前の木々の隙間から、遠くの空に白い煙が上がっているのが見えた。
「グッターハイム！　――あれを見て！」
「な……くそ！」
あれはメルメル達の町の方向だ。メルメルの心拍数が一気に跳ね上がった。「み、みんな……！」
「ま、待てメルメル……。先に行くなって！」
気持ちが焦り、メルメルは走る速度を抑えられない。「駄目よ……そんなの嫌よ……」
「待てって――こら！」
グッターハイムの叫び声も、もうメルメルの耳には聞こえない。
時折木々の隙間から見える白い煙を睨み付けながら、頭の中では次々と町の皆の顔が浮かぶ。
（チムシー――リリアン――園長先生――ドラッグノーグ先生――ラウルさん――ドミニク――。みんな……みんな……駄目よ、死なないで！）
いくら気が焦っても、中々町は見えて来ない。メルメルは思わず叫んだ。
「お願い！　みんな死なないでーーーーー！」
（もっと――もっと早く走れたら良いのに！）

「――え？」

突然、フワリと体が持ち上がった。
体の下に、いつの日か味わった事のある筋肉質な固い体の感触と、高級絨毯のような柔らかい毛並みを感じる。勿論メルメルは驚いていたが、取りあえず無我夢中でその背にしがみ付いた。
「……」
獣は無言で風を切り、闇を物ともせず駆け抜ける。静まり返った

森の中で獣が土を踏み鳴らす音と、激しい息遣いだけが耳に響いていた。

メルメルは赤い毛並みを両手で強く握りしめ、涙で濡れる頬をギュっと押し付けた。

「ううっ……。――ラインさん……！」

七色の勇者　6

森をあっという間に抜け、森と町の間にある小高い丘に駆け上がってスリッフィーナは一度立ち止まった。

「ひ、酷い……こんな……」見下ろした町の様子に、メルメルは思わず言葉を無くした。

あちこちから白い煙が上がっているのが見える。それどころか、いまだに火を噴いて燃え上がっている家もたくさんあった。暗闇の中で赤々と燃え上がる炎はとても不気味で、メルメルはまるで地獄絵図の様だと感じていた。暗くて、ここからでは町の中に人影があるかどうかまでは確認出来ない。

「みんな……」

立ち止まっていたのはわずかな時間で、直ぐにスリッフィーナは丘を猛スピードで下り始めた。余りの風圧にメルメルは思わず目を細める。下りる直前にチラリと自分の家の方に目を向けてみたが、その辺りからも白い煙がたくさん上がっているように見えた。しかし、今は取りあえずその事は頭から振り払って前方の景色に意識を集中させる。

町に足を踏み入れてからスリッフィーナは速度を一気に落とした。メルメルは体を起こしキョロキョロと辺りを見回す。燃えている家などは今のところまだないが、門が開け放たれたままであったり、ドアが壊れてはずれている家などもある。町の人間の姿はない。敵の姿もない。やけに静まり返っていて、人の気配を全く感じないのだ。

「す、スリッフィーナ！　あれ……」

メルメルが少し先の道端に倒れた人影を見付けて声をあげると、スリッフィーナは心得たように直ぐにそれに駆け寄る。しかし、何故か少し手前でピタリと立ち止まってしまった。

「スリッフィーナ……？」メルメルは首を傾げながら人影をじっと

見つめた。「……！　あ、悪魔の兵隊……」

暗闇の中でも、良く目を凝らせばそれは普通の人間ではなく、鎧を着た皮膚がドロドロでボロボロの悪魔の兵隊なのだという事が分かる。全く動かないところを見ると何者かに倒されたのか……。

スリッフィーナは倒れた悪魔の兵隊を通り過ぎ、再び走り始めた。その後も、いくつかの死体を発見したがいずれも悪魔の兵隊ばかりだった。

――もしかしたら、闇の軍隊はレジスタンスに負けて追い出されたのかも知れない。などと、メルメルが楽観的に考え始めた、その時。燃え尽きてシューシューと煙を上げている家の前に、再び倒れた人影を発見した。

「あ、あれは……」

今までの死体とは雰囲気が違う。暗闇に目が慣れてきたメルメルは、すぐにその事に気が付いた。スリッフィーナから飛び降りて駆け寄る。

「ねぇ、大丈夫？　……！」

肩に手を掛けようとして、うつ伏せに倒れたその人の頭から、大量の血が流れ出ている事に気付いた。横を向いた顔を覗き見ると、目を見開いて苦悶の表情を浮かべている。

メルメルは唇を噛み締め、無言でスリッフィーナの元へ戻った。

――ついに死者を発見してしまった。メルメルは彼と余り親しくはなかったが、確かに町の中で何度か姿を見かけた事がある。他の皆は無事だろうかといよいよ不安になった。とにかくもう少し町の様子を見てみようと考え、スリッフィーナに跨る。その時突然、暗い夜の町に絹を切り裂くような少女の悲鳴が響き渡った。

「キャーーーー！」

「――スリッフィーナ！」

メルメルが命ずるまでもなく、スリッフィーナは猛スピードで走

り出していた。

「助けてーーー！」

スリッフィーナは声の主の居所を正確に把握しているらしく、十字路を躊躇せず（スピードも落とさないから、メルメルは落ちない様に必死で堪えたんだ）左に曲がった。

まず初めに視界に飛び込んできたのは、遠くでメラメラと激しく燃え上がっている誰かの家。そしてその炎の明かりに照らし出され、道の上に小さいのと大きいのと、二つの人影が見えた。

「いやー！　来ないでーーー！」

近づいて行くにつれて、どうやら二人は共にこちらに背を向けて走っている事が分かる。そして大きな方の影が右手に剣を掲げている事や、鎧を着て肌がボロボロのドロドロなのが分かってくる。

「キャ……！」

前を走っていた小さい方が躓いてしまった。後ろから追い駈けていた悪魔の兵隊は、手にした剣を思い切り振り上げた。

「い、いや……！」

「ガォー！」

パキーン！

スリッフィーナは後ろから悪魔の兵隊に飛びかかり、一撃で左胸に光る命の石を噛み砕いた。倒れた兵隊を中ば踏みつけるようにしているスリッフィーナは、ちょぴり誇らしげだ。

メルメルはその背に跨ったまま、座り込んで（たぶん腰を抜かしちゃったんだ）呆然とこちらを見上げている少女を見つめ、その無事を確信してにっこり微笑んだ。

「チムニー！」

「――め、メルメル！」

メルメルはぴょんとスリッフィーナから飛び降りて、クラスメートのチムニーに抱き付いた。

「無事で良かったわ！」
「え？　あ……う、うん……」
直ぐには状況が飲み込めずに、チムニーは目をパチクリしてスリッフィーナを眺めていた。
「……本当に良かった。ねぇチムニー、みんなも無事なのかしら？　……チムニー？」
返事をしない相手を不思議に思って、メルメルは体を離してその顔を覗き見た。
「……ひっく！　め、メルメル――あ、あたし死んじゃうかと……ぐすっ」
「あらら……」
泣いてしまったチムニーの頭をよしよしと撫でながら、メルメルは辺りを見回す。他には誰もいないようだ。取りあえずは敵の気配もないが、
「チムニー。あなた歩けるかしら？　もしかすると、さっきの叫び声を聞き付けて別の兵隊が来るかも知れない。直ぐに移動した方がいいわ」
「え……？　へ、兵隊って……」
メルメルは倒れた悪魔の兵隊を指差した。
「これよ。悪魔の兵隊。立てるチムニー？」
チムニーは悪魔の兵隊を恐ろしげに見つめながらこくりと頷いた。

「みんなは無事なのかしら？　どこにいるのか知らない？」
何とはなしに園の方向へと足を運びながら、メルメルはチムニーに問い掛けた。
「分かんないわ……。あたし、ずっと一人きりだったから。でも、園のみんなはまだ園の中にいると思う。だってあの時、まだお昼休みだったんだもん」
「あの時？」メルメルは首を傾げた。
「あの時……。えっと、あいつらが来た時」

「あいつらって悪魔の兵隊？」
チムニーが頷くのを見て、メルメルは、なるほどと頷いた。
「チムニーはどうして園にいなかったの？　お休みしたの？」
「ううん、そうじゃなくって……。あたし家に縄跳びを取りに戻るところだったの」
「縄跳び？」
「今日、四時間目に体育の授業をする筈だったの。昨日ドラッグノーグ先生が縄跳びをするって言ってたのに、あたし、すっかり忘れて家に置いてきちゃったの。たぶん先生に言えば貸してくれたんだろうけど……」
「うん、先生余分に持ってたわよ。ワタシ、前に忘れた時に借りたもの」
「そう。その時の事を思い出したの。それで家に取りに行く事にしたのよ」チムニーは顔をしかめた。
「どうしてよ？」メルメルは首を捻る。
「メルメルってば、縄跳びを借りたせいでどうなったか忘れちゃったの？　ドラッグノーグ先生と、一時間みっちりマンツーマンで授業を受けたでしょうが！」
「あ、そう言えば……」思い出して思わず眉根を寄せた。「あれは……最低だったわね」
「でしょ？　だからあたし、お昼休みに家に取りに行く事にしたの。家はそんなに遠くないし、ダッシュで行けば三十分くらいで往復出来ると思って」
メルメルはチムニーの家に何度か遊びに行った事がある。確かに三十分あれば余裕だろうと考え、頷いた。
「それで家に向かってしばらく走ってたら……」
チムニーはそこで一旦言葉を切った。その時の事を思い出したんだろう。顔が青白い。
「走ってたら……？」
「初めは……何て言うか、焚き火の匂いみたいなのがして……。そ

うしたらそれが、実はどこか遠くで家が燃えてたみたいでさ、煙が見えてきて……。何か、それがあたしの家の方角な気がして見に行こうかなと思ったら、たくさんの足音が聞こえてきて……」

「あいつらが来たのね」

チムニーは顔を歪めて頷く。

「それで、悲鳴とか叫び声がいっぱい聞こえてきて、何だか怖くなって。……あたし、急いで直ぐそばの家の庭に隠れたの。植木の隙間から通りを見てたら、鎧を着た兵隊がたくさん現れて……。さっきの気持ち悪いの――悪魔の兵隊？　――も、たくさんいた。そいつらみんな剣を持ってた。勝手に人の家の中に入ったりして……。そのうち直ぐ近くでも悲鳴が聞こえて……」チムニーは目尻に涙を浮かべた。「庭にいるのも怖くなって、中に入れて貰いたくてその家の窓をそっと叩いてみたの。そうしたら知らないおばさんが出てきて、あたしを家に上げてくれたの……。おばさんも何かあったのに気付いてたみたい。あたしが、たくさんの兵隊が来たって言ったら床の下にある小さな穴に隠れるようにって……。不思議なの……。ぱっと見ではそんな穴があるようには見えなかったのに。まるで、こんな時隠れられるようにわざわざ作ったみたいだった……」

メルメルはチムニーの話しを聞いていて、もしかするとそのおばさんはレジスタンスの人かも知れないと考えていた。

「そのおばさんはどうしたの？　チムニーに隠れるように言って、自分はどこに行ったのかしら？」

「分からない。ただ、おばさんが出てきて良いって言うまでは、絶対出てきちゃ駄目だってあたしに言っていなくなっちゃった。だからあたし、さっきまでじっと隠れてたんだけど、喉も渇いたし何時間経ったのかも分かんないし……。それで外に出ちゃったんだ……。だって……だって一人きりで隠れているのもすごく怖くって……ぐすっ」

チムニーは手の甲で飛び出してきた涙をグイッと拭った。メルメルは安心させる為にチムニーの手を優しく握った。

「出てきたら真っ暗で……誰もいなかった。おばさん……どこに行

っちゃったんだろ……」
　メルメルは少し嫌な予感がしたが、その事は勿論口にはしなかった。
「でも、メルメルが助けてくれて良かった！　あいつに見つかった時は、絶対もうダメだと思ったんだもん！」
　チムニーは二人の横を颯爽と歩くスリッフィーナを見つめて、溜め息を吐いた。
「すごいねぇ……。この虎って、メルメルのペットなの？」
「――え？　……違うわ。ワタシの……ワタシの大好きな人のペットよ」
　虎ではなく豹だという事はあえて無視して、メルメルは寂しそうに呟いた。チムニーは首を傾げる。
「大好きな人？　メルメルのおじいちゃん？」
「違うわ……。ねぇ、チムニー。取りあえず園に行ってみましょうか？　他に当てもないし、園ならみんながいるかも知れないし」
　メルメルが話をすり替えるように言うと、チムニーは何故か急に真面目な顔になってしまった。
「う～ん。あのさメルメル、あたしんちに行っちゃだめかな？」
「チムニーの家？」まさか縄跳びを取りに行くはずはないだろうしとメルメルは首を傾げた。
「うん。たぶんママが家にいるはずだから……」
　チムニーが少しもじもじして言うと、メルメルは心得たとばかりに頷いた。
「無事を確かめたいのね？　分かったわ！　行きましょう！」
　メルメルはチムニーの手を引いて歩き出した。ここからチムニーの家はそんなに遠くない。行き方もちゃんと分かっている。
「ありがとうメルメル！」チムニーは嬉しそうに笑ったが、直ぐにその笑顔を曇らせた。「ママ……大丈夫かな？」
　不安そうに見つめてくるチムニーに、メルメルはにっこり微笑んだ。

「大丈夫に決まってるじゃない！　チムニーのママはとっても強いもの！　……あの、恐怖のお尻百叩きの刑を忘れたの？」

それは以前、メルメル達がドッチボールに夢中になり過ぎて夜中まで遊んでしまった時の事だ。皆がいた公園に、ペッコリーナ先生とチムニーのママが現れて、その場にいた全員を「お尻百叩きの刑」にしたのだ。五人目くらいでペッコリーナ先生は疲れて音を上げてしまって、残り二十人を全てチムニーのママ一人で叩ききったのだ。その体力と、最後まで衰えなかった平手の勢いを思い出して、メルメルはチムニーのママもレジスタンスに違いないと考えた。

「そっか……。じゃあ……きっと大丈夫よね」

「そうよ！　絶対大丈夫！」

根拠はあんまりしっかりしてないが、メルメルの笑顔を見てチムニーはすっかり元気になった。

「そうだ。ママの無事を確かめたら、メルメルの家に行こうよ！　メルメルだっておじいちゃんが心配でしょ？」

「……ううん。ワタシの家はいいわ……」メルメルは思わず俯いた。

「どうして？」

「今、おじいちゃんは家にいないの」

「え、そうなの？　どこ行ったの？」

「う～んと……」

メルメルは困ったような顔になった。いきなり、おじいちゃんは闇の王国の者にさらわれた、などと言ってもチムニーには訳が分からないだろう。分かり易く説明するにはどうしたものかとメルメルは頭を悩ませる。

（こういう説明とかはトンフィーにお願いしたいわね……）

「そう言えばメルメル、最近どこ行ってたの？　先生は風邪だって言うけど、あたしメルメルんちにお見舞いに行ったのよ？　いくらノックしても誰も出なかった。どこか――旅行かなんか行ってたの？」

「えっと……まぁ、旅行と言えば旅行みたいな感じかしら？」

「……もしかしてあの日何かあった？　ほら、猫が迎えに来てさ、ペッコリーナ先生と二人でメルメルの家に行ったでしょ？　それからずっと休んでるもんね。――あ、そうだ！　ペッコリーナ先生もあの日からずっと休んでるんだ！　ドラッグノーグ先生ってばやけに元気ないから、もしかしてペッコリーナ先生すごく具合悪いのかと思って、あたしお見舞いに行きたいって言ってみたの。だけど先生ったら風邪が移るからダメだって。……あの日、もしかしてペッコリーナ先生と何かあったの？」

「え、えっと……」

メルメルが目の玉を上にして頭を悩ませていると、チムニーが顔をグッと近づけてきた。

「もしかして――トンフィーも一緒だった？」

「えっ……」

「一緒でしょ？　だってトンフィーも同じように休んでたもん。ふ～ん……一緒かぁ……」

メルメルの答えを聞かずにチムニーは勝手に納得して、へ～とか、そうなんだ～とか言っている。メルメルは、（まぁ別に本当の事だし、隠す必要もないか）などと考えていた。

「――ああ！」

突然チムニーが叫び声を上げて、メルメルは思わずビクリとしてしまった。

「ど、どうしたのチム――」

「あたしんちが！　……そ、そんなぁ！」

メルメルは慌てて首を捻りチムニーの見つめる先に目をやった。そこにはメラメラと激しく燃え上がる一軒の大きな家があった。炎の隙間から赤色の屋根がチラチラと見えている。

「ま、ママ……」

チムニーはふらふらと前に進む。メルメルは何も言わずについて行きながら、繋いでいる手をぎゅっと握ってチムニーが離れていかないように気を付けていた。まさか炎の中に飛び込んだりはしない

だろうが、万が一という事もある。
「ママ……ママ……」
チムニーは燃え盛る自らの家の前に立ち、それを下から上までゆっくりと眺めた。チムニーの薄い茶色の瞳が炎を映し出してゆらゆら揺れている。その目に涙がみるみるうちに浮かび上がった。
「ママー……」
「これ以上近づいたら危ないわチムニー……」
「う……うわぁぁん！」
「チムニー……」
座り込んでしまったチムニーをメルメルは両手でぎゅっと抱きしめた。丸まった背中を優しくさすり、顎を上げて燃え盛る家を見つめる。その瞳は怒りのために、目の前の家と同じようにメラメラと燃え上がっていた。メルメルは心の中で、――どうして、と呟いた。
（何の為にこんな酷い事をするんだろう……。何故こんな悲しい事を……）
「ひっく……ママ……ひっく……」
「大丈夫。チムニーのママはきっと無事よ。家が燃える前に逃げ出したわよ」
「ひっく……そ、そっかな？」
「そうに決まってるわよ。……そうだ！　チムニーと同じようにどこかに隠れてるかも知れないわ。探しに行きましょうよ！」
力強くメルメルが言うと、少しだけチムニーは不安そうにその顔を見つめていた。しかし、メルメルの輝いた瞳を見つめるうちに少しずつ元気が湧いてきたようだ。
「よし……さぁ、立って！」
勢いよく立ち上がり、メルメルはにこりと笑顔で手を差し出す。それにつられてチムニーも笑顔でその手を取って立ち上がった。
「うん……。行こう！」
ところが、そうして数歩進んだところで、何故かメルメルはピタリと立ち止まってしまった。

「……メルメル？」
チムニーは不思議そうにメルメルの横顔を見つめる。先ほどまでとはまるで別人の様に厳しい顔付きで前方を見つめている。
「ど、どうしたのメルメ――」
「シ！　静かに！」
厳しい顔付きのままそう言われて、チムニーは戸惑ったように黙り込んだ。
「……誰か来るわ」
呟いて、メルメルはチムニーと繋いでるのとは反対側の手で、腰に下げた剣をスルリと抜いた。
「め、メルメル……」
チムニーは驚いて、その、見た事のないような友人の姿と、前方の道の先とを見比べた。

七色の勇者　8

――誰もいない。

チムニーが首を傾げてもう一度問いかけようとした、その時。後ろにいたスリッフィーナがすっと二人の前に出てきた。尻尾を一度ブルンと大きく振って牙を剥き、「グウゥ……」と低い声で唸っている。それでようやくチムニーの心臓がドキドキと高鳴りだした。

「――――――」

遠くの方で何者かが叫んだような気がして、チムニーはビクリと肩を持ち上げた。怯えて一歩後ろに下がると、メルメルが安心させるように小声で呟く。

「大丈夫よ。スリッフィーナがいるから……」

そうは言うが繋いだ手はしっとり濡れていて、チムニーにはその緊張が伝わってきてしまうのだ。

（逃げた方がいいかしら？　でも、もしかしたら味方かも……。だけどチムニーがいるし危険は避けた方が……。あ、でもそろそろグッターハイムが追い付く頃だわ）

メルメルは激しい焦燥にかられながら道の先に広がる闇を睨みつけていた。後ろで燃え盛っている炎の明かりのせいで、闇が一層濃く見える気がする。

「――イ――ム――」

声が近づいてくる。もっと良く聞いてみようとメルメルが必死で耳を澄ましていると、体を低くしてずっと攻撃体制をとっていたスリッフィーナが、すっと後ろに体を引いてしまった。

「スリッフィーナ？　……どうしたの？」

スリッフィーナはメルメル斜め後ろでお座りをしている。もう完全に警戒を解いてしまったようだ。それを見て、メルメルも肩の力をゆっくり抜いた。

――味方なのだろうか？

「――ニ――ムニー――」
「……チムニー？」
ふらふらとチムニーが数歩前に出て、メルメルは首を傾げながら繋いだ手を軽く引いた。
「チム――ニ――」
「ママ……」
チムニーはメルメルの手をパッと振りほどいて走り出してしまった。
「あ！　チム――」
「ママーー！」
大きな声で叫びながらチムニーは走って行く。追うようにメルメルは数歩駆けたが、直ぐに走るのを止めた。
「チムニー！　チムニーー！」
ふいに暗闇の中から大柄な女が現れて、こちらに向かって全力で走り寄ってきた。
「ママ！」
「チムニー！」
親子は道の真ん中で固く抱き合った。どうやら二人とも涙を浮かべている様だ。
メルメルはしばらくぼんやりとその様子を眺めていた。隣で「グウゥ」とスリッフィーナが唸って、ようやく我に返りにっこりと笑う。スリッフィーナの頭を一撫でして二人に向かって駆け出した。
「良かった……。良かったわねチムニー！」
大きな声でそう言いながら走り寄ると、母親の方が気付いて顔を上げた。
「あら……あんたメルメルじゃないの！」
「おばさん！　無事で良かったわ！　心配して、二人で探しに行くところだったのよ！」
「あら！　こっちこそよ！　園にチムニーがいないと知ってどれだけたまげたか！　クラスのみんなに聞いたら昼休みに園を抜け出し

たって言うじゃないの！　お前一体どこに行ってたんだい、まったく！」

「ごめんママ……ぐすっ」

「おばさん！　みんなは無事なの？」

チムニーのママは気の良さそうな顔でにっこり笑った。「勿論よ！　みんな――」

「マグニーニ～！　……ゼ～ゼ～」

「……園長先生！」

メルメルは目を丸くした。なんと闇の向こうからマーヴェラ園長が現れたのだ。走り疲れて肩で息をしている。

「ひ～ひ～……あ、あら……メルメルちゃんじゃないの。……あ！　チムニーちゃん！」

大きな母親の陰に隠れていたチムニーを発見して、マーヴェラ園長は目を見開いた。

「あ～、良かったわねマグニーニ～。あんたが血相変えて園を飛び出した時は焦ったわよ～！　アッハハハハ！」

マーヴェラ園長はチムニーのママの肩を叩きながら、酒で焼けたガラガラ声で良かった良かったと繰り返し笑った。

「――メルメール！」

「……グッターハイム！」

今度は逆側の道の向こうからグッターハイムが現れて、メルメルは再び目を丸くした。

「お良かった！　無事か……ん？　マーヴェラじゃないか！」

「リーダー！」

「どうしたマーヴェラ！　町の者は無事か！」

「大丈夫！　……とは言えないか。みんな、死んじゃったり怪我しちゃったり大変だからね」

「そうか……」

グッターハイムもマーヴェラ園長も眉根を寄せて俯く。メルメルは不安げに二人の大人を見上げていた。

「でもね、とりあえず子供達はみんな無事よ！　園にまでは手を出させなかったからね！　レジスタンスのみんなが守ってくれたのよ～！」

マーヴェラ園長が嬉しそうに言うのを聞いて、チムニーは思わず、

「……レジスタンス？」と呟いた。

「隠れ家の連中も来たか？」

今度はグッターハイムの言葉にチムニーは、「隠れ家？」と首を傾げる。

「来てるわ！　仲間も町の連中もみんな園に集まってるわ！」

「よし。それじゃあ詳しい話しは園に行ってからにしよう。町の中はまだ安全と言えそうにない。ここに来る前に悪魔の兵隊とかち合っちまったからな」

マーヴェラ園長はコクリと頷いた。

「そうなのよ。まだヤツらウロウロしてんのよ。レジスタンスのメンバーが何人か見回りしてんだけど……」

「そうか。よし、とにかく行こう」

「ええ」

マーヴェラ園長が先に立って歩き出した。グッターハイムとチムニーのお母さんがよそよそしい感じでお辞儀をするのを見て、メルメルは、（なんだ。チムニーのママはレジスタンスじゃないんだわ）と少しがっかりした。そして親子がしっかりと手を繋いで歩き出したのをぼんやり眺めていた。

「ほら、メルメル。行くぞ」

グッターハイムに背中を叩かれメルメルはようやく歩き出した。

「どうして、スリッフィーナがここに……」

横に並んで歩き出したスリッフィーナを、グッターハイムは不思議そうに見つめた。

「……ラインさんよ」メルメルは言いながらグッターハイムの横に来て、その手を握った。

「きっと……ラインさんが助けるように伝えてくれたんだわ……」

「……」

グッターハイムはぼんやりと、スリッフィーナの赤い毛並みを眺めていた。

園に辿り着くと、門の脇に槍を構え松明を掲げたレジスタンスと思しき戦士が二人立っていた。二人はグッターハイムの姿を認めて深々と頭を下げて挨拶してきた。グッターハムは、「ご苦労さん」とだけ言って、特には会話もせずに中に入ってしまったから、メルメルもぺこりと頭を下げて二人の脇を通り過ぎた。校庭を突っ切って校舎に向かいながら、一度後ろを振り返った。見慣れた門の脇に革の鎧を着けた戦士二人が立っている光景が実におかしな感じがして、メルメルは軽く頭を振った。どうかしたのかとグッターハイムに聞かれたが、何でもないと答えた。

校舎に入るとメルメルは、マーヴェラ園長に二階にある自分達の教室に行くようにと指示された。グッターハイムとマーヴェラ園長は別の教室に向かい、チムニーは、お父さんが怪我をしたので治療を受けていると聞いて母親と保健室に向かってしまった。それでメルメルは一人で自分の教室に向かい、階段を上がりかけた所でスリッフィーナが消えてしまった事に気付いた。

慌てて校庭にまで出て探したがスリッフィーナは見当たらず、代わりに校舎の裏で嫌な物を見つけてしまった。普段そこにはドラッグノーグ先生のペットのライオン、グスタフが寝そべっているのだが、今日はグスタフの代わりに全く別の物が横たわっていた。

それは、ずらりと並べられた、たくさんの死体だった。

その中には見慣れた顔も幾つかある。メルメルはふらつきながらその場所をあとにした。

教室に入ると、クラスメートが大勢集まって来てメルメルを取り囲んだ。無事を喜んでくれる声や、一体今まで何をしていたのかと疑問を投げかけてくる声が聞こえたが、何故か急に泣き出してしまった相手に戸惑ってしまい、結局誰も何も聞けなくなってしまった。

クラスメートの顔を見て安心したのと、いつもと変わらぬ教室の何とも言えない穏やかな空気にたまらなくなって、メルメルは泣いてしまったのだ。そこに父親のお見舞いを終えたチムニーが戻って来て、泣いているメルメルの姿を見て一瞬とても驚いたような顔になった。チムニーに手を引かれて隅の方の席に座り、二人して色々と話しているうちに、ようやくメルメルは気持ちが落ち着いてきた。

「それにしても、お父さん大丈夫そうで良かったわね。チムニー」

「うん。怪我したなんて言うからどんだけかと思ったけど、ほんのちょっと腕を擦りむいただけなんだもん。……でも、逆らった人の中には殺されちゃった人もいるんだから、パパは運がいいよってママが言ってた」

「そう……」

チムニーの父親はりんご農園を営んでいる。彼は突然やってきた闇の軍隊がりんごの木に火をつけていくのを必死で止めたらしいのだ。だが、結局はレジスタンスの人間に助けられながら、命からがら逃げ出す事になってしまった。

「パパったら助けてくれた人――マリンサさんとか言ってたかな？――その女の人に文句言っててさ。あんたが止めたせいで農園を守れなかったって……」

「でも……殺されちゃった人もいたんでしょう？」

「そう！　だからママはパパを叱ってた。農園よりも命の方が大事だろうって。農園は頑張って一からやり直せばいいってさ」

「そうよね……」

そんなに簡単な事ではないだろう。チムニーのパパが作るりんごは町でも評判だった。メルメルがチムニーと農園に遊びに行った時、チムニーのパパは嬉しそうに話したものだ。

――このりんご農園はチムニーのお父さんのおじいちゃんの頃からずっと大切に世話してきたんだ。だから、水もきれいで土も栄養たっぷりになってるから、うちのりんごはとっても甘いんだよ。

百年以上かけて作り上げたものを一からやり直す。口で言うほど

容易くはないだろう。
「パパったら……泣いてた……」
「……」
二人は思わずしんみりと俯いてしまった。
「おい！」
突然横から乱暴に呼びかけられて、メルメルはいつもの癖で眉根を寄せて不機嫌そうにそちらを見た。
「何よ、ドミニク」
ドミニクは腰に手を当て、相変わらずの偉そうな態度でメルメルを見下ろしていた。
「お前、今までどこに行ってたんだよ」
「あんたには関係ないでしょ」
ドミニクはムッと口をへの字に曲げた。「……あいつも一緒だったのか？」
「あいつって誰よ？」
「ちび助だよ！」
鼻息荒く言うドミニクの顔を、メルメルはバカにしたように横目で見た。
「あんたには関係ないわ」
「お前――」
「メルメル！」
その時、教室の扉が勢い良く開いてトンフィーが飛び込んできた。
「トンフィー！」
メルメルは慌てて立ち上がって、満面の笑みを浮かべながらトンフィーのもとへ駆け付けた。その元気そうな姿を見て、トンフィーも安心したように笑った。
「良かったメルメル……怪我もなさそうだ」
「ええ、全然大丈夫よ！　――ペッコリーナ先生やニレは？」
「勿論無事さ。二人は別の教室にいるよ」
「良かった……。うふっ。ミミやシバも元気そうね」

足元にトラ猫が二匹すり寄ってきて、メルメルはにっこり笑った。
「にゃ～ん！」
「うふふ……勿論アケもね！」
トンフィーの足の間からチリチリとアケが顔を覗かせている。
「メルメル……ちょっと来てくれる？」トンフィーはメルメルの手を取って教室を出ようとした。
「おい！」
突然呼び止められ、トンフィーは後ろを振り返った。ドミニクが不愉快そうに腕を組んで立っている。
「待てよ、ちび助。まだオレとの話が終わってないんだ」
声には威圧するような響きがある。しかしトンフィーは顔色一つ変えず、涼しい目でドミニクの顔を真っ直ぐに見た。
「……急ぎなんだよ。悪いけども後にしてくれる？　――行こうメルメル」
ドミニクも、二人のやりとりを見守っていた教室中の皆も、口をポカリと開け唖然として二人が出て行った扉を見つめた。

七色の勇者　9

普段よりずっと静かな廊下を二人並んで歩きながら、メルメルはトンフィーにそう言えば、と言って話しかけた。
「スリッフィーナを見かけなかった？」
「スリッフィーナ？　見てないけれども……スリッフィーナがきたの？」
トンフィーはかなり驚いたようだ。
「そうなの……実は――」
経緯をざっと説明するとトンフィーは何とも言えない表情を浮かべ、うんうんと納得したように頷いた。
「……確かにメルメルの言う通り、スリッフィーナはラインさんに導かれてメルメルのもとへ来たのかもしれないね……」
「ワタシ、スリッフィーナの首輪を外してあげてないの……。すっかり忘れちゃってて」
「大丈夫さ。きっとまた現れてくれるよ」トンフィーが慰めるように言った。
「でも、どうやって外せばいいのかしら？　他人のペットの首輪は外せないんでしょ？」
メルメルが言うと、トンフィーは少し言いにくそうに答えた。
「それは……大丈夫なんだ。飼い主が死んでしまったペットの首輪は誰にでも簡単に外せるから……」
「そう……なの……」
メルメルがしょんぼりしてしまったので、トンフィーは元気づけるように明るい声を出した。
「そうだメルメル！　スリッフィーナの好物って何かな？　もしかしたら――バナナとか？」
「うふふ、バナナはないでしょ。やっぱりお肉じゃないかしら？　どうして？」

「次にスリッフィーナが現れたら、お肉を用意しといて素早く食べさせるんだよ！　その隙にこっそり首輪を外すのさ」
　トンフィーが真面目ぶって言うので、メルメルは思わず声を出して笑ってしまった。
「そんな事しなくたってスリッフィーナは逃げないわよ。……でも、そんなに首輪を外す事は重要な事かしら？」
　メルメルが首を傾げると、トンフィーは少し真面目な顔に戻った。
「飼い主が死んでしまったのにペットが首輪を着けたままでいると、そのペットは飼い主を探し続けて迷子になってしまうなんて言われているんだ」
「ほ、本当に？」
「言い伝えみたいなものだけどもね。……でも、母さんも自分がいつ死ぬか分からないからペットは飼わないとか言ってたな」
「そっか……」
　それが本当なら、スリッフィーナにはとても可哀想な事をしたとメルメルは思った。もしも、もう一度スリッフィーナが現れなかったら相当後悔する事になりそうだ。
「大丈夫だよ。スリッフィーナは必ずメルメルにまた会いに来るよ！」
　少し落ち込んでいるメルメルの肩を、トンフィーはポンと叩いた。
「ダイジョウブ！　ダイジョウブ！」
　突然かん高い大きな声が静かな廊下に響き渡って、メルメルとトンフィーはぎょっとして前を向いた。
「ダイジョウブダトオモッテキヲユルメタラ、サイキンスコシフトリスギチャッタミタイ！」
「アララ！　アマイモノノタベスギジャナイノ！」
「ヤッパリソウカシラ！　アナタハヤセテテイイワネ！」
「ヨクナイワヨ！　サケトタバコデ、ナイゾウボロボロヨ！」
「アララ～！　ダメヨ、ホドホドニシナクチャ！」
「デモ、スキナモノハナカナカヤメラレナイワネ！」

「ホントホント！　アハハハハ！」
「ギャハハハハハ！」
廊下の止まり木に仲良くとまってお喋りしているのは、ペッコリーナ先生のペットでオウムの「ピッピー」と、マーヴェラ園長のペットでカナリアの「トリンケトラ」だ。
メルメルとトンフィーはにっこり笑って顔を見合わせる。そうして両手で耳を塞ぎながら二匹の横を駆け抜けた。
しばらく走りつづけ、ようやく止まったところでトンフィーは、
「アハハ～。相変わらずあの二匹はお喋りだな～」と笑った。メルメルはいつもと変わらない廊下の風景と、トンフィーの笑い声と、遠く後ろの方から聞こえてくる二匹の鳥の話し声を聞きながら、少し前にグッターハイムが話していた事を思い出していた。
――女王様がいる当たり前の幸せ。ずっと続くと思っていた平和で幸せな日々。みんな、それを失う事がとても恐ろしかった……。
「メルメル……？」
呼びかけられてメルメルははっと我に返った。トンフィーが不思議そうに首を傾げている。どうやらかなりの時間ぼんやりしていたようだ。
「何でもないわ。行きましょ」
「うん」
「そう言えば、一体ワタシ達ったらどこへ向かってるのかしら？」
「体育館だよ。そこに大人達はみんな集まって、今後についての事を話し合ってるんだよ。僕達もその話し合いに参加した方が良いと思ってさ」
大人達だけの話し合いに、子供なのに自分達だけは参加する。それは、何だか少しだけ寂しい事のようにメルメルには感じられるのだった。
「……今後についての話し合いって、どんな事？」
「闇の王国への対応についてどうしようかと話してるんだ。今までほとんど闇の王国の支配とは関係ないような田舎町だったからね…

…。みんなすっかり戸惑ってるみたいだ」
　メルメルは自分もそうだった事を思い出して、「なるほど……」と頷いた。
「あいつらは西の森からこの町へ入ってそのまま真っ直ぐ東の草原へ抜けた。そして町からおよそ二キロほどの所に陣を張って、今もどっしりとそこに構えているんだ。町を通り抜ける間には、家に火を点けたり畑を荒らしたり……。逆らう者がいれば、こ、殺したりもした。そうやって町の人々に軍隊の――国の脅威を十分に与えておいて、それでいて完全に町を破壊するまではやらないで猶予を与えている。……実に上手いやり方だよ。あんまり追い詰めてしまうと、窮鼠猫を噛むじゃないけれど死ぬ気で向かってこられれば、ただの田舎町相手だって軍は思いもよらない被害を被る事もある」
「じゃあ……軍隊はまだすぐそばにいるんだ……」メルメルは不安げに窓の外の暗闇を見つめた。
「大丈夫さ。しばらく襲っては来ないだろうから。奴らの目的はこの町を潰す事じゃなくて、レジスタンスに自分達の要求を飲ませて降伏させる事なんだ」
「要求って？」
「実はさっき、軍隊からの使者が手紙を持ってやってきたんだ。みんなの話によると手紙には降伏の条件が幾つか書いてあるみたいだった」
「降伏の条件……」メルメルは何だか嫌な予感がして眉をひそめた。
「僕は中を読んだ訳じゃないから詳しくは分からないんだけども、どうやら一つにはレジスタンスを解散しろと書かれているみたいなんだ。軍は、スパイをしていたブラッドさんからの報告で、それこそかなり詳しくこの町のレジスタンスの内情を知っていた筈だ。当然、暗黒王に逆らう連中を許す訳にはいかないと考えただろうね。そうは言っても、もともとここは闇の軍隊もいない様な田舎町だったから、レジスタンスも大した活動はしていなかったという事だって知ってた筈なんだ。若い戦士や活動的で力のある者なんかは、大

体隠れ家に集まっていたようだからね。だから、町に潜伏していたのはほとんど力のない者や老人ばかりだったんだ。そのおかげというか、解散だけで済むならそれほど厳しくはない処分が下ったと言える。……本来なら、町を殲滅（せんめつ）させられてもおかしくないんだからね」

「殲滅……。全員殺されなかっただけ……ましって事かしら？」

「そうだね。他の町や村の例をみるとそう思うよ。でも、完全に許してくれた訳じゃあ勿論ないよ。解散だけで済ます変わりに、いくつか条件を出してきたんだ」

「また条件？　条件ばっかりじゃない……」

降伏するのにも条件。解散するだけで許すのにも条件。条件を飲まなければ……殲滅させられるというわけだ。

「まず、軍の人間を数人見張りとして町に置く事。それから町の者同士で見張り合う事。これが結構厳しくて、もしも誰かが武器の所持や不審な動きを見せた場合は、見張役の人間も一緒に処分するんだって……。処分っていうのはつまり……こ、殺されちゃうって事さ……」

「ひ、ひどい……」

七色の勇者　１０

メルメルはぎゅっと拳を握り締めた。少しずつ、闇の軍隊への憎しみが湧いてきている。

「本当に酷いよ……。それからまだある。えっと、……メルメルは税金って知ってる？」

「税？　知ってるわよ。国に納めるお金の事でしょ」

メルメルはそのくらい知っているに決まってる、といった感じで胸を張った。

「そうだね。トキアの国から闇の王国へ名前を変えた今も、この国に住む者は変わらず税金というものを国に納めている。例えこんな田舎町の人間だって、もしも納めなければどんな目に合わされるか分からないし、闇の王国になってから税率がとても上がって苦しくなったけれども、それでもちゃあんと納め続けていたんだ」

メルメルはなんとなく税というものがあるのは知っていたが、トンフィーの様に詳しくは分かっていなかった。闇の王国になってから税率――つまりお金を納める量が増えたなんて事も全然知らなかった。

「ところが今回軍は、そのただでさえ高くなっていた税率を更に上げると言い出したんだ」

「どのくらい？」

細かい数字を言ってもメルメルには難しいかも知れないとトンフィーは考えた。

「ちゃんと毎日のご飯を食べる事も厳しい人が出るくらいさ」

「そ、そんなのダメじゃない。どうしてそんな酷い事するのよ……」

「たぶん、見せしめの為にやるんだ。暗黒王に逆らうとどうなるかを、レジスタンスや民に分からせる為にね……」

「……」

それじゃあみんな怖がって余計に暗黒王に逆らう事をしなくなる。

どんな酷い目にあっても諦めて我慢してしまう。メルメルはそこではっと気付いた。

「そっか、それが狙いなんだ……」

「え……？」トンフィーは不思議そうに首を傾げる。

「みんなが、間違った事を間違ってるって言えなくなるように……。恐くて何も文句が言えないように仕向ける為なのよ」

メルメルがいかにも悔しくて仕方ないという顔で言うと、トンフィーは確かにその通りだと頷いた。

「それどころか、もっと酷い事になりそうなんだ。町の人がレジスタンスの人を責め始めてる。町が襲われたのはレジスタンスのせいだって言ってるんだ」

「そ、そんな」

「確かに間違いではないよね。だって、確かにレジスタンスがいなければ、こんな田舎町にわざわざ闇の軍隊は訪れたりしなかったかも知れないんだから。たとえどんなに他の場所で酷い事が起きていたって、暗黒王に逆らうような気持ちを持たなければ、この町は平和でいられたかも知れないんだ」

「それは……。そうかも知れないけど、でも、そんなの……」

メルメルは何だかとても悲しくなってしまった。――別にレジスタンスは悪い事をしていた訳じゃない筈なのに。

「でも、難しい問題だよね……。僕だって、この先この町の中を悪魔の兵隊がうろうろしたり、町の人同士がお互いを監視したりなんて嫌だもの」

「だったら戦わなきゃ！　そんな町にしたくないなら町を守るために戦わなきゃダメじゃない！」

突然メルメルがとっても興奮して怒鳴ったから、トンフィーはビックリしておどおどと首を横に振った。

「そ、そんな簡単な訳にはいかないよ」

「どうしてよ！」

「だ、だって――」

「メルメル～？」
何やら聞いた事のある穏やかでゆっくりな声が聞こえて、メルメルとトンフィーは驚いてそちらを見た。
「フレンリー！」
少し先の教室のドアからフレンリーがひょっこり顔を覗かせていた。
「ブー」
「あ！　プ―助だー！」
ドアから小さな子豚が出てきて、二人は笑顔で駆け寄った。ブーブー言いながら歩いて来る子豚を抱き上げ、メルメルはフレンリーに微笑みかける。
「フレンリー！　無事で良かったわ！」
フレンリーは相変わらずのゆっくりさで、一拍おいてから話し始めた。
「……メルメルとトンフィーこそ～無事で良かったわね～。ニレから聞いたわ～。本当に大変だったわね～」
フレンリーはラインの事を言っているのかも知れない。とても悲しい表情を一瞬だけ見せた。
「うん……。でも、フレンリーだって大変だったわ。おばあちゃん……とっても心配だもの」
メルメルが目を伏せると、フレンリーはにこりと笑ってメルメルの肩をポンポンと叩いた。
「大丈夫よ～。お婆様は無事よきっと～。私には～なんとなく分かるのよ～」
「そうなの？」
トンフィーが不思議そうに首を傾げながら言うと、フレンリーは再びにこっと笑った。
「占い師の～孫だからね～」
メルメルは、もしもそれが本当ならおじいちゃんの無事も分かるかどうか聞こうかと一瞬思ったが、直ぐにその考えを消した。どう

いう占い結果が出ても、フレンリーは無事だと答えるだろう。
「それよりも～随分大きな声で～何を話していたの～？」
「ああ……」
先ほどの、メルメルの怒鳴り声を聞きつけてフレンリーは出てきたのだろう。トンフィーは、かいつまんでフレンリーに事情を話した。話しを聞くとフレンリーは、う～んと唸った。
「それは～……駄目よメルメル～」
「どうして？　町を守るために戦うのは悪い事？」
フレンリーはゆっくり首を横に振った。「みんな～殺されてしまうわ～」
「でも……分からないじゃない？　レジスタンスだっているし、戦う前から諦めちゃダメよ」
「レジスタンスは～初めから戦う気はないわ～。私が戦うのを～止めたくらいだもの～」
「え？　ど、どうして？」メルメルは思わず目を丸くした。
「私は～こう見えてもかなり強いわ～。隠れ家にいた戦士も～そこそこ強いし～おじさま（グッターハイムの事なんだ）や～おばさま（ペッコリーナ先生の事なんだ）を合わせれば～、東の草原にいる敵の軍隊くらいなら～倒せるかも知れないわ～」
「それだったら……」
「でも～、その後必ず敵は～新たな軍隊を～率いてくるわ～」
「……でも――」
「その軍隊を～倒したとしても～、更に敵は～新たな軍隊を～率いてくるわ～」
「……」メルメルはじっとフレンリーの顔を見つめた。少しずつ、その肩から力が抜けていく。
「つまりねメルメル、最終的には闇の軍隊全部を相手にする事になるんだ。一度負けたからって敵が諦めてくれる訳無いもの。そして、レジスタンスに闇の王国そのものを相手にする力は、まだないんだよ」

トンフィーに諭されるように言われて、メルメルはいよいよしょんぼりと肩を落とした。
「でも……それじゃあ、レジスタンスは何の為に存在するのよ」
――ラインさんは何の為に戦ったのか……。
「メルメル～これで終わりな訳じゃないわ～」
フレンリーが、顔や声に似合わない力強さでメルメルの手を握り締めた。
「……」
「落ち込んじゃダメよ～」
（そうだ……。落ち込んでちゃダメだわ……。そんなの、きっとラインさんに怒られるわ）
メルメルはぎゅっとフレンリーの手を握り返した。
「そうよね……そうだわ。まだまだ終わりじゃないものね」
フレンリーはにこりと笑った。メルメルもそれに答えるようににっこりと笑ったのだった。

体育館の重い扉をメルメルとトンフィーが力を合わせて開けると、少し寒いくらいの夜なのに、中からむわっとした熱気が出てきて、二人は思わず顔を見合わせた。明かりがこうこうと灯された館内には五百人近くの大人達が集まっていた。普段は、過疎化が進んだこの町には子供が三十人ほどしかおらず、広々とした体育館にメルメル達が集まるとちょんぼりとした感じになって寂しいくらいだった。
しかし、今日はその体育館が手狭に感じられるほどの人の数になっている。それはそうだ。おそらく今ここには、ほとんどの町の人間が集まっているのだろうから。大人達が、自分達と同じように体育座りをしていたりあぐらを組んで座り込んでいる様子は、二人にはなんともいえずおかしく感じられるのだった。
「な、なんか凄いね……」トンフィーが圧倒されたように呟いた。
良く見ると、ざわつきながら座り込んでいる町の人間から少しだけ距離をおいて、十人ほどがまとまり肩を寄せ合うようにして立っ

ている。そこには見知った顔や、クラスメートの母親や父親の顔もあるが、全体的にはやけに老人が多いように感じられる。

静かに俯いているその人達の中に、ドラッグノーグ先生がペットのグスタフを従えて所在なげに立っているのを見つけて、メルメルは、もしかしたらあれは町に潜伏していたレジスタンスの人達かも知れないと考えた。

そしてそこからも更に離れて、一人ぽつんとグッターハイムが腕を組んで壁にもたれている。目を瞑ってしまっているから、その表情からは何を考えているのかは読み取れない。

「話しをそろそろまとめようじゃないか。いつまでも言い争いをしても虚しいだけだ……」

皆の座っている正面には、舞台のように高くなっている場所があり、その壇上に立った大柄な老人が声を張り上げて言った。

「連中は明日の朝までに答えを出せと言って来ておるんだ……」

老人の後ろにはマーヴェラ園長とペッコリーナ先生が、両方とも難しい顔をして立っている。

「それでは、やはり町長は向こうの要求を全て聞き入れるつもりですか？」

一番前に座っている髪の長い若い女性が言った。メルメルの知らない顔だ。

「まさか突き返す訳にはいかんだろう。そんな事をすればどうなるか……」

老人は眉根を寄せた。この老人はメルメル達の町をまとめている長なのだが、実はドミニクの祖父でもあるのだ。

「何とか交渉の余地はないんですか？　これ以上税を上げられたら、食えない者も出かねませんよ」

前の方に座った太った男が言った。あれは肉屋のラウルだ。

「勿論、言うだけは言ってみる。何とか少しでも軽減するよう働きかけもする。だが、恐らくはこちらの相談に乗るような連中じゃないだろう」

町長は疲れた顔で言った。後ろにいる女性二人も同じように疲れた顔をして頷いている。

「そもそも、あんな連中を町に入れるからいけないんだ！」

突然、後ろの方に座った男が立ち上がって叫んだ。ドラッグノーグ先生達の方を指差している。

「……そう言わんでくれ。彼らだって暮らす場所は必要なのだから」
「だったらよそで暮らせよ！　俺達の町に迷惑をかけるんじゃねぇよ！」
男は唾でも吐きかねない様な顔でドラッグノーグ先生達の方を睨んでいる。あれは確か、トンフィーの家の近くで古道具屋をやっている男だ。メルメルは一生あの古道具屋には行かないと心に誓った。
「まぁ、まぁ……。落ち着きなさいよ。終わった事をどうこう言っても仕方ないじゃない」
先ほどの髪の長い女性が言うと、男は、今度は彼女の方をギロリと睨み付けた。
「それじゃあ、今後はどうする？　町長はこの先も奴らをこの町に置いて置くつもりだぞ！」
「……どうするんですか？　町長……」
髪の長い女性が不安げに問い掛けると、町長は弱った顔で後ろを振り返った。二人の女性と小さな声で二、三、言葉を交わすと、マーヴェラ園長が固い表情で頷いて前に進み出て来た。代表して何か話すつもりらしい。メルメルは急に緊張してきた。
（大丈夫かしら……）
実は、マーヴェラ園長はあまり人前で話すのが得意ではない。いつもは変わりにペッコリーナ先生が話をするのだが、やはりこういう時は園長という立場上、前に出ざるを得ないのかも知れない。マーヴェラ園長は館内をぐるりと見渡し、急に少女のようにもじもじと俯いて喋り始めた。
「あ、あの……わ、私達は今後……み、皆さんに迷惑に……な、なるような事は……あの……」
「なんだ、なんだ～？　何を言ってやがるのか全く聞こえねぇな～？」

古道具屋の男が意地の悪い声を出して、メルメルはそちらを睨み付け、拳を握り締めた。
「そ、その……だから……その……」
マーヴェラ園長は真っ赤になって俯いて、今にも消え入りそうな様子だ。
「もう、あんた達の話はいい！　みんなだってあんな連中に居座られちゃ困るだろ！」
男は問いかけるように、ぐるりと周りを見渡した。何人かが賛同するように頷いている。
「ほらみろ！　お前らがいたら、また軍隊に酷い目に合わされちまう！」
「で、でも……わ、私達は……あの……」
どんどん男に攻め立てられて、マーヴェラ園長は完全に頭が真っ白（顔は茹でダコみたいに真っ赤なんだ）になってしまったようだ。もう見てられないとばかりにペッコリーナ先生がずずいと出てきて、メルメルとトンフィーはホッと胸をなで下ろした。
「――この町に残るレジスタンスの者は、今後絶対に国に逆らうような行動はしません！」
ペッコリーナ先生が大声で怒鳴ると、館内は一瞬静まり返った。
（町に残る者……）
それはつまり、残らない者もいるという事だろうか。メルメルは眉をひそめた。
「あなた方と同じように普通の生活を送ります。軍隊のしてきた要求もそのようなものです。今後、一切レジスタンスの活動を辞めるように求めてきたのですから……」
「軍隊に攻撃されたからって急に活動を辞められるのか！　だったら、何の為に逆らうような真似をしてやがったんだ！　自己満足か！　自己満足に人を巻き込むんじゃねぇよ！」
男が唾を飛ばしながら怒鳴ると、ペッコリーナ先生は顔を真っ赤にして怒鳴り返した。

「違うわ！　ここに残るのは、そもそも戦う意志はあっても、それがままならない人達だけよ！　残りの者は町を出て戦い続けます！」
「それじゃあ、今度は他の町に迷惑をかけに行くのか！」
ペッコリーナ先生が一瞬青い顔になり、男に怒鳴り返そうとしたその時、「そうだ！」と別の場所から声が上がった。メルメルが驚いてそちらを見ると、端の方にいた白髪の老婆がすっくと立ち上がるところだった。
「あんた達がレジスタンスなんてかっこつけて国に逆らったりするから、周りの人間が迷惑するんじゃないか！　あんた達のせいでこの子の旦那も死んだんだよ！」
老婆は隣に座った女性の肩をぎゅっと掴んだ。女性は顔を伏せて泣いているようだ。ペッコリーナ先生がその姿を見て何も言えなくなってしまったのを察して、古道具屋の男は今がチャンスとばかりに声を張り上げた。
「見ろ！　お前らの犯した過ちを！　これだけ人に迷惑をかけまくっておいて、それじゃあ他の町に住み替えます、はいさようならなんて、許されんのか！」
視界の片隅で、グッターハイムが溜め息を吐いて壁にもたれていた体を起こすのが見えた。メルメル達の立っている出口の方に向かって歩いてくる。何だかつまらなそうな様な、空しい様な顔をしているのを見て、メルメルは口をへの字に曲げた。
「だいたい、レジスタンスなんてくだらねぇ！　国を相手に何が出来るってんだ！　そんな意味のねぇ活動なんてやめちまえ！　それがこの世の為だろうが！」

「待ちなさいよ！」

一番後ろの方から聞こえてきた子供の怒鳴り声に、館内はシーンと静まり返った。トンフィーは、怒りの為に顔を真っ赤にした少女を隣で見つめながら、

（メルメルの声って、とっても良く通るな～）などと、何故か珍しく呑気な事を考えていた。

メルメルはずんずんと大人達の間を掻き分けて、びっくりたまげた顔で立ち尽くしている町長とペッコリーナ先生の間に割り込んでくるりと前を向いた。

「みんなは暗黒王のする事を認めてるの？　意味のない虐殺をしたり、命の石で無理やり死んだ人を兵隊にしたり、こんな平和な町にまでやってきて家を壊したり、りんごの木に火をつけたり。それは悪い事ではないの？　みんな……それは正しい事だと考えているの？」

館内は静まり返っていた。大人達は戸惑ったように、隣同士顔を見合わせたりしている。

「どうしてレジスタンスの人達を責めるの？　あの人達は悪くなんて全然ないわ。町を破壊したのは闇の軍隊よ？　レジスタンスの人達は一生懸命みんなを救おうとしたんじゃない」

まぁ確かにな、などと皆メルメルの言葉に頷いたりしている。

「だが、奴らが町にいなければ軍隊は襲ってきやしなかったんだ！」古道具屋が慌てたように叫んだ。

「だから……軍隊が来たから町は酷い目にあったのよ？　悪いのは軍隊――つまり暗黒王じゃない。どうしてレジスタンスのせいにするのよ。レジスタンスの人達だって大変なのよ？　町のみんなと同じように普通の仕事をしながら、その合間にも一生懸命正義の為に働いているの。この国に平和を取り戻したくて――」

「正義なんて誰が決めた！　俺達の暮らすような田舎町には、トキアの支配だろうが闇の王国の支配だろうが関係無かったんだ。十一年前の青暗戦争だって、どっちが正しくてどっちが間違ってるかなんてどうでも良かった。……この町が平和ならそれで良かったんだ！」

「そんな風に自分勝手を言うなら、なおさらレジスタンスの事を責めるなんて出来ないじゃない！」

年端もいかぬ少女の言葉に押されて、男はムッと押し黙った。
「平凡な日々を望むのはそんなに悪い事かい？　メルメルちゃん……」
メルメルは驚いた顔で声の主を見た。肉屋のラウルが寂しそうな目でこちらを見上げていた。
「あの男の言い方は良くないが――」ラウルはちらりと後ろを振り返って、古道具屋の顔を見た。
「考え方は俺も似たり寄ったりだ。正直、国に平和を取り戻したいとか、そんな大それた気持ちを抱いた事は今までないよ。俺の毎日なんてこうさ。
――朝は四時に起きて妻の入れてくれたコーヒーを飲みながら届いたばかりの新聞を読む。その後、結婚当時の体重により近付けようと妻と三十分程の散歩で無駄な抵抗をしたら、商ケースに並べる為の肉を切り始め、同時に惣菜のコロッケやらカツやらを揚げる。妻がそれらを並べ始める頃、必ずペッコリーナがコロッケかメンチカツを買って妻と二人で五分くらいお喋りをして園へと向かう。それを見送ったら、のんびりと一日店先に立って、園へ通う子供達を眺めたり、お喋り好きの奥さん達の相手をしながら夜七時には店を閉める。妻と一時間かけて店の掃除をしてから、みんなより少し遅めの夕食を食べ、やっぱりうちのコロッケは最高だと自画自賛しながら腹を満たし、最後は大好きなラムで一杯やる。時には酔っ払ってベッドにも入らないで居間で寝てしまうのだが、朝起きるとそんな俺の体には布団がちゃんとかけられていて、それだけで俺はなんとも嬉しい、幸せな気持ちになるのさ。そして、次の日も、次の次の日も同じような毎日を繰り返す……。
その生活の中に、闇の王国に対する怒りや戦う心など入り込んだためしが無い。俺はそんな毎日に満足している。平和というのは……そんなものじゃないのかい？」
ラウルの言葉に賛同するように、メルメルは何度も頷いた。
「そうよ。ワタシもそうだと思うわ。でも、ラウルさん、そうじゃ

ない町もこの国にはたくさんあるのよ。中には暗黒王に滅ぼされた町だってあるっていうわ……」

「その町は、おそらく暗黒王に逆らうような事をしたんじゃないかい？　逆らわず大人しくしていればそれなりの平和は得られるさ。そりゃあ、暗黒王ってのは多少悪い奴なのかも知れないが、国を支配している連中なんてみんなそんなものだろう。所詮、俺達には遠く離れた分かりっこない世界さ」

「そ、そんな風に諦めちゃダメよ……」メルメルは悲しげな顔をして、首を横に振った。

「諦めている訳じゃない。それで良いと思っているんだよ。……メルメルちゃん、レジスタンスの人達は暗黒王を倒したいのかい？」

ラウルが首を傾げながら聞くと、メルメルはパッと顔を上げ、瞳を輝かせて頷いた。

「そうよ……！　平和な国を取り戻す為に――」

ラウルは手を上げてメルメルの言葉を制した。

「でも、俺達は今だって十分平和だと感じているんだ。それなのに、勝手に国の平和なんてお題目を掲げるのはおかしくないかい？　……そりゃあ、暗黒王に酷い目に合わされている町もあるのかも知れない。可哀想だとは思うが、人の町の事まで考える余裕はないよ。普通の人は自分の暮らしに一生懸命で、そんな、他人の生活まで考える余裕はないと思うな。逆に、そんな風に世界の平和を思って正義の為に国と戦っている気になるなんて、少し傲慢な考え方の様な気さえするよ。……実際ここには、それを望んでいない人間がいるんだから」

メルメルはギュッと拳を握りしめ、涙で瞳を潤ませながらラウルを見つめた。

「そんな……。でも、それじゃあ、レジスタンスは――」

――ラインさんは――

「ただ、自分勝手に戦ってきたって言うの？　誰も望んでいない平和を――ご、傲慢な気持ちだけで――」

メルメルの頬を涙がつたって、ラウルは困った様に頭を掻いた。
古道具屋さえも、やれやれといった顔で苦笑いしている。
（泣いちゃダメなのに……）
泣いてはただの子供のわがままの様になってしまう。ちゃんと自分の気持ちを伝えられないで終わってしまう。しかし、メルメルはどうにも涙を堪える事が出来ないのだ。
「本当に意味の無い事だったの……？　ただの迷惑だったの……？　それなら――」

「私はそうは思わないよ！」

館内に響き渡った大きな声に、その場にいる全員が一斉にそちらを見た。
「おばちゃん……」
ラウルの斜め後ろの辺りに、チムニーのママが仁王立ちで立っていた。
「私は彼らの――レジスタンスとかいったかしらね？　――レジスタンスの人達が間違った事や自分勝手な事をやってるなんて、これっぽっちも思わないよ！　あんたたちは――」そう言って交互にラウルと古道具屋を見た。「自分がちょっと正義感に欠けてるからって、他の人間のやっている正しい行いまで責めちゃいけないよ」
古道具屋は怒りで顔を真っ赤にしたし、ラウルさえもムッとして何か言い返そうと口を開きかけた。
「おっと、言い訳は聞きたくないよ。まぁ、そうは言っても私だってあんた達とおんなじだよ。日々の暮らしをなげうってまで、正義の為に戦う度胸なんてないんだから。だけどさぁ、こんな小さな子が一生懸命――レジスタンスの人達は頑張ってるんだ！　平和の為に戦ってるんだ！　って訴えてんだよ？　それを、傲慢な考えだとか自分勝手の自己満足だとか……。大人がそんな風に言い返して、恥ずかしくないのかい？」

ラウルと古道具屋はしょんぼりと（だって、二人共恥ずかしくなっちゃったんだ）俯いた。

「あたしの娘は、このメルメルと、それから――死んじまったんだけど、レジスタンスの女性に命を助けられたんだよ。娘を家の中にかくまって、自分は軍隊と戦って死んじまったらしい……。ダンナだってそうさ……。ねぇ、あんた？」

チムニーのママは隣であぐらをかいていた亭主の肩を、バンと叩いた。

「お、おう」チムニーのパパはすっくと立ち上がり、何故か、えへんと胸を張った。「そうさ！　俺はレヂスタンスのマリンサさんって人に助けられたんだ！　もしもあの人がいなきゃあ、今、俺にはこの二本のなが～い足は付いちゃいなかったろうよ！」

そう言ってチムニーのパパはその場でピョンピョンと跳ねて見せた。チムニーのママは調子にのるなと亭主の頭を叩いて座らせた。

「二人の事を、命懸けでレジスタンスの人は守ってくれたんだ。それが傲慢な事かい？　自己満足で出来る事かい？　――この人が家族の次に大事にしていたりんごの木は、もうほとんど燃やされてしまった。ダンナもあたしも悔しくて悔しくてしょうがない……」

チムニーのパパは、肘が地面に着くほどにガックリと肩を落とした。

「でも、それはレジスタンスの人達が悪いんじゃない。軍隊の奴らが、自分達の力を思い知らせる為にやったんだ。なんて酷い奴らなんだろうね……。許せないよ。人をたくさん殺して、町に火を付けて……。あたしは軍隊が憎いよ。暗黒王が憎い……」チムニーのママは深い溜め息を吐いた。「本当はずっと前から分かってたのさ。暗黒王は悪い奴で、あっちこっちで苦しんでる人もいるし、それこそハルバルートの都なんて酷い有り様らしいって。でも、そういう事を真剣に考えたり取り組んだりするのは大変な努力が必要だし、私はしんどい思いをするのが嫌で、見て見ぬ振りをしてただけなんだ。どっか他人ごとに考えてたんだよ。自分の国の事なのにさ。だ

からほったらかしにした分、そのツケが一気に回って来ちまった」
チムニーのママは、ぐすん、と隣で鼻をすする亭主の頭を優しくポンと叩いた。
「自分が嫌で逃げていた事と、しっかり向き合って戦い続けてた人達を責めちゃ駄目だよ。一緒に戦う勇気が出なくても、せめて、――有難う、頑張ってって言ってやらなきゃ……。そうだろう？　みんな……」
そうだ、その通りだと頷きあう人々。その中には、すすり泣くような声も混じっている。だが、もう誰からもレジスタンスを責めるような言葉は出て来なかった。メルメルは堪えられず声を上げて泣き出した。
「わ～んわんわん！　――あ、ありがとう、おばちゃ～ん！」
どっと館内は笑い声に包まれた。そのうちには拍手さえ起こり、町長もマーヴェラ園長もホッと胸をなで下ろした。ペッコリーナ先生はギュッとメルメルの肩を抱き寄せた。
「ありがとう……メルメル……頑張ったわね……ぐすっ……」
町長は力強く頷き、改めて大きな声で人々に語りかけた。
「それじゃあ、皆……。これからきっと苦しい時代を迎えるだろう。だが、希望を捨てずに頑張って行こうじゃないか！　諦めずに戦う人々がいるのだから！」
体育館は、割れんばかりの歓声と拍手に包まれた。

七色の勇者　12

トンフィーと二人で、散会して去っていく人の流れに乗って歩いていると、突然肩を叩かれ、メルメルはくるりと後ろを振り返った。
「……ラウルさん」
肉屋のラウルが苦笑いを浮かべて立っていた。
「メルメルちゃん……さっきは悪かったね。大人げない事ばかり言ってしまった」
「ううん。ワタシだってラウルさんと同じだもの。この間までレジスタンスなんて知らなかったし、暗黒王なんて興味なかったもの」
メルメルが顔の前で大きく手を振ると、ラウルは、――そうか、と笑った。
「なんだか、大変な事になっちゃったなぁ。……そう言えば、メルメルちゃん達はレジスタンスのメンバーなのかい？」
「……え？　違うわよ。どうして？」
メルメルのキョトンとした顔を見て、ラウルは再び笑った。
「だよな。まだちっちゃいもんなぁ。……さて、俺達もこれからは呑気にしてられないぞ！　お互い闇の軍隊なんかに負けずに、明るく元気に暮らして行こうな！　――困った事があったらいつでも言ってくれよ」
「え……？　あ、うん！　ありがとう……」
メルメルは、手を上げて去っていくラウルの背中をぼんやり眺めていた。
「……る。……メルメル！」
「あ、な、なにトンフィー？」
メルメルははっと我に返った。余りにぼんやりとしていて、呼びかけられていた事に気付かなかったらしい。
「ほら、あれを見て……」
トンフィーの指差した先に目をやると、何やら深刻そうな顔でペ

ッコリーナ先生が廊下の角を曲がるところだった。
「ペッコリーナ先生だわ」
「町長とマーヴェラ園長も一緒だったよ。少し……気にならない？」
メルメルが頷いて、二人はそちらに向かって歩き出した。
「あれ？　いないわ……」
角を曲がると、もうどこにも人影はなくなってしまっていた。メルメルが首を傾げながら進んで行くと、横を歩いていたトンフィーが急に立ち止まってしまった。
「どうしたのトン――」
「しっ～！　……」
トンフィーは人差し指を自らの口に当てる。そして、目の前にある教室のドアに耳をピタリとつけた。メルメルはなんだかドキドキしながら、トンフィーの真似をしてドアに耳を押し当てた。
すると、部屋の中から人の話し声が聞こえてきたのだ。
「……だったな。あの子のおかげで助かったよ……」
町長の声だ。
「本当ね。心の優しい子だわ……」
とペッコリーナ先生の声。
「それにしても町長……迷惑ばかりでごめんね。こんな酷い事になるなんて……」
マーヴェラ園長の声だ。
「何を言ってるんだマーヴェラ。結局私は大した事はしてやれなかった……」
「そんな事ないわよ町長。十一年前のあの時、もしもあんたが受け入れてくれなけりゃあ、私達は行く場所もなく疲れ果てて死んじゃったかも知れないんだから。あんたには本当に、心から感謝してる」
「私は――実はあの時、とても嬉しかったんだ。お嫁に行ってしまって何十年も前に町を出て行った君が、この町や私の事を覚えてくれていて、頼りにしてくれた事がね」
「町長……」マーヴェラ園長は涙声だ。

「だが、結局こんな風になってしまって……。これから、どこに行くんだ？　あてはあるのか？」

町長は心配そうに言った。

「う～ん。まぁ、なんとかなるわよ」マーヴェラ園長の声は頼り無げだ。

「やはり、この町に全員が残れるように、軍隊と交渉してみた方が――」

「駄目よ町長。それは無理よ。……気持ちは嬉しいけどね」マーヴェラ園長は鼻をすすり上げた。

「そうよ。そんな事をしたら、またこの町に迷惑をかけるような事になりかねないわ。――大丈夫。レジスタンスの隠れ家はたくさんあるから、住む場所くらいなんとかなるわ」

ペッコリーナ先生が明るく言った。

「ペッコリーナ先生！　町を出て行っちゃうの？」

突然、ドアを勢い良く開け放ってメルメルが叫んだ。中にいた大人達は目を丸くした。トンフィーはメルメルの隣で、耳を押し当てた姿勢のまま固まってしまっていた。

「め、メルメル、トンフィー……あなた達……」

唖然として呟いたペッコリーナ先生のもとにメルメルは駆け寄り、その花柄のシャツを掴んだ。

「ねぇ先生……。出て行っちゃうの？　どうしてよ」

「メルメル……」

ペッコリーナ先生は困ったようにメルメルの頭を撫でた。

「出て行くしかないのさ。ペッコリーナが町に残るのなんて絶対許されないんだからな」

「――グッターハイム！」

いつの間にか、ドアの外にグッターハイムが立っていた。

「……どうしてペッコリーナ先生は残ってはダメなの？」メルメルは口を尖らせた。

「町長。軍からの手紙を出してくれ」グッターハイムが歩み寄って、

町長に向かって手を差し出した。
「え？　あ、ああ……」
グッターハイムは、町長がポケットから出した手紙を受け取り、数枚あるうちから二枚を選び抜いてメルメルとトンフィーの方に差し出した。
「グッターハイム……何もこの子達に見せる事はないわよ」
眉根を寄せて言うペッコリーナ先生を無視して、グッターハイムはメルメル達の手に手紙を押し付けた。
「そこには、この町と隠れ家にいる全てのレジスタンスの名前が書かれている。一人残らず名前まで正確にな」
トンフィーは二枚の手紙を交互に見ながら頷いた。
「敵は、ブラッドさんから細かく報告を受けてたんでしょうから、当然ですね。――二枚に分けられてるのは、町に残る事を許された者とそうではない者ですか？」
トンフィーがきびきび言って、町長とマーヴェラ園長は驚いたように顔を見合わせた。
「その通りだ。片方の紙に書かれているのは力のない者達ばかりで、連中にとっては、要するに害のない人間と言える。それでも町の者でしっかり見張るよう命じてきてはいるが」
「なるほど……。じゃあ、こちらが出て行くように命じられた人達ですか。グッターハイムさんやペッコリーナ先生の名前が書かれている。ニレさんの名前も」
トンフィーが言って、グッターハイムは大きく頷いた。
「そう。隠れ家にいた者全員の名前と、町にいた力の強い者達――つまり連中にとって厄介な人間の名前が書かれている。だが、軍隊が命じてきたのは町を出ろなんて生易しい事じゃない。連中は、町の者に俺達の首を取って来いと命じてきたのさ」
「く、くびっ？」メルメルは目を丸くした。
「勿論大人しく差し出す訳にはいかないからな。俺達は首を取ろうとしてきた町の者に追われたが、その手を逃れていなくなってしま

った。――そういう事にでもさせてもらう」
　メルメルが悲しそうに見上げると、ペッコリーナ先生は仕方ないのよ、と言って笑った。
「メルメル、トンフィー……。私がいなくなっても、おさぼりしないでちゃんと勉強するのよ？」
　メルメルは返事をせずに、口をへの字に曲げた。その顔を見てペッコリーナ先生は困ったように微笑んだ。グッターハイムは目を細め二人の子供をじっと見つめている。その時突然、一人考え込むように俯いていたトンフィーが、パッと顔を上げた。
「……僕も一緒に行っちゃ駄目でしょうか？」
「と、トンフィー！」
　ペッコリーナ先生が悲鳴を上げ、グッターハイムはにやりと笑った。
「一緒に来るのは構わんが、一つ条件がある」
「グッターハイム！」ペッコリーナ先生が咎めるように叫ぶ。
「どんな条件ですか？」動じる事なくトンフィーが言った。
「レジスタンスに入る事だ」
　グッターハイムが言うと、トンフィーは迷い無く頷いた。
「入ります」
「トンフィー！　――グッターハイム！　あたな何を考えて――」
「うるさいぞペッコリーナ。今更こいつを子供扱いするのか？　下手な大人よりよっぽど使い物になると、お前が一番良く分かっているだろう」
「そんな……だからって――」
「ペッコリーナ先生」
　駄々をこねるように首を振っていたペッコリーナ先生は、妙に静かなトンフィーの声を聞いて、はたとその動きを止めた。
「ペッコリーナ先生、もう決めたんだ。町を出て、レジスタンスに入って……僕、強くなりたいんだ」
「どうして……」

ペッコリーナ先生は半ば呆然として呟いた。メルメルは、ここのところ時折見せる大人びた表情をしたトンフィーの横顔を、じっと見つめた。

「強くなって、いつか母さんを倒したいんだ」

ペッコリーナ先生は青くなって叫んだ。「と、トンフィー！　そんな事――」

「ラインさんは――」

思わずペッコリーナ先生が黙り込んでしまうと、トンフィーは辛そうに眉根を寄せた。

「――ラインさんは、いずれ母さんを倒すと言っていた……。母さんの為にそうするべきだと言っていたし、僕もその通りだと思ってる。それに、自分の罪を償いたいという気持ちもあるし、何よりあいつらから母さんの体を取り戻したい……。ラインさんの代わりに。――いや、初めから僕がやるべき事だったのかも知れない」

ペッコリーナ先生はもう何も言えずに、ただ、辛い経験のせいでやけに大人びてしまった少年の顔を、寂しげに見つめていた。

「もう、異論はないなペッコリーナ？」

グッターハイムの問い掛けに、ペッコリーナ先生は返事の代わりに諦めたような深い溜め息を吐いた。

「さて、と。それじゃあ……トンフィーは俺達と一緒に行くとして――」

「ワタシも一緒に行くわ」

メルメルが言って、ペッコリーナ先生は再び深い溜め息を吐いた。

「だって、おじいちゃんを助け出したいもの……」

メルメルはまるで言い訳するように付け加えた。別にそれは本当の気持ちだったが、理由はそれだけではなかった。

町に戻ってからずっと、メルメルは考えていたのだ。このまま何食わぬ顔で以前のような生活を送れるのか、と。考えて、考えぬいて、それは無理だと気付いた。

たとえ、もしプラムじいさんが帰ってきていたとしても、もう心

からは穏やかで楽しい毎日は送れなかっただろう。メルメルの中で暗黒王に関わる全ての事が、「他人事」ではなくなってしまったのだから……。こんなに早く決断をする事になるとは思わなかったが、トンフィーやペッコリーナ先生が直ぐにも出発してしまうのに、自分だけぐずぐず迷っている訳にはいかなかった。

「……分かった。それでは、お前達にはこれをやろう」

グッターハイムが嬉しそうに懐から何かを取り出し、トンフィーに渡した。

「これ……」

それは変わった形をした「笛」だった。メルメルとトンフィーは一度だけ見た事がある。

「ラインの物だ。形見――というか、な。トンフィー、お前がラインの意志を継いで母親を打つ気なら、その励みにでもしてくれ」

「は、はい……」

トンフィーは手の中に渡された笛をじっと眺めている。その横で、同じように笛を見ていたメルメルの視界に、突然ぬっと剣の柄が差し出された。驚いてそちらを見ると、グッターハイムの差し出した剣の柄には、青く光る美しい石が埋め込んであるのに気付いた。

「カルバトの剣……」

「折れてしまった様だが、ちょっとした鍛冶屋に持っていけば、ちゃんと新しい刃をつけてくれるだろう。例えカルバト族の作った物じゃなくとも、命の石のおかげでそこいらの剣よりはましな物になる筈だ。いずれ役に立つ。持っていろ……」

頷いて剣を受け取ろうと手を伸ばすと、グッターハイムは何故か、すっと剣を引っ込めてしまった。一体どうしたのかとメルメルは眉をひそめた。

「……これをやるには、条件がある」グッターハイムがポツリと言った。

「条件？　……ああ。分かってるわよ。レジスタンスに入れって言うんでしょ？」

「それはそうだが、お前にはもう一つの条件がある」
「もう一つ？」メルメルは首を傾げる。
「……いや。条件なんておこがましい言い方だったな。――是非とも、メルメルにお願いしたい事があるんだ」
「お願いしたい事？」メルメルは更に首を捻った。
――一体、自分のような子供に何を頼みたいのというのか？
「レジスタンスのみんなに、お前が七色の勇者だと発表させて欲しいんだ」
「え……」
メルメルは思わず言葉を飲み込んだ。ペッコリーナ先生や他の皆に助けを求めるように視線をさ迷わせる。しかし、誰も何も言わずにメルメルの顔を見つめ返してくるだけだった。どうやらマーヴェラ園長達もすでに話を聞いているようだ。
「だ、だけど本当にワタシが勇者なのかどうか分からないし……」
「メルメルは勇者だよ」
根拠があって言っているのかどうかは分からないが、何故かトンフィーが断定的な言い方をした。ところが、ペッコリーナ先生でさえそれを否定しようとしないのだ。戸惑うようなメルメルに、グッターハイムは軽く頷いた。
「本物かどうか……その検証は難しい。だが、今確実なのはレジスタンスには七色の勇者が必要なのだという事だ」
それはそうだろうが、だからこそ余計に期待されても困ってしまうし（だって、もしも間違いだったらみんなに怒られちゃうと思ったんだ）そんなに慌てて発表する必要ないとメルメルは思うのだ。
そんな事を考えて黙り込んでいると、グッターハイムは弱ったように頭を掻きむしった。
「お前のプレッシャーになっている事は分かってる。だが、心の準備を整えている暇はない。お前には是非とも直ぐに、レジスタンスの希望になって欲しいんだ」
「希望って、そ、そんな事言われても――」

メルメルは顔を赤らめて首を横に振った。なんだか額に汗まで浮かんできてしまった。

「メルメル――」グッターハイムは、ぐっとメルメルの肩を掴んだ。

「今、レジスタンスはラインという希望を失って、戦う意欲を無くしかけている。――参ったよ。なるほど、敵の狙いはこれだったかという感じさ……。あとであいつらに会えば分かる。このままだと、レジスタンスは終わっちまいそうだ。……リーダーの俺がそんな事言っては駄目か？　――だが、俺はヤツらに希望をもたらすほどの力はないんだ。――もともと、リーダーだって本来ならラインが務めるべきだったんだ。あいつがその気になるまで、俺は一時的にその役を預かっていただけのつもりだったんだよ。俺は……リーダーなんかの器じゃない……」

メルメルは驚いたようにグッターハイムを見つめていた。彼の顔が、まるで泣きそうに歪んでいたからだ。

――もしかしたら、誰よりも希望を欲しているのは、彼なのかも知れない。

「頼むメルメル……。俺達の希望になってくれ……」

メルメルはきつく瞼を閉じた。

グッターハイムは揺れる瞳でその顔を見つめていた。そして、閉じられた瞼が開き、そのキラキラと輝く瞳が現れた時に、やはりこの少女が七色の勇者に間違いないと確信したのだった。

「――分かったわ。ラインさんの変わりに、これからはワタシがレジスタンスの希望になるわ」

グッターハイムは深く深く頭を下げ、ありがとうと呟いたのだった……。

七色の勇者　１３

その部屋はとても重苦しい空気に包まれていた。ざわつく人々の中には涙を流している者や、がっくりと肩を落としてうなだれた者がいる。

――第一部隊は女性が多い。

以前誰かがそう言っていたが、確かにその通りだった。教室にいる八割が女性で、皆若く、逞しい体をしていた。子供達が座るように作られた椅子や机はやや小ぶりで、屈強な戦士達が使っているとなんだか少し滑稽だった。しかしそんな彼女達も、今敵に襲われたら一発でやられてしまうのではないかと思われるほど覇気がなく、意気消沈してしまっていた。

グッターハイムに連れられてメルメル達が部屋に入った時、何人かは顔を上げ一体誰の子供なのかというような顔で首を傾げたが、いずれにしてもそれ程興味を抱いた様子はなかった。グッターハイムはちらりとメルメルに視線を送った。

――な？　だから言っただろう。これが希望を失ったレジスタンスの姿だ。

そんな、目だった。

教壇の上にグッターハイムと並んで立つと、さすがに皆の視線が集まってきてメルメルは少し緊張してしまった。そばに控えたトンフィーやペッコリーナ先生の方を見ると、二人は大丈夫だというように大きく頷いてくれて、それで少し安心仕掛けたところで、グッターハイムが皆に大きな声で呼びかけた。

「みんな聞いてくれ！」

ざわめきが収まっていよいよ注目されると、ドキドキとメルメルの心臓は高鳴ってくる。隠れ家で一応顔を合わせた者もいるが、メルメルにとってはほとんど知らない人々といった感じで、苦境に立たされた彼らの厳しい目つきにやや萎縮していると、その中に穏や

かで優しいニレの顔を見つけて、メルメルは思わずホッとした。ニレはどうやらグッターハイムの思惑に気付いているらしく、なにやらそわそわと期待を膨らませている様子だ。

「いくつか発表する事があるんだが、まずは、町の者との話し合いの結果、一部の仲間が町に残る事を許された事を伝えておく」

グッターハイムの言葉に、おお……とわずかだが喜ぶ声があがった。

「良かったですね。町の者は軍隊に襲われたのをレジスタンスのせいだと思っている様でしたから……」

一番前に座った大柄な女が言った。波打つ長い黒髪が印象的だ。メルメルとトンフィーは一度、彼女に隠れ家で会っている。

――確か名前は……、

「その通りだマリンサ。実はかなりもめたんだ。出て行けと言う者もいたよ」

グッターハイムが言うと、あちこちから不満そうなうめき声が聞こえてきた。

「出ていけだなんて……。町の者を守って命を落とした者もいるのに……」

「連中はどうせ人任せなのよ！」

「そうそう。自分は何もしないで、何か不都合があれば人のせいにしてさ」

「挙げ句には必死で戦う我々の事を、勝手に好きで戦っているだけだなんて言うのさ」

「まったくだ！　なんだかバカらしくなってきたわ。誰も分かってくれないのに、命をかけて戦うなんて――」

「そんな事ないわ！」

口々に不満を言うレジスタンス達に、メルメルは堪えられずに叫んでいた。

「分かってくれている人もいたわ！　それに、最後はみんな納得してくれたもの」

訴えかけるように言う少女に、一同はキョトンとした顔になった。

グッターハイムが、こほん、とわざとらしく咳をした。

「そうさ……。町長やマーヴェラ、それに――」グッターハイムはメルメルの肩に手を乗せた。「このメルメルのおかげでみんな納得してくれたんだ。おそらく、もうレジスタンスに悪意を持っている町の者はいないだろう」

「ほ、本当ですか？」

先ほどまでの町の者の態度を考えて、皆驚いてしまったようだ。

そして、自分達のリーダーの隣に立っている少女に初めて強い関心を抱いた。メルメルは、自分がトンフィーのように耳まで赤くなってはいないかと心配になった。

「あの……リーダー、その少女は……」　マリンサが眉をひそめて呟いた。

「この少女はプラムの孫だ」

「ああ……。確か、さらわれてしまったとか……」マリンサは少し憐れんだ目でメルメルを見た。

「それに――」

グッターハイムが言いかけた時、ニレの横に座っていた、歯の出た小さな男が急に立ち上がった。

「リーダー！　わ、私はニレから聞きました。そ、その少女と共にプラムさんを助けに行って……ラインさんは、命を落とした、と……」

一気に室内がざわめきに包まれた。グッターハイムは頭を掻きながらうめいた。

「フーバー……。まぁ、確かに、その通りなのだが――」

「どういう事ですかリーダー！　説明して下さい！」

「そうですよ！　私達はラインさんの死について、詳しい話をまだ聞かされていないんですよ！」

「いや、だから、それは――」
不満の声をあげる人々に、グッターハイムはもごもごと何か喋ろうとはするが、誰一人話を聞こうとはしない。
「一体どんな相手にやられたんですか？」
「よっぽど腕の立つ者か……それとも何かの罠にでもかかったとか……」
「そ、それより本当にラインさんは死んだんですか？　――私には信じられない！」
「確かにそうだ……あのラインさんが死ぬなんて……」
「ううー！　そ、そうよ～！　何かの間違いよ～！」
騒ぎ出してしまった人々を鎮めるように、グッターハイムは両手を広げた。
「ま、待てお前達……まずは俺の話を――」

「本当にラインさんが死んでしまったのなら、もうレジスタンスはおしまいよ！」

ある者が叫んだこの言葉に、室内は一変で静まり返ってしまった。しばしの沈黙の後、しくしくとあちこちで泣き声が聞こえ初めてきた。グッターハイムは、とことん参った顔でバリバリと頭を掻いた。
「リーダー……。これもニレから聞きましたが……。実はラインさんは、ホラッタ婆さんの占いによって、事前に死んでしまう事が分かっていたのにも関わらず、自らの意思でカルバトの塔に向かったとか……」
再び、歯の出た男――フーバーが言うと、室内はまたまたざわめきだした。
「そ、そんなバカな……」
「何故、死ぬと分かっていて行ったりするのよ」
「もしかしたら、ラインさんは死んでしまっても、構わないと考えていたんじゃないか？」

「な……そ、それはどういう意味だい？」
「つまり、ラインさんは生きる事が嫌になっていたんじゃないかしら？　勝てるあてのない戦いを続けて行く事に、虚しさを感じていたとか」
「なるほど……」
「確かに。国を相手にいくら頑張っても虚しい気もするものねぇ」
「ラインさんは、きっと諦めてしまわれたんだ。生きる事さえも……」
「それどころか、自ら死を選んでしまわれたのかも知れないぞ」
「そんな事……。いや、もしかしたらそうかもな……」
勝手な事を言って納得し始めている人々に、グッターハイムは呆れ顔で溜め息を吐いた。
「まったく……どうにもならんなこれじゃあ……」
「リーダー……。まさか、皆の言っているのは事実なのですか？」
マリンサが疑うような目で言うと、グッターハイムは更に深い溜め息を吐いた。
「マリンサ……。副隊長のお前までそんな事を言ってくれるなよ」
「それなら真相を教えて下さい。皆もこのままでは納得しませんよ」
「う～む」グッターハイムは腕を組んで唸った。

「あなた達は、ラインさんの事を何も分かっていないのね」
「……なに？」
グッターハイムの隣でポツリと呟いた少女に、マリンサは怪訝な顔を向けた。
「ラインさんは自分から死を選んだりはしない。生きる事を投げ出したりしないわ」
「知った風な事を言うな小娘。お前に何が分かるって言うのさ」
マリンサの隣に座った女が不愉快そうに言った。男のように髪を短く刈り上げている。

「あなた達が分かっていなさ過ぎるのよ。真相なんてわざわざ聞かなくても、そんな事くらい分かるわ。長い間そばにいたくせに、一体ラインさんのどこを見ていたのよ」

「なにぃ！」

噛みつかんばかりに身を乗り出した女をマリンサは手で制し、少女の目をじっと見据えた。少女は強い眼差しで、そんなマリンサの目を見つめ返してきた。

「……では、死ぬと分かっていて、何故ラインさんがカルバトの塔に向かったのか、お前には分かるのか？」

「……分かるわ」

「この……小娘が……」マリンサの隣で女が顔を赤らめて、唸るように言った。

「ラインさんは死ぬと分かっていても、精一杯生き抜く為にカルバトの塔に向かったのよ」

マリンサは目を細める。「精一杯、生き抜く為……？　どういう意味――」

「あんたみたいな子供に何が分かるのさ！　適当な事を言って誤魔化してるだけだわ！　精一杯生き抜くも何も、ラインさんは死んじまったじゃないか！」

「落ち着けキーマ。……リーダー、何のつもりでこの少女をそこに立たせているか知りませんが、言い争うのは後にしましょう。まず、町を出てからの行き先だけは決めておかないと。明日の朝までに我々はこの町を出なければなりません」

「うむ……そうだな……」

グッターハイムは仕方なく頷いた。確かに、時間に余裕はないのだ。

「ラインさんの死についての真相も、今後レジスタンスをどうするかについても、簡単に済ませられる話ではなさそうですから」

マリンサの言葉に、グッターハイムは苦い顔になった。

「今後レジスタンスをどうするかについてか……。随分含みのある

言い方をするんだな」
「リーダーだってお気付きでしょう？　……ラインさんを失って、今後皆が戦い続ける事が出来るのかどうか……」
「マリンサ……。副隊長のお前がそんな事では駄目だろうが」
「分かっています……。しかし、この度の事は、あまりにも……。レジスタンスの存続は……いや、少なくとも第一部隊は隊長を失ってしまったのですから……。このまま続けて行く事は――」
「あなたが隊長になればいいじゃない」少女が軽い口調で言った。
「……」
ギロリとマリンサは少女を睨みつけた。さすがに腹を立てたという顔付きだ。
「あなたは副隊長なんでしょう？　隊長がいなくなってしまったのなら、あなたが隊長をやればいいわ」
「いい加減にしろ娘……。そんな簡単な話ではない」
「そうよ！　あんた、子供だからってなんでも言って許されるわけじゃないよ！」
マリンサの隣の女が再び身を乗り出したが、もうマリンサは抑えようとはしなかった。
「あなた達の方がよっぽど子供みたいだわ。ラインさんが死んでしまってどうしよう。ラインさんがいなくなってしまっては戦えない。もう終わりだ、諦めるしかない……って。ラインさんがいないと何も出来ないの？　それこそ、誰か何とかしてくれって駄々をこねてる子供みたいなものじゃな――」
パーン！　とメルメルの頬が小気味良い音を立てた。少しざわついていた室内は、それで一気に静まり返ってしまった。

七色の勇者　１４

叩いたマリンサは思わず自分の手を見つめ、自らのとってしまった行動を恥じて直ぐに誤ろうと口を開きかけた。しかし、殴られた少女の驚く程静かな目を見てはっと息を飲んだ。

「あなた達が今まで戦ってきたのは、自分の意志ではないの？　ラインさんに戦えと言われたから戦っていた訳ではないでしょう」

「……」

マリンサは呆然と少女を見つめた。

「マリンサ……。お前が無理だと言うなら、今後第一部隊の隊長は俺が務めようと思う」

メルメルと同じように静かな口調でグッターハイムが言って、マリンサはようやく少女から視線を外し、そちらを見上げた。

「……レジスタンスのリーダーと部隊長を兼任するんですか？」

「いや。俺に変わって、これからレジスタンスのリーダーは、この――」

グッターハイムはメルメルの肩に手を回して、ぐっと引き寄せた。メルメルはその手の平が異常なほどに熱を持っている事に気付いた。彼も、本当はかなり興奮しているのだ。

「――メルメルが務める事になる」

室内にいる大人達は皆、ポカンと口を開けた。トンフィーやペッコリーナ先生、それに言われた本人すらも驚いてグッターハイムの顔を見た。グッターハイムはしれっとした顔をしていて、その様子から、勢いで言った訳ではなく初めからそういうつもりだったという事が窺えた。

「困った人だわ……」

思わずペッコリーナ先生が呟いた小さな声は、隣にいたトンフィーの耳にだけはしっかりと届いていた。

（め、メルメルがレジスタンスのリーダー？）

「な、何を言ってんのよリーダー！　冗談にもほどがあるわ！」
マリンサの隣にいるキーマと呼ばれた女が叫ぶと、周りの人間もまるで金縛りが溶けたかのように騒ぎ出した。
「な、なんだ冗談か……」
「あ、当たり前じゃない！　ちょ、ちょっと驚いちゃったけどね……ハハ」
「そりゃあそうよ。まさかあんな子供にリーダーをやらせる訳がない」
「アハハ……そうよねぇ。そんな事になったらレジスタンスはおしまいよね～」

「――俺は本気だ」

冗談だと決めつけて笑い合う人々に、グッターハイムはにこりともしないで言った。
「これからは、メルメルがレジスタンスのリーダーを務める！」
皆笑いを引っ込めて改めてメルメルの顔を見た。何の変哲もない子供だ。あまり似つかわしくないような、大きな剣を腰に二本ぶら下げてはいるが、まさかあれを振り回して戦うようにはとても見えない。
「なんのつもりなのリーダー！　私達をバカにしてんの！」キーマはヒステリックに叫んだ。
「バカになどしていないさ。真剣に考えて出した結果なんだ」
「し、真剣にって……」キーマは言葉を失った。
「リーダーはもう、レジスタンスを投げ出すつもりなんだ……」
隣でフーバーが呟いて、ニレは慌てて手を振った。
「ふ、フーバー。そんなんじゃないさ！　リーダーにはちゃんと考えがあって――」
「どう考えたら、あんな子供を自分の代わりにリーダーにするってんだよ！　要するに……リーダーも戦う事を諦めちまったんだ！」

「そういう事ね」フーバーに賛同するように誰かが言った。
「ラインさん抜きで闇の軍隊と戦っても無駄だと思って、リーダーを辞めたくなったんだわ！」
この言葉に賛同するような声が、あちこちで上がった。
「もう終わりだわ……レジスタンスは……」
「一体……何の為に戦って来たんだ……」
人々の嘆き悲しむ声を聞いて、トンフィーはオロオロとメルメルの顔を見た。当の本人は特に動じた風もなく、女副隊長と何故か無言で見つめ合っている。
「マリンサ！　マリンサからも何とか言ってちょうだいな！」
キーマが苛立ったように叫んだ。しかしマリンサはメルメルから視線を外さず、何かを推し量るようにその瞳を見つめ続けている。メルメルの方も同じで、その厳しい目を受け止め続けていた。
キーマは見つめ合った両者を交互に見て、小さく舌打ちした。メルメルの顔をキッと睨み付ける。
「小娘！　あんたはどうなのよ！　まさか、自分がリーダーにふさわしいなんて考えてないだろうね！」

「……わからないわ」

マリンサから目を離さず、静かな声でメルメルがそう答えると、キーマはふんっと笑った。
「宿題の答えを聞いてんじゃないよ！　分からないで務まると思って――」
「分からないけど――」言って、ようやくメルメルはマリンサからキーマへと視線を移した。「あなた達よりはマシかも知れないわ」
キーマは一瞬ポカンという顔になった。それがみるみるうちに茹で蛸のように赤くなる。
「こ、こ～む～す～め～……！」

「だって、ワタシは諦めたりしないもの」

女性としてはちょっといかめし過ぎる顔のキーマが赤鬼のように怒る様はかなり恐ろしい。トンフィーあたりならば腰を抜かしそうな程だ。しかし、メルメルは全く怯む様子もない。

「ワタシは、希望を捨てたりしない。前に進む事を辞めたりしない。だって……だって、ワタシはまだ生きているんだもの」

――また、あのキラキラした目だ。

メルメルのあの目は、何かを期待させる様な、不安な気持ちを吹き飛ばしてくれる様な輝きを放っているのだ。トンフィーは思わずにこりと笑った。

「ワタシはこの町が大好き。おじいちゃんが大好き。ラインさんが大好き。それを奪っていく闇の軍隊が――暗黒王が大嫌い」

カタリ……とマリンサが無言で椅子に座った。もうメルメルに対して、探るような目付きはしていなかった。穏やかとさえ言える様な顔をしている。

「可哀想なキメラや悪魔の兵隊の為にも、きっと暗黒王を倒さなきゃダメなのよ。だからワタシ、戦う事に決めたの。大好きな人達の為にも、今はそれしか出来る事を思い付かないから。ワタシは出来る限り精一杯、一生懸命生きるって決めたの。そう――」

メルメルは言葉を区切り、輝く瞳で虚空を見つめた。

「ラインさんのように」

キーマがふらりとよろけて、ガタッガタッと体を投げ出すように椅子に座りこんだ。そのうち肩を震わせて嗚咽を漏らし始める。静まり返った人々は、あきらかに初めとは違った目でメルメルを見つめている。グッターハイムはそれを感じとって、今がチャンスとばかりに声を張り上げた。

「みんな聞いてくれ！　――七色の勇者なんだ！　この子は、メル

メルは七色の勇者なんだ！」
　突然、今度は何を言い出すのかと誰もがひっくり返るほどに驚いてしまった。キーマも、そしてマリンサも目を見開いていてポカンとしている。
「あの……伝説の、七色の……勇者？」
　キーマが呆然と呟き、グッターハイムはコクリと力強く頷いた。
「そうだキーマ。あの伝説の七色の勇者だ！　古の大占い師様が直々にそう占ったんだよ。正直言って俺は初め、あんなボケ婆さんの占いなど当てにならんと思った……。だが、こいつを見ているうちに、もしかしたらと考えるようになったんだ」
「――確かに」
　メルメルは少し驚いて、目の前の女性の顔を見た。思わずといった感じで呟いたのは、あのマリンサだった。
「今では間違いないと確信してる。まだ子供だなどと侮れない力をこの子は持っている。俺は……この子に賭けてみたいんだ……」
　誰一人として言葉を発しようとはしなかった。じーっと視線は全てメルメルに注がれている。
　――事を焦りすぎたか……？　やはり他の者には理解出来ないのか……。
　メルメルを見ていて感じた特別なものは、自分一人だけが感じとったものだったのか。グッターハイムが弱気になって諦めかけたその時、マリンサがふっと頬を緩ませて笑った。
「リーダー。……いや、これからは隊長ですね。――私もその賭けに乗らせて下さい。暗黒王を、七色の勇者が討ち滅ぼすという、大きな賭けに」
　グッターハイムが勿論だ、とマリンサに答えた声は、地を揺らすほどの人々の歓声に掻き消されてしまった。レジスタンスは七色の勇者の出現を喜び、新リーダーの誕生を喜んだ。
　その声は園どころか町中に、――いや。東の草原にいる敵にまで届いてしまうのではないかというくらい大きく響き渡って、トンフ

ィーはちょっとだけ心配になった。
「あの子は……ラインが残していった希望なんだわ……」
人々の歓声が少しおさまってきた頃、ペッコリーナ先生がポツリと呟いた。トンフィーの頭の中にその言葉は、いつまでもいつまでも残ったのだった。

別れ

夜明け前の町は静けさに包まれていた。トンフィーの懐中時計の針は、午前四時二十分をさしている。毎日四時に起きていると言っていたラウルの店の前を通った時も、勿論、家の中からラウルと奥さんの楽しそうな笑い声など聞こえてはこなかった。他の家にも明かり一つついていないし、いびきすら聞こえてはこない。そんな人気の無い家々の間を、レジスタンスの一行は立ち止まる事なく駆け抜けて行く。

目指は――再び、西の森。

東側にいる軍隊を避けて行こうと思えば、自然とそういう事になる。

総勢二十五名なる一団の先頭を行くのは、夜の闇に負けないほどの漆黒の髪をなびかせた、女戦士マリンサだ。自らのペットでもある大きなダチョウの背に跨り、後ろを走る幼き新リーダーを守るように前に立って走っている。トンフィーが見たところ、彼女と同じようにペットを自らの馬代わりに使っている者が他にも数人いた。それどころか馬自体をペットにしている者も少なくなかった。その事を後ろでたずなを握るレジスタンスの元リーダーに言ってみたところ、馬をペットにすればその馬のスピードや体力が上がって、実に便利なものなのだと教えてくれた。もともと馬は人に慣れやすく、わざわざ調教師を使う必要もないし、誰にでも扱えるからペットに馬を選んでいる者はとても多いという。なるほど、とトンフィーは納得した。

自分達の乗った馬の前では、中年らしく余分な肉を蓄えた、ぽっちゃりしたペッコリーナ先生の体が馬の上で揺れていた。ついこの間まで、優しくてちょっとおっちょこちょいなだけのただのおばさんだと思い込んでいた。今では、あの背負いこんだ弓を構えた時の彼女が、この中にいる若く逞しい女戦士達の誰よりも素晴らしい力

を発揮するという事を知っている。
　決して大柄でもないその背中に隠れて、前に座っているはずのメルメルの姿は全く見えなかった。それ程彼女はまだ小さく、幼いのだという事を今更のようにトンフィーは思った。それなのにも関わらず、国を相手に戦いを挑もうという反乱軍のリーダーになどなってしまったのだ。メルメルがリーダーになる以外の道は無かったのかも知れない。あれは、レジスタンスにとっては最善の方法だったのだろう。そうは思うが、メルメルの背負ったものの重さを考えると、トンフィーはなんともやるせなくなってしまうのだ。つい、恨みがましく後ろを振り仰ぐと、思惑通りメルメルとの感動的とも言えるリーダー交代劇をやり遂げたグッターハイムは、トンフィーの恨めしい視線にも気付かず機嫌良くニヤッと笑った。
「連中、しっかり追い駆けて来ているかな？　まぁ、あくまで『ふり』だから必死になる必要はないがな」
　そう言われるとトンフィーは少し気になってきてしまって、体を傾け後ろを見ようと試みた。しかし、すぐ後ろを同じように走っている仲間達の向こうに、町の者達が追い駆けてくる松明の明かりなどは全く見えなかった。
　軍隊は町の人々に、レジスタンスの者達を殺すように命じてきたのだ。それなのに、故意に逃がした事がもしバレてしまえば何かしらの罰を受けるに違いない。一応追いかける『ふり』くらいしておいた方がいいとグッターハイムは考えた。そうすれば、いまだに町の中をうろついている悪魔の兵隊がそれに気付いて報告してくれるかも知れない。
　しかし、それだけでは心もとないと言い出す者がいた。彼は、「少し信憑性を持たせる為に、もう一工夫しよう」とあるアイデアを出して、自らがそれを実行すると言った。
「どうした？　そんなに後ろばかり見て」
　グッターハイムに言われて、トンフィーはようやく前を向いた。
「ラウルさん……。大丈夫かなと思って……」

「ああ……。ま、大丈夫だろ。致命傷にはならないようにやったからな。少々――痛かったかも知れんがな」

少々では済まなさそうだったな、とトンフィーは思った。

――レジスタンスの者を捕まえようとしたが、抵抗され切られてしまった。そんな者がいたりすれば、必死で「レジスタンス狩り」をした事に信憑性を持たせる事が出来る。

確かに良いアイデアだが、かなり危険な行為だった。

「全く……見上げた根性だな」

グッターハイムの呟きにトンフィーは無言で頷いた。ラウルの、町を愛する気持ちは本当に見上げたものだ。

そう――ラウルは町を愛していたのだろう。だからこそ、あの時口論になったのだ。真剣な思いがすれ違ってしまうと、時に人は争ってしまう事がある。だがあの時、メルメルもラウルもチムニーのママも町長も、自分を含めた全員が、同じようにこの町を愛する気持ちで苦悩していたから、最後には分かり合う事が出来たのだろう。

とても、素敵な町だ。

そう考えて、トンフィーの頭の中に次々と町の人々の顔が思い浮かんだ。トンフィーの場合、母親との二人暮らしを不憫に思って、様々な人達が世話を焼いてくれた。そうした優しい人達の顔。そして、やはり浮かんでくるのは、クラスのみんなの顔だ。メルメルと二人で別れを告げた時、女の子達はみんなメルメルと共に泣きだしてしまった。男の子達だって別れを悲しんで涙ぐんでいたし、頑張れと励ましてくれたりした。

――そういえば。とトンフィーはある事を思い出した。

ドミニクにはすっかり驚いてしまった。なんと、自分もレジスタンスと一緒に行くと言い出したのだ。祖父である町長に、「お前は足手まといになるから駄目だ！」と止められて、結局は彼の希望は叶えられなかったのだが……。

（何故、ドミニクはあんな事を言い出したんだろう？）

首を傾げながらも、トンフィーには何となく理由が分かってしま

っていた。でもその理由を言ったら、ドミニクもメルメルも顔を真っ赤にして怒るかも知れない。これは口には出さないでおこうとトンフィーは思った。

「いよいよ旅立ちの時だぞ。トンフィー」グッターハイムが背中で呟いた。

馬の速度がぐっと上がり、前を行くメルメル達の乗った馬の隣に並んだ。トンフィーがぼんやりと考え事をしている間に、一行はいつの間にか町を出て、町と西の森との間にある例の小高い丘を登っていたようだ。トンフィーは、頂に生えた大きな杉の木を見上げ、あの、二人で旅立った日の事を思い出した。

あの時、木の影から飛び出した自分を見て、涙ぐむ程に喜んでくれたメルメルの笑顔が思い浮かぶ。そして、それからおこった様々な出来事の記憶が走馬灯のように頭の中を流れた。

その中で幾度も思い浮かんで消えていくのは、隠れ家で出会った美しい女戦士の顔だった。初め、グッターハイムやペッコリーナ先生の話を聞いた時に、屈強な男の戦士を想像していた事を思い出し、トンフィーは思わずクスッと笑った。その笑い声に気付いた少女がこちらを見て、涙ぐんだトンフィーに気付き、一瞬目を瞬かせた。それからなにかを察したようで、にこっと優しく微笑んだ。

誰が命じるでもなく、一行は杉の木の横で立ち止まり、町に暮らしていた者もそうでない者も、名残惜しそうに後ろを振り返った。見下ろした暗い町の中で、ゆらゆらといくつもの赤い光が動いているのが分かる。あれはおそらく町の人々がレジスタンスを追いかける『ふり』をしている松明の明かりに違いない。

「いつか必ず帰ってこようね」メルメルが隣でポツリと呟いた。

それは、口で言うほど簡単に叶えられる願いではないと、トンフィーには分かっていた。

反乱軍――レジスタンスのリーダーになったメルメルが、こんな偏狭の田舎町に戻ってこられるのは、全ての事を成し遂げた時、――つまり、暗黒王を倒した時だけだろう。果たして自分達は、生き

てもう一度この町に戻って来られるのかどうか……。そこまで考えて、トンフィーは自らの弱気な気持ちを振り払うように、大きく首を横に振った。

「勿論さメルメル！　必ず帰ってこよう！」

メルメルは嬉しそうに笑った。

「あったり前じゃないの！　メルメルはおじいちゃんと一瞬に、お菓子屋さんをやるんだもの」

いくらか興奮しているようで、丸いほっぺを赤くしながらペッコリーナ先生が言った。

「本当ですかリーダー？　それじゃあ、必ずあたし買いに行くわ！」

キーマが嬉しそうに両手を上げた。他の者もみんな、絶対買いに行くぞと言い出して、グッターハイムは嬉しそうにガハハハと笑った。

「おいおい！　これじゃあ、整理券を作らないといけないぞメルメル！　……ん？」

やけに静かだと、グッターハイムが不思議に思って隣を見れば、メルメルはなんだかぼんやりと遠くを見ていた。

「どうした、メルメル？」

「プラムのお菓子屋メルメルメルヘン」

メルメルは小さな声で呟いた。グッターハイムはその言葉を聞いて、思わずはっとした。

「それ、お店の名前ですか？」キーマは首を傾げた。

「……」

「リーダー？」

黙り込んでしまった少女に、キーマは更に首を傾げた。すると急に、メルメルはにっこりと笑った。

「そうよ！　お店の名前は、――プラムのお菓子屋メルメルメルヘン。――とっても素敵でしょ？　おじいちゃんのお菓子は最高に美味しいんだから！　みんな必ず買いに来てね。た～っぷりサービスするから！」

オー！　と歓声を上げる人々。ペッコリーナ先生は呆れ顔で笑った。

「こらこら！　そんな大声出したら敵さんに見つかってしまうわよ！　――さあ、行きましょう！」

「よっしゃ！　行くか！」

グッターハイムが叫ぶと、ようやく皆森に向かって丘を降り始めた。

「待って！」

突然の叫び声に、皆今度は一斉にピタリと動きを止めた。トンフィーなど、急停止した馬から転げ落ちそうになってしまった。

「どうしたのよメルメル……」首を傾げるペッコリーナ先生。

メルメルは右前方をじっと見つめている。その視線を追って、ペッコリーナ先生も周りの者も、あっと口を開けた。

「――スリッフィーナ！」

メルメルの見つめる先から、赤毛の豹がゆったりと駆け上がってきた。

「――あ！　メルメル！」

メルメルがぴょんと馬から飛び降りて、ペッコリーナ先生はちょっと驚いてしまった。構わず駆けて行くと、向こうも真っ直ぐに駆け寄ってきて、あっという間に一人と一匹は坂の途中で向かい合った。

「スリッフィーナ……」

メルメルは、じっとその金色の目を見つめた。言葉は通じなくとも、お互いの気持ちは深いところで確実に通じ合っている気がした。

「……」

太い首に両手を回しぎゅっと抱き締めた。柔らかい毛並みが頬を

くすぐる。スリッフィーナはされるがままに大人しくしていた。メルメルは暖かい温もりをたっぷり味わってから、探るように手を動かしてその首輪をゆっくりと外した。名残惜しい気持ちで体を離し、その美しい金色の目をもう一度覗き込んだ。

「……さあ。自由に生きなさい」

スリッフィーナはその言葉を聞いて、ピクリと耳を動かした。くるりと背を向け、走り出す。

メルメルの目には、遠ざかって行く美しくてしなやかな赤い獣の背に、一人の女性が跨っているのが薄っすらと見えた。赤い髪をふわりと風になびかせ、ゆっくりとこちらを振り返った。

その驚く程澄んだ、青い瞳。

――さぁ。行こうメルメル……。

込み上げてきた涙のせいでメルメルの視界がぼやける。一度瞬きをしたら、その姿は月明かりにゆらりと溶けて消えてしまった。

赤毛の豹が森の中へと入って行くのを見届けて、メルメルはくるりと後ろを振り返った。ぼんやりと見守っていた人々に、にっこりと笑いかける。

「さあ！　行こうみんな！」

――　第一章　戦士ライン　完　――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9643l/

シバの目ミミの目　～第一章　戦士ライン～

2011年4月26日20時55分発行